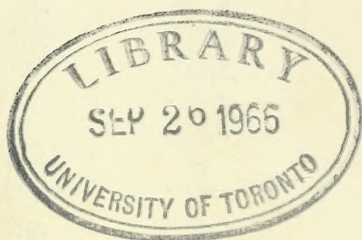
日本戲曲全集
第四十九卷

藤森成吉
長谷川如是閑
村山知義
金子洋文
前田河廣一郎

現代篇第十七輯

東京
春陽堂版

「礫茂左衛門」の井上正夫

「何が彼女をそうさせたか」の水谷八重子

「何が彼女をそうさせたか」舞臺面（築地小劇場）

「何が彼女をそうさせたか」舞臺面（築地小劇場）

「相戀記」舞臺面（築地小劇場）

「犧牲」舞臺面（室内劇場）

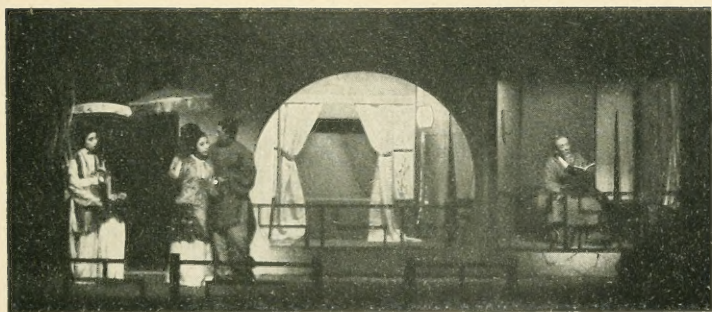
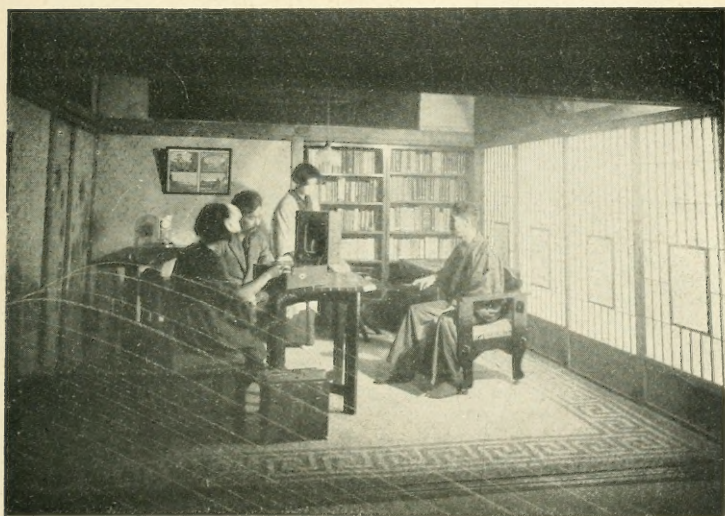
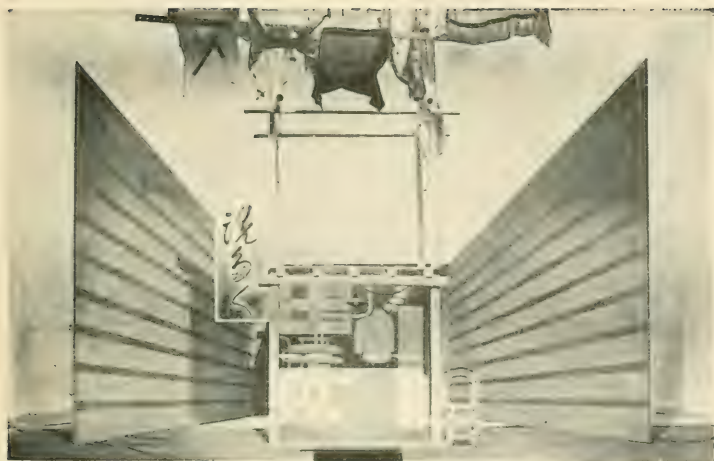
「根管充塡」畑中の家主・花柳の齒科醫の妻

「スカートをはいたネロ」カザリン居室の場

「洗濯屋と詩人」舞臺面

「北鶏」舞臺面

「拵へられた男」舞臺面

「默禱」舞臺面

藤森成吉

長谷川如是閑

村山知義

金子洋文

前田河廣一郎

日本戯曲全集　第四十九巻　目次

藤森成吉篇

犠牲（五幕）……三
磔茂左衛門（五幕六場）……四九
相戀記（五幕八場）……八七
夫婦（二幕三場）……一三六
何が彼女をそうさせたか？（六幕九場）……一四六

長谷川如是閑篇

大臣候補（一幕）……二〇六

喰ひ違ひ……………………………………二二四
根管充塡（一幕）……………………………二六八

村山知義篇

ロビンフッド………………………………二七〇
進水式（二幕）………………………………三二一
やつぱり奴隷だ………………………………三三四
沙漠で（一幕二場）…………………………三四五
仕事行進曲（一幕）…………………………三五六
スカートをはいたネロ（十場）……………三六八

金子洋文篇

洗濯屋と詩人（二幕）……三九〇
狐（三幕）……四〇七
理髪師（一幕）……四三九
出帆（一幕）……四四九
息子……四六四
蕊電（一幕）……四八一
牝雞（一幕）……四八八
天上の罠（五場）……四九七

前田河廣一郎篇

ムッソリーニ（十場）……五二六
捧へられた男（八場）……五八一

陸のつきる處（一幕）……五七九
富豪と眞珠……五九〇
默　禱（一幕）……六〇四
手（一幕）……六二一
小傳及解説（各篇）……六二九
寫眞撮影及編輯（村岡欣亮）
裝　幀（木村莊八）
表紙文字執筆（三村竹清）
箱文字執筆（恩地孝四郎）

藤森成吉篇

犠牲（五幕）

第一幕

人物

石川謙藏　著作家（四十五歳）
母　（六十三歳）
雪子　長女（十一歳）
欣一　長男（八歳）
女中　（二十歳位）
中村十吉　農場監督（四十三歳）
片山千代子　新聞記者（三十歳）

時

現代　五月半ばの午後

所

石川邸書齋

舞臺　西洋間。右手前面に大きな玻璃窓二つ、一つひらき、一つ閉まる。そこの植ゑ込みの新緑の光が、美しく映じ、又射し込んでゐる。微風に白い薄い紗のカアテンが靡る

その前手に、ドッシリと大きな書き物卓一臺。卓上には、書物立てに何冊かの本が並び、暗紅色の傘のかかつた卓燈や、インキ壺、ペン置き等が備へつけられ、原稿紙が散らばつてゐる。その奥に、斜め前手へ向いて寫眞立てが置かれ、やや大きな亡夫人の寫眞が挿んである。卓の前に廻轉椅子一脚。

舞臺中央に小テエブル一つ。まはりに、長椅子や普通の椅子が程よく据ゑつけてある。

窓の奥から正面へかけては全部高い書棚。ギッシリ和漢洋の書物が詰つてゐる。左手半分ばかりの壁には、上に油繪や古い版畫などの額二つ三つ。奥手にドア。

幕開く前から、蓄音機のレコオドが聞えてゐる。物は、チャイコフスキイのピアノ曲（ラハマニノフ彈奏）「トロイカ」——幕あくと、長椅子の奥に雪子、それと並んで石川が腰かけ、次の一人分の椅子に欣一が乗つかつて、テエブルの上の蓄音機をたのしさうに聞いてゐる。

欣一　あれ何の音？　お父さん！

石川　三匹の馬の鈴の音だよ。

欣一　ア、さうか。馬の足音と一緒に聞えるんですね。

雪子　欣ちやん、默つてらつしやい！

（たしなめられて、欣一おとなしく黙り、一心に聴く。音ばたりと聞えなくなる。）

欣一　あらツ、どうしたの？（又父親の顔を覗き込む）

石川　（やはらかに）静かにしておいで。

（又音始まる。）

石川　また始まつたらう。

（欣一、わかつたやうにうなづく。やがて、音次第に遠く聞かに消え断れる。）

石川　（盤をとめて）面白かつたかい？

（雪子、欣一、一緒にうなづく。）

石川　あなたがたには、あんまり面白くなかつたかも知れないね。

欣一　お父さんは面白かつた？

石川　面白かつたよ。すつかり北海道を思ひ出しちやつた。

雪子　北海道ぢや、やつぱりあんなに馬が鈴をつけて走るんですの。

石川　さうだよ。（雪が一杯つもつてゐる時はね。（沁々追懐するやうに雲間を見る）

欣一　僕も行つて見たいなあ。そして橇に乗りたいなあ。

雪子　（姉らしい口調で）欣ちやんは、レコオドのあひだに口ばかりきいて、仕方ない人ね。

石川　（笑ひながら）はははは、……もう少し大きくなつたら、みんなで今一度行かうね。

雪子　あらうれしい。そしたら、わたしお父さんとお母さんと昔住んでらしつた御家を見に行きますわ。つれ、見せてくれるんでせう？

石川　いくらでも見せてあげるよ。

欣一　（手を叩いて）うれしいなあ、うれしいなあ。

石川　（慈愛をたたへて頭を撫でてやりながら）それにに、早く大きくなつて、もつと、もつと、丈夫にならなくちやいけない。

欣一　なります。だから連れてつてね。

石川　よし、よし。

雪子　お父さんは、長アく北海道にいらしつたんですか。

石川　さうだよ。あなたがたの生れる前の、前の、ずうつと前ツから。

雪子　さうそう、お父さんは札幌の大学をお出になつたのね。

欣一　馬鹿だね、姉ちやんは。お父さんは、札幌の先生をしてたんだよ。

石川　（笑ひながら）生徒もしたし先生もしたんだよ。

雪子　お母さんと（寫眞の方を見やつて）――あの、初めてお住みになつたのも北海道ね。

石川　さうだよ。

雪子　わたしも北海道で生れたんですね。――まだ四つに

ならないうちに、お母さんの病氣でこつちへ歸つたんでせう。

石川　よく知つてるね。

雪子　何だか、わたしまだ北海道のことを、少うしおぼえてますわ。お母さんの白いお顏と一緒に、白い雪が一ぱい降つてて、男の人が赤アい毛布をかぶつて……。

欣一　赤い毛布なんぞかぶつてるの？　お父さん。

石川　かぶつてるんだよ。雪ちやんは悧巧だから、ほんとにおぼえてるのかも知れない。

欣一　僕も、おや、行つたらかぶるよ。そして橇へ乘つて、チンチン鈴を鳴らして、お父さんの住んでた家へ行くんだ。

雪子　その家に、お母さんが待つてらツしやツたらどんなにいいでせうね。

石川　（思はずギクリとしたやうに）　もうそんな話はよさう。死んでしまつた人の事なんか、あんまり子供は考へるもんぢやない。それより、元氣よく大きくならなくちやいけない。

（その時、ドアをあけて母親が入つて來る。上品な切り髪の老婦人。）

母　おや、どこにゐるのかと思つたら、お父さんと蓄音機を聞いてゐたの？

欣一　今ね、おばアちやん。北海道の橇のレコオドを聞いてたんですよ。

雪子　あらちがツてよ。欣ちやん。ロシアぢやないの？

欣一　（氣がついて）　さうだツた。北海道の御話をしてゐたから、まちがへちやツた。（頭を掻く）

（そのおどけた恰好に皆笑ひ出す。）

母　それはよかつたのね。（欣一の傍の椅子へ腰かけ、石川の方を向いて一寸言葉を變へて）　新しい盤を買ひなすつたの？

石川　いいえ。友だちに貸して貰つたんです。

母　（淋しさうに）　さう。（しばらく間を置いて）　蓄音機も、賣り立てに出すんですか。

石川　いいえ、――さうしようかと大分考へましたが、取り除けにしました。日本では、やツぱりこんな物でも無いと、音樂を欲しい氣もちがどうも滿たされませんからね。

母　畫の方だツて同じ事ぢやなくツて？

石川　それはちがひます。畫は、美術館へ寄附して大勢に觀て貰つたり、寄附出來ないやうな物は賣り拂ふのが當然でせう。

母　みんな始末して了ふんですね。

石川　いいえ、――それも、二三枚は殘して置きたいもの

があります。人から貰つた記念の物で、氣もちから云つてどうしても手放せませんから。

母　わたしから云ふと、今まで代々傳はつたり、お父さんが丹精してお集めになつたものは、やッぱりみんなそんな氣がしてならないんですよ。

石川　（歎願するやうに）お母さん、どうぞ僕を苦しめないで下さい。それを考へればこそ、今まで十年間も、自分の心を抑へて來たんです。然し、矛盾はたしかに矛盾です。（決然として）いゝ御座んす、お母あ、蓄音機も賣り拂ひませう。

母　（おどろいて）まあつい餘計な事を云つて、堪忍して下さい。年を取ると思はず愚痴になつて。――人並みすぐれた音樂家で、又蓄音機がすきなあなたですもの。此の後の仕事の爲めにも、藝術的な足しになるやうな物は、どうか取つておいて下さい。蓄音機なんぞ安いものだし、子供達にもどんなにいいか知れないんですから、この人達の爲にも殘しておいてやつて下さい。

子供達　お父さん。お父さん。誰にもやらないで頂戴。

石川　（くじけて）さうですか。ぢやヤツぱり取り除けませう。（獨語的に憂鬱に）全くのプロレタリアになるといふ事は、やッぱり夢か？　あゝ、始めれば、端から矛盾だらけだ。

母　（氣づかはしさうに）だつて、さう急に何もかも棄てて了はうと思へば、人間は自殺でもするほか仕方ありません。今のあなたの決心でも、どうして容易な事ぢやありません。あとはだんだんにしなければ――。

石川　（憂鬱に）だんだんに、か。さうどんなに思ひ、又どんなに堪らなく思つてるでせう。今度もやつぱり「だんだん」だけの事か。――（急に明るく、快活に）いや、これでいい。それよりほか解脱する途はないんです。お母さん、あなたのいい御言葉に禮を云ひます。僕はお蔭で又自信を得ました。いつかは、きつと十分強い人間になつてお目にかけます。

母　（しみじみと）ほんとに、此の世へ苦しみに生れて來たやうなあなたですね。

石川　決して。――ほかの、ほんとに生活に苦しんでゐる人達の事を考へれば、こんなお言葉は當らなすぎます。（氣もちを變へるやうに）で、お母さんは、この家を賣つて了へば、僕の借家の方へ來て下さいますか？

母　さうするつもりです。

石川　さうして下されば、どんなに僕も、子供達も、うれしいか知れませんのです。かう云ふ自分一人の決心で、この上あなたに御迷惑を掛けることは忍びません。急に生活を變へるなんてことは、僕のやうなまだ壯年の者に取

つては、決してむつかしい事である筈がありません。然し、お母さんのやうな年になつては、……むしろ出來ないのが當然だと思ひます。僕は、御存じのとほり、自分の考へを人に押しつけるのは大ッ嫌ひな性分です。いくら主義でも、人にはめいめいの立場があります。もし少しでも苦痛と思召すやうなら、どうか弟の家へなりと、又べつに家をお持ちになるなりと、氣の向いたやうになすつて下さい。さうすれば、此の後のくらしの爲めに、決して御不自由ないだけの物はあげますから。

母　あなたさへ邪魔に思つてくれなければ、わたしはいつまでも一緒にゐさせて貰ひます。今までゐたからばかりぢやなく、やッぱりあなたが、わたしには一番たよりになる人ですから。

石川　さうですか。（感動して）勿體ない御言葉ですが、實際くらして御覧になつて、もしお氣に入らなかつたらいつでも……。

（その時、ドアを開けて女中が入つて來る。）

女中　あの、お電話で御座います。

石川　僕に？　お母さんに。

女中　旦那さまで御座います。

石川　どこから？

女中　何ひましても仰いません。たゞ先生に出て頂けばわかりますから」と仰つてらつしやいます。

石川　妙だね。（立つて出て行く）

（あとドア開いたまゝ。そこから、やゝ隔たつた電話の應待が聞えて來る。）

石川　もしもし、僕石川ですが、あなたはどなた？……あゝ、片山さんですか。――「寶玉」の校正のこと？……それはありがたう。さあ、今ちよつと用がありますが、――いや、べつに來客があるわけぢやありません、――然し、今少し――あゝさうですか。……えゝ、（思ひ切つたやうに）ぢや構ひません。――どうぞ――。

（母、子供達と一緒に、そのあひだテエブルの上の、オペラ解説の繪入り本などをひろげて見てゐる。やがて電話を切るベルの音がして、ドアを閉めて石川戻つて來る。やゝ當惑した顏色。長椅子に腰をおろす。）

母　（その樣子を見て）片山さんてかた、いらッしやるんですか？

石川　えゝ、校正の用で是非會ひたいつて云ふんです。

（その時、又女中入つて來る。）

女中　あの、只今農場の中村さんがおいでになりました。

石川　おお、さう。――すぐこッちへ通して下さい。（思はず獨語的に）もう少し早く來てくれればよかつたに。

（女中去る。）

欣一　（うれしさうに叫ぶ）中村さんて、あの北海道の、ヒゲの（兩手で、すつきりと長い頰つぺたから顎へかけて恰好して見せながら）眞つ黑に生えてるをぢさんでせう、お父さん？

（石川默つて何か考へてゐる。）

母　（代つて）ああ、そのヒゲのをぢさんだよ。

雪子　わたし、あの熊のやうなをぢさん大好き。

欣一　僕もさ。丁度いいや。一緒に樺の話を聞きませう。ね、姉ちやん！

雪子　ええ。（笑ひながら、默つて考へに沈んでゐる父親を氣づかはしさうに見る）

（母も同じ樣子で眺める。その時、女中の案內でドアから中村が入つて來る。眞黑く、日や雪に焼けた顏。逞ましい漆黑の鬚髯。が、割合眼が小さくやさしい。まるで五十幾つの人間のやうにフケて見える。如何にも北海道の原野で働いてゐるやうな田舍風な洋服。脚へはカアキイ色のゲートルを卷きつけてゐる。）

（子供達が「をぢさん！」と呼びながら兩側から飛びつく。）

中村　（ニコニコ笑ひながら）これは[illegible]、あなた——よ[illegible]來てくれましたね。……[illegible]なくちやあ。（毛だらけの、眞ッ黑な手を片方のポケットへ入れて引ッ掻き廻し、きたない手袋をつかみあげる。慌ててもとへ入れて、他方の手で別側のポケットを探り、白い紙へ包んだ棒狀の物を取り出す。それをひらくと、中からアイヌ細工のペン軸とナイフが出て來る。白木へ朱を入れたペン軸の尻ッぽには、くり拔きの四角な環が一つ嵌まつて、ぶらぶら揺れてゐる。ナイフの白鞘には、アイヌ模樣が鑿で彫り拔いてある。それを、二人に一つづつ分けてやる。）

雪子　どうもありがたう。

欣一　ありがたう。……これ何アに？　をぢさん。

雪子　ペン軸よ。欣ちやん。

中村　さうだや。さすがは姉ちやんだけあつてえらい。

欣一　（負けずに）これはナイフだらう。

中村　さうだや。えらい、えらい。（頭を撫でてやる。）

（子供達、兩手に振りかざしながら父と祖母の方へ飛んで來る。）

母　いいものを貰つたね。（立つて、中村へ向つて）どうもありがたう。

中村　いえ、どうしまして。……皆さま、お變りも御座えませんで何より。

母　ありがたう

石川　（同じく立つて）ありがたう。——君んとこ[illegible]

大丈夫だつてね。

中村　ええ、お蔭さまで。

石川　さ、そこへ掛けてくれ給へ。よく早く出て來られたね。

中村　いや。もつと早く出なけりやアなりませんでしたが、つい手間取れまして。

欣一　（父親の膝へすがつて）お父さん。僕にペン先きと紙を貸して頂戴。――書いて見たいから。

石川　あそこの卓の上にあるからお使ひ。だが、お父さんの原稿へ書いちやアいけないよ。

欣一　うん、僕、新しい紙へ書くの。……さうだ。お母さんを寫生しよう！（よろこんで卓の方へ飛んでゆく）

雪子　わたしは、お父さんの鉛筆を削つてあげますわ。（ナイフをかざしながら、つづいて卓の方へ行く）

石川　鉛筆の代りに、手を削つちやいけないよ。

雪子　大丈夫。

母　ほんとに、手を切つちやいけませんよ。（心配してついて行き、紙や鉛筆を手傳ふ）

女中、そのあひだに茶を運んで來、めいめいに置いて去る。）

石川　（茶や菓子をすすめながら、氣にかかるやうに、）で、小作の人達の意嚮はどんなふうだね。

中村　（茶をすすりながら、）それがです、いい鹽梅に、この頃あ大分みんな、旦那さまの氣もちが、わかつて來たやうです。

石川　みんなへ、共同に貰ふ、なんて事は、貰はないも同じこつた、なんては云はなくなつたかね。

中村　もうそんな事を云ふ者アなくなりました。ただでやる、ツちふ御話が新聞へ出たもんですから、初めのうちア、みんなただ地面を分けて貰へるのか、と思つて、勝手な料簡してゐたところを、ただアただでも、別々に分けるぢやアねえつてわかつたもんですから、一時そんな馬鹿を云つた小作人もあつたわけです。でも、その後だんだん話して聞かせましたら、大概呑み込んで來たやうです。何しろ、今まであんまり類のねえ事ですから、みんなにも見當が附かなかつたも、無理アねえ事もねえです。

石川　別々になんぞやツたんぢやあ、折角俺が親ゆづりの財産を棄てても、又新しく私有財産を作つてやるだけのこツたからね。それぢやあ何にもならない。そりやあ、少しやあ生活の足しになるかも知れないが、そんな地面は、いづれ飲み潰すか、借金のかたに取られちまふか、先きが見えすぎてるからね。

中村　さうですとも。此の事の初めツから、私たちにやあ、

あらまし旦那様の氣もちアわかつてました。

石川　全く、君がシッカリしてゐてくれるから、僕アどんなに頼みになるか知れない。ぢや、まア、みんなよろこんでゐてはくれるね。

中村　とてもよろこんでゐます。これからア、同じ働くにしても働き甲斐があるつて、云つてます。――ですが、まはりの農場の持主達ア、今でもやつぱりいい氣もちを持つてません。さういつちやあなんですが、旦那様が餘計な眞似をなすつたからこつちへ飛ばツちりがかかつて、迷惑で困るつてこぼしてゐます。それはつかりならですが、自分達の小作人が此の頃急にぐづぐづ云ひ出した腹いせに、何とかして旦那様の計畫をぶつこはして、蔭で笑つてやらうつちふ腹で、いろいろこつちの小作人へ惡智慧を吹つ込むんでやり切れません。御承知のとほり、生憎また近所に惡い地主が揃つてゐますからな。中にやア、農場が旦那様の手から離れた時にやあ、うめえ具合に根こそぎふんだくつてやらうと、今からいろいろ法律をしらべてゐる手合ひせえあります。つくづく世間は怖えもんだと、此の頃思ひます。

石川　（陰鬱な調子で）　さうかね。きつとさうだらうと僕も思つてた。内憂外患こもごも到るつてとこだね。それつていふのも、日本の法律が共有財産を認めてゐないからだ。少くとも、決して保護しようとしてゐないからだ。實際から云ふ事件にぶツつかつて見ると、如何に現在の法律ツてものが、私有財産制度を基礎にして作られてゐるかに、おどろかされるね。

中村　さうでせうな。

石川　例の、札幌大學の農業經濟の教室へ頼んでおいた組織案が、やつとせんだつて出來て屆いたがね。これを見ると、あの四百五十町歩の地面を小作組合の共有にするつて考へは、ほとんど出來ない相談らしい。共有にすることが出來なければ、財團法人にするか、組合組織にするかだがね。法人組織にすると、專制政治のやうなものになつて、とても共有的精神に訓練して貰ふことは出來ない。組合組織にすればしたで、また利益金の分配なんぞが馬鹿に面倒になつて、いろんな矛盾が起きて來るんだよ。そこを散々頭をしぼつて作つてくれたらしいんだが、やつぱり小作株つてものを持たす事になるやうだ。と、名前は公有でも、私有財産見たやうなもんさ。僕はね、なほもつと自分でも考へ、人にも考へて貰つて、自由な共産的な規約を作るつもりだが、どんなに完全に行つても、とても豫定の「共産農園」なんて名前はつけられさうもない。まあ精々「共存農園」とでも、曖昧に呼んでおくよりほか仕方ないらしい。

中村　法律つて、實際うるせえもんですなあ。

石川　こんな、餘計なうるさい物はない。ところが、今の社會で仕事をするにやあ、やつぱりそれに賴るより仕方ないんだから笑止だ。藝術家肌の人間に取つては、特別たまらない。かうしようと思つたら、純粹な動機である限り、誰も、又何物も干渉する權利はない筈だ。僕が農場や財産を抛棄しようと思つたら、ひと思ひに、思ひどほりにさせてくれたらどんなにいいだらう。

中村　まつたくママにならねえ浮き世です。

石川　だが、こんな事あ愚痴で、君なぞから見たら、むしろをかしいかも知れないね。――いくら不滿足な結果にならうと僕はもうこれ以上農場を持つてはゐられない。僕は、決して農場の將來を樂觀しちやアゐないんだ。君の云ふとほり、まはりにやあ狼のやうな資本家が眼を剝いてる。小作人達は、訓練も豫備知識もない。だからいつかは又、チリヂリバラバラになつて、資本家の手へ土地が入るかも知れないことを、……いや、きつと入ることを、僕あ覺悟してる。今のやうな、四方非共產的な社會ぢやあ、どんな××な計畫を樹てたつて××さ。要するにただ一つの試驗さ。いや、僕の氣もちの滿足だけかも知れない。將來の事は考へないつもりだ。考へたら、今の××××××××ない。

中村　（それまで、時々菓子を食べたり茶を噉んだりしてゐたが）そりやあ、この先きどうなるかア人間の考へにやあ及びませんが、私あ、この後もみんなと一緒にあそこで働かなけりやあならねえ身體ですから、始終仲間の衆にその話をして聞かせませう。まはりの地主や商人の手に乘せられりやあ、やつぱりみんなの損は目に見えてるですから。――今まで長えあひだ、散々御先代や旦那樣の御世話になつて來た御禮に、私の力の及ぶ限りの事アするつもりです。

石川　（質朴な調子によろこばされて）ありがたう。監督なんて云ふと、どこの農場でもみんな小作人苛めばツかりして、人間として隨分いやな者が多いんだが、君達親子のやうないい人を見つけて、開墾の初めつから二十何年間も世話を見て貰つて來たなあ、ほんとに僕達の幸福だつた。僕は心から君に御禮します。

中村　勿體ねえ。……今まで、ほかの農場に較べてどうにか無事にやつて來たも、みんな御先代や旦那樣に思ひやりがあつたからのこんです。さうでなかつたら、とても私達あかうしちやアゐられません。

（この時、又女中ドアから現れる。）

女中　只今、片山さんがお見えになりました。

石川　（當惑したやうに）さう。――お通しして下さい。

（女中會釋して去る。子供達、繪を書いて祖母に見せたりして、片方ではしやいでゐたが、その時母親が寫生畫を持つて、石川の方へ來る。）

母　お父さん、御らんなさい。これがお母さんの顔ですつて。

石川　（受取つて、）なるほど、これがお母さんか。うまい——と云ひたいが、一寸人間の顔より馬の顔見たいだね。

母　おやまあ、馬の顔たつて。

中村　どれ、どれ。（覗き込む）

（石川見せる。）

中村　（大聲で笑ひ出しながら）うむ。こりやあ面白い。坊さん、さう云へば、うちの馬の顔に少うし似てゐる。これがふんとにうまいだ

雪子　をかしい、それシャレ？

石川　をぢさんのシャレは、あんまりうまくないな。

（皆々哄笑する。——そこへ、薄い、ピンク色の、氣の利いた洋服を着て、刺繍したオペラバツクを持つた千代子が、ドアから現れる。頗る美貌。コケツトリイと眞面目の奇妙に調和した印象。片手に、咲き誇つた、そこら邊には、滅多に無い、大輪の八重にひらかれた芍藥の何本かの花を、美しく白紙につゝんで持つてゐる。一座團欒の雰圍氣に一寸不似合な、闖入者の恰好。默つて、挨拶する。）

石川　どうぞこつちへ。

千代子　お邪魔では御座いませんか？

石川　いや、どうぞ。

（千代子椅子の方へ進んで來、めいめいに一渡り挨拶する。）

千代子　（又石川へ向つて）『翼』の校正で、どうも私にわからない所が御座いますんですから……。

石川　それは、わざわざ御苦勞さまでした。

千代子　あの、これ（片手の花を指して）早咲きの、あまり綺麗なのがありましたから、（一寸云ひ澱んで）奥さんの御寫眞のところへでも……。（紙のまま、母の方へ、テエブルの上へ出す。）

母　ありがたう御座います。（丁寧に紙を拂つて）まあ、何て美事な花でせう。（皆に見せる）

石川　どうもありがたう。

雪子　大きな芍藥ね。

欣一　うちの奴は、まだ小つちやな蕾だつたよ。

千代子　あら、さうですか。

母　おや、早速花瓶に挿して來ませう。（飾り棚の上の置いた花瓶を取つて、出て行かうとする。）

欣一　僕達も行かう。

雪子　行きませう。（二人揃ひ立ちあがる。）

中村　おやお仏も、あつちで少し御隱居様と話をさせて頂きませう。

母　さアいらつしやい。

石川　どうか、ゆつくり休んでくれ給へ。長い汽車で、さぞ疲れたらう。丁度時候もいいし、ゆつくり泊つて遊んでつてくれ給へ。

中村　ありがたう御座えます。ふんとに、北海道たアえれえちげえです。あつちぢやあ、まだやつと根雪が解けたばつかしです。

母、石川　さうだらうねえ。

（四人、相つれてドアから去る。女中が千代子の茶碗を持つて來、會話のあひだに置いて去る。）

千代子　お客さまでしたのね。

石川　あなたの電話のあと來てくれたんです。

千代子　（窺ふやうに）さうでしたか。（ふと、テエブルの上の盤を見つけて）トロイカを掛けてらつしやいましたの？

石川　ええ。

千代子　きツと、北海道のスウヴエニイルを御かけになつたんでせう。

石川　まアそんなところです。

千代子　わたしも、このラハマニノフは大好きですわ。だんだん、鈴の音の消えて行くところなんか、如何にもロシア獨特で御座んすわね。

石川　あなたはレコオド通で、おまけに音樂が出來るんだから羨ましい。

千代子　あら、あんな事を――。

石川　いや、實際です。僕はまるで出來ないんだから、……僕はこの頃、藝術のなかで一番純粋なものは音樂ではないか、と思へて仕方ないんです。音樂の次は詩だと。

千代子　今度の『翼』にも、そんな事を御書きになりましてね。

石川　さうでした。

千代子　詩も拜見しましたわ。

石川　遠慮ない批評を聞かせて下さい。

千代子　わたしには、批評なんか出來ません。先生の物は何でも好きで、それにあんまり近すぎますから。……それより、わたしに校正をさせて下さるんで、誰よりも先きに讀めるのがうれしくつて仕方ありません。

石川　（當惑したやうに話を變へて）あなたは實に校正が上手ですね。

千代子　ええまあ、――社でもみんなさう云つてくれます。……でも先生。わたしあの藝術純粋論には少し意見があ

んでしたよ。

石川　どんな？

千代子　もし、生意氣を云つてお怒りになつたら困りますけど……

石川　そんな人間だとお思ひですか。

千代子　いゝえ、――ぢや申しませう。純粋つて云ふ言葉からして、如何にも高蹈な先生の仰りさうな言葉だと思ひますけれど、さう云ふふうに、端的に、直覺的に、とばかり御考へになれば、おしまひには何にも書けなくおなりになりませんか。何か、今先生は藝術にて迷つてらつしやるやうな氣がしますわ。

石川　さう思へますか。

千代子　思ひます。藝術家には、何度もさう云ふ時機が來るさうですけれど、先生は――御免下さい、――今或る行きづまりへ來てらつしやいません？

石川　（感心して）そのとほりです。あなたは鋭い。

千代子　あら、當りまして？

石川　實際僕は苦しんでゐます。その爲めにも、早く今の生活を何とか換へたいと考へてゐるんです。生活が中途へ引ツかかつてる爲め、藝術までが關門になるつてことを、この頃痛感してます。今まで、それほど突きつめて來なかつたそれはよかつたんですが、もう突きつめて來るとキツては、ほかに僕の藝術を救つてくれるものはありません。今まで、僕は隨分のんきな方だつたんですが、この頃それをこれ迄で、農場や財産の整理が捗らないのに少し焦立つてます。

千代子　よくわかりますわ。

石川　一つには、こんな個人雜誌なぞ始めたのがいけないんですよ。いや、だから反つて早く行きづまりへ來てよかつた、とも云へるんです。……『翼』も、やつぱりあなたの云ふ僕の純粋慾から考へついた事です。それが、出し始めてまだ何號にもならないのに、もう行きづまりへ來てゐるんだから滑稽だ。

千代子　でも、生活革命さへお濟ましになれば。

石川　それが、なかなか簡單に進まないから困るんですが。もつとも、今までの罰ですがね。いよいよ書けなくなれば、『翼』もやめるつもりです。

千代子　で、また一般の新聞雜誌へ御書きになります？

石川　それよりほか、生活の道はなくなるわけです。書く書かないは別として、――そこまで來て、初めて人並の生活ができるのかも知れません。これも今僕の迷ひです。

千代子　でも、さう云ふ惱みや迷ひの中から、きつと新しい生活がひらけますわ。たとへ『翼』が死んでも、トロイ

カが先生を運んで行きますよ。ゴオガリの小說の中の言葉のやうに。

石川　さう。昔僕を鍛へた北海道の自然が、この頃不思議と眼へ浮んで來ますよ。時々鬪ひに疲れて萎えさうになると、奇妙にあそこを思ひ出します。そして、なに負けるもんかッて氣になります。

（その時ドアをあけて、雪子、さつきの芍藥を活けた花瓶を重さうに持つて入つて來る。）

石川（立ちあがつて受け取つてやりながら）御苦勞さま。重かつたでせう。

雪子　いいえ。

（ニッコリ笑つて、ちよッと千代子の方を見て、又ドアから去る。石川、花瓶を卓上の寫眞の手前へ置き、又もとの座へ戻る。）

千代子（その樣子をじつと見て）先生は、ほんとにお子さんを可愛がつてらッしやいますのね。先生のやうなお父さんを持つたかたは、ほんたうに羨ましい氣がしますわ。

石川　母親がないと、不思議と父親がその分まで受け持つんですね。やつぱり自然法則でせう。

千代子　お祖母さまもいらつしやるんですから、やつぱり先生のやさしさからですわ。

石川　か知ら。

千代子（やや躊躇しながら）ですとも。――奧さんがおなくなりになつてから、もう七年も經つのにまだ結婚なさらないのも、子供を繼母にかけるのがお可哀想だからだッて、いつか仰つたぢやありませんか。

石川　そんな親ごころは、誰しも當然でせう。

千代子（唇を噛んで）ぢや、もう一生結婚なさいません？

石川　しますとも。今迄だつて、いい人さへあれば疾うの昔に結婚してゐたところです。殊にこれからは、もう子供達も大きくなつて、だんだん親の手から離れて行くから、尚も益々氣らくになるわけです。

千代子　先生には、澤山女の愛讀者や崇拜者がお附きになつていらつしやるんですから、いい人なら幾らでもありませうに。

石川　ところが、向ふがよすぎてこつちが釣り合はなかつたり、こつちが少しいいかと思つたり、仲々思ふやうに行かなくて困ります。

千代子　そんな事を仰つて、やつぱり前の奧さんがお忘れになれないんでせう。……あんなに御病氣になつて、親切に看病なすつて、そのうへ坊ちやんが生れて間もなくおなくなりですもの。惹かされていらつしやるのも當り前ですわ。

石川　あなたまで、そんな事を云ふんですか。――なるほど、僕は邦子のことを忘れはしません。然し、まあ出來るだけの手は盡したんですし、今更それにこだはつてゐるもんですか。男の心つてものは、みんなかなりドンジユアンですよ。いや、全くドンジユアンかも知れません。なくなつた人の爲めに、いつまでも不自然な獨身を守るなんて事は、僕は人にも勸めず、自分でも決して主義にしてゐません。

千代子　でも、純潔と殉情が自然のやうな先生の場合には？

石川　純潔つて言葉を、それだけの言葉に取りたくはありません。

（惱ましさうに、フイと立つて歩き出す。卓上の花の傍まで行つて、又戻つて來る。往復を繰り返す。千代子、その恰好をじつと見てゐる。）

石川　（二度目に歸つて來て、立つたまま、思ひ切つた調子で）千代子さん。

千代子　はあ。

石川　『窶』もどうなるかわかりませんし、今まで御厚意にあまえてすつかり校正をやつて頂いてましたが、これからは、僕自分でやる事にします。

（千代子、長い間を默視する。）

石川　今までの御禮は述べ切れません。ありがたう御座んした。（輕く頭をさげる）

千代子　先生、それは又なぜでせう？　なぜ、『窶』をおやめになるならなるで、その時までやらせて頂けないでせう？

石川　それはそれとして、これからは何もかも、自分の手でやつて行かうと考へます。

千代子　（立ちあがつて）そんなうそを仰しやいまイヤです。

（石川ドクリとして、長椅子の背に手を置いてうなだれる。）

千代子　（朗かな笑ひ聲を立てて）うそを仰りつけないから、先生はほんとに下手ですわ。

石川　（赤面した顔をあげて）濟みません――でも、あなたに校正をやめて頂く氣になつたはうそぢやありません。

千代子　（猜、、嫉妬に滿ちて）それより、わたしから遠ざかりたい御氣もちがほんとでせう。

石川　（ハツキリした調子で）さうです。それがなぜかは聞かないで下さい。ただ、あなたのせゐぢや決してありません。

千代子　僕が弱いからだ、と仰るんでせう。

石川　（再びたじろいで）そのとほりです。あなたは實際怖いところがある。

千代子　わたしその事は、もう電話で御返事を伺つた時からわかつてましたわ。

（石川默つて、長椅子のもとの座へ腰をおろす。千代子も、斜向ひにもとの椅子へ掛ける。）

石川　（眼を伏せて）あなたの頭はいい。邦子などとは段ちがひだ。それに――。

千代子　まあ、何を仰るんですの？　先生。

石川　丁度、あれのなくなつた年とあなたが同い年だから、比較したくなるんです……。正直なところ、さう云ふあなたに始終接近してゐるのは僕に取つてかなり危險です。僕は、一方ひどく弱いところのある人間です。あくまでも強い人間なら、どんな人が傍にゐたつて大丈夫です。が、そんな自信はありません。藝術家に取つて、さう云ふ自信が賞めたものかどうかは別として、――又、僕が立派な藝術家かどうかは別問題として。……もし、どうかした拍子に、その持ち前の弱さに負けたらそれこそ大變です。あなたに取つても僕に取つても、取りかへしのつかない事になります。僕達二人の爲めに、今お附き合ひを斷るのが當然です。いや、失禮ですが是非斷らなければいけません。

千代子　（大膽に、又戯談らしく）ッて仰るのは、わたしが結婚してゐたから、誘惑するからで御座いますか？

石川　（たじろいで）それも一つです。いや、一番大きな理由かも知れません。

千代子　そんなら、私は夫から離れても構ひません。

石川　（おどろかされて）何を仰るんです？――あなたは、今まで始終、片山さんを愛してゐるッて仰つてたぢやありませんか。又、御二人とも身寄りもなく、あひだに子供もおありにならないから、片山さんもあなた一人をたよりに生きてらッしやるッて仰つてたぢやありませんか。

千代子　それはさうです。でも不思議と、わたしは一面片山を世間の夫のやうな氣がしませんの。……それより、もつとかうプラトニックな、いい兄のやうな氣もちばかりしてをりますの。片山の方でも、やつぱりさう云ふ氣もちだつて云つてますわ。それが、結婚の初めつから、九年も經つた今日まで同じ事なんですの。

石川　（訝しさうに）さう云ふ夫婦關係もあるもんでせうか。

千代子　少しわけはちがひませうが、アナトオルフランスの物なぞにもそんなの御座いません？

石川　あつたやうですね。――でも、それにしたところで、もしあなたが別れ話を持ち出したりなんかなさつたら、片山さんはきつと不承知でせう、たとへ承知されたにしても、ぢやあ、まるで片山さんを殺すやうなもんぢやあ

りませんか。
千代子　いゝえ、さうも思ひませんわ。片山は、もし外にほんとのわたしの戀愛を認めてくれたら、きつとさつぱり讓つてくれませうと思ひますわ。（祕密をかくすやうに）それにはわけもありますの。……そして、別れたあとでも、きつと兄のやうに氣もちよく附き合つてくれると思ひますわ。淋しいことは、どうせ昔つから淋しい人ですから。
石川　（じつと彼女を眺めて）どうも、僕にはよくわかりません。御事情も知らず、片山さんも、ただあなたの御話で伺つて、さぞいい方だらうと思つてるきりですから。
千代子　でも、先生はさつき、奥さんの爲めに結婚を避けはなさらないつて仰いましたわね。
石川　云ひました。
千代子　そして、生きてらしつたあひだは、隨分奥さんを愛してらしつたんでせう？
石川　（やゝ當惑したやうに）まあ普通だけには愛してゐたつもりですが。
千代子　それなら、わたしの氣もちだつてわかつて頂ける筈ですわ。
石川　（苦笑しながら）相變らず、あなたのデイアレクチックは鋭いな。然し、現在生きてゐる人と、死んで靈になつた者とのあひだには、決して差別がないとは云へませんからね。
千代子　（半ば戯謔するやうに）先生は、今は宗教を信じてらつしやいませんからね。
石川　あなたは？
千代子　（微笑しながら）わたしも。
石川　あなたは、一方かなり淋しい、眞面目なところを持つてゐられながら、一方では隨分自由で奔放ですね。
千代子　さぞ變な女だと思つてらつしやるでせう。わたしも、時々自分ながらよく自分のわからない事がありますわ。無暗におシャレをしたり、と思へば亂暴にやりつ放しをしたり、沈むかと思へば、すぐキヤツキヤツと浮き立つて見たり、自分でもどうする事も出來ない時がありますわ。
石川　僕なぞとは又ちがつた、時代の惱みを受けてゐられるのかも知れませんね。
千代子　わかつてるやうで、おんなじかも知れませんわ。
石川　（きつぱりした調子で）いや、ちがつてます。もしその點で僕の氣もちに合つて下さればどんなにいゝか知れないが――。（再び立つて歩き出す）
（千代子、默つてその姿を凝視する。）

――幕――

第二幕

人物

石川謙造
片山千代子
野口新作　石川の友人（四十六歳）
女中
面會人大勢（そのうちに尾崎、林等）

時

五月下旬の午後（石川の面會日）

所

石川邸應接室

舞臺　西洋間。油繪の額一つ位。調度類は、大抵賣り立てに出した爲め無い。右手隅に大きな煖爐（マントルピース）が切つてあり、床一面に薄綠のカアペットが敷きつめてある。中央に、緣にヅローンウワークした白い卓布（テーブルクロース）のかゝつた大テエブル一つ。杜若を活けた中花瓶が、その眞ん中に置かれ、茶碗や菓子鉢や煙草入れやインキ壺やらが出てゐる。

石川、前幕と同じ和服姿で右手の椅子に腰かけ、大勢の面會人に應接してゐる。面會人は、官私の大學制服を着た學生五人ばかり。女學生三四人。新聞記者雜誌記者各一人。地方の文化團體幹事二人。その他、和服姿の男二人。

學生の一人　みんた、是非先生の御講演を聞きたいツて云つてます。どうか叶へてやツて頂けませんか。

石川　あツちこツち、もう學校では散々やらされましたから、何もお話する事がありません。

學生　おんなじお話でも結構です。

他の一人　農場の解放についての御考へを伺へないでせうか。

石川　それも、もう散々（記者の方を向いて）記者諸君にしぼられたです。

（記者達微笑する。）

初めの學生　僕達のはうは構ひません。

石川　僕のはうがいやです。

學生達　（當惑したやうに顏を見合はせて）困つたな。

困つたねえ。

地方文化團體幹事の一人　わたくし共のはうへは、是非おいで願へませんでせうか。

石川　どうか勘辨してください。東京の諸君にさへ、かうしておことわりしてるんです。地方へなんぞ、今とても出かけてゆく暇がありません。

幹事　お暇のない方は直々承知してやりますが、折角總代に頼まれて、かうして出京しましたんですから、どうか……

石川　どなたへも御免れなつてゐるんですから、どうか……

他の一人（あきらめたやうに）　おや、その代り、何か一つ記念に書いて頂けませんでせうか。

石川　僕のやうな悪筆は、記念になんかッきり能がありません。

幹事　どう致しまして……

石川　拜見ます、これがどうか自分、どうか、お絶對御免蒙る決心です。

女學生の一人（恐る〳〵）　先生、わたくしの愛讀してをります先生の御本に、一筆御署名下さいませんでせうか（傍らへのせい風呂敷包を無意識に解きはじめる、）

石川（苦笑して）　弱つたな。どうもさうおつしやる方から攻められたんぢや。

女學生　ホンの、ホンの一寸、ペンでゞも走り書きして頂ければ結構で御座います。

女だち（口々に）　このかたは、ほんとに先生の物は何でも讀んでらッしやいます。私達の仲間でも評判の、先生の熱心な讀者で御座います。

石川（頭をかいて）　穴へ入りたいやうです。僕なぞの物を御讀みになつたら、反つて悪い影響しかあたへはしないかと怖れます。

前の女學生（凛とした調子で）　いいえ、いいえ。

（座の人達、みなその様子に微笑する。石川も思はず顔を崩す。）

女學生（その様子を窺ひ見て）　あらッ。（いそいで袂で顔をかくして、友達の肩へ押しつける）

雜誌記者　全く先生もかなひませんね。さういろんな註文を持ち出されちやあ。

石川（決心して）　折角持つておいでになつたんなら、おやあ署名しませう。（活花へ目を移して）杜若の御禮かたがた。（片手を出す）

女學生　まアうれしい！（驚喜して、いそいで包みの中からフランス風假綴の本を二册出す）

石川　どうか、一册だけにして下さいませんか。

（女學生ひどく迷つて、やがて一册を持つてゆく。石川ペンを取つて署名する。）

他の學生達（その様子を羨ましさうに眺めて、云ひ合つて）　わたしも書いて頂きたかつたわ。貴方も持つて來ればよかつたわ。

石川　どうぞ。（本を女學生に渡す）

女學生　ありがたう御座いました。――まあ何てうれしいんでせう。（雀躍（こおどり）して、もとの席へ戻る）

友達　ほんとに羨ましいわ。（引ッ張り合つて署名を眺める）

前の女學生　あなた、私に御禮仰言いよ。

女學生　いくらでも云ふわ。ありがたう、ありがたう……。（頭をさげる）

（皆又笑ひ出す。）

新聞記者　先生、面會日にはどの位いつもやつて來ます。

石川　お客さんですか？

新聞記者　ええ。

石川　平均四五十人は見えます。

記者　そんな話を一々聞いておいでになつたんぢや、大へんでせう。

石川　隨分疲れます。夕方になると、もういつでもグツタりします。　政治家や實業家になりやあ、それッ位の人に會ふのは毎日の事でせうが、僕達のやうに、藝術でもたのしんでゐやうッて種類の人間に取ッちやあ、全く大ごとです。

記者　さうでせうなあ。それに、藝術家のところの訪問者は種類もちがひますし。

地方幹事　（立つて）どうも、長いこと御邪魔しました。では、又いつかお暇の時おねがひするとして、殘念ですが今度はあきらめます。

石川　濟みません。

幹事　では御機嫌よう……（二人頭をさげる）

石川　さやうなら。

（二人ドアから出て行く。二人の學生も立たうとしたが、囁き合つて、又腰を落ちつける。）

（その時、默つてゐた大學生の一人急に口を切る。）

學生　一つ質問させて頂けませんか。

石川　どうぞ。

學生　先生が財産や農場をお棄てになるのは、プロレタリアになる爲めの行動ですか。

石川　（惱ましげな表情になりながら）最初はそのつもりでした。

學生　（訝しげに）と、今はその御つもりぢやないんですか。

石川　今も、出來る事ならさうなりたいと思つてます。が、なれるかどうかはわかりません。いや、此の頃は、とてもなれさうもない氣がします。

（皆緊張して耳を澄ます。）

學生　どうして、なれさうもないと御考へですか。

石川　それは、今一口には云へません。――が主な點を云へば、今までの自分の階級的地位に對する認識です。考へれば考へるほど、階級的差別ッて奴は、人間のすべて

御自分ではどう考へてさう云ふ事をなさるんですか？　財産を棄てたところで、どうせプロレタリアになれない事はわかつてらつしやるとすれば。

石川　僕の氣もちとしては、たとへ結果はどうであれ、もう此いうへ親讓りの財産を持つてはゐられなくなつたんです。そんな事をしてゐれば、自分の精神も生活も窒息する。一生の仕事のつもりの藝術も行きづまりになる、つて事が、あんまりハツキリわかつて來たからです。

あとの學生　それは、即ちプロレタリア意識に、ほんとに眼ざめてらしつたことぢやないんですか。

石川　（淋しく笑つて）　であれば、こんな愉快な事はありませんが……僕が、もう少し自分の心を反省する癖をやめられたら、きつとさう云へるでせうが。……然し、社會意識に眼ざめたとは云へますね。そして、そいつに眼ざめれば眼ざめるほど、僕の階級的地位に對する不安も強くなつて來ます。……ブルジョア階級の根性とは云へないまでも、とにかく知識階級の根性からは容易に脱けられません。誰も脱けられないとは決して云ひませんが、すくなくも僕だけは、今までのいろんな事情から云つて、一生かかつても出來るかどうかわかりません。これは非常に悲しい事です。又殘念な事だ。が、事實である限り、無視するわけにはゆきません。

あとの學生　知識階級つてものは、そんなに所謂プロレタリアと矛盾するもんでせうか。

石川　絶對に矛盾するとは云へません。が、差別のある事は事實です。知識階級は、プロレタリア×××××××××者にもなれます。十分それだけの事は出來ます。が、どんなに自惚でも、×××××××するのはプロレタリアです。新しい文化を作つてゆく者もプロレタリアです。又それであつてこそ、初めて獨特のプロレタリア文化と云へるでせう。

前の學生　と、先生の御考へは、大分悲觀的ですね。

石川　さうかも知れません。自分に關してはね。

あとの學生　先生の反省と謙遜の氣もちはよくわかります。が、そんなふうに御考へになるのは、あんまり消極的ぢやないでせうか。

石川　自分でも、もつと樂觀的に、もつと積極的に、もつと勇敢になりたくて仕方ないんです。然し、どんな場合にもまづ「おのれを知れ」です。僕は自分を見つめる限り、これ以上の事は云へません。

新聞記者　おや、今まで僕達も……一般の世間が先生の氣もちを想像してゐたのとは、大分ちがつてますな。

石川　（又淋しく笑つて）　さうでせうか。——かも知れません。

雜誌記者　先生、それを、一つ僕の方の雜誌へ載せて頂けませんか。
石川　僕は、自分の文章は『[illegible]』へだけ發表する事にしてゐますから……。
雜誌記者　それはよくわかつてます。ですが、談話筆記として書かせて下さいませんか。
石川　あなたがおまとめになるんですか。
記者　ええ、……そして、あとで持つてまゐりますから、一つ御面倒でも見て頂けませんか。
石川　（當惑したやうに）困つたな。
記者　どうぞ御ねがひします。（いきなり立つて御辭儀する。）
石川　既に躊躇なさす、ツて云ふが、現代の記者諸君にかかつては、何でもかんでも記事になつて了ふんだからかなはない。――（思ひきつたやうに）よう御座んす。
記者　ありがたう御座います。それで、これから早速歸つて書きませう。（新聞記者へ向つて）君はまだゐるか？
新聞記者　いや、僕も失禮しますから。（立つて石川の方へ向いて）御邪魔しました。
石川　失禮しました。
（それに促されたやうに、女學生組と男學生の組も立

女學生達　どうもありがたう御座いました。
男學生達　ありがたう御座いました。
石川　御免下さい。
（みなゾロゾロと立つて、ドアから出てゆく。石川、疲れてガッカリしたやうな樣子でそれを見送る。）
石川　（やがて、あとに殘つた、さッきから何も云はずに客煙草を吹かしてゐた二人連れへ向つて）失禮ですが、あなたたちは何の御用事ですか。
男の中の一人　べつに大した用でもありませんが、少しお願ひしたい事があるんです。
石川　何ですか。
男　實は、僕達無政府主義者の仲間で、宣傳のパンフレットを出したいと思つてるんです。――が、例の資金がまるで缺乏してゐるんで、少し寄附して頂きたいと思ふんです。
石川　（テエブルの上の何十枚かの名刺を探しながら）あなたは何と仰つたんでしたツけ？
男　尾崎兼太郎ツて云ふんです。
侍の相棒　僕、林周一です。
石川　さうですか。（一寸頭をさげて）初めて伺ふ御名前ですが、いつ頃ツからそんな運動をしてらツしやるんです？

尾崎　二三年前からです。

石川　その前は？

尾崎、林　（昂然として聲を揃へて）勞働者です。

石川　さう？　失禮ですが、どうしてそれをおやめになつたんです？

尾崎　見す見す資本家に搾取されるのが馬鹿らしくなつたからです。

石川　で、無政府主義者におなりになつたわけですね。

尾崎　さうです。

林　（あとから）働きやあ働くだけ、ただ資本家を肥やしてやるやうなもんですからね。

石川　なるほど。——然し今の世の中ぢやあ、さう云ふ潔癖はとほらなかアありませんか。

尾崎　いくら通らなくツても、一旦自覺したからにやあ、僕達はそんな馬鹿々々しさや屈辱は忍べません。

石川　が、食ふ爲めに働かれないとすると、くらしの方は？

尾崎　（押し太い調子で）それは、あなたがたのやうな同志から扶助して貰はなくつちやアいけません。

石川　（微笑して）と、あなたは僕にパンフレットの金を出せツて云ふんですか、くらしの方を助けろつて云はれるんですか。

尾崎　（同じく微笑して）どツちも願ひたいです。

林　（その尾について）第一にパンフレットの金。それからくらしの金。

石川　ふむ。いいお考へですね。が、僕から御貰ひになるにしたところで、やつぱり、資本家の手をとほつて來た金ぢアありませんか。

林　ブルジョアの餘計な金は、僕等は出來るだけ取り返す權利がある。

尾崎　（彼を制して）餘計な事を云ふな。——（石川へ向つて）然し、僕等はあなたから同志として貰ふんです。同志の金は潔白です。

石川　なるほど。然し僕はあなたの同志で、又、あなたは僕の同志でせうか？

尾崎　これはをかしい。あなたは同じ無政府主義者でせう。

石川　さうは云へるか知れません。

尾崎　そんなら立派に同志でせう。

石川　けれども、無政府主義者と云ふ言葉は、決してただの合言葉であつちやアならないと僕は思ひます。どんな人間でも、僕は無政府主義者だとだけは云へるでせう。然し、そんな言葉には三文の價値もありません。

尾崎　（やや氣色ばんで）ぢやあ、あなたは僕等をまがひ者だと仰るんですか？

石川　まがひ者か、さうでないか、何しろ今日初めてお目

にかかつたりお名前を伺つたりしただけですから……。

尾崎　（言葉を遮つて、荒々しく）君は、世間的虚名で人を見分けようつて云ふんだね。

石川　決して。……僕はたゞ、藪から棒に同志だ、同志だつて、云はれるのに當惑するだけです。

林　（こらへかねたやうに）君は、何とかして金を出すまい、と思つて、いろんな小理窟をつけて逃げ廻つてるんだ。おれにやアすつかりわかつてる。

（石川、不快に堪へないやうに、默つて横（觀客の方）を向く。）

尾崎　（言葉を柔らげて）だが石川さん、あなたは今財産を整理するとか何とかつて、大分新聞なぞに廣告してるぢやアありませんか。

林　（傍から）さうよ。ウンと馬鹿記者どもに太鼓を叩かせて、うめえ儲けをしてゐるぢやアねえか。

尾崎　（再び彼を制す）君は默つてろ。（石川へ向つて）世間ぢやあ、まアそんなふうに考へてる者もあります。僕達は、決してあなたが賣名の爲めにさう云ふ事をなさるとア思ひませんが、とにかく財産をお棄てになるなら、つまらない所へ寄附したりするより、少しでも僕達の運動を助けて下さるといいと思ふんだが。

石川　（彼の顔を凝視して）決して、つまらない所へ寄附してゐるとは思ひません。勞働學校の基本金やら、ＫＫ會の運動資金やら、セツツルメントの援助やら、そんな金はみんな無駄でせうか。

尾崎　いや、決してさうは云ひません。だが、さう云ふ金のホンの一部分を、僕達の方へ分けて頂きたいんだ。

石川　（苦痛を面にたたへて）僕は、正直なところ、少しばかりの金にこだはりたかアありません。又そんな人間でもないつもりです。それに元來弱氣な性質です。金が要るから、ツて縋られると、見す見す馬鹿げた助力だと思ひながら、今までいくら出して來たか知れません。さう云つちやあ何ですが、兩會日ごとに、あなたがたのやうなかたがどつさり來られるんです。兩會の半分はさうだと云へます。その大勢の人を、誰がほんとにどれだけ要るんだか、又どんなに有用な金だか、神さまなら知らす、人間の、然も見聞の淺い僕にわかりツこありません。執ツこく云はれれば、それだけでもう根氣負けがして、早く面倒な問答から遁れたいばツつかりに、大抵、……十のうちの七八までは承知して來ました。ところがいろいろあとから様子を見ると、出した金の大部分は、まづ無駄のやうです。中には、僕の家を、いや此の室を出ると一緒に、赤い舌をペロリ出す人も澤山あるふうです。さう云ふ人が又友だちを誘つてやつて來る。ひどいのは

僕から無理矢理貰つて行きなたら、その金で或は酒で、或はおほッぴらに、僕をやッつけてる人さへあります。……どんなに人から馬鹿にされたところで、構ひませんが、自分の馬鹿らしさと煩しさには、つくづく愛想が盡きます。さう云ふ煩ひから自由になりたい爲めにも、僕は――正直なところ――今度の財産拋棄の決心を固めたんです。そんな餘計な物があるからの利子だ。もと金さへ綺麗さつぱり棄てて了へばそんな苦痛からも逃れられる、いや、すつかりらくになれないまでも、尠くとも今見たいな事はないだらう、と考へたんです。ところが、世の中の事はなかなか思ふやうに行かないもんで、もう疾に片づいてゐる筈の此の家でさへ、未だに不景氣で賣れず、借家へ移つて新しい簡易な生活を始める事も出來ず、相變らずかうして諸君の御訪問を受けてゐる次第です。

林 (長い告白に倦き倦きして、不作法に) 何だか何だか知らねえが、おれ達にや金がねえ、あなたにやあ金がある、とわかッてたら、ほんとの無政府主義者だつたら、いくらでも融通するのが當然だらうがなあ。

石川 理窟はさうだ。が、世の中は、なかなか理窟どほりにや行きませんよ。(又尾崎へ向つて) 仕方ないから、僕は近頃から決心してゐるんです。自分の心に染まない金は決して出さないと――言葉を換へれば、自分に確信の出來ない金は一文でもあげない、ッてです。確信て云つたところで、實際の知識やら、藝術家的直覺やら、まあ云はば自分勝手に定めるんですが。

尾崎 で、僕達に對しては、その確信の寒暖計にはずれたんです?

石川 (やゝ躊躇してから) 殘念ですが、どうもあまり高く水銀が昇りませんね。

(その時、ドアが少しあきかゝつて、チラと女の着物が見える、入らうとして躊躇してゐる樣子だが、誰も氣がつかない。)

林 (尾崎に) くれねえつて云ふのかい?

尾崎 うん。(立ちあがつて、石川へ向つて荒い調子で) いろんな事を云つて、よくもおれ達を侮辱したね。今日の事を、よく覺えてるがいゝ。

石川 もし、あなたがたに失敬な言葉を使つたのなら、いくらでも御詫びします。

尾崎 今になつて卑怯云ふな。

石川 これが卑怯だらうか。

林 腰拔け野郎。

(石川苦笑してじつと見てゐる。)

林 (虚勢を示して) 一つ喰はせてやるか!

(その時、びつくりしたやうにドアをあけて、一足千

千代子が踏み込む。今日は和服、やつぱりかなり派手な服裝。音はしない。石川氣がついて彼女を見る。）

尾崎　よせ〳〵、こんな僞善者をたゝつたつて仕樣ねえ。それより、あとで目に物見せてやるから。――（石川へ向つて）さよなら。

石川　（靜かに）　さやうなら。

林　ぢやあ此の次まで貸しといてやる。忘れるな！

（二人一緒にドアの方へ行きかかる。その時、初めて千代子に氣がつく。二人やや面喰つたやうに立ち留る。）

尾崎　（やがて）　ようブルジョア婦人！　こんちは！

（千代子默つて傍へ寄る。）

林　その樣子を見て、何にお澄ましてやアがんだい。チェッ、お孃さんにはお御挨拶されんのも勿體ねえんださうだ。何の用だい？　え、おい、あいつに？

（千代子無言に滿ちてキッと見る。一種精神的な美。）

尾崎　嫉くな林！（千代子へ向つて）どうぞ御ゆつくり。

（ドアから去る）

林　まだ未練さうに振り返りながら、畜生ッ！（去る）

（千代子、あとを見送つて、ドアを閉めて靜かに石川の側へ、頭をさげる。）

石川　（その椅子を指して、ゆつくりした口調で）どうぞ。

（千代子默つて會釋してそつちへ行く。その時ドアがあいて、女中が名刺を持つて入つて來る。）

女中　あの、から云ふかたが又二人お見えになりました。

石川　（讀みかける）　暴力對抗聯盟幹部……（再び顏をくもらせて）大へん申しわけがありませんが、今日はもう疲れてをりますから、どうか御容赦下さい、つて云つて下さい。

女中　かしこまりました。（去る）

千代子　まあ何ていろんな人が來るんでせう。

石川　どうせこれも金です。（半ば自嘲するやうに）まるで、僕を銀行の監査役か貯金局の役人のつもりでゐるんですよ。

千代子　（同感するやうに）ほんとですわ。（再び怒りを感じ返したやうに）それぱかりか、あんな失禮な。

石川　あなたまで亂暴な言葉をかけられて、ほんとにお氣の毒でしたね。

千代子　いいえ。わたしなぞは云はれるのが當り前かも知れません。けれど先生へ向つて……（キッとした調子で）なくなるとか何とか云つた時は、わたし思はず、自分が罵られたやうにカッとしましたわ。もし先生に失禮な眞似でもしようとしたら、默つてはゐないつもりでしたわ。

石川　ありがたう。（笑ひながら）然しあなたに何か云は

れたら、きつと餘計困つたでせう。

千代子　（眞面目に）わたしこれでも、腕力ならあんな人達に負けない自信がありましてよ。

石川　ほん氣ですか。

千代子　ええ。わたし、二三年婦人體術を習つたことがありますの。

石川　（やや驚いたやうに）ほう、あなたは、まツたくいろんな事が出來ますね。

千代子　（氣もちを變へたやうに）一體先生がよくないんですわ。あんた似而非主義者が、ごろつき强請のやうな者に、いくらでも相手になつておやりになるから、きりもなくつけあがつて來るんですわ。

石川　（苦笑して）僕もさう思はないことはない。然し、僕は性質として、無暗に人を疑つたり傷つけたりすることは大嫌ひです。そのくせ、人一倍疑つたり傷つけたりしてゐるかも知れませんがね……そして、何度引つかけられても裏切られても、ほんとに正直ないい人を見逃しはしないかと心配です。そんな人は、勿論ちつとも少しにきまつてますが、でも無いとは決して云へません。ゐるとすれば、そして力になれるとすれば、ムザムザその人の運命を狂はせたくありません。その爲めには、外の苦痛もやむを得ない氣さへします。人間の力で、その苦痛から逃れられる方法がないとすれば。

（その時、又女中が入つて來る。石川達それを見る）

女中　あの、おことわり申したんですけれど、是非一目でもお目にかかりたいつて仰います。面會日だからわざわざやつて來たんだ、これを會はないなんて不都合だつて、こはい權幕で云つてらつしやいます。

石川　（やや腹立つた調子で）だから、丁寧に詫びてゐるんぢやないか。（女中のおそれてゐる樣子を見て、急に思ひ返したやうに）何と仰つても、疲れてお目にかかれません、御用を云つて下されば、あとで御返事は差しあげますから、つて、氣の毒だがもう一度云つて下さい。

女中　はい。（去る）

石川　（あとを見送つて）女中まで可哀想だ。

千代子　（よろこんで）面會日だつて何だつて、さう云ふ風に、これからは、會ひたくないかたはドシドシおことわりなさいましよ。

石川　（苦笑して）さうなれば、今僕は誰にも會ひたくない。實は、もう誰にも會はない事にしようかと時々思ふんです。

（千代子凝然として彼を見る。）

石川　僕は、今へとへと厭人的になつてます。きつと疲れてるからでせう。（目を伏せる）

千代子　(同感したやうに)　全く、何もかもひとりで切り廻してらつしやるんでは、お疲れになるのも無理ありませんわ。おまけに、そんなデリケエトな氣もちで人に對してらしつたんでは。

石川　なに、もう少し強くさへあればいいんですが。――(無理に笑はうとしながら)あなたは人でさへ、僕の思ふやうにはなつてくれないんですからね。

千代子　(強い調子で)　どんなに先生が仰つたつて、嫌はれたつて、わたし決して離れませんわ。

石川　あなたが離れなければ、僕の方から逃げなければいけない。正直なところ、あなたも今僕には煩はしさです。が、それと僕はあなたを尊敬してゐる。好いてもゐます。が、それと一緒に嫌つてきます。輕蔑さへもしてゐます。――さう云ふいろんな氣もちがこんぐらかつて、随分な僕の煩ひになつてきます。嫌ひなところでさへ、一種の魅力になつてるんだからかなはない。

千代子　(一種眞面目な調子で)　それはわたしの罪ばかりとは云へませんわ。先生だつて、強い……あんまり強い魅力を持つてらつしやるんですもの。勿論、先生の魅力の中には、わたしに嫌ひなものは一つもありませんけれど……わたしだつて、どれだけ先生から離れようと、……自分の爲めばかりでなく、先生の御氣もちの爲めにも……今迄して見たかわかりませんわ。

(石川、默つてテエブルに頰杖を突いてゐる。――その時、ドアをあけて又女中が入つて來る。)

女中　やつとお歸りになりましたが、何か御書きになつて、ぢやアこれを御渡ししてくれ、誰にも外の人へ見せちやアいけない、つて仰いました。(手に持つた、封をした軍用書簡箋を石川へ渡す)

石川　ありがたう。もう今日は、誰が來てもことわつて下さい。

女中　はい。(去る)

石川　(封を切つて、鉛筆の走り書きを默讀する)　馬鹿な。――(ビリビリと引き裂いて、テエブルの上へ投げ出す)

千代子　(心配さうに)　何で御座いますツて？

石川　なに、やつぱり金ですよ。(口をつぐまうとしたが)明後日までに無條件で二千圓くれ、その使ひ途は、今或る計畫の爲めだとばかり云へない、だが、やがて大事件として知つて貰へるだらう、……つて云つた文句です。

千代子　まあ。――で、ちつとも御存じないかた？

石川　無論。

千代子　そんな強請がましい事を云つて、餘計な面倒を先生にお掛けするなんて、何て憎らしい人達でせう。

石川　その憎らしい人達が、今日もこれで二十人ばかり來

ました。

千代子　まあ。――それだけでも隨分お疲れでせう。

石川　疲れますとも、一番疲れるかも知れない。おまけに憂鬱になる。面會日のあとでは、いつもきまつて二日ばかりも憂鬱がつづくんです。當分、まつたくニヒリスチックになりますよ。こんなくだらんことで、いくら馴れても馴れても、どんなに僕の人生を見る目を暗くするか知れない。――（急に決心したやうに）移る！　きつと移る！

千代子　（驚かされて）移る?!

石川　賣れやうが賣れまいが、もう今月限りこの家を出ます。……明日からでも、大いこぎで小さな借家を探す。さうだ、そして氣持ちを切り換へるんだ！（急にクラクラと眩暈を感じたやうに、頭を兩手で押へて仰向くと、バタリと腕を下にテエブルの上へ突つ伏す。）

（千代子びつくりして、いそいで椅子から立つて傍へ寄る。）

千代子　どうなすつて？　先生！

（返事がない。）

千代子　先生！

（無言。）

（彼女一瞬時躊躇へ兩手を當てたが、思ひついたやうに、すぐ袂から柔かい薄紅色の絹ハンケチを取り出して、茶瓶の冷えた茶を注ぎかけて、ちよつとしぼつて、石川の前頭部へ押しつける。そして、彼の身體を横から抱きかゝへるやうにしながら、又「先生」！）

石川　（やがて、氣力を引き立てるやうに唸る）うむ！

千代子　お醫者さんをお呼びしませうか。

石川　（なほ兩手で顏を押へながら）いや、結構です。――もういいんです。

千代子　（なほ彼の顏をハンケチで押へながら）大丈夫でして？（兩手の下をのぞき込むやうに、顏を彼の顏へ觸れるほど近づける）

石川　（靜かに）大丈夫。

（やがて兩手を離す。そして、眠りから覺めたやうな眼を、心配さうにしてゐる彼女の眼とピッタリ見合はせる。十秒間ばかり。――どちらからともなく顏が近寄つて、ぴたり唇を合はせる。千代子につづいて、石川の方からも××××××××××××××。）

（三十秒ばかり。……石川、急に×××××を離す。）

千代子　（なほ縋りつきながら、頸を曲げてじッと石川の顏を覗き込んで）わたし、わたし、……ほんとに××××
×××××××××××ひませんわ。

石川　（苦しさうな聲て）濟みません。ゆるして下さい。

（彼女を押し遠ざけようとする。）

千代子　何が濟まないんです？　わたしこそ、どんなに××××××、×××××。（××××××××××かかゐ。）

（石川思はず抱きしめる。）

千代子　（顔をあげて）　先生！　××××××××！（歎願するやうな眼つき）

（石川しばらくその眼を見返して、××××××××××××を×××××。彼女××のあまり××とする。）

（又十秒間ばかり。）

（その時コツコツ、ドアを叩く音がして。）

聲　おい石川君！　ゐるか？

（石川びつくりして彼女の身體を押し離す。彼女はむ[illegible]離れる。）

石川　（やや嗄れ聲で）　誰だ？

聲　野口だよ。入つてもいいか。

石川　（いそいで彼女に眼くばせして）　ああ、いい。

（野口、ドアをあけて現れる。背かなり高く、瘦せながら骨の張つた、どこかでゴツゴツした恰好。頑固さうな顔。和服姿。）

野口　やあ、誰もゐないのかと思つたら、まだゐたのか。

石川　（當惑したやうに瞬きながら）　ああ。

野口　女中にきいたら、もう今日は誰にも會はんとかッて云つてたが、僕なら多分よからうと思つて——ハッ、ハッ、ハッ、ハッ　（高い聲で笑ふ）

石川　無論差し支へない。

野口　さうか。——いや、せんだつてぢうは、たびたび見舞ひに來て貰つてありがたう。

（頭をさげる。）

石川　いや……隨分長くかかつたね。どうだね、退院後の具合は？

野口　うん、大いにいい。今日は、まあ足試しかたがたやッて來た。

石川　そいつは結構だ。——（少し離れて椅子へ掛けた千代子の方へ眼を向けて）ちよッと紹介して置かう。これは、東京新聞の學藝部の片山千代子さんだ。

野口　ああ、さうか「[illegible]」の校正を、いつも君が賴んでゐるとかッて婦人かね。

石川　さうだ（千代子へ向つて）、友人の野口です。

千代子　始終先生から御話を伺つて、いつか是非お目にかかりたく思つてをりました。

野口　や、……あんまりお目にかかる價値のない人間です。
　ハッハッハッ。

石川　まアかけたまへ。

野口　うん。（千代子とのあひだへ腰をおろす。その時、ふと足もとのハンカチに氣がつく）おや。（腰をかがめて拾ふ）

（千代子、思はず石川の顔を見る　石川も眼を合はす）

野口　（拾ひあげて）何た、馬鹿に香水くさいハンケチだな。（ふとその端の縫ひ取りに目をつける）

石川　（思ひ切つて）それは千代子さんのハンケチだ。

野口　ア、さうか、これは失禮。（そのまま彼女の方へやる）

千代子　濟みません。（濕つたまま、たたんで袂に入れようとする）

石川　（辯解するやうに）今、あんまり僕が疲れに眩暈を起したんで、千代子さんがそれで頭を冷やしてくれたんだ。

野口　どうしてそんなに疲れたんだ？　例の面會人攻めでか？

石川　さうだ。

野口　いつかも君はそんな事があつたね。……（揶揄するやうに）財産を整理するの何のつて事をきいて、近ごろ餘計大勢押しかけて來るんだらう。

石川　そのとほりだ。

野口　君は一たい馬鹿正直すぎる。一つは自業自得さ。

石川　（おとなしく）さうかも知れない。

野口　（千代子の方をジロリと見て）僕あ又、あのハンケチは、誰か君の崇拜者の女でも君に贈つたのかと思つたこ

石川　（不審さうに）どうして？

野口　I Kなんて縫ひ取りがしてあつたからさ。（又千代子の方を見る）

（彼女思はずうなだれて唇を噛む。石川困つた樣子）

野口　いや、これは失敬。どうも僕は生れつきの野人で、すこぶる不遠慮な質ですから惡しからず。ハッハッハッハッ。

石川　（場をつくろふやうに）まつたく、君の不遠慮と毒舌は、昔つから有名すぎるからねえ。

野口　だから、君の外には古い友人は一人もないんさ。

石川　僕に取つても一番古い友人だから不思議だ。

野口　（話題を轉換させて）ところで君、『翼』のこの次の原稿はかなり出來たかね。

石川　いや、まだまるで出來てない。

野口　（詰問するやうに）もう月末ぢやアないか。そんな事を云つてると、又締切りに間に合はなくなるぞ。

石川　間に合はなくても仕方ない

野口　（強く）戯談ぢやない。君は仕方なくてもいいか知れないが、發行者の僕はどうする。

石川　いよいよ書けなけりやあ、休刊して貰ふつもりだ。

野口　そんなにのんきに構へ込まれちやあ困るよ。僕あ……。

石川　決してのんきぢやない。

野口　それはさうかも知れんが。——創作はとにかく、感想位なら何とか書けるだらうぢやないか。

石川　書けるだけは書いて見る。（急に言葉を變へて）それより君、どこか至急借家を見つけてくれないか。

野口　借家？

石川　うん。僕はもう、出來るなら明日からでもここを出たい。ともかく新しい生活を始めたいんだ。自分でも無論探すが、君の店の方に手が空いてたら、一つ骨折つてくれ。

野口　よし。ぢやあ探させる。

千代子　（その時立ちあがつて）あの、失禮ですけれど、わたし、これでお暇させて頂きます。

石川　さうですか？——（思ひついたやうに）いろいろありがたう御座んした。（同じく立つて、複雑な氣もちなこふて彼女を見る）

（彼女も見返す。）

千代子　（次に野口へ向つて）失禮いたします。

野口　（ぶつきらぼうに）失禮。

（彼女ドアの方へ行かうとする。石川と野口、べつべつな態度で立つたまま目送する。）

——キッカケに幕——

第三幕

人物

片山正信（四十二歳位）

片山千代子

女中

時

六月三日、午後六時半頃から夕方

所

正信の居間

舞臺　數寄を凝らした、茶室がかつた日本間。右手には、砂壁の一間の床の間。それに並んで、同じく一間のちがひ棚、地袋。床の間には掛軸、活花。ちがひ棚にはしやれた和綴の書册等。「無隣庵」と風流な草書で書いた横額が、正面長押へかゝつてゐる。その下の壁の右寄りに圓い窓が一つ開き、磨硝子の障子をとほして、庭の手を盡した植ゑ樹の影が風雅に夕日に映し出されてゐる。郊外の住宅らしく、枝へ小鳥が一二

羽とまつて鳴き聲が聞える。

幕あくと、しばらく小鳥の靜かな聲だけ。やがて玄關のベルの音がして、洋服姿の正信が入つて來る。金緣の鼻眼鏡。美貌。あとから、女中が着換への和服と郵便を持つて來る。

〔以下其の筋より掲載を禁止さる。〕

第四幕

人物

石川謙造

片山正信

片山千代子

給仕

時

翌日（六月四日）午前十時半頃

所

會社の應接室

舞臺 高層なアメリカ式ビルディング内の、片山の勤めてゐる船舶保險會社の應接室。眞ッ白い高い壁。ところどころに、大きな汽船の寫眞額がかかつてゐたり、彩色刷りの汽船のポスタアが貼つてあつたりする。正面に高い窓があき、その向うに、いろんな色のビルディングの一部や、眞ッ赤に塗つた、煙を吐いてゐる大煙突が聳えてゐる。眞ん中にテエブル、周圍に椅子。左手にドア。そのこッち側に、帽子掛けやステッキ入れ等。

幕があいた時は誰もゐない。都會の中心らしく、遠く電車の軋る音や、汽車の轟音や汽笛なぞが、錯綜して窓から聞える。やがてドアあき、女給仕に案内されて石川が入つて來る。

〔以下其の筋より掲載を禁止さる。〕

第五幕

人物

石川謙造

謙造の母

子供（雪子、欣一）

野口新作

女中

片山千代子

時

六月六日午後

所　石川の牛込の借家二階

舞臺　如何にも借家建てらしい、一寸見せかけだけつくろつた安普請の二階。正面奥に障子が閉め切られ（その蔭は手摺り附きの小さな縁側になつてゐる）右手の書院風の壁の前に、質素な低い書き物机が一つ。上に本や文房具類が置いてある。舞臺右手奥に、本を積んだ床の間、前手は押し入れ。左手に襖、しみのついた天井の眞ん中に電燈を取りつけ、その紐を机の上まで引つ張つてある。かなり古い疊。

幕あくと、石川が机へ向つて何か書いてゐる。女中が襖をあける（前幕と同じ女中ながら、着物などすつかり質素になつてゐる）

女中　あの、野口さんがいらつしやいました。

石川　野口？（びつくりしたやうに振り向く）

女中　はい

石川　（思はず呟く）そりや困つたな。（當惑した樣子）

（もう階子段をドシドシあがつて來る足音が聞える。）

石川　（決心したやうに）よし。（立つて、押入から座蒲團を出し、左寄り恰好な場所へ敷く）

（女中手傳はうとする。）

石川　いや、結構。

（そこへ野口が現はれる。同じく和服姿。）

野口　やあ、昨日は失敬。

石川　僕こそ失敬した。（机の前の座蒲團を取つて、野口と對ひ合ふ）

野口　（去らうとする女中に向つて）お茶なぞは要らんから、しばらく來ないでくれ給へ。少し話があるから。

女中　はい。（去る）

野口　（石川へ向つて）脚の具合が惡いから、相變らずゆつくりさせて貰ふ（胡坐をかく）

石川　無論だ。

野口　（石川の顏を見て）昨日君が歸つてから、いろいろと考へて見た。

石川　（氣の毒さうに）飛んだ心配をかけて濟まなかつたね。

野口　べつに頼まれもしないが、何とか友達甲斐に智慧が出ないもんかと思つてね。

石川　ありがたう。

野口　が、やつぱり名案も浮ばなかつた。——（一寸語氣を變へて）あの問題については一切話してくれたんだらうな。

石川　一切？

野口　細かにつて慾を云へばキリがないが、勘くも隱してゐる事はあるまいな。

石川　（ややたじろいで）何もかくしちやアゐないよ。

野口　さうか。でないと、折角考へて見たところが、何の足しにもならんからな。

石川　どうか、考へを云つてくれ給へ。

野口　考へつてほどの事もないが、君！　片山の云ふとほり一萬圓拂つてやれ。

石川　うむ……。

野口　たしかに片山はさう云つたんだらう？　もしそれ以上出せの何のつて云つたら、僕が相手になる。何なら、その受け渡しの時も立會はう。

石川　君の志は感謝する。が……。

野口　（おつかぶせるやうに）くだらん潔癖は云ふな。向うが常習犯なら、常習犯として輕蔑してゐりやアいい。何も、その爲めに、君がけがされるわけでも何でもないぢやないか。そりやあ氣もちが悪いか知れないが、一方からは、奴の言葉どほりこんな簡單な事アない。金さへ取りやあ構はないつて相手の隙を、逆に利用してやるがいい。向うを圖に乘らせるが口惜しいの何のツて、そんなお坊ちやんらしい潔癖や正義感は、この機會にサラリと棄てちまへ。君は一方無暗に吞氣で、金にダラシなさすぎるくせに、一方變に肩肱張つたところがあつていかん。

石川　君の云ふとほりだ。が――。

野口　（續けて）それとも、そんな俗惡な形式はどうしてもいやか？　いやなら、刑務所へ入るより仕方あるまい。君に、どこ迄も生き拔いて行く勇猛心さへありやあ、それも決して反對はしない。いや、勇猛心より身體だ、身體さへ持ちこたへられりやあ、……だが、君の身體はあんまり丈夫な方ぢやアないからな。萬一刑務所の中で死にでもしたら、君は兎に角、僕達友人はあきらめられん。

（石川默つて俯向く。しばらく。）

野口　（樣子を窺つて）何だ、泣いてゐるのか？

石川　（手で眼を拭つて）あんまり心をかけてくれるんで、涙が出た。

野口　（强く）僕に感謝するより、君の心もちを定めたまへ。

石川　僕のやうなつまらん人間が、さうまで君達に心を寄せられるのは勿體なすぎる。

野口　そんな事アどうでもいい。それより――。

石川　（決心したやうに）ぢやあ、もう少し氣もちを聞いて貰はなくちやアいけない。聞いてくれるか？

野口　云つてくれ

石川　心の底を云へば、千代子と結婚したところで希望はないんだ。
野口　ぢや、君は結婚を希望してゐないのか。
石川　希望してゐない事はない。が、それが二人の幸福になれるかどうかには、一向自信が持てないんだ。
野口　――とすると、つまり彼女が君にふさはしくないと考へてるのか。
石川　僕も彼女にふさはしいとは云ひ切れない。
野口　（追窮的に）ぢやあ君は、まちがつて千代子さんと關係を結んだと思つてゐるんだな。
石川　まちがつたかも知れないね。が、まちがつたとも云ひ切れない。
野口　いよいよ出でて、いよいよ曖昧を極めゐるな。と、君はあの人に對して未だ態度が定つてないのか。
石川　それは定つてる。定つてればこそ、はツきり云ひ切れないんだ。
野口　僕だけにやあ、も少し腑に落ちるやうに云へないもんか。
石川　（思ひ切つたやうに）そんなら云はう。僕あ、無論あの人を一時の慰みにしたわけぢやない。だが、僕がほんとに強かつたら、あの人に許すべきぢやアなかつたんだ。許してもよかつたなら、今こんな苦悶はない筈だ。自分の將來の爲めには、決して僕は許しちやアいけなかつたんだ。なぜなら、二人が一緒になつたツて、その生活には將來の希望が懸けられないから……。
野口　（頼る處を得たやうに）さうだ。此の前初めて彼女に應接間で會つた時ツから、僕はさう思つてたんだ。なぜあんな、君の細君として、いや、一般的にも細君として不適當な女と、そんな面倒な事を惹き起したかと思つて、實は昨日君から話を聞いた時ツから、口惜しくて口惜しくて仕方なかつたんだ。平たく云へば、君はうまうま引ツ掛けられたんだ。だが、馬鹿に君が庇つた云ひかたをするし、おまけにもう出來た事で、今更君を責めて氣もちを惡くさせたところで仕方ない、責任感の強い君の事だから、いきなり僕の氣もちをぶツつけたら反つてブチ毀しになるだらうと思つて、今まで控へてたんだ。
石川　（力なく）さうか。
野口　だが、あの女に負かされた君もわかるつもりだ。何てツても、長いあひだの寡夫生活だツたからなあ。そこへ持つて來て、かなりフエミニストの、殉情的な君のこツた。あの三十女の美貌と手管で、ネチネチ蛇のやうに執ツこく卷きつかれちやあ、とてもかなはないなあ當り前さ。今更こんな愚痴を云つたツて始まらんが、君がいつまでも前の細君や子供に泣かされて、いくら僕達がす

すめても後添ひを貰はずにゐさへしなかつたら、今こんな馬鹿々々しいまちがひも起らなかつたんさ。

石川　（遮つて）　いや、さう云つちやあ千代子さんが氣の毒だ。

野口　（叱りつけて）　すぐそんな事を云ひたがるのが君のくせだ。そこが、矢張に女に好かれるとこかも知れんが、よせ！――だから、實のとこを云やあ、金を出すの訴へられるのツて君が嚇かされてゐるのが、僕あ癪にさはツて仕方ないんだ。こツちからこそ、誘惑罪の賠償をさせたい位だ。だが今更仕方ない。かう云ふ怪我は、出來るだけ輕く濟ませるが何よりだ。もし君が糞眞面目に、やれ刑務所へ入るの出るのツて騒ぐなら、それこそ滑稽至極だ。それより、手ツ取りばやく金で濟ましちまへ。そして女を引き取つたら、何とかしていいやうに別れ給へ。それもどうでも氣が濟まないなら、一緒に棲まうと勝手だが、そんな事ア、又あとで考へなほしたツて晩かアない。差し當り、片山の方をキツパリ片づけろ。

石川　（苦惱に滿ちて）　君の好意はありがたい。が、それぢやあ千代子さんに對して不當だ。

野口　（腹を立てて）　又千代子さんか。どうして、君はさう人に對して思ひ切りが惡いんだらう。そこが君の美點かも知れんが、美點もあんまり度が強くなりすぎると、腹が立つ。もう少し、そんな方面の決斷力を養つたらどうだ。

石川　忠告は感謝するが、ぢやあ全く僕がいい子になりすぎる。喧嘩兩成敗と同じに、戀愛關係も兩責任だ。千代子さんが惡けりや僕だツて惡い。僕がよけりやあ千代子さんだツていい。

野口　（堪へられないやうに）　何を又くだらん對句を始めるんだツ！

石川　（きりツとして）　いや、ほんとだ、君が千代子さんをさう考へるのは無理ない。僕だツて、初めはさうばかり考へてたんだ。今だツて、君の言葉に或る眞理を認める。多分千代子さんも認めるだらう。あの人の過去の境遇が、そんな性質にし、又その性質が今のやうな立場を作つてるんだ。それから脱け出ようとしても、もうちよツと不可抗力だツて云つた形だ。が、その外に、底に千代子さんはかくれた眞珠を持つてゐる。それは、此の世で僕だけが知つてるものかも知れない。そして男と女の關係の中で、さう云ふ事は一番深い基礎になるものだらう。

野口　おや、君も彼女を戀してるツて云ふのか。

石川　さうかも知れない。いや、さう云つていいやうだ。

野口　僕に云はせりやあ、それも君の殉情の云はせる譫言

さ。

石川　すくなくとも、僕にはあの人の美と眞實には強く牽きつけられてゐる。その爲めには、甘んじて生命を棄てても構はない。

野口　（ギョッとして）生命？――（石川のうなだれた樣子を見て）君は、まさか死なうなぞたア思つてまいな。

石川　（顏をあげて）もしどうしても生きられなくなれば、二人で死んでもいいよ。

野口　（吐き出すやうに）馬鹿ッ！――きッと、そんな事をあの女に云はれてゐるんだらう。

（石川再び頭を垂れる。）

野口　當つたらう？……實際おそるべき女だ。だから、君は今度の事にも氣が入らないんだな。

石川　（顏をあげて）君の云ふとほりだ。だが、僕はまだ決して死にはしないから、安心してくれ。僕には、まだしなくッちやならない仕事がどッさりある。

野口　（強く）さうとも君にやアまだウンと仕事がある。さッと今その紐につまづきかかッたところだ。何もかもこれからだ。その事を夢にも忘れるな。

石川　忘れない。（悄然として）だが、その大事な首途に、もう僕は蹉跌したらしい。

野口　（強く）蹉跌？

石川　うん。折角生活革命まで漕ぎつけて來たのに、第一歩で、いや、まだ踏み出しもしないうちに、もう致命傷を負つた形だ。

野口　それは、あのブルジョア風な女に引ッかかつたッて事か？

石川　（苦痛に滿ちて）まづさうだ。

野口　君がさッき、まあかつて關係を結んだッてッたのは、その意味か。

石川　（沈痛に）さうだ。

野口　僕もさう思ふ。チェッ、選りもあらうに、あんな女に引ッかかるなんて！――だが、あながち君ばかり責められん。外の女だつたら君も負けはしなかつたらう。今まで七八年間も、平氣でくらして來た位だからな。まつたく、あいつは變た魅力を持つてやがる。

石川　決して自己の辯護をするわけぢやアないが、今度の事は、まつたく免れられない運命だッた氣がする。自分で出來ない事がわかッてるくせに、生活革命なんて企てた當然の結果かも知れない。（自嘲的に）僕のブルジョア階級崩壞の信念を、何よりの美事に自分で證明したわけさ。

野口　理想に、時たま事實を引ッ張り出す。君たちはあんな知識階級論を持つてるたから、こんなことになつたとも云

へる。考へ方によつて、一つは人間の運命が定るんだ。——だが、これツ位の失敗で、君はまた亡びる必要はないぞ。そんな弱音を吹くなよ、平生生活派の君にも似合はん。初めツから、どんな困難が來たツて凌いで行く決心だツたぢやないか。

石川　（悄然として）　さうだが、こんな打擊にぶツつからうたあ、まるで思ひがけなかつたよ。

野口　思ひがけた打擊ばかり來るたア、世の中は定つてない。元氣を振ひおこせ。そして、もう一度新しく踏み出せ。

石川　（沈んで）　ありがたう。……だが、今度は僕は少し自分に絶望したよ。何より大事な自信を、もうどこかへなくなした氣がする。

野口　馬鹿を云へ！——それは、君があんまり眞面目に、克明に、ムキに物を考へる例のくせだ。もう少し氣をユツクリ持て。……（思ひついたやうに）何なら、こゝ二三日どこかへ小さな旅行でもして來たらどうだ？　べつに片山の方は、いそぐ事もあるまいし、もし用が出來たら僕が引き受ける。——さうして氣もちを換へりやあ、きツと又ちがつた考へも新しい力も湧くぜ。

石川　（急に快活になつて）　ありがたう。なるほどそりやあいい。

野口　いいだらう。——都合さへ附きやあ、すぐでも出かけ給へ。……だが、千代子氏には、決して行く先きを知らしちやアいかんぞ。安珍淸姬ぢやないが、あとから追ツかけてでも來られたら、それこそ滅茶苦茶だからな。

石川　無論だ。

野口　氣もちさへ變はりやあ、たアに、適當な解決法はいくらでも見つかる。たとへば、さうまで君達が好いてるなら、君の力で、この後あの女の心の持ちかたを變へさせて行けないとも限らない。女に取つちあ、何より戀した男の力だからな。

石川　（苦笑して）　そいつはあぶない。反つて、僕の方が騙される位が關の山だ。

野口　弱氣を云ふな。さう云ふ消極的も、すツぱり洗ひ流して、元氣のいい顏をぶらさげて歸れ。ついでに、原稿も書いて來てくれ。

石川　（強ひて快活に）　出來るだけ書いて見よう。いや、これはよかツた。君に云はれる迄もなかつたのに、あんまり屈託しすぎて、つい今までそれに氣つかずにゐたよ。はゝゝゝ。

野口　（やつと安心したやうに）　ぢや、僕はまた少し局に用があるから、これで失敬する。くれぐれも氣もちを大きく持て。（立ちあがる）

石川　（殘り惜しさうに）さうか。だが、下で茶でも一杯……。

野口　いや、今欲しくない。（襖の方へ行く）

石川　忙しいところを、そりやあ濟まなかつたな。（立つて、あとから送つてゆく）

（しばらく舞臺空虛。――やがて、石川を先きに母親が現れる。）

母　（立つたまま）すぐ出かけなさる？

石川　ええ、ちよツとその前手紙を濟ませて――。

母　又ぜんたつての晩のとこを？

石川　（ギクリとして）いいえ、まだどことも定めてません。何れ東京驛へ行つてから、時間の都合で定めようと思ひます。

母　野口さんは、あんたに原稿を催促なさるの？

石川　ええ、發行者ですから無理もありません。……原稿の方もですが、少し頭を休めて來たいんです。

母　（うなづいて）それがいいでせう。何だか、この頃妙に沈んでゐなさるから。――あんまり顏色もよくありませんよ。何だつたら、出かける前お醫者さんに診て貰つたらどう？

石川　いや、大丈夫です。決して御心配にや及びません。それより――（云ひ澱んで）お母さんこそ、馴れない生活やらいろいろで、さぞお疲れでせう。僕が歸つて來たら、どうかゆつくりどこへでも休みにいらしつて下さい。

母　ありがたう。わたしは疲れなぞしませんよ。

（その時階下で、女中の呼ぶ聲。「御隱居さま！」）

母　え？

女中の聲　あの、ちよつと、水道の方の人がまゐりましたが。

母　さうですか。……（又石川の方へ向いて）同じ山の手でも、この邊は不便ですね。（去つて行く）

石川　（あとを見送つてから）濟みません。最後までうそをついてる僕を、どうか赦して下さい。（うなだれる）野口に對しても云ひわけがない。勘辨してくれ！（ツと障子の方へ行つて、あけて、縁側へ出て、野口の去つた方を見る。）

（瓦屋根やトタン屋根の起伏が觀客の眼に映る。空は銀灰色に薄曇つて、遠く屋上のマストの赤い旗が風に靡つてゐる。その上で、懶く鳶らしい鳥が輪を描いてゐる。その時、下の方の路で欣一と雪子の聲がする。）

お父さん！

お父さん！

石川　ああ。――遊んで來たの？

欣一　ええ。今ね、馬があばれて大騷ぎしたんですよ。

雪子　あがつてお話しませう。
欣一　さうしよう。
（ぶらぶらと格子戸のあく音がする。石川、靜かに障子をしめて、もとの座へ戻る。間もなく、雪子を先きに欣一が驅けあがつて來る。）
石川　（微笑しながら）　どうしてあばれたの？――自動車にでもおどろいた？
欣一　（横ツちりに坐りながら）　ううん、さうぢやないの。皮を積んだの。
石川　（不審さうに）　皮を？
雪子　（引き取つて）　馬の皮をどつさり積んで曳かせたんで、氣がちがツてあばれたんですツて。
石川　（惹きつけられて）　ほう。それが馬にわかつたの？
欣一　傍のどこかのをぢさんが、さう云つてましたよ。あんな事をすりやあ、馬はあばれるに定まつてるツて。
雪子　（涙ぐんで）　人間だツたらいやに定つてるのに、どうしてあんな事をさせるんでせうね。
石川　（感動して）　ほんとだね。人間て、實に亂暴をするもんだ。
欣一　馬方が、蹴られたり食ひつかれたりして、病院へかつがれて行きましたよ。
石川　さうかい。
欣一　馬方も可哀さうだね、お父さん。
石川　ああ、その人だツて、やつぱりくらして行くためにそんな事もしたけりやアいけなかつたんだらう。（憮然とする）
雪子　でも、大丈夫あの人助かりますよ。ほかの人がさう云つてました。
石川　さう？　それはよかつたね。――（獨語のやうに）死を積む死か？　われ蒼ざめたる馬を見たり、だ。
欣一　赤馬だつたんですよ、お父さん。
石川　さうかい。
雪子　（欣一に向つて）　こはかツたね。
（欣一うなづく。）
石川　（父親の愛に滿ちて）　そんな時、傍へ寄つて怪我をしないやうに、よく氣をつけなくちやいけませんよ。
欣一　（又うなづいて）　ええ。――（急に思ひついたやうに）お父さん。僕に斧を一つ買つて頂戴。
石川　斧？
欣一　僕、植木なんぞ伐りませんよ。その代り、何か要らない木を伐つて見たくツて仕方ないの。
雪子　木より手を切つてよ、欣ちやん。
石川　どうして、又そんな物を欲しくなツたの？
欣一　今日學校で、ワシントンの御話をきいたの。

石川　（笑ひ出して）ああ、櫻の木の話かい。
欣一　さう。いつかお父さんに讀んで頂いた、あの正直なワシントンの話です。
石川　（やゝ晴い顔をして）それはよかつたね。――ただ、斧はなんか御止し。ここにはワシントンの田舎の御家とちがツて、伐つていい木なんか一本も無いんだから。……この夏どこかへ行つたら――（不意に口をつぐむ）
欣一　（父親の顏を見て、殘念さうに）さう？
雪子　お父さん、ワシントンは、そんなに正直な人？
石川　（動かされて）あなたがたから見れば、正直でも何でもない人。あなたがたは、ワシントンと同じ位正直なんだから……（苦しさうな顔色になつて）いつ迄もさうでなくツちやいけませんよ。お父さん見たいなうそつきになツちやア……。
（子供達眼をみはる）
欣一　お父さんうそつき？
石川　（狼狽して）あゝ、お父さんはとてもかなはない。（何かに憑かれたやうに）お父さんの眞似なんかしちやアいけないよ。――だが、うそつきの嫌ひな事は、お父さんだつて決して負けないよ。
欣一　（頑として）うそだい。お父さんは正直です。
石川　今まではかなり正直だッたがね。……だが、どんな正直な人でも、どうかするとうそをつく事がある。一番おそろしいのは、一度うそをつくと、あとからあとから幾らでもうそをつかなけりやアいけなくなる事だよ。さう云ふ人達を見たら、あなたがたは憎むより、氣の毒だと思つてやらなくちやいけません。だが、うそをつかずに濟ませる人はほんとに幸福だ。
欣一　（無邪氣に）うその子供が出來るんだね。
石川　（微笑して）さうだよ。うそは澤山子を生むんだ。いやだね。
雪子　（父親の樣子を氣づかはしさうに眺めてゐたが）お父さん、何か心配な事でも御ありになつて？
石川　（ギクリとして、さりげなく）いいや、何にもありません。――（思ひ返したやうに）正直だの何だのッて、つまらない事を云つて惡かつたね。あなたがたには、そんな事を云ふ必要はちツともなかつたんだ。
（その時、又下の方で格子戸のあく音がする。同時に、柱時計の打つ音がボンボン……と六ッ聞えて來る。）
石川　（氣づいたやうに）おゝ、みんなは又下へ行つて御遊び。お父さんは、これから少し手紙を書いて、旅行に出かけるから。
雪子　（見あげて）旅行？
石川　ああ。

雪子　おひとりで？
石川　さうだよ。書き物やらいろんな用でね。
雪子　（氣づかはしさうに）　どの位泊つて？
石川　なアに、明後日位にや歸つて來ます。
欣一　なりたけ早く歸つてね。
石川　ああ、……何かいい物があつたら買つて來てあげようよ。
（その時、女中が顏を出す。）
女中　片山さんがいらつしやいました。
石川　どうぞ……。
（女中頭をさげて行かうとする。）
石川　（追ッかけるやうに）　お茶は要らないよ。今出かけるから。
女中　はい。（去る）
欣一　（それを見て）　姉ちやん。ぢや行かう。（雪子の手を取つて行かうとする）
雪子　（立つたままモヂモヂして）　お父さん。わたしも連れてッて下さらない？
石川　（びッくりして）　――だッて、あなたあたは學校があるぢやありませんか。
雪子　（淋しさうにおとなしく）　さう？（何か心殘りの樣子で、弟に連れられて行かうとする。襖のところで千代子に出會す）
千代子　ああ、ここにいらしッたんですか。――どうぞこれ召しあがつて。（片手のオペラバッグの中から、透きとほつた長い袋入りの、あざやかな色の取り合はせの菓子を出して渡す）
欣一　ありがたう。（一寸頭をさげて石川の方を向いて）お父さん。（見せる）
石川　よかつたね。
雪子　ありがたう。（菓子袋を見、千代子の顏や姿を見、又父親の方を見返して、心もとなささうに去る）
（見送つて、千代子改めて石川の方を向いて、立つたまま頭をさげる。彼女の服裝は、茶色の縞縮の單衣に、藤色の單衣羽織、黄味がかッた帶をしめてゐる。黒いオペラバッグには、赤い大きな花の刺繍がしてある。）
（石川、默つて禮を返す。）
千代子　（進んで、また野口の坐つてた座蒲團へ坐つて）　何て悧巧さうなかたでせう。――あのかた達から、たッた一人の、いいお父さんを奪ふんですわね。
石川　（淋しく笑つて）　どうせ、いつかは奪はれるんですから――。
千代子　こんな立派なお父さんを、と、わたし自分の親に引較べて、今迄どんなにあのかた達が羨ましかッたか知

れなかつたんですのに、……それだけ、心から申しわけない氣がしますわ。
石川　僕はやくざな父親ですが、あれ達は人一倍淋しがりやだから可哀さうです。僕がゐなくなつてからじッと堪へて行く樣子が、眼に見えます。――今でも、ほかの子供とちがッて、二人で碌に喧嘩もしない樣子を見てゐると、いぢらしくてやり切れません。
千代子　可哀さうに。……もしわたしに見てあげる事が出來たら、まアどんなにうれしいでせう。でも、そんな力は、生れ返つてでも來ない限りありません――。
石川　そんな話はよしませう。
千代子　（重ねて）先生に一緒に死んで頂くのは、ほんとに大勢の人の胸から掛け換へのない、取りかへしのつかない物を奪ふことですわね。それを思ふと、空おそろしくなりますわ。わたしと來たら、誰にも何の損にもならず、反つて此の世の中がせいせいしていい位ですのに。
石川　（戲談らしく）仲々の惡魔なんですね。
千代子　（眞面目に）ほんとにさうかも知れませんね。
石川　眞と價値を持つてゐられるだけ、餘計おそろしい惡魔でせう。
千代子　（氣づかはしさうに）先生は、わたしを憎んでらッしやいませんか？

石川　どうしてです？――死ぬ事たら、むしろよろこんでさへゐます。昔ッから、僕は死を決して恐れません。一體樂天的な、生活好きな奴ですが、今迄いろんな事で何度死なうと思つたか知れません。殊に邦子を見送つた時から、それが何か馬鹿にスウーッとした、魅力のある物に思へてならなくなりました。どんなに苦しんでも、悲しんでも、最後に一切を片づけてくれる物が待つてゐるかと思ふと、ほんとに氣安い、感謝したい氣になります。
千代子　（感動して）どうして、先生がそんな氣もちを持つてらッしやるでせう。わたしこそ、昔ッからさうでした。死ぬ事を考へられるばかりに、今まで生きて來たやうなもんですわ。先生を知らないうちは、わたしには死が此の世で一番の誘惑でした。でも、その取ッときの物が先生と一緒に獲られるなんて、ほんとに夢のやうですわ。
石川　（凝視して）その點ぢや、なるほど、僕の方がまだずッと此の世に惹かされてゐるかも知れません。生きられさへすれば、僕はまだ生きたい氣です。行きづまッても藝術の仕事もあり、傷だらけになつても、生活革命の方も仕かけです。農場のこと一つ考へても、も少し行末を見たい。――が、今となつては、もうみんなおしまひです。

千代子　ほかに、まだいろんなかたへの愛が御ありになるぢやありませんか。

石川　それはもう思ひ切つてます。そんな方面は、あんまり闘つて疲れてるせゐか、むしろ負擔に感じられます。……が、ほかに一つ心殘りがあります。

千代子　何でして？

石川　（ゆつくり）自然。——これだけに思ひ切れません。殊に、秋が未練です。もう一遍日本の秋を、秋の姿を見て死にたい。

千代子　（礼たましさうに）そんなに、先生は秋がお好き？

石川　好きですとも。——（戯談にまぎらすやうに）あなたが、せめて此の秋まで待つて下さればどんなにいいか。（惹かされたやうに、思はず立ちあがつて、障子の方へ進み、あけて所々綠の木の覗いた外景を眺める）

千代子　（じツとその後姿を眺めて）ほんとに先生は詩人ですわね。（立つて石川の傍へ寄る）

石川　札幌の農科へ入つたのも、おもな動機は自然の愛だツたんです。それがもとで、クロポトキンや社會思想へも入るやうになつたんです。

千代子　さうですか。——（急に思ひついたやうに）さう云へば、わたしゆうべウツラウツラしてゐるあひだに、とても變な夢を見ましたわ。

石川　（振り向いて）どんな？

千代子　わたし大きな汽船へ乗つてますの。そら、いつかツて會社の應接間に貼つてあつた、あのポスタアのやうな真ツ赤な汽船へ。——それが、アメリカ行きの船らしいんです。こんな船へ乗るんぢやなかツた、乗りまちがへた、と思つて、地團太踏んで口惜しがつてると、片山がニヤニヤ笑つて傍に立つてるんです、それが、どうも船長らしいんです。わたし怒つて、一言二言責めると、いつの間にかその顔が先生の顔に變つてるんです。びつくりして、先生どうなすツて？　ツて取りすがらうとすると、不思議さうな顔をなさツて、あなたはどなたです？ツて御ききになるんでせう。わたし切なくなつて、何を仰るんです、御忘れになツたんですの？　ツて泣き出すと、どこか遠くの方で、千代子さん、千代子さん、て頻りに先生の御聲が聞こえるんです。ハツと思つたら、眼がさめましたわ。

石川　（微笑して）ほう。妙な夢を見ましたね。（思ひ出したやうに）少し待つて下さい。あとになつて僕も名を呼ばないやうに、ちよツと書きかけの手紙を片づけますから。

千代子　どうぞ。

（石川、机の前へ戻つて書き初める。）

（千代子、もとの座蒲團を一寸見て坐り、バックの中から小さな懷中鏡を出して、髮を搔きあげたりする。その時、階下で蓄音機の音が始まる。曲は、ショパンのフュネラルマーチ。千代子耳を澄まし、ギヨッとした表情をする。鏡を持つたまま聞き入る。不安動搖と、惹き込まれる氣もちとの交錯。曲半ばに石川手紙を濟ませ、立つて押入れから風呂敷を出し、手紙や用箋や身荷の纏りなどを包み込む。そして一寸考へてから、立つて千代子の方を振り向いて。）

石川　お待ち遠。――ぢや出かけませうか。

千代子　（彼の顏を見つめながら立つて）先生。あの音を御聞きになつて？

石川　子供達が掛けてるんでせう。

千代子　（重ねて）レコオドが御わかりになつて？

石川　（耳を澄まして）ショパンのフュネラルマーチぢやありませんか。

千代子　（緊張して）さうです。――お母さんがたは、もうわたし達の事を御存じぢやありません？

石川　（一寸不安さうになつたが、すぐ）いや、そんな筈はありません。

（その時蓄音機の音やむ。）

千代子　先生、今日出かける事を、何て皆さんに御話になつて？

石川　原稿を書いたり、頭を休めたりして來るッて云ッたんです。初めは、いッそ何も云はずに出るつもりでしたが。

千代子　わたしの來る前、ここに（座蒲團を指して）野口さんがいらしッて？

石川　（びッくりして）どうして御わかりです？　途中で會つたんですか。

千代子　（微笑して）いいえ。――わたしさッきからそんな氣がしてなりませんでしたの？

石川　（凝視して）ほんとなら、あなたはおどろくべき敏感者ですね。

千代子　（再び微笑して）だッて、あのかたはわたしを憎んでらッしやるんですもの。わたし、この頃殊に、ひとがどう思つてるかが、自分でも不思議な位わかりますわ。そして、わたしに對して強い感情を持つてる人だッたら、その人がさッきここにゐたかゐないか位な事は、大抵見當がつきますわ。

石川　さうですか。

千代子　先生は、今までも時々さうやつて原稿を書きにいらッしやいましたわね。

石川　さうです。だから、母達はもうすつかり馴れてます。

千代子（安心して）おや大丈夫ですわね。（又不安さうに）ただお孃さんが、――でも、まだ御小さいから。

（石川、彼女の顏を凝視する。）

千代子　ほんとに、あのレコオドにはびツくりしました。どうして又、あんなの御かけになつたんでせう。

石川（打たれたやうに）やツぱり何か心の底で感じてるのかも知れません。然し、僕達には丁度ふさはしい盤ですね。

（千代子うなづく。）

石川　出かけませう。

千代子　まゐりませう。（石川の頰に唇を押しつけて、片手でシツかり、彼の手を握り襖の方へ行きかける）

（その時、正面遠景に建る旗のマストの頭に、ぽツと赤く圓い燈が點る。）

――幕――

附言

作者は、この曲を書くに、創作に當然の自由な取り扱ひと解釋を以てした。（事實と如何にちがつてゐるかこそ、むしろ作者の認めて貰ひたい點だ。）ただ、何分事實が近接してゐる。僕の戲曲的解釋に依つて、もし現實の人々に些少でも迷惑が及ぶやうな事があるなら、こんな遺憾はない。嚴正な創作的立場から、敢てこの理解を讀者にねがふ。

礫茂左衛門 （五幕六場）

第一幕 （賦役の場）

所 （現今）群馬縣利根郡、月夜野橋附近

時 延寶八年十月下旬午後（德川五代將軍綱吉治世）

人 農民大勢（中年百姓甲丙、若者乙、瘦せ衰へたる老人丁、その他。――皆疲弊せる顏色、態度、ぼろの着物、

幼兒數人

茂左衛門（三十七歲）

妻おきん

領主眞田伊賀守信利（四十六歲）

侍足輕等

商人手代

舞臺 背後に大利根の荒涼たる河原。

近傍の山より伐り出せし材木を運搬し來り、川へ流す爲め、賦役の農民等大勢働きをり。

右手寄りに茂左衛門の家の極く一部分現れをり。塗り込めたる窓の跡歷然。又戶口へは板打ちつけたり。その傍に井戶一つ。

川の彼方の田畑、山、農家など、冬枯れに加へて、多年の苛政、酷稅の爲め、荒れて見る影もなし。――川瀨の音、舞臺靜かになるたび物寂しく聞ゆ。

幕開く、農民等、如何にも疲弊せる如く暫時働きたる後。

甲　もうとてもくたびれて働けねえ。皆の衆、少うし休まうぢやアねえか。

百姓等　（異口同音に）休むべえ。休むべえ。（皆仕事を棄てる）

若者乙　あゝ咽喉が乾いた。一杯やらなくちやあ。

（井戶端へ走り寄つて、釣瓶をきしらせながら、さもうまさうにガブ〳〵口につけて飲む。四五人そのあとにつゞく。）

若者乙　（戾りながら）あゝうめえ。茂左衛門さんとこの水あ、何てうめえだか。甘露の味ッちふだ、ふんとに。

甲　うまくなくてどうする？　高え上納のかゝつた水だあ。

丙　まツたくよ。水呑み百姓ツちふが、おれ達あ、その水せえ碌々飲めねえだでなあ。

乙　井戸へ上納がかゝるなんちふ事あ、日本開闢以來聞いた事がねえ。

老農夫丁　聞いた事のねえなあ、井戸ばツかぢやアねえわ。窓だの戸口だのゝ上納なんちふ物も（古い鉈豆煙管で茂左衞門の家の窓や戸口を指しながら）よその國あ知らず、おらあ此の年になつて初耳よ。ほかの上納はともかく、おてんと樣や水へまで年貢をかけられちやあ、百姓はとても立ち行かねえ。

甲　おかげで、狐か狸の巢そツくりさ。家ん中あ暗夜見てえに、晝日中でも碌すツぽ物の形もわからねえ。その穴ん中へ出入りするにも、三尺の小戸からやツとこさだ。勝手氣まゝに窓をあけて、明るい家ん中にのんびり住んでる外の百姓衆を見たり考へたりするたんび、おらアつくづくなさけなくなる。

丙　何でもかんでも上納々々だ。山へ入りやあ上納、嫁取りをすりやあ上納、子供を生みやあ上納。……寢ても起きてもすべつてもころんでも、一時も上納のことを忘れる事ア出來ねえ。まるで上納の網だ。

丁　ふんとに、昔のやうな賑かな嫁取りあ、今アまるで夢になつちまつたなあ。おらの元氣のよかつた時分にやあ、婚禮は一生一度の式だツちゆツて、どんなえに貧乏な家でも、その晩ばかりア御馳走をこしらへて、酒を買つて、歌をうたつて、賑かに客呼びをしたもんだ。（しみじみと追懷するやうに）――そいつが此の節ぢやあ、どこでもかしこでもコソコソ、コソコソ、まるで鼠か泥棒見たやうに祝言の型ばか濟ませて、子供が生まれでもした日にやあみんな父無し兒よ。……何ちふ、また變りやあ變つた世の中だか！　それでも滿足に生まれた奴あ、まだ結構毛だらけの部さ。てきめん暮しにやあ追はれる、生まれた上納は取られる。そいつがやり切れなさに、見す見す可愛い奴を――。

乙　しツ。壁に耳あり、戸口に眼ありツちふぢやアねえか。おんだい！

丙　へツ、こいつあ大笑ひだ。壁に窓なし、戸口に板あり、の間違ひぢやあねえか。喜助。

甲　まあさう云ふな。この節あ隱密だらけだ。ふんとに、どこに誰が聞いてゐるかわからねえぞ。

丁　（頑固な調子で）聞いてゐばゐろ。おらあうそを吐いちやあゐねえ。正眞正銘の話だ。一體こんな世の中にしたなあ誰だ？　此の年になつてこんな目を見る位なら、おらあいつそくたばつた方がいゝ。勝手にふんじばるなり、水牢へ叩ツ込むなりしやあがれツ。

甲　まアおんない。さう腹を立てなさんな。五年前卯年の大飢饉のあと、つゞいて去年今年の大凶作、そこへ長えあひだの石増し御布令、みんな生きるか死ぬかのドタン場で苦しんでるところへ、御領分の名譽だか何だか知らねえが、兩國橋架け換へのこんな材木の大仕事を云ひつけて、お前見たやうな年寄りまで引ッ張り出されたくッたつてよいのうと、おれ達も考へりやあたまらねえた。
他の百姓達　さうとも、さうとも。――そいつを意見したって御家老の根津さまは御閉門、あとの御家來達あ、どいつもこいつもたアだ殿さまの御機嫌ばッか取つて、毎日毎晩遊びくらしやあがッて、此の頃ぢやあ御領へせえ祿祿取りあげちやあ下さらねえ。
丙　いくら働きたくッたつて、松の皮や鈍栗の實を食つて、其腹がなふことを聞くもんか。
甲　それもさ、使ふなら使ふで、それ相當の御手當を下されもしたが、御請負の手金三千兩、殘らずふところへ御取り込みでおれ達にやあ鐚一文下さられえたでな。
丙　さうして毎日毎晩、お酒盛やら御変狂ひ、贅澤のありッたけを盡して、金が足りねえ足りねえで、あとからあとから上納は殖えて來る一方た。いくらおれ達が殺けら同然の百姓でも、たあ、それぢやアあんまりわからたすぎるぢやあねえか。

（左手より、御用木掛り江戸町人大和屋久右衞門の手代登場。）

手代　これ〳〵、御百姓衆。さう油はかり賣つてちやあ困るぢやアないか。も少しせッせと、身を入れて働いておくんなさい。たゞでさへ山出しがおそくなつて、とても來年の御期限までにやあ江戸の河岸へ揃ひさうもないから、お役人衆に無論、私も大困りでゐるんだ。

（百姓達暫時默然。）

丙　へん、勝手なゴタクを仰いますなた。來年の御期限とかに、必ずお揃へ申すなんておれ達あ一遍も約束した覺えアねえ。
手代　そりやあ、お前さん達あ覺えはなかららうが、御殿さまから、表向きへ固い御證文を差しあげてあるんだ。御領主さまの事あお前さん達の事だらう。（得意になつて）して見りやあお前さん達の約束もおんなじだらう。
甲　江戸者の口前に出會つちやあ、とてもかなはねえ。だが御番頭さん。おれ達あ、御鐚のとほり疲れ切つてゝ、少うし休まねえ事にやあ、とてもつゞかねえだ。まあ、もう少し休ませてくんなせえ。
手代　そりやあ察しますが、外ならぬ御公儀の御用だ。もし御證文ちがひでも出來た日にやあ、御殿さまの上にもどんな事が起るか知れねえ。他八の私でさへ氣がかりで

ならねえに、お前さん達か、見張りの目さへ抜けりやあさうやつて遊んでるとこを見ると、私あ不思議で仕方ないよ。

丙　二日目にやあ殿様々々、か聞いて呆れらあ。

手代　何？

丙　いゝや、こッちのこんさ。

甲　さうガミく仰らずとも、なに、すぐ立ちあがりますよ。

手代　早く立つて下さい。――向うの仕事場でも油を賣つてるだらうから、見廻らなくッちやあ……まつたく、田舎の人達あ呑氣でやり切れない。

（手代右手へいそぎ足に退場。）

甲　いつもいつも、うるせえ番頭だなあ。

外の百姓達　まるで、馬か牛見てえにおれ達を思つてけつかる。

丙　（前の話のつゞきのやうに）窓役や、井戸役や、御祝言役や、産毛役あ無論のこッたか、第一、御竿入れをやりなほして頂かねえ事にやあ、おれ達あ近えうちに、みんな餓ゑ死にしなきやアなんねえぞ。

丁　さうだ。そいつを考へるたんび、いつも眞ッ暗になるだ。いくら繩が延びてたにしろ、新開地が増したにしろ、御領分三萬石を、いきなり十四萬五千石に御改めになるなんて、……丁度もう十九年前になる。新たに檢地御竿入れで、山の奧の石の上から、道、井戸、大畦小畦の嫌えなく、悉皆田畑に書き換へられた時あ、あんまりの事にみんなたアだぼんやりして當分なんにも手につかなかつただ。考えて見りやあ、あれから今まで何百人何千人他國へ逃げ出したか、餓ゑ死にしたかわからねえに、まアよくこれだけの衆でも生きて來られたもんだと、おらあ不思議で仕方ねえ。

乙　（次第に昂奮して）その時分から、殿さまア金が足りなかつただか？

丁　さうよ。だが一つにやあ、上田の叔父さまへ張り合ふつもりよ、お妾腹が祟つて、御先代さまがなくなると、ほれ、御領分のうち十萬七千石は叔父さまへ行ッちまつて、やッと沼田三萬五千石だけが御分け前よ。それが口惜しくて、何とかして石高を殖やして、上田の殿さまを見返してやるべえッちふ御量見と、一つには奧の放蕩のお金の御入用と、それから考えついたがあの御竿入れ一件さ。

乙　何ちふ無體な話だ。で、一足飛びに三萬石が十四萬五千石か。

丙　そればッかゝ、その時ッから、上田下田の區別も、上畠下畠の違えもすッかりなくなつて、一律一體、今のや

うた高え御上納になつちまツただ。

甲 （川の彼方を見渡して、獨語のやうに） あゝ、昔に變つた、この土地一帶の荒れかたアどうだ！

乙 さうしておいて、御上納が滯るツちゆッちやあ、大事の種物まで御取りあげ、それでも足りなけりやあ、人質を取つたり水牢へぶち込んだりなさるだな。

丁 あゝ、何の因果で、こんな目に會ふだか、おれにやあどうしてもわからねえ。

（右手より、慌しく茂左衞門登場。やゝ眼大きく、頑丈なる體格、同じく仕事着姿。）

茂左衞門 皆の衆大へんだ。殿さまが御出でた！

一同 （喫驚） えッ、茂左衞門さん。そりやあ又どうしてだ？

茂左衞門 あんまり村々が手間取るので、お奉行達は何をしてるんかッて、急に御忍びで御見廻りにおいでたさうだ。

一同 そりやあ大變だ。おやあ急いで仕事に取りかゝれ、

（皆々立ちて仕事にかゝらんとす。）

茂左衞門 いや、皆を掻けたから、もう殿さまは皆の衆が川ッ縁にゐないのを御存じだ。反つて村のッから御成りを知つてたふうにしてみんなそこへ土下座してお待ちした方がいゝ。

百姓達 （まごつきながら） おやあつくばはう。（皆土下座して、領主前手に靜かに待つ。川瀬の音。僅かな伴廻りと共に、やがて、領主伊賀守信利馬上にて登場、——驕奢、華美なる服裝、酒燒けした顔、放埒殘忍の相。悠々と不機嫌なる調子）

信利 そち達は、今まで怠けてをつたな。（百姓達沈默）

侍 御用を勤めぬに於いては、きつと御成敗あらうぞ。

茂左衞門 おそれながら、——私ども、決して御役おろそかにしてをつたわけでは御座えませぬ。殿さま御見廻りと承はり、御待ち申したので御座えます。

信利 （皮肉に呵々と笑ひながら） なかなか賢う云ひをる。予の出向きが、よう早うからわかつたな。

茂左衞門 皆々むさくるしい姿のまゝで、御容赦ねがひあげます。

信利 よしよし、それならそれでよい。おやおや百姓共、一向に仕事がはかどらんではないか。

（皆々默然。）

信利 目付、奉行の申すところに依れば、そち達更に思ふやうに動かぬと云ふ。何の面白くもないところへ、今日わざわざ遠路出向いてきたツたは、その爲めだ。もし江戸廻し御期限におくれるに於いては、予に取つても大事ぢや。たとへそち達の四足が離れるとも必ず勤めさせねばおかぬぞ。

（皆々默然。）

信利　（焦立つ如く）　わかつたか。返答致せ。

茂左衛門　おそれ入つて御座えます。この後も、力の限り致すつもりで御座えます。

信利　確と聞いたぞ。――そも／＼その達は、外村々の手本と相なつて、よく勤めねぞならぬ次第がある。そのわけは、その達も知るごとく、この月夜野は即ち予が生れ、又育つた地ぢや。初領小川城五千石を受けた由緒深い土地ぢや。その名も、山川の景色美しきにちなんで予がつけたのぢや。又、今は亡き母上孝貞院殿生涯お住ひの地ぢや。その馴染あればこそ、從來新巻町にあつた市もここに移し變へ、一切在方の小店の賣買も禁じて、市日ごと近在の者ども集り、當町繁昌致すやう特に取り計らつたのぢや。その恩を忘れて御用に背く節は、膝もとの見せしめ一段と重く當るぞ。

茂左衛門　おそれ入つて御座えます。

信利　（供侍に向つて）　さらば次の仕事場へ向へ。

（侍達會釋、列再び動かんとす。その時、茂左衛門の家（見えぬ部分）より、六七歳ばかりの子供達四人ばかり、誰にも氣づかれず列の向う側へ現る。みな質素なる着物。蒼ざめて弱々しげなる顔形。そのうちの稚き女兒一人、列の動かんとするけはひに、突然「たぢさま」と叫びながら、先きを切つて茂左衛門の方へ走り寄る。）

先手の者　これ／＼。御通り先きを切つては相ならん。

（すでに列の前手まで走り出でしを、押へてあとへ戻す。女兒恐れて、再び「たぢさま！」と呼ぶ。）

先手の者　（叱る）　何ぢや騒々しい。靜かにせい！

（女兒やむなく戻らんとす。）

信利　（馬上よりキッと眺めて）　その子供を押へよ。

（侍の一人、不審げに彼女を抑留す。）

利信　首を落せ！

（衆悉く愕然、耳を疑ふごとし。）

信利　（つゞけて）　先を切つたる不屆者、容赦なく斬つて捨てい。

（百姓達思はず立ち騒がんとす。）

前の侍　（片膝をつきながら）　おそれながらその儀は御容赦願ひ奉ります。まだ頑是も行かぬ幼兒のこと、深い仔細あつてにてはなく、全く何のわきまへもなく……。

信利　（性急な調子で）　ならん。たとへ如何に頑是ないとて、切つたは切つたぢや。予も同じく切るだけぢや。

百姓達　これは御無體な！

信利　（顔を返して）　騒がば、その達も加擔と見なすぞ。

（百姓達騒ぎざわめく。茂左衛門馬前に進み出づ。）

茂左衞門　おそれながら、子供の罪、何卒この茂左衞門に免じて御赦免のほどねがひまする。
信利　それや何ぢや。總代か。
茂左衞門　はい。——いえ、そいつめは、私の育てゝをります子供で御座えます。
信利　（不審げに）育てゝ？
茂左衞門　はい。
信利　（鋭く）僞りを申すな。
茂左衞門　（ひるまず）決して僞りでは御座りませぬ。（キッと決心したる如く）その者は、當月夜野の仙吉と申す者の子で御座えますが、貧乏のあまり、嚴しい御上納の御催促滯り、親父仙吉は水牢へ入れられて病死いたしました故、家はいよ〳〵困難と成り、つゞいて女房も饑ゑ死になをして失せました。あとへ殘つた、身寄りもなく死にかゝつた子供のあはれさに、丁度子供もない身、私ども夫婦引き取つて養つてをりますので御座えます。
（その時、家の横手に茂左衞門の女房おきん現る。子供達怖がり、いそぎ抱きつく。彼女おどろきながら膝をついていろ〳〵樣子を聞くこなし。）
信利　（面を犯しての釘に、反つていよ〳〵氣色を害したる狀で）ふゝん。それは仲々の仁者ぢやな。その如き者が領主に相なつたら、さぞよく百姓共も働くであらうに、惜しいことぢや。——して、その兩親の婚禮役は納めてあるか。
茂左衞門　いえ、まだ祝言をいたしましたわけではなく、當人同志の內緣で御座えました故……。
信利　（皮肉に）その內緣が近年は大流行(おほはやり)ぢやな。
茂左衞門　…………。
（信利又子供の方を振りむき、おきん達を認めて。）
信利　そこにをるはそちの女房か？
茂左衞門　仰せに御座えます。
信利　そこな饑鬼共も、さらばそちの養ひをる者共か。
茂左衞門　左樣に御座えます。
信利　（いよ〳〵皮肉に）さては、いよ〳〵仁者ぢやな。賞めつかはしおくぞ。——ぢやが、そちのやうな心がけの者も、もし予の如き領主となつた日はやはり左樣には致すまい。政道には、おのづから政道のみちがある。（前の侍の方を向いて嚴しく）こりやいつまでぐづ〳〵しをる？（衆又愕然）
侍　すれば、御宥免なりませぬか。
信利　ならぬ、と初めから云ひをるではないか。一人の心は萬人の心、頑是なきやうに見える小兒の心も、亦大人の心ぢや。百姓共、近來とかく不逞の氣もちが、その饑鬼に現れたのぢや。向後の見せしめに、一太刀に仕れ。……如何に百姓町人でも、大人を斬るは容易でない。が、

そのやうな、まだ生も死も知らぬ子供、まして兩親もなく身寄りもない放埒の父無し兒、これほど斬るに容易い者はない。予に取つては政道の威の爲めもあるが、又御請負も捗らず、近來とかくクサ／＼として氣が晴れぬ折り柄、使つた刀試しの一興。信利この年になつても、未だ子供斬りを見たことがない。今日の遠出の餘興、時に取つて鬱散の足し。さ、目前に斬れ。

侍（やむを得ず）承知仕りました。

（拔刀す。子供悲鳴を揚ぐ。「かゝさま、かゝさまァ!」……おぎん我を忘れて走り寄り、侍の手にすがりつく。）

おぎん　何の罪もないいたいけな者。どうぞ、どうぞ、御ゆるし下さいませ。

（侍躊躇す。）

信利　こら、早く、せぬか。

おぎん（馬上を振り仰ぎ手を合はせて）どうぞ、わたくしを母親と御見なし、お救ひ下さいませ。

信利（突然笑ひ出す）うわツはツはツはツ――いよ／＼斬るに興深し。やむにやまれぬ。よし。そち打たずば、予がぢき／＼手をくだす。

（侍決心して、おぎんを突き放し、素早く馬蔭に小兒を斬る。）

（百姓達思はず聲を揚ぐ。）

信利（しばらく侍の手もとを凝視して）うむ。よく斬つた。美事々々。賞めつかはすぞ。死骸は、茂左衛門とやらに下げ渡せ。――餘計な事に手間取つた。一同まゐれ。

（列しづ／＼と動き出す。そのあとから、幼兒の死體の上へ泣き伏してゐるおぎんの周圍へ、百姓達馳け寄る。）

百姓達　何たらむごい事だ！

まだ動いてるだやあねえか。

おかゝさまをよばさまツちやツた聲が、まだはツきりその耳へ殘つてるに。（口々に云ひ合ふ。）

（茂左衛門、呆然としたる如く行列のあとを見送る。やがて齒噛み。深く決心したる狀。）

―― 幕 ――

第二幕（大峰山會合の場）

時　前幕より數日後の、十一月末日夜

所　月夜野町後方、大峰山我妻谷權現社前

人

左衛門さんばかりか、おれ達一統のはらわたを引きちぎつてお了えだ。もうかうなツちやあ、殿さまの眼の黒いあひだア、おれ達の浮ぶ瀬は夢さらあるめえ。皆の衆、そいつあ肝へしみ込んでゐらな？

皆々　ゐるとも、ゐるとも。

加右衛門　そこでどうする？　このまんま泣き寝入りに、今までどほり眼をつぶツてるか？　それとも、思ひ切つて覺悟を定めるか？　總代衆！　二つに一つ、腹藏のねえとこをめい／＼ブチまけてくれ。

七郎左衛門　（言下に）　おらアとツくに覺悟してる。もうおれ達あ、我慢に我慢をし拔いた。たとへ神さまでも佛さまでも、これ以上の我慢は出來ツこあるめえ。

多くの者　さうとも。

七郎左衛門　同じ苦しむにも苦しみ甲斐がありやアだが、いくら苦しんだつて、誰にも何の足しにもならねえ。このまんま行きやあ、みんな犬苦しみの犬死にだ。何かしても死に、しなんでもどうせ死ぬ。この上又、なしくづしにむごい死にざまなんぞ見てゐられるか？　かうなりやあ、早く覺悟を定めるだけ得だぞ。

二三人　さうだ、さうだ。

（その時、見張りの市右衛門屹と下の方を窺ひながら、聲を忍ばせて叫ぶ。「山？」　姿は見えず茂左衛門の聲。

「川！」

市右衛門　（衆に報告す）　來た／＼。茂左衛門さんがやツと來た！

皆の者　さうか。

茂左衛門　（登場。市右衛門に挨拶す）　おくれて申しわけねえ。

市右衛門　御苦勞さま。――みんな、さいぜんから待つてる。

茂左衛門　（焚火の方へ近づき）　どうもえれえ晩くなつて、濟まねえ。

傳左衛門　兄貴のこんた、誰一人疑やあしねえが、何か身の上に起りでもしなかつたかと、おらあさツきから心配してゐたとこだ。

茂左衛門　いや、飛んだ心配をかけたな。（合羽をぬいで、傳左衛門の傍へ焚火の仲間に加はる）

加右衛門　七郎左衛門さん、そこで、お前の覺悟ツちふは？

七郎左衛門　一揆さ。强訴よ。沼田領百七十七箇村の百姓衆が、一緒になつて騷動を起すだ。今御領内に、云はゞおこりきつた炭のやうなもんだ。一ツ滴、油をかけせえすりやあ、男でも女でも殘らず燃え立つたあ目に見えてる。

新左衛門　お前の云ふとほりだ。だが、さうやつて事を擧

げた揚句、おれ達が幸福(しやはせ)になれるもんかどうかハッキリわかつてゐるか。

七郎左衛門　（昂奮して）わからねえ。そんな事あ、神さまでもわかるめえ。向うは本式の人殺し道具を持つた、代々玄人の人殺しだ。それに引ッ較べて、こッちやあいくら人數あ多くッたッて、みんな間に合はせの、おまけに御上納のお蔭でヒョロヒョロの人間はッかだ。もしかしたら、おれ達アみんな、犬見てえに叩ッ殺されるかも知れねえ。だけどそれがなんだ？　どうせ死ぬと定つてるもんなら、憎い代官や侍の奴等を、たとへ一人でも二人でもぶち殺して死ねりやあ本望だ。もし又手筈せえうまく組んだら、たとへ一時(いつとき)でも一日(いちんち)でも沼田の城をふんだくッて、憎みかさなる鬼殿さまの首をチヨン切る事たッて、萬に一つ出來ねえとも限るめえ。さうしたら、おれ達も七度死んだッて眼をつぶれるぞ。

新左衛門　お前の氣もちア、よくわかる。いくら百姓たッて、さう馬鹿にしたもんか。それに、こッちあ多勢だ。みんなふんとにおたまつたら、なに一度や二度侍や役人達を追ッ拂ふ位え、手間暇あ要るもんか。だが、それぢやあ自暴(やけ)くそだ。今迄、とにかくどんねえに苦しめられながらも、おれ達あ眞ッ直にくらして來た。そいつを、こんな亂暴を働いた日にやあ、今日まで十九年忍んだ苦勞が、一ぺんに水の泡になッちまふぢやあねえか。

七郎左衛門　水の泡あ、とッくにわかつてる。おれ達あ、今まで泡ばか食つて來たぞ。こゝらへ泡アやつて、おたまり小法師があるもんか。

新左衛門　まアさう氣を立つちやアいけねえ。よく落ちついて考(かんが)へなくちやあ。——どうせおれ達あ弱え百姓だ。一日(いちんち)お城を乘つ取つたつて、お城なんぞ何の足しにもならねえ。それより事を荒立てずに幸福になれるなら、それに越した事あねえ。無暗に自棄(やけ)ッぱらになつて、いゝ口實をつくつてやつて、おまけにみんな死ぬなんて馬鹿な眞似あ眞ッぴらだ。

三郎左衛門　おれも新左衛門さんと同じ考へだ。

七郎左衛門　（猛り立つて）どうせみんな死なずにやアゐられねえは、わかり切つてるぢやアねえか。さてはおぬし達、今んなつて臆したな。

三郎左衛門　云ふな七郎、空太鼓を叩く奴こそ卑怯者だぞ。

七郎左衛門　なに、空太鼓？

（いきなり突ッ立ちあがる。新左衛門三郎左衛門も立ちあがる。）

さあ何いこッた！
仲間喧嘩なんぞしてどうなる？
騒いで、もし聞きつけられたらどうする？

（外の連中、口々に云ひながら二人を取り靜める。そのあひだ、茂左衞門ひとり立ちもせず、寂然たり。）

加右衞門　相談は相談だ。みんな腹藏なく云ひもし、聞きもしねえぢやあ、折角集まつた甲斐がねえ――今度あ、そんなら新左衞門さん達の意見を聞かうぢやねえか。お前はぢやあ今までどほりやつて行かうッちふ考えか。

新左衞門　さうだ。忍びついでに、もう少し忍んだらと思ふだ。

七郎左衞門　腰拔けぢゝい？

（皆再び彼を制す。）

新左衞門　まあ、ぢゝいの云ふ事も、落ちついてきいて見ろ。……おりやあ、決して當てもねえ辛抱を勸めるわけぢやあねえ。おれの考えぢやあ、もう少し――せい／＼來年一杯せえ辛抱しりやあ、きつと自由な身體になれると思ふだ。

皆々　そりやあ何故だ？（詰め寄る）

新左衞門　（確信に滿ちた調子で）と云ふなあ外ぢやあねえ。いくら嚴重に追つ立てやうが、人間の力にやあ限りがあるだ。加右衞門さんの云ふとほり、もうおれ達あこゝがテッペンだ。見ろ、みんなも知るとほり、どんなに殿さまや役人衆がヤキモキしても、根切りにした材木ア、ちッとも里へ出ねえぢやあねえか。此の分で行つたら、來年八月の御期限までに、御證文とほり悉皆江戸の河岸へ揃ふもんか揃はれえもんか、わかりすぎてるぢやあねえか。もと／＼、おれ達を考えてのうへの御引き受けぢやあねえ。殿さま御亂行のあまり、重い御上納でもまだ足りなくて、慾にからんでの勝手な御請負だ。今日の事あ、初めッからわかりすぎるほどわかつてただ。お蔭でおれ達あ飛んでもねえ目に會つたが、一方殿さまや追從の役人つらの事を考えりやあ、こんなザマのいゝ事あねえ、天罰てきめん、いよ／＼自分の慾で亡びる時が來ただ。もし御證文の半分も出來なかつた曉にやあ、一てい殿さま達あどうなる？

三四人　無論御公儀から御仕置きだ。

新左衞門　そこで、皆の衆、きつと御仕置きになるぞ。それも、おれの考えぢやあ、お膝もと御江戸の大仕事、ただの御叱りぢやあ濟むめえ。御隱居か御改易か、惡くすりまちがやあ御領地御取りあげだ。それまでにやあ、きッと御亂行も御非道も公儀へわかるにちげえねえ。――な、皆の衆。さうなつたら、おれ達あ何もせずと望みが遂げられるぢやあねえか。

三四人　うーむ。

新左衞門　いくら神や佛がなくも、さう／＼おてんと様が見殺しになさらうか。殿さまも、いよ／＼長えあひだの

御年貢の納め時が近づいただ。た、皆の衆、もう少しの辛抱だ。今事を荒立てでもしたら、そいつをいゝ口實に、殿さま達あ公儀へのいひわけもマケ／＼と立ち、おれ達の生き死にの苦しみあ、この後またどれだけつゞくかわからねえぞ。

三郎左衛門　さすがあ龜のかふより年のかう。よく云つてくれた。新左衛門さん！　よく云つてくんなすつた。おらあ、たゞあ頭あ下げる。

（坐りなほして首を垂れる。）

十兵衛　なるほど、新左衛門さんの云ふことあ、たしかに一理だ。御請負が不首尾になつた時にやあ、御領地返上にならねえとも限らねえ。よしんば御改易でも、おれ達に取つちやあ萬々歳だ。だが新左衛門さん。それまでの辛抱がおれ達に出來べえか？

長三郎　そいつだ。今でさえ此の狼藉だ。御約束が危ねえとなつたら、役人達あこれからどんな事をするかわからねえ。今迄あ、何てッても餐澤のうへの滯りだ。が、自分等一統の首が危ねえとなつたら、それこそ死物狂ひをおッ始めやあしねえか。

十兵衛　おれもさう思ふ。長三郎さんの云ふ事あ、思つてもゾッとする。……新左衛門さんの云ふとほり、きッと請負は間に合ふめえ。たとへもッともッと、御公儀に泣きついて日限を延ばして見たところで、どうせ追ッつく心配(しんぺえ)はあるめえ。よし又いざとなつたら、おれ達みんな心を合はせて働かなけりやあ、殿さま達あ手も足も出めえ。どつち道、殿さま達の運は遠かあねえ。だが、その時にやあ、おれ達も一緒に駄目になつちまッちやあゐねえか。

七郎左衛門　さうとも。それ迄にやあ、おれ達あもうみんな駄目だ。今だつて駄目になりかゝッてるわ。おれ達が駄目になりやあ、殿さまだつて駄目あ知れ切つてる。だが、そんな共倒れなんぞ、殿さまとの情死(しんぢゆう)なんぞ、考えただけでも胸くそが惡いわッ。

新左衛門　（皆へ向つて）ぢやあ、みんなは七郎の云ふとほり、自棄(やけ)くそをやるつもりか。

加右衛門　ともかく、これで兩方の云ひ分は濟んだ。そのほかに考えのある人アゐねえか。

長三郎　おれに一言云はせてくれ。

加右衛門　長三郎さんか。さあ云つてくれ。

長三郎　おれあ、やつぱり一揆論だ。だが、七郎左衛門の考えたあ少うしちがふ。と云ふなあ外ぢやあねえ。おらあ自棄くそに一揆を起すつもりやあねえ。おれ達の望みを遂げるに、やつぱりそいつが一番よかあねえかと思ふからだ。いゝや、今となッちやあ、もうそれより外やり

やうはなかんべえと考えるからだ。……そいつをするにやあ、出來るだけ考えてしなきやアなんねえ。無論内密にだが、まづ十分村々の手くばりをつけて置いて、時刻を合圖に不意打ちに起つて、一方村々の役人をやッつけ、一方沼田の城へ押し寄せるだ。その時あみんな總代衆の指圖に從つて、どこまでも規律正しく、手足の動くやうに働かねえぢやあ駄目だ。さうやつて、あはよくば御城をふんだくり、出來ねえまでもおッ取り卷いて、おれ達の土から生えた地力を、諸國諸大名へまで見せつけてやれ。一方からあ、御公儀や隣り御領分の殿さまへ願ひ書を出して、おれ達のやむを得ねえわけを訴へる。さうすりやあ、もう何とも御公儀でも棄て置けめえ。百姓は國のもとゝまで御布令の渡つてる手前、まさかおれ達をみなごろしにもなさるめえ。どうだ、さう思はねえか。

何人もの喚聲　さうだ、さうだ。

長三郎　だがこいつあ、假りに諸事うまく行くと定めた場合だ。無論その時だつて、主立つたおれ達あ打ち首や磔は覺悟してゐなきやあならねえが、もし失敗つた曉にやあ、それこそどんな目に會ふかわかんねえ。だが、もうさうなつたらおてんと樣任せだ。よしどんなに惡いドンジリになつたところで、さッき七郎の云つたとほりだ。七郎の考えに從つたと思やあ、それまでの話だ。

何人もの聲　さうだ、さうだ。
さうきめろ！
死なば一緒だ！　（等の叫び聲）

加右衞門　今の長三郎さんの考えにちがつた人はゐねえか？

聲　誰かゐるか？

七郎左衞門　おれも贊成する。

（少時沈默。）

加右衞門　新左衞門さん、どうだ？　お前はやッぱり時機を待つはうか。

新左衞門　（思案の後）いや、なるほど、もう此の後待つわけにやあ行かねえかも知れねえ。いさぎよく、おれも長三郎さんに同意する。

加右衞門　三郎左衞門さんはどうだ？

三郎左衞門　新左衞門さんがさうなら、おれも承知する。

七郎左衞門　（歡喜して）おゝ、よく云つてくれた。お前達の氣もちも知らずに、ついさッきやあ云ひすぎて、勘辨してくれ。

三郎左衞門　いゝや、おれも年甲斐もなく濟まなかつた。惡く思はずにな。

十兵衞　何て綺麗だ！　氣もちがいゝ！　それでこそ仲間だ。

加右衛門　釣り合ふも、みんな正直な、心からだ。——おやあ、誰も異存のある人はねえな？

皆々　無え！

加右衛門　（やゝ離れて見張りせる市右衛門に）市右衛門さん、お前はどうだ？　お前は聞いてたか？

市右衛門　うん、ところどころ聞いた。おれも異存はねえ。……おやあ、お前達の定めた事なら、どんな事でも一緒になるつもりだツた。判るツから。（又見張りに去る）

加右衛門　相變らず氣持のいゝ人だな。——おやあ、紙と筆も用意して來てある。お前達に何の間違ひッこもあるめえが、願ひ書から盟えを固める爲めやら、一つ連判状をつくつておかうぢやねえか？

皆（口々に）それがいゝ。それがいゝ。

加右衛門　そんならすぐつくらう。

（支度を始む。）

五三郎（感慨するやうに）丁度社前で、盟ひにやあ持つて來いた……だがこの權現さまは、殿さまのお母さま孝貞院さま御勧請の社だ。それも、伊賀守さまが小川城五千石の部屋住みの時分、お褒賞だけ、どうかあと／＼沼田の御世継になれるやうにと、一心凝つて御信心のあげく、初まつてつくつた御社だ。その前で連判するたあ、ちと、まあ面白い因縁だな。

外の者　全くだ。

（その時、今まで默然としてゐた茂左衛門、突然口を切る。）

茂左衛門　ちよツと、加右衛門さん。皆の衆。待つてくれ！

（皆不審さうに彼に視線を集む。）

茂左衛門　それえ濟まねえが、その一揆の考えは思ひとまつて貰えてえ。

一同（愕然）なに、何だと？

茂左衛門　その代り、おれの覺悟を容れて貰えてえ。

（皆々騒ぐ。）

加右衛門　これ茂左衛門さん。そんなら、なぜさツき訊いた時云つてくれなかつただ？　折角みんなの氣もちがまとまつたところへ、ちがつた事を云ひ出して事をぶツこはしてくれちやあ、困るぢやあねえか。

皆々　さうとも、さうとも。おれ達を賣るつもりか。

傳左衛門（義兄の態度に心配に堪へず）おい兄貴。お前さツきから一言も云はずにゐて、どうも様子が變だと氣がかりでならなかつたが、今夜あどうかしてるぢやあしねえか。

茂左衛門　いや、傳左衛門さん。心配してくれるな。實あお前にやあ、一ぺん會つてよう話しておかなくちやあ

いけなかつただが……。（加右衛門の方を向いて）加右衛門さん。どうも申しわけねえ。今夜あ少し支度が手間取れて、來た時あもう皆の衆の相談最中。口を出すのも遠慮し、それに總代衆の御考えも聞いておきたかつたから、今まで默つてただ。何の、おれに、ぶッこはす氣なんずあつて堪るもんか。今夜かうやつて集まつて下すつたも、無論長年の苦しみの爲めたあ云へ、せんだつておれんとこの子供が叩ッ斬られたあの事件に、皆の衆が同情して下すつた、そいつが口火だ。さッきからの御總代衆の言葉をきいて、おらア、あの子の爲めにも、ありがた涙にくれてたとこだ。（一同に向つて）今の取り定めに、おらあ決して異存はねえ。だが皆の衆、そのやり方あ、云はば最後のスケだ。その前に、一つおれの意見をとほさせてくんねえか。と云つても、お前達にやあ爪の垢ほども迷惑はかけねえつもりだ。おれにやらせて見て、それでいよ〳〵駄目となつた日にやあ、どうか取り定めどほりやつてくれ。

一同　一てえ何をしよッちふだ？

茂左衛門　直訴させてくれ。

皆　（口々に）直訴？

加右衛門　そりやあ駄目だ、茂左衛門さん。そんな事をしたところで、おれの二の舞ひになるだけの事あ、わかり切つてゐるぢやあねえか。

茂左衛門　いや、おれあ殿さまへしようたあ思はねえ。江戸へ行つて、ぢき〳〵將軍家か御老中へ訴へ出る量見だ。

（皆々聲を揚ぐ。）

加右衛門　おやあお前、二三十年前の佐倉の衆の手本をやらうッちふ氣か。

茂左衛門　うん。あんな具合になるかどうかはわかんねえ。柳の下にいつも鰌はゐねえ。だが、公儀御手もとへ訴狀がお屆きさせえしたら、大勢の生命を棄てずとも、きつと事まるにちげえねえだ。

傳左衛門　兄貴、お前ひとりでそいつをやる氣か。

茂左衛門　さうだ。

長三郎　そいつあいけねえ。なるほどその考えは一法だ。が、佐倉ん時だッて、何人も一緒に行つてるぢやあねえか。そんなヤマ仕事が、ひとりでとても出來ッこねえ。

大勢　ぢやあ、おれ達みんなでやる事にしべえ。

茂左衛門　滅相な事を云ひなさんな。御志あ有難えが、この節の見張りの嚴しさぢやあ、おれ一人でも、うまく御領分を脱け出るかどうかわからねえ。まして皆の衆どこか、三人と揃つて出かけて見なせえ、忽ち露顯はきまつてるぢやアねえか。——それに、お前達あ大事の身體だ。萬一おれが仕損じた曉にやあ、百七十七箇村の先きへ立

つて事を計る大事な總代衆だ。おらあ一人でも無駄にしたくねえ。

傳左衛門　兄貴、何の力にもなられえか知らねえが、同じ妹を貰え合つてる仲だ。ぢやあおれだけ連れてツてくれ。

茂左衛門　いけねえ、ほか衆をおことわりしてゐるのに、どうしてお前だけ連れて行かれるか。それに、二人になりやあ倍危ねえ。

傳左衛門　さう云はずと、後生だ……。

茂左衛門　(醉色をはげまして)きかねえツてツたらきかねえおれの氣性を知らねえか。

傳左衛門　(ひるんで)うむ……——ぢやあ、兄貴あ何てツて出るつもりだ？

茂左衛門　お伊勢詣りだと云つて、明後日と云はず明日朝日の出前すぐ出かける氣だ。

傳左衛門　かかあは知つてゐるか？

茂左衛門　あれだけにゃあ打ち明けておいた。けなげにも、何とも云はず、よろこんで留守をしてくれるツちふ返事だ。

傳左衛門　(よろこんで)妹なら、きツとさう云ふにちげえねえ。

加右衛門　さうまで事情をきめてゐるなら……(一同へ向つて)皆の衆、おやあ茂左衛門さんの志をうけるか？

一同　折角だ。ぢやあひとまづ茂左衛門さんに任さう。

茂左衛門　(歎喜して)ありがてえ。この志あ一生忘れねえ。

長三郎、新左衛門等　何の、おれ達こそ、お前の心にやあいくら御禮しても足りねえ。

外の者達　百七十七箇村の者に代つて御禮を云ふ。

茂左衛門　勿體ねえ、飛んでもねえ。——その一言だけで、おらあいつ死んでも大往生だ。

加右衛門　ぢやあ茂左衛門さん、改めて御頼み申す。お前のこんだ、手ぬかりもあるめえが、どうか首尾よく本望を達してくれるやうに、おれ達も蔭で一心に祈るべえ。

茂左衛門　ありがてえ。

十兵衛　だが茂左衛門さん。これから江戸へ出て、又どれだけ暇と手數がかゝるかもわからねえ。そのあひだの路用は、お前に代つておれ達みんなで出すべえ。

皆々　そりやあ無論のこツた。明日のうちに、みんなで金集めべえ。

茂左衛門　いゝや、御志はありがてえが、明日の晩て云やあ急なこツた。暇も足りず、又そんな目立つ事をした日にやどうして大事がばれねえとも限らねえ。おれにやあ又おれだけの考えがある。たとへ乞食をしても……。

傳左衛門　(聞く)兄貴、皆の衆。そいつあおれに任せて

くれ。おれと兄貴の手で、何とでも心配する。

加右衛門　さうか。――そいつあ濟まねえなあ。その代り、お前達の家の事あ、おれ達みんなでキッと不自由ねえやうに氣をつけるから、留守あ安心して行つてくれ。

茂左衛門　重ね〴〵ありがてえ。ぢやあ、家のはうは、何分お頼み申す。

一同　濟まねえなあ、ふんとに。

加右衛門　（思ひつきたる如く）あゝ、さツきの連判狀は、あと〳〵の爲めもある。やつぱつくツておかうぢやあねえか？

一同　さうだ。それがいゝ。

新左衛門　それにやあ、此の年寄りに考えがあるで。みんな一心同體の仲だ。萬一血判狀が見付けられでもした時あ、誰彼の差別なく一緒に生命を棄てるやうに、普通順繰りの書きかたでなく、頭を中へ揃へて、眞ん圓く、みんな日の出のやうに書いちやあどうだ。

加右衛門　そいつあ思ひつきだ。

皆々　面白え、面白え。
日の出の形たあ緣起がいゝ。
まはりへ赤え血判を捺しやあ、似合ふぞ。

加右衛門　ぢやアさうしべえ。

（再び連判狀の用意をする。）

（星影動き、霜の降りるけはひ。木立の中で、陰森たるふくろふの聲。）

――幕――

第三幕

第一場（駕籠訴の場）

時
同年十二月八日　朝

所
江戸　酒井家上屋敷より大手御門までの中程

人
茂左衛門
從者　源八郎（三十歳位）
大老（下馬將軍）酒井雅樂頭行列

舞臺　千代田城の石垣、松、濠等。
（但し、やむを得ざる場合は自由に裝置するも可）

刻限、朝四ツ。開幕のおよそ前より、御矢倉の出仕太鼓、氣ぜはしく頻りに鳴りつゞけて、大老の登城を知らせなり。やがて行列の御先供、鐵砲右手より現る。劍酢漿の定紋打つたる御先箱。次いで二本道具、鞘黒たゝき、朱の千段巻の槍。次いで袖折傘、薙刀等。

高覽立の徒士足輕等、櫓太鼓に合はすごとく、刻み足に進行。

花道に現れたる茂左衛門と源八郎。——源八郎は竿竹を持つ。茂左衛門、懐にかくしたる訴狀、奉書の上包みに「上」と筆太に記したるを取り出し、竹を受け取つて挾む。二人緊張したる諜し合せ。

やがて雅樂頭の美々しき駕籠現はるゝや、履物脫ぎ棄てるより早く、飛鳥のごとく茂左衛門飛び出づ。して「御訴へ！」と高く呼ばはりつゝ、竹を突き出し、列に逆に沿うて駕籠傍に跪かんとす。駕籠傍侍たゞちに引き捕ゆ。列も駕籠も瞬時ためらふ。が、駕籠うちより何の聲もかゝらざる爲め、再び動き出す。茂左衛門、取り押へられたるを振りもぎり、死物狂ひに「御訴へ」「御訴へ」と連呼しつゝ、あとを追はんとす。侍再び嚴重に押へつけて放さず。駕籠、その間に左手へ通り過ぐ。

茂左衛門　（歎願す）どうぞ、御なさけを以てお放し下せえ。

侍　たはけ、御登城先きの狼藉者め。（徒士の者を呼ぶ）こら。

（徒士走り寄つて、たゞちに繩をかけんとす。）

（その時、さツきから花道の方に緊張し切つてゐたる源八郎、跳り出して其の手にすがる。）

源八郎　どうぞ、——しばらく御待ち下せえまし。

徒士　（罵る）邪魔立てするか？

源八郎　いえ／＼。決して左樣なわけでは御座りません。これなる者は私の兄奴で、近ごろ公事に負けたのを苦に病んで、氣がふれました者に御座ります。（一心こもツて、やゝ途切れ途切れに）それ以來始終見張りをいたしてをりましたに、今朝早々家の者の隙を見て飛び出し、このやうな大それた眞似をいたしました儀、どうぞ、お許し下さいまし。

徒士　氣ちがひでも何でも、罪は罪だ。

源八郎　（前の侍へ向つて）このやうに眼の色も變つてをります者、どうぞ格別の御憐憫を……。

侍　（樣子を熟視して）まさしくそちの兄か。

源八郎　左樣に御座ります。

侍　きちがひに相違ないか。

源八郎　相違御座りません。

侍　僞りを申すと、その方とも差しゆるさぬぞ。

源八郎　毛頭僞りは申しあげません。

侍　さうか。——容易ならぬ罪なれど、さらばその方に免じて許しつかはす。

源八郎　（歡喜して）ありがたい御情、生々代々お忘れ申

しません。

侍 （徒士の者へ向つて） これ、縛るには及ばぬ。下げ渡せ。

徒士 （不精々々に） かしこまりました。

（茂左衛門を放す。）

侍 （徒士へ向つて） いそげ！

（二人、列におくれじと驅け去る。）

（茂左衛門、思はずあとを追はんとす。源八郎抱き留む。）

源八郎 ま。お待ちなせえまし。

茂左衛門 （口惜涙にくれて） 殘念だ！ しくじッたか。

源八郎 なんの、旦那のやりそこねえぢやあ決してありません。あれだけ御つてお取りあげにならねえは、雅樂頭さまにそのお心がないからのこと。（歯噛みをして） 此の前の仙臺さま騷動の時と云ひ、親ぶりは並びなくも、酒井さまはやツぱり駄目だツ。

茂左衛門 （あと見送つて） もう茶の御小紋も見えなくなつた。

（太鼓の音、むなしく濠の水、石垣にひゞきつゝ、鳴りつゞく。）

源八郎 だが旦那、力を落しちやあ駄目です。一度いけなかつたら、二度でも三度でも、あくまでやりとほす御決心だツたぢやアありませんか。

茂左衛門 それはさうだが――。

源八郎 その爲めにやあ、まあ何ていゝ按配でしたか。もしあれが意地の悪い侍だッたら、旦那あ御番所預けア當り前のこと。そいつを、何のお咎めもなく許して貰へたたあきツと大願成就の徴です。

（云ひながら、投げ出された侍から訴狀を拔いて茂左衛門に渡す。茂左衛門懷へしまひながら、思ひ返して。）

茂左衛門 源八郎さん。いや、お前さんの機轉のお蔭で、危ねえとこを助けて貰えました。沼田の百姓衆一同に代つて、おらアあつく御禮を云ひます。

（太鼓やむ。）

源八郎 旦那、勿體ねえ事を――それどこか、昔月夜野を通りかゝッて娘ッこに馬鹿な眞似をして、もう少しで、皆の衆からブチ殺されやうとした時、旦那に助けて頂いたりやこそ、今日までかうして生きてこられたわッしの身體だ。高崎の宿屋で思ひがけなくお目にかゝッて、無理矢理お伴が叶つたのを、どんなにうれしく思つてるか知れません。

茂左衛門 いや、まツたく不思議な縁だ。お前さんのやうな義理がてえ、しツかりしたたのもしい相談相手が見つかツたも、おてんとさまの志かも知れねえ。

源八郎　その御言葉を聞いちやあ、源八郎、今死ぬとも惜しかあねえ。だが旦那、仕事あこれからです、

茂左衛門　お前さんは江戸生れ、おまけに昔あ二本さした人だけあつて、ふんとにどんたに力になるかわからねえ。

源八郎　わッしだッて、御領分の様子アようく知つてる。江戸ッ子の顔にかけて、兩國橋を人の涙でなんぞ、死んだッて架けさすもんか。

茂左衛門　ありがてえ。

源八郎　太鼓もやみましたな。

（二人立ちながら左手の方を望む。）

第二場（文箱ひらきの場）

（前場から廻り舞臺又は暗轉にて）

時

同年十二月下旬

所

上野輪王寺、法親王御室

人

法親王

坊官古田治部卿　人よき、やゝ老いたる人物

野澤宮内卿

御家司伴因幡守

諸太夫小杉但馬守

御傍少僧

（幕あくと、法親王法衣姿にて、右手にひとり端坐書見。やがて御傍少僧襖をあけて登場。）

少僧　おそれながら申しあげます。唯今、何か至急御耳に達したいことが御座りますさうで、古田様、野澤様、御家司諸太夫皆々様、御機嫌伺うてまゐれとの御言葉に御座います。

親王　なに一同が？

少僧　はい。

親王　大事であらう。早速まゐるやう。

少僧　かしこまりました。（退出す）

（法親王靜かに古き書物を閉ぢ、御待ちの様子。やがて、文箱の包みを携へたる古田治部卿を先頭に、野澤、伴、小杉等登場。親王よりやゝ離れたるところに平伏。）

古田　突然伺候つかまつりまして、恐縮に存じます。

親王　差し支へない。——何の用ぢや？

古田　おそれ入ります。實は、少々容易ならざる事件出來いたしましたので——。

親王　（悠揚たる態度にて）うむ。

吉田　何者か、このほど勿體なくも當宮家御文箱を僞造のうへ、使用しました事がわかりました爲め、とりあへず御指圖のほど蒙りたく、參上つかまつりました。

親王　なに、文箱を僞造したとな？

吉田　御意に御座います。

親王　それは珍しい事ぢや。して次第は？

吉田　さればに御座います。去る二十日のこと、中仙道第一宿板橋の鶴屋と申します茶店に、年の頃二十才の侍と、三十恰好の、當御山鎚山印を染め拔きました法被着用の仲間と二人立ち寄り、これなる（傍の包みを指し）大事な品を、夕がた戻るまで預つてくれ、と申して立ち去つたよしに御座います。が、いつまで待つても取りにまゐりませぬので、二十二日不審に思ひ解いて見ますると、おそれ多くも當家御金紋入り、梨地三寸に九寸の、文箱のおごそかなる組打紐の結び目へ、宮と記しました奉書の撚り紙を縛りつけましたものが現れました爲め、亭主とも仰天いたし、親族同道、早速持參いたして御座います。で、この（傍の但馬守を指して）但馬守相しらべましたところ、とんでもなき僞作、又僞侍と相わかりました故、町奉行渡邊大隅守どのへ探索かた依頼いたしました。大隅守どのいろ〳〵探りくれましたところでは、その僞御家司僞仲間の面つき年恰好、その數日まへ大老酒井雅樂頭どの登城のをりから、駕籠訴いたしました氣ちがひとやらに、符節を合はせてをりますさうで、早速四方八方に人相書をくばり、きびしく召捕の手配いたしくれました。なほしらべますと、當家御法被も、僞りを申して、御出入りでもない紺屋に染めさせました樣子、それを持込んで、日本橋通り二丁目、大和屋と申す塗師屋にまゐり、當御山新たに御用仰せつけられるにつき、見本として差し出すやう申しましただけに御座います。まことに、何から何まで尋常ならぬ手くばり、何の爲めやら存じませぬが、かくも大膽不敵なる詐欺は、御山初まつて以來のことに御座います。

親王　うむ。

吉田　かやうな忌はしき義を御耳に達しますこと、まことに恐縮に堪へませぬ。――これなる文箱につきましても、開封いたすべきや否や、私どもいろ〳〵と談合いたしました。まがひもなき僞物故、開封差しつかへなしと申します者。とにもかくにも御文箱のなかみ、もしもかしこき物の筒に畏れ多し、と申します者。又不淨の品御遠慮申しあぐるが至當と申します者。さま〴〵議論わかれましたが、とにかく封のまゝ御前に持參し事情言上のうへ御指圖をお待ち申しあげようと決いたしまして、今日かく打ちつれて伺候つかまつツた次第に御座います。

親王　（御思案の様子で）左様か。その文箱これへ。

古田　はッ。

（治部卿自らみなひらき、金紋梨地の蒔絵の小箱を取り出して、膝行して法親王に致す。）

（親王、つくぐ文箱を見、撚り紙を解き蓋を拂つて、中より一通の奉書を取りだし、しばらく默讀さる。やがて思はず歎聲。）

親王　あゝ左様であつたか。

（坊官諸大夫達、みな凝視しておどろかされし體。）

親王　（一同へ、もとの笑顔にかへりみ）決して、僞箱でも僞文でもない。これは、予が仔細あつて特別につくらせ、又書いたものぢや。心配しないでくりやれ。

古田　何と仰せられます？　僞物でないと……？

親王　さうぢや。そのわけはしばらく云へぬ。おまへ達、なぜ町奉行へ頼んだり詮索したりする前、一言その旨を申してくれなかつた？　勝手な計らひをしては困るではないか。

古田　（不審に堪へぬげに）はッ、おそれ入つて御座います。

親王　これはたしかに予の物。無用な詮議立て致さぬよう、早速町奉行へ差止め方を傳へてくりやれ。又仔細あッて、この事は今まで内密にしたい。そなた達は云ふに及ばず、町奉行、召捕かた、又その茶店の主人とやら申す者達にいたるまで、今までは詮なし、爾後かたく口止め頼み入る。

古田等一同　はッ。

親王　大儀ぢややツた。皆さがツてくりやれ。——が、治部卿。御身だけには、別事少々話したいことがある。今しばらく殘つてくれよ。

一同　はゝッ。

古田を殘し一同　では御免蒙ります。（退出）

（親王少僧を呼ぶ。少僧現る。）

親王　少々内密の話がある故、近くの人拂ひをし、そちもさがツてくりやれ。

少僧　かしこまりました。（退出）

親王　治部卿。[illegible]、近う寄つてくりやれ。

古田　はッ、——御免蒙ります。（膝行して近づきて坐す）

親王　この書面、讀んで見やれ。（奉書を取つて渡す）

古田　はッ。（押しいたゞいて、さてひろげ、吃驚して思はず音讀しかける）「乍恐以書付奉申上候事……」

親王　これ、聲が高いでないか。

古田　はッ、……恐れ入ります。

（あと默讀して終る。親王、そのあひだじッと治部卿の樣子を見、やがて嫣然として。）

親王　どうぢや。なか〳〵予は戀文の上手であらうがの？
古田　（當惑して）恐縮に存じまする。
（もとの如くたゝんで返上す。親王やはりにこやかな調子で。）
親王　これでは、如何な年寄りの御身でも心を動かさずにはをられまいがな。
古田　（やゝ默然としてゐたる後）かくも不屆なる荒くれをとこ共、私も默つてをれぬ氣がいたします。
親王　それぢや。予は至急將軍家に傳へ、予を欺ッた、憎らしい茂左衛門とやら申す者の素志を達せしめてつかはさう。近ごろ諸大名奢侈淫逸に耽り、罪ない百姓どもを苦しめて憚らぬこと、うす〳〵予も聞き知つてゐる。これまさに幕府執政のあやまりぢや。
古田　御意に御座いまする。
（顔を見合はせる。）

――幕――

第四幕（審問の場）

時　翌天和元年十一月二十二日午前
所　殿中評定所

人

五代將軍綱吉
大老　酒井雅樂頭
老中　大久保相模守
同　土井大炊頭
同　安藤對島守
その他諸役人
伊賀守信利
息　彈正少弼信就（二十七歳）

舞臺　幕開くと、大老、老中、諸役人等整然と列坐す。正面中央に嚴然たる襖。その前の將軍座席空きたり。やがて「伊賀守樣父子御召し！」の聲聞ゆるや、信利、つゞいてその子信就、細川佐次右衛門、安藤九郎右衛門等に從はれ、悄然として花道より現れ、舞臺前面の下座につく。細川、安藤等、やゝ離れて背後に控ふ。やがて再び、「上樣御成り！」の聲ひゞき、諸侯悉く平伏のうちに、正面大襖左右にひらき、將軍綱吉登場着席。

酒井　美はしき御尊顔を拜し、皆々、恐悦至極に存じまする。
將軍　今日の吟味、大儀、大儀。
諸侯　はゝッ。（點頭）

（やがて頭を擧ぐ。大久保相模守進み出で、審問の座の手前にて。）

相模守　然らばこれより「不肖相模守吟味つかまつります。

（將軍輕くうなづく。）

相模守　（座について）伊賀守殿、並びに息信就殿。我等これより上樣に代り御たづね致す。まッすぐに御答へめされ。

信利父子　はあ、御手數の段、恐縮至極に存じます。

相模守　（糺問帳片手に、やをら）御身、かたじけなくも證文を以て、今年八月までに兩國橋用材必ず御用立て申しあげるやう御請負仕りながら、すでに十一月も末の今日、何故納付濟みに致されぬか。納付濟みはさておき未だ半分にも相成らぬ仕儀不届至極、きッと叱りおく。

伊賀守　御叱責の段、伊賀守幾重にも御詫び申しあげます。ほかならぬ御膝もと大御普請の御用、我等共事相果しまする所存のところ、御證文に引き合はせ、根伐りだけは殘らず濟ませましたなれど、領内百姓ども、去る延寶三年、七年、八年と引きつゞきましての飢饉凶作、その爲め疲弊つかまつり、思ふまゝに人夫役つとめかね、つい心ならずも延引いたしました仕儀、格別の御憐憫のほど、伏してねがひあげます。

相模守　なに、百姓とも餓ゑ疲れ、御人夫役相つとめかねたと申されるか？

伊賀守　仰せに御座ります。

相模守　これは、近ごろ奇怪なる返答を承はる。それほど餓ゑたる百姓を、なぜ今まで救ひおかれなかつた？　まッた左樣に惱みをる者どもをかゝへながら、なぜかやうな大事を引き受けられた？

伊賀守　おそれ入りますが、窮民ども救恤の爲めには、我等も出來るかぎりの力は盡しました所存に御座ります。

相模守　他領に聞かざる井戸役、窓役、婚禮役、生子役等は早速廢止したと申さるゝか。

（伊賀守驚愕、思はず面を伏せて言葉なし。）

相模守　（つゞけて）その上かてゝ加へて天下の御請負、慈悲ある領主の仕打ちでは御座るまい。

伊賀守　おそれながら、御請負の儀は、せめて窮民達を賑はせん料にもと……。

相模守　（おッかぶせて）然らば、御手金三千兩、百姓どもの手當としてつかはしたと申さるゝか。

伊賀守　（再びうろたへて、曖昧に）はあ……。

相模守　（嚴然として、追窮いよ／＼急なる調子）たしかに手當されたな。

伊賀守　いゝえ、左樣あらかじめ存じをりましたなれど、さまぐ＼手もと不自由の儀御座りました爲め。未だその次

第に立ち到りませぬ。

相模守　これは心得ぬ。不自由の儀と申されるは、よもや御身奢侈増長、日夜美酒美女におぼれての事では御座るまいな。

伊賀守　(甚だ苦しげに)　いえ、決して左樣なわけでは御座りませぬ。

相模守　が伊賀守殿、委細上にては殘らず御しらべありますぞ。

(伊賀守再び言葉なし。)

相模守　(つゞいて)　とにもかくにも御手金三千兩、一文も百姓には分ち與へず、まツたく無手當にて人夫役に追ひ使はれたとは、近ごろ以て甚だ心得ぬ。そもそもかの三千兩は何と心得らるゝ？　材木代金と同時に、人夫賃こめての金で御座るぞ。又このたびの御用は、御身一人の國役とは相違いたす。元來、百姓を無代にて使ふは、御身も知らるゝとほり、川除普請、獸除等に限つたものぢや。その次第は、川荒れ、猪鹿等の荒れは、領主百姓共難儀の事ぢや。よツて、それに要する費用は領主出し、人夫は百姓みづから當つて、共々をさむるのぢや。然るにこのたびの御用は、まツたく以て御身一人の仕事ではないか。たとへその金なくとも、領内百姓の爲には、取りもなほさず領主たる御身みづからの事、倉庫をひらいて力の限り憐れみうるはずが當然の仕儀ぢや。いはんや莫大なる現金を受けられたうへには、或は他領より米穀を買ひ入れ、或は人夫賃の名を以て百姓ともに分ち與へ、仁慈を示すが當然ではないか。さすれば、たとへ外領分にては如何に飢饉難澁するとも、御身領地にては、百姓とも鼓腹撃壤のたのしみあるべき筈ぢや。左樣な事にて、政道が相つとまると思はるゝか。

伊賀守　(仕方なく、又狡猾く)　恐れ入り奉る。今後は必ず御意のとほりいたす所存に御座れば、今までの儀は何卒お目こぼしねがひあげます。

相模守　云はれな、伊賀守殿。本年一月、おそれ多くも上樣よりぢきぢき行狀取調かた御達しありたる節、それとなく注意を加へておいたではないか。殊に、二月鎌倉河岸の御身持數類收役は、御身も一層愼いたしをるやう言上した我等──にも係はらず、相變らず行狀もをさまらず、御用も捗らねばこそ、今日かく御吟味の御沙汰と相成つたではないか。我等の面目は、すでに十分つぶされてをりますぞ。

伊賀守　何とも申しわけ御座りませねど、今後は必ず御面目相立ちますよう、伊賀守碎身いたす所存に御座ります。

相模守　御手金横領の條は、それで委細分明いたしたが、そのほか、御身は政一切をおろそかにいたし、食事に限り

將軍（鷹揚に）法のごとく計らへ。
相模守　かしこまりました。（大老、老中等へ向つて）御意見も御座らば、仰せ下されたい。
酒井等　萬事、御まかせ申す。
相模守　然らば、御免を蒙つて裁斷つかまつるで御座らう。（祐筆の役人を呼び、低聲にて筆記を命ず。役人奉書に記す。相模守その紙を取り、伊賀守へ向つて。）
相模守　伊賀守殿、さらば上樣に代り申し渡す。謹んで御受けいたされい。（讀む）「伊賀守儀、兼々不行跡にて家中困窮百姓難儀仕候由、達上聞不届被思召候。其上今度兩國橋之儀不調法重罪也。依之領地被召上、奥平小次郎へ御預け候。天和元年酉の十一月二十二日」
伊賀守（悶ゆれども詮方なく、やがて）おそれ入り奉る。
相模守（つゞけて）出羽山形、奥平美作守殿方で御座るぞ。——なほ彈正少弼信就殿、御身は、未だ若年のこと、直接政道に當つたわけでもなけれど、すでに十分物のわきまへもあるべき年輩ぢや。にも拘はらず、父伊賀守殿不行跡に對して、何等諫めんともせず反つて共々奢侈逸樂にふけり、領内百姓町人どもの難儀となつたる段、甚だ以て不屆ではないか。御身だに心あらば、伊賀守殿も今日かゝる仕儀には立ち到られなかつたやも知れぬ。その罪決して輕う御座らぬぞ。
信就（たゞ平伏）おそれ入りました。
相模守　御身は、播州赤穗の城主、淺野内匠頭殿へ御預け申し渡す。
信就　はゝあ。
相模守　なほ、用材御請負實際に當りたる家老、塚本舍人、淺田權兵衞、宮下七太夫三名は、不埒至極につき、明日たゞちに切腹申しつける。……沼田城受け取りその他の御處分は、追つて役々相定め、沙汰いたすで御座らう。
（信利、信就平伏す。）
相模守（將軍へ向つて）御吟味、これにて相果しました。
將軍　相模守、大儀であつた。
（靜かに座を立つ。「上樣御入り」の聲。再び正面の大襖左右にひらき、將軍退場。）
（皆々平伏。）

——きつかけに、靜かに幕——

第五幕（月夜野町刑場の場）

時
貞享三年十一月十五日、午後より夕
（初幕延寶八年十一月より足掛七年目）

所

月夜野橋の袂、竹の下と稱する利根河原

人

茂左衛門
妻おぎん
百姓町人達大勢（女房子供達も混りなり）
沼田領領主、前橋藩主酒井河内守檢使
警護の役人達多勢、又役吏等
（あとより）將軍家急使一行
第二幕の村々の總代その他十五人
源八郎

舞臺　月夜野橋の欄干の突端、舞臺右手に現る。河原の右寄の周圍には竹矢來をめぐらし、警護の役人きびしく四方を固む。矢來の中には荒蓆を敷き、磔用の十字柱二本横へあり。その他いろ／＼處刑用道具。河原の後方には遠き利根の水見え、その先きに、對岸の村々、田、畠、林、山、雲等眺めらる。初幕と同じくさびれたれど、以前に較べてどことなく、土地とゝのひ、おだやかに美しく感ぜらる。初幕と同じく、舞臺靜かになるたびに淙々たる川瀬の音。

幕あくと、警護の役人のほか、矢來の周圍には大勢の百姓町人達、或は立ち、或は右往左往、ざわめきなり、初幕の百姓達甲、乙、丙等も混りたり。丁はすでに死して、をらず。

甲　何ちふ嚴重な竹矢來だ。
丙　まるで、おら達まで突つ殺すつもりのやうだ。
乙　江戸へ立つた總代衆はどうした？　丁度今日で五日目だに、何を愚圖々々してゐるだ！（待ちこがれるやうに、かなたに通ずる橋を望みやる）
甲　どうしてまた、こんねえに早く、お上ぢや茂左衛門さんを送り返しただあ？　足掛け七年も經つてる事件ぢやあねえか。何も、さういそがなくたつてよささうなもんだ。
丙　全くさ。それも、惡い事をしたわけぢやあねえ。あゝやつて殿さまが御仕置きになつて見りやあ、云はゞ茂左衛門さんは立派な手がらを立てただやあねえか。お賞めになるが當り前だ。なぜ殺すか、おれにやあ皆目わからねえだ。
乙　お上のおきてにさからつたからだべえ。
丙　おきてが何だッ？　おきてア、ひとを殺す爲めのもんか？　よしんばさからつたッて、正しいことで、おまけに七年も經つてりやあ、何とでも御赦しの言葉がつけられるぢやあねえか。畜生め！（荒く唾をはく）
甲　ふんとに命乞ひの總代衆十五人はどうなつただ？　茂左衛門さんが捕られたと聞いて、たッた二日のあひだに

百七十七ヶ村の名主衆の連判状をまとめて立つたこんだ。もう何とか音沙汰があつてい丶筈だに。（橋のかなたを見やる）

乙　さうとも。夜晝とんでツて、又歸つて來りやあ、間に合はねえ筈あねえ。

（その時、揚幕よりドッとばかり百姓達押し出す。）

口々　それ茂左衛門さんが來たぞ！
おぎんさんの駕籠も來た！
やるな！
通すな！
もう少し待たせろ。
途をふさげ！
駕籠をふんだくれツ！
役人達を追ツぱらへ！
やれやれツ！

（警護の役人現る。皆拔刀、變に備ふ。つゞいて駕籠二挺舁かれ出づ。その前後に、同じく支度せる役人四人ばかり、寒くキラ／＼と輝ける拔き身の槍を、駕籠先きへ向けつゝ、もし百姓達奪還を試みなば、たゞちに中の茂左衛門夫婦を一突きにせんと構ふ。檢使あとに從ふ。百姓達、それにも拘はらず押し寄せんとす。）

役人達　どけ、どけ！
道をあけろ！
おだやかにせぬと、そのまゝには差し置かんぞ。

（刀身、槍等、突き出さる。百姓達わづかに退く。駕籠、揉みに揉まるゝごとく、ホンの少しづゝ進む。あとからも無數の百姓町人達。喚聲天地をどよもす如し。竹矢來の周圍に集りゐたる群集も、その方へ移動す。群集あせり焦立てども、駕籠を指せる槍先きを恐れて空しく駕籠と共に動く。）

新たなる叫び聲　お願ひで御座えます。もう少しだけお待ち下せえ。
今日一日だけお待ち下せえまし。
お情を以て、みんなの願ひを御きゝ下せえ。

侍　ならん、ならん。さきほどから、言ひどほし言うてをるではないか。
とにもかくにも、河原へ着いてからの事ぢや。
騷ぐと、反つて爲めにならんぞ。

（喧々囂々たる怒罵、惡罵、哀願のうちに、やうやくにして列、舞臺へのぼり、駕籠矢來の中へ擔ぎ据ゑらる。）（注意。舞臺正面は、出來るだけ群集や侍によつて觀客の眼を遮らぬやうすべし）

（第一の籠より茂左衛門引き出さる。長年の苦勞、又乞食生活の爲めに、身體痩せ、頬肉落ち、以前の頑丈

なる面影なし。やうやく先刻許されし剃刀によつて、髭鬚あと青く、一種の凄みあり。眼も落ち窪みたれど、その底の、大事成りし滿足と、死の覺悟の落ちつきを湛へて、うしろ手のまゝ靜かに莚の上に引き据ゑらる。服裝は黑の綿服、白紋は、それとわかる程度に墨によつて塗り消されたり。)

(茂左衛門現るゝや、滿六年ぶりに、その憔悴せる姿を見たる群集、思はずなつかしさと感激の聲を揚ぐ。)

聲　茂左衛門さん!

茂左衛門さん!

なんてやつれさつしやつただ!

まアいたはしい!

長えあひたの苦勞をさつしやつただもの。

乞食までしてゐなすつただで。

あんなにまでして、おらあ達の爲めに骨折つてくんなすつたか!

茂左衛門さん/\!

(茂左衛門、莞爾として群集に默拶す。)

(次いで二の駕籠より、腰繩のまゝおぎん引き出さる。同じく黑綿服、紋は塗りつぶされたるを着、半幅の茶の帯を前に締め、髮形さつぱりと、少しも惡びれず。)

群集　おぎんさん!

おぎんさん!

(彼女も亦、感謝に滿ちて群集に頭をさげ、良人の左手に並んで莚へ引き据ゑらる。)

群集　(堪へかねて)　おぎんさん迄たあ何ごとだ!

あんないゝ人を——殺すなんて鬼か獸だ!

罰當り!

次ぎの世にやあ、閻魔さまの地獄で燒き殺されろ!

(その時、かねて茂左衛門夫婦に養はれてゐたる子供達三人——今はみな丈夫に、十二三歳ばかりに成長したるが、「をぢさま!」「をばさま!」と連呼しつゝ矢來へ飛びつき、もぐり込まんとす。役人等突き放す。)

(茂左衛門、さもなつかしげにその顔を眺め、おぎん氣づかはしげなる容貌。)

(檢使、二人の斜め前手に立ち、襟にせる上意を取つて、讀み聞けんとす。忽ち「待て、待て!」「少うし待てえ!」と、萬雷の落つるが如き百姓達の怒號。)

(が、檢使、威を見せて屈せず、ひらきて讀み始む。群集いよ/\怒號、何を讀むかわからず。たゞわづかに「越訴の大罪によつて」の一句だけ觀客に聞ゆ。)

群集　(叫喚)　何か越訴た!

破ツちまへ!

(檢使構はず讀み終へて、巻いて襟に收む。)

(群集いよ／＼猛り狂ひ、ピシ／＼メリ／＼と矢來を押し破つて闖入し出す。抜刀の侍等、ギラ／＼と輝かし列ねて、寄らば斬り倒さんと構へ、抜槍の者共は茂左衛門夫婦に擬して、やうやく群集を追ひ退く。……おくれてはいよ／＼事面倒と、檢使獄吏等に目くばせす。獄吏等立つて、用意の二本の十字柱へ、手早く茂左衛門及びおぎんを縛りつく。然して懸け聲もろとも、まづ茂左衛門の柱を河原の用意の穴へ押し立て、根もとへ石土等をかふ。群集の喚聲。茂左衛門、柱の如く十字に縛されて、高く舞臺正面の中空に立つ。夥しき下の群集を見渡し、更に顏と眼を動かして、さもなつかしげに、夕日あか／＼と當れる故郷の山河を眺め廻す。そのあひだに、おぎんも縛せられ、柱のまゝ良人と並べて中空に押し立てらる。夫婦相顧みて微笑す。群集叫喚。多くの者は、思はず大聲を揚げて泣き出す。前の子供達の透る悲鳴「なばさまア！」「なちさまア！」そのあひだに聞ゆ。群集もはや抑ふるに由なく、我を忘れて、奮然一齊に竹矢來中に突入、茂左衛門夫婦を奪還せんとす。)

(一髮の途端、中空より茂左衛門の高く落ちついたる聲。)

皆の衆、待つて下せえ。——待つて下せえ。

(群集おどろきて振り仰ぐ。)

茂左衛門　この茂左衛門のお願えだ。

(彼等夫婦の顏に夕陽の反射。茂左衛門の言葉にハッキリと、燃ゆるが如し。なほ聞きつけず、ざわめきゐたる一部の群集へ向つて、制止する聲起る。)

聲　茂左衛門さんが何か仰るぞ。賴みがあるツて云ひなさるぞ。みんな靜かにしろ！

(その聲によつて、群集水を打つたる如く靜まり、一齊に茂左衛門に眼をそゝぎ待つ。川瀨の音。)

茂左衛門　(感謝に滿ちて) 皆の衆。おらア、お前達の親切あ、どんなにありがてえか知れねえ。だが皆の衆。ふんとにおれの爲めを思つてくれるなら、どうか此のうへ騷がずにゐて貰えてえ。そして、樂らくに死なせてくれ！

群集中の不審の聲　何を云ひなさる茂左衛門さん？そりや又どうしてだ？

茂左衛門　(悠揚として) 今殺されても、おらあ誰もちツとも怨みにやあ思はねえ。殺されるなあ、國を出る前ツからの覺悟だ。どころか、今死ぬのが、おらあどんなに滿足かわからねえ。

(群集中に大いなる唸り聲。)

茂左衛門　なぜツて、もうおれ達の望みあすツかり遂げたぢやねえか。殿さまあ御仕置きになる。悪い御家來達ある

たくなる。井戸役、窯役、婿聟役、生毛役なんずのむごい御上納は、みんなお廢止になる。檢地十四萬五千石も、總代衆の願書がかなつて、皆の衆立ち會えのう、新たに御竿入れがはじまり、この月初め、動かねえところ五萬五千石と定る。これでもう云ふとこあ何もなくなツたぢやアねえか。――おれたけにやあ、思ひ殘すことあ一つもねえ。實あ、殿さまが御仕置きと一緒に、おらあいさぎよく名乘つて出ようかと思つたが、いや待て、まだ御檢地一件がそのまゝだ、こいつを何とか埒あけねえぢやあ眠れねえ、と考えなほして、いろ〳〵と工夫してゐる最中、いゝ按排に總代衆から御願ひ出した、やれうれしや、どうかうまく行きますやうにと、神佛にいのりながら、樣子聞き聞き三年越し、今度いよ〳〵殘らず落着と聞いて、天にものぼる氣もちになつただ。だがまた、實のところ當つて見ねえぢやあ安心出來ねえ氣がし、それに、かう云つたら弱え奴と笑はれるかあ知らねえが、七年會はねえ女房や子供にも、此の世の名殘りに一目會つて別れてえと思つて、八日の晩夜中やツとこさ家へ辿りついて、女房に會つて話をきいて見りやあ、江戸で聞いたとこに寸分ちげえねえ。あゝ有りがてえ、忝けねえと、長年の重荷がドッと一時におりたやうな氣もちで、すぐと又江戸へ引ツ返して名乘り出ようと家を出るが早いか長えあひた御手分けの捕り方につらまツて、そのまゝ江戸から送り返されただ。な、皆の衆。して見りやあ、自分で出る代り押へられたゞけのこんだ。おれに、何の未練もある筈がねえぢやあねえか。

（群集、歔欷の聲。）

茂左衛門　せんだツての晩は、生憎暗くて何が何だかさツぱりわからなんだが、今かうやつて高みから見渡しやあ、久しぶりになつかしい國の樣子も、昔とちがつて何となく生き生きと色ついてゐる。えれえもんだ、御政道が改まりやあ、こんなに天然自然までも變つて來るかと、さツきからおらあうれしくて堪らねえだ。そのうへ、これから皆の衆も、村も、いよ〳〵榮えてゆくかと思やあ、このまんま羽根が生えて飛ぶやうだ。

（群集の歔欷の聲、更に高くなる。）

茂左衛門　だで皆の衆。どうか、よろこんで死んでゆくおれの邪魔あしねえでくれ。これが、死際のたつた一つの願えだ。

群集中の聲　たつてお前はよくつたツて、そんならよしで濟まされるか。訴へ出た心あおれ達もみんな一つだ。お前ばツか死なせて、おれ達が生きてゐられるか！

和する一同の聲　さうとも、さうとも。

茂左衛門　（毅として）わからねえことを云ふ人達だ。ぢ

やあ一揆、おらあ何の為めに苦心して来ただ？

羣々　そりやアわかつてる？

茂左衛門　わかつてるなら、思ひとほり死なせてくれ。おらあ何も、おきてがあるで云へけなくちやいけねえ、と考えてるわけぢやあねえ。初めッからおきて破りをしたおれのこんだ。――だが皆の衆。今お前達が、よしんばおれを御役人衆から取り戻してくれたとこで、それが何になる？　一方は天下のお力、一方はたッた沼田の百姓町人。また取り返されるなあ目に見えてる。それだッかが、折角お上から頂いたなさけを滅茶苦茶にして、自分で自分を亡ぼすやうなもんぢやあねえか。な、皆の衆。おらあもう何の用もねえ身體だ。今かうして利根の川瀬をきいて、皆の衆の顏を見て死ねせえ、勿體なすぎる。だが、折角こゝまで苦勞して来たおれの志だきやあ、どうか、おしめえまで立てさせてくれ。

（群集一言もなく、たゞ唸り聲と歔欷の聲。様子を見濟まして、検使獄吏に目くばせす。獄吏二人、たゞちに槍を取つて、左右より茂左衛門の下に構ふ。その時おぎん頼む。）

おぎん　もし、お願ひで御座います、どうぞわたしから先きへ突いて下さいまし。

（獄吏等彼女の方へ眼を移す。）

茂左衛門　いや、おれのはうを頼みます。

（獄吏等、又彼の方を眺む。）

おぎん　（直人の方へ向つて）　お前さん。そんな事を云はずと、わたしを先きへ死なせて下さい。わたしや、とても見てはゐられません。見ともない死にかたをさせないやうに、どうぞ、どうぞ。

（手を動かさんとすれども動かず。わづかに點頭するのみ。）

検使　さらば、まづこちからやれ！

（槍手等、おぎんの下へ移り、やがて左右より槍を突き出し、彼女の眼先きにてカチンと先を合はす。）

おぎん　（うれしげに）　では茂左衛門さん。一足お先きへ行きます。（つゞいて眼下の子供へ向つて）　みんな丈夫でゐておくれ。

（子供達すゝり泣く。）

おぎん　（次に群集に向つて）　皆さま御無事に。

（群集ワツと泣き出す。）（注意、演出の際に、やむを得ざるにより、この時舞臺をば半ば位まで暗くし、さきの見えざる程度の幕をおろすべし）。

（槍手等構はず、一斉に引くや、「アリヤ／＼……」の掛聲もろとも、まづ左の脇下より突きとほし「エイエイ」と三度抉つて引く。おぎん、槍先きの運動を

見るが如く、聲も立てず頭を垂れをり。つゞいて、同じく右の端より突きとほす。彼また、その方に顏をやゝ頭を曲げたるまゝ、自若默然たり。群集見るに堪へず、して、頭を伏して泣く。念佛の聲々。槍手等、用意の手桶のなかへ槍先きを突ッ込み、わづかに血潮を洗ひ、次いで茂左衛門の柱の下へ移る。茂左衛門、そのあひだ瞑目してゐたるが、けはひに目をひらき、かすかにおきさんのかたを眺め、莞爾として群集へ向つて。）

茂左衛門　おやあ皆の衆。長いあひだ御世話になりました。

（子供達へ向つて）早く大きくなれよ。

（又群集の大叫喚。）

（槍手等前と同じ調子にて、まづ左より突き刺す。茂左衛門、やゝ苦痛の表情にて眼をあきたるまゝ。――次に、右より突き貫きて引かるゝや、双眼を閉ぢて静かに頭を垂るゝ（注意。この時又幕を上ぐべし）。

（群集大叫喚。念佛の聲々。）

（この時、はるか橋のかなたより大きな呼び聲聞ゆ。

「おうい、待つてくれえ！」「おうい、ちよッと待てえ！」

「待て、待て、待てえ！」群集その方を眺めやる。急使及び出府の總代等、一所懸命に走り來るけはひ。群集騒ぎ立つ。）

こんだ、ありや總代衆ぢやアねえか！

さうだ　江戸へ行つた衆だ！

ひとり　馬へ乘つて先きへ飛んで來るぢやアねえか？

御許しが出たつたか？

間に合はなかつただか？

（皆々、橋の方へ馳せ寄り、又は駈け出し、急使達を迎ふ。）

（馬上の急使、眞ッ先きに右手橋より現る。）

（檢使等喫驚の體。）

急使　（磔柱の上を見て。）もう茂左衛門等はお仕置きになつたか？（興奮落膽の狀）

群集　（我を忘れて）おゝおゝ、お赦しが出たんで御座えますか？

急使　さうだ〳〵。將軍家特別の御思召により、おれ等急使として駈けつけたのだ〳〵。

（群集、忽ちワッとばかり泣き叫ぶ。檢使等呆然。）

（その時、十五人の總代等及び源八郎、息せき切つてドヤ〳〵と登場。）

なに、もう駄目だ？

間に合はなかつたか？

（一齊に柱上を見あげ、同じく聲を揚げて泣き出す。）

しばらく、群集たゞ叫喚に滿つ。急使背後に退く。）

（やがて、總代の一人長三郎、群集へ向つて。）

長三郎　皆の衆、折角命乞ひの總代に頼まれながらドヂを踏んで、何と申しわけのしようもねえ。だが、どうかおれ達を怨まなんでくれ。（息を切り〳〵）おれ達あ、立つた日から夜の目も寢ずに捜したゞ。――江戸へ着くなり、まづ此の源八郎さんを見つけて力を貸して貰つて、十五人が三手に、一組あ町奉行渡邊大隅守さま、一組あ新御老中堀田備中守さま、あとの一組あ上野輪王寺の宮さまへ、それ〴〵願書を差しあげたゞ。……と、どちらさまも御無事御留置さ。中でも上野の法親王さまは、早速御登城下すッて、ぢき〳〵將軍家へ御取りなしのありがたさ。そのお力で、すぐと赦免狀が出て、この急使さまが御いで下さる事になつたゞ。やれうれしやありがたやと思ふ一方、もう前の日に茂左衛門さんは國もとへさげ渡されたと聞いて、手おくれにならねえようにと、おれ達あ根かぎり精かぎり、宙を飛んで來たものを――。

（思はず男泣きに泣き崩れる）

（群集等、いよ〳〵恨惜の情に突きあげられ、和して號泣す。）

（源八郎走り出し、まづ前手のおぎんの柱、次に茂左衛門の柱に抱きすがり、見あげて涙とゞめあへず。）

傳左衛門　（そのあとから柱のもとに跪き）おゝ妹、兄貴。立派な往生をしてくれたなあ。……だが、もうちッと早く來たら、こんな姿にゃあさせなかッたに。（あきらめかねし姿）

（検使、侍等、すこぶる當惑と手持ち不沙汰の體。）

馬鹿なことをしたな。

まるで無駄骨折つた。

もう少し先きにわかりさへすれば、我々もこんなくたびれ儲けはせずと濟んだに。

（間の悪さと忌々しさに、皆々舞臺隅へ退かんとす。その時群集中より叫び聲。）

丙　かうなりやあ、茂左衛門さん達あ青天白日だ。突ッ殺した役人衆こそ罪人だぞ。さッきあれほどおら達が拜んだに、無理無體に突ッ殺したりやこそ、今この取り返しのつかねえ始末だ。皆の衆、このまんまで濟まされるか？

甲乙を初め聲々　さうとも。このまんまで濟まされるもんか。

もうちよッくら待つてせえくれりやあ、かうならずと濟んだに。

おら達の大事な茂左衛門さん達を、むざ〳〵犬死にさせた奴あ、どいつだ？

そいつらだ。

人非人め！　畜生めら！

みんなの胸を晴らせ！

（忽ち大沸騰し鼎のわくが如し。群集手に手に棒、鉄、鎌、石ころ、木切れ等を握り、あはや役人等へ向つて殺到せんとす。この時、加右衛門いそぎ橋の欄干に飛びあがり、兩手を振つて群集を制止す。總代等扶く。）

加右衛門　（大聲に）皆の衆、ちよつと待つてくれえ。待つてくれえ。

（群集彼に目をそゝぐ。）

加右衛門　お前達の氣もちは、よツくわかる。おれ達も、茂左衛門さんを死なした口惜しさにやあ、はらわたが引きちぎれる位えだ。

群集　（口々に喚く）みんなさうだ。さうでなくてどうする？だで、無念を晴らすだ！

加右衛門　だが皆の衆、茂左衛門さんは口惜しがつて死んだか、それとも笑つて死んで行きなすつたか？

群集　笑つて眼をつぶりなすつた。落ちついて大往生をなすツた。それがどうした？

加右衛門　うむ、さうだらう。茂左衛門さんのことだ。きツとよろこんで死になすつたにちげえねえ。さうすりやあ、今さうやつて、お役人衆に楯をついて騒ぐなあ、反つて茂左衛門さんの心にちがやアしねえか。

（ギクリと胸を衝かれたる如く、群集靜まる。が、不滿なるつぶやき。）

加右衛門　茂左衛門さんは、何もかもひとりで背負つて死んで行きなすつたゞ。見ろ、今度の御改めに、ほかに誰一人罪を被た者あねえぢやあねえか。それを考えりやあ、いよ〳〵じツとしてゐられなくなる。――だが、そいつが茂左衛門さんの本望だ。云はゞ、みんなの代りに死んでくんなすツたゞ。犬死のやうに見えて、決してさうぢやあねえ。その裏にやあ、自然に深え意味があつた今度の事ぢやあ、どうせ誰かアお仕置きにならなくちやあいけなかつたゞ。それが、その人の運命だつたゞ。もし死ななんだら、この後おれ達のうへにどんな障りがあるか知れねえだ。麥粒たつて米粒たつて、一つ土ん中で腐りやアこそ、千俵萬俵、どつさり穂がみのるぢやあねえか。茂左衛門さんの死になすつたたあ、まことその爲めだ。おぎんさんもさうだ。お前達が、ふんとに茂左衛門さん達の志にむくいようと思ふたら、その死んで行きなすつた氣もちを、ようく嚙み分けねえぢやアなんねえ。茂左衛門さん達をふんとに死なせるも、又犬死にさせるも、みんなこの後のおれ達の心一つだ。今のぼせて騒いぢやあ、たあだ犬死にさせる事たあ思はねえか？

總代達の群　さうだ、加右衛門さんの云ふとほりだ。

つゞいて群集の聲　そんならどうしろッちふだ?

加右衛門　おれ達あ、いつ迄も今日のことを忘れちやアいけねえぞ。忘れッこもあるめえが、これをおれ達のクサビにするんだ。おれ達あ、この後始終兄弟のやうに、一心同體に結び合つて生きて行かなくちやアいけねえ。たとへどんな事があらうと、茂左衛門さん夫婦のことを考へりやあきッとみんな心を合はせて行けるにちげえねえ。それが、おれ達の何よりの恩報じだ。折角の親の志を無にするな!

總代達　さうだ。茂左衛門さんはおれ達の親だ。親の志を無にするな!

一同　無にするもんか!

そんならお總代衆の云ふとほりしべえ。

みんな一緒に盟へ!

盟へ!

（皆々河原に跪いて、二本の磔柱へ向ひ頭をさぐ。いつか四方夜の帳のうちに入り、川の彼方、東の山の端より、大いなる滿月しづかにのぼり來る（初幕にある如く、月夜野は山河の景色すぐれ、殊に月夜の美云ふべからざるによつて、特に伊賀守命名の地なり。）その光皎擦、川瀬の音一きは高し。）

――靜かに幕――

1926・4・淨書

附記

茂左衛門の史料は、高崎市の篤學者、田村榮太郎氏の手記「沼田領農民運動史資料」及び知友菊池寛夫君よりの小本「汝談、磔茂左衛門」（春龍丸述、口復堂講演）、この本の[illegible]は、田村氏のノオトにも引用されあり）等に據る。それらに據りつつ、自由に戲曲化し創造せり。右記して二氏に謝意を致す。

相戀記（五幕八場）

第一幕

人物

通行人　ＡＢＣ

喬生　若く貧乏な讀書子

淑芳　若く魅力に富む美人

金蓮　侍女

時

盆祭の夕

所

[illegible]・某都

舞臺　中央、喬生の小部屋。（譲め、その壁一重上手に、[illegible]の張[illegible]人の小部屋を置くがいゝ。その舞臺に向ふ方は任意に開閉、又照明を以て隱顯するがいい）下手に入口。その面する往來は花道へ。（舞臺を構成的にすれば、舞臺的自由と適合は更に增大する。）喬生、無飾の質素な部屋で、小さな盆燈籠の下に讀書してゐる。そとはやゝ霧を帯びた月光。奥から通行人ＡＢ、各々灯の點いた燈籠をさげながら出る。

Ａ　賑かな燈籠祭たッたな。

Ｂ　久しぶりで、ほんとにいのちの洗濯をしたよ。方將軍の政治のなかで、此の御祭りが一番の善政かも知れない。誰でも一人殘らず燈籠をさげる事、ッて思ひつきがいい。こんな（手で形して）ちッちやな子まで提げてたぢやないか。そこへ又、どの街路（とほり）にも軒並みでかい奴が點いてるんだから素晴しい。

Ａ　おまけにいゝ月夜でさ。

Ｂ　こんな晩にやあ月なんかないはうがいゝ。

Ａ　いや、あつたはうが餘計浮き立つ。

Ｂ　ないはうが引き立つ。

Ａ　月だつて燈籠の一つだ。

Ｂ　人間の燈籠の時は、ほかの燈籠なんか邪魔で餘計なものだ！

Ａ　餘計ぢやない。

Ｂ　おやない！

（二人去る。）

（喬生、「月」の言ひで注意な惹かれる。机から立つて戸口へ出、月を仰ぐ。）

喬生　（呻くやうに）いゝ月だ。（間、半ば吟じるやうに）

明月自ら來り還自ら去る……か。（亡妻の追憶に堪へず）
あれは月の馬鹿に好きな女だッたが――。（眼に映る月
光）

（C、同じく（但しABとは型の變つた）燈籠を持
つて通りかゝる。）

C　（戸口の喬生へ）今晩は！
喬生　今晩は！
C　（氣がついたやうに）おゝ、點け忘れてゐた。（灯を吹
き消して去る。）

（遠く鐘の聲。月、いよ／＼霧を帶びて來る。喬生ゆ
つくり數へる。鐘止む。）

喬生　隨分更けたな。

（金蓮、月の光に生れたやうに奥へ現れる。片手に、
頭へ美麗な牡丹の花二つ飾つた（點つた）燈籠をさ
げてゐる。背後に淑芳。――どつちも割合質素な清楚
な服裝。）

（靜かな足どりで、默つて喬生の前を通り過ぎる。彼
視線を廻轉させる。淑芳、四五歩行き過ぎてから、振
り返つてにッこり笑ひかける。そのまゝ歩いてゆく。
喬生無意識に（見えない綱に引ッ張られるやうに）
あとを追ふ。金蓮、花道（又は構成的舞臺）を行き
盡そうとする時、淑芳呼ぶ。）

淑芳　金蓮さん。
金蓮　はい。（立ちどまる）

（淑芳、向き返る。喬生、物におどろいた悍馬のやう
に凝然と立ちどまる。淑芳默つて頭をさげる。喬生、
やつぱり無言の挨拶を返す。）

淑芳　此の邊に御住ひでいらつしやいます？
喬生　え――。
淑芳　どこら？
喬生　（落ちつかない樣子で自分の家を指して）そこです。
淑芳　（うれしさうな叫び聲を擧げて）あら！　あたし大
へん疲れましたけれど、あの、一寸休ませて頂けません？
喬生　え？
淑芳　（おつかぶせるやうに）御いや？
喬生　（面喰つて）御休みになる？　僕の家へ？
淑芳　え、――でも失禮でしたら……。
喬生　（まごついて）いや、構ひません。あなたさへ御構
ひなければ……（少し云ひ澁つて）が、とてもきたない
處なんです。
淑芳　あら、ちつとも構ひませんわ。あたし、あなたの御
家でさへあれば結構ですもの。（金蓮へ向つて）ぢや、
ちよつと休ませて頂きませう。
金蓮　はい。

淑芳、半分呆然としてゐる喬生へ進み寄つて、片手を取つて接吻する。喬生おどろく。）

淑芳　（彼の手を握つたまゝ）ぢや、どうぞ……。

（喬生先きへ立つて戸口を入る。金蓮つゞく。）

喬生　（椅子を勸めて）どうぞ。

淑芳　（うれしそうに）かけてもよう御座います？

喬生　きたなくてもよろしければ。

淑芳　あら又あんな事。

喬生　でも、御覽のとほりです。（突然氣づいて）こんなにさせておいて……（起きッ放しの亂れた寢臺を、いそいで片づけやうとする。）

金蓮　（寄つて、）御かたづけしませう。

喬生　（びつくりして）いや、いゝんです。いゝんです。

（振り拂ふ）

淑芳　（微笑しながら）そんなつまらない事、もし御よしあそばせ。

喬生　（催眠術でもかけられたやうにやめて、金蓮へ椅子を勸めて、）さ、どうぞ。（突然氣づいて髮をつかんで）一つきり椅子がない！

淑芳　まあ、（金蓮へ）これへ御掛けなさい。あたし、こちらへ掛けさせて頂きますわ。（寢臺の一部へ腰を移す）

（喬生、面喰ひながらその横へ腰をかける）

金蓮　（淑芳へ）此の牡丹燈籠は、もう消しておきませう？

淑芳　そうね。

（金蓮吹き消す。）

喬生　あなたも町へいらしつたんですか？

淑芳　え。あなたは？

喬生　僕は一日家にゐました。

淑芳　まアどうして？　あゝ云ふ賑かな處御嫌ひ？

喬生　嫌ひッてわけぢやありませんが――。

淑芳　もつと御本のほうが御好き？

喬生　べつに、本と燈籠と較べたわけぢやありません。行く氣がしなかつただけです。

淑芳　氣がむすぼれて？

喬生　（不思議さうな顔をして）どうしてそんな事を？

淑芳　（嫣然微笑しながら彼の手を取つて）知つてますわ。

喬生　（びつくりして）知つてらつしやる？

淑芳　え。

喬生　（身體を進めて）誰から御聞きになつたんです？

淑芳　（はづすやうに、彼の近づいた頬へ輕く指を當てながら）ちやんとこゝに書いてありますわ。

喬生　（咎めるやうに）お孃さん！

淑芳　（わざと眞面目くさつて）はい！

喬生　（氣先きを折られて）だが、僕、ほんとにそんなに

淋しさうですか?

淑芳　隨分。

喬生　ええ、今は僕、ちつとも淋しかありません。

淑芳　(聞かないふりで獨り言のやうに)　そんなにいつまでも思はれてらしつて、なくなつた奥さんはおしあはせね。

喬生　でも、今年なくなつたばかりですから。(初めて氣づいたやうに、釣りさげた刺繍の燈籠へ眼をやつて、大聲で)　あなたはこれを見てそんな事を仰つたんですね?

淑芳　(おどろいたふりで耳を抑へて)　まあ大きな御聲!

喬生　御免なさい。でもさうでせう?

淑芳　(口へ手をやつて笑ひ出す)　ほゝゝゝ……。

喬生　(眺めて)　あなたは見かけによらない人の惡いかたですね。

淑芳　おや、さうしておきますわ。――でも、あたしまだいろんな事を存じてますわ。

喬生　(好奇心に驅られて)　どんな?

淑芳　(ふざけたやうに)　第一、あなたが有名な秀才でゐらッしやる事。

喬生　(苦笑して)　それは、進士の試驗に及第した事ですか?

淑芳　そんな事位、あなたには朝飯前でゐらつしやいませう。それより、知事の政治を攻撃なさつた御文。

喬生　(再び苦笑して)　それは頭のいゝ惡いより、考へかたの正しいか正しくないかの、いや、むしろ社會階級的の問題です。

淑芳　でも、あの理論の立てかたの御見事さには、あッつけられた知事さへ感心してゐたッて云ひますわ。

喬生　然しあの御蔭で、ひどい罰金は取られる、あぶなく、フン縛られそうにはなる。おまけに、もうどこの役所でも學校でも僕を使つてくれなくなりましたよ。そのくせ政治も取り扱ひもテンデ改まりやしない。(忌々しそうに舌打ちをして)　ちえッ。感心てそんなもんですよ。(再び不思議に堪へなくなつたやうに)　そんなに、いろんな僕の事を知つてらッしやるあなたはどなたです。

淑芳　(にッこりして)　前から存じてゐる女。

喬生　前から?――でも、僕はちッとも知つてません。

淑芳　あなたが知つてゐらッしやらなければ、あたし知つてゐちやいけませんの?　(不意に眞面目に)そうかも知れませんわ。

金蓮　(そのあひだ燈籠の牡丹をいぢくつてゐて、顔をあげて)　お孃さま、お疲れになつたらまゐりませう。

淑芳　(氣づいたやうに)　ア、ほんとに長いことお邪魔いたしました。(立ちあがりかける)

喬生（彼女の手をつかんで引きとめて）もう少し。――折角持つて頂いたのに、御茶もあげずに居ました。……今、一杯差しあげます。
淑芳　休ませて頂いただけで澤山ですわ。お茶なんぞ頂いてゐると、あんまり晩くなりますから……。
喬生（遮つて）晩くなり序でにもう少しゐらしッて下さい。今すぐ、えゝ。（奥の、小さな雑な煤けた臺所へ走り込む）
金蓮　では、わたし致します。（追つて入る）
喬生（雑の蔭で）ぢや、どうか此の柴を焚いてわかして下さい。
金蓮　はい。
喬生　濟みません。（再び出て來て）さぞ御渇きでせう。――おなかも御空きでせう？（髪をつかんで）生憎何もないんです。
淑芳　いゝえ、ちツとも空いてはをりませんわ。
喬生　御親切にどうも。此の店もまう戸を閉めてゐたらう。（淑芳の側へ來て再び腰をかけて）然し不思議ですわ。
淑芳　何が？
喬生　だつて、あなたのやうなお方が此の邊にゐらしッて、今日まで僕がマルキリ知らずに居たなんて。
淑芳（微笑して）あたし、前お目にかゝつた事もありますわ。
喬生　え！――いつ？
淑芳　去年の暮。
喬生　どこで？
淑芳　輿の簾の中から……。
喬生　おやアわかりッこない。
淑芳　その時から、一度しみ〴〵御話を伺ひたい、伺ひたい、と思つてゐましたわ。
喬生　ほんとですか？
淑芳　うそだつたら、あたし幾ら疲れたつて、今夜休ませてなんか頂きませんわ。
喬生（思はず彼女の手を取つて）お孃さん！
淑芳　はい！
（喬生彼女の眼を見入る。つゞいて、、、、、、、、、、、、、――金蓮の焚く柴の微かにはじける音。その煙、うす青く臺からながれ出る。）
喬生（しばらくしてから）何て思ひがけない晩だ。こんな事と知つたら、今まで家にゐるんぢやなかつた。……ああ、今夜かうしてゐなかつたら、やつぱりあなたに御目にかゝる事は出來なかつたんでせうね。
淑芳（彼の顔を見あげて）あたしも、やツと永い間の望がかなひましたわ。

喬生　信じられないばかりだ！
淑芳　これから、いつまでも愛して下さつて？
喬生　いつまでも。
淑芳　こんな御轉婆でも？
喬生　とても好きです。
淑芳　ほんと？
喬生　ほんと以上だ。
淑芳　うれしい。（力をこめて彼の手を握る）
喬生　でも、まだあなたのお名前を伺つてません。どうか
　教へて下さい。
淑芳　名前なんか構ひませんわ。
喬生　でも——戀人の名前も知らずにゐるなんてをかし
　い。教へて下さい。
淑芳　お前つて仰つて下さりや澤山。
喬生　それぢやあ頼りない。
淑芳　いやなかた。
喬生　云つちやいけない事でもあるんですか？
淑芳　そんな事ありません。おや、あたし申しますわ。
　（喬生うなづく。）
淑芳　（俯いて指を弄びながら）淑芳。
喬生　淑芳？
淑芳　字は麗鄕。

喬生　麗鄕——いゝ名ですね。
淑芳　お氣に入つて？
喬生　とても。
淑芳　さう？　（男の胸へ、顏を寄せつける）
喬生　（彼女の髮を撫でてやりながら）　淑芳さん、で、あ
　なたは今どこにゐらツしやるんです？
淑芳　こゝ。
喬生　住んでらツしやる所です。
淑芳　又。
喬生　又？
淑芳　（半分顏をあげて）　どうしてそんなにいろんな事、
　御聞きになりたがツて？
喬生　聞きたがるのが當り前でせう。あなたの事はどんな事
　でも知りたいんです。外の人にはとんなにつまらない事
　でも、知つて知り拔きたいんです。云つて下さい。
淑芳　（彼の熱情に壓倒されたやうに）　おや申しますわ。
　今ゐる所は月湖の西。
喬生　ほう、湖西ですか。
淑芳　えゝ、父は此の先きの縣州の裁判所の判事を勤めて
　ゐたんですけれど、此の春急に轉任になつて北の方へま
　ゐりました。でも今年の初めにあたし一度遊びに來て、
　すつかりこゝいらの景色が氣に入つたもんですから、父

や母に頼んで、あの金蓮と二人で當分此の近所に住むやうに許して貰ひました。（チラと男の顔を見て）それと、あなたの御傍を離れたくなかつたんですの。その遊びに來た時、初めてお目にかゝりましたよ。丁度頭の前になり後になり、どこか御爺さんと御友達のかたと、夢中になつて話してゐらツしやいましたわね。その御聲や議論を簾の蔭で聞いて、あたし、すつかり惹きつけられましたの。

喬生　（赤面しながら）あゝ、それで僕を御覽になつたわけがわかつた。そのお爺さんは、（隣の壁を指して）隣りにゐる宗教の學者です。

淑芳　あら、さうでございましたの？

喬生　（突然當惑したやうに額を抑へて）然し弱つた。あなたは、そんな身分のある御孃さんなんですか。

淑芳　（彼の肩へ手をかけて）そんな風の娘御きらひ？

喬生　（溜息して）きらひぢやないが……。

淑芳　が？

喬生　お父さんが結婚を許しちやあ下さらないでせう。

淑芳　くれなかつたら、ひとりで逃げ出して來ますわ。

喬生　（キッと彼女の眼を見て）それが出來ますか？

淑芳　いくらでも。

喬生　（よろこんで）出來れば、他人からいろんな臆測をされる心配がなくて、僕もどんなにいゝか知れない。——（不安さうに）が、來たツて御覽のとほりの貧乏世帶ですよ。今までのあなたの生活とは何から何までちがつてます。此の寢室からしてドツサリ南京蟲がゐて、今だツてきツと食はれてゐらツしやる。それを覺悟してゐらツしやる？

淑芳　（笑ひ出して）ほゝ……そんな事、とツくに覺悟してますわ。あたし、今までのお孃さん生活に倦き〳〵しましたの。いゝえ、そんな物第一、生活なんて云へませんわ。いつ迄もあんな世界にゐるんだツたら、あたし死んだはうがましですわ。だツてこうそばツかしで、眞劍な事なんか（小指を立てゝ）これツぽかしだツてないんですもの、あなたの御力で、あたしほんとに生き甲斐のある新しい生活へ入れるかと思ふと、うれしくて仕方ありませんわ。

喬生　（懐疑的に）でも、それはあなたの御孃さん風なロマンチシズムでは……？

淑芳　（進つて強く）信じて頂けません？

喬生　（感動して）いや、淑芳さん。

淑芳　信じてね……。

（喬生、彼女の手を取つて引き寄せる。柴の青い煙。）

——急速に幕（又は暗く）——

第二幕

第一場

人物

喬生
淑芳
金蓮
張老人

時

前幕から一週間ばかり後の細雨の夜

所

前幕に同じい。が、奇麗に室が片づき、山水の圓い額なぞが懸り、寢臺には靑い(又は紅い)薄帷が懸つてゐる。

(喬生、戸口を出たり入つたりして、そは/\と落ちつきのない樣子でゐる。)

喬生 (室へ入つて) まだ來ない! どうしたんだらう? もういつもの時間なのに。(戸口へ行つて暗い往來を見廻して) 雨が降つてゐるから遲れたのか? ――もしかしたら、今夜は來ないのぢやないか? (打ち消して) いや、そんな事はない。あの人に限つて約束をちがへるなんて事は考へられない。此の一週間でもの、一日だつてちがへた事はない。それに、あんなに固く今朝約束して行つたんだ。(すぐ又不安になつて) 然しおそい! 實におそい! どうかしたら、急に身體の工合でも惡くなつたんぢやないかしら? そんなら、金蓮が何とか云つて來るだらうに……。いや、あいつも來られない位惡いんぢやないか? ――湖西の方へ行つて見ようか?……だが湖西ツてばかりで、どこら邊だかまるきりわからない。それに、出かけたあとへでも訪ねて來たら行きちがひだ。(突然新たな不安に襲はれて眼を見張つて) もしかしたら、途中で惡者にでもつかまツたんぢやないか? あゝして、若い女が毎晩おそく二人で歩いて來るんぢやあ、全く危險だ。あゝ、どうしたらいゝだらう、もしそんな事があつたら? (强く胸を叩いて) 馬鹿? 何を餘計な取り越し苦勞ばツかりやつてゐるんだ! 喬生の馬鹿め! 馬鹿め! 落ちつけ、落ちつけ、もツと落ちつけ! (室へ入つて來て、下腹へ力を入れて腰かける。が、又たまらなくなつて髮を掻く) まるで地獄だ。來さへしてくれゝば、こんな苦しみはみんな飛んでツちまふんだ。來ないうちは、てんで解決がつかない。

(鐘が遠く鳴る。喬生氣づかない。二つ目へ來て初めて氣がつく。)

喬生 あツ、鳴つてゐる。鳴つてゐる。どうしたんだ!

あれはもう鳴つたぢやないか？　あれは聞き違ひだつたか？　それとも幻聽か？　おれは氣がちがひ出したのか……。（又耳を澄ます。途端、三つ目の鐘ひゞく）あツ、やつぱり鳴つてゐる。鳴つてゐる。（いきなり戸口へ飛び出して行く）

（奧から金蓮、前幕どほりの牡丹燈籠を持つて現れる。つゞいて淑芳――今夜は各々彩りの傘をさしてゐる。喬生、雨の中へ出て彼女の手を握る。）

淑芳　まあ、お濡れになつてよ。（傘を差し出して彼を入れる）

喬生　なに濡れたつて。

淑芳　風邪でもお引きになつては……。

喬生　あなたこそ、雨で大へんだつたでせう……

淑芳　いゝえ、――お待ちになつて？

喬生　とても。

淑芳　まあ？

（金蓮燈籠を消し、寢室へ入る。喬生、淑芳を寢臺へ腰かけさせる）

金蓮　（喬生へ）御酒は召しあがりますか？

喬生　少しばかりつけて下さい。こんな濕つた晩には酒が欲しい。

金蓮　はい。（臺所へ去る）

淑芳　あなたは、前から御酒を御あがりになつて？

喬生　ちつとも飲まなかつたんです。でも、いろんな不平の味と一緒に酒の味を覺えたんです。此の頃は又、戀に醉ふと一緒に醉ふのを知つて來ました。

淑芳　（彼の肩を輕く打つて）口上手なかた！

喬生　いや、ほんとです。僕は生れて初めて生活に醉ふ事を知りましたよ。實際僕は幸福だ。餘に幸福すぎて、何だかこれでいゝのかつて氣もちがする。

淑芳　ほんと？

喬生　墮落したやうな氣もする。

淑芳　墮落？

喬生　えゝ、――あなたが來て下さるやうになつてから、御蔭で室もかう奇麗になつて、こんなに額や帷まで懸るやうになつて、少し僕の社會に對する不平の氣もちが鈍つて來たやうですよ。

淑芳　（笑ひながら）まアなさけないかた。――でも、そんな時も必要ですわ。なかく鬪つてゐらつしやるためには。

喬生　僕は、こんな時期が自分の身の上に廻らうとは、今まで夢にも考へませんでしたよ。此の頃、矢鱈、思ひも寄らなかつたいろんな事が思ひついたり、感じられたりして困りますよ。まるで、どこからか大きな白い蝶でも飛

んで來て、矢張僕の頭へ卵でも生みつけて行くやうに。

淑芳　どんな思ひも寄らない事?

喬生　たとへば——いや、そんな事を口にするのは馬鹿馬鹿しい。

淑芳　仰つて。

喬生　云ひません。

淑芳　どうぞ仰つて!……あたし、あなたの考へてらつしやる事を伺ふのが、何よりのたのしみなんですもの。

喬生　でも、男には口にしていゝ事と、よくない事とあります。

淑芳　そんなによくない事?

喬生　そう悪い事でもないでせうが……。

淑芳　おや話して、——ね。ね。(見あげながら彼の胸をたたく)

喬生　(思ひ切つて)　そんなら云ひませう。僕ね、子供が欲しくなつちやツた。

(淑芳、おどろいたやうにうなだれる)

喬生　(彼女の手を握りしめて)　あなたの生む子供なら、どんなに可愛い顏をしてゐるでせう。きつとあなたに、そして少し僕に似てゐますよ。そんなあなたを小さくしたやうな奴が出て來たら、僕はもう可愛くて〳〵、きつと食べるやうに大事にするな。

(淑芳默つてゐる。)

喬生　(情熱的につゞけて)　どうしてこんな考へが頭の中へ這入り込んで來たんだか、わからないんです。早くお父さんになりたいなんて、まだ若い男の癖に、全くなんてをかしな空想だらう。……ね、變でせう?　(彼女の顏を覗き込む。そしてにがく淋しい顏つきにびつくりして)　アッ淑芳さん!……。

(淑芳いそいで顏を掩ふ。)

喬生　(彼女の肩へ手をかけて)　どうしてそんな顏をするんです?

(淑芳、咽び泣き始める。)

喬生　(再びびッくりして)　どうしたんです?　僕の言葉が氣に障つたんですか?

淑芳　(首を振つて)　いゝえ。

喬生　おやあ何故?

淑芳　……。

喬生　何故?

淑芳　どうぞ何にも聞かないで。

喬生　(アッケに取られながら)　子供なんざ欲しくないんですか?

淑芳　いゝえ。

喬生　おや、そんな事を云ふ僕がいや?

淑芳　（首を振つて涙聲で）いゝえ、いゝえ。……わたし、どんなにうれしいか――。

喬生　（途方にくれて）ちツともわからない！

淑芳　でも、あたしは子供なんか――。

喬生　出來ないツて云ふんですか？

淑芳　えゝ、その前にあたし死んで……。

喬生　（抱きしめて）何を馬鹿な……何故あなたが死ぬんです？　どうしてそんないやな事を云ふんです？

淑芳　（涙に濡れた頬を手帛で拭きながら）生みますわ、生みますわ。きつとあなたに似た赤ちやんを――。（突然笑ひ出して）あたし、姉が前に赤ちやんを生みそこなつて死んだのが頭に殘つてゐるもんですから、ついあんな口をすべらせてしまつて、どうぞ勘忍してね。

喬生　何だ！　その爲めですか。

（淑芳うなづく。）

喬生　なに勘忍も糞もあるもんか。でも、隨分あなたは子供らしいんですね。お蔭ですつかりびつくりしちやつた。

淑芳　濟みません。……（彼の顏を見ながら）子供はお好き？

喬生　好きです。

淑芳　ぢや、前の奧さんの時もそう御思ひになつたんでしよ？

喬生　子供を欲しいつて？

淑芳　えゝ。

喬生　まるでない。

淑芳　うそばつかり。

喬生　うそぢやない。

淑芳　だつて、隨分奧さんを愛してゐらしつたんでせう？

喬生　そりやあ可成り可愛がつてはゐました。でも、不思議と子供を欲しいなんて考へた事は一度もない。

淑芳　きつと御弱かつたから――。

喬生　そればかりぢやない。

淑芳　ぢやあ、まだ御若かつたから？

喬生　あなたほど若くはない。

淑芳　ぢや何故？　――うそ、うそ！

喬生　淑芳さん！

（途端、少し開いた天井窓から急に風が吹き込んで來て、燭臺の燈が消える。室暗くなる。）

喬生　ア、消えちまツた。

淑芳　風が出ましてね、

喬生　どうしてあんな處が開いてゐたんだらう？　一寸待つて下さい。（火打ち石を探り取つて、打ち始める）

＊　＊　＊　＊　＊

（幕あいて間もなく、壁一重隣りの張老人が奥から室へ出て、古い本を讀み始める。淑芳達が訪れて來ると、微かに聞える聲に耳をそばだてる。）
張老人　又來た。これで一週間、毎晩誰かやつて來ては、おそくまで話聲や笑ひ聲がしてゐる。細君がなくなつてから、いや、なくなる前からも、こんな事はついぞなかつた事だ。一體誰だらう？（土壁のヒビ入つた所へ蝙蝠のやうに吸ひつき、ピッタリ耳を當てる。間）えゝ、わからん。思ひ切つて、穴をあけて覗いてやれ！（奥へ行つて長い錐を持ち出して來る。それを壁のキズの一部へ直角に揉む。喬生達に氣づかれないやうにゆッくり、用心深く。――やがて穴を穿つて覗いて見る）駄目だ。もつと大きくしなくちやあ……。（更に熱心に揉みひろげる。再び覗く）
（丁度喬生の室の燈が消えてゐる。）
張老人　眞ッ暗だ！
（やがて燈がつく。と、喬生の傍に、淑芳の着物を着た骸骨が立つ。）
喬生　もう秋らしい風ですね。（窓を閉める）
（女の骸骨、燭臺を身體で蔽ひながら見あげる。）
張老人　あッ！（叫んで尻餅をつく）
――暗　黒――

第　二　場

人　物

張　老　人
喬　　　生

時

前場の翌朝早く

所

前場に同じい

雨後の朝のほがらかな外光。が、喬生の家の戸口は閉り、彼は暗い寢臺の中にグッスリ眠つてゐる。
張老人、自分の家から出て彼の家の戸口に立つ。手をかけて開かないので、力任せに叩く。
張老人　（同時に呼ぶ）喬生さん！　喬生さん！
（喬生起きない。老人繰り返し呼び又叩く。）
喬生　（やがて首をあげて）どなた？
張老人　わしぢや。早くこゝをあけて下さい。
喬生　（獨語）張ぢいさんの聲だ。――おゝ、ねむい。……（戸口へ向つて）何か御用ですか！
張老人　用とも、大至急の用ぢや。
喬生　大至急？　――朝ッぱらから何だらう。えゝ、面倒くさいな。（戸口へ）今あけます。（不精々々寢衣のまゝ

起きて行つて戸をあける）御早う！

張老人　御早う。あんたにはね。……が、わしには一向早くない。わしは、昨夜ツから碌々寢てないんぢや。

喬生　やつぱり？　――（氣づいて、急に笑ひ出して）それぢやあ早過ぎますよ

張老人　早過ぎるどころか、（指で嚇して）愚圖々々してゐやうもんなら、あんたは破滅ぢや。

喬生　え？

張老人　（大聲で）破滅ぢや。

喬生　アッケに取られて）何の事です、そりやあ一體？

張老人　今話す。その前にこゝを閉めておくから、あんた、そこの窓を閉けなさい。おゝ、その昨夜の窓ぢや。

（喬生ギクリとして、默つて天井窓をあける。老人戸口を閉める。）

張老人　喬生さん、まあ腰をかけなさい。

喬生　おぢいさんこそ。（椅子を勸める）

張老人　わしも掛ける。

（老人は椅子へ、喬生は寢臺へ掛ける。）

張老人　わしはた、喬生さん！　今日は忠告に來たんぢや。

喬生　（俯れて）わかつてゐます。

張老人　わかつてる？

喬生　（跪いて）おぢいさん、いつも御懇意にしてゐるあなたに匿してゐた事を勘辨して下さい。僕にもあまり不意で、それに、散々御世話になつた女房がなくなつて長くもない事で、どうも云へなかつたんです。

張老人　何た、そんた事か。わしはそんた小言を言ひに來たんぢやない。いや、それも云ひたいが、もつと恐ろしい事件ぢや。

喬生　恐ろしい？

張老人　とても恐ろしい問題ぢや。

喬生　あの戀人についての外、僕は今恐ろしい事は知りません。

張老人　（怒鳴る）馬鹿！　その女が恐ろしいのぢや。

喬生　え？

張老人　あれはたゞの女ぢやないぞ。

喬生　（落ちついて）無論有りふれた女ぢやありません。

張老人　（業を煮やして）そんな事を云つてるんぢやない。あんたともあらう若者が、何てたぶらかされかただや！

喬生　（愈々落ちついて）ぢや、どう云ふ女です？　ヴァンパイアだとでも仰るんですか？

張老人　ヴァンパイア以上ぢや。骸骨ぢや。肉も血も吸ふ女骸骨ぢや。

喬生　えつ？
張老人　さうとも知らず。毎晩あんたは、、、、、、、、、、、、ゐるんぢや。
喬生（キッとして）いくら氣もちを惡くしたつて、あんまり變な言葉はよして下さい。そんな譬喩や皮肉は古くてまづ過ぎます。
張老人（喬生の腕をつかんで）喬生さん！　何の皮肉や譬喩なもんか。正眞正銘の事實ぢやぞ。
喬生　事實？
張老人　此の二つの眼が證據ぢや。
喬生　ゆうべ窓から見たつて仰るんですか。
張老人　窓ぢやアなく、壁へ穴をあけて覗いたんぢや。さう云ふわしの無禮はあやまる。が、わしは一つもうそを云ふわけには行かん。（壁のところへ行つて穴を示して）これぢや。
喬生（つゞいて行つて見る）なるほど――。
張老人　こゝから覗くと、あんたは燭臺へ火を點けて、傍に着物を着た骸骨が立つてるんぢや。それからあんたが「もう秋らしい風ですね。」とか何とか云つて窓を閉めると、骸骨も一緒に見あげるぢやないか。わしはそれを見て、思はずあッと云つて尻餅をついちまつた。
喬生　さう云へば、あの時あなたの室で何か音がしたと思ひました。
張老人　それで疑ふ餘地はあるまい。
喬生（疑惑に堪へないやうに）だが信じられない事實だ。あまりに信じられない事實だ。（言葉を變へて）僕は決してあなたの言葉を疑ひはしません。あなたはいつでも正直だ。あなたがさうまで仰るのにうそだとは思へない。が、僕はあなたの眼を信じていゝか知ら。
張老人　年寄りの眼は信用出來ない、ッて云ふのかな？
喬生　いや、然し幻覺では……？
張老人　馬鹿な！　七十年間、一遍も不名譽は犯した事のない此の眼ぢや。
喬生　が、なぜ僕には骸骨に見えないだらう？
張老人（笑つて）はゝ……幽靈や妖怪と會つてゐる時は、他人の眼のはうがずッと確かぢや。戀人と會つてゐる時も大抵さうぢや。戀人と幽靈と重なれば、いよいよ他人の眼の方が確かぢや。
喬生　でも、あの人は死人にしては生き／＼し過ぎてゐます。生きてゐる女にだッて、あんなに生き／＼した自由な人は滅多――いや、一人もゐない。もしあの人が死人なら外の女は死人以下だ。
張老人　それが惚れた欲目と云ふ奴ぢや。いや、此のわしにも昔隨分覺えがある。惚れて了ふと、誰でも相手には

ふり生きてゐるやうな氣もちになる。從つて、相手の女が矢鱈生き〳〵して見えるんぢや。

喬生　そればかりぢやありません。あれは確かにあの人の特色だ。

張老人　もし特色や個性なら、死んでからだツて通用せんかな？

喬生　あなたは屁理窟の上手だ。いや、そんな事を云ふのは、みんなよくあの女を御存じないからだ。

張老人　喬生さん！　もしほんとにそんな素ばらしく生き生きしてゐる女だつたら、その點も亡者ぢや、此の不自由な今の世の中に、然らなくて、一體そんな自由な生き生きした者がゐると思ふかな？

喬生　それは全くです。僕もその點はびつくりしたんです。(不意に思ひついたやうに頭を兩手で抑へて)あツ！

張老人　どうしたんぢや、喬生さん！(彼の肩へ手をかける)

喬生　(しばらくして蒼い顔をあげて正面看客席——を見つめて)そう云へば、まだわからない事がある。あの、子供の話をした時の樣子が實にをかしい。赤ん坊を欲しいツて聞いて、なぜあの人はあんなに泣き出したらう？　いや、その前に、あのおそろしい淋しい顔つきは一體どうしたんだ？　あんな顔つきを、今まで一度も人間の表情に見た事がない。そいつは、死人との赤ん坊を生む可能性がないからぢやなかつたか？　おゝ、まだ「その前にあたし死んで……」ツて云つたぞ。いよ〳〵變だ。そう云へば、あの盆の晩初めて牡丹燈籠をさげて來て、それから毎晩同じやうにさげて來るのも、鐘の音を合圖に來るのも、自分の家をどうしてもハッキリ敎へないのも變だ。

張老人　それ御覽。そいつは無論みんなあの女の死人の證據ぢや。そんな死人と一緒にふざけてゐれば、あんたの生命は忽ち燃え盡きて了ふぞ。今のうちわしが見つけてよかツた。もう少ししたら、もう取り返しのつかない事になるところぢやつた。

喬生　(つゞけて正面を見つめて)と、さ、それは一體何物だ？　やつぱり豐州の判事の、今は死んでゐる娘の淑芳か？　それともどこか外の家の女か？

張老人　ほう、そんな事を云つてゐたか？　そして、今はどこにゐるといつてゐたな？

喬生　湖西。

張老人　湖西か。それより詳しくは云はなかつたか？

喬生　云ひません。

張老人　ふむ、……いや、そう云ふ言葉にうそはあるまい。が、なほハッキリ知りたければ、豐州までは、とても

遠くて駄目ぢやが、何なら今日湖西まで行つて調べて來ればいゝ。

喬生 （老人の方へ向いて）おぢいさん、行つて來ます。きツと行つて來ます。さうしなければ、僕の氣もちはとても靜まらない。

張老人 ぢやあ行つて來なさい。ぢやが喬生さん、誰の幽靈にしても幽靈に變りはない。かうハツキリわかつた上は、もう今夜から決して、そんな者に會つちや駄目ぢやぞ。いゝか？

喬生 えゝ――（口ごもつて）が……。

張老人 が――何ぢや？

喬生 が、もう一度會つてきいてみたい。

張老人 何をきくんぢや？

喬生 どう云ふわけで、死人のくせに僕のところへなぞわざ／＼やつて來たか？――あれは自分では、おぢいさんと一緒に僕が歩いてゐるところを見て、話をきいて、思ふやうになつたツて言つてるんです。が、ほんとにそうなのか？ それともそいつは作り事で、まるで僕をだましてゐるのか？ だましてゐるとすれば一體何の爲めか？……

張老人 馬鹿ツ！――そんな事が何の足しになる？ そんな事を云つて今夜會ひでもしたら、あんたはどんな目に會はされるかも知れんぞ。多分もう今夜限り生命を取られちまふかも知れんぞ。それでも値打がわかるツて云ふたらまだしも、今迄でさへ何にも知らずに欺されて來たあんたぢや、幾ら會つたツて、向うが云ひくるめやうとさへ思へば、どうして實を吐かせる事なぞか出來る？ 問題は簡單ぢや。あんたは、あの女について一番大事な點を欺され、又は隠されてゐたんぢや。そして蟻が蟬の身體でも引つ張るやうに、ぐん／＼死の穴のほうへ引きずられてゐたんぢや。

喬生 （俯れて）うむ、さうかも知れない。

張老人 會ふ限り、あの女はあんたの破滅ぢや。あんたのまだ若い生命と仕事と才能を大事に思つたら、今後一切あんな者に會つてはいかん。思想はちがふが、わしはもとから深くあんたの人となりを愛してゐるんぢや。あんたが不遇で不幸であればあるだけ、年上の友人の一人としてしんみに増して愛してゐるんぢや。こんな事でわしはあんたを亡ぼしたくない。絶對したくない。な、わしの眞ごころを汲みなさい。

喬生 おぢいさん……御禮を云ひます。

（固く老人の手を握る。）

――幕――

第三幕

第一場

人物

喬生

時

前幕の午後

所

湖心寺（月湖の中に建つ。）

正面に「湖心寺」と大書の、蒼古とした金地の扁額が懸る。

喬生、下手から疲れ切つて歩いて來て、寺の階段にグツタリ腰をおろす。

喬生　（獨語）疲れた。（額へ手を當てゝ）隨分歩いた。――だが、どうしてもわからない。長い堤の上、高い橋の下、白花莊の軒並み……朝から今まで、人に訊いたり探したりして散々歩き廻つたが、てんで知れない。みんな、そんな女の名前さへ聞いた事がないつて云ふ。お寺も隨分訪ねた。だが、此の最後の湖心寺にもそれらしい墓がないとすると、もう探す場所はどこもない。――と淑芳だの湖西だのツて云ふのは、あれはみんな出鱈目か？　そいつが出鱈目なら、ほかの事も一切出鱈目の出まかせか？　一生に一つツきり出來ないつて云ふ戀、……そう自分が考へてゐたのは、一切欺瞞だつたのか？　空へ浮んだ蜃氣樓だつたのか？　自分の幻想と自惚れに過ぎなかつたのか？　おゝ、どうかさうでなくてくれ。かうなれば、たとへ幽靈でも骸骨でも何でもいゝ。彼女が自分を思ひ自分が彼女を思つてゐた事だけは、どうかほんとであつてくれ。おれの考へまで幽靈だつたなんて笑はないでくれ。此の戀愛の眞實だけは否定しないでくれ。でなかつたら、おれはあんまりみじめだ。（頭を垂れて兩手を握る）――だが、どこにも事實が見つからない。その限り、おれはどこまであの人の眞實を、あの戀愛の眞實を信していゝかわからない。おゝ何て地獄だ！　もしかしたら、これはおれの信じる力が足りない爲めか？　もしあのおぢいさんの言葉が間違ひだつたら？……いや、そんな事はあり得ない。湖西にそんな名前の女が存在しない事が、いよ〳〵事實を證明してゐる。――が、一體何の爲めにあの女はおれの前へ現れて來たんだ？　おれの精神と眞實の薄弱の證據の爲めにか？　その嘲笑の爲めにか？　そんなら、それは一體何の爲めに？（間。頭を抑へて）氣がちがひさうだ！　生れて今までおれはこんなに滅茶苦茶に混亂させられた事は一遍もない。おれは一度に、物を考へる力をすつかり失して了つたやうだ。

認識の根抵からグラツキ出したんだ！（立ちあがつて）が、これ以上どうする事も出來ない。おれの力では駄目だ。仕方ない、歸つておぢいさんに報告して意見を聞かう。（二三歩歩き出して、急に立ちどまつて）待て、まだこゝの位牌壇を見てゐない。どうせそんな處に何にもありつこはないが、おぢいさんに訊かれた時の用意に、ともかく見ておかう。（戻つて、階段をあがる。それから前面の扉をあけて入る）

（しばらくして出て來る。）

喬生　ない。――どこに此の寺の位牌は置いてあるんだ？

（上手のも一つの戸（正面へひらくやうになつてゐる）をあけやうとする。あかない。喬生、力一杯把手をひねる。と、急に獨り手のやうに大きな戸が右へひらく。それは薄暗い小室で、その中に一個の旅棺（埋葬せずに假りに寺で預つておく棺）が据ゑてある。その正面へ白紙が貼られ。「故豐州判事女淑芳字麗卿之柩」とおほきく書きつけてある。紙の横手に大きな美麗なとむらひ人形を一つ立てかけ、上へ前幕の牡丹燈籠が懸る。）

喬生　（思はず叫び聲をあげる）あツ――。（自分の眼を疑ふやうに、又確かめるやうに讀む）故豐州判事女淑芳字麗卿之柩……。

喬生　（つゞいて）おゝ、燈籠！（一時凝然。やがて氣づいたやうに、いきなり人形を取りあげて見る。その背中を返して、書いてある字をよむ）――金蓮！（突然そこへ抛り出して、殆んど夢中に階段を驅けおりる。そこで再び無意識に立ち留つて、靜かに光つてゐる紙や燈籠を見あげる）

喬生　やつぱり死人か！　死人と夢中に戀をしてゐたのか？　こんな所にゐたのか？……何ておそろしい眞實だ！（頭を抑へて走り去る）

（燈籠かすかに動く。）

――ゆつくり幕（又は暗轉）――

第二場

人物

張老人
喬生
淑芳
金蓮

時

前場の夜

所

第二幕に同じい

張老人　（室で喬生を待ちあぐんで歩き廻つてゐる。獨語）まだ戻つて來ん！　幾ら四明山まで距離があるにしても、もう戻つて來ていゝ時間ぢや。あんなにいそいで飛んで行つたんぢやから。――生憎道人が留守だつたのぢやないか？　そんならそれで、明日又出なほすとして、早く戻つて來ればいゝのに、いつまでも待つてゐるんぢやないか？　それとも、昔から頑固の評判の高いあの道人の事ぢや、もしかしたらきいてくれなかつたのぢやないか。そうなツたらコトぢや。戻つて來る途中で、きツとあの骸骨達に取ツつかまるにちがひない。取ツつかまつて、抱きつかれたり泣かれたりしたら、幾ら逃げやうと思つても、若い男は又へな／＼になるに定つてゐる。そうなつたら、もう今夜があれの最後ぢや。自分の苦心も水の泡ぢや。可哀そうに、あの將來を持つた男をどうか助けてやりたい。おゝ神仙や三千の諸佛！　此の年寄りの身體に換へて、どうかあの若者を救つてやつて下さい。（跪いて祈る）

張老人　（しばらくして立ちあがつて戸口へ行き、そとを見る）まだ見えん。まつたくどうかしてゐる。もうそろそろ幽靈達の訪れて來る時間ぢや。來たら、いよ／＼取り返しがつかん。（癇癪を起して）えゝ、若い男つて何て年寄りに氣を揉ませる喬生ぢやらう！　（腕を振つて）若いものなんか、いつそ一人殘らず此の世の中から消えてなくなツちまへ！（次の瞬間、堪へ切れず暗がりへ向つて呼ぶ）喬生さん！　喬生さん！……（耳を澄ます）

（やゝ遠く五位鷺の聲。）

張老人　（愕然として）あの聲は何だ？

（再び五位鷺が答へる。）

張老人　五位が鳴いてるのか？　不吉な鳥ぢや。あゝ、もう駄目か！（絶望して戻つて來て椅子へ倒れかゝる）

（喬生、その時下手から、自分の閉ぢた家の前を驅け拔けて來る。）

喬生　（戸口へ立つて、渇いたかすれた聲で）おぢいさん！

張老人　（聞えずに、頭をかゝへて呻く）駄目か！

喬生　（飛び込んで老人の肩へ手をかけて）おぢいさん、歸りましたよ。

張老人　（顔をあげて）おゝ、喬生さんか！（うれしさの餘り抱きつく）

（喬生、もたれながら荒い息を吐く。）

張老人　おゝ、息を切らして。

喬生　一生縣命飛んで來たもんで……。

張老人　そうか！　わしも心配し切つてゐたところぢや。――道人はゐたか？

喬生　ゐました。

張老人　祈禱はして貰へたかな？
喬生　貰へました。
張老人　おゝ、それはよかつた！
喬生　護符もくれました。そら。（二枚の朱の護符を懐から出して見せる）
張老人　（表の字をよんで）四明山、鐵冠道人。……まちがひなく道人の護符ぢや。よかつた。よかつた。（喬生の身體を兩手でさすりながら）で、これをどうしろと云つたな？
喬生　一枚を戸口、一枚を寢臺の上へ貼つておけッて云ひました。
張老人　ぢやアすぐ貼つて來なさい。もう來る時間ぢや。一分間でも愚圖々々してゐて貼り遲れたら大變ぢや。サこゝに糊壺がある！
（喬生、壺を持つて飛び出して、自分の家の戸口へ一枚貼り、あけて室へ入つて、寢臺の上へ一枚貼る。又戸をしめて、いそいで老人の家へ戻る。）
張老人　（緊張して待つて）ヤツたか？
喬生　えゝ。
張老人　（腕を擧げて）もう安心ぢや、もう安心ぢや。――さあ百疋の骸骨でも千疋の鬼でもやつて來い。もう喬生は大丈夫ぢやぞ！
喬生　おぢいさん、みんなあなたの御蔭です。あなたがゐなかつたら、僕はもうとても此の破滅から逃れる事は出來なかつたんです。
張老人　何がわしの力なもんか。みんなあんたに生きられる運があつたからぢや。ぢやが、その運の手傳ひが出來たかと思ふと、わしはほんとにうれしい。
喬生　道人は、僕を見るなり、何もきかずに、おゝ、お前は何て死の影の濃い奴ぢや、ッて云つて、臭い物でも脇へ來たやうに、傍の香を一抓みつまんで香爐へ投げ込みました。
張老人　さすがは道人ぢや。……ぢやが、あんたの此の頃の瘦せて來た顏つきを見れば、誰だつて少しは感つけるよ。道人は、で、氣もちよく引き受けてくれたか？
喬生　少うし不機嫌のやうでした。そして、もうこれからは決して死人達に會はないつて誓へるか、誓へないなら祈禱はしてやれない、ッて云ひました。
張老人　ふむ、さすが行き屆いてる。で、あんたは誓つたんぢやな？
喬生　えゝ。
張老人　まだ外に何か云つたか？
喬生　護符をくれてから、此の後忘れても湖心寺へは行つちやいけない、ッて云ひました。

張老人　それも捨はせられたか。

喬生　えゝ――。（反撥的に）誓はなくツたツて、どうして二度とあんな所へゆくもんですか。

張老人　そうとも。

喬生　（決心的に）これから、僕はほんとに生れかはつたつもりで文生活を踏み出します。仕事もします。此の一週間、あの女の事ばかりで僕は夢中になつてゐました。外の事はみんな忘れちまつて何てザマだ！　こんな事は生れて初めてだ。

（その時、鐘の音が遠く響きはじめる。）

張老人　（喬生を遮つて）鳴つてるぞ。

（喬生身ぶるひする。老人と一緒に耳を澄ます。鐘つづいて鳴る。）

（二人、別々に緊張し切る。瞬間的深寂。）

（と、下手いつもの所から金蓮と淑芳が現れる。）

金蓮　（燈籠をさげて戸口へ近づきながら、振り返つて）いつも出迎へて下さいますのに、今日はどうしてでせう？（やがて戸口へ行つて）御免下さいまし。（云ひつゝ、初めて頭上の朱符に氣づく）あツ！（あぶなく燈籠を取り落しそうにしながら、うしろへよろめく。）

淑芳　（おゝこわい〳〵）どうしたの？

（金蓮、無言で片手に朱符を指さし、片手で燈籠を擧げてそこへ明りを送る。）

淑芳　（叫ぶ）あツ！

（二人しばらく顔を見合す。）

淑芳　（やがて呼ぶ）喬生さま！

（老人の家の喬生、さつきからの緊張へ刺戟を加へられて、思はずそとへ驅け出さうとする。）

（老人あわてゝ引きもどす。）

淑芳　（再び呼ぶ）あなた！

（喬生戰慄する。）

（淑芳と金蓮、ぢつと耳を澄ます。が、何の應答もないのを見て、再び顔を見合はせ、急に一緒に笑ひ出す。）

ほゝゝ………。

（喬生と老人戰慄する。）

金蓮　（淑芳へ）あのかたは、わたし達の事を御存じになつて、怖くおなりなさいましたのねえ。

淑芳　そうよ（再び笑はうとして、突然顔も身體も痙攣する。そのまゝ倒れかゝる。）

金蓮　お孃樣！（いそいで彼女の身體を片腕に抱きかゝへる。）

（淑芳、金蓮の肩へ顔を當てゝ咽び泣き始める。）

金蓮　お孃さま、お泣きなさいますな。決して――。

淑芳　でも、――でも長いあひだの思ひがやつとかなつたと思つたのに……。（あとはむせんで了ふ）

金蓮　ほんとに、死ぬほど御思ひになつた戀ですのにね。（間）でも、もうこんな物が貼つてあつては仕方ありません。

淑芳　あのかたも中にゐらつしやらないやうね。

金蓮　ゐらつしやれば、こんなに御呼びになるのに出ていらつしやらない筈はありません。

淑芳　（又咽びながら）たつた一週間ばかりで……。

金蓮　ほんとに、……でも、又きつと御會へになりますわ。とにかく今晩は戻りませう。

（淑芳うなづき、金蓮に扶けられながら去る。）

（喬生と老人、一言も洩らさず始終を聞く。喬生は自分を忘れて時々苦しさうに手を額へ置く。）

張老人　（淑芳達が去つたのを知つて）おゝ、あんたは救はれたぞ！（呆然とした喬生を抱く）

――急速に幕――

第四幕

第一場

人物

喬生

金蓮

淑芳

時

前幕から一月足らず後の夜

所

湖心寺。（第三幕第一場に同じい。）

蒼涼たる半月の夜。淑芳の棺を置いてある部屋から、戸を透して牡丹燈籠の明りが薄く射してゐる。陰氣なふくろふの鳴き聲。

喬生、醉つた足取りで下手から現れる。

喬生　（獨語）とても我慢出來ない。それをやツとかうして酒で我慢してゐる。いや、我慢ぢやアなくて胡魔化しだ。飲めば飲むだけ、心の底ではいよ／＼淋しく、いよいよあの人が戀しくなつて來る。そいつを、たゞ上ツつらだけ胡魔化してゐるんだ。自分でちやんとそれを知つてるんだから餘計みじめだ。（石ころへ躓いて倒れ、そのまゝペツタリ坐る）

喬生　おゝ痛い！――何てダラシのなさ加減だ！――だが此の頃の酒の苦さはどうだ！　あゝ、昔のやうにうまく、心の底までも胡魔化してくれる酒はないか？いや、それより、何でもいゝ、おれを又もとへ引き戻し

てくれる物はないか。良心、事業、文藝、娛樂……何一つおれを救つてくれるものはない。幾ら自分を叩きつけても叩きつけても、てんで駄目だ。死の恐怖？　破滅？——そんな單語を、幾ら呪文のやうに繰り返しても何の役にも立たない。いや、繰り返せば返すほど、餘計戀しい氣持が増して來る。まるで、豚肉へつけた芥子だ。死だの破滅だのッて觀念がくッつけばくッつくだけ、一層戀愛が魅惑的になつて來る。死よりも強し、ぢやアなくて死によつて強しだ。……（嘆息して）　あの晩から、おれはすッかり自分の生活を洗ふ決心をした。女房が死んでから少し取りとめがなくなつて來たおれの生活を、これを機會に新しく建てたほさうと言つた。實際、又あの女から離れて了ひさへすれば立派に出來ると思つたんだ。それがどうだ！　反つてあらゆる力をおれはなくして了つた。何の元氣もなければ張りもなく、毎日たゞ鬱鬱と、白いクラゲのやうにぼんやり暮すだけだ。仕事どころか、食べる事や寢る事さへも時々忘れて了ふ。まるで魂の脱けた殼だ。生きた屍だ。もうあの一週間のあひだに、おれはすッかり自分の生命を奪はれちまッたのか？　（不意に追憶して）　あの一週間！　——あゝ、だが、あの間だけはどうしても忘れられない。まるで昨日のやうな生き〳〵しさと樂しさだ。あの一週間をもう一度持つ事さへ出來れば、おれは一切の物を泥の中へ叩ッ込んでもいゝ。（急に自分に返つて頭をなぐりつけて）　馬鹿め！　誰が一體あの一週間をブチ切つたんだ？　あの朱の護符を貰つて來たのは、そして貼つたのは一體誰だ？　此のおれの外の何者でもないぢやないか？　それにあのおぢいさんのしんみな親切！　おゝ、それを考へたら、こんな馬鹿々々しい事が考へられた義理か？　——へッ、何が眞實の戀愛だ？　あの女は、おれを愛してゐるの慕つてゐるのッて云ひながら、實は死の穴へズン〳〵引ッ張り込んでゐたぢやアないか？　おれにヨリ多く生命（いのち）を與へる爲めぢやアなく、破滅させる爲めに戀をしてゐたぢやないか？　もしほんとうにおれを愛してゐたなら、どんなに會ひたくたッて、見す〳〵おれを破滅のはうへなんか引き摺つて行く筈はない。行ける筈はない。然もその大事な點を、あの女はまるきり匿してゐたぢやないか。これが立派な奸計でなくて何だ？　奸計でないにしたところで、尠くも眞實の戀愛である筈がない。幽靈の悪ふざけか、生きてゐる時滿足出來なかつた女の肉慾的執念か？　そんな戀愛に夢中になるなんて然もその眞相が暴露された今になつて、まだかうして思ひ切れずにゐるなんて、おゝ、何ておれは馬鹿者だ！　今までおれはそんな意氣地無しだつたのか？　おれの今までの自信や

思想は、そんな安ッぽい脆いものだつたのか？　それとも、おれはもうすつかり變つた人間になつてゐるのか？（頭をかゝへろ。いきなり猛烈な思慕に襲はれろ）——會ひたい！——會ひたい！　焦きつくやうに會ひたい！　もう一度淑芳の顔が見たい。あの聲を聞きたい。金蓮の燈籠の、あのほの〴〵と軟かな光を眺めたい。その爲めには死んでもいゝ。もう一度會へさへすれば！——一度だけでもいゝ！　うむ。（呻きながら悶え倒れろ）

（しばらくして起きあがつて）一體こゝはどこだ！（四邊を見廻す。間）お寺へ來てゐるのか？　いつの間にこんな處へやつて來たんだ？（階段から上を見上げて）おゝ、こゝは見覺えがある處だ。はて、何寺だつたかしら？（首を傾けて突然愕然とする）湖心寺だ！——あツ、あそこは棺のある室だ。（思はず上手へ驅け出し。植ゑ込みへぶツつかつて、下手へ向ふ）

（その時、小室の戸が音もなくひらいて、牡丹燈籠を片手に持つた金蓮が現れろ。淑芳背後に立つ。）

金蓮　喬生さま！

（喬生、ブレーキをかけられた車のやうに立ちどまろ。）

金蓮　（頭をさげて）まあよくいらツしやいました事。……今御聲がしましたから、もしかあなたではないかしら、それとも又うつゝかしら、ツて、お孃さまと御話してゐましたんですよ。（背後を向いて淑芳に）やつぱりそうでしたわ。

（淑芳うれしそうにうなづく。）

金蓮　（燈籠を持つたまゝ階段を走りくだツて、喬生の手を取つて）散々お孃さまがこがれてゐらツしやるのに、どうしてあんな薄情な眞似をなさいます？　男のかたつて、ほんとにひどう御座いますのねえ。

喬生　（力のない聲で叫ぶ）放して下さい。よして下さい。僕は道をまちがつてやつて來たんです。

金蓮　道を？——でもお孃さまへの道は、ちツともまちがツてをりませんわ。（笑ひ出して）まア面白い喬生さま。……なぜ又そんな云ひわけを仰いますの？　そんな駄々をこねずに、さア早くいらツしやいましツてば。

（喬生の手を取つて引く。）

（喬生、踏みとゞまらうとあせりながら、夢遊病者のやうに引かれて階段をあがる。）

淑芳　（いそ〳〵と迎へて、金蓮に代つて彼の手を取りながら、輕く頭をさげる）しばらくで御座いましたのね。

（喬生思はず挨拶を返す。）

淑芳　あたし、きツと來て下さると思つてをりましたわ。

切なく思ひながら、でも一生懸命今まで御待ちしてをりましたわ。とう〱……。ほんとによく來て下さいましたわ。（彼を室へ導き入れやうとする）

喬生　（聲をふりしぼつて）放して下さい。

淑芳　（靜かに振り返つて嫣然と）なぜ？

喬生　なぜでも。――（責め問はうとして眞ッ直に彼女を見つめる。が、すぐ敗北して横――客席のはう――へ顏を向けながら）僕を、あなたはだましてゐたぢやありませんか？

淑芳　（頭をさげて）堪忍してね。あたし、ほんとに少しづつうそを吐いてをりましたわ。でも、それもみんなあなたに會ひたいばかりでしたの。――御わかりになつてね？　どうぞ堪忍してね。

喬生　だが、なぜあなたはこんなになつてる事を！……死んでゐる事を匿したんだ？

淑芳　どうしてそんな事を御きゝなさいます？

喬生　どうして？

淑芳　それより、あなたをこがれたばかりに死んだあたしの事を、なぜ聞いては下さいません？　あなたは奧さんが御ありになり、あたしは無理矢理政略結婚を勸められて……いゝえ、それより何より、世の中の馬鹿げた窮屈な階級の差別なんかに繩のやうに縛られて、どんなに思つたところでとても御一緒になれる道はないと知つて、此の世を怨んで泣き死に死んだあたしの事を、なぜ聞いて下さいません？　でも、死んでも思ひ切れずに、かうして又此の世へあがつて來て御目にかゝるあたしを、なぜ可哀そうとは思つて下さいません？

喬生　（見つめて）ほんとですか、そいつは？

淑芳　今になつて、あたしうそなんぞ云ふと御思ひになつて？

喬生　（唸つて）うむ、……でも――。

淑芳　わかつてますわ。それはそうとして、ほんとにあたしが愛してゐるんだつたら、なぜおれを一緒に死ぬはうへなんか引つ張つて行つたんだ、つて仰るんでせう？

喬生　（强ひてつよく）そうだ。そのとほりです。

淑芳　それはあたしの罪ですわ。如何にも、あたしの若さの誤りと無謀ですわ。その事で御責めになるなら、あたし泣くばつかりですわ。（片手の袖で顏を蔽つて）……どうぞ堪忍してね。あなたを一緒に死なせたいなんて、あたしどうして矢鱈に思ふもんでせう。此の世の中の何よりも愛してゐるあなたを――それどこかあなたの爲めになら、あたし二度でも三度でも死にますわ。いゝえ、何十度でも何百度でも。……でも、あたしを死の世界からさへ引つ張りあげた情熱か、その事實の矛盾をあたしに

考へさせる事を許さなかつたんです。いゝえ、考へる事はどんなに考へても、あたしの願ひを貫く爲めには、どうしてもかうしなくてはゐられなかつたんです。その切ない立場の矛盾を、惡く御思ひにならないでね。（こみあげて來る涙を拭いて。間。）でも、どうしてもあなたが此の世に生きてゐたいつて仰るんでしたら、あたし立派に心を定めますわ。今夜かぎりもう思ひ切ります。……これから後、決してあなたを誘惑したりはしませんわ。あなたのはうから、たとへ又今夜のやうに訪ねていらしつても、もうきッと御目にかゝりません。今まで御目にかゝれただけでせめて滿足して、あたしのキリのない慾ばつた心を殺しますわ。キッと殺しますわ。でも――でも――今夜一晩だけは許してね。かうしてしばらくぶりで御目にかゝつたり、御聲をきいたりしては、あたしとても此のまゝ御返しする事なんか出來ませんわ。あたしを可哀さうに思つて、今夜だけ御話をして明かさせてね。

喬生　（感動させられて）そんなに迄、あなたは僕の事を思つて下さつてゐた……ゐるんですか？

淑芳　（うなだれて）えゝ。（又顏をあげて）それが今まで御わかりにならなくつて……？

喬生　（追憶に輝かさせられながら）わかつてゐました。あなたの氣もちがうそだなんては今までも思へなかつた。でなかつたら、どうして僕だつてこんなに苦しんだりするもんですか？　でも――でも――今までわからないところがあつたんだ……。

淑芳　今はおわかりになつて？

喬生　わかりました。何もかもわかつた、あなたがすッかり正直に打ち明けて下さつたお蔭で。……（歡喜につゝまれて）あゝ、やつぱりほんとうの戀だつたんだ。二度と獲がたい珠だつたんだ。（熱情に燃えあがつて淑芳を抱きしめる）

淑芳　（よろこんで）苦しいわ！　――（喬生を見あげて）ぢや、今晩だけは話し明して下さつて？

喬生　今晩？　――なぜ？

淑芳　（悲しそうに）やつぱり駄目？

喬生　今晩どころか、明日の晩だッて、明後日の晩だッて……。

淑芳　でも――。

喬生　此の後いつの晩迄だッて。

淑芳　でも――。

喬生　死ぬのが怖かつたのはもう前の事です。一遍あなたから離れて見て、僕に取つてあなたがどんな價値のある人かッて事か、それまで考へてゐたよりまた何百倍價値のある人かッて事か、わかりました。あなた無しにこん

な世の中に生きてゐたッて、どうするもんか？　死んで初めて生きるんだ。一緒に死んでこそ、僕達の戀愛は成就するんだ。

淑芳（見上げて）それほんとう？

喬生　ほんと以上だ！

淑芳　あなた！

（二人しッかり抱き合ふ。）

金蓮（燈籠を持つて、棺のはうへ行く）ではお孃さま。

淑芳　さあ、あなた

喬生　淑芳さん！

（淑芳と喬生一緒にそッちへ行く。と、棺の蓋自然にひらく。喬生脚を中へ入れる。つゞいて淑芳。——二人中へ這入り込む。と、蓋又静かに自然に降り、喬生の着物の裾僅かばかりを殘して閉ぢる。）

（あと、金蓮ひとり棺側に立つ。瞬く燈籠の光。）

金蓮（正面を向いて嘆息する）あゝ、ほんとによかつた。……（間）あたしにも戀があつたら……

（見る〳〵、燈籠の光消える。室の中しんとした暗黒。）

——金雞寮静かに暗くなる——

第二場

人物

張老人

湖心寺の和尚

時

前場の數日後の晝

所

前場に同じい

明るくなると、張老人下手から現れる。

張老人（大字の扁額を見あげて）こゝが湖心寺か？——棺の置いてある所はどこぢや？（上手へ行かうとする）

（薔薇色の豚見たやうに肥つた和尚出て來る。）

張老人（頭をさげて）あなたはこゝの御住持かな？

和尚（怪訝そうに）さうです。

張老人　それはよかつた。そんなら遠慮なく伺ふが、淑芳つて云ふ娘さんの棺を置いてある室はどこですかな？

和尚（一寸首をかしげて）淑芳？

張老人　左様。何でももとの豐州の判事の娘ぢやさうぢやが。

和尚（理解して）あゝ、あの、北のはうへ御轉任の時棺を頼んでおいでになつたかたの？　それなら、そこの室にあります。（指さす）

張老人　おゝ、さうか？（いきなり階段をあがつて行か

うとする）

和尚　（老人の袖を引きとめて）もし／＼、どこの御老人か知りませんが、一體何の御用ですか？

張老人　（片足は階段へ掛けたまゝ）用？　わしはな、一寸その部屋を拝見したいんぢや。

和尚　（よろこばしそうに）ぢやア判事さんの御親類ですか？

張老人　いや／＼。

和尚　（失望して）御親類ではない？　――ぢやア御覧になりたいわけは？

張老人　それは話せば長くなる。見てから、それは御話しやう。（又あがつて行かうとする）

和尚　（引き留めて）それは困ります。愚僧は此の寺を預つてゐる責任者です。その承諾なしに勝手に部屋の中へなんぞ入つて頂いては、迷惑千萬です。それに、その部屋には鍵がかゝつてゐて、愚僧の鍵がなければ開きません。

張老人　ぢやあ鍵を貸して下さい。

和尚　その前にわけを話して下さい。

張老人　それはあとから……。

和尚　（頑として）いけません。

張老人　（憤慨して）何て面倒な和尚さんぢやらう。實に官僚式ぢや。

和尚　（冷かに）愚僧は、預けられたかたに對して重大な責任を負つてゐますからな。

張老人　（我を折つて）ぢやあ仕方がない。話しませう。わしの隣りに、極懇意な書生と云ふ若者がゐてな、それがその棺の主に惚れられたんぢや。そして毎晩會ひに來るのを、わしが忠告して思ひ切らせたんぢやが、どうもやつぱり心底から思ひ切れんと見えて、それからは毎日酒ばかり飲んで暮してゐる。はて困つたもんぢや、ぢやが、會はずにさへゐれば、なに、そのうちには思ひ切る時も來るぢやらう、と思つてゐると、三四日前の晩から、不意にどこかへ行方がわからなくなつて了つたんぢや。わしも心配してな、あつちこつち心當りを探して見たが、どこにもをらん。で、こりやもしかしたら、あの娘にたぶらかされてこゝへ來たんぢやないかと思つて……。

和尚　（遮つて）一寸待つて下さい。一體それはいつの御話です？

張老人　いつ？

和尚　その三四日前とかツて仰ゃるのは？

張老人　無論今日から三四日前ぢや。

和尚　（噴き出して）戯談ぢやありません。ぢやあ、此の棺の主は夙に死んでるぢやアありませんか。

張老人　無論ぢや。
和尚　何が無論です？　失禮ですが、あなたは少し頭がどうかしてらつしやる。でなければ、愚僧をからかはうとしてゐらッしやるんだ。とッとゝ道、その御相手は御免蒙りませう。（去らうとする）
張老人（慌てゝ和尚の衣の袖を引きとめて）戯談でもボケてゐるんでもない。正眞正銘の事實ぢや。
和尚　さう仰るのが、證據だ。
張老人（癇癪を起して）これ、お若いの、わしはあんたに話さんと云つたんぢや。あんたは、死人の取り扱ひの專門家で、おまけに始終地獄だの極樂だのと人へは御說敎をしに聞かせてゐるくせに、何て想像力の足りない、凡俗的な常識家ぢや。もッとも、ぢやから今時坊さんなぞが輕まるんぢやらう。
和尚　貴つゝ、ぼけてゐるくせに、人を侮辱するのはよして下さい。
張老人　自分を侮辱なさんな。
和尚（益々怒つて）いよ〳〵ひどい侮辱だ。――（思ひ返して）では、あなたはたしかに、喬生とか云ふ御知り合ひがそこの棺の主と會つてゐたと仰るな。
張老人　たしかとも。これがたしかでなかッたら、世の中にたしかな事は一つもなくなる。

和尚　そして、もしかしたら今あそこへ來てゐるのではないかと仰る？
張老人　そのとほり。
和尚（突然腹をかゝへて、鷲鳥のやうな聲で笑ひ出して）はッ〳〵〳〵、すばらしいロマンチシズムだ。なるほど、此の支那には昔からそう云ふ傳說や物語が澤山ありますよ。愚僧も今まで幾つかよんだもんだ。だが、眼のあたりそれを信じ切り、然かも白晝その信仰を主張して憚らないなんてかたには、愚僧此の年になつて初めて御目にかゝりました。いや、これは仲々面白い。立派に話の種になる。どうせ愚僧も用のない身體だから、ぢやアそのあなたの古風な白晝夢がほんとかどうか、一つ試みに試驗して見ませうかな。（先きへ立つて階段をあがり、腰へつけた鍵の一つで錠をあける）
（扉ひらく。）
（牡丹燈籠、葬ひ人形等、第三幕第一場に同じい。ただ棺の蓋の一部から、喬生の裾が少し現れてゐる。）
和尚（中を一見して老人へ向つて）篤と御しらべなさい。
張老人（室の中を見廻す）なるほど、喬生の話したとほりの部屋だ。（不意に、喬生のハミ出した着物が目にとまる）おや、これは何ぢや？（手に取つて見る）あ

ツ、あ、れ、の着物ぢや。（ぶる〳〵慄へながら棺の蓋を持ちあげて覗く。そして）おゝ！（叫んで尻餅をつく）

和尚　御老人、どうしたんですな？（つゞいて蓋を跳ね開ける、同じく叫ぶ）あツ。（もう一度見て）これは一體どうしたんだ？　若い男が××××つてゐる。（睦蝨なやうに、横へよろめいて壁へ倚りかゝる）

張老人　やつぱりさうぢやつた。おゝ可哀さうに、やつぱり負けて破滅したんぢや。（呻きながら立ちあがつて又棺を覗く）どつちも、まだ生きてゐるやうな艶々とした顏つきぢや。まるで眠つてるやうぢや。

和尚　（急に憤慨して）怪しからん。實に怪しからん。まきれもない×××。（穩かに老人へ取り縋つて、懇願的な口調で）御老人。後生ですから、どうか此の事は誰へも話さずにおいて下さい。仕方ないから、愚僧は自前で此の二個分の死骸を埋めてやります。その代り、此の事件は一切二人だけの胸へ收つて置きませう。もしこんな事が世間へ知れ渡つたら、それこそ此の寺の、延いて愚僧の評判——（胸を指して）名譽に係はります。

（張老人、彼の聲も耳に入らず、涙をこぼして死體を見る。）

和尚　（重ねて）全く盜人に追錢てのは此の事です。此の春、娘の遺言にまかせていづれこゝへ葬りに來るから、ツて云ふ約束で預けられたまんま、未だに判事さんからは一言の音沙汰もないんです。こりやあテツキリ置き逃げです。葬式料は取れず、こツちから持ち出して埋めるなんて、いや、人間生きてゐるといろんな思ひも寄らない災難に出ツくはすもんです。さすが法律家だけ、こいつ新手の詐欺だ。それだけでもかなはないのに、もし此の上世間の噂にでものぼつた日にやあ、全く泣きツ面に蜂です。愚僧たツて、極樂へ行かないあひだは食べなくてはいけませんん。その唯一の財源がこんな事になるなんて……。（胸を打つて）御老人、きツと約束して下さるでせうな。（老人の手を握る）

張老人　（涙にくれて）おゝ畜生！

和尚　御老人、御老人！

——急速に幕——

第五幕

人物

張老人
和尚
鐵冠道人

その附添ひの童子
喬　生
淑　芳
金蓮の人形
神　將　二人　仰々しい鎧を着け、長い戈を提り、眞ッ黑な髯髯を生やした嚴めしい恰好の大男達。
大勢の見物人

時
前場よりも一ケ月ばかり後

所
樹を持つた湖心寺墓地風景の前

幕あくと、正面に數段の嚴めしい壇。その一方の横に、牡丹燈籠と金蓮の人形。前に頻りに燃えてゐる木組み。
その左右には澤山の見物人。前方の椅子に貴人や豪族や富んだ商人達、背後に勞働者や農民達立つ。その中に頭巾人が混る。

豪族A　何しろ今日は珍しい觀物です。
巨富商B　こんな事は、私も生れて初めてですよ。
貴人C　（愉快に堪へないやうに）あゝ云ふ、階級の尊嚴を無視する奴は、實際極刑に處する必要があるです。
貴婦人D　ほんとに、わたし達を侮辱してをりますのね。おまけに死んでまで貧乏書生とイチヤつくなんて、まア何ていやらしい……。
好色らしい貴人E　（彼女へ向つて）だが、淑芳つてのはすばらしい美人だそうぢやありませんか。
貴婦人D　（口惜しそうに）何が美人なもんですか。――もつとも、わたくしまだ見た事は御座いませんけれど。
勞働者F　淑芳ッて娘、一寸型を破つてるなア。
勞働者G　全くさ、判事の娘なんかにしちやア大出來よ。だが、そいつを又何だつてこんな大袈裟な審判にかけるんだ？
勞働者F　（椅子連中を指して）此の御連中の癪にさはつて堪らねえんだとよ。
農民H　ほんとに喬生と淑芳は出て來るだらうかな？
農民I　（迷信的な口調で）鐵冠道人さまの法力だもの、出て來ねえもんか！
（急に群集ざわめき立つ。）
そら道人さまのおいでだ！
道人さまだ、道人さまだ！
（下手の、自然にひらいた群集のあひだの道を、和尚の案内で道人現れる。黃巾をかぶツた嚴しい顔つきの

中老人。朱の衣の童子あとに從ふ。）

（群集頭をさげる。）

和尚（壇の横手に留まつて）どうぞ――。

（道人、椅子の人々に輕く會釋し、壇にのぼつて椅子にガツシリ腰をおろす。童子傍に立つ。）

和尚（改めてその下へ立つて腕を拱いて）名譽あるかたがた、並びに愚僧の願ひを御きゝ下すつて、わざ／＼今日四明山から御來臨下さいまして、一同に代り厚く御禮申しあげます。

（道人鷹揚にうなづく。和尚横へ退く。）

（道人、童子に目くばせする。童子かしこまツて、壇上に用意された紙と筆を取つて渡す。道人、紙へ呪文を書いて卷き、默禱して下の火の中へ投げ込む。紙、白煙を立てゝ燃えあがる。と、忽然として、神將二人、煙の中から現れる。）

神將（直立不動の姿勢で、道人へ一齊に擧手の禮をなし、粗野なドラ聲で）道人殿、何の御用でありますか？

道人　此の墓地に埋まつてゐる、喬生と淑芳と云ふ二人の若い奴を連れて來い！

神將等　はツ、（聲を揃へて復誦の調子で）此の墓地に埋まツてゐる喬生と淑芳と云ふ二人の若い奴――きツと連れて來るであります。（機械のやうに直線的に背後の墓地へ去る）

（道人瞑目する。群集、緊張したザワメキと沈默。間もなく、神將等喬生と淑芳を嚴重に鎖で縛つて引き立てゝ來る。立つてゐる群集、感嘆の聲をあげる。貴族貴婦人達のあひだには、憤怒と痛快の表情。）

張老人（手を擧げて）おゝ、可哀さうな喬生！

喬生（老人を認め）おぢいさん！

張老人　喬生！

神將等（喬生達を壇下に引き据ゑて）道人殿、御命令により連れて來たであります。

道人　よし。

（神將等、鎖の端を持つたまゝ横へ退き、並んで胡坐を搔く。）

道人（喬生達へ向つて）顏をあげろ！

喬生　ちやんとあげてゐる。

道人　女はあげてをらん。

（うなだれてゐた淑芳、喬生と顏を合はせ、道人を見あげる。）

（忌々しそうな舌打ちが椅子席から響く。「チエツーチエツー」）

勞働者の聲　なるほど美人たなあ。

トテシヤンた。

（羨ましそうな聲）馬鹿に仲がよさそうだな。

道人　こら喬生、お前は何故おれにうそを吐いた。

（喬生答へない。）

道人　此の前護符を賴みにやつて來た時、もう此の後決して淑芳達には會はんと、固く誓つたぢやアないか。

（喬生、相變らず沈默。）

道人　湖心寺へもう二度と來んと誓つたな。その言葉をとうした。

（喬生やつぱり無言。）

道人　（荒く）なぜ返事をせん？

喬生　返事が出來ないから。

道人　なに出來ない？　なぜ出來ん？

喬生　誓ひを破つたから。

道人　ふむ、まだお前にも多少の廉恥心が殘つてゐると見えるな。

喬生　廉恥心なんか、今も昔もあり過ぎるほどある。

道人　大膽でうそを吐け！　そんなに有り過ぎるなら、なぜ二つとも誓ひを破つた。

喬生　べつに二つ破つたわけぢやアない。一つ破つたら二つになつただけだ。

道人　減らず口をきくな。そんなら何故一つ破つた？

喬生　破るつもりぢやアなく、無意識に破つちまつたんだ。その點、濟まない事は濟まないにしても、やむを得なかつたんだ。

道人　自己辯解をするな。

喬生　自己辯解ぢやアない。眞實を云つてるんだ。もつと大膽に云はせて貰へば、有意識でした約束は、無意識の行動まで制限する力はないと思ふ。

道人　馬鹿を云へ！

喬生　馬鹿ぢやアない。今から考へれば、あんな約束をしたのが間違ひだつたんだ。その誤りから、必然あゝ云ふ結果が生れたんだ。

道人　（怒つて）あゝ云ふ結果？　必然？……何と云ふ言ひ草だ！

喬生　僕は、あなたの處へなんか行くんぢやなかつたんです。

張老人　（突然叫ぶ）お、お、喬生！

喬生　（一寸そツちを見て）張おぢいさん、あなたの親切は今も感謝してゐます。僕はあの時たしかにびつくりして、見苦しく度を失ひさへしたんです。それは、然しあんまり思ひがけない事實を發見した爲めと、此の戀人の心がよくわかつてゐなかつた爲めです。

道人　（一喝する）餘計な人間へ向つて餘計な事をしやべツちやアいかん。

喬生　餘計な事ではなく、答辯のつゞきのつもりだ。
道人　變にお前は理窟張つた奴だ。そしてゾンザイな言葉を使ふ奴だ。――すると、結局お前は誓ひを破つた事を惡いと思はんと云ふのか？
喬生　それ自身惡かつたとは思はない。むしろ、自分のほんとうの道へ進んだ事をよかつたと思つてゐる。
道人　馬鹿！　恥を知れ！　恥を！
喬生　知つてゐる。だから、あなたへ對しては濟まなかつたと初めから云つてゐるんだ。
道人　濟まないだけでは濟まされないぞ。おれは一體、最初からこんな亂痴氣事件に關係するのを好きぢやアなかつたのだ。同時に、お前か護符なんぞ棄てそうな氣がして、書くのが實に氣が進まなかツたんだ。
喬生　お氣の毒さま――だが、そんならそう仰つて下さればよかつた。
道人　誰かお前になんか遠慮するもんか？　おれはたゞ、見す〳〵前途ある若者の破滅を見るに忍びなくて、誓ひを立てさせて聞き屆けてやつたんだ。それをお前は見事破つた。誓ひには必ず酬ひと云ふものが附いてゐる事を、お前は知つてゐるか。
喬生　知つてゐる。身を以て知つてゐる。その酬ひに僕は死んぢまツたんだから。
道人　よく先き走つた物の云ひかたをする奴だ。お前はたとへそれで濟んだにしても、おれへ掛けた手數と面倒はどうする？
喬生　どうとでもしやう。もしそれが大へんあなたに面倒をかけたんなら。
道人　よし〳〵、おれは充分その酬ひを請求してやるぞ。……が、その外にモウ一つ重大問題がある。今日おれがかうして大勢に頼まれて來た事件が、それだ。お前達――お前と淑芳とは、此の和尙の手で滿足に墓へ埋られながら、なぜまだ時々此の世の中へ出かけて來るんだ？　なぜ雨の降りそうな夕暮や、月の暗い晩なぞ、矢鱈に二人連れ立つてそこらをブラつき廻るのだ？　そのお蔭で、此の邊一帶の人達が大迷惑をしてゐるのを知らないのか？
喬生　（不思議そうに）　迷惑？　――どんな迷惑？
道人　お前達を見かけた者は、みんな氣ちがひになるのだ。
喬生　（おどろいて）　えッ……ほんとか？
道人　ほんとゝも。――みんなお前達見たいな氣ちがひになるのだ。今までおとなしくて、何でも親や目上の者の云ふ事をきいてゐた娘が、急に猪のやうに云ひつけを聞かなくなつて、どうしても親達の定めた結婚を承知しなくなつたり、自分の好きな男と勝手に駈け落ちしたり、

それどころか、女房のある男とくッついて見たり、甚しきに至つては貞淑な細君が夫を振り棄てたり……。

椅子席から證明の呼び聲　そうだ。そのとほりだ。

道人　更に甚しい奴は、お前達見たやうに身分や財產や素性のまるで違ふ男と女と、平氣で一緒に同棲したり……。

椅子席の呼び聲　そうだ。そのとほり。

背後の群集の中から　（對抗するやうに）ヒヤヒヤ……（又拍手）

道人　或はお前達を眞似て一緒に死んだりさへする……。

椅子席から興奮した聲々　全く怪しからん。

秩序紊亂だ。

風俗壞亂だ。

そんな手本を示した奴は、直に極刑に處する必要がある。

貴婦人達の聲　ほんとにわたし達の面よごしですわ。

わたし達共同の敵ですわ。

勞働者農民達　（あとへつづいて）惚れるに上下の區別があるもんか。

おんなじ人間だ。

今までが窮屈過ぎたんだ。

無理があるから死ぬんだ！　（等）

椅子席の人々　（その呼び聲に憤慨して）以ての外の雜言だ。

聞き棄てにならん。

あんな連中だからあんな事を云ひ出すやうになつたのも、やつぱり淑芳の手本のせゐだ。

道人　（人々へ向つて）靜かに。から騷がれては道人の審問の邪魔になる。

（なほざわめく。）

道人　（神將等へ向つて）神將達！

神將等　はッ！　（飛び立つて、兩側の勞働者農民達へ戈を指し向ける）騷ぐとこれだぞ！

勞働者農民達　おれ達ばかりぢやアねえ。その椅子の人達もだ。

椅子の人達のはうが先きだ。

不公平だ、不公平だ！

椅子の人達　おれ達は道人に賛意を表してゐるんだ。

お前達は審問の妨害者だ。

勞働者農民達　おれ達ア、べつに道人を御頼み申したわけぢやアねえ。だが、こゝへ來てゐていゝなら、批評だつて一緒にしていゝ筈だ。

道人　（荒い聲で）此のうへ騷げば、神將の武器がものを云ふぞ！

（群集急に靜まる。）

椅子の人達の滿足そうな呟き聲　それ見ろ！
　い丶氣味だ！

道人（つゞけて喬生達へ向つて）そう云ふ淫蕩な亂倫な行爲が、お前達が死んでから、又そうやつてぶらぶら歩き廻るやうになつてから、滅茶苦茶に多くなつたんだ。そこで恐慌を起して、お前達を罰するやうに、又二度とお前達が出て來ないやうに、此の土地の主立つた人達が和尚を使ひにしておれへ頼みによこしたのだ。

和尚（立ちあがつて、馬鹿丁寧に）愚僧は、此の預つてゐる寺の名譽の爲めに――その恢復の爲めに、進んで使者の光榮を獲させて頂きました。

喬生（淑芳と顔を見合はせて）ほう、で、今日からして縛られて、引ッ張られて來たわけか？

道人　そうだ。お前達はその自分達の起した流行病を――熱病を知らずにゐたのか？　迂濶者め！　ここの人達は、一口に喬生病だの淑芳熱だのとまで呼んで、赤痢やコレラよりもこはがつてゐるのだぞ。

喬生　知らなかつた。

淑芳　まア、そんなにあたし達の散歩が影響してゐたんでせうか？

道人（淑芳へ）散歩とは何だ？　支那には昔から男と女と一緒に街を散歩するなんて習慣は絕對ない事を知らんか？　一體お前が悪いんだぞ。お前が不埒な非常識な戀をした御蔭で、此の一切の事件が起つて來たのだ。お前のやうなアバズレ女を生んだのは、此の大支那帝國の最も大きな誤りだ。

椅子席の人達　ヒヤ〳〵。
　全くだ！

淑芳（獨りごつやうに）あたし知つてますわ、裁判官にどんな人か、……あたしの父もやつぱりそうでしたもの。みんな頭の固いわからずやね。

道人　こらッ！

（勞働者達一齊に喝采する。）

道人（喬生へ）だが、知らなかつたとあれば仕方ない。これからは恐縮して、二度と再び二人で此の世へ現れて來たりしてはならんぞ。い丶か？　――素直に今までの行ひを後悔するなら、今日は神將に二三十鞭で打たせるだけで勘辨してやる。もしきかなかつたりすれば、極刑でなくては濟まされん。

椅子席の人達　二三十位の鞭ちやあ輕すぎる！

老富商　こりやア全く安すぎる。

道人（喬生達へ）特別の計らひだぞ。無論異議はあるまい。（童子へ向つて）紙と筆を喬生へ渡してやれ。

童子　はい。（二つを取つて喬生の前へ置く）

道人　ついでに、二人の鎖を解いてやれ。

童子　はい。（寄つて喬生の腕を縛つた鎖を、次に淑芳のを解く）

喬生　（道人へ向つて）どうしろと云ふんです？

道人　誓書を書くのだ。これからはもう決して此の世の中へ出て來ない、と云ふ誓文だ。……そして各々名前を書いて、下へ印を捺すのだ。印を持つてゐなければ爪印で勘辨してやる。

喬生　（決然と）書かない。

道人　（おどろいてきびしく）なに？

喬生　たとへどんな目に會はうとも書かない。

道人　馬鹿め！——お前は、それほど二人で散歩したいか？

喬生　散歩もしたい。冥土ッて云ふ所は、静かは静かだがそれッきりの所で、僕のやうに若くて、然も有り餘る情熱を持つて死んで行つた者にはとても單調で我慢出來ない。いくら不合理や矛盾だらけの世の中でも、僕達にはやつぱり此の世の中こそ世界だ。

道人　幾ら此の世が戀しくても、もうこれからは、どッち道お前達は出て來る事はならん！　おとなしく誓文さへ書けば、たゞお前は餘計な罰を受けずに濟むだけだ。これはおれの慈悲の計らひだ。

喬生　（冷笑して）書かなければどんな罰を受ける。

道人　書かなければ、二人とも地獄の獄屋（ひとや）へ送つて、永久の水火の苦痛を嘗めさせてやる。

喬生　（急に笑ひ出して）よろこんでその苦痛を嘗める！

道人　（あきれて）馬鹿！……お前はあんまり恐ろしくて氣が狂つたか。

喬生　（首を振つて）決して。

道人　おやおや、お前は、おれがきびしい判決をすると思つて反抗するのか。

喬生　そうでもない。——いや、それもあるが、それより何より、僕は自分のした行爲、又蒙らせた影響の一切を悪いとは考へられないんだ。むしろ・大いにいゝ事だと信じてゐるからだ。

道人　馬鹿を云へ！

喬生　そう云ふあなたこそ馬鹿を仰るな。一體僕達の運命を此の世で悲劇に終らせた原因は何だ？　、、、、、でなくて何だ？　馬鹿げた階級の區別や因習でなくて何だ？　その御蔭で、僕達はあたら此の未練の多い地上に生きる事が出來なかつたんだ。それ、、、や差別や因習を、僕達の果敢ない散歩が幾分でも破る役に立つとしたら、いや、立つたとしたら、僕達に取つてこんな愉快な事はない。これこそほんとの復讐だ、又生きてゐるあなた

何の價値のある仕事も出來なかつた僕のせめてもの埋め合はせだ。その愉快と功績を、どうして此の世界の人達の前で遠慮したり否定したりする必要があるもんか？
勞働者農民等　（大聲で）そうだ。そのとほりだ。
喬生、決して遠慮するな。
證文なんか承知するな。
喬生　（彼等へ向つて）勞働者農民諸君！　諸君の手で、どうか此の世をほんとの世界にしてくれ給へ。
勞働者農民達　よし、引き受けた！　きツとする！
椅子の人達　何て男だ！
實に不逞極まる奴だ！
おそるべき危險人物だ！
貴婦人　（おどろきの餘り感心したやうに）隨分勇敢な人ね。
人々の聲　極刑だ！　地獄の牢屋だ！　――放逐だ！　無罪だ！　――地獄の牢屋だ！　無罪だ！
道人、靜かに！
（神將等、叉戈で背後の群集を脅す。）
聲々　神將不公平！　不公平！
道人　（改めて喬生へ向つて）喬生、では、どうしても證文を書かないか？
喬生　書く代り地獄の牢屋の底へ行く。

道人　きツとか？　あとで後悔しても追ツつかんぞ。
喬生　決して。
道人　よし。（淑芳へ向つて）淑芳、お前はどうだ！　お前は女の事でもあり、そんな目に會ふ位なら無論書くだらう。な。勿論一人だけ書いてもいゝぞ。
（淑芳一寸考へる。）
道人　（童子へ向つて）紙と筆を淑芳へ渡してやれ！
童子　はい。（それらを彼女の前へ移す。）
道人　早速書け。
淑芳　（顏をあげて）もしあたしだけでも書いたら、此の人（喬生のはうを一寸向いて）の氷火の罰を許して下さいます？
喬生　（彼女へ向つて答へるやうに）淑芳！
道人　それは出來ん。
淑芳　おや、あたし達二人はべつ／＼になりますの？
道人　そうだ。
淑芳　二人とも書かなければ？
道人　どつちも永久の氷責め火責めだ。
淑芳　いゝえ、それより二人一緒にゐられますか？
道人　牢屋で苦しむなら、一緒だらうが何だらうが勝手だ。
淑芳　まアうれしい！　（いきなり喬生へ抱きつく。）

喬生　（抱き返しながら）一緒に行つてくれる？

淑芳　行きますとも。一緒にさへゐられるならどんな處へだツて。

（緊密な抱擁。）

（椅子席と背後の群集を通じての唸り聲「おう！。」に）

椅子席の聲　（暫時して）畜生あひだ！

見物者等　えらいぞ！

道人　（神將等へ向つて）あきれ返つた奴どもだ。二人を打ちこらせ！

神將等　はツ、二人を打ちこらすであります。（いきなり腰に挾んでゐた篠竹の鞭を拔いて、二人を一つの塊りの如く打ちまくる）

媼老人　おゝ……。（見るに堪へられず卒倒しやうとする）

（群集、老人の身體を支へる。）

（喬生と淑芳、見る見る血で赤く染められて行く。一緒に微かに唸る。）

道人　（やがて）よし、やめろ！

神將等　はツ、やめるであります。（赤い鞭を收める）

道人　（倒れ呻いてゐる二人へ向つて）どうだ、苦しいか？　地獄の責苦は、だが、これどころの騒ぎではないぞ。少しは懲りたか？　懲りたら昔け！　今書いてもおそくはないぞ。

淑芳　喬生、どこ迄も。

喬生　おゝ、いつ迄も――

黃婦人の、困惑と驚嘆を混交した叫び聲まア――。

道人　やむを得ん。（神將へ向つて）地獄の獄屋へ二人とも曳け！

神將等　はツ、地獄の獄屋へ二人とも曳いてゆくであります。（再び大股に二人へ近づいて、音を立てながら鎖を掛ける）

道人　（童子に）此の不都合な人形や燈籠を燒き棄てろ！

童子　はい（牡丹燈籠と金蓮の人形を火の中へ投げ込む）

（燃えあがる火と烟。群集の叫ぶ聲の中に――幕）

１９２７・１２

作者附記。暇ある讀者は、剪燈新話中の「牡丹燈記」と比較されん事を。了意、圓朝の如きは敢て云はず。

夫婦（二幕三場）

第一幕

人物

メリコフ　作家（三十四歳位）
ソニヤ　妻（二十八歳位）
ブランスキイ　舞臺監督（三十八歳位）
カテリイナ　同居の老女
少年イワン　十三歳
長屋の女房、娘達

時

西暦一九一〇年春、午後

所

ロシア近傍の小國首都場末、メリコフの借家

舞臺　質素な小さな二階の室、メリコフの仕事部屋で、寝室で、應接間だ。簡單な道具や書棚のほか、何の飾りつけもない。正面奥に硝子戸が四枚建つ。向うには同じやうな長屋建ての窓がグルリと四つ五つ開き、その眞ん中に、ポプラの大木が萌え出したばかりの緑葉によそはれて突つ立つてゐる。大都會の場末らしい春光。

幕あくと、硝子戸に對した上手寄りの粗末な頑丈な机に向つて、メリコフが一心に書いてゐる。不精ひげの延びた、無頓着な姿。苦吟の樣子。（ペンを握つたまま、指を髪の中へ突つ込んだり、太い溜息を吐いたり……）机や椅子の周圍には、原稿や書きくづし原稿紙が散亂してゐる。書いては夢中に投げ飛ばす彼の癖を示してゐる。

メリコフ　（突然唸る。）畜生！
（兩手で頭を押へたが、すぐ又顔を擧げて最後の文章を書き出す。そしてペン軸をカラリと投げ出すと、むせんだやうな聲で叫ぶ。）
ソニヤ　――。
（返事がない。）
メリコフ　（重ねて大きく）ソニヤ！
（「なアに？」と云ふ聲が下の方から聞える。）
メリコフ　水を持つて來てくれ。水を一杯！
ソニヤ　はい！
（彼は又熱心に、今書いた一枚をよみ返す。間もなく下手ドア開き、波々と水を湛へたコップを盆に載せ

て、ソニヤが現れる。美しい。が、質素な身なり、今まで洗濯物をしてゐたらしく、水やシャボン泡に濡れた上ッ被りを着、兩腕をまくりあげたまゝの甲斐々々しい姿。）

ソニヤ　（床の原稿紙を踏まないやうに氣をつかひながら、もう水の事は忘れて了つたやうな夫の傍へ盆を出す）はい。

メリコフ　（氣がついて）ありがたう。（コップを鷲掴みにして、息もつかず呑み乾す）

ソニヤ　（そのあいだに、原稿の末尾の日附けの書き入れを認めて）まあ、御出來になツて？

メリコフ　（やゝ陰鬱な調子で）うむ。

ソニヤ　（盆を机の上へ投げ出して）まア、よう御座んしたね。（思はず抱きつく）

（メリコフ默つてかゝへる。）

ソニヤ　お目出度う。（抱き合つたまゝ、彼の胸のところへ頭をさげる）

メリコフ　——洗濯をしてゐたのか？……シャボンくさいなあ。

ソニヤ　（涙ぐみながら）えゝ——ほんとに疲れなさつたでせう。……でも、これからはゆツくり休めますわ。

メリコフ　（それに答へず）まア、どうにか思ふやうに書けたつもりだ。

ソニヤ　とても素晴らしい物ですわ。わたしもう、面白いの何のつてより、つくぐ恐れ入りましたわ。初めての戲曲だツて云ふのに、よくこんなに御書けになツてね。

メリコフ　（やゝ苦笑して）今日の分をよんでツからにしてくれ。

ソニヤ　えゝ、すぐよみますわ。わたし、ほんとに毎日たのしみにしてましてよ。

（重ねてキッスして、腕を離して、床へ一面散らばつてゐる原稿を集める、書き崩しと分ける。——彼はぐツたりしたやうに椅子へもたれて、なほ空想に驅られてゐるやうな眼つきで眺めてゐる。その時、老女カテリイナがドアを開ける。）

カテリイナ　（夫婦の樣子を見て）おや、もう御書きあげなさえましたか？

メリコフ　あゝ。

カテリイナ　（よろこばしさうに）それはまア、

ソニヤ　をばさんもよんでるわね、これが舞臺にかゝつたら、どんなにいゝでせうね。

カテリイナ　全く。——旦那の御書きになるもんなんか、わたし風情にやアよかアわからねえが、でも隨分いゝシバヤ（芝居）だと思ひました。……（やツと思ひ返し

て）あの、から云ふかたがおいでになりましたよ。（手に持つた名刺を渡す）

メリコフ　（受け取つて、不審さうに眺めながら）あけて下さい。

カテリイナ　はい。（去る）

ソニヤ　（原稿をすツかり始末して立つて來て、彼の樣子を見て）どう云ふかた？

（メリコフ默つて名刺を見せる。）

ソニヤ　（びつくりして）あら、プランスキイさん？　あの新藝術座の？

メリコフ　あゝ。

ソニヤ　（躍りあがツて）ぢや、きツと「先驅」を演つて下さらうツて仰るんぢやなくて？

メリコフ　（やゝ陰鬱に）だツて、また前篇が雜誌に出たばかりだ。

ソニヤ　だツて、いゝものなら構はないでせう。（夢中になツて）きツとさうよ、たしかにさうだわ。あそこで演つてくれゝばどんなにいゝだらうツて仰つてたのが、とうとほんとになツてね。

メリコフ　（少し苦々しさうに）まだ何だかわかりやしない。

（その時ノツクの音が聞える。）

メリコフ　どうぞ。

（プランスキイが入つて來る。立派な、さツぱりした服裝、敏活な、が、しツかりした脚取り、態度。メリコフ立つて迎へる。）

プランスキイ　突然お邪魔して濟みません。

メリコフ　ようこそ。（固く握手する）

プランスキイ　かねてお名前は存じ、又會なぞでチョイチョイお目にはかゝつてましたが、つい御挨拶を仕損なつてゐまして。

メリコフ　いゝえ、僕こそ。――（一寸妻の方を向いて）女房です。

プランスキイ　僕、プランスキイです。此の後何分よろしく。

ソニヤ　（その前に手早く上ツ被りをぬいで）どうぞよろしく。

メリコフ　（椅子を勸める）どうぞ。

プランスキイ　ありがたう。（掛ける）

（ソニヤ、原稿を持つて行かうとしたが、一寸ためらひ、又思ひ返して持つて去る。）

プランスキイ　今月號の「ナロオド」へ御書きになつた「先驅」を拜見しました。

メリコフ　（思はずはにかんで）それはありがたう御座ん

した。

プランスキイ　失禮ですが、非常にいゝ物だと思ひました。

メリコフ　（まごついて）　さうでしたか。

プランスキイ　最近の劇壇で、一寸あれ位すぐれた物はありません――小說の方は時々拜見してましたが、ドラマの方は、今度が御初てですか？

メリコフ　さうです。

プランスキイ　今まで、（微笑して）　內密には書いていらしツたんですか？

メリコフ　いや、ほんとに今度が初めてです。

プランスキイ　迚もさうとは思へません。……で、後編の方は、もう御出來ですか？

メリコフ　今しがた、やツと書きあげたところです。

プランスキイ　それを、一つ拜見させて頂けませんでせうか。

メリコフ　承知しました。今、女房がよんでるかと思ひますが。（立つて、彼女のところへ行かうとする）

プランスキ　（遮つて）　いや、御よみ下すつてからで結構です。あと、何でしたら使ひを差しあげますから。

（その時カテリイナが茶のカップと菓子を運んで來る。）

メリコフ　（彼女に向つて）　ソニヤに、よんで了つたら原稿を持つて來るやうに云つて下さい。

カテリイナ　はい。（プランスキイにカップを勸めて）　どうぞ。（去る）

メーコフ　しばらく御話し下さつてゐれば、あれも讀んぢまひませう。

プランスキイ　ではさうしませう。――實は、今日は原稿を拜借かたがた、御願ひにあがつたんです。

メリコフ　はあ。

プランスキイ　前編の調子では、後編の方もきつと御立派な物だらうと思ひます。ついては、どうか僕の方の劇場――新藝術座の、第一回創作劇として上演させて頂きたいんですが、如何でせう？

（メリコフ、おどろいたやうに、默つて對手を見つめる。）

プランスキイ　（その樣子を見て）　御承知のとほり、新藝術座は僕達同志の共同經營の小屋です。すぐ隣りのロシアでは、あれほど立派な演劇の革命が行はれてますが、僕達の國ではまだまるで成つてません。それに憤慨して、僕達は三年前、眞に新しい劇の運動を起す爲め、又演劇の實驗室を持つ爲め、營利劇場に反抗してあの小屋を作りあげたんです、そして、今まで飜譯劇ばかり演つ

て來ました。その爲め一部の作家のあいだからは、何が我が國の新運動だつていふ非難も、隨分受けました。僕達としても、決して外國の物ばかり演つて、能事了れりと考へてゐたわけぢやありません。たゞ、やつぱり最初は是非これに依らなければいけないと思つたのと、役者達の熟練が不十分だつたのと、あまり適當な創作がなかつた爲めです。が、もうそろ〳〵自分の國の物をやつてもいゝ、いや、やらなければいけないと考へて、今年の初めあたりから、頻りと新作を物色してゐました。その結果或る大家の物を、來月初めから上演する事に内々定めてたんです。ところがあなたの御作をよんで、大へん結構だと思ひ、外の演出者達に相談しましたところ、みんな贊成で、一致で豫定の脚本を變更する事になりました。さう云ふわけですから、是非とも御承知ねがひたいんです。

メリコフ　（緊張したやうに、又茫然としたやうに聞いてゐたが）さうですか。

プランスキイ　御不承でせうか？

メリコフ　（初めて自分をつかんで）いや、不承知どこぢやありません。よろこんで演つて頂きます。――が……

プランスキイ　が？

メリコフ　あんなに主人公のセリフの多い芝居が、演つて頂けるでせうか？

プランスキイ　（微笑して）その御懸念は御無用です。その方面の修練なら、今まで十分役者に積ませてありますから。――たゞ、あの女主人公のやうな婦人は、まづ今のところ、國ぢう探しても二人と居ないかも知れません。從つて、僕のところの女優なんかも、到底適役とは云へません。その點大へん御氣の毒ですが、然しやれる限りは一生懸命やらせるつもりです。

メリコフ　（思はず片手を振つて）いや、あそこより――新藝術座より外には、あれを演つて頂くところはありません。書いてゐるあいだは、無論そんな事は考へませんでしたが、暇々にはいつも女房と話し合つたんです。もし、あれをあそこで演つて頂けたらどんなにいゝだらうつて。……でも、まさかこんなに直ぐ御話を受けやうとは、夢にも思ひませんでした。正直なところ、どんな大劇場で演つて貰ふより、僕はあそこで演つて頂くのがうれしい氣がします。

プランスキイ　ありがたう御座います。然し舞臺に掛けたら、きつと作者は不滿を御感じになるに相違ありませんが……。

メリコフ　僕は、前々からあなたの座を信じてゐます。尊敬し、惹きつけられてます。

ブランスキイ　さう云つて下さるかたの物を演るのは、非常に愉快です。

メリコフ　――が、外の澤山の先輩を差し置いて、まだ若い、それに國の方では駈け出しの未熟な僕の物なぞ演つて頂くのは、濟まなくも思ひます。

ブランスキイ　そんな遠慮は御無用です。僕達は、たゞ藝術その物の爲めに働けばいゝんですから。……ぢや、早速後半を拜見して、準備に取りかゝらせませう。

（その時、綴ぢた原稿を持つてソニヤが入つて來る。）

メリコフ　よんだ？

ソニヤ　えゝ。（緊張した調子で、原稿をメリコフに渡す）

メリコフ　ぢや、どうぞ。（ブランスキイに渡す）

ブランスキイ　たしかに御預りします。雜誌へ御載せになる都合もありませうから、濟み次第御返し申します。

メリコフ　はあ、……（妻の方を向いて）「先驅」を、新藝術座で演つて下さると仰るんだ。

ソニヤ　（深く感動して、二人を半分づゝ見ながら）まア！

ブランスキイ　御承諾ねがへて、非常によろこんでゐるところです。

ソニヤ　（頭をさげて）いゝえ、私達こそ。

ブランスキイ　（二人をかたみに眺めて）僕達の方は、まづこれで決定したわけですが、實際舞臺へかける前には檢閲つて奴があります。こいつが難儀です。殊に此のごろ時代が反動的になつてゐる爲め、くだらない事までひどくやかましくなつて困るんです。少し急進的な思想の物は、端から文句をつけるんです。そんな點で、新藝術座もひどく惱んでゐます。或はさう云ふ方面から、折角の運動も不具になつて、座が新しい青年の心から遠退きはしないかと、心配でなりません。

メリコフ　（氣づかはしさうに）ぢや、僕の物なども駄目ぢやないでせうか。

（ソニヤ、感動と不安の混淆した表情で、一緒にブランスキイを見つめる。）

ブランスキイ　いや、これは大丈夫と思ひます。また後半を拜見しないのでわかりませんが、今までの調子なら、禁止の何のつて事はありません。少しばかりのカットできつと通ります。お役人て者は變なもので、どんな臺本でも、是非少しはカットしなければ承知しないんです。たゞ通しちやあ、官の權威にでもかゝはると思つてるんでせう。はゝゝ。……それに更に不都合なのはどんな臺本でも、云はゞ初日の蓋をあけないうちは最後の決定がわからない事です。さうしたやり口の爲め、今迄どれだけ演劇の進歩が阻害されてゐるかわかりません。

メリコフ　（いよ〳〵不安になつて）ほう、ぢや、まるで

丸太の谷渡りですな。
プランスキイ　(笑つて)　まアそんなものです。――殊に姦通のやうな、云はゞ私有財産制度に累を及ぼしさうな事件を取り扱つた物は怖れてるんです。御作の中にもそれがありますが、なに、この程度の物がいけないんなら、劇文學は一切窒息です。實は、そんな官權の態度も忖度して、これなら檢閲の方も大丈夫だらうツてみんなで定めたんですから、決して御心配は要りません。萬一愚圖々々云ふやうでしたら、一遍位御面倒でもその筋へ出て頂かなければならないかも知れませんが、大抵そんな御迷惑は御掛けしないつもりです。
メリコフ。ソニヤ　(やツと安心して)　さうですか。安心致しましたわ。
(と、彼女は今まで押へられてゐた感情にセキあげられて、見る見る兩眼が涙で一杯になる。プランスキイに見られるのを怖れて、輕く頭をさげると、いそいで出て行く。)
プランスキイ　ぢや、稽古が始まつたら、御都合出來る時は御立ち會ひ下さいませんか。その前にも御目にかゝらなければなりますまいが、今日は、まだ座へ次興行の稽古に行かなければいけませんから、失禮します。(立ちあがる)
メリコフ　さうですか。それはわざ／＼濟みませんでした。
プランスキイ　もツと早く伺ふつもりでしたが、道を迷つてゐまして。……(微笑して)　この邊は、大分番地がこんぐらがツてますな。
メリコフ　何しろ、貧乏人ばツかりの場所ですから。
プランスキイ　いや、やつぱりかう云ふ環境でなければ、プロレタリア藝術なぞは出來ません。――では失禮。
(握手して出て行く。メリコフ送る。一寸の間部屋空虛、やがてメリコフ戻つて來る。つゞいてソニヤ。)
メリコフ　(振り向いて)　うそのやうだね。(自分の椅子へ身を投げ掛ける)
ソニヤ　ほんとに。(云ふなり、胸から濕つたハンケチを取り出して眼へ當て、向うむきに壁へ身體を押しつける)
(メリコフしばらくして氣づき、感動させられたやうに見入る。眼をしばたゝき、身體をかへして冷えたカツプの茶をゴクリと呑む。云ひがたき情味の瞬間。)
(ソニヤは、いくら拭いても涙がとまらない。で動けない。)
メリコフ　(やがて立ちあがツて、彼女の斜め背後から肩へ手をのせて)　どうしたの？
(彼女、ただ眼を拭いてゐる。その手を取らうとす

る、彼女、彼の胸へ頭を押しつける。）

メリコフ　（彼女の縮れた房々した金髪をやさしく撫ぜてやりながら）何も泣かなくッたッていゝぢやないか。

ソニヤ　だッて――。

メリコフ　だッて――。

ソニヤ　（涙の中に笑ひ出して）――だッて、あんまり、あんまり長いあいだあなたは不遇でしたもの、わたしもう、一生不遇でお了ひになるのかと思つてたのに……。

メリコフ　うむ。（しつかり抱く）

（彼女、彼の唇を求めて、一面涙に濡れた顔を押しつける。その時ドア開き、カテリイナが入つて來る。見廻して、片隅の二人の様子を認め、動かされたやうに静かに頭を垂れて十字を切る。メリコフ氣がついてソニヤを放す。）

メリコフ　カテリイナ、よろこんでくれ給へ。僕の初めての脚本が芝居になるよ。

カテリイナ　ふんとに御目出度う御座えます。さつき奥さんから聞いて、わしもどんなにうれしかつたか。（鼻を啜る）

ソニヤ　（も、鼻をかみながら）　これが當り前よ。ほかの人がくだらなく遊んでるあいだに、始終あんなに働いたり勉強したりしてゐなすつたんだもの。かうでなけりやうそだわ。

カテリイナ　長いあいだ御世話になつてた倅が生きてたら、まアどんな喜ぶべえか――。（眼をこする）

ソニヤ　（しみじみと）　ほんとにね。

カテリイナ　その代り、二人分よろこびますべえ。

ソニヤ　芝居が始まつたら、二人分觀に行つて頂戴。

（その前から、硝子戸の向うのポプラの大木へ、少年イワンが攀ぢのぼつてゐる。枝々へ手や足をかけながら、一心に、得意になつて、上へ〳〵とあがつて來る。やがて硝子戸を覗き込みながら口笛を吹く、誰も氣づかない。）

イワン　（大聲で）　をぢさん！　をぢさん？

（メリコフ夫婦、初めて振り向く。）

イワン　ピイツ……今日は。

メリコフ　今日は。

ソニヤ　えらい所へあがつてね、イワンさん。

イワン　とても愉快だよ。すてきだよ。ほんとに春だなあ。（枝へ腰をかけて歌ひ出す）　四方(あたり)はるかに見イ渡せば、おイチニ、おイチニ。（兩脚を交りばんこにブラブラやる）

カテリイナ　（おどろいて）　落つこつたら大變だよ、イワン坊。

イワン　（いよ〳〵得意になつて）　落つこちるもんか。ピイツ。

メリコフ　（硝子戸をあけ、微笑して）　ひどくうれしがつてやがる。

イワン　をぢさん、もう今日は書き物は濟んだの？

メリコフ　あゝ。

ソニヤ　イワンさん、をぢさんの芝居が來月あるよ。

イワン　（びつくりして）　もう役者がやるの？　早えなア。どこで？

ソニヤ　新藝術座で。

イワン　新藝術座？　うん、あのネフスキイ通りのか？　そいつあ豪勢だなあ、ぢやあ僕も連れてつておくれ。一度、ね。――それとも、僕なんかにやわからないの？

メリコフ　わかるとも。行かうよ。

イワン　やツ、うれしいな、うれしいな。……（四方の窓へ向つて）　おうい、メリコフ をぢさんの芝居が始まるぞ。始まるぞ。

（勞働者や貧乏人らしい女房や娘が、あつちこつちの窓をあけて顏を出す。）

聲々　ほんとかい？　イワン坊！

イワン　ほんとだとも、うそだと思つたら、をぢさん達にきいて見ろ。

聲々　メリコフさん、ソニヤさん、お目出度う。

メリコフ。ソニヤ　ありがたう。

メリコフ　みんなで一緒に行きませう。

ロニヤ　行きませう。

女達の叫び聲　まアうれしい。うれしいわ。

（階下で、赤んぼ（ナスタアシヤ）の泣き聲が聞える。）

イワン　をぢさん萬歳。

女達　（手やハンケチを振る）　萬歳！

――幕――

第二幕

第一場

人物

メリコフ

ソニヤ

ナスタアシヤ　二人の中の赤んぼ

カテリイナ

イワンと弟ミイチカ

時

前幕から二十五日ばかり過ぎた日の午近く

所

前幕に同じ

幕あくと、正面下手寄りにしつらへた小さな搖り寢臺の傍に立つて、カテリイナがナスタアシヤを抱きあげながらあやしてゐる。

やがて下で元氣よくドアをあける音がし、「ソニヤー」とメリコフの呼ぶ聲がする。カテリイナ聞きつけて、いそいで赤んぼを寢臺に寢かす。が、年寄りの、念入りにぐづ〳〵してゐる。返事がない爲め、メリコフつづけて「なばさん!」と呼ぶ。

「はい……」嗄れた返事をして、彼女ドアの方へ行かうとする。と、ドアが開いて、メリコフがぶッつかりさうに入つて來る。極めて手輕な旅行姿。

メリコフ　をばさん、こゝにゐたの?

カテリイナ　今赤ちゃんの御守りをしてゐました。……お歸えりなせえまし。

メリコフ　留守中御世話さま。(大股に寢臺へ駈け寄つて、赤んぼの寢た頰へ、眼の額へ、接吻する。それからカテリイナへきく) 丈夫だつた?

カテリイナ　えゝ、えゝ、とても御たツしやで御座えましたよ。

メリコフ　さう?――ソニヤは?

カテリイナ　(ちよツとドギマギしたが、押へつけて) 奥さんは、用があつてちよツと前出かけなせえました。でも、もう御歸りの頃で御座えます。そこらの町の角まで、もう來てゐなさるかも知れねえ。

メリコフ　さう。――何も變つた事はなかつたかね。

カテリイナ　(又ギクリとしたが、さあらぬ樣子をつくろッて) これと云つて變つた事は、何もありましなんだ。

メリコフ　それはよかッた。(子供をあやして、安心したやうに机の方へ行く、そして留守中來た郵便物の積み重ねを取る)

カテリイナ　(思はず涙をこぼして、いそいで手で拭き、そのまゝ去らうとしたが、又思ひ返したやうに) 旦那は、べつに食當りも水當りもなさらんなんだか。

メリコフ　ありがたう。いや、大分身體が弱つてゐたから、自分でも心配してたがね。この通り元氣だよ。(腕と胸を張つて示す)

カテリイナ　そりや何よりでした。で、アルハンスク縣の模樣はどうで御座んした?

メリコフ　(意氣込んで) とてもすばらしいもんだッたよ。百姓の諸君がよろこんでくれたッて、なかッた。會場がないもんだから、小さなお寺の本堂や、小作人の家を四五軒空けて、第一會場、第二會場ツて風にしてね。そこへ小作人諸君が、女房も子供もギッシリつまつて、

この國で最初の無産農民學校開校記念講演會をやッたもんだ。僕達文壇の者が、初めての農民創作集を編んで印税二千圓を建築費に寄附するッて話したら、まるで割れるやうな喝采だッたよ。何人も涙をこぼしてゐた。

カテリイナ　（うなづいて）　そうでがせうとも。

メリコフ　僕達は、大抵話はカラッ下手なんだが、えらいもんだね、あそこの百姓達は實によくわかる。僕達の力をこめて云ふ點をこだまのやうに感じて拍手してくれるんだ。都會の生半可な知識階級より、全くどれ位ほんとの事がわかるか知れたい。やつぱり生活だねえ。生活が、何よりも眞理を教へるんだ。やつぱり、僕達は、應援より自分の勉強に行つたやうなもんだッた。

カテリイナ　あッちの人達だッて、どんなに力強く思つたでせう。

メリコフ　實際、如何に地主でも亂暴すぎるからね。封建時代から何十年と經つた今日この頃、まだコミ袋なんて、無法きはまる眞似を平氣でしてるんだからねえ。おばさんの縣にも、そんな仕來りがあるの？

カテリイナ　いんえ、コミ袋なんて、聞いた事がありましねえ。どんな事で御座えます？

メリコフ　昔封建時代にね、惡代官がきびしい年貢の取り立てをして、もし收める麥袋の目方が小麥一粒でも足りなかつたら、ひどい罰を當てたもんだ。それが怖さに、云ひつけの目方より二百目でも三百目でも、百姓達が餘計入れて納めたのがコミ袋さ。そいつをやめてくれッて、小作人達が一緒になつて地主へ賴むと、いきなり警察の手で何十人が牢屋送りさ。丁度種蒔きの時期へかゝッて、さうやッて働き手の亭主や親父をなくした家へ、地主達はなほ執達吏を差し向けて、耕作禁止の立て札を、何十町歩ッて畑へ立つちやッたんだ。ぢやあ、小作人達は餓ゑ死にするよりほか仕方がないぢやないか。でもまだ足りずに、自分達の建つた學校へは一切小作人の子供達を入れないッて、地主同盟で申し合はせたんだ、それが、今度の小作運動や無産學校運動の起りさ。

カテリイナ　（いま〳〵しさに思はず手を拍つて）　まア、何てひどい、鬼みてえな地主も世の中にやアゐるもんでせう。

メリコフ　そんな地主の無法を平氣で許して、法律も裁判所も小作人の爲めに指一本力を貸してくれないぢやあ、まだ資本主義時代とも云へないよ。てんで封建時代た。まはりの國から見たら、何十年おくれてるかわからない。こんな不自由な國に生れ合はせた僕達あ、實際[illegible]仕合はせたね。

カテリイナ　わし共が生れ故郷を離れたも、やッぱりそん

た地主奴のお蔭です。家ぢう破滅したも、みんなあいつ等のせいです。それを思やあ、今でも口惜しくて口惜しくて堪りましねえ――で、アルハンスク縣の仲間の人達あ、今度ア勝ちさうで御座えますか？

メリコフ　そりやアわからない。何しろ向ふは、あらゆる權力を握つてるんだからね。だが、今度はこんなふうに中央の問題に迄なツて來たから、大抵うまく行くにちがひないよ。何とでもして勝たせなくちやア――。

カテリイナ　ふんとでがす。――（急に思ひ出したやうに）奥さんはどうなすツたか？……もう御歸りになる筈だに。（メリコフへ向つて）じき御午で御座えませう？

メリコフ　さうだよ。

カテリイナ　おやあパンの支度をして置きますべえ。さぞ御腹が空きなすつたらうに。……まアゆつくり休みなせえまし。

メリコフ　ありがとう。（机へ向ひ、郵便の封を切つてよみ始める）

（カテリイナ、赤んぼの寢入つた樣子を見て、ドアの方へ行き、思はず又そツと眼へ手を當てゝ去る。）

（メリコフ片端からよみつゞける。その時下でソニヤの聲がし、やがていそいで階子をあがつて來てドアをあける。）

メリコフ　（顏をあげて）おゝ！

ソニヤ　あなた！（飛んで行つて抱きついて）よく早く歸つてらしツてね。

メリコフ　あゝ何しろ芝居の用もあるし。

ソニヤ　あなた！（急に涙を溢れさせて胸へ顏を押し當てる）

メリコフ　（おどろいて）どうしたの？

（ソニヤむせて返事が出來ない。）

メリコフ　（感づいて）芝居でもどうかなつた？

ソニヤ　えゝ。

メリコフ　（愕然として）上演出來ないのか。

（ソニヤ又むせる。）

メリコフ　（ぐツと彼女を起して）しツかりしろソニヤ、――駄目か？

ソニヤ　えゝ、……まだ新聞を御覽にならなくて？

メリコフ　見ない！（そのまゝ茫然とする。が、再び自分をつかんで）落ちついて話を聞かせてくれ、ソニヤ！

ソニヤ　話しますわ。（やうやく涙をとめ、決然として顏をあげる）わたし、今その事で檢察局へ行つて來たとこなんですの。

メリコフ　あゝ、さうか。

ソニヤ　ゆふべ、丁度パンを食べた時、フト投げ込んで行

つた夕刊を見ると、大きく社會面の眞ん中へ「メリコフ氏の『先驅』上演禁止さる」ッて出てるでせう。ハッと思つてよんで行くと、今日検察局から出頭命令があつて、新藝術座の係りのかたが出かけたら『先驅』の臺本を取りさげたらどうかッて話だ、座では非常におどろいて、もうすッかり支度をして、稽古も十日の上もやつてる事だからどうか許してくれッて頼んでも、どうしても聞かないので、そのまゝ歸つて來た、ッて書いてあるんでせう。プランスキイさんの意見も次ぎへ載つてましたわ。「實に亂暴極まる。大いに敎へてやる必要がある」ッて。

メリコフ　うむ。

ソニヤ　で、わたしびつくりして、おばさんに赤ちやんを頼んで、すぐと新藝術座へ出かけて行きましたの。「丁度「夜明け前」がかゝッてゐるので、プランスキイさんもいらッしやいましたわ。わたし御顔を見るなり、こんな事が夕刊に出てましたが、多分いつもの新聞の出鱈目で御座いませうね、ッて伺ひましたわ。と、いや、ほんとです、ッて仰るの。そして、すぐ御知らせしなければならなかッたんですが、御主人がアルハンスク縣の方へ行つてらッしやるッて御話でしたから、御歸りになる迄と思つて失禮してました、ッて詫びなさるでせう。おや、どこが悪いッて云ひますの、ッて御聞きすると、外へ洩らさないやうにッて條件つきで、三箇條の理由をあげたッて、話して下さいましたわ。第一が共産主義宣傳ですッて。

メリコフ　馬鹿な！　――そんな事を云へば、あらゆる社會思想を扱つたものはさうなる。

ソニヤ　ほんとですわ。――第二には姦通讃美ですッて。

メリコフ　姦通讃美？

ソニヤ　變な言葉ですわね。

メリコフ　名熟語だ。ダダの詩人にでも敎へてやれ。……だが、尠くもおれのやうな健康な詩人は、そんな餘計な事を考へてる暇はないよ。結婚も決して讃美しないが、姦通が何か目的なんだ！

ソニヤ　わたし達を侮辱してますわ、ねえ――御役人なんて、きッと姦通さへ書けば讃美だと思つてるんでせう。

メリコフ　第三の理由は？

ソニヤ　第三は、あんなに貴族社會の裏面をあけすけに書いたのがいけないんですッて、上流社會に對する名譽毀損ですッて。

メリコフ　（突然、一種凄味を帶びた笑ひに爆發する。）ハハハハ――さう來るだらうと思つたよ。さう來なくッちやうそだ。

（ソニヤ、ややおどろいて凝視する。）

メリコフ　泥棒にも三分の理窟ッて云ふ、たとへどんな事を實際やツたツて、表向きにならないかぎりは名譽毀損ぢやアない。が、どんなに藝術化されても、書いたら毀損だ。一體事實そのものが毀損なんだ、毀損は彼等自身のことだらう。そして。眞實を離れてどこに藝術がある？

ソニヤ　藝術なんて、初めッからわかつてゐやしないんですわ。それに、あの脚本は、大分大官邊の問題になつたんですッて。そつちの方から、どうも何か云ひつけが來てゐるらしいッて、プランスキイさんの御話でしたわ。

メリコフ　さうにちがひない。でなくとも、その意嚮を考へての事だ。

ソニヤ　その第三の理由が、一番重大な理由ですッて。

メリコフ　まだほかに、僕が社會思想を持つてゐたり、アルハンスク縣へ行つたりした事も、入つてるんだらう。

ソニヤ　さうかも知れませんわね。全くの不意打ちだッて、プランスキイさんもひどく憤慨してらッしやいましたわ。そして脚本取りさげの勸告は受けたけれど、こッちの方ではどこ迄も取りさげないつもりだ、檢閲制度の改革の爲めにも、あくまで戰ふつもりだから、あなたが戻つたらよろしく傳へて下さい、ッて仰つてゞしたわ。

メリコフ　さうか、ありがたい志だ。

ソニヤ　でも、もう駄目ですわ。……昨夜あんまり殘念で、それにあなたが歸つて御聞きになつたら、どんなにガッカリなさるだらうと思ふと、悲しくなッて、わたし一晩ぢう碌々寢られませんでしたの。で、今日は多分歸つて來るッて御知らせでしたが、そのあいだ待ち切れなくて、女の癖にどうかと思つたんですけど、今朝じかに檢察局まで出かけて行きましたの、そしていろ〳〵上役の人にわけを云つて、どうかカットだけで濟ませて下さいませんかッて、賴んで見ましたの。わたし、行く時は、あゝも云はうかうも云はう、と思つて出かけたんですけれど、あつちへ行つて長いこと待たされて、そのあげくやッと向ふの人の顏を見たら、たゞもう何のわけともなく無暗矢鱈に切なくなつちやつて、初めッから了ひまで涙はかりこぼしてゐましたわ。あんまり泣くもんで、まはりの人達がみんなこッちを見て困りましたわ。

メリコフ　さうか。（彼女の髮を撫でる）

ソニヤ　でも、賴めるだけは賴んだつもりですわ。あなたがお身體を惡くしてまで一生懸命書いた初めての戲曲で、今まで散々苦勞して來たのを、今度思ひがけず新藝術座で演つて頂く事になつたんで、どんなによろこんでるか知れません。外國の傑作に較べても負けないッて、皆さんも仰つて下さいます。もし主人が歸つて今度の事を聞

きましたら、どんなにがツかりするでせうツて。

メリコフ　(當惑して)　そんな事まで云つたのか。

ソニヤ　えゝ――惡かつたら勘忍して下さい。どうせ女の事なんですから。……でも、どうしても聞き入れてくれませんの。その頑固さつて、おどろきましたわ。きツと、いくら留守にしろ、あなたが直接來もしないで女だてらに生意氣な、と思つたんでせう。それとも、わたしがあんまり泣くので手管に掛けるとでも考へたのかも知れませんわ。あなたではわからないから、來るなら主人が直接來るやうに、ツて一點張りなんですの。それに、夕刊でプランスキイさんが仰つた事も、きつと癪にさはつてるんでせう。臺本を取りさげないやうだから、今日正式に禁止命令を出す、ツて云つてましたわ。

メリコフ　(落膽して)　ぢや、迚も駄目だな。

ソニヤ　あきらめるより仕方ないでせうか。何とかやりやうはないでせうか。

(メリコフ答へず、腕組みをして考へ込んでゐる。)

ソニヤ　(未練に堪えられないやうに)　とてもわたし、あきらめられませんわ。

メリコフ　(太く獨語のやうに)　たとへ今出來なくも、今に見ろ、きツと出來る時が來る。

ソニヤ　(確かめるやうに)　いつかは自由に出來る時が來るに定つてますわ。でも、そんなに長くは待ち切れませんわ。

ノリコフ　長い事はない。一二年のうちにだツて出來なかアない。

ソニヤ　一二年だつてぢれツたいわ。

メリコフ　無論だ。――(語を換へて)　が、ソニヤ。こんな不自由は、今始まつた事ぢやない。そして僕達ばかりの事でもない。苦しみ惱んでゐるプロレタリアは、みんな同じ仲間だ。たゞ形を變へてゐるだけの事だ。同じ權力のもとに、同じに虐げられてゐるんだ。であればこそ結び合へるんだ。アハルソスク縣の百姓諸君だツて――。

ソニヤ　それはさうですけど、でも、あんまりの不意打ちですもの。芝居の事は何でも通し切つてらツしやるプランスキイさんでさへ、あんなに何でもなく通るやうに云つてらしツたんですもの。――おまけに切符イワン坊や近所の人達が、明日(あす)をたのしみに待つててくれたんですもの、見物出來なくなりさうだツて聞いて、みんなもがツかりしてますわ。

メリコフ　(再びこみ上げゝ來る殘念さに顏を痙攣させて)　うむ、せめてみんなにだけでも見せたかツたなあ………。

ソニヤ　さぞ殘念なりなさるだらうツて、カテリイナおばさ

んも涙をこぼしてましたわ。

メリコフ　みんなを泣かせたな。

ソニヤ　（机の傍へ寄つて行き、その隅に載つてゐた小さな寫眞を持つて來る）切符賣場のミコオルカが、店の寫眞器を持ち出して行つて撮つてくれた、此の、大きく「先驅」のポスターを貼つた劇場正面の寫眞、……これも記念になりましたわねえ。（うらめしさうに泌々見入る）

メリコフ　あの子も隨分待つて、夢にまで見てくれたのになあ――（思ひ返して）だがソニヤ。まだせめてもの慰めがあるよ。出版の方は多分大丈夫だからね。もう前編は出てゐるし、後編の載る「ナロオド」も今日は町へ出るだらう。出次第ガスコン社では前編と一緒に本にしてくれるから、せめてそれだけはみんなに讀んで貰へる。

ソニヤ　（夫の肩へ手をかけて）ほんとに、それだけでもよろこびませうね、あなた。――決して氣を落さないで、又いゝ物を書いて下さい。

メリコフ　無論さう思つてゐるよ。――だが、何しろ戲曲の方に[illegible]、あれは心血をこめたんだからなあ。

（その時、寢室の中で赤んぼが泣き出す。）

ソニヤ　あら……（駈け寄つて抱きかゝへて）ナスタアシヤ、目がさめて？　よツく寢んねしてたのね。長いこと待つて、さぞおなかゞ空いたでせう。（着物の胸をはだけて、乳房をあてがふ）

（その時、ひらいた硝子戸の向ふのポプラの樹、――前幕よりズツと葉が濃くなつてゐるあいだへ、イワンと弟ミイチカが身體を現す。）

イワン　（大聲で呼びかける）ピイツ、――おぢさん、歸つて來たの？

メリコフ　あゝ。

イワン　芝居は邪魔が入つたんだツてね。駄目なんかい？

メリコフ　うむ、駄目らしい。

ミイチカ　畜生ツ！　どうしても許してくれないのかい？

メリコフ　氣の毒だなあ、イワン坊達。

イワン　（すツかり悄氣て）おぢさんもガツカリしたらうな。あゝ、世の中ツて、何て全くつまんねえ處だらう！

――幕――

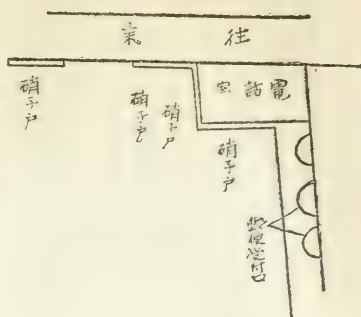
第二場

人物

メリコフ
ソニヤ
ナスタアシヤ
シカノフ　新聞記者
郵便局員　通行者達

時　前場の翌日、晩

所　街頭の郵便局

往來
電話室
硝子戸
硝子戸
硝子戸
硝子戸
郵便受付口

舞臺　郵便局の土間。――舞臺構造は（俯瞰圖）、電話室の往來寄りの硝子戸には、上部中央へ「電話室」と赤書してある。局の入口の硝子戸は開け放たれ、簡易保險や勸業債券公募のポスターが掛けたり貼つたりしてある。

その向ふの往來を、自動車や自轉車や荷車や徒歩の通行者が往來してゐる。局にも車にも、みな燈火が點いてゐる。

やがて往來の下手から、メリコフ夫婦が歩いて來る。

ソニヤは、腕にナスタアシヤを抱く。と、その横を上手から自動車が一臺來かゝる。

車上のシカノフ。（すばやく車窓から夫婦を見かけて）あツ、メリコフさん！（運轉手へ向つて）一寸とめてくれ給へ！

自動車硝子戸の前を行き過ぎ、見えなくなつた所でとまる。局を通り過ぎやうとした夫婦も、その聲で立ちどまり、少し下手へ戻る。下手からシカノフが現れる。

メリコフ　やあ、シカノフさん！

シカノフ　しばらく。（手を握り合ふ）

メリコフ　無事ですか。

シカノフ　ありがたう。――時に、「先驅」は殘念な事をしましたね。よみましたよ、早速。……舞臺にかけたらどんなにいゝだらうと思つて、僕も見物をたのしんでたのに。――新聞へ劇評を書くつもりでゐたんですよ。

メリコフ　ありがたう。

シカノフ　それを、上演禁止ばかりか、又今日の處分たあ、いくら何でも亂暴すぎる！

（夫婦びツくりして。）

メリコフ　今日何かあつたんですか？

シカノフ　まだ御存じない？、「ナロオド」が、あなたの作

で發賣禁止になつたのを。

メリコフ　なに、發賣禁止？

シカノフ　そう。つい、さツき社へ知らせがあつたんです。明日の朝刊には、又大きく載るでせう

ソニヤ　（涙にくもツた聲で）まア何て事でせう。

シカノフ　全く、重ね〳〵御氣の毒でなりませんよ。讀む自由さへも奪はうツてんだ。かうなりやあ。いよ〳〵恐怖時代だ。あゝ。そう云やあアルハンスクの無産農民學校ね、あれも今日禁止命令が下りましたよ。

メリコフ　えツ、農民學校も？

シカノフ　そうです。まるで滅茶苦茶なあばれかただ。

ソニヤ　まア。

メリコフ　だが、僕の方は全部いけないッて云ふんですか。それとも、一部切り取れば又發行出來るツて云ふんですか？

シカノフ　さあ、その邊は知りません。少し位の伏字でよければ、いゝ何とか當局から話がある筈だと思ふが。でも、あれがすツかりいけないなんて法はない。

メリコフ　（鸚鵡返しに）法はない。

シカノフ　何しろ、僕も忙しくてまだ詳しい事は聞いてません。間もなく社の用事が出來て、今かうして出かけて來たところです。ちよツと御二人の姿を見かけたんで、もしや御存じなかアないかと思つて、いそいで車をとめさせたんです。

メリコフ　どうもありがたう。

シカノフ　まあ、此の打撃に屈しないで、又いゝ物を書いて下さい。——おや、いそいでますから、今日はこれで失敬します。

メリコフ　失敬。（握手する）

（シカノフ、ソニヤの方にも挨拶して去る。バタンと扉を閉ぢ、再び自動車の走り去る音。）

（夫婦茫然として見送る。）

メリコフ　一部だらうか、全部だらうか。

ソニヤ　全部だなんてツたら、ガスコン社の本も駄目ですわね。

メリコフ　すぐ、ナロオド社へ電話でき合はせやう。丁度郵便局の前だ。

（局の中へ飛び込む。が、思ひ返して、あとから來たソニヤの腕から赤んぼを抱き取つて、）

メリコフ　お前、濟まないが聞いてくれないか、僕は、電話が大ツ嫌ひの性分だから——。

ソニヤ　よう御座んす。（受附口へ驅け寄つて）濟みませんが、少し電話を貸して下さい。

女局員の聲　よう御座います。

ソニヤ　（電話室の硝子戸をあけやうとして）あそこの番號はT千六百五十九番でしたわね。

メリコフ　そうだ。——禁止になつて御氣の毒ですツて、よく云つてくれ。

ソニヤ　え丶（室の中へ入る。彼女の半身が硝子越しに見える。聲も聞える）

（メリコフ、興奮して硝子戸の傍に立つ。中では鈴の音、それからソニヤの聲。）

もし／＼、交換局ですか？　あのT千六百五十九番へ掛けて下さい。——え丶、T千六百五十九……。

（間。）

もし／＼、あなたはナロオド社ですか。……雜誌社の、——え？　パン屋さん？　ちがひました。御氣の毒さま。

（又鈴の音。）

あなたは交換局？——今のはちがひましたよ。T千六百五十九番へ掛けなほして下さい。

——え丶。

（間。）

あなたはナロオド社ですか。え？　保險會社？——まアどうしたんでせう。又ちがつたから切ります。

（又鈴の音。）

もし／＼、T千六百五十九番へ掛けて下さらなくちや困ります。ちがつてばかりゐます。

メリコフ　（焦々して）え丶！　だから、おれは電話は嫌ひだツて云ふんだ。

ソニヤ　もし／＼、あなたはナロオド社？——あ丶そうですか。こちらはメリコフで御座いますがね。え丶メリコフ。

（メリコフ赤んぼを片腕に抱きながら、緊張して耳を戸の隙間へ當てゝる。）

ソニヤ　主人が電話嫌ひなもんですから、わたし代つて伺ひます。今新聞記者のかたから御聞きしましたが、ナロオドが主人の物の爲めに發賣禁止になりましたツて。ほんとで御座いますか？——え？　ほんと？——ま、何て云ふ事でせう。——どうも御氣の毒さまで御座いました。主人も、くれ／＼よろしく申してゐます。——で、理由は何で御座いますツて——え？　安寧秩序紊亂と風俗壞亂？——まあ！——それで、全部いけないんですか。それとも、一部分だけ拔けば、又出してくれますの？——え、全部？——全部ですツて？　まア！　ぢや、もうどうする事も出來ませんですのね。——え？　そして？——まあ、——まあ——。

（メリコフ、一時も早くハツキリ聞きたく、電話の最

中次第に硝子戸をあける。そとな地響き立てゝ、貨物自動車や荷車が通る。で、ソニヤまで聞えなくなる。慌てゝ、再びシッカリ戸を押しつける。そしてピタリと耳を押し當てる。）

（「全部」と云ふ確かめを聞くと、思はずよろ／＼とする。踏みしめる。）

ソニヤの聲　どうも濟みません。――えゝ、主人にもよろしく傳へます。さよなら。

（ソニヤ飛び出そうとして戸を押す。メリコフ身を退く。）

ソニヤ（興奮して）あなた！　やつぱり全部いけないんですツて。

メリコフ（蒼い顔をして）うむ、きいた。

ソニヤ　まア何て無法でせう！　そして、それぱかりか、あなたを起訴しようとしてゐるんですツて。

メリコフ（子供を抱いたまゝ、片手を額へ當てゝ思はずうづくまらうとしたのを、キツとして）なに、起訴？

ソニヤ（涙聲で）えゝ、檢事局が、――今お知らせしやうとしてゐたところですツて。

メリコフ　畜生ツ？　よし、何とでもするがいゝ。

ソニヤ（彼へ取りすがつて）あなた、もうこんな國にゐたくないわ、わたし、……外國へ行きませう。外國へ！

メリコフ　叱るやうに）苦しめられてゐるのはおれ達ばかりぢやない。――（腕の赤んぼを眺めて）だが、これの時になツたら。………

（又自動車の音。）

――幕――

1926・8

何が彼女をそうさせたか？

（六幕九場）

第一幕

人物

中村すみ江（すみ子）（十三歳）

中村染代
喜若
小雪
市川新太郎　みな同年輩の少女俳優

源三郎
赤助　少年俳優

お仙　染代の母親。太夫元の女房
おわか　喜若の母親
おきよ　新太郎の養母
勘太　すみ江の叔父
師匠　老役者
床山　師匠の女房
衣裳屋

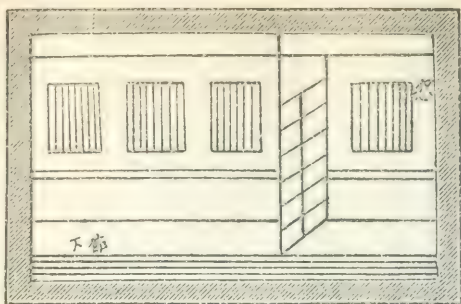
出方

時　大正五年二月

處　淺草、淸遊館樂屋

舞臺　上手三分の一ばかり座長部屋、下手は通し部屋の氣もち。兩室のしきりの障子は開く。正面奥の壁に幾つかの窓。「通し部屋の方の壁の一部分に、「大々人氣大入滿員」の大字や、「普派大名題○○（消されて見えぬ字）馬鹿野郎」「牛と狐の泣き別れ」なぞの稍小字の落書が見える。座長部屋の前手には、中村染代丈江と染めぬいた華かな室のれん（丈け四五尺）が結びあげられ、窓の左横手には不動明王の護符が貼られてある。

各々の子供役者の座（上手から順に、染代、源三郎、喜若、小雪、すみ江、新太郎、赤助）には座蒲團が敷かれ、奥の棚には鏡臺や立て鏡が置かれ、各芸名を書いた紙が壁に懸る。（權力があつたり富裕だつたりする親の子供は、座蒲團も美々しく、鏡も大きく、化粧道具も行き屆き、火鉢も立派。が、すみ江以下の役者のそれらは、目立つて粗末で見すぼらしい。火鉢も、嚴寒なのに三人で共用してゐる。）天井から釣りさがつた

幾つかの電球、舞臺前面（樂屋の手前）は廊下。（その長方形の舞臺の周圍は、悉皆黒布で圍ふ。）

幕あくと、座長部屋の最右端の座蒲團に、お仙がひとり立て膝をして、長煙管の煙を吹いてゐる。本舞臺（樂屋の前方にある氣もち）の方から、「野崎村」の終りの床の三味線や語り聲が聞える。やがて「お染役」のすみ江の冴えた聲で「よしないわし故お光さんの縁を切らしたお惜しみ、堪忍して下さんせ」の臺詞がひびく。「いようすみちやん？」「千兩役者！」「女大統領！」つゞいて、ワッと云ふ笑ひ聲、拍手の音。その爲め、「お光」役の染代の臺詞は一向聞えない。

お仙、やや癇性に眉間をピリピリさせる。お光の臺詞が終へると、「イヨお光！」と一聲だけ觀客の聲援が擧がつて、久作の臺詞へ移つてゆく。お仙、ポンと煙管を火鉢の縁へ叩きつけて、代りの煙草を詰める。

やがて柝が鳴り、「すみちやん！」「源三郎！」等の聲と拍手が混淆する。間もなくバタバタと足音がして、扮裝のまま子供達が下手廊下から登場。最初に、喜若がお母親に抱きかゝへられるやうにして戻つて來る。

母親　今日はお前、ほんとに上手だつたよ。

喜若　（甘へて）そう？

母親　あれなら、誰が見たツて立派なお母さんだよ。いくら身體が小さくツたツて。――そこがヤツパリ藝だわね。（お仙のところへ走り寄つて）奧さん、今のこれのお母さん振りを見て下すツて？

お仙　いゝえ、つい用で。……よう御座んしたか？

母親　とても素敵でしたわ。

お仙　（嚥み込んだようにうなづいて）喜若さんは性がおよろしいから、きツとグングン伸しますよ。

母親　（念を押すやうに）さうでせうか。

お仙　（微笑しながら）受け合ひですよ。奧さん！

（母親もう我慢出來なくなつて、背後に立つてゐる喜若へ飛びついて頰ずりする。）

(そのあいだに、久作姿の源三郎やお染姿のすみ江等登場。源三郎は、親子の様子を見ても平氣で、ずツと自分の座(座長部屋の、染代の隣り)へ行く。)

お仙　御苦勞さま。坊ちやん。

源三郎　(ませた高慢な調子で) なんの、こんな役位朝飯前でさ。

(すみ江(すばらしい美貌のお孃さま姿)は、年若達を見て思はず羨ましさうに立ちどまる。母親、娘を蒲團へ坐らせて、大きな鑵や袋から奇麗な菓子を取り出して口へ入れてやる。その時、お光姿の染代が馳け込んで、ぼんやりしてゐるすみ江へ突き當る。すみ江よろけて振り向く。)

染代　(鋭く) 何をボヤボヤ突ツ立つてるのよ、こんなとこへ？――ほんとに田舍ツぺツて仕方ないもんだわね。

(そのまゝお仙の方へ行く)

(つゞいて久松姿の新太郎が、養母のおきよに頸首をつかまへられてもがきながら登場。)

おきよ　此のぼんくらめ！(いきなり横鬢を張りつけて突き飛ばす)

(新太郎前へころぶ。おきよ、脚で蹴らうとする。)

師匠　(あとから來て彼女の肩を叩く) おかみさん、手荒な眞似アおよしなせえ。

おきよ　(はげしい權幕で振り返つて、師匠なのを見て稍おとなしく) あんまりこいつ性無しですからね。あんなにお師匠さんから教へて頂きながら、どうしてもう少しキチンと出來ないんでせう。こんな奴は、少うし痛い思ひをさせたけりやあ物になりませんや。(脛をさすツてゐる新太郎へ、再び向はうとする)

師匠　(引きとめて) 身を入れなさろなア結構だが、そんな亂暴をして、あツたら役者に怪我でもさせたら困るぢやありませんか。

おきよ　少し位の怪我なら……。

師匠　戲談ぢやアねえ。芝居をしてゐるからにやあ、これでも大事な賣り物でさ。折檻なら、素人のお前さんよりわたしにお任せなさせえ。

おきよ　いえね、お師匠さん。何もあなたを差し置いてどうのかうのツて……。

師匠　それにおかみさん。引ツぱたくにしても頭なんざいけねえ。精々こゝらこゝら。(片手で自分の背中や尻を指す)

おきよ　それも知つてますがね、ついあんまり腹が立つたもんだから――。

師匠　(彼女の肩をたゝいて) 折檻も人によりけりさ。こんなおとなしい子供をあんまりおどしつけると、反つて

ちゞこまツて、手も足も出なくなッちまひますせ。

おきよ（折れて）そう云ひなさるなら、何のわたしに云ひ分があるもんですか。（取り入るやうに）どうかまア、此の役もよろしく御ねがひ申しますよ。

（そこへ、小雪や赤助や、かつらや衣裳を持つた床山や衣裳屋等ドヤドヤ登場。）

床山（師匠へ）此のかつらは、どうにも毛癖が悪くて、わたし往生しちやつた。

（それからキツかけに、今まで騒動を眺めてゐた登場者全部、めいめいの活動を始める。子供役者連は、かつらを取つたり、衣裳を脱ぐ。）

すみ江（降りて来た新太郎へ、向つてやさしく）痛かつたでしょ。どこも怪我はしなくつて？

新太郎（おずおず義母の方を見返りながら）ありがたう。何ともないさうだ。

（衣裳屋や床山は、上手の方の子供の傍へ行つて、いろいろ手傳ふ。）

染代（お仙に手傳つて貰つて荒つぽく衣裳を脱ぎ棄てながら、）お母さん、もうこんな役、あたいいや!

お仙（顔を見て、）何故さ?

染代 わかり切つてるぢやアないか。幾らあたい一生懸命やつたつて、誰もちつとも聲をかけてくれないんだもの。役柄が悪いからだよ。

お仙 何が悪いもんかね。野崎村ぢやあ、何てッたッてお光が一番の見せ役ぢやアないか。

染代 何だか知らないけれど、ちつともパッとしやしないわ。みんな何とも云つてくれないのが、何よりの證據だわ。

お仙 デミはデミな役だからね。それに、お前見たいな色氣の出ない子供ぢやアまだちッと無理かも知れない。

染代 ほんとに骨折り損のくたびれ儲けッて、こいつだわ。そこへ行きやあ、すみ江なんぞ（口惜しさうに彼女の方を見やつて）碌すつぽ臺詞もなけりアしぐさもないくせに、みんないゝ氣で引つさらッてッちまうんだもの。憎らしいつてありやアしない。（傍の源三郎へ）ねえ源三郎さん!

源三郎（うなづいて、ませた口調で）全く儲け役かも知れないねえ。見物なんて、どこの小屋でも綺麗な役さへ見りやアうれしがるんだから。

染代 見物ばかりぢやないわ。役者たつて、綺麗な方がどんなにいゝか知れないわ。

源三郎 それやアね。隨分年を取つた役者でも、ホラ、あの新之助さん見たいな、取り過ぎたやうな役者でも、やつぱりそうだッてんだからね、まして我々子供に至つて

はねえ。

染代　だからうまくやつてるツて云ふのよ。お母さん、あたい、見せ場なんてちツともなくツたツて構はないから、お染の方を演りたい！

お仙　急にそんな事を云ひ出したつて始まりやしない。

染代　なぜ、お師匠さんは又、あたいにこんな役を振つたんだらう？

お仙　（たしなめるやうに）そんな事をお云ひでない。お前からゴテ出した日にやあ、どうして一座の收まりがつくんだね。

（さツきから染代の不平を聞かされて、すみ江は當惑したやうに默つて衣裳を脱ぎ、手早く顔をおとす。）

（そこへ出方が、美事に梅と水仙をあしらつた大きな造花の輪を持つて登場。）

出方　えゝ、すみ江さんへ。これを今御贔屓さまから……。

（彼女の傍へ置く）

（子供達、「アラッ」と叫びながら花輪へ目を注ぐ。）

すみ江　（びつくりしたやうに）どなたから？

出方　名前は仰いませんが、洋服を着た、大へん立派な紳士でしたよ。一昨日の晩から觀にいらつしやつて、あんまりうまくて可愛いから御褒美にあげたい、ツて御言傳です。

すみ江　まア……。（思はず恥かしさうに顔を押へる）

喜若の母親　（羨望に堪へないやうににじり寄つて、一寸觸つて）まア高尚な花輪です事ね。（同じく首をさし出してゐるおきよへ向つて）やつぱり役によつて損得があるもんですねえ？

おきよ　そうですとも。（再び氣づいたやうに新太郎を睨む）

（新太郎びつくりして身を退る。）

すみ江　そのかた、まだいらしつて？

出方　いえ——（一寸云ひ淀んで）用もあるし、もうあなたも出ないから歸る、ツてお戻りになりました。

おきよ等　まア……。

出方　（お仙の方へ向いて）おかみさん、これはあと表の方へ飾つて置きませうか？

お仙　そうね（一寸考へて）なに、舞臺へ出したらこつちへ持つて來て下さい。

出方　へいッ、承知しました。（すみ江へ向つて）おや、すみ江さん、持つて行きますよ。

（持つて去る。）

喜若、小雪等　（見送りながら、羨望に堪へかねて思はず）あたいも、あんな花輪欲しいわ。

あたいも。

染代　（突然地ダンダ踏んで）　お母さん、それ御らん！

師匠　（子供達の顏をいろいろ世話してゐたが、一寸苦笑してなだめるやうに）　染ちやん。あなたの臺詞にもあるやうに、見れば見るほど美しい、あた可愛らしい其顏で、ッて役だから、どうも仕方ありませんよ。

染代　（押ッかぶせるやうに）　おや、あたいきたなくて憎ッたらしくて、がらにないッての？

師匠　（當惑して）　誰もそんな事ア云ひません。

染代　おやアどうして、そんなにすみ江を贔屓するのさ？

床山　（見かねて）　お孃さん、贔屓の何のつて、うちがそんな事をする筈が御座いませんよ。

師匠　お光の役は、お染よりずつと上手でなくつちや振れませんや。殊に子供衆ぢやアね。

染代　でも……。

お仙　（娘の袖を引つ張つて）　お默り、染代。――そんなに云ひますあ、道三郎さんや喜若さんや小菊さんに申しわけない事たあわからないかい？　不服どころか、大家のお孃さまがたを差し置いてお光を勤められただけでも、冥利が盡きるぢやないか。

染代　（なほ屈せず）　あたい、何も外の人の事を云つてるんぢやないてよ、すみ江の事を云つてるんさ。――へん、なんだい、田舍の土百姓の鼻ッ垂れッ子の癖にしやがッて、いくら舞臺だッて、ヌケヌケお孃さま振りが呆れ返らあ。憚りさまだが、お江戸の水でうぶ湯を使つたあたいにやあ、田舍娘の役なんぞ柄にないなア當り前さ。當て嵌つておたまり小法師があるもんか。

お仙　（周圍に對する遠慮から強く）　お默りつたら默らないか。染代。……そんな口のきゝ方をして、見ッともないぢやないか！　すみ江すみ江ッて、あれでも家へ貰つたからにやアお前の妹だよ、妹の評判がよかつたら、よろこんでやるのが當り前ぢやアないか。姉妹喧嘩ならうちへ歸つておし、こゝは小屋だよ。喧嘩場ぢやアないんだよ。（云ひわけらしく喜若の母親へ向つて）　まアどうでせう。奥さん。舞臺のお光とお染の口爭ひを、樂屋へ戻つてまでやらうッてんですから、子供ッて全く仕方ないもんですねえ。

母親　（うなづいて）　それも藝熱心からですよ。子供は、大人より幾倍思ひつめるかわかりませんからねえ。これ（喜若を指して）なんか、今日は一つ臺詞をまちがへたつて、家へ歸つてから急に思ひ出して泣き出したりする事があるんですよ。それだけ、お客さんから賞め言葉一つ貰つてもうれしいんですよ。淨瑠璃の文句ぢやアないが、賞められたさが一杯に……ッてね。――でも、全くお染はいゝ役ですよ。喜若にも、是非一遍やらせて頂きたい

もんですね。きツと、すみちやんに負けないだけにや演れますから。

（その時、下手から勘太登場。酒精中毒風のルンペンプロ。飲んでゐるらしく顔や頸が赤い。）

勘太 （ちよいと疊へ膝をついて） 皆さん、御早う御座んす。〔演藝界の挨拶〕

大勢 （その聲に振り向いて） 御早う御座んす。御早う御座います。

勘太 （立ちあがつて小腰をかゞめて、一々） ようおきよさん！ どうだすみ公？――奥さん、――こりやアお師匠さん、――床屋さん……。（おしまひにお仙の前へ行つて）おかみさん、しばらく。

お仙 お早う！ そうしばらくでもないぢやありませんか。

勘太 （一寸頭を掻いて） ヘツ、こいつア御挨拶だな。そうでしたかなア。

お仙 そうでしたかもないもんだ。勘太さん、又飲んでおいでだね。

勘太 いやア、重ね〳〵恐れ入谷の鬼子母神。――おめがねどほり。……何分その、金がなく〳〵ツてクサクサしてゐるとこへ持つて來て、かう時々お目にかゝりにあがるんだやア、チヨイと閾が高くツてね、少うし醉つぱらツてでもゐねえ事にやアね、おかみさん、――はははは。

お仙 いつも醉つてて、おかみさん、おかみさんツて、ほんとに氣味の悪い人だよ。

勘太 （再び頭を掻いて） いやはや、どうも、そうツケツケ云はれちやあ立つ瀬がねえぢやア御座んせんか。

お仙 あるかないか知らないが、わたしの方こそやり切れないよ。人に會ふ時にやあ、たまにアしらふでゐて頂きたいねえ。

勘太 おかみさん、なにね、これで決して本心は違つちやアゐねえんだ。

お仙 （苦笑して） 違つてるなけりやアなほさら悪いや。

勘太 （無頓着に笑ひ出して） はははは――御酒はただ内氣を封じ込むだけのお呪ひさ。

お仙 何だか知らないけれど、今少し氣忙しいから、用だツたら此の次にして下さいね。

勘太 おツとツと、……ノツケから逃げを打たれちやあ困りますよ。

お仙 （キツとして） 何ですて？

勘太 （調子を變へて） いや、御もツとも。――何しろ、かうしてひとりで樂屋を切り廻しておいでなさるおかみさんのこツた、忙しいなア太陽さまよりわかつてら。がね、おかみさん、おれの方もチヨイと氣忙しいんでさ。

お仙 （吹き出して） ほほほほ、氣忙しいはよかつたわね。

勘太　（眞顏で）いや全くさ。人間、頸の乾あがる位え氣忙しい事があるもんか。

お仙　お前さんの乾あがるツてえなア、酒ッ氣の切れる事だらう。

床山、衣裳屋、おきよ等　（床山達は、次の出幕の爲め先刻から忙しく子供達の世話をしてゐる。相變らず上席の子供にばかり構ふ。上席の子供達は、暇々には菓子や南京豆を口へ入れてゐる。一緒に笑ひ出して）はははは……

勘太さん、圖星だね。

勘太　（忌々しさうに）チェッ、太夫元のかみさんだと思つて、みんなして御追從を云ひやがる。

おきよ　（大聲で）何が御追從ですよ。飲み勘さん？　御座なりだと思ふなら誰にでも聞いて見るがいゝや。飲み勘さんなんて綽名は、一體どこから來たと御思ひなさいますかねえ、もうし飲み勘さん。いくらお前がしらみと御[illegible]

衣裳屋　なんだい。おきよさん、そりやあ洒落のつもりかね。

若い俳優　洒落しくの悪口とは奇抜だこと。

勘太　飲み勘でも何でもいいや。多勢に不勢ぢやアかなアねえ。——（お仙へ向つて）ところでおかみさん、まあそう云ふ次第で、此の頸頂が乾あがつてバタバタと來てけつかるんでさ。一つ、何とかやさしくうるほしてやつておくんなせえな。

お仙　（ツンとして）そうたびたびの無理ア利きませんよ。

勘太　無理だと思ふからこそ、かうして下でに出るんでさ。

お仙　いくら下でに出ても、駄目なものア駄目さ。

勘太　（ムッとしたやうに）何ですて、おかみさん。かうして男が面アさげてもいけねえんですかい。

お仙　（横を向いて煙草を吸ひつけて）定つてるぢやアないかね、わたしアね有り餘るお金持ちでもなけりやア、金貸しが商賣でもないんですよ。（横へゆッくり煙を吹く）

勘太　（ちッとその樣子を見て、急に荒ッぽく）へん、笑はしやアがる。金貸しが商賣ぢやアねえッて？　その代り騙りが本職だと仰るんかね？

（お仙キットト見たが、思ひ返して默つて、煙の輪を吹く。）

勘太　（重ねて）何でえ、騙りのくせに大きな面アしやアがつて！

お仙　（肝癪を破裂させて）おフザケでない！　おとなしくあしらつてりやア方圖もなく附けあがつて。いゝ加減で口をすぼめないと、女たツて默つちやゐないよ。

勘太　（破落漢ふうに胡坐を組みなほして）ほほう、こい

つア面白え。おかみさん、面白え事が氣にさわつたね。騙りを騙りだッて云ふに何の不思議か……、

お仙　やかましいッ！

勘太　なに？

お仙　（きかない調子で）何故わたしが騙りかハッキリ云つて御らん！

床山　（あはてゝ彼女に縋りついて）おかみさん、醉ッぱらひを相手になんぞおよしなさい。大きな聲をして、もし舞臺越しに御客さんへでも聞えたらどうなさいます？

勘太　（一方で）云ふとも……。

衣裳屋　（彼を押へて）勘太さん、ここはどこだと思ふんです？　おまけに、荒ッぽい事を云つちやアすみちやんが可哀そうだア思はないか。

お仙　（床山へ）だッて、如何に何でもあんまりだからね。

勘太　（衣裳屋へ）そのすみ公をウマウマ騙り取らうッてんだから我慢ならねえ。（再びお仙へ向つて）さう云はれるが口惜しかッたら、身の代金の殘りをスッパリ出せ！

お仙　殘りなんて、そんなものが定つてるもんか。

勘太　だから騙りだッてんだい。へん、たつた八十兩で百兩の手附で、大事な娘を、鳶に油揚げをさらはれるやうにしてやられて、黙つて引ッ込んでる勘太だと思ふか？

お仙　（辛ふじて自分を押へながら）それだけありやあ當座澤山だッて、お前自分で云つたぢやないか。その上いろいろあの子の仕込みはかゝる、お前さんはフンダンにねだりに來る。その金だけでもちッとやそッとぢやありやしない。禮を云はれるとも、文句なんぞ附けられる覺えは鵜の毛ほどだッてないつもりだよ。

勘太　あの時ア、如何にもそう云つたにちげえねえ。が、玉さへ賣り出しやア、幾らでも禮をするッて約束だッたぢやねえか。それを、玉代や祝儀の少しッぽち何でえ！

お仙　（一種凄みを持つた調子で笑ひ出して）ほほほほほ、――おやア何だね、もうすみちやんが賣り出したから、タンマリ禮を取つてもいゝと思つてるんだね。

勘太　その通りよ。

お仙　（重ねて吹き出して）ほほほほほ――だから素人は怖いッてんだよ。全くウッカリ役もつけられないや。ちよいと！　すみ江が何だい？　何が賣り出したんだい？　ここにいらッしやる本職筋の源三郎さんや、お預り申してゐるお嬢さん達の手前にもそんな熱を吹くなアよしておくれ。門閥の光もなけりやア金の箔もなし、ただちッとばかり面がいゝだけの田舎の土ッくさい娘を、これだけ舞臺を踏ませるやうにしたのは一體誰のお蔭だ？　え、

勘さん、——それを何だい、二言目にやあ金、金……、へ、へ、お嬢さんがたア、みんな持ち出して汗みづくになッてらッしやるんだよ。その見當さへ附かないたア、分際ッて仕方ないもんだねえ。

勘太　なに分際だ？（拳を固めて突ッ立ちあがる）

衣裳屋、師匠、床山等。まアまア勘太さん！　静かにしておくんなさい。亂暴はいけねえ。云ひ合ひたから、寄つてたかッて押へろ。

勘太（猛つて）よくも恩に着せやがッたな。盗人猛々しいたアこいつだ！——ようし、それほど手のかかる、役に立たねえ、一座に要らねえすみ公なら、此の叔父さんが今日限り引き取つて行くからそう思へ。

（みんなおどろく。）

衣裳屋　亂暴だやアねえ。

喜若の母親　まア何て亂暴な人だらう！

勘太（喜若前に）さアおかみさん、どうだ？　今の言葉ぢやまアすまんか、おやまならきやア連れて行くぞ！

師匠（彼の肩へ手を置いて）勘太さん。無茶は云ひッこなしだよ。おかみさんは兎に角、芝居をブチ壊したりしちやあ困りますぜ。

染代（つづいて叫ぶ）連れて行きたきやア、いくらでも連れておいで、へん、すみ江なんか、——反つてサッパリして、みんなどんなにいゝか知れないわ。

勘太（睨みつけて）こいつ！

お仙（嘲笑つて）引き取りたきやアお引き取り。だが、例の手附けはどうしておくれだね？

勘太　そんなものア、相場でゝも儲けた時返してやらア。

お仙　そんな出任せで、ウンて云ふわたしと思つてるかい？

勘太　云はうが云ふまいが構つたもんか？　おい、すみ公！（いきなりすみ江の方へ行かうとする。）

床山　衣裳屋等（彼を遮りとめて）駄目ですよ勘さん！まア、今夜のとこアわッしにお任せなせえ。——大將に、又よッくわッしから話しておくから……。

勘太（強情に）いゝや、おかみさんがあやまらねえうちア、承知出來ねえ。

衣裳屋　それもわッしに任せなせえ。決して惡くは計らはねえから。……（なだめる）

喜若の母親（そのあいだにお仙のところへ行つて）奥さん、飛んだ惡に引ッかかッて御災難ですねえ。

お仙　なに、こんな手合ひにやあ慣れちやアゐますがね、でもあんまりな云ひがかりですから……。

母親（聲をひそめて）奥さん、いッそ厄介拂ひと而あて

に、奇麗サッパリすみちやんを返してお了ひになつたら？
お仙（勘太の方を見やりながら）ほんとにさうしてやりたう御座んす。
母親　おや、なすツたら？
お仙　でも……。
母親（押ッかぶせるやうに）お金の事だッたら、失禮ですが、あの男に代つて幾らでも差しあげませう。
お仙（ややまごついて）いゝえ、奥さんにそんな……。
母親　それとも、すみちやんがゐなくなつちやお芝居が困るでせうか？
お仙（意地づくな調子で）なんのあなた、あんな子供一人位……。
染代（傍から）お母さん、あんたすみ江なんぞ追ひ出しちまつて頂戴。
母親（うなづいて）染ちやんもああ云ひなさるし……。
勘太（その時向ふから又わめく）さア、あやまるか？
あやまらねえか？
お仙（赫として、喜若の母親に）ぢやあ御ねがひします。
（勘太へ向つて）連れて行きたきやあ、さつさと連れて失せるがいい！
勘太（びつくりしたが）ほんとにいいか？
お仙（嘲笑つて）御念にや及びませんだ。
勘太（虚勢を張つて）ようし、あとでぐづぐづ云つたつて追ッつかねえぞ！（人々を押しのけて、すみ江のところへ行き、その腕をつかんで）さ、おれと歸れ！
すみ江（びつくりしながら引つ立たせられて）どこへ行くの、叔父さん？
勘太　知れた事よ。叔父さんの家へ行くんだ。
すみ江（首を振つて）あたい、いや。
勘太（睨みつけて）ここにゐてえつてのか？
（すみ江無言でうなだれる。）
勘太（笑ひ出して）はははは、心配するな。うちにやア置かねえ、すぐ又どこかへ賣りつけにやらあ。（無理矢理連れて行かうとする）
新太郎、赤助（彼女の袂をつかんで）すみちやん、行かないでよ！
おぢさん、あとあたひ達が淋しくなッちまうから、連れて行かないで……。
（すみ江、眼に一杯涙を溜めて仲間を見る。）
勘太（無情に）ははは、それより、お前達も早く出ッちまへ！　こんな處にゐりやあ、一生ウダツアあがらねえぞ。
おきよ（嘲笑的に）さよなら！　飲み勘さん、すみちや

ん！

（その時、舞臺（前方）の方で開幕の合圖の柝が鳴る。）

――急速に幕――

第二幕

人物

すみ子
阪本佐平（五十二三歳）
問屋の主人
山下　巡査部長

時

大正五年十一月初旬

處

東京市外の靜かな町

舞臺　上手寄り稍斜めに、問屋風な店の一部。下手　石垣の上には立派な土藏が突ッ立つてゐる。下には荷車など通行の道、塀の中の植ゑ込みの落葉が、少し散らばつてゐる。

幕あくと、すみ子ひとり下手から出る。（色くろしく美しく、魅力ある顔、殊に眼がすばらしい。十三歳にして、は非常にマセたところが見える。）桃割れに結び、着物は洗ひざらした子供ッぽい物。出來るだけ年を小さく見せろやうに苦心してある着つけ。肩からズックの古びた鞄をさげてゐる。秋晴だが風は寒いのに、足袋もはかない草履穿き。

すみ子　あゝ、くたびれた！

（四方を見廻して切石の上へ腰をおろす。又周圍を見、鞄の中から燒芋を取り出して、うまそうにガツガツ食べる。一つ濟ませて、何か遠くを思ひやるやうなウットリした眼つきで正面上方を見、他の芋を取り出す。）

（彼女が最初の芋を食べてゐる時、塀の横手に佐平出（いで）、蔭からそッと見てゐる。二つ目へ食ひついた時、突然飛び出して來て頸すぢをつかまへる。）

佐平　すみ子ッ！

（彼女びつくりして立ちあがらうとする。佐平の力によろけ。）

すみ子　痛いわ！（燒芋を棄てゝ兩手で彼の手をもぎ放す。そして怨めしさうに見あげて）痛いぢやないの、おぢさん！

佐平　あたり前（めえ）よ。手前（てめえ）、何でいつまでも油を賣つてやアがるんだ。

すみ子　遊んぢやゐないわ。

佐平　ゐねえ事があるもんか。おれアさツきからあとをつけて、みんな知つてるぞ！（平手で横鬢をくらはせる）

（彼女兩手で眼を抑へる。）

（そのあいだに、佐平鞄をあけて見る。新聞へくるんだ燒芋をモ一つ取り出す。）

佐平　こんな買ひ食ひばツかりしやアがつて！

すみ子　（涙に濡れた眼をあげて）買つたんぢやありませんわ。そりやアみんな貰つたの。

佐平　うそつけエ。（擲り投げやうとしたが、一口に頬張る。そして鞄の底の銅貨や銀貨をチヤラチヤラ掻き集めて、片手の掌に載せて目分量を見て）あれから歩いて、まだこれツぱちきり貰はねえのか？

すみ子　（やゝ反抗的に）そんなに拗かないでしよ。

佐平　いけねえ、これツぱかり。――手前は、この頃毎日貰えが減つて行くな。

すみ子　（用心して稍後退りながら）あたいが減るんぢやなくて、おぢさんの慾の方が殖えるんだわ。

佐平　（眼をいからせて）この小便垂れ！（手をふりあげる）

（彼女すばやく飛びのく。）

佐平　口ばツか、ツベコベと、小まツしやくれやがつて、腕の方は鈍る一方だ。

すみ子　だつて、あたいもうこんなに大きくなツちやツたんだもの。そうそう子供並みに呉れアしないわ。

佐平　そんなら餘計一生懸命やらなくちやアいけねえぢやねえか。どうして、手前はこの頃そう怠けたがるんだらう。ふん、こないだ拘留に遭つてから怯氣がついたんだな。

すみ子　（首を振つて）そうぢやないわ。

佐平　おや何だ？

すみ子　（思ひ切つて）あすこの巡査部長さんが、いろいろ教へてくれたの。

佐平　部長が？　ふうん、どんな事を吐かしやアがつた？

すみ子　こゝを出たら國へ歸れツて……。

佐平　（嘲笑つて）へん、埼玉の田舍か？　生憎誰も國にやアゐねえと來てら。おツかアはまおとこと逐電。親父ア病氣の揚句ののたれ死。――たツた一人の叔父貴と來たら、手前を食ひ物にする事ツきり何も考えちやアゐねえ。歸つたツて、又茶屋か芝居へでも賣り飛ばされるが關の山さ。なアすみ子。

すみ子　（遠慮がちに）今から思やあ、あたいあの子供芝居の時の方がずツとよかつたわ。

佐平　何だと？――（言葉を變へて）昔の事あ何でもいゝもんさ。手前が大きくなつてから憶ひ出しやあ、今の暮

しア極樂だあ。

すみ子　（ほんきで）あたい、これからもつと淋しい目を見なけりやアいけないいんなら、いつそ死んぢまつた方がいゝわ。

佐平　はゝゝ、子供の自殺かい？　こいつア大笑ひだ。そんなに急に世の中の無常を御感ずり遊ばしたなあ、やつぱり部長の入れ智慧かいたからう。彼奴、外にとんだ事を云やアがつたな？

すみ子　もし困つて死にたかつたら、おれが何とでも心配してやるツて……。

佐平　おツとどツこい、横ツちよからふんだくられてまたまり小法師があるもんか。てツきりそんな事ぢやアねえかと思つたから、すぐおれが手くばりしたんだ。

すみ子　（怨めしさうに見て）ひどいおぢさん！　そして、部長さんから貰つたお金まで取りあげちまつて。――部長さんがさう云つてたわ、あたいは猿だつて。そして慾深い業突張りのおぢさんにみんな捲られちまふんだつて。

佐平　そいつア手前に利いたんだな。やい、手前、部長の馬鹿野郎の云ふ事なんか本氣にしたら、それこそ大間ちがひだぞ。

すみ子　だツて、あの時は、あたい部長さんの云ふとほりだと思つたわ。

佐平　（怒つて）この恩知らずめ！　手前が叔父貴に苛められてるのを救ひ出してやつたなあ、一てえ誰だ？　うぬ？　そればかりか、おれが今まで見せてやつた芝居はみんな忘れちまつたか？

すみ子　（負けない調子で）おぼえてるわ。

佐平　おぼえてたらそんな事が云へた義理か？　おれはな、一遍學校へ行つた事もねえ可哀想な手前に、どうかほんとの人間の道をわからせてやらうと思つて、叔父貴の手から引き取つてから、散々ツぱら閑や金を使つて芝居を見せて廻つたんだぞ。丁度手前に、自分で少しやア芝居をやつた事もあり、大好きでもあり、そいつが一番手ツ取り早え教育だと思つたからよ。唯の酔狂や面白づくでやつた眞似ぢやアねえぞ。手前の見た芝居で、主人の事を猿廻したなんて、怪しからねえ事を吐かす奴がどこにある？　見ろ、御殿様の仰せなら、たとへどんな無理無體だつて、みんなチヤンと守つて行くぢやアねえか。それどこか、よろこんで死にさへするぢやアねえか。それが昔ツから日本の眞人間の道だ。それにはつれた眞似をする奴あ、光秀でも大野九郎兵衛でも、みんな人でなしの畜生にされて、ぶざまにくたばツちまふんだ。

すみ子　（眞面目な口調で）おぢさん、芝居ツて忠義の事ばツかり演るもの？

佐平　そうさ。それが第一だつてエ道理を教へえもんだ。そうでねえ芝居なんて、あッたつてくだらねえ馬鹿げた物ばッかりよ。

すみ子　（半ば不審そうに）そうを？

佐平　（氣づいて）やい、餘計な事で、唯せえ短え秋の日を潰させやアがつて、さツつと廻れ！　ぐづ〳〵してると、そのまゝにやあ濟まさねえぞ。

（すみ子なほ考へてゐる。）

佐平　（荒々しく）何を愚圖ついてやアがる。（彼女を突き飛ばす）

（すみ子よろけて見あげる。）

佐平　きツとそうやつて遊んでゐる事だと思つて、今日はわざわざ見張りに來たんだ。ついて來なくつたつて、手前がどこにどうしてゐるか位えた事アちやんと見とほしだが……。（顎でしやくつて、「行け！」と命令しながら睨む）

（すみ子、默つてとぼとぼと上手店の方へ歩いてゆく。）

（芝居の訓戒が始まつた頃から、店の帳場へ主人出て來て、頻りに帳面を調べてゐる。）

すみ子　（それを見て、鞄の中から厚紙の書付を取り出し、一寸佐平を振り返つて進み寄つて）御免下さい。

（主人熱心に調べて顔をあげない。）

すみ子　（聲高に繰り返す）御免下さい。

（彼、やつと顔をあげて彼女を見る。）

すみ子　（丁寧に頭をさげて）どうぞこれを御らん下さいまし。（疊敷きの上へ身體を伸ばして、書付を帳場の方へ差出す）

主人　（眼鏡越しに見やつて）何だね？　――あゝ孤兒院か？　わたしンとこは、それ、そこに貼つてあるやうに、諸勸化物貰ひ一切おことはりツて事にしてるから、さきへ行つておくれ？

すみ子　（押し返して）濟みませんけれど、一寸御らん下さい。

主人　（顔をしかめて）今忙しくて、迚もそんなものをよんでる暇はないよ。

すみ子　でもどうぞ一寸……。

主人　ないつてツたら！

すみ子　濟みませんけれど……（可憐に、又頭をさげる）

主人　うるさいなあ。……（プリプリしながら我を折つて）何が書いてあるんだい、一體？（書付を取りあげて）哀願書？　ふむ、（聲を立てゝよみつゞける）謹で四方の御慈善閣下に奉願候。小生儀明治三十七八兩年度日露戰役の際、陸軍近衛步兵上等兵相勤め、滿洲の野に轉戰し、凱

存候一旦本国へ帰省中、彼の風土の変れる地に寒暑を凌ぎたる結果なるか、俗に云ふ風疹病に罹り、永々門司病院の厄介を御蔭様をもつて助りしも、病状日々に重きを加へ、身体手足自由を失ひ、戦功に依り一時金は御下賜有之候得共、医者の費用に仕り、加ふるに過ぐ昨年十月十四日再度に帰り、二子を残して其員の妻と相成り、他に頼るべき親類無之、重々の不幸を悲しみ一時自殺せんと迄決心致し候得共、跡に残す二子の愛に気も心も動倒し、言語中人に守る……御知し、喉々四方の御慈悲者の厚き御慈悲に浴し、以て親子の生命を保全仕度、何卒博愛慈善の思召を以て、多少にかゝはらず御喜捨被下度此段奉願候

下谷区入谷町十三番地　太田友吉
娘　太田ムメ
同居人［illegible］

慈善御篤志家御中

……（声を出して読んでいたが）いゝ、慈善御篤志家様にはよかつたなあ、これ、これ、お前さんのお父さんが書いたのかい。
すみ子　はい
主人　お前さんはなか／＼文句がうまいね。
すみ子　………。
主人　お前さんは、下谷からわざ／＼ここまで、廻つて来たのかい？
すみ子　はい。
主人　そいつァ御苦労様だた。——だが、そんなに歩いたら随分貰ひがあつたらう。（書付けを返す）
（すみ子受け取る。彼再び帳面へ眼を落す。）
すみ子　（意外さうに）旦那さま！
主人　（うるささうに）何だい？
すみ子　少しでも頂かせて下さいませんか？
主人　（顔をあげて）よんでくれッて云ふからよんであげたんさ。お蔭で暇を潰されたよ。
すみ子　でも……。
主人　（鋭く、ペン先きで貼紙の方を指して）そこに貼つた紙を御らん。お前よめないのか？
（そのあいだ、佐平は其傍へ突つ立つて彼女を監視してゐる。貰ひが手間取れるのに業を煮やして、忌々しさうに両脚を踏み鳴らし舌打ちをする。）
（その時、下手から巡査部長山下がサアベルを提つて出る。胡散臭さうに傍を過ぎやうとして、靴音のけはひに振り向いた佐平の顔を見て、突然彼の襟へ手をかける。）
山下　（同時に）おい！
佐平　（逃げ出さうとして間にあはず）旦那ですか？

山下　旦那ですか、ぢやアない。貴様、又悪い事をやつてゐた。

佐平　(神妙な様子をして) どう致しまして。

(その時、斜め横のすみ子が物音に振り向く。思はず「あッ……」と聲を擧げる。)

山下　(彼女を認めて) 見ろ、ほら。(片手で佐平をこづきながら、片手で彼女を指す)

すみ子 (佐平の眼色に構はず) おぢさん！ (鞄を鳴らせながら喚く。)

山下　(一寸睨んで) また、お前が先きに彼に礼にきたな。

すみ子 (情なささうに見あげて) だッてー。

山下　又すぐつかまつたのか？

(彼女うなづく。)

山下　うむ。立派な現行だ。おい佐平。貴様、こんな可哀さうな子供に詐欺を働かせて、罪だと思はないのか？ 貴様のやうな人があるからこそ、世の中の人間がだんだん疑ひぶかくなつて、慈善的な氣もちをなくして薄情になるんだぞ。

佐平　(もがきながら) 旦那、どうか今日だきやア見逃してやつて下さい。後生です。これからアもう、御言葉どほり決してやりません。

山下　(笑つて) そして今度あ淫賣婦にでも賣りつけにするか？ もうちやんと[illegible]つたし、前から[illegible]した。

佐平　旦那……。

山下　こいつあいたッから貴様を探してゐるんだ。——おれ達は、いつも資本家の手先きだ手先きだつて云はれてゐるが、又それにあちがひないが、たまにやア弱い者の味方だッて出來なかアない。今日は思ひがけない處で出會つて、何よりだ。さあ一緒に來い。……(引ッ立てながらすみ子へ向つて) すみ子！ ッてッたな？ 明日

(すみ子うなづく。)

山下　もう今度は、決してこんな奴につかまらないやうにしてやるぞ。絶對安心だ、しかしはまた處、世話をしてやるから、ついといで。(上手へ進む。すみ子ついて行く。)

(主人、騒ぎに土間へ降り・店先きに立つて眺める。)

主人　(通る山下へ向つて) 御苦勞さま——。

山下　一寸帽子に片手をあげて、[illegible]。

(すみ子、きまり悪さうに從いて去る。)

主人　(見送つてから) だから、[illegible]化物買ひ一切ごめんことはりッて云ふんだ。——(笑ひ出して) はゝゝゝ、飛んだ活劇を無料で觀たな。(舌打ちして) だが、[illegible]を潰させやがッた。(いそいで[illegible]へあがつてゆく)

——　幕　——

第三幕

人物

すみ子
原　養育院収容者の身元調べ係り（四十三四歳）
敬三　中年の跛者
忠助　老人
平治　老人
おしず　赤んぼを抱へた、もと女工
おふく　老婆
おちか　老婆
（以上　収容者）
その他大勢の老爺老婆等

時

前幕から一週間ばかり後

處

養育院内の隔離室（収容者を、最初一週間ばかりごちや混ぜに入れて置く室）

舞臺　廣い室。正面奥にドア。板の間に簡單な寢臺が幾つか所狭く並んでゐる。その端の一つにすみ子がゐる。大體前幕の着つけ、周圍の寢臺上に、よき按配に、男女収容者が横になつたり起きあがつたりしてゐる。着物は青服やいろいろ。或る者は板の間の上で何かゴソゴソやつてゐる

幕あくと、中央寢臺の上のおすゞが、赤んぼに乳房を含ませてゐる。身體が弱つてよく乳が出ないので（幕あく前から）赤んぼしきりに泣いてむづかる。

おすゞ　おゝ、よし、よし。（一生懸命あやす）

（が、赤んぼは、吸つて見ては又切なさうに泣き出す。）

敬三　（突然、一つ置いた横の寢臺から唸る）うるせゑなあ！

平治　赤んぼだもの、泣くたア仕方ねえ。

敬三　いくら赤んぼだツて泣きすぎらあ、しよツちう泣いてばツかゐるぢやアねえか？

おふく　お乳が出ないせいだよ。

おすゞ　（涙ぐんで）さうですの。——おやかましくて、ほんとに濟みません。

忠助　乳の出ねえも無理アねえや。押し麥五分の南京米を食はされて、おまけにお汁や香々や煮〆ばツかりと來ちやアな。

すみ子　（見かねて端の方から飛んで來て）おばさん、又

御守りしてあげましよ。
おすゞ　ありがとう。おやお一寸抱いて下さい。すみちやんが抱いて下さると、いつも妙におとなしくなるから……。
すみ子　あたい、赤んぼが大好きだから、赤んぼの方でも好いてくれるんでしよ。（抱き）ヨチヨチ、ヨチヨチ……
（と、揺ぶりながら室の中を歩き廻る）
（赤んぼ、なかなか泣きやまない。）
おちか　（眺めて歎息して）男ツてもなア、ほんとに薄情なもんだねえ。こんなまだ若え人にからかツて、子供を生ませて、その揚句ドロンを定め込むなんて――ちツたあ、女や赤んぼの身にもなつて見るがいゝ。
おふく　全くさ。わたしが此の年になつて、こんな養育院なんかの厄介にならなけりやアいけなくなつたも、みんな男の薄情のお蔭さ、男の畜生め！
平治　全く女が赤んぼを持つて棄てられちやあ、どうする事も出来なくなるべえなあ。
おちか　（おすゞへ）お前さん、工場へ行つてたんだつてね、相手の男も、やつぱり工場の人？
（おすゞ默つてゐる。）
おちか　（重ねて）同じ工場の人？
おすゞ　（低く）えゝ。

忠助　棄てられるやうな男に欺されるなんて、お前さんもちつと馬鹿だツたね。
おふく　（怒つて）お默り、老いぼれめ！　そう云ふお前さんこそ、さぞ女に欺されない御悧巧さんだツたらうよ。
敬三　（吹き出して）誰があんな爺を欺す馬鹿があるもんか？
おふく　なにさ、これで自分ぢやあウント惚れられたつもりだらう。
平治　おばアさん、なかなか手厳しいな。
おふく　當り前さ。
（そのあいだに赤んぼは次第に泣きやむ。）
おちか　おやおや。すみちやん、お前ほんとに子守り上手だねえ。いつか默つちやつたわ。
おふく　（相變らず毒ツぽい調子で）今まで、散々子守りをして來たんだらう。
おすゞ　（すみ子の方へ兩手を差し出して）どうもありがたう。
すみ子　いゝえ、いゝんですよ。寢るまでもう少し抱かせて頂戴。
おちか　また寢ないの？
平治　（感心したやうに）お前さんは、まだ子供の癖にほんとにやさしいな。大きくなつたら、さぞいゝお母さん

忠助　（好奇に滿ちて）だが、どうして又大將、そんなに幾度も入つて來られたんだ？　受附で、よく何とも云はなかつたな？

敬三　（いよいよ得意になつて）だから、お前達新來たアちよいと値系がちがふツてんだ。牢屋なら差しづめ名主株だぜ、え、おい！

おふく　養育院の名主さまぢやあ、たんと幅も利かないねえ。

敬三　冗談云ふない。そんなら誰がおれの眞似が出來るか？

忠助　おれも又いつこゝを出されるか知れねえ。こんなまづい物ばッか食はせやがッて、着物だッて、もうそろそろ十一月の半分だッて云ふにまだ襦袢と單衣物一枚ッきり貸してくれねえやうな處ア、出されたッてあんまり未練もねえが、もし又行き倒れにでもなつた時の參考に、一つその秘傳を聞かせてくんねえか。

敬三　參考はよかつたな。……その行き倒れの秘傳よ。

忠助　ほう、行き倒れさへしりやア、いくらでも又入れて貰へるか？

敬三　入れて貰へるか、野たれ死にするか、どッちか一つよ。

おふく　あんまり勿體ぶらずにおしやべりよ、名主さま！

敬三　お前、こんな處へころげ込むに似合はねえしたゝかな婆さんだな。おやあ惜しいが教へてやらあ。全く無料の代物ぢやアねえぞ。

おふく　代は見ての御戻りツて事にしとくれ。

敬三　つゝしんで聞きやアがれ。――いゝか、ぶッ倒れるなら、まづ地の利を選べさ。共同便所の入り口ないッちいゝや。

おちか　まアきたない。

敬三　そのきたねえとこが附け目さ。何しろ始終人の出入りする場所だらう、それ、すぐ人目にやアつく。邪魔にやアなる。近所の交番へ走つてくれるも早けりやあ、巡査の來るも早えや。今時、人が見つけねえかもわからねえやうな寒い家の蔭なんかにへたばつて、長え事苦え思ひをする位え馬鹿げた事アねえぞ。知らせが早えだけありがぢやアねえ、何しろ場所が場所だ、いざ診察するッて段にたッたッて碌すつぽ診やアしねえや。エ、きたねえ野郎だ、また何だッてこんな處へ、寢ころびやアがつたんだ、ッてんで、すぐさま行路病人として院送りにしてくれらア。――どうだ、こんな手ッ取り早え手が外にあるか？

忠助等　なるほどなあ。

敬三　だが、その巡査がやッて來た時がコツ物よ。ウンウンうなつてるてえと、おい、こら、何だこんな處へ倒れ

た。うつかりしてゐるもんなら、端から盗まれちまわア、毛だッて爪だッて、いゝや、生命だつて盗まれかねゝえだぞ。

忠助　ヒイヤ、ヒイヤ。

敬三　老いぼれ！　おい、變な掛聲をしてくれるねエ。――そんな身の廻りの物あ、自分の仕事の金で買たッてえ有難え御世だか、よく行つてやッと月に一圓や二圓の小遣で、何が買へるんだ？

（その時、正面のドアをあけて原が入つて來る。一寸人間味を持つた顏。――みんなびツくりして居ずまひをなほす。）

原　（敬三へ向つて）今大きな聲でしやべッてたのはお前かい？

敬三　（頭を掻いて）へえ、さうです。

原　何を又雄辯をふるツてたんだい？

敬三　（身體をすくめて）へえ、その一寸……。

原　何か又こゝの不平を云つてたね。

敬三　いやはや、聞かれちまひましたか？――でもまア原さんでよかつた。後生ですから、どうか外のかたへは内密にしといて下さい。

原　うん、云やアしないよ。直せるもんなら、僕も云つて直して貰ふんだがね。どうせ直せッこないんだから――。

すみ子　（赤んぼを抱いたまゝ馳け寄つて）原のおぢさん！　御ねがひがあります。

原　えゝ――おう、又赤ちやんを御守りしてるね。

すみ子　赤ちやんに、どうか牛乳をやつて下さい。

原　やつぱりお乳が出ないか？

すみ子　えゝ、だからどうしても眠られないんですッてば、いくらだましてやつても、あんなに欲しがつて御口をスパスパやつてましよ？

原　ほんとになア、よしよし、おれが何とか監督さんに賴んで見やう。

すみ子　（一寸頭をさげて）ありがたう、おぢさん。（おすゞの傍へ行つて）おばさん、よかつたわね。

おすゞ　ほんとにありがたうよ。――さ、すみちやん、今度はわたしが抱きませう。さぞ重かッたでせう。（赤んぼを抱き取る）

原　（その様子を見て）すみちやん、手があいたら、一寸來てくれないか？

すみ子　何か御用？

原　あゝ、――いゝや、こゝで話したッて構はない。……お前小間使ひに行く氣はないか？

すみ子　小間使ひ？

原　あのね、今東京市の市參事會員で役をしてゐる秋山眞

雄ッて、養育院とかいろいろ關係の深い人があるんだよ。その奥さんから今朝電話がかゝつて、誰か一人可愛(かあい)いはしッこい御小間使をよこしてくれないか、ッて云ふんだ。で、いろいろみんなで相談した揚句、お前がよからうッて事になつたんだ。普通なら、まだ入つて來て一週間も經たないやうな者を、いくら何だッてそとへ出すわけにやお行かないが、お前なら可愛らしいし、はしッこいし、それに氣だてもやさしいし、どんな處へ出したッて大丈夫だからッて僕が大いに主張したもんだから、そんならッて遂に定つたんだ。こんな院とは較べ物にならないほど樂しもいゝし、第一、お前がこれから世の中へ出て一人前になる爲めに、どんなにいゝ手がかりかわからないと思ふんだが、どうだい、一つ行つてみる氣はないかい？

外の男女達　よう、素敵な口がかゝつたもんだなあ。

（とても大した話だ。）

おふく　（羨ましさうに）わたしも若かッたらねえ。

敬吉　笑アせやがい。おやアお前(まへ)、お針にでもくッついて行け！

（笑聲等雜然。すみ子黙つて、俯いてゐる。）

原　（重ねて）行かないか？

すみ子　（顔をあげて）おぢさんさへよけりや――。

原　（笑ひ出して）おぢさんは別にいゝも悪いもありやアしないよ。たゞお前に、又秋山さんによからうと思つて、僕あ云つてるだけさ。

外の男女達　行け行け、すみちやん！　そんないゝ口が又とあるもんぢやアねえ。

すみ子　（なほ躊躇ふやうに）でも、原のおぢさん、行つたらもう歸つて來られないんでしよ。

原　行くんなら、歸らないつもりでなくツちや、……（笑つて）お前、そんなにこゝがいゝのかい。

すみ子　（頭を振つて）いゝえ、よかアないけれど、あたいが行つちやふと、あの赤ちやんが――（赤んぼを指す）

原　赤ちやんにはチヤンとお母さんがゐるし、……いや、お母さんはじき分れなけりやアいけないが、別に世話係りが附くよ。

すみ子　でも、あたいおばさんと約束したんですの。おばさんの代りに看てあげるッて。

原　（動かされて）さうか？

おさど　（傍から）すみちやん、ありがたうね。ほんとに……でも、お前さんの爲めだから、どうか構はず行つて頂戴。

原　お母さんだッて、時々行つて會へるんだよ。それに牛乳も不自由ないやうにするし……。

すみ子　あら、會へるんですか。

原　あゝ。

おすゞ　（よろこんで）まアよかつた――。

原　ぢやあ行つても、いゝだらう？

すみ子　えゝ――でも、赤ちやんと別れるのがやツぱり辛いわ。

敬三　（腕を組んで）面白え子だなあ。

おすゞ　すみちやん、どうかほんとに行つて下さいよ。（すみ子、思案してゐる。）

原　（困つて）お前の外にやアべつに心當りがないし、弱つたなあ。

すみ子　（決心して）そんなら行きますわ。

原　行くかい。

すみ子　えゝ。

大勢　それがいゝ、それがいゝ。

すみ子　その代り、ようく赤ちやんを見てね。

原　よし、大丈夫だ。

すみ子　何時ツから行くんです？

原　ひどく性急な電話でね、今すぐにも、僕の方ぢやあ行つて貰ひたいんだ。

すみ子　（考へて）ぢやあ行きましよ。だけど、誰か附いてツて下さるんでしよ？

原　無論さ。何處に向ふの家があるかさへ、お前知らないんだからね。

すみ子　誰が行くんですか？　おぢさん？

原　僕あ行けないが、誰か小使が送つて行くよ。

すみ子　（激しく）いけません。いけません。そんならあたい行かない！

原　（びツくりして）なぜ？

すみ子　なぜツて、わかつてるぢやありませんか。あんなヨボヨボのおぢいさんと一緒なら、あたいすぐ又途中で掠はれちまふわ。あの坂本佐平の仲間が、どこにでもドツサリゐるんですもの。あたい又さツと連れ戻されて、前見たいな事をしたくちやいけません。誰かシツかりした、ウンと強い人が附かなくツちや駄目。

原　（うなづいて）さうか。

すみ子　どうか幹事さんにさう云つて頂戴。

原　よしよし。ぢやあ、誰か極腕ツぷしの強い人を選つて貰はう。

すみ子　そんなら一寸待つて頂戴。（自分の寢臺へ驅け戻り、わづかな持物を手早く小さな風呂敷包みにする）

原　いゝかい？（ドアの方へ行かうとする）

すみ子　待つて――（皆の方へ向つて頭をさげて）おぢさんやおばさん。いろいろ御厄介になりましたが、これから行つて來ます。

昔　お目出度う。——行つといで。

忠助　おふゝ、寂しくなりますなあ。

すみ子　これがお別れかも知れませんから、丈夫でゐて下さい。（おすゞの寢臺に走つて）おばさん、氣らくにして、ようお早く丈夫になつて頂戴、

おすゞ　（シャがれ聲で、すみ子の手を握つて、）すみちやんこそ、丈夫でゐておくれ。ほんとに御世話になつたわね。いつか又會ひたい事ねえ。

すみ子　きツと會ひましよ。赤ちやんと一緒に。——赤ちやん、さよなら！——赤ん坊の背中へ手をかけ、頬や額へ接吻する。やがて、振りかへり振りかへりドアへ行く、

——幕——

第四幕

人物

すみ子　秋山義雄夫人

[illegible]

おせい　女中

お琴　女中

[illegible]　五十四五歳

時　前幕の翌日午頃

處　市参事會員秋山義雄邸内

舞臺　上手寄り、舞臺三分の二位は疊敷。女中部屋の一部の氣もち、正面奥、壁の上部に硝子戸が作られ、向ふに青い常盤木の例の葉が見える。葉を透し、上手隣家玄關へ行く、砂利道の人の姿を覗く事が出來る。兩臺の境目のところ、部屋の手前は、奥の各々へ通じる廊下。それにつゞいて、舞臺三分の一の下手、臺所の板の間の一部。午飯の膳部が、もうすつかり支度されてゐる。板の間の奥は臺所入口の三和土。その先きに曇硝子の戸。——部屋の臺所や廊下とのしきりの障子等は、いいやうに裝置される。

幕あくと、部屋でおせいやお琴がいろいろすみ子に聞いてゐる。すみ子は、見ちがへるばかり奇麗な桃割に結ひ、着物も立派になつてゐる

おせい　おや、お前さんのお父さんは、時にお百姓さ（ん？）

すみ子　（うなづいて）ええ。

お琴　わたしや又、養育院の人ッて、お父さんもお母さんもわからない人ばかりかと思つたわ。

おせい　そんな事があるもんかね。——（つくづくすみ子

お琴　ほんとに、お孃さまは氣むづかしいわねえ。まだ十の、尋常三年生だつてのに、まるで七十のお婆さん見たいにやかましいわ。

勇次　云はされ放題にされりやあ、人間誰だッて、さうならア。殊に子供ア正直だ。生れた時から、自分の事ア何でも他人がやッてくれるもんだと、ちやアンと思ひ込んでるんだからな。勉強に學校へ通ふんだッて、おれのやうな御抱へ俥が足の代りをするし。

お琴　足の御代りなら、こんな日にやお深さやないわね。

勇次　なアに、いくら弱つたッて、おれだッてただ例な錢しにされんぢやアねえ。こんな日にこそ、小せえ子供を歩かせるなア可哀想だ。だからこんな時だけ使ふんなら、よくわかッてる。だが、どんないゝ御天氣の日だッて、ぽかくして氣もちがよくッて、子供なら歩きたくて歩きたくて仕樣がねえ筈のやうな日だッて、朝出かけに見かせ、午飯を食べに歸る途り道へに見かせ、又退けに見かせるぢやあ、ちッと馬鹿げてら。

お琴　ほんとにね。でもさうでなかつたら、勇さんもつお拂ひ箱かも知れなくつてよ。

勇次　おけアねえ。旦那ア此の頃チヨクチヨク自動車に乘ッかるしな。世の中アまッこと奇妙に出來てら。ただが、どうせもう俥ア長え命ぢやアねえ。その時ア、ふらア庭男か下男の事實に變るつもりよ。旦那も、まさか年寄り一疋棄てもなさるめえ。

お琴　そりやあ長年勤めた勇さんだもの。おまけにこんな廣い御屋敷で、旦那樣は市參事會員の、飛ぶ鳥も落す御威勢だもの……。

勇次　ところがそいつが、大きい聲ぢやあ云はれねえが、この頃チヨイと影がさして來たッてえ噂を、おらあ小耳へ挾んでるんだ。

お琴　あら、どんな？

勇次　（聲を低めて）何でも、市の砂利だのセメントだのを商人から買ひあげる時賄賂を取りなすつて、そいつが明るみへ持ち出されかゝッたとか、いや、うまく揉み消しちまッたとか、そんな噂よ。旦那も、ちッとこの頃屈託してなさる樣子を、おらアどうもそのせいぢやアねえかと睨んでるんだ。

お琴　さう云やあ、御勝手には、商からの、商人や請負師見たやうな人が訪ねて來るわね。

勇次　それよ。旦那の慾の深えの何のッて云ふんぢやねえが、あゝいろんな儲け一方の人間との關係ばッか多くちやあ、弱え人間のこッた、何日どんな間違えがおッ始まらねえとも限らねえ——だが、どうかそんないやな事のねえやうにしてえなあ。もしもの事でもあつた日にやあ、

奥様がたばかりぢやアねえ、使はれてるおれ達まで、飛んだ世間に肩身の狭え思へをしなけりやアいけねえからなあ。

お琴　ほんとだわ。

勇次　（歎息して）立寄らば大樹の蔭ッてよ。いつまで辻待ちをやッてたッて取り合ひのねえ商売、それより、お邸へ抱かれてたえありやあ主の扶持にはくれッこなし、それに何かッて呑気様たらうと思つて、おらアここへころげ込んで来たんだが、考へて見りやアあんまりいい思案でもなかッたやうだな。たんぼとまづ食いッぱぐれアねえが、窮屈ア窮屈だし、働きたッてらくはねアたし。……これで頼む樹蔭に雨でも漏つた日にやあ、目もあてられねえや。

お琴　そりや、奥様は御存じかしら。

勇次　（断定的に）奥様ア使ふ一方の御生れよ。使はれる方の辛さ、苦労なんぞ御存じあるもんか。――お琴さん、お前、おれがこんな話をしたなんて事を、決して奥様へ云つちやアいけねえよ。

お琴　云ふもんかね。

（途端、おせい戻つて来る。）

お琴　叱られて？

おせい　まあ、お魚の骨はそれいぢやア済まないッて、キッカケに、散々あれやこれや御叱言を頂いちやッた。

お琴　今日は、内もそとも荒れ日だわねえ。

勇次　はははは――内もそともはよかッたな。明日の新聞にやあ、風速二十メートルの暴風襲来、とか何とか、デカデカに出るぜ。

おせい　（一寸考へて）稍ともすりや悪い人ね、一思ひ出したやうにッて、すぐ叱るんだもの、お給仕しながらびッくりしてたわ。

勇次　（飯のあとの湯を注ぎながら）あの子、とても別嬪だね。

お琴　いやな勇次さん。

勇次　（真面目に）だつてそうぢやアねえか。お嬢さまだッたら、較べ物にならねえぜ。天一坊ぢやアねえが、あれでお嬢さまの着物と取ッ換えて見るがいいや、誰だッてあの子の方をお嬢さまと思ふに定ッてる。

おせい　馬子にも衣裳ッてね。

勇次　そりやアどつちの事たい？

おせい　どつちもさ。

勇次　へッ、お前もあんまり口アよかアねえや。

お琴　小間使ひは容貌佳しでいいけれど、御嬢さまの御相手は一寸骨だわ。あの子が来た御蔭で、わたしたちゃ御勝手の方が主になつてうれしいわ。

勇次　すみ公は、それだけ可哀想だ。
お琴　だつてまだ子供だもの。……それに、お孃さまと年もちがはないし。
勇次　だから餘計いけねえかも知れねえや。
（その時、すみ子が娘の膳をさげて來る。）
おせい　（見あげて）もう御濟み？
すみ子　えゝ。
お琴　（立ちあがつて）ぢや、わたし奥樣のをさげて來やう。
勇次　そんなら、おれも愚圖々々しちやアゐられねえや。
（いそいで湯を飲んで立ちあがる。そして、隅の方へ行つて茶碗を洗つたり拭いたりし、もとどほり箱へ收めて合羽を着て出てゆく）
（お琴のあとから、すみ子もおせいも去る。お琴、食べ荒した膳を持つて來て板の間へ置き、又走つてゆく。）
（やがて「行つてらつしやいまし！」と云ふ合唱がして、幕初めのやうに、女中部屋の硝子戸へ勇次の曳く幌車が映つて消える。しばらくして、おせいを先頭にお琴すみ子戻つて來る。）
お琴　何だか、馬鹿にお腹が空いたわね。
おせい　まつたく。寒いも寒いし、奥のお膳を洗ふのはあと廻しにして、すぐ食べませう。
お琴　さうしませう。
（めいめい自分の膳を出して、板の間のはしへ坐りながら盛る。娘達の魚の殘りや、海苔や、香の物などの菜で）
おせい　すみちやん、今日はおとなしいだらうね？
（すみ子默つてニツと笑ふ。）
お琴　時々こんな事はあつてよ。慣れちまへば何ともなくなるわ。
すみ子　（不審さうに）お孃さまの御魚は、始終骨を抜きますの？
おせい　さうよ。ここの御邸では、どなたの御魚でも。
すみ子　（眼を見張つて）まあ！
お琴　だから、お孃さまは、よその家へ行つて骨のついた御魚が出るとあがれないの。御邸の風を知つてる御家では、お孃さまへお魚をあげる時はやつぱり骨抜きで出す事になつてるの。
すみ子　（わからないやうに）どうして御自分で骨を御取りにならないんでしよ？
お琴　取る位なら、食べない方がいいの。
すみ子　（眞顔で）隨分御不自由ですね。
お琴　（笑ひ出して）はゝゝ、不自由はよかつたわね。人間あんまり自由すぎると、反つて不自由になつちまふか

秀子　云ふ事さへよく聞きやあ、この後どんなにでも引き立てゝやるからね。今まで、お前は不しあはせな目にばッかり逢つて來たさうだけれど、これからはほんとにしあはせになれるよ。どう？　昨日來たばッかりでも、もう隨分しあはせな氣がするだらう？

（すみ子俯いたまゝ默つてゐる。）

秀子　食べ物だッて、養育院なんかとは較べ物になるまい。そんな海苔や御魚なんぞ、あそこにゐたんぢや食べやうッたつて食べられないだらう？

（すみ子相變らず無言。）

秀子　養育院の御飯なんて、普通の人間ぢやあ一口だつて食べられないんだッてね。くさくてまずくて。……一體、御魚なんて匂ひでも嗅ぐ時があるのかい？

（すみ子慄える。）

秀子　目刺しの一疋でも附く事があるの？ないんだらう？――どうして返事しないの？　はづかしいのかい？

すみ子　（突然顔をあげて）奥さま、御魚位始終食べてゐます。こんな殘り物なんぞ、みんな犬にやつてますわ。

（云ふなり、魚の皿を取つて土間へ投げつける　皿、板の間の端へ當つて、けたたましい音を立てて壞れ飛ぶ）

おせい、お琴等（仰天して）まア！　すみちやん！

（すみ子、默つて秀子の顔を睨みあげる。）

秀子　（見る見る蒼白く血の氣を失ひ、額へ青筋を立てゝ）おすみ！　何て眞似を主人へ向つてするんです？

すみ子　（押し戻すやうに）子供だと思つて、あんまり馬鹿にしないでくださいまし。

おせい、お琴等　（すみ子へ取りついて）そんなことを云つてないで、早く御あやまりなさい。早く御詫びなさいよ。

すみ子　（首を振つて）あやまりません。あやまるなら、奥さまの方からあやまツて下さい。

秀子　（荒々しく）何ですツて、おすみ！　もう一遍云つて御らん！

すみ子　云ひます……。

おせい　（遮つて）すみちやん、いけませんたら――（秀子へ向つて、代つて手を突いて頭をさげる）奥さま、どうぞ御勘辨なすツて下さいまし。まだ子供で、それに逆上て、もう何にもわけがわからなくなツてるんで御座いますから……。

すみ子　おせいさん、かまはないで下さい。

お琴　すみちやん！

おせい　（重ねて秀子へ）どうぞわたしに免じて、今日のところは御許し下さいまし。

で行きません?
新太郎　入つてもいゝか、誰もゐない?
すみ子　えゝ、今みんな留守です。だからちッとも構はないわ。——こッち。(上り口の方へ行く)
新太郎　そう? (入口の方へ向ひ、格子戸をあけて中を見廻しながら懐かしげに) 琵琶の御師匠さんですね?
すみ子　えゝ。
新太郎　いつツからゐて?
すみ子　まだ一月ばかり。
新太郎　その前は何處?
すみ子　(答へ渋つて暫く間を置いて) 小石川の方。
新太郎　そう。小石川のどう云ふ處?
すみ子　(モジモジしてゐたが、思ひ切つて) 養育院。
新太郎　養育院?
すみ子　えゝ、悪い奴につかまッてたのを、或る巡査部長さんに助けて貰つて入れられたんですの。でも、そのあいだ二度ばかりそとへ出ましたわ。だけど、みんな碌な處はなかつたんで、又戻つて、院の附屬小學校へ入つて、今まで勉強してたんですの。
新太郎　ほう。それぢアいろんな目に遭つたんですねえ。でも、又かうやつて何年ぶりかで會へるなんて、ほんとに不思議だねえ。
すみ子　ほんとに。——あの時分の仲間の人、みんな一緒に宮戸座にゐて?
新太郎　なんの、僕一人つきり。みんなチリチリバラバラになつちやッてね。
すみ子　まあ、一人ッきり?
新太郎　そう思ふと、全く淋しいね。源三郎や喜若や赤助は死ぬ、あとの者は、やつぱりすみちやん見たいにどこかへ行つちまつて。
すみ子　あら源ちやんや赤助さん死んで?
新太郎　(うなづいて) まだ若い身空で、可哀想なもんでしたよ。もッとも喜若さんなんかは、家が御金持でだけにお葬式も大したもんだッたさうだが——そう云ふ僕たちでも、身體は駄目なり金はなし、いつ死ぬ事やら。
すみ子　そんな心細い事云はないもん。
新太郎　これはこれは、御叱りとは恐れ入つたな。さ、ほんとに顔を合はせりやアなつかしいねえ、何だか、聞きたい事やら話したい事がドッサリある氣がする。同じ淺草に住んでるなら、ついでにこれからは遊びに來ませんか?
すみ子　行きますわ、是非。
新太郎　(懐中から紙入れを取り出し、小型の名刺を抜き出して) 僕の處番地はここ。

すみ子　どうもありがと。（なつかしさうに透し眺めて、帯のあいだへ入れる）

新太郎　僕も、又時々訪ねませう。嫌がられないやうに、一寸家の人達にも云つといて下さい。

すみ子　そうしませう。あたしも新ちやんを訪ねるのが氣樂だから。

（その時、格子戸が開いて、辰雄が現れる。中折れインバネスのすつかりした身なり。片手にステッキを持つてゐる。酒を飲んでゐるらしく、顏が大分赤い。）

すみ子　あ、お歸りなさいまし。（頭を下げる）

辰雄　ああ。（帽子を取つて、新太郎の姿を見廻す）

新太郎　（立ちあがつて、すみ子へ向つて）御主人？

すみ子　（うなづいて）え。（氣がついたやうに、いそいで立つて電燈を點ける。さツきから、あたりが大分薄暗くなつてゐる）

新太郎　（辰雄に向つて）お留守にすみちやんと話してゐて、失禮しました。

辰雄　（迂散くさそうに電氣の光で見て）いや、――どなた？

新太郎　宮戸座へ出てゐる市川新太郎つて申す者です。

すみ子　（傍から引き取つて）昔、一緒に淺草で御芝居をしてゐた仲間で御座います。

辰雄　（新太郎とすみ子を見較べて）ほう、さうか？

新太郎　さツき一寸通りかかりましたら、すみちやんがやつぱり見てゐたもんですから。

辰雄　そうですか。すみちやん、お前芝居なんか演つてた事があるの？

すみ子　（やや恥しそうに）はい。

辰雄　そいつア初耳だねえ。（新太郎へ向つて少し底意的に）一緒にさう云ふ昔馴染ツて、なつかしいもんでせうなあ。

新太郎　全くです。――これから又時々話したいと思ひますから、どうぞあがらせて下さいまし。

辰雄　承知しました。

新太郎　今日は、おやこれで失禮いたします。

辰雄　まア、いいぢやありませんか。粗茶でも一杯――

新太郎　いいえ、これからまだ小屋の方に用が御座いますから、この次ゆつくり、……（すみ子へ）ぢや、御免なさい。

すみ子　御免下さい。

（新太郎去る。外トツプリ暮れてゐる。）

（辰雄見送つてあがる。インバネスを脱ぐのをすみ子受け取る。）

辰雄　（居間へ入らうとしかけて振り返つて）お前さんは？

すみ子　さツき小島さんから御使へで、今夜御飯をあげ旁々御話したい事があるから、ツて事で、少し前お出かけになりました。

辰雄　そう?（居間の電燈のスヰッチをひねり、ドカリと長火鉢の向ふへ腰をおろす）

すみ子　（インバネスを釘へ掛けて）御飯はまだで御座いませう。

辰雄　夕飯かい?――いや、友達んとこで御馳走になツて、もう何もいけない。

すみ子　そうで御座いますか。（立つて行かうとする）

辰雄　（呼びとめる）ちよツと。

すみ子　（振り返つて）はい?

辰雄　（長火鉢の前を指して）ま、御坐り。

（すみ子やゝ不審さうに坐る。）

辰雄　今の市川とかツて若い人、ほんとに宮戸座の役者?

すみ子　はい――そう云つてました。

辰雄　お前よく知らないのかい?

すみ子　今日初めて聞いたきりですから。

辰雄　うむ。――（考へるやうに）お前、いつ頃から會つてるの?

すみ子　（わからないやうに）え?

辰雄　（笑ひながら）今まで時々會つてゐたんだらう?

すみ子　（首を振つて）いゝえ、子供芝居をしてゐた時のまんま、一度も會ひませんでした。

辰雄　ほんとに、お前芝居なんかしてたの?

すみ子　はい。

辰雄　どこで?

すみ子　清遊館。

辰雄　ほう。だけど、そんなら、今までちツとも話さなかつたの?

すみ子　でも――。（俯く）

辰雄　（言葉を變へて）ぢや、隨分芝居が好きだつたらうね。

すみ子　はい。

辰雄　（つくらふやうに）そうとわかつてれば、時々芝居も觀せてあげたのに

（すみ子默つてゐる。）

辰雄　（急に思ひついた風に）ぶら〳〵歩いて來たら、醉ひがさめて何だか寒氣がたつて來た。今夜は寢酒にして、もう一口飲まうかしら。――（すみ子へ向つて）まだ御酒はある?

すみ子　御座います。

辰雄　ぢや、濟まないがつけてくれないか?

すみ子　はい。（立つて廊下から上手へ去る）

（辰雄見送つて、立ちあがツて千本格子の手前の衝

の手を握りしめる)

すみ子　(ホッと息しながら低く)　はい。

辰雄　よく云つてくれた。おゝお前、ほんとにわたしを見と思つてくれるんだね。わたしはお前が、來た時ッから好きで好きで仕方なかッたんだ。いつかそんな事を云はうと思つてたんだが、今夜はほんとにうれしかつた。(愛情に堪へられないやうに、強く手を握る)

(すみ子びつくりして俯く。)

(その時、お玉を中心らしい無猫達の叫びがけたたましく起る。辰雄、一寸おどろかされてそとを覗ふ。猫達の唸りつづく。)

すみ子　(顔をあげて)、お玉かしら?

辰雄　(氣勢を挫かれて)この頃随分やかましいねえ。(思ひついたやうに銚子を指して)もうそろそろいいだらう。

すみ子　(握られた手を拔いて銚子へ當てて)　もう少し。

辰雄　なに、少しアぬるくたッて構はないよ。飲んでるうちだんだん熱くなるから。(猪口を取りあげる)

(すみ子銚子をあげて注ぐ。)

辰雄　(一口に飲んで)　一つ。(すみ子へさす)

すみ子　(おどろいて)　いゝえ、あたし……(銚子を取りあげる)

辰雄　(それを奪ひ取つて)　まあ一口だけ御相手しておくれ。(猪口を押しつける)

すみ子　でも、あたし子供ですもの……。

辰雄　(笑つて)　はははは、子供たッていいぢやないか。是非今夜は一つ受けとくれ　(無理に彼女に猪口を持たせ、酒を注いでやる)(困つてゐる彼女に、手を持ち添へて飲ます)　それでいい、それでいい。それが固めの印しだよ。

(すみ子默つて彼へ返す。)

辰雄　(受けながら)　御酒はお前初めてか?

すみ子　いゝえ。

辰雄　やッぱり、前飲まされた事があるかい?

すみ子　はい。

辰雄　何だ、そんなら構はないぢやないか。(上機嫌で彼女から注いで貰つて飲みながら)　お前お酒は好きかい?

すみ子　はい。

辰雄　嫌ひぢやないの?

すみ子　好きで御座いますわ。

辰雄　そんなら丁度いゝ、お前さへその氣があれば、時じかた弾きかたをよく教へてあげるよ。

すみ子　(面喰つて)　どうぞ……。

辰雄　何だつてね、お前わたしが御得意様達に教へてるのを

聞いて、、隨分もう歌をおぼえてゐるんだッてね。昨日だか臺所でひとりでうたつてゐたのをお母さんが聞いて、まアあの子は何て頭がいいんだらう、迚もちつとやそつとの御弟子ぢやアかなはないッて、ひどく感心してたよ。そんなに出來るの？　何なら、そこで一つうたつて御らん！

すみ子　いゝえ……（耳朶まで紅くなつて頭を垂れる）

辰雄　何もそんなに恥しがらなくたつていゝぢやないか。今いやなら、いつかゆつくり聞かうよ。やつぱり昔芝居なんかしたためあつて、きつと覺え方は何んでも嚥み込みが早いんだらう。もし何だつたら、わたしお前を立派な琵琶の師匠に取り立てゝあげて、一緒に御弟子を教へる事にしやうよ。

すみ子　……………。

辰雄　そんな事、いやかい？

すみ子　いゝえ。

辰雄　よろこんでなる？

すみ子　はい。

辰雄　ぢやきッとそうしてあげるよ。そしてお前に看板でも掛けさせて暮したら、わたしもどんなに張り合ひがあるか知れない。（間）あ、すみちやん、さう話が定つたら、一つわたしに頼みがあるんだがね。

すみ子　……………。

辰雄　約束をしてくれないか？

すみ子　（顏をあげて）なんで御座います？

辰雄　べつに改まるほどの事ぢやないが、あの市川ッて人に、これから會はない事にしてくれない？

（すみ子びつくりしたやうに見あげる。）

辰雄　（慾情的に眞劍な顏つきになつて）ッて云ふのは、わたしほんとにお前の兄さんになりたいからさ。然も、たッた一人の兄さんにね。

（すみ子解せないやうに見つめる。）

辰雄　わからない？

（彼女無言。）

辰雄　あの市川ッて云ふ人を。すッかり忘れちやッて貰ひたいんさ。

（彼女俯く。）

辰雄　いやかい？

すみ子　（ためらひながら顏をあげて）でも旦那樣、は――
――。

辰雄　わたしへ？

すみ子　また新しい奥さまがいらッしやるんで御座いませう？

辰雄　（一すつかへて）ああ、今日のお母さんの話かい？

――なアに、そんな事アまたどうなるかわかりやしない。向ふは見ず知らずの人だし。……それに、それはそれ、これはこれ、こいつに構やしないぢやないか。

（すみ子俯く）

辰雄　（押しつけるやうに）ね、いいだらう？

、彼女默つてゐる。

辰雄　堪へ切れなくなつて）すみちやん、わたしの云ふ事を聞いておくれ！　いきなり彼女、背中へ片手を廻して引き寄せやうとする。

（彼女びッくりし、身體を放す。辰雄捕へやうとして立ちあがり掛ける。彼女突然飛び立つ。）

辰雄　（突ッ立つて）すみちやん、お前いやッて云ふのかい？

（彼女おどろき慌てて、上り口の方へ逃げ出す。）

辰雄　（一種狂的に笑ひ出して）はははは、そこの格子戸は、もう誰も來ないやうに栓をかッておいた。

すみ子　えッ！　（仰天して臺所へ行く廊下へ駈け出す）

辰雄　これすみちやん！　（途中をつかまへようとして、長火鉢の端に突き當つてよろめく）

（その際に、すみ子燕の如くに逃げる。彼追ふ。つづいて激しく障子や臺所の戸をあける音。）

辰雄の聲　すみちやん！　うそだよ。今のは戲談だよ！

戲談だよ！

――幕――

第二場

人物

すみ子
市川新太郎
老漁師

時

前場から一週間ばかり後の月夜

處

相模の海岸

舞臺　下手三分の一ばかり松林、月を遮つて少し暗い。斑な影が手前の砂地へ落ちてゐる。――松林につづいて上手ずつと低い岩。

松の岩の向ふに、相模灘の潮が打ち寄せ、月光の縞がにキラキラ光り輝いてゐる。その岸い白る光の縞め、岩の木陰は反つて著るしく暗い。波の音。

幕あくと、下手から新太郎とすみ子手をつないで出る。

新太郎　入つても離れないやうに、身體を一緒に結びつけやうね。

すみ子　えゝ。(手早く自分の扱帯を解く。)

新太郎　(こゝ影の月に閃くを見ながら)　あんまり月や海がよくて、死ぬなんてうそ見たいだなア。

すみ子　あたしはうれしくつてうそ見たい……。

(解き終つた扱帯を、新太郎受け取つて二人の身體をシッカリ結びつける。)

新太郎　息をそろへて、うまく一緒に飛び込まなくつちや駄目だよ。

すみ子　新ちやん、合圖して頂戴。

新太郎　よし。

すみ子　もつと岩の端へ、立ちましよ。

(二人、下駄と草履をぬいで、一緒ににじり進み、對ひ合つて立つ。)

すみ子　(元氣よく)　べつに書置きもないし、お月さまへでも御別れしませうか。(月を仰ぎ見る)

新太郎　(一緒に仰いで)　あゝ。お月さま左様なら!

すみ子　さよなら!

(再び接吻する。)

新太郎　いゝかい?

すみ子　え。

新太郎　(低く)　ヒイ――フウ……ミッ!

(二人一緒に飛び込む。ドブーンと云ふ水音。――あとは冴えわたる月光と、變らない波の音。)

老漁師　(やがて飛び出して)　急に岩から見えなくなつたが、もしや又飛び込んだんぢやねえだか?　(岩の上の履物を見て)　やつぱりさうだ!　(すばやく細の帶を解き捨てて、ドテラをぬぎ、赤黑く瘠々した褌一貫の裸になつて、腰をかゞめ海を覗く。しばらくして)　あつ浮いて來やがつた!　來やがつた!　(海へ摑みかゝるやうな恰好をして飛び込む。)再び水音。

――幕――

第六幕

第一場

人物

すみ子

矢澤うめ子　天使園主任の婦人(五十二三歳)

おかく　收容されてゐる婦人の一人(三十歳位)

時

前幕と同じ年の五月初旬頃

すみ子　えゝ。

おかく　だつて、おやお前さん、もうその人が嫌ひになつたの?

すみ子　いゝえ。

おかく　今もなつかしいんだらう?

すみ子　(俯いて)　えゝ。

おかく　さうつて、何しろ情死までしやうとした仲だもの、そんなに思ひ切れて堪るもんかね。向ふだつて、きつとお前さんと同じやうに戀しがつてるよ。お前さんの手紙を持つて行つてやつたら、ほんとにどんなによろこぶか知れないわ。

すみ子　…………。

おかく　誰だつて、みんな出て行く者に頼むんだよ。わたし見たいな、出す宛もないお氣の毒さまは別だけれどもね。もう三四本頼まれてるわ。お前さんのもついでに出してあげるから、早く書きなさいよ。

すみ子　でも……。

おかく　でも?

すみ子　あたしもうあの人思ひ切つてますわ。

おかく　あれ、今のさつき思ひ切れないつて云つたぢやないか?

すみ子　なつかしい事はなつかしいんですけれど、氣が弱い人ですし……。

おかく　どうせ氣が弱いから、情死なんかしやうとしたのさ。

すみ子　それもさうですが……。

おかく　が――何よ?

すみ子　(言葉を變へて)　あたしもう、どうしても思ひ切る決心をしましたわ。そして何もかも忘れて、新しい生活へ入る氣なんですわ。

おかく　つて云ふのは、神さまを信じる事?

すみ子　えゝ、そして、ほかの事はみんな忘れちまひますわ。

おかく　おや、たとへこゝを出ても、もう新太郎さんには會はないつもり?

すみ子　えゝ。

おかく　あらまあ、大へんな信心屋さんだね。そんならなほの事、今度一遍だけやさしい言葉をかけて御やりなさいよ。

すみ子　でも、さうすると又あと思ひ切れなくなるから……
……。

おかく　切れなくなつたらなつた時の事で、いゝぢやないの。まアじれつたいッ!　その後大分身體が弱つてゐるとかつて事だから、新太郎さんだつて、この後いつまで

生きられるかわからないぢやないか? いやだねえ、この人ッたら。こんなに人に口を酸つぱくさせて、何て情のない片意地者だらう!

すみ子　(堪へられなくなつて) おかくさん、あたしほんとに御親切はうれしいわ。

おかく　わたしばかりでなく、御當人こそモ少し親切におなりなさいよ。二人が氣の毒だと思ふばッかりに、わたしこんな餘計な御せッかいを云つてあげてゐるんぢやないの?

すみ子　それはわかッてますわ。

おかく　わかッてるなら御書きッたら。——もうそろそろ仕事の鐘が鳴るわ。そんな事云つて、あとで後悔したッて知らないわよ、ほんとに。……さ、こゝに鉛筆と紙があるから、走り書きでいゝから! (鉛筆と軍用書簡箋を押しつける)

(すみ子ついに負けて、机の上で書き出す。)

おかく　(傍でよむ) なつかしい新太郎さま……。

すみ子　(紙を取つて) あたし、よんだりしちやいや!

おかく　はいはい。氣むづかしい御姫さまだねえ。ぢやあ乳母やはこつちで眼をつぶつてますから、どうぞ御早く。

(向ふむきに、荷物をまとめる。)

(すみ子手早く簡單に書いて、疊んで、口で糊をしめして貼りつける。)

(その時、舞臺そとで仕事始めのベルが鳴り渡る。)

すみ子　あつ、もう仕事の時間だわ。ぢやおかくさん、どうぞ。(書簡箋を渡す)

おかく　承知のすけ。……出來たら、わたし訪ねて手渡ししてあげるわ!

すみ子　(立ちながら) 丈夫でゐて頂戴!

おかく　お前さんもね。——なアに、又時々來るわ。その時そつと返事を持つて來てあげるわ。

(すみ子障子の方へ走つてゆく。)

(丁度あけやうとする時、そとから矢澤うめ子があける。どこか嚴しい顔つきの肥つた女。)

(すみ子びッくりして、思はず御辭儀する。)

うめ子　何を愚圖々々してるんです? (云ひながら、素早くすみ子の肩越しに、懐へ書簡箋を突ッ込んでゐるおかくを認める)

すみ子　濟みません。(頭をさげたまゝ走り去る)

(おかく、うめ子の聲にふり返つて、おどろいて風呂敷を結ぶ。)

うめ子　(入つて來て) もう支度は出來ましたか?

おかく　はい。

うめ子　ぢや、そろそろ出かけませう。——(おかくの懐を

指して）何を入れたの？
おかく　（ギックリしながら）はい？
うめ子　何か手紙見たいなものを入れたね？
おかく　はい、あの、わたし……。
うめ子　（遮つて）一寸お見せ。（片手を出す）
（おかく俯く。少時二人沈默。）
うめ子　（重ねて）お見せ！
おかく　（急に兩手を突いて頭をさげる）奥さま、どうぞ御免下さいまし。
うめ子　（受けつけない調子で、膝を落して）お見せなさいつて云つたら！
おかく　（仕方なく）はい。（書簡箋を取り出す）
うめ子　（取つて上書をよむ）淺草公園、宮戸座内、市川新太郎さま……。
おかく　（泣き聲になつて）奥さま！　どうぞ神さまの愛によつて御許し下さいまし。
うめ子　（返事をしないで、封を破つて默讀してから）これ、すみ子から頼まれたの？
おかく　はい奥さま。
うめ子　そう云ふ事は、こゝでは固く禁じてある事を知りませんか？
おかく　（絶體絶命的に）よく知つております……でも、無理矢理すみちやんから頼まれたもんですから、つい可哀想になつて――。
うめ子　人が可哀想なら、神さまの掟はどうなつても構はないんですか？　切角立派に今日出やうつて云ふのに、そんな罪を犯しては困るぢやありませんか？
おかく　奥さま、どうぞ、今日だけは御見逃し下さい。わたし、奥さまの御力で今日こゝを出られるのを、どんなに神さまに感謝してゐますか知れません。それを、それをこんな眞似をして、……まつたく悪魔に魅入られたんで御座います。でも、もう奥さまの御言葉で心から悔い改めて、悪魔は追ひ出してやりました。どうぞ御信じ下さい。
うめ子　（それに答へず見つめて）きつと、すみ子に押しつけられたんですね？
おかく　はい。
うめ子　まあ何ていけないすみ子だらう！　あんなにいつも眞面目な熱心さうな顏つきをしてながら。――やつぱり、長いあいだの罪は仲々ぬけないんだね。よし、これをいゝ機會に鍛えなほしてやらう！
おかく　（哀願の調子で）奥さま、どうぞわたしと一緒に、すみちやんも許しておやり下さい。あの子も決して悪氣でした事ぢやアなく、まつたく一寸悪魔に魅入られたゞ

けで御座いますから……。

うめ子　いゝえ、あれは充分悔い改めなければいけません。おかくさん、あなたはほんとに悔いてますね？

おかく　はい、もうどんなに悔いてますかわかりません。

うめ子　おゝ、今日は切角出る日ですから、あなたは許してあげます。

おかく（悄れて）ありがたう御座います。でも奧さま、どうぞ神さまの愛によつて、もうすみちやんに何も仰らないで……。

うめ子（嚴とした口調で）いゝえ、あの子はどこまでも悔い改める必要があります。（書簡箋を懷へ入れる）

――幕又は暗轉――

第二場

人物

すみ子

矢澤うめ子

その他、助手、客、收容者達、大勢。

時

前場の翌朝（日曜）

處

天使園講堂（兼音樂教室）

舞臺　上手に白いクロースをかけた說敎用の高臺。臺上には、奧に赤や紫の濃いあづま菊の花を一緒くたに挿した瀨戸の大花瓶。手前に聖書讃美歌集等。――臺背後の壁の黑板には、讃美歌を書いた大洋紙の綴ぢたのが懸かる。黑板上の壁には金の十字架。テエブル奧手にオルガン。

正面奧の壁は、キリスト一代記の彩色畫で飾られ、その上中央に、外國の一派の創始者の白髯赭顏の肖像が、金縁の額に嵌められて見おろしてゐる。下にミシン二臺ばかり。下手に入口。部屋全部疊敷。

幕あくと、說敎臺橫手で、洋裝のうめ子がすみ子を叱してゐる。

うめ子　今朝集りの前に、わざわざあなたをこゝへ呼んだのは、外でもないけれど、わたしゆふべ不思議な夢を見たんですよ。

（すみ子うなづいて見あげる。）

うめ子　きつと、わたしがいつも深く深く信じてゐるからでせう、神さまが夢に御現はれになつたの。白い長い髯の生えた、それはそれは神々しい方でしたがね。わたしへ向つて、大へん珍らしい事を御告げになつたの。それはねえ、すみ子が今大へんな祕密を持つてゐるツて……。

（すみ子思はず俯く。）

うめ子　その御聲で、わたしびツくりして眼がさめちまツたんですがね、今でも大そう不機嫌な神さまの御様子が、アリアリ眼に殘つてます。わたし、確かにあれは正夢だと思ふけれど、あなた何かそんな覺えはありませんか？

（すみ子默つてゐる。）

うめ子　すみ子さん、神さまはね、何より僞りをお嫌ひになるんですよ。いつも教へるやうに、正直な人でなければ決して天國の門へは入れません。神さまは何でも御見透しです。もしあなたが神さまに申しわけない事をして、おまけに何知らぬやうな顔なんぞしてゐれば、神さまはきツと重く罰しなさいますよ。たとへまちがツた事をしても、正直に懺悔して了ひさへすれば、神さまはいつでも許して下さいます。

すみ子　（急に顔をあげて）奥さま。それはあたしが手紙を書いた事で御座いませう？

うめ子　（答へず反問的に）どんな手紙を書いたんです？

すみ子　（兩手をついて）奥さま！　濟みませんでした。

うめ子　（押し返して）書いたなら、一とほりそのわけを云つて御らんなさい。

すみ子　はい。――おかくさんが昨日出てゆく時、新太郎さんへ手紙を屆けてあげるから是非お書き、ツて云つて下さつたもんですから……。

うめ子　（鋭く）いけません。あなたはこゝにおかくさんがゐないと思つて、他人に罪を押ツかぶせやうと思ふんですか？

すみ子　（びつくりして）いゝえ。

うめ子　あなた、きツと自分の方から頼んだんでせう？

すみ子　（少し考へてから悄れて）はい、そうで御座いました。

うめ子　（權高に）それ、さう云ふ風に初めツからうそを吐くんだからいけません。自分がいゝ子にならうと思へば思ふほど、神さまは重くお責めになりますよ。おかくさんは、もうこゝから自由にそとへ出て行けるほど、大へん立派に生れ變つた人です。その人が、どうしてあなたにそんな罪を勸めたりするもんですか。もツと正直におなりなさい。

すみ子　（涙ぐんで）はい。

うめ子　なぜ又、そんな昔の人へ書かうと思つたんです？

（すみ子俯いて默つてゐる。）

うめ子　きツと、逢つてつまらない話でもしたくなつたんでせう？　あなたは、あんな罪にけがれてゐる人と又前のやうな事をしたいんですか？

すみ子　…………。

うめ子 （すみ子の可憐な姿態を眺めて、ほとんど一種憎しみの調子で）あなたの肉體は、まだ小さいなりをしてほんとに深い罪を犯してるんですよ。見たところは人一倍綺麗でゐながら、けがされにけがされて來たんですよ。然も、それがみんな男の爲めです。役者の人にしろ、琵琶のお師匠さんにしろ、養育院の原とか云ふ人にしろ………。

すみ子 （おどろいて顔をあげて）いゝえ、あたし決して琵琶のかたや原さんなぞと……。

うめ子 （冷かに）でも、わたしは今までさう聞いてます。

すみ子 それはまちがひです、奥さま。大まちがひです。原さんなんか、あたしそんな事を云はれては申しわけありません。

うめ子 そうですか？ ぢや、それはどうでもよ御座んす。けれども、そんな風にいろ／＼云はれるッて事が、つまりあなたの落度です。それを考へれば考へるだけ、おこなひを愼しまなくちやアいけないぢやありませんか。罪の女ッて大抵そうですが、殊にあなたの場合は、男から離れる事が一切の罪から離れる事なんですよ。

すみ子 ……………。

うめ子 一體相模の海岸から飛び込んだ時、もうあなたは死んでゐる筈ぢやありませんか。それを思ひがけなく助けられたのは、まッたく神さまが精神的に生かさうと御考へになつたからですよ。キリストが十字架に御かゝりになつて、七日目に又蘇りなすッたやうに、あなたも一遍死んで新しく生れ變つてるんです。昔の罪人のあなたと今のあなたとは、まるッきり別の人なんです。警察から連れて來てあげた時も、その事はよう く話してあるぢやありませんか。もうそれを忘れてるんですか？

すみ子 いゝえ、決して忘れません。

うめ子 そんなら、なぜ今度のやうな事を仕出來すんです。折角今まで一所懸命勉強して來た事が、この手紙一つで、又すッかり水の泡になつて了つたぢやありませんか。まあ何て恐ろしいでせう。――仕方ないから、今日から又新しくやり直さなければいけません。この家までけがされましたよ。こゝは名前どほり天使園で、みんな野の百合のやうに清い、天使のやうな氣もちの人ばかりが住む家です。

すみ子 （堪へられなくなッて）奥さま。どうぞもう御許し下さい。あたし、この後二度とあんな事はしませんから。

うめ子 きッとですか？

すみ子 はい。

うめ子 よく聞きましたよ。その誓ひを決して忘れちやい

けませんよ。

すみ子　はい。

うめ子　ぢや神さまも許して下さるでせう。でも、あなた自身のほんとの潔めの爲めに、又神さまへのあかなひの爲めに、もう一度大勢の前で證なさい。

すみ子　(びツくりして)　え?

うめ子　丁度今日は日曜の禮拜日です。そとからも禮拜のかたがやツて來ますから、その前で殘らず懺悔なさい。

すみ子　(思はず膝へ縋りついて)　奥さま、それだけはどうぞ勘辨して下さい!

うめ子　(不思議さうに)　なぜ?

すみ子　でも、あたしもうほんとに奥さまの前で悔い改めましたもの。

うめ子　それはわかツてます。けれども、もう一層あなたを潔く強くする爲めに……。

すみ子　いゝえ大勢の前では迚もあたし辛くツて出來ません……。

うめ子　その辛さを堪へるのが、あなたの爲めなんです。

すみ子　(思ひ切つて)　さうは思ひませんわ。

うめ子　(キツとして)　さう思へないのは、まだあなたが充分悔いてない證據です。

すみ子　(怨めしさうに見あげて)　でも奥さま。どうぞ憐れんで下さい。

うめ子　(嚴しく)　憐れむからこそ、こんなに云ふんですよ。この前も話したぢやありませんか、外國の或る人殺しの罪人が、自分の犯した罪の重さに堪へられなくなツて、往來へ倒れて、土へ頭をすりつけて全世界に許しをねがツたツて話を。

すみ子　でもあたし手紙を書いたツきり、別に人殺しなんか……。

うめ子　いゝえ同じです。

(その時入口をあけて、そとからの參會者(おもに老人)が三人ばかり入つて來る。つゞいてベルが鳴つて、助手や收容の婦人達が驅け出して來る。)

うめ子　ア、もう時間が來ました。ぢや、きツと證なさいよ。

すみ子　奥さま!

(縋るのを、うめ子構はず立ちあがつて客達の方へ行く。)

客達　お早う御座います。(頭をさげる)

うめ子　(禮を返す)　お早う御座います。

客A　いゝ按配に結構な御天氣ですな、神さまの御惠みで。

うめ子　ほんとにありがたい事で御座います。さ、どうぞ御坐り下さい。

客ＡＢＣ達　ありがたう。（上手說敎壇に近い方の疊へ坐る。風呂敷包みや手提袋をひらいて、聖書や讃美歌集を取り出す。）

（收容者達（中年、妙齡、少女等）ゴタゴタに坐る。）

（すみ子みんなに見られるのを恐れて、密と淚を拭いて、うなだれて鍵臺手前の婦人の中に加はる。——うめ子、助手と一緒に鍵臺奥に立つて見廻す。）

客Ａ（花瓶の花を指しながら他の老人に）いゝ、あづま菊ぢやありませんか。

客Ｂ　わたしもさツきからさう思つてました。（うめ子の方を向いて）先生さん！

うめ子　はい。

Ｂ　あの菊は、やつぱり婦人がたの御丹精ですか？

うめ子（得意さうに）さうで御座います。

Ａ　大へん御美事です。

うめ子（ニコニコして）左樣ですか。あゝいふ物を作らせると、魂の方にも大へんよろしいんで御座いますよ。菊の花も、どうか澤山あんなに咲かせたいもんで御座います。——さう云へば、昨日又一人出ましたよ。

Ｃ　まア、さうですか。誰ですか？

うめ子　おかくつて云ふ妹です。

Ｃ　あゝ、おかくさん！　それは御目出度う御座います。

うめ子　ありがたう御座います。それもいつも皆さまの御力添へのお蔭で、——今日も（一寸すみ子の方を見て）いい證をお聞かせ申します。

（收容の婦人達、さツきからの樣子にうすうす悟つて、すみ子へ眼を注ぐ。すみ子一旦あげた顏を又垂れる。）

Ａ（好奇的な調子で）それはたのしみですな。

（うめ子、みんなが揃つたのを見て說敎壇へ進む。助手、オルガンのうしろへ腰をおろす。）

うめ子　ではこれから始めます。——初めに御一緒に（うしろの洋紙を指して）讃美歌四百二十七番の第一節をうたひませう。——一節だけで御座いますよ。

（老人達の或る者は、わざわざ讃美歌のペエジを探す。オルガンの合圖鳴りひゞく。次いで、うめ子を先頭に全衆「春のあさけ、夏のまひる、あきのゆふべ、冬の夜も、いそしみまなく、みちのための……」の歌を合唱する。）

うめ子（終ると）お祈りをいたします。

（皆俯く。）

うめ子（誇張的な口調で）おゝ天にましますわたくし達の父よ、優渥なる御恩寵によりまして、今日只今、愛する兄弟姉妹と一緒に、斯くも美はしい五月の初めの日曜の朝を迎へました事を、深く深く御禮申します。

（「アーメン」と云ふ聲が起る。）

うめ子　（つゞけて）過ぐる一週間、わたくし達はあなたの御榮えの爲めに、また道の種の足り穗となつて茂る事の爲めに、いろいろと苦心してまゐりました。幸ひその效果が御座いまして、いよいよあなたの偉大なる御力を知る事が出來ました事を、心から感謝いたします。

（老人等の聲。アーメン！）

うめ子　けれども、まだまだわたくし達の力は弱く、しなければならない仕事は山のやうに、また海の水のやうに澤山に御座います。どうぞこの上とも御恩寵を下さいまして、わたくし達のいと小さきいそしみの成就いたしますやうに、延いてあなたの御國の一日も早く來りますやうに、切に御惠みを御ねがひいたします。

人々　アーメン！

うめ子　なほ今日の天使園の集りの爲めに、どうぞ祝福を垂れさせたまへ、アーメン！

（全衆和して「アーメン」。オルガンの音「ブーン」と鳴る。）

うめ子　それでは、もう一つ讃美歌をうたひます。（背後の洋紙を翻して）三百五十六番の第二節、爾曹が名の天に錄されしを喜びとすべし……。

（再びオルガンの合圖ひゞき、全衆「わがつみとがは、はまのまさご、かぞへえぬまで、さはにあれど……」の歌を合唱する。）

うめ子　（濟むと）これから日曜の說教をいたします。（間を置いて）その前に、一寸時間を頂きまして、姉妹の一人に證をさせます。これは普通の順序では御座いませんが、今日御話しして見たい聖書の中の言葉が、その姉妹の事に大へん深い關係が御座いますので、先きへ證をして貰つた方が餘計わかつて頂けるだらうと思つて、臨時に變へたので御座います。どうぞ御承知おき下さい。（老人達の方へ向つて一寸頭をさげる）

（老人達頭をさげ返す。）

うめ子　（大びらに呼ぶ）では、すみ子さん！

（全衆一齊にすみ子の上へ視線を集める。）

うめ子　こゝへ來て證をして下さい。

（すみ子痙攣的に身體を慄はせて俯く。傍の者、低く「すみちやん！」と言ひながら肱で身體をつゝく。）

うめ子　（重ねて）さツき約束したやうに、みんなの前で證して下さい。

（すみ子相變らず默つて動かない。）

うめ子　（咎めるやうに）すみ子さん！

すみ子　（眞ツ赤になつた顏をあげて）あたし、御約束なんかしません。

うめ子　（意外さうに）　だッて……。

すみ子　（首を振つて）　いゝえ。

（うめ子怒り氣味になつて睨む。すみ子見つめ返す。全衆緊張して來る。）

うめ子　（集會の空氣が壞されさうになつたのを感じて）　よ御座んす。あなたがどうしても恥しくッて言へなければ、わたしが代つてあげませう。（會衆の方へ向きなほッて）　皆さん!……。

すみ子　（途端突然起ちあがッて、半ばうめ子へ向つて、半ば會衆へ向つて、喚ぶやうに叫ぶ）　愛だなんて――神さまが愛だなんてみんなうそです?

（みな驚愕して彼女を見る。）

すみ子　（つゞけて）　あたしがあんなに御詫びしたのに、許さないで、どこ迄も苦しめて恥を掻かせやうなんて、そんな神さまなら決して愛ぢやありません。神さまが愛なら、あたしもう夙に許して貰つてる筈です。

皆　（唸る）　まあ!

うめ子　（肝癪を起して）　お默りなさい。すみ子さん!

すみ子　いゝえ申します。神さまは愛でも何でもありません。何だかわかりません。そんな神さまなんか、ない方がずッと増しです。あたし今迄ほんとに神さまを信じやうと思つたんですけれど、もう信じません。

（全衆動搖する。）

うめ子　（怒りの爲めに蒼ざめて）　まあ!　そんな神さまをけがすやうな事を云つて!　まあ!　（急に天井を仰向いて）　おゝ神さま。どうぞこの罪深い子の言葉を御きゝ棄て下さいまし。

傍の仲間達も　（すみ子の着物を引ッ張り合つて）　すみちやん、およし!

すみちやん、御坐りッたら!

すみ子　（屈せず）　天使園なんてうそです。何もかも大うそです。

老人達　まあ、何てひどい事を云ふ娘だらう!

おそろしい子供達だ。

あれが、いつだッたか新聞に騷がれた有名な不良少女ですよ。

すみ子。立つたまゝ、涙の迸る顔を兩手で押へる。

――急速に幕――

第三場

人物

すみ子

うめ子

その他天使園の女達
巡　　査

時　前場の當日の夜中

處　天使園に近い路傍

舞臺　上手奥、平家建ての向ふに、天使園の二階建ての建物が燃えあがつてゐる。すさまじい火炎の色。散亂する火の子、幕あく前から摺りばんの半鐘の叫び。燒け落ちる物の音。はじけ飛ぶ響き。それに混つて、逸早く馳けつけた消防達の罵り合ふ聲。ポンプの唸り。充滿したキナ臭い匂ひ。

第一に、うめ子が亂れた髮形で、小さな金庫を持つて上手から逃げ出して來る。

うめ子　まあ何て不意だらう！――でも、ヤッと逃げ出したわ。（燃えてゐる家を仰いで、髮をつかんで慟哭的に）あゝみんな燒けちまふ！　燒けちまふ！　（胸を打つて）折角あんなに馳けずり廻つて、賴み廻つて、やッと集めた寄附金で建ッた家だのに……。（急に氣づいたやうに右手の小金庫を眼の上へかざして）持つてるわ。あゝよかッた！　これだけでもせめて持ち出せて、ほんとによかッたわ！（つゞいて思ひ出したやうに）女達はみんなどうしたらう？　誰か燒け死にやしないか知ら。――（慄然としたやうに）もし大勢死んだら、――だつて仕方ないわ！　わたしのせいぢやなし――仕方ない！（つまづきながら下手へ馳け去る）

（收容されてゐた女達四五人、寢衣一つで、裾もハラハラあとから斷續して飛び出す。）

口々　おゝ恐い！
あゝ怖ろしい！
もう少しで出られないところだッたわ！
ほんとによかッたわねえ。

（喘ぎ、叫び、よろめき、抱き合ひながら下手へ去る。）

（あとへすみ子出る。）

すみ子　（血走つた眼で猛烈な火勢を見つめ、歡喜のあまり兩手をあげて躍り廻つて）何てよく燃えるだらう！　何ていゝ氣もちだらう！　あの憎らしい家がすッかり灰になッちやふんだわ。……はゝゝゝ、赤い天使がドッサリ舞ひあがつて行くわ。みんな天國へ向つて行くわ。――あゝうれしい！　うれしい！　みんな燒けろ！　世界ぢう燃えちまへッ！

（そのあひだに、巡査が下手から出、有頂天になつてゐる彼女の樣子をしばらく窺ひ見て、ツカツカと進み

寄つて手荒く肩をつかむ。彼女びツくりして振り仰ぐ。）

巡査　こら、何してる？

（彼女答へない。）

巡査　（鋭く）變な様子をしてるな、お前きつと此の火をつけたんだらう？

（彼女默つてゐる。）

巡査　（小突いて）そうだらう？

すみ子　（決然とした態度で）そうです。

巡査　（やゝ面喰つて）なに、そうだつて？

すみ子　（キツパリした口調で）あたしつけました。

巡査　（火事の明りでしげしげ彼女の顏を眺めて）お前、天使園の者だな？

すみ子　えゝ。

巡査　そうか。よく白狀した。さ、一緒に來い！（下手の方へ引ッ張つて行く）

すみ子　（引ッ張られながら、歡喜に堪へられないやうに火を振り返つて）うれしいわ！　うれしいわ！

（その時、燃えさかる炎の壁へ、電氣で大字が浮びあがる。「何が彼女をさうさせたか？」……彼女連去る　舞臺暫時空虚。凄慘たる字と音の中に幕。）

（市場氏に贈る）　1926・12

長谷川如是閑篇

喜劇 大臣候補（一幕物）

人物

棚濱　官僚出身の實業家
邦夫　棚濱の長男
お花　女ペンキ屋
芳江　棚濱令嬢
赤佐子爵
しん子　藝者、棚濱の妾
婆や　邦夫の乳母
　其他女中、書生等

場所

棚濱家の應接間。右手と正面左寄に扉。
扉はペンキの下塗のまゝ。

赤佐（椅子から立つて）ではそのおつもりで……何しろ貴族院の方も可なり熱烈で、黨の方は大分押されてゐるから油斷がならんのです。が然し、あんたはぢつと動かずに居られたんで却つて形勢がいゝんだから、先づそのまゝ泰然として居られることです。萬事私共にお委せを……。

棚濱（同じく立上つて）今更大臣でもないが、然し諸君の爲めとあれば一肌ぬいでもいゝと思つて居る。萬事よろしく。

赤佐　承知しました。何しろ一寸眼を放して居ると、形勢がとんでもない方へ行くので、皆血眼の態です。アッハッハ。ぢや何れ後刻……今一の件も間違ないやう……。

棚濱　それは大丈夫です。……然しあんたは不眠不休で御苦勞のことぢやな。

赤佐　これも國家の爲めです。

兩人　アッハッハッハ。

（赤佐、棚濱退場。棚濱夫人、紅茶の盆を持ち、芳江菓子盆を持つて登場。）

夫人　お客もうお歸りよ。

芳江　このごろのお客様は、郵便やさんのやうに、一寸來ちやすぐ歸るかと思ふと、お通夜に來た坊さんのやうに、夜なか中ゐたりして、をかしいわね。

夫人　おきまりになつたのですの？

（棚濱登場。）

棚濱　いやまださうは行かん。貴族院の連中が何せ手嚴しい奴等ばかりで話にならん様子ぢや。が九分九厘まで此方のものぢや。これでわしも先づ大臣か。

芳江　おとうさんが大臣になるの？

夫人　さうですよ。
芳江　あらをかしい。
夫人　まあ此の子は何んといふことを、オッホッホ。……芳ちやんあなたこゝで御客様の御代りになつて、お父さんと紅茶をいたゞいて、おいでなさい。
（夫人退場。）
芳江　でもをかしいぢやないの、お父さんが大臣！　いやだわねえ。
棚濱　アッハッハ。何がいやだ。
芳江　いやだわ。……けどお父さん、何んの大臣になるの？
棚濱　ム、、先づ文部大臣ぢやな。でなければ鐵道大臣ぢや。
芳江　文部大臣て、あの學校や何にかの大臣でせう？
棚濱　さうぢやよ。
芳江　だからをかしいぢやないの。お父さん會社にばかりゐて、學校の事なんかちつとも知らない癖に、學校の大臣になるなんて。
棚濱　アッハッハ。知らん事はないぞ。
芳江　ぢや聞いてよ、よくつて。私、學校で何と何と教はつてる？
棚濱　さう、讀方に、修身に、習字に。……それから……畫と歌と……。
芳江　畫と歌たつて、あゝをかしい。圖畫と唱歌よ。それから？
棚濱　それから……何かな……かうと……。
芳江　ほうら御覽なさい、知らないぢやありませんか。
棚濱　さういふ事は下役のものがちやんと知つて居て、うまくやりよるんぢや。
芳江　下役の人が？　ぢやお父さんは何をするの？
棚濱　お父さんは學校は日本中でいくつにするとか、何處に何ういふ學校を置くとか、さういふ事を心配するのぢや。
芳江　ぢや聽いてよ。あのう、高等女學校が日本にいくつあるか知つてゝ？
棚濱　さうさなあ。今一寸覺えんなあ。あまり澤山あるんでのう。
芳江　ぢやお醫者の學校はいくつある？
棚濱　お醫者の學校か。これも一寸覺えんなあ。
芳江　みんな「覺えん」のね。だめよ。お父さん學校のことなんか、何にも分らないんだわ。
棚濱　文部大臣は見事落第かな。では鐵道大臣ぢや、お父さんは。
芳江　あらをかしい。學校の大臣が、すぐ鐵道の大臣になれるの？　學校の先生が免職になつたつて、すぐ機關士

になれやしないぢやないの。
棚濱　お父さんは大臣ぢやからなれるんぢや。
芳江　だめよ。お父さん鐵道の事なんか、何にも知らない癖に。此間機關車のお釜の上に乘つかつてゐる兜のやうなもの、あれ何つて聽いたら、お父さん知らなかつたぢやないの。
棚濱　そんなことは……。
芳江　下役が知つてゐる？
棚濱　アッハッハ。さうぢや。
芳江　ぢや大臣て一體全體何にをするの？
棚濱　大臣といふものは……さうぢや……判を押すのぢや、判を。
芳江　判て、何の判？
棚濱　めくら……いや……その何ぢや……いゝ事と惡い事とを見分けて、いゝ事たけに判を押すのぢや。學校の先生がお前方の習字にマルをつけたり二重マルをつけたりするやうにな。
芳江　でも學校の先生は字のことがわかつてゐるからマルをつけられるけど、お父さん何も知らないのにどうしてマルをつけるの？　出鱈目につける？
棚濱　さうすると、大臣のする事が無くなつてしまふんぢや。アッハッハ。

芳江　ぢや大臣なんて屹度、月給なんか貰はないんでせう。
棚濱　それは貰はんことはない。ほんのちつとばかし貰ふんぢや。
芳江　ぢや下役の方が澤山貰ふんでせう。
棚濱　いや下役はもつと少ない。
芳江　下役つて、ぢやよつぽどちつとしか月給貰はないのね。道理でお役人になつたうちの才田さんに、お母さんが、お氣の毒だつていろんなものをあげてよ。古いお鍋だのお釜だの。
棚濱　古いお鍋やお釜か。それは如何にもお氣の毒ぢや。
芳江　ほんとうに下役の人達は可哀想ね。何んでも知つてるのに、何も知らない大臣よりちつとしか月給が貰へないなんて。誰がそんな事をきめるの？　何も知らない癖に大臣なんかになる人があるからいけないんぢやない？
棚濱　アッハッハ。さうかも知れん。
芳江　お父さん大臣なんかになるのおやめになさい？　私いやだわ。
棚濱　これは猛烈ぢや。貴族院の奴等にきかせたいものぢや。……芳江はやつぱり丙午ぢやつたかな。
芳江　あら私丙午なんかぢやなくつてよ。だつて丙午なんて事迷信だつて、先生が仰つしやつたわ。お父さんそんな迷信家の癖に、文部大臣なんかになつたら、皆に攻擊

されてよ。

棚濱　アッハッハ。もう勘忍せんかい。お父さんさつきから降參しちよるぢやないか。アッハッハ。

（邦夫登場。）

邦夫　お父さんこちらでしたか。芳ちやん、兄さん一寸お父さんにお話があるんだから、あつちへ行つておいでなさい。

（芳江退場。）

邦夫　お父さんが大臣になるつてほんとうですか。

棚濱　いや知らんよ。

（芳江登場。）

芳江　ほんとうよ。

邦夫　何んです、芳ちやんは。あつちへおいでなさいつてのに。

（芳江退場。）

邦夫　風説に過ぎないのなら結構ですが。もし實際たとすると困つたものだと思ひましたので……。

棚濱　どうして困つたものなんぢや。

邦夫　でもお父さんは、今日の時代を何う思つておいでなんです。實業家が大臣になるのは、西洋流のリベラリズムの政治の當然たなんていひますけれ共、もう西洋でもそんな事は社會が許さなくなつて來てゐるんです。今日の國家の仕事は、非常に專門的になつてきて、所謂政治なるものはもう一つの立派な科學的技術になつてゐるんです。昔ならば政治家は、所謂ステーツマンで、正業のない浮浪人がなるものに定つてゐたんですが、今日では、昔のプラトーの聖人政治から科學政治になりつゝあるのです。政治家は一個のエキスパートでなければならないのです。お父さんの事をいふぢやないですが、何にも知らない官僚の上りや實業家なんぞが、政治をする時代ぢやないんです。教育の敎の字も知らないものが文部大臣になつたり、鐵道の事なんか皆目わからないものが鐵道大臣になつたりするのは時代錯誤の甚だしいものです。

棚濱　おい〳〵、そんな講釋なら、たつた今芳江から散々聞かされた所なんぢや。

邦夫　芳江からお聽きになつた？

棚濱　さうぢや。芳江がお前のいふ通りのことを云つてゐたのぢや。

邦夫　お父さん戯談ばかり。芳江がそんなことをいふ筈はないぢやありませんか。

棚濱　いや云ひよつた。しかもつときび〳〵と、所謂肯綮に中ることを云ひよつたんぢや。芳江はお前よりも、ずつと徹底した意見を持つとるぞ。アッハッハ。

邦夫　（ムッとして）……………。

棚濱　まあ、さうムキにならんでもよい。お前は近頃少し頭でも惡くして居りやせんか。何うも始終陰鬱のやうだが、時々興奮しよる。身體を氣をつけい、自分の身體を。

邦夫　身體も惡くするでせう……けれども、私は眞理を云つてゐるんです。

棚濱　よし、よくわかつとる……然し、お前にはお前の考へがある。お父さんにはお父さんの考へがある。親が必ずしも子の考へに盲從せにやならんこともなからう。

邦夫　ぢや子も必ずしも親に盲從しないでもいゝんですね。

棚濱　さうぢや。それでよいのぢや。親は親、子は子、それが卽ちリベラリズムぢや。アツハツハツハ。

邦太　ぢや、私がいやだといふ結婚を、お父さんが强制するのは何ういふ譯です。

棚濱　いやそれとこれは事が違ふ。結婚は、苟も日本の道德習慣に從へば、一個の人間同士の關係ではなく、家と家との關係なんぢや。それが卽ちわが日本の淳風美俗なるものぢや。西洋ではさうでないといつて、此日本の淳風美俗を非議すべきものではない。古來國家を以て一大家族としてゐる日本に於ては、家族主義が立國の大本でなけりやにやならんといふことは、誰が何といつても、千古に亙つて動かすべからざる掟なんぢや。先達の審議會ではわしはそれを痛論したんぢやが、無論、全會一致、誰一人異議を唱へたものはなかつた。

邦夫　フン。

棚濱　フンとは何んぢや。わしは平生子供に對して決して干渉がましいことはせんが、國家精神の依つて立つて居る根本の問題となれば斷乎として一步も假借せんぞ。子供等は無論の事、何人にもわしが信ずる通りをやらせんければならんと固く決心してゐる。此の國家の大本を維持するのは、すべて國民たるものゝ義務なのぢや。自分の生んだ子供らに、此の大本を破らせては、國家に對して相濟んと思つてゐるんぢや。これだけは心得てゐるがいゝ。

邦夫　それだけが心得てゐられないんです。外の事なら我慢もしますが、結婚の問題は、私の人格の絕對自由を認めていたゞきたいのです。

棚濱　それがいかんのぢや。お前の身體は自分のもので自分のものでないのぢや。棚濱家あつてのお前方なんぢや。わしが、お前にあゝせいかうせいといふのは、わしが云ふのだと思つちやいかん。畢竟棚濱家の先祖が申されるのだと心得るがいゝ。

邦夫　祖先が申されるんだから政略結婚だつていゝふんです。昔の武士の結婚なんか皆政略結婚なんです。

棚濱　政略結婚とは何んだ。人聞きの悪い事をいふものではない。當今の世界にそんなことを行ふ必要が何處にある。栃橋家で赤佐子爵の家の娘を貰ふのが何で政略だ。お前ももう何時までも獨りでは居られん。それにはお前も親しくしてゐる赤佐の娘が、容姿といひ、氣立といひ、教育でも何でも誠に申分ないから貰はうといふのぢや。お前がそれをいかんといふ理由が、わしにはとんと呑み込めんのぢや。

邦夫　私には又、貰はなくちやならない理由がとんと呑み込めないんです。いゝ娘は皆貰はなくちやならないんなら、何人貰つても貰ひきれやしません。

棚濱　下らん揚足をとるな。赤佐子爵で此方にくれたいと云つてゐるのではないか。いゝ娘が皆此方へくるていつてゐるのぢやないわい。

邦夫　赤佐家でくれたいといつたつて、肝心の本人は來たがつても何もしてゐやしません。碌そつぽそんな話のあることさへ知つてやしません。

棚濱　本人には、知らすべき時に知らすのぢや。お前は根本の精神が間違つとるから、わしの話がわからんのぢや。

邦夫　お父さんも根本の精神が間違つてゐるから、私のことを理解して下さらないんです。

（女中登場。）

女中　目黒の御前からお電話でございます。

棚濱　よし。（邦夫へ）もうそんなわからんことをいつてゐる時ではない。わしが命令する。今日の五時までに、確り返答せい。いや、承知しましたといへといふのだ。斷じて命令するんぢや。

（棚濱退場。）

邦夫　今日の五時、困つたなア。いやだといへばおやぢ何んなことをいひ出すかわかりやしない。あゝ何うしたらいゝだらう。何んでそんなに急に返事を迫り出したのだらう。もしかすると、あれのことでも薄々感付いたんぢやなからうか。

（懐から手紙を出して讀む。）

「あなたの御心持はよくわかつてゐます。さうして私はあなたを信じます。けれどもやつぱり私は私の勝利の爲めに、いんえ、女の勝利の爲めに、何うしても自分の行く所へ行かずにをられません。さうしてもう決してあと戻りはいたしません。ではさようなら。」

あゝあ。「女の勝利の爲めに」よくお花さんはさう云つたつけ。やつぱりそれを實行したんだ。ほんとうに強い女だ。それが一層私を惱ます誘惑なんだ。……それにしても、何處へ行つて、何をしてゐるんだらう。居所位は知らしてくれてもよかりさうなものだなア。もう一年あまり

になるのに……私はもう此先き、こんな惱みに誰へ切れ相もない。……あゝ今日の五時。何うしたらいゝだらう。

（しん子登場。）

しん子　おや若旦那、何を獨言をいつておいでなの。怪しい手紙なんぞお讀みで。こりやたゞでは通されない。一體何うして下さるの。

邦夫　騷々しいぢやないか。こんな手紙なんか何でもないんだよ。……お父さんにいつてはいけないぜ。

しん子　心得ました。けれどロハではねえ……。

邦夫　相變らず慾張つてら。

（邦夫退場。）

しん子　若旦那が近頃少し變だつて話だつたけど、やつぱりさうだわ。（小指を出して）乾度レコでも出來たんだね。あの年になつてさ遲蒔きとんがらしぢやないか。やつぱりお坊ちやんだけにしゆんが遲れた、なんざよかつたね。ウツフ。

（棚濱登場。）

棚濱　おゝしん子か、今日は忙しいんだ。

しん子　それは萬々承知の上であがりましたの。旦那今度愈々大臣におなりなさるんですつてね。大急ぎでお祝ひ旁々つて譯なんですよ。

棚濱　誰からそんなことを聞いた。

しん子　蛇の道は蛇の或る確かな筋の報道によればつてんです。でもお忙しい際ですから、早速申上げてしまひますけど、例のお約束の一件はお間違ひないでせうね。

棚濱　御約束つて例のか。

しん子　えゝ、大臣にでもなつたらといふお約束でしたわね。所が丁度あの地面が別に買手がついた相で一刻を爭ふことになつてゐるんですの。でも先方でもあすこは、私に是非といふので、知らせに來てくれたものですから、あわてゝあがつたやうな譯なんですの。ね。思ひ切つて聽いて下さらない？　でもあなた、あれがあるばかりに、私平生から外のこと、どれだけ我慢してゐたでせう。ねえ旦那。

棚濱　困るなア。大臣にでもなると金が出來るなんてのは、貧乏な奴等のことだ。俺達大臣になつた日には所謂金蔓を垂れにやならんのだ。一體結局のところ何の位なことをいひよるんかね。

しん子　（掌を見せて）これだけなの。今日のうちに內金を入れるからつていつて、待つて貰つてゐますのよ。

棚濱　五萬圓か、打撃ぢやな。

しん子　でも大臣さんぢやないの。

（女中登場。）

女中　大森の御前から御電話でございます。

棚濱　よし。（しん子に）一寸待つてゝくれ。

（棚濱、女中退場。）

しん子　さア〱しめた。……あすこは待合や料理屋にや持つて來いつて場所なんだよ。かうして置きさへすれば、あとはおもむろつて寸法さ。チユッチユッ。

（棚濱登場。）

棚濱　（にこ〱しながら）あゝ何うも電話といふものは煩さくて叶はん。

しん子　でも旦那、お嬉し相よ……。

（書生登場。）

書生　伊岐總務が御見えになりました。

棚濱　伊岐か。十二疊の方へ通して置いてくれ。

（書生退場。女中別の口から登場。）

女中　目黒の御前からお電話でございます。

棚濱　何うもかなわんな。

（棚濱、女中退場。）

芳江　（驚いて）あら女のペンキ屋さんだわ。

（芳江、お花、女中登場。）

女中　こゝの扉ですの。どなたかお見えになつたら一寸遠慮して下さいね。

お花　承知いたしました。

しん子　まあほんに。女のペンキ屋さんはちよつとおツだことね。

芳江　あんた何うしてペンキ屋さんなんかになつたの？

しん子　それには深い仔細があり相だわね。聽かして下さらない。

お花　（仕事をしながら）何も深い仔細なんかありやしませんわ。男なんかの厄介になるのがいま〱しいばかりで、こんなオツになつちやつたんですわ。

しん子　男の厄介になるのが何うしてそんなに忌々しいの？

お花　でも男なんてものは、女は皆自分の持物か何んかのやうに思つて、すき自由にしなければ承知しないぢやありませんか。

しん子　だから女だつて、男をわたし達の持物だと思つてすき自由にすればいゝぢやないの？

お花　ですからさうする爲めに私ペンキ屋になつたのですわ。

しん子　ペンキ屋なんかになつて、あくせくしなくつて、私達のやうに、おかひこぐるみで、男子をすき自由に玩弄物にする……おつとお孃さん、今のは嘘よ。……でかうつと、……ペンキ屋さんあなたは、男にでも捨てられた焼けつぱらぢやない？

お花　そんな事はありませんわ。男をすてたことはあるか

も知れないけれど、男にすてられたなんてことは……。

しん子　憚りながらて譯なの……それは失禮。「さては合點が行かぬ」何うした次第なのさ。

お花　でもね私のお母さんは散々男の玩弄物になつて、それは／＼可哀想な人なのよ。私、それでもう、男といふ男はお母さんの仇としか思はれないの。それだのに、お母さんは、私を自分と同じやうな男の玩弄物にさせようとするんですもの。私もまた、始めのうちはそれをいゝ氣になつて、あなた方のやうにいゝおべゝを着て、男の玩弄物になる所まていつたんですけれど、あんまりお母さんが男に意氣地がなくつて、まるで蟲けら同様なのを見ると、もう私たまらないのよ。これは大變だつて氣がしましたの。けれどもやつぱり、おしろいをつけてじやら／＼してゐるのが嬉しくつて、何うしても見切りがつかなかつたのですわ。それを……もうおしまひ。ねえお孃さん、こんな話つまらないわね。

しん子　それで心機一轉たらて、ペンキ屋さんとは、思ひ切つたものね。

お花　でも私の世話になつてゐたバーの御主人が繪かきだつたので、私もまね事をして繪を習つたのが、藝が身を助けるで、看板かきになりましたの。

芳江　いゝことね。私も繪がすきだから、看板かきにならうか知ら。

しん子　そして男を征伐するなんかは、お孃さんいけませんよ。

芳江　さうして、私も男なんか嫌ひだから、ペンキ屋の姉さんが男と喧嘩する時手傳つてあげるわ。

お花　ホツホ。ほんとうに面白いお孃さんね。でもお孃さんなんか駄目ですわ。ぢきにお嫁にやられてしまふから。

芳江　いやなこと。だれがお嫁なんかに行くもんか。うちのお母さん見たいに、終始お父さんににらまれてばつかりして、ほんとうにつまらないと思ふわ。私もあんたのやうに、お母さんの仇を打たなくつちや、あんたのお母さんも、お父さんににらまれてばつかしゐたんでせう。

お花　いえちつとも睨らまれやしなかつたのですよ。可愛がられてゐましたわ。

芳江　そいで何うして仇を打つの？

お花　でも男の玩弄物にされたんですもの。

芳江　私少しわからなくなつたわ。

しん子　玩弄物にされたつていふけれど、玩弄物にされにゐる方でも、向ふを玩弄物にしてゐるんだから五分々々だわ。五分々々どころか、男の膏汗で此方は保養するんだから、それもやつぱり立派に男を征伐してるんだわ。女ペンキ屋風情がいくら力んだつて、憚りながら眞似も

出來まい。ヘン、仇討なら此方にお頼み、返り討になるやうなドヂは踏まないから安心をしよだ。……ねえお孃さん。あんなペンキ屋の女の話なんかお聞きなさるな。さあさあちらへ參りませう。大事な約束の時間が切れる。どれ一征伐して來ようか。オッホッホ。ペンキ屋さん、精々勉強して男を征伐をしなさい。あばよ。

お花　あんな人を見ると、お母さんの事が思ひ出されて業がにえてなりやしない。女といふ女はみんなあれなんだからほんとにいやになつてしまふ。だから私死んでもペンキ屋はやめられやしない。クソッ。（グイ〱と塗る）

（棚濱夫人、婆や登場。）

婆や　（ペンキ屋に）一寸すみませんが、あちらへ行つて頂戴。

（お花退場。）

夫人　あの外でもないがね。私久しい前から郁夫の樣子が何うもをかしいと思つて居たんだが、此頃は愈々變になつて、まるで女でいへばヒステリーとでも言ふのだらうね。婆やも氣がついてゐたらうね。

婆や　それはあなた樣、私共とうから心配でなりませんので、それとなく若旦那に伺つて見ましても、何でもない何でもないと仰つてですが、あの赤佐さんのお孃さんと御婚禮の御はなしが出てから、一層ひどくなられたやうに思はれてなりませんのよ。もしや何處かにお氣に召したお方でもお出來になつたのぢやござんせんでせうか。

夫人　私もさう思つて居るのだよ。それに赤佐樣との話も大分進んでゐるので、私ほんとうに氣が氣ぢやないんだよ。旦那樣も、萬か一これが纏らないと非常に困る事になるんだからつて、大變心配をしておいでなんだよ。

婆や　ほんとうに旦那樣の御心配の御樣子が目にみえるやうで、わたくしもはら〱いたして居るんでござんすよ。今日は一つ邪が非でも若旦那に打あけていたゞいて、何んとか婆やにお相談下さるやうに申あげて見ませう。

夫人　さうね。是非頼みますよ。もしさういふことであつたら、此際男らしく思ひ切るやうにとつくりと說いて見ておくれよ。あれがいふ事をきくものはお前しかゐないんですからね。それにね。萬か一もうそゝうでも仕出來してゐたんなら、出來た事は仕方がないから、萬事打明けて跡始末をつけて貰つて、綺麗さつぱりにする方がいいんだから。

婆や　さうでござんすとも。跡始末は他でよろしいやうにいたしますからつてね。……でも萬一、何うしても思ひ切れないなんて仰つてたら、何ういたしたものでございませうね。

夫人　それはお前、若し先方が承知しさへすれば、相當な

仕送りをして、何處ぞ氣保養の場所をこしらへるなり何なり、いくらでも仕方はあるだらうぢやないか。これが何も世間でやつてゐない事ぢやなし。やらない方が稀な位なんですもの、……オホヽヽ。お父さんだつて、ちやんと呑み込んでおいでどこぢやない、その位の働きがなくつて何うする、西洋の女なんかには、却つてそんな男を好くものがあるつて、いつか戯談いつておいでだつたが、そこはお前、そんな物のわからないお父さんぢやないんですよ。よくね、それをいつてやつて下さい。さうして赤佐様の方へは是非色よい返事をするやうにつてね。

婆や　畏りました。只今すぐ婆やが伺つて見ますわ。そこは年の功でござんすもの。オツホツホ。

夫人　ではくれ〴〵頼むからね。

（二人退場。芳江、お花登場。）

芳江　私しん子をばさん大嫌ひ。ペンキ屋なんかになつていけないつて。餘計なお世話だわ。私、男の玩弄物なんかになるものか。……でもペンキ屋になれば、何うして男の玩弄物にならないの。

お花　それはね。御覽なさい。かうやつて、一生懸命ペンキを塗つてゐれば、男の玩弄物になつてゐるひまもないでせう。それ此通りぐづ〳〵してゐると、ムラが出來て上手に出來ませんのよ。玩弄物なんかになつてゐると、……それお話に身が入つても、こんなに拙くなつてしまふのよ。

芳江　さうね。さうして玩弄物にしにきたらそのペンキを男の頭からぶつかけてやればいゝわ。

お花　オツホツホ。さうしてやりませうね。

芳江　でもペンキ、私にうまく塗れるかしら。ちよいとやらして頂戴な。（お花の刷毛をとつて塗る）

お花　あれお孃さん。いけませんよ。折角塗つたところを……御稽古はね、こんど又ねえやが參りました時にしませうね。

芳江　いゝのよ。もうちよいと。

（邦夫登場。）

邦夫　人を馬鹿にしてゐる。誰れも彼れも人間らしい奴は一人だつてゐやしない。（芳江を見て怒鳴る）こら芳江、何をしてゐる。仕事の邪魔になる。あつちへ行つてろ。

芳江　まあ兄さん、いやだ。何處かで喧嘩して來て、私のことを怒りつけて。

邦夫　生意氣！　あつちへ行かんか。

芳江　おゝおつかない。

（芳江退場。邦夫お花と顏を見合せる。）

邦夫　おゝお前お花さんぢやないか、僕は平山だよ。

お花　何うしてこちらにおいで？
邦夫　それよりか、お花さんが、何うしてペンキ屋なんかになつたのだ。
お花　やつぱり外のペンキ屋さん達がペンキ屋になつたのと同じ譯よ。それより平山さんが何うして棚濱さんにおなりなの。
邦夫　いやお花さん、全くすまない。實は僕はこゝの長男なんだ。平山といふのは、あんな所に遊びに行く時の名前なんだよ。親父が無性にやかましいので、バーなんかに本名では行かれないのだよ。
お花　まあ。
邦夫　いやそればかりぢやない。僕はお花さんにはすまない事だらけなんだ。出來もしない約束ばかりして……然し今それで僕自身で苦しんでゐるのだ。けど、お花さんだつてあんな手紙一本で絶緣するなんて、隨分殘酷ぢやないか。
お花　でも私……。
邦夫　僕が此一年間どんなに苦しんだと思ふんだ。僕は、いろ〳〵出鱈目はいつたが、心持は眞劒だつたのだ。ただ僕の境遇では、あんな出鱈目をいふより外仕方がなかつたのだ。眞劒になればなるほど、現實を見まいとするものだから、ついそれが嘘になつて出るのだ。僕の心持の眞劒なことは、あの時分も今もちつとも異りやしない。それをお花さんは、手紙一本で……僕はどんなにあの手紙に苦しめられたか。（泣く）
お花　（塗りながら）ほんとうに濟みませんでしたわね。
邦夫　おいお花さん。――僕がこんなに一生懸命になつてゐるのに。お前は何んだ、平氣でペンキを塗つたりして……。
お花　（塗りながら）でもペンキ屋が私の稼業なんですもの。これを怠けるとあしたから御飯がたべられないんですよ。泣いたり笑つたりして稼業を怠けても、お飯をたべるに差支ない人達がほんとうに羨しいわ。
邦夫　（蒼くなつて怒つて）さうだ。お前はやつぱりあすこらにうよ〳〵してゐる女どものやうに、僕等を玩弄物にするけだものだつたのだな。
お花　（ふり返つて）何ですつて？
邦夫　さうだ〳〵。無垢な、世間知らずの、ちつとも疑ふことも知らない、何の罪咎もない僕のやうなものを、もてあそんで、踏み躪つて、勝鬨をあげてゐるんだな。よくも長い事僕を騙してゐたな。
お花　私、手紙にかいてあげた通りなのよ。騙すなんてそんなこと……。
邦夫　嘘だ〳〵。皆から嘘だ。お袋が男に玩弄物にされた

仇きを討つために、石に噛りついても立派な人間になつて見せろと泣いて訴へたのに同情したのが、お前に對する私の愛の芽生だつたんだ。お前もその私の愛を、沙漠で見つけた花のやうだつて大事に抱いてゐてくれたぢやないか。あれは皆あすこらの女どもがよくやる手だつたんだな。ペンキの方が僕よりも大切になんて、人を侮辱するにも程がある。

お花　（縋りながら）　あなたはやつぱりそんな風に、女は男の持物だと思つてゐたから。私、あなたの持物にならないやうにペンキ屋になつたのですわ。あなたはつまり私をペンキ屋にしてくれた恩人なんだわ。

邦夫　何をいふ。僕はお前の恩人なんかにならうとは思つてやしない。愛人にならうとしたのだ。

お花　私いまでもあなたを愛してゐるのよ。たゞあなたの持物ぢやないから、自由にはされないことよ。

邦夫　お前は全く誤解してゐる。僕はお前を持物にしようたんて思つたことはないんだ。全くお前の生活を助けてやりたいと思つたゞけなんだ。それはお前よりもそれだけ僕に餘裕があつたからだ。

お花　嘘ばつかり。あなたの餘裕は、その頃だつて、お父さんの餘裕だつたんぢやありませんか。私に縋りながら、給料といふ私だけのものを持つてゐたんです。あなたのお父さんは、あなたの玩弄物にする爲めに、私といふ女の人間を買つて、あなたにあてがはうとしたんですわ。私はあぶなく、張子の人形のやうに、あなたのお慰みに、なめられたりかきむしられたりして、一生をだいなしにする所だつたんですわ。

邦夫　さう云はれると全く僕は面目ない。けれども、信じて貰ひたいんだ。僕はお前を玩弄物にする氣なんかは、何といはれても毛頭なかつたんだ。あの時分にもよく云つた通り、僕は親や親類が何ういはうとも、お前を僕の妻にするつもりでゐたんだ。今ぢやもう、その考は僕の骨の髓にしみこんで、死んでしまつても離れない氣がする。それだのにお前は、手紙一本で僕を突つ離すなんて、あんまり殘酷だ。僕は、此一年間、何度最後の決心をしたか知れやしない。

お花　最後の決心なんかを何度でもするやうだから、あなた駄目なのよ。

邦夫　だめでもいゝ、お前の爲めなら僕は全く駄目な人間になつても遺憾はない。……でなくとも、もう全くだめな人間になつてゐるんだ。今日の五時には僕は、赤佐の娘を貰うか、一切を捨てるかの瀬戸際に立たなければならないんだ。赤佐の娘を貰はうなんてことを僕の口からいふ位なら、僕は一切をすてゝ放浪生活に入つた方がい

いんだ。
お花　放浪生活なんてだめよ。
邦夫　でも僕にとつてはそれより外行く道はないのだ。
お花　放浪生活なんかよりも、ペンキ屋生活に入つた方がよつぽどいゝわ。
邦夫　おゝさうだ。（小躍りして）お前の生活の仲間入りするんだ。僕はお前を持物にするどころか、僕がお前の持物にならうとしてゐるのだ。さうして、僕はちつとも後悔しないんだ。
お花　ぢや女ペンキ屋の亭主になつて？
邦夫　ならないでどうするものか。お前が僕の愛を受け入れてくれさへすれば、僕はお前の行くところには何處へでも行く。お前が僕の愛を受け入れてくれなくつても、僕はお前の行くところへは、何處迄もついてゆくんだ。金だの名譽だのつてものを屁とも思つてゐない事は、僕の方がお前より上手なんだ。僕は、そんなものを持つてゐる人間のつまらなさを長い事見せつけられて來たんだ。二六時中僕の眼の底にこびりついて居るそんな下らない世界から僕は解放されたいんだ。もう一刻も我慢が出來ない。お前と一緒にペンキ屋の仕事をするのは、全くその解放のときが來たのだ。それが出來なければ僕は赤佐子爵の令嬢を貴女に落す役目を演ずるより外にないのだ。それは奴隷を二人も三人も作つた上に自分が奴隷の奴隷になることなのだ。同じ奴隷になるならば、お前といふ生き〳〵とした人間の奴隷になる方が何んなに幸福かしれやしない。いやそれは決して奴隷になるのぢやない。救はれるのだ。僕はペンキ屋になつて救はれるんだ。お前は僕をペンキ屋にした恩人なんだ。
お花　おや〳〵今度は私の方が恩人ね。
邦夫　お前は僕を解放に導いてくれた。おゝ、お前は奇蹟を働いたのだ。
お花　あなたさう興奮しちや困るわね、興奮しても好いけど、ペンキ屋の亭主ならペンキ屋の亭主らしく興奮するものよ。何んです、「おゝお前は奇蹟を働いたんだ」なんて。ペンキが腐るわ。
邦夫　さうだ。全く僕は興奮してゐた。それは學問や空想が僕を病氣にしたんだ。それに氣付いたのは、全くペンキ屋になつたお前を眼の前に見せつけられたからだ。こんな家に居て頭の割れるほど考へても考へつかないことが、ペンキ屋になつたお前を一眼見ただけで、すぐと考へついたんだ。……僕はもう全く落付いた。僕は乾度ペンキ屋になれる。……もう興奮しちやゐない。さうして充分ペンキ屋になれさうな氣がしてゐる。いやもうペンキ屋になつてゐる。

お花　ほんとう？　嬉しいわ。

邦夫　あッ！（倒れ相になる）

お花　（邦夫を支へて）何うしたの？

邦夫　お花さん！　今お前何にを云つた。あゝ僕はもう何にも云はん。いふ必要がなくなつてしまつた。

（邦夫お花を抱かうとする。お花輕く身體を外して、ペンキを塗りつゞける。）

邦夫　あゝ私達ペンキ屋の執務中だつたつけ。

お花　新米さんは無理もないわ。私だつて始めのうちは、こんなやうなお邸に仕事に來て、お孃さん方の彈いてゐるピアノなんぞが聽えると、つひ涙が出てしかたがなかつたものよ。

（時計の半が鳴る。）

邦夫　あゝドキッとした。……もう五時でも何時でも恐くも何ともない筈なのに。……だがぐづ／＼してはゐられない。もう此の家に最後の暇をつげる時が來た。さあお花さん二人でこゝから逃げ出さなければならない。

お花　そんなにあわてたつて、私大事の仕事がまだ仕上らないぢやないの。それに二人づれでのこ／＼逃げられもしないぢやありませんか。

邦夫　でももうぢきに五時だ。まご／＼してゐるとぬけられなくなる。

お花　あなたお一人で、先に私のとこへ行つてゝ下さい。（懐から名刺を出して）これが親方のうちですのよ。私こゝの二階にゐるの。そこへ行つて待つてゝ頂戴。誰れにもわかりつこないわ。

邦夫　さうだ、それがいゝ。どうもお前はよくかういふ際に落付いて考へることが出來るね。全く感服してしまつた。

お花　あなただつてペンキ屋になつてさへゐれば、何も怖いものがないからいくらでも落付いてゐられるんだわ。

邦夫　まだペンキ屋になりかけだからだめなんだ。ぢや僕は行くよ。成るべく早く歸つて來てくれ給へ。

（邦夫退場。栅濱、夫人、芳江登場。）

芳江　ほうら、お父さん、ほんとでせう。ペンキ屋の姉さん。お父さんが女のペンキ屋なんか嘘だ／＼つていふのよ。

お花　オッホッホ。よく御覽下さいつてさう仰つて頂戴。

（號外の鈴聽える。）

栅濱　號外だな。芳江、玄關へ行つて、うちにも來てゐたら貰つておいで。

芳江　何の號外でせう。

（芳江退場。）

夫人　愈々定つたのでせうか。

棚濱　さア何うかな。

（芳江登場。）

芳江　（號外を見ながら）　あらお父さんの名前がないことよ。

棚濱　どれお見せ。（號外を見て）これは怪しからん。

夫人　何うしたの？

棚濱　赤佐の奴、今朝もあれほど氣合つて出て行きながら、これは一體何事だ。

夫人　（號外を受取つて）　まあ！　赤佐さんが御自身で文部大臣ね。この號外は確かしら。

棚濱　此新聞は確かなんだ。……奴め、自分は斷じて辭退するなんていゝ加減のことをいひよつて、この様は何だ。（怒りにふるへて）　よし。それならば、此方にも考へがあるぞ。誰れがあんな貧乏華族の娘なんか貰つてくれるかッ。莫大な仕度金までくれてやるといふのを何んと心得て居るのだ。

芳江　あらをかしい。赤佐さんのこと、いつでも私が何か言ふとすぐ怒る癖に。

棚濱　馬鹿ッ。子供なんかこんなところにゐるんぢやあない。あつちへ行つて遊べ。

芳江　今日は皆が怒る日だこと。

（芳江退場。お花隠れる。）

夫人　でも赤佐さんもあんまりです事ね。

棚濱　何。今に吠え面をかきよるわい。銀行の方ももう情け容赦は要らんこつちや。

（書生登場。）

書生　赤佐子爵がおいでになりました。

棚濱　何赤佐。どの面さげて来よつたか。氣分が悪くて寢んでゐるといへ。……いや逢つてくれる。こゝへ通せ。

（書生退場。赤佐子爵登場。）

赤佐　いやどうも急しい事ぢや。がどうやら漕ぎつけました。

棚濱　いや赤佐君。おめでたう。

赤佐　おめでたう？　いや全く。然しご本人から無禮打ちなんぞは嚴しいね。

棚濱　ご本人？

赤佐　（感づいて）　あゝその號外を見られたんぢやな。これは記者掛りの大失態で、今責任問題が起つてゐるのです。まだ發表の時期に達してをらんといつてゐたのに、揚手からでてしまつて、然かも大間違ひと來てゐるので、いやはや、我輩も飛つ沫を喰つて大迷惑をしてゐる所です。

棚濱　おやまだ確定ぢやないのですか。

赤佐　いや殆んど確定だが、たゞあんたの文部を、一應僕

か正式交渉の使者といふので、出掛けて来た譯です。つまらん手數のやうだが念には念を入れんと、此の號外のやうに間違もあるで。

棚濱　それは〱。いや今もこゝでいつてゐたんぢや。なあにあんたがなつてをれば、全くわしがなつてゐるも同然ぢやてな。アッハッハ。何れにしても御苦勞をかけた事ぢや。何卒然る可く……。

赤佐　いや今度は然る可くといふ譯には行かんでな、あんた自身、伯爵のところまで、御足勞を願ふやうにといふことです。直ちに御支度をどうぞ。

棚濱　如何にもさうあるべきぢやな。では一寸失敬して……。

赤佐　あゝそれからこれは私事だが、例の御返事を一寸伺ひたいと思つて……。

棚濱　おうそれ〱。實は御承知の通り今日は混雑して居つたで、つひゆるりと話し合ふんぢやつたが、……いや何うも格別話し合ふこともないやうな譯だが……然し一寸あちらで相談、……（うはの空で）おい〱、邦夫を呼べ、邦夫を……。

（夫人退場。）

棚濱　何にしろ年はいつても、今の若い者はまるで子供で、得てさういふ話を避けたがるでな。わし等の時代には、もうあの年頃には立派な親父ぢやつたもんぢやが……アッハッハッ。おい邦夫は居らんか……。

（夫人登場。）

夫人　邦夫は部屋にもをりませんのよ。さつき何處かへ出て行つたとか申しますが、テーブルの上に父上樣へとしてこんな手紙が乘せてありました。あの返事でしやうか？

棚濱　何んだ子供らしい。面と向つていふがいゝぢやないか。（封を切つて讀む）何「御兩親樣へ」だ。何だと、ム、……何ぢや……おい邦夫を呼べ、すぐと呼べ。

夫人　邦夫は居りませんのよ。

棚濱　をらんから呼べといふのだ。おいこら誰かをらんか……。

（赤佐、棚濱の向ふをむいてゐる間に手に持つ手紙をのぞき込む。）

赤佐　（覗きながら）何「私は永久に棚濱家を去ります。何んだ。「貧乏華族救濟の結婚よりは、生きた女との結婚を選びます。」……邦夫さんは家出したのぢやないですか。

夫人　まあ邦夫が家出したんですか。おゝ私……。（泣きくづれる）

赤佐　おい棚濱氏。貧乏華族救濟の結婚の御返事が承りた

いつたが、……いやもう係る必要もありますまい。

棚濱　いやそれは……。

赤佐　御承諾下すつても、肝心の本人がドロンを極めては實行不可能だ。さう心得てよろしいですな。

棚濱　………。

赤佐　早速伯爵の下へ御同行を願ふ筈ぢやつたが、これ亦その必要もなくなりました。御取込中お互に大分手數が省ける譯だ、アッハッハ。（號外を手に取り上げて）棚濱君。此號外はやはり正確でしたた。新聞記者といふ奴は、まだ起らん先きの事を報導しよる。商賣柄とはいひながら機敏なものだ、……では格別こゝに居る用事もないで、失禮致します。

（赤佐退場。お花登場。）

（ペンキを塗る。）

棚濱　邦夫の大馬鹿者めが、どこへでも行つてくたばつてしまへ。

夫人　えゝ私どうしたらいゝでせう。

（夫人泣き喚きながら退場。しん子登場。）

しん子　旦那、只今。あゝ息が切れる。内金二つだけ入れてちやんと契約を濟して參りました。

棚濱　おれもどうしたらいゝんだ。

（棚濱退場。）

お花　（塗りながら、ベースで）アッハッハッハのハだ。

――幕――

喰ひ違ひ （喜劇一幕物）

人物

伊丹　洋畫家
源吉　植木職
おうめ　草取娘、源吉の情婦
早見　子爵
多美子　子爵令孃
霞町の若樣　大實業家の次男
其他老人　早見家執事、女中

場所

早見子爵家邸内果樹園

上手、こんもりした檜林、その間の小逕によつて出入。正面少し下手寄りに垣作りの梨畑、その後が桃畑。遠景に母屋の洋館の一部、其れに續く和室の屋根が見える。

下手、躑躅の植込に添うてやゝ下る道。遠く築山、池などを見渡す。遠見に、然し目立つ位置に大きい石燈籠一基聳える。

源吉（二十三四歲の體格のいゝ、元氣な若者、印絆天）背ろ向きで梨の樹の手入をしてゐる。

伊丹（三十歲前後、型の如く髮の毛を長く延した極めて無邪氣な容貌の脊の低い男。何となく滑稽の味ある風采態度。赤い裏の背廣を着てゐる）源吉を少し距てた上手寄に畫架を据ゑて筆を動かしてゐる。

伊丹（筆を動かしながら）それは君、僕は早見家の援助は受けてゐるさ。然し僕が早見家から捲き上げてゐる額は、早見家が世間から捲き上げてゐる額に比べたら所謂九牛の一毛、言ふに足らんものなんだからね。早い話がだね、僕がいくら逆立をして、早見家の財產を減らす爲めに僕の畫を賣りつけたり小遣錢をセビり取つたりして見た所で、太平洋の水を蜆貝でカイ出してゐるやうなもんだからね、張り合のないこと夥しい。

源吉（此方を向くやうな姿勢になつて、尙ほ仕事の手を休めずに）あんたはほんたうに好い株ですぜ。殿樣のお金を只使つて、年中ノンキなことばかり云つてゐて、それで殿樣から『先生々々』つて崇められてゐるなんて、こんな甘えことはねえぢやありませんか。あつしも今度產れて來たら畫師に限ると思つてるんでさア。然しそんなに髮を長くしてゐねえといけねえんぢや、隨分欝陶しくて困るだらうと思つて、今からそいつが氣になつてるん

オホツハツハ
伊丹　君らは僕のノンきらしいうはべだけ見て、如何に僕が生命の悶えを悶えてゐるかを察しることが出來ないからそんなことをいふのだ。
源吉　あんまり悶えるつて恰好でもねえぢやありませんか。
伊丹　だからダメだといふのだ。ア、この血と涙の悶え。（天を仰いだまゝ、一寸首を振つて）エ、君、僕のこの胸の肉を君等に見せることが出來たら、君等はもう決して、同情の涙なしに僕を見ることは出來ないにきまつてゐる。
源吉　僕の眼が鈍いのか知りませんが、何う見ても先生は凡人に生れてきたとしか見えませんね。
伊丹　所がだ、僕のこの胸には熱い血が沸き返つてゐるんだよ君。見給へ、此の畫を！　此の強烈な色が何を表現してゐるかと思ふ。此の活動してゐる線が何を暗示してゐると思ふ。それは破壞だ。たゞ破壞だ。藝術を君等は何だと思つてゐる。ヨリ強き人間の力がだ……ネエ君、ヨリ強き人間の力が、強いか、ヨリ強きだ……人間の力がだ……
源吉　又始つたね、伊丹さんの陳芬漢芬が。先生今日は惡い所へ店を出してくれましたね。

伊丹　（焦れて地だんだを踏んで）エイやかましい。默れ。無自覺な動物に大きい大精神がわかるか。貴樣のやうな下等動物を人間らしい生物にしてくれようといふのが我我の大理想なのだ。貴樣達は因襲の奴隸、歴史の盲從者、特權の崇拜者、人類墮落の標本だ。然かもそんな下等動物にされたことを感謝し歡喜してゐるけだものなのだ、貴樣等は。
源吉　けだものはひどいなア。でも伊丹さん、かうやつてたつて、自分で働いて自分で喰つて、一文だつて人樣の厄介にアなつてゐねえんだが、畫かきなんてものは、先生のあなた方、みんな華族や金持の厄介になつてゐるんぢやねえんですかえ。あつしのお出入のお邸にア大抵ひとりふたりは畫かきを飼つてゐねえ所はねえね。
伊丹　やいコラ、「畫かきを飼つてゐる」とは何といふ言草だ。

（伊丹は、パレツトを抛り出して、雨傘を張つて源吉の方へ二三歩進みよつたが、急に立ち止つて、右の手を長く差し出して源吉を指しながら。）

伊丹　ア、無自覺者よ、汝の名は源吉なり。
源吉　あつしの名は源吉ですよ。
伊丹　實に度すべからざるものだ。かくの如くにして天下は太平なるかなだ。これ源吉哉。

源吉　源吉が出世して源吉君になりましたね、今度は源吉閣下か。

伊丹　君等は此の悽惨たる現代の社會に於て、よくもそんなノンキな生き方をしてゐることが出來るね。

源吉　戯談云つちやいけませんや。これでも伊丹さんほどノンキぢやねえつもりですぜ。

伊丹　そ、それが間違つてゐるのだ。僕の胸には熱い血が煮えくり返つてゐるといつたではないか。僕はた、如何にも早見子爵家の保護は受けてゐる。然しだ……。

源吉　又始つた。餘ッぽど氣になると見えますね。

伊丹　……然しだ。僕はそれを少しも有り難いとも忝けないとも思つてはゐやしないんだよ。

源吉　亂暴な人だね、あんたは。

伊丹　いや決して亂暴ではない。彼等の財産は、僕等が使用してこそ社會に有益に役立つといふものだ。彼等に使はせるのは溝に棄てさせるやうなものだ。

源吉　全くだね。あんたのやうな畫かきの描いたものを千兩なんて大金を出して買つたりしてね。

伊丹　違ふよ。アレは千圓の賣價をつけて置いたけれど、こゝへ買つて貰つた時には六百八十四圓三十錢に割引したんだよ。

源吉　八十四圓三十錢とは、又妙にこぎつたもんですね。

伊丹　運賃を僕が持つたんで差引そんな勘定になるんだ。

源吉　華族さんも、此の頃のは中々細けえね。

伊丹　そのしみつたれから小遣錢をせびり取る僕の苦心を察してくれたまへ。

源吉　アッハッハ違げえねえ。こりア並大抵のことぢやなからう。

伊丹　しかも畢竟するに、僕等や君等が働いて彼等の五萬の財産を作り上げてやつてゐるんだからね。隨分馬鹿らしい話だ。

源吉　あんたそれでも働いてゐるつもりなんですかい。アッハッハ。然し此頃はそんなことをいふ人がだいぶんありますね。此間も此處の大將が重役になつてゐる會社の園遊會で、醉つぱらつてそんなこと云つてたものが一人や二人ぢやなかつたやうでしたぜ。矢張りインフルエンザ見たいな流行り病ひなんでせうね。

伊丹　馬鹿をいへ……然し源吉君、君は中々感心な男だ。うはべでは僕等の事を笑つてゐるが、腹では大に僕等に共鳴してゐることを僕はちやんと知つてゐる。白狀したまへ。

源吉　これア驚いた。全體何を白狀しろッてんです。

伊丹　僕は知つてゐる。君は此頃あの池のふちの奈良から持つて來たといふ大い石燈籠を指して「これだけで一萬

圓からかゝつてゐる。華族なんてえものは冥利の惡いものだ。此の前燈籠のカケラ程の金が俺にあつたら、肺病の妹を見殺しにせずに濟んだんだがなア」と嘆息したら、「何うだ、手前は、それを誰れからか聽いて、「源吉めは危險思想だ」と華族の奴等に云つたといふぞ。何うだ。

源吉　『何うだ』つて、それに違えねえぢやありませんか。

伊丹　今それに違えねえ……違ひないのだ。そこだ、我我が……。

（伊丹は頻りに妙な腰つきをする。）

源吉　何ですねエ、變な風をしてゐるぢやありませんか。

伊丹　實は、今日は少し腹工合がわるくて、……さつきから我慢してゐたんだが……ア、もう堪らない。

（伊丹植込みをぬけて母家の方へ驅けて行く。）

源吉　アツハツハ、何うですあの顏は。随分變りモンだぜ。華族の家にゐてえてあんな人ばかり出て來るんだらうぜ。でもあれで本氣なんだから馬鹿かそらア。然し好い人だなア。セチ辛い世の中だの何のていふけれど、あんな人が生きて行けるんだから頼もしいや。

（早見子爵令孃多美子（二十歳前後、表情に富んだ容貌、それに適うた化粧と服裝）植込の間の小徑から登場、源吉の直背後に立つて、源吉の獨り言を聽いてゐる。）

源吉　（振り向いて）これはお孃樣。好い天氣ぢやございませんか。

多美子　源吉は何を今獨り言云つてたの？

源吉　エツヘツヘ、今まで伊丹さんと馬鹿云つてた所なんでさ。ほんたうに伊丹さんは好い方ですなア。

多美子　ほんたうに純な方ねえ。

源吉　『ジエン』てえんですかね、あゝいふのは。……何だか判りませんけど、面白えことばつかり云つて、今怒つてたかと思ふと、すぐに笑つて、笑つたかと思ふと泣き出すてんだから變つてまさア。

多美子　さうよ、あの方は外の方見たいに、自分を隱したり、つくろつたりすることの出來ない方なんだわ。かうと思ふとすぐそれを云つてしまつて……云ふばかりぢやないのよ、すぐとそれを實行しないと我慢が出來ないのよ。

源吉　それアあつし共だつてさうでさア。だから伊丹さんたア、いくら喧嘩してもすぐ仲直りしてしまつて、『源吉』と來るんですからねエ。ほんたうに面白れえや。あれでちつとは畫が描けるんですかえ。

多美子　そんな失禮なこと云つて。伊丹さんの畫はね、あの方の氣象の通り自分の胸にあるものゝ色や線にたつて

出て來るのでね、あゝやつて寫生してゐても、ちつとも自然の景色を描いてゐるのぢやないんだわ。自分の胸の裡の畫がカンバスに出て來るんだつてさういつていらつしやるわ。眞實だわ、それは。

源吉　ヘエ、「胸の裡の畫」ねえ？　先刻も、俺の胸の裡には血が沸き立つてゐるつて云つたつけ、道理であの畫はイヤに眞紅だと思つた。

多美子　源吉なんかにわかりアしないわ……けれども源吉、私お前達のやうな生活が隨分淋しいと思ふわ。

源吉　アッハッハ。お孃さんもお戯談もんですね。それアお馳走を喰へ倦きると、かうこで茶漬が欲しいてナものですけど、茶漬ばかり上つてたらお孃さんなんかは、三日位で閉口しておしまひになるでせうぜ。嘘と思ふならやつてお覽うじろ。

多美子　そんなことといふけど、源吉は私達の生活が何んなものか知りアしない。それはまるで嘘で固めてゐるのだわ。

源吉　そんなことはありますまい。お邸へ見える方は皆立派なお方ばかりで嘘なんかつき相な顏をしてる方は一人だつて無いぢやありませんか。

多美子　だから遣り切れないんだわ。皆ほんとのやうで何れをほんとにしていゝかちつともわかりアしない。

源吉　アッハッハ。お孃さん面白えことを仰つしやる。どれもこれも皆ほんとでせうぜ。

多美子　そんなことがあるもんかね。それはお前達の社會のことだわ。

源吉　あつしどもの社會にアそれア嘘つきが澤山ゐますぜ。あの留公なんかは、何時でも色女の十人もついてゐるやうなことを云つてやがるが、皆嘘ッぱちなんだから驚いちまいますさア。

多美子　それがほんとなんだわ。私達の社會には、そんな顏をしてるものは一人もありやしない。

源吉　だから結構ぢやありませんか。

多美子　だから嘘はつかりだといふんぢやないか。

源吉　何だかお孃さんの仰つしやることはあつし共には飲み込めねえね。……あつしたちにア教育てものがねえからわからないんでせうね。困つたものだが、あつしのせゐぢやねえ、親爺のせゐなんでさ……親爺のせゐでもねえ、誰れのせゐでもねえ、材木屋の倅に生れついたのが不運たと思つて諦めるより仕方がありませんや。アッハッハ。

（多美子は輕い溜息をそつと吐いて、源吉の方を見る。源吉の眼と逢ふ。）

多美子　（慌てたやうに吃りながら）でもね、源吉、あの

何だわ……教育なんてダメなものよ、その證據には、私達の社會でやつてることとゝお前達の社會でやつてることと何方が正しいか、間違がないか、比べて見てごらんな。

源吉　比べるツたて、あつし共には上つ方のことはわからねえから比べやうがありませんや。マア歩くにしてもこちとらはテク／＼歩きで、上つ方は自動車てナ譯でせうね。

多美子　ほらご覽な。テク／＼歩きと自動車に乘るのと何方が正しいと思ふ、源吉は。

源吉　道德の上で言ふと、あいつは馬鹿に涼め／＼しいもんですね。

多美子　（焦れツたさうに）そんなこつちやないのよ。

（源吉笑ふ。）

多美子　もうそんな話はよさうね。あたし焦ら／＼してくるわ……ねえ源吉、今年は梨はよく出來さうかい。

源吉　えゝ今年は受合ひでさア。今までは土がいけなかつたんでさ。此邊の土はあんまり梨なんぞにア肥え過ぎてまさア。去年すつかり砂の多い土と入れ換へといたからもう確かですよ。

多美子　源吉、私にも手傳はして頂戴。

（多美子、源吉と列んで梨の枝をためる。）

多美子　これで好いんだらう。うまいわね。

源吉　なるほど、中々お上手ですね。あつしの……何とかいつたけな、さう／＼……助手になつていたゞかうかな。アッハッハ。

多美子　ホヽ、さうしたら、私隨分働いてあげてよ。

源吉　肥やしなんぞもやつてくださいますかい。

多美子　肥やし？　ちつと困つたわね。……でもこれ臭いんでせえ。

源吉　臭ぇはねえ肥してえのはお生憎様でさア。肥しあゝせえやうぢやとても本職にアなれませんぜ。

多美子　ぢやあたし一生懸命に我慢してよ。

源吉　おつとお孃さんそこんとこはちつと混み過ぎてますから、少し下へためて見てくださいね、それからその邊の朽つた枝を、一つ此切り出しで、切口のさゝけないやうにうまく切つていたゞきたいもんですね。お助手さん。

多美子　ハイ畏りました。ホヽ。

多美子　かういふ風にかい。

（多美子、源吉から切り出しを受取つて切る。）

源吉　ほんとうにお上手だ、少々怪しい手つきぢやアあるが……。

多美子　それアまだお弟子入りをしたばかりだもの……源吉、いつも獨りで唱つてゐるあの唄を唄つて聽かせない？

源吉　エツヘツヘ、名人てものアさう何時でもすぐ唱ふツて譯にア行かないんでね。それよりか、お孃さんが何時もお唱ひになつてゐるのを一つ聽かしていたゞけませんかねえ。

多美子　私が唱つたら源吉も唱つて聽かせる？

源吉　エ、さうすればあつしア敗けねえ氣で唱ひまさア。

多美子　ぢやあたし唱つてあげるわ。

（多美子小刀を使ふ手を休めて唱ふ。）

君よ知るや、南の國。樹々はみのり、花は咲ける。風はのどけく、鳥はうたひ、時をかはず、胡蝶舞ひ舞ふ……。

（源吉笑ひを嚙み殺す。堪らなくなつて吹き出す。）

多美子　アラ源吉、人が一生懸命に唱つてゐれば吹き出したりして、ひどい人ね。

源吉　（涙を拭きながら）ア、苦しい。あつしは又一生懸命に可笑しいのを堪へたんで横腹が痛くなつちやいました。いつも遠くで聽いてゐる時にアそんなに可笑しいとも思ひませんでしたが、近くで聽くと隨分たまらねえもんですね。何處からそんな聲が出るんですえ。ヒユルルルルツてやがら。アツハツハ。

多美子　いやな源吉。（睨むまねをする）さア今度はお前の番だよ。早く唄つてお聽かせよ。

源吉　エ、實は唱ふつもりでしたが、今お孃さんの歌を聽いたんで、あつしの奴アびつくりして引込んぢややがつた。

多美子　するいよ源吉は、あたしにばかり唱はせて。唱はないと承知しないからいゝ。

源吉　エ、唱ひます。唱ひますがね……可笑しいな。何んだかきまりが惡いな。

多美子　あたしだつて唱つたぢやないの、源吉の爲めに。だから源吉だつてあたしの爲めに唱つて聽かせるんだわ。

源吉　ぢやアやツつけるかなア。併し笑つたりしちやいけませんぜ。

源吉　（仕事をし〳〵ぶら唄ふ）流れたア――、ナカノリサン、流れ〳〵る水、ナンチヤラホイ、止めても見よか、ヨイノ〳〵、止めてナアー――ナカノリサン、止めて止まらぬ、ナンチヤラホイ、色の道、ヨイノ〳〵。

（多美子うつとりと聽き惚れる。）

源吉　アツハツハツハ、何んなものです。

多美子　（我れに返つたやうに）源吉、あたしは何んだか悲しくなつたわ。

源吉　悲しく？　そいつは困りましたね。木曾ぶしで悲しくなつたら、義太夫でも聽いたら悶絶しなさア。アツハツ

ハ。あつしがお嬢さんの唄で可笑しくなつて、お嬢さん
があつしの唄で悲しくなれば、差引元の木阿彌でさア、アッハッハ。

多美子　ホヽヽ(一個の葉の枝を切り取る。) 源吉はいゝ聲ね……アッ痛――

(多美子、けたゝましい聲をあげる。)

源吉　(驚いて多美子の傍へ驅けよつて) ド何うしたんです、手を切りましたかい。

多美子　(右手で左の指先を押さへながら) ほんのちつとばかりかすつたんだわ。源吉、私のこつちの袂に半巾があるから出して頂戴。

源吉　飛んでもねえことをしましたね。あつしが餘計なことをお願ひしたんで……(多美子の袂から半巾を出して) これア少し勿體ない。

多美子　いゝのよ。それを裂いて結えて頂戴。

源吉　勿體ないが、そんなこといつちやゐられねえ。(半巾を裂いて多美子の指先を結びながら) 痛みますかい。

多美子　いゝえ少しばかりよ。有り難う、もう好いわ。

源吉　あつしびつくりしちやつた。でも少しでよござんした。大怪我でもしたらあつしは腹でも切つて申譯しなければならないところだつたア、壽命が三年ほど縮つた。

多美子　(笑つて) 飛んだ助手を雇ひ入れたのね。免職しちやいやよ。

源吉　いんえいけません。もう免職々々。ぐづぐづしてゐるとこつちが免職になつちやいますからね。

多美子　尤もあたし免職にならないでも、もう指を結えたんで助手が出來なくなつちやつたわ。

源吉　あつしどもだつたら飯の喰ひ上げつて所ですね。日に一本づゝ指が使へなくなつちや、月に三十本の指が要る譯ですからね。年に三百六十五本も指が要るつてんぢや平民にやアとても續きませんや。アッハッハッハ。

多美子　ダメねえあたしたちは。

源吉　何うしてダメなんです。

多美子　(俯向いて凝つと地を見つめて) 何うしてゞも……ダメぢやないの……。

(若い女中登場。)

女中　アノお嬢樣、霞町の若樣がお見えになりまして、一寸お孃樣に。

多美子　今參りますつて、さう云つて頂戴。

(女中お辭儀をして退場。)

源吉　霞町の若樣はよくお見えになりますね。あの方はほんとうにお立派ですね。芝居の若樣ッてもねえや。やつぱり上の方は違うね。

(多美子眉をよせる。)

源吉　お孃さん、ナんでせう？　源やが當てゝ見ませうか。霞町の若樣は、お孃樣のおいひなづけつて譯なんでせう。
多美子　知らないわ。
（多美子行きかける、源吉追ひかけるやうに。）
源吉　アッハッハッハ、すつかり當つちやつた。
（多美子退場。伊丹植込の間から出る。額の汗を拭く。）
伊丹　ア、何うも待ちくたびれてしまつた。
源吉　今まで何處に居たんです。
伊丹　そこに居たんだ。イヤ君が令孃と話をしてゐるので、僕はあすこに凝とこらへて待つてゐたんだよ。隨分長かつたア。唄ひつこをしたり、痴話喧嘩をしたり、とうとう指を切らせるなんて、頗るお安くないね。
源吉　伊丹さんも人が悪いなア。何もあつしがお孃さんと內所話をして居たんぢやなし、出て來たつていゝぢやありませんか。
伊丹　所がだ。（と例の調子で右の手を大きく源吉の方へ伸してゝア、無自覺者よ、汝の名は源吉なり。
源吉　又始つたぜ、此の人は。薄氣味が悪い。
伊丹　いんや、君は確かに自覺してゐる。僕に隱すなんて他人臭い。白狀したまへ。
源吉　又白狀ですかい。今度は全くわからねえや。てんで見當がつかねえ。

伊丹　嘘をいひ給へ……だが一寸待つたこれは聊か警戒を要する話だから……。
（伊丹はさう云ひながら四方をぐる〳〵廻つて元の所へ來て。）
伊丹　大丈夫……で源吉君は、君は多美子孃が、君をラヴしてゐることを十分悟つたらう。
源吉　（枝をいぢる手をやめずに）　伊丹さん馬鹿が始つたぜ。取り合つた日にア飛んだ目に逢わ。
伊丹　いや源吉君、君は自覺してゐる。たゞ因襲道德によつて、それを僕に隱してゐるのだ。僕にのみならず、多美子孃その人にも隱してゐるのだ。
源吉　何を隱してゐるもんですか。馬鹿々々しい。
伊丹　全くか。
源吉　全くでさア。
伊丹　これ源吉君、では一寸こゝへ來たまへ。
源吉　マアご免蒙りませう。あんたに取合つてると仕事が捗取らなくて、親方にどやされつちやア。
伊丹　何んだそんな仕事なんぞは何うでも好い。梨なんぞが能く出來ようが悪く出來ようが、何うせ君が喰ふんぢやないんだから構やせん。……一寸こゝへ來たまへ。來たまへといふに。
（源吉澁々伊丹の傍に來て木の根にかける。）

源吉　傾くさいね。何ですえ。

伊丹　破壊だ、大破壊だ　…いや建設だ、一大建設だ。

源吉　誰れか別荘でもおつ立てるんですかい。

伊丹　マア聴き給へ。多美子孃は實に哀むべき女性だ。さうして君は實に羨むべき……男性だ。

源吉　何の事ですえ。忙しいんだから手取り早く用を云つて貰ひませう。

伊丹　僕はもう決心した。もう實行だ。斷じて行へばだ、……何だつけな……斷じて行ふんだ。源吉君、現代に於ける生活の建設は、それは古きもの、破壊から出發するより外はない。そこには犧牲が要る。それは多美子だ。けれども彼の女は、その犧牲の甘味に生きる外、彼女としては生きる道はないんだ。

源吉　それア何の講釋ですえ。

伊丹　講釋ではない、君自身の一大試練なのだ。源吉君、君は多美子と共に、その重大な建設の役割を荷ふ氣になれないか。

源吉　もう少し日本語で云つて貰はねえとあつしにはかいも目解らねえや。お孃さんと一緖に何をやるんです。

伊丹　そこだ。（源吉の傍へ床几をスリ寄せて）源吉君、多美子孃は全く時代の子なのだ。彼女の周圍の虚僞の生活には、彼女はもう我慢が仕切れないんだ。さうして純粋な、まじり氣のない、アラのない人間を求めてゐるのだ。誰だつてさうなければならんだらうぢやないか。さうして霞町の若樣なる生物と彼女との婚約は、彼女に最後の打撃を與へたのだ。それは彼女の關係したことではないのだ。彼女は全く、知らないことなのだ

源吉　お孃さんは知つてますぜ、さつきあつしがさう云つたら、眞紅になつて逃げ出しちやつた。

伊丹　いやその意味ではない。霞町の若樣なる動物と、多美子孃との間には何等の愛もないのだ。霞町は、あの通りのお坊ちやんで別段惡人でも善人でもない、云はゞ教育と金と親爺とを持つた普通人に過ぎないから、多美子孃を獲たことに決して不滿はなからうが、多美子孃の方はさうでないのだ。彼女は、地位も、財産も、學問も、着物も、お白粉も、それを塗りつぶすことの出來ない人間的の或るものを、彼女自からの裡にある或るものが、彼女をして同じ人間的のものを求めなければ已まない欲求を抱かしめてゐるのだ。そこでだ、彼女は、自分の裡にある眞純の人間と同じ人間を、自分の外に求めてゐるのだ。眞純の人間なのだ、源吉君解つたか。まじり氣のない生粋の人間をだ、彼女は求めてゐる。眞劍で求めてゐる。命懸けで求めてゐる。一切をすてゝただそれだけを求めてゐるのだ。

源吉　へー？　で何うしたつていふんですえ。

伊丹　でその眞純な人間的のものを、彼女は君といふ人物、卽ち源吉君に於て發見したのだ。

源吉　へー……？

伊丹　『へー』ぢやないよ君。多美子孃の君をラヴするに至つた所以は卽ちそこにあるのぢやないか。お孃さんは……一口にいふと、君と戀に陷ちたのだよ。

源吉　戲、戲談云つてら、伊丹さんは。眞面目になつて聽いてれア、何のこつたい。エ、つまらねえ。

（源吉立ち上らうとする。伊丹慌てゝ抑へる。）

伊丹　マ待ちたまへ、戲談とは何だ。僕がこれほど眞劍になつてゐるのが君には解らないのか。僕は多美子孃に心から同情してゐるのだ。僕は彼女の……。

（伊丹手巾で眼を拭ふ。源吉驚く。）

伊丹　僕は、ぢきに物に動かされるサ。然し、人間が人間に動かされるのが何で惡いのだ、何で可笑しいのだ。多美子孃は、僕の妻に向つて彼女の眞純な戀を確かに告白してゐるのだ。

源吉　ほんとですかえ、それは。

伊丹　ほんとだとも。彼女は僕の妻に、もし彼女が、生活の束縛から自由にされるなら、自分はすぐと源吉のやうな人間の妻になるとさへ云つたのだ。無論彼女は『源吉のやうな人間』といつて『源吉』とは云はなかつた。然し、今僕が傍から見てゐた樣子では、彼女は決して『源吉のやうな人間』を求めてゐるのではなく、『源吉』その人を求めてゐるのだ。多美子孃は、君に戀してゐるのだ。

源吉　だつて仕樣がないぢやありませんか……なんて、あつしもついほんとにするんだから笑はせら。……もうやめませう、馬鹿々々しい。

伊丹　やめてはいかん、斷じてやめてはいかん。

源吉　やめないにしても、何うもなるものぢやねえぢやありませんか。うつかりしたことをしやべると、不義はお家の御法度だなんて、頸をちよん切られたらことだ。

伊丹　君は實に貴族的の男だなア。

源吉　馬鹿いつてら、あつしが貴族的なら、こゝの殿樣は職人的だ、アツハツハ。

伊丹　いや君はたしかに貴族的だ、昔或る大名が、戲話に『切つてしまへ』と云つたが爲めに、ほんとうに切られてしまつた家來があつた。君のはそれだ。君は戲談のやうにそんなことを云つてゐるが、その戲話は、多美子孃といふ人間を一人殺すことになるのだよ。君は昔の大名と同じぢやないか。

源吉　驚いたね。ぢや何うすればいゝんです。

伊丹　君は多美子孃の愛を受け入れゝば好いのだ。

源吉　『愛が愛を入れる』つてえんだ。

伊丹　早くいへば、多美子孃を妻にするのだ。

源吉　飛んでもねえ。植木屋の職人があんな華族のお孃さんを嬶にするなんて、そんなことが出來てたまるもんですか。第一あつしに喰つて行けやしねえ。嬶にあんな風でゾロ／＼してゐられちや、あつしがいくら稼いだつてやり切れやしねえ。

伊丹　そんなことは末の末の事だ。人間と人間との共鳴だ。君の純な僞りのない生活を多美子孃はあこがれてゐるんぢやないか。所謂手鍋下げてもといふ通り、手鍋を下げるといふことに彼女は人間の生活を見出さうとしてゐるのだ。多美子孃は何も生涯あんな風をしてゐなければならないといふ道理はない。

源吉　飛んだ北川くま子事件だ。いやなこつた。

伊丹　實際いやか。あゝいふ純な美しい處女が、一人の同じやうな純な男にあこがれるといふ事は、決して神樣の罰に逢ふ隠れのない、ほんとうに尊いことなのだ。ただ囚はれた人間だけが、それを怨み、それを罰しようとするのだ。然し、さういふ人間があべこべに神樣から罰しられてゐるぢやないか。君は實際いやか。それとも恐ろしいのか。

源吉　（少し迷つたやうに）伊丹さんは人が悪いなあ。あつしだつて人間ですぜ。誰にもそんなことを云はれゝばちつとはをかしな心持にもならア。

伊丹　それ見給へ。だから僕の前に隠すなといふのだ。先刻の多美子孃の言葉といひ態度といひ、あれが君に通じないとすれば君は人間ではないのだ。

源吉　さう云はれて見ると、何だか樣子が訝しいやうでもあつたなア。でもあつしとしちや、そんなだいそれたことは思ひもつかねえからなア。

伊丹　僕等は決して、悪事を話しあつてゐるのではないぞ。誰れに聽かしても恥しくない眞劍の心持を語つてゐるのだ。君がそれを罪悪と思ふのは、全く今までの間違つた因襲に囚へられてゐるからだ。多美子孃は立派な道德を持つてゐる。君がそれに共鳴するのは人間の當然なところだ。共鳴しなければ、君は一匹のけだものに過ぎない。

源吉　でも、だから何うするつて譯にも行かず、これで話が大詰めなんだからつまらねえや、まるで夢を見たやうなものだ。

伊丹　それが間違つてゐる。決してまだ大詰ではない。

源吉　何うするんです。

伊丹　實行だ。實行だ。

源吉　實行つて？

伊丹　多美子孃は時々僕のアトリエ……畫室に來られるのだ。明日も來られる筈だ。で明日君は僕の家に仕事に來たまへ。僕は多美子孃に一寸留守を頼むといつて、妻と婆やを連れて三越へ出かけることにするからね。アトは君方が然るべく直接行動を採るのだ。

源吉　飛んでもねえ事をいふね伊丹さんは、それぢやまるであつしに惡いことをしろつて云はねえばかりぢやありませんか。

伊丹　『惡い事』？　何が『惡い事』だ。それが人間同志のほんとうの一致ぢやないか。そこで始めて、人間と人間とが出會ふのぢやないか。……君はそんなことで、平生何んであんな廣言を吐くのだ。何時か、殿樣が、あの大い石燈籠を二三間北の方へ移した時に、君は何と云つた『この石燈籠め、二三間歩くのに四五百圓も金を喰やがつた。こゝの殿樣のお大名旅行よりは餘つ程豪勢だ。』といつただろ。それを聽て、子爵が何んな顏をしたと思ふ。それは君の裡にある人間の聲なのだ。その人間が、多美子孃の人間と出會ふのが、何で惡い事だ。人間の皮を被つた『うそ』のけたもの共の出會ふのが善い事で、人間同士の出會ふのが惡い事か。源吉君、僕は多美子孃を殺さうとしてゐるのぢやないのだよ、生かさうとしてゐるのだよ。で君がもし人間であるならば、彼女を見殺しにすることはしまいと僕は信じてゐるのだ。イヤ、君自身もさうして人間に生きるのだ、それは大きな人間の仕事なのだ。僕は僕自身嘘の人間でありたくないと思つてゐる。がどれだけほんとうのことをしてゐるか、顧ると恥しい次第なんだ。

（源吉は伊丹の眼からホロ〳〵涙の出てゐるのを見て、悄氣たやうに俯向く。）

源吉　でもあつしは濟まねえ。

伊丹　濟まない？　何濟まないことがあるものか。

源吉　いんえあつしの方の話なんです。

伊丹　君の方の話とは？

源吉　（おど〳〵して）あつしには……伊丹さん笑つちやいけませんぜ……これでもお互に思ひ込んでゐる奴があるんですからね。

伊丹　（ハッと驚いて）それは少しも知らなんだ。それは實に何うも、……全く知らなかつた。……で、然し、それは、……その相手といふのは？

源吉　これア今まで誰れにも云つたこともねえんですがね。……なアにしみつたれた女でさア。……親方の遠縁のもので、親も兄弟も失くして親方の所へ厄介になつてゐるんですよ。何時もこのお店へ、草むしりに來てゐますさア。

伊丹　さうか。それは僕はつい氣が付かなかつた。……それは發見だね。ウンそれも實に好いことだ。有りふれたいことだ。……然しだね。それは要するに、在り來りの平凡な行動だね。敢て破壞でもなければ、從つて建設でもない。今の時代では、人間はもつと痛快な仕事をしなければならないんだ。たゞ在り來りの滿足に安定してゐてはいけないのだ。君のその草取り君とのラブも決して悲觀すべきものではない。が然し、それは餘りに容易な滿足だ。もつと世間に對して目に物見せる行ひが、今の時代には肝要なのだ。誰れでも、それをしたものが、それだけ世の中を救ふ仕事をしてゐるといふ事になる。さうしてそこに現代人の犧牲があり、滿足があるのだよね。君、僕は決して、惡い事を君に勸めてゐるのぢやないんだよ。たゞね、これだけは是非君に考へて貰ひたいんだ。何うか、その君の餘りにありふれた滿足をすてゝ、も少し時代に觸れた、さうしてもつと意味の多い滿足……大きな犧牲だ、確かに犧牲だ、……然し滿足だ……その滿足を取つて貰ひたいんだ。僕は多美子孃の胸の裡を察し、さうして彼女の目下の心持を想ふと、堪らないのだ。頼む、是非でも……君にとつてそれは何んな犧牲であつても……是非彼女を今の生活から救ひ出して、自覺の人間か經驗しなければならない人間苦を彼女に味はせたいのだ。君にも味はせたいのだ。平たくいへば、君方二人に、人間らしい苦しみをさせたいのだ。それが二人を救ふことなのだ。さうして社會を救ふ事なのだ。

源吉　（考へ込みながら）でもあんまり不人情だからなア。

伊丹　不人情？　草取り君に對してか。……さう……然しだ。今の我々は人情とか不人情とかいふ以上の仕事をしなければならないのだよ。無論人情に外れるといふことは好ましい事ではないサ。然しだ、昔から社會人道の爲め、言ひ換へると、大きい人情の爲めに、不人情を忍んだ人が澤山にあるぢやないか。その苦しみも亦人情の行き止りなのだよ。

（源吉は茫乎として考へ込む。）

伊丹　ね君、明日僕の方へ仕事に來てくれ給へ。たゞさうしてくれさへすれば好いのだ。アトは自然がやつてくれる。……ね來てくれたまへ。

（伊丹は立ち上つて源吉の肩を叩きながら、その顏を覗き込んで、頻に促す。源吉一寸諾く。）

伊丹　來てくれるね。確かに來てくれるね。アヽ有りがたい。さうして多美子孃の手を取つてやつてくれたまへ。僕は嬉しい。生れて初めて人間らしい仕事をしたといふ氣がする。こんな事なんぞは何んだ、しようことなしの自慰に過ぎないんだ。源吉君、僕は君に感謝する。

（伊丹は頻りに涙を拭ふ。源吉は、考へ込んだまゝ立ち上る。）

女中の聲　（蔭で）源さんお茶ですよ――。

源吉　…………。

女中の聲　源さ――ん。

源吉　ハーイ、只今參ります。

（源吉は、ぼんやり俯向きながら退場。）

伊丹　ア、愉快だ。僕も始めて生きた仕事をした。今度は明日確かに來る。これは自然の手に委ねて可なりだ。アア理想は實現する。彼等は苦しむだらう。然し彼等は幸福だ。……これで僕は又新しいインスピレーションを獲る。好い畫が澤山出來るぞ。

（伊丹はパレットを拾ひあげて、カンバスに向ふ。女の啜り泣く聲聞ゆ。）

伊丹　ハテナ、女の泣いてゐるやうな聲が聽えるぞ。

（伊丹そこらを見廻しながら下手の傾斜を下りて退場。）

伊丹　（蔭で）何處か惡いのか。さうぢやない？

（すゞと草取娘おうめ（十八九歳、つゝましい、やゝ田舍じみた娘）の背を叩くやうにしながら登場。）

伊丹　あんな所で泣いてたつて仕方がない。マアそこへかけ給へ。……何うしたの？　誰れかと喧嘩でもしたかね。

（娘はたゞ泣いてゐる。伊丹、途方にくれる。）

伊丹　一體君は……。

（伊丹急に思ひ當つた心持。驚いたやうに立ち上つて女の顏を覗き込む。）

伊丹　ア、君は何ぢやないか、源吉君の親方の所にゐる娘さんぢやないかね。

（娘泣いたまゝ頷く。）

伊丹　矢張りさうだつたか。で何で泣いてゐる……。

伊丹　（ワクワクしながら、キヨロキヨロ曲者らを見廻して）で何だね、今の僕と源吉君の話を聽いてしまつたのだね。

（娘一層烈しく咽び泣く。）

伊丹　何うも困つたことになつた。すつかり聽かれてしまつたんだ。一體君はあんた所に居るといふ法はない。あすこにはちつとも草なんか生えてやしないぢやないか。……だが然し、そんなことを云つたつて仕方がない。……君は聽いたんだね、僕等の話を。困つたなア。確かに聽いたね。確實に聽いたんだね。

（娘は愈々高い聲で泣く。）

伊丹　これさ、さう泣いてばかり居ても話が出來ない。それに無理はないさ。然し、僕等も決して君を惜んだ譯でも嫌つた譯でもないんだからね。全くヨリ大なる理想のためなんだからね。

（娘は益々泣きじやくる。）

伊丹　何うも困つたね。……君には何ださうだね。お父さんもお母さんも無いんだつてね。氣の毒な事だ。で、親方の遠縁ださうだね。

（娘は默つて首を振る。）

伊丹　さうぢやないつて、それは可笑しい、源吉君はさう云つてゐたがな。

（娘漸く顔にあてゝゐた手を片手だけ離して。）

娘　親方は、私がみなし子だと思つて皆に馬鹿にするといけないから、遠縁のものだつて云つてゐるんです。

伊丹　（幾度も諾いて、）何うも親方は感心な人だね。で何ういふ因縁で君を養つてゐるんだね。

娘　昔親方が若い頃少しばかり私のお父さんの世話になつたことがあるつていつてるんです。でも何でもありやしないんです。たゞ親方は大變私を可愛がつて呉れてゐるのに、おかみさんがやかましいことを云ふもんだから、昔世話になつたことがあるなんて云つてゐるんです。私ちやんと知つてるんです。

伊丹　（何度も聽いて）ウー、何うも感ずべき親方だ。で君は幾歳の時から親方のとこに居るんだね。

娘　十三の時から……その時お母さんがなくなつたの。

伊丹　お父さんには小供の時に別れたんだね。お母さんは人仕事でもしてやつてゐたのかい？

（娘泣く。）

伊丹　でお母さんが死んだので、君はどうすることも出來なかつた所を、親方が君のお父さんを少しばかり知つてゐたといふので君を引取つてくれた譯なんだね。何うも君等の社會は何といつても互助的だ。實に話だけ聽いても氣持の好いことだ。[illegible]い〳〵お喰ふや喰はずで居ながら、決して人を見殺しにしないのだ。彼等は、皆幾分か、人間らしいものを失はずにしつかり抱へてゐる。ほんとうのものが少しばかりでも殘つてゐるのはたゞ彼等の社會だけだ。ア、美しいことだ。ア、有り難いことだ。

伊丹　（頻りに涙をふきながら、）で源吉君とは何時頃からの知り合ひだい。アノ子供のうちからの仲好しなのかい。で嬉しい約束をしたのは？

娘　………。

伊丹　マア好いや。……それは確かに事實なんだね。さうして立派な事實なのだ。大變いゝことなのだ。尊いことなのだ。

娘　源さんがいろ〳〵私のことを親切にしてくれて、……私がおかみさんに叱かられて泣いてゐると、源さんは何時でも……。

伊丹　ウン、ウン、尊い事だ、ありがたい事だ。

娘　私はもう世の中に頼りといつたら親方だけですのに、親方はもう大變年をとつて……私源さんに、見棄てられたら……。

伊丹　サアそこだ。世の中はたゞ喰つて行ければ好いといふものではない。生命は別だ。親方は君を喰はしてくれるだらう。然し源吉君は、君に生命を與へてゐるのだ。源吉君を失ふことは生命を失ふ事なんだ。

娘　ですのに、先刻あなたが源さんにあんなことを云つて……私いつそ死んでしまはうと……。

伊丹　マ、マアさう、下手な小說のやうに、性急に君の運命を片付けてしまふには及ばない。僕は如何にも先刻源吉君にあんなことを云つた。然しだ……確かにあゝは云つたが然しだ……。

娘　けど私又さう思ひましたの。源さんだつて乞食同樣の私のやうなものを手足纏ひにしてゐるよりも、此方のお孃さんのやうな方に思はれゝば何んなに仕合せか知れないから、いつそ私は……いつそ私は……思ひ切つて、……それが源さんの仕合せになることなら……私はもう思ひ切つて……。

（娘咽び泣く。）

伊丹　ムウ、ムウ……。

（伊丹ホロ／＼と止め度なく涙をこぼす。娘泣きながら。）

娘　私は、このまゝ何處かへ行つてしまつて、……何うせ元の乞食になるまでのことですから……。

伊丹　コレ、さう悲しいことをいつてくれては困る。……君は實に純だ。何といふ尊いことをいつてくれたらう。僕は今まで君のやうな女らしい女の人に出喰はしたことはない。人は君を弱い女といふだらう。然しその弱い君に誰れが勝つことが出來る。弱い女ほど、強い人間はない。ア、僕は全く打ちのめされたやうな氣がしてゐる。……然し君、決してそんな悲觀する必要はない。源吉君は何處までも君のものでなくてはならない。君は源吉君を奪はれなければならないわけはちつともないのだよ。確かり捉へてゐて好いのだ。源吉君も君を棄てることは出來ない。

娘　でもさつき、あなたは源さんにあんなことを仰つてたぢやありませんか。

伊丹　それは云つた。確かに云つたが、然しだ……然しだ……。アもう僕は正直に云つてしまふ……君、僕は全くあんなことを云つたに違ひないのだ。がそれは僕が君といふ尊い人のゐるのを全く知らなかつたからだ。たゞ一箇の平凡な婦人が源吉君を束縛してゐるんだと思つたから、そんなものは棄てゝも好い、ヨリ大い立派なものを撰べと云つたのだ。君を見て、君の心持を知つてから、

僕は全く後悔してゐるのだ。で今まで、何とかして、源吉君にあんなことを云つたのを正しい事のやうにごまかさうと思つてゐたが、それは我れながら忌ま〳〵しい醜態たつたのだ。僕は今まで自分をそれほどきたない人間とは思つてゐなかつたが、矢張り駄目だ。エ、忌ま〳〵しい。僕は君に對して恥ぢ入る。源吉君にも濟まないことをした。

娘　でもお孃さまも、源さんのことをそれほど思つて下さるのに……。

伊丹　いや君として、それを考へてくれるといふ心持は實に嬉しいことだ。然しそんなことを君がいふのは、餘りに卑屈だ。自分をへり下つてゐるやうだが、實は自分を奴隷にしてゐるのだ。多賀子孃は、成る程それは氣の毒だ。然し彼女の惱みは、生活に充ち足りた人の不滿だ。徒らに上部だけが華やかに塗り立てられた生活の虚僞に對する不滿なのだ。……君にそんなことを云つたつて解るまいが……一口にいへば、彼女のは、贅澤ものが、贅澤はウソの皮でこしらへた衣裳だと悟つて、それを脱ぎ捨てて素裸の人間にならうといふのだ。君はもと〳〵、素裸の人間なのだ。それから剝ぎとられたら、自分の身の皮を剝がれる様なものだ。君は、今眞純のものだけしか持つてゐないのだ。何一つ投げすてる必要はありやしない。源吉君は、君にとつて唯一の尊い命なのだ。命を人に呉れてやる必要はない。いかにへり下つても、そんなことをする必要はない。又してはいけない。僕は、君のあることを知らなかつたのだ。知つてゝも、そんな尊いものだけしか持つてゐない婦人だとは思つてゐなかつたのだ。であんなことを云つてしまつた。頼んでもないことをした。僕は實に濟まなかつた。君、安心してくれたまへ、君……エー何さんといふ名だね　ウンおうめ……おうめさんか、ね、おうめさん、何うか安心してくれ給へ、さうして僕を許してくれたまへ。僕は今すぐと源吉君にさう云つて、さつきのことをすつかり取消しにするから。いゝ、ア、源吉君にもすまない　然しおうめさん、ほんとうに安心してくれたまへ。僕は御覽の通り、決してウソを吐かない男なんだから。

（娘淋しい笑顔を見せる。）

伊丹　ア、嬉しい、僕を許してくれたね。ぢや何うかあつちへ行つて仕事をしてくれたまへ。見つかつて問題にされるとうるさいからね。人間が背徳し合つてゐる世の中では、僕等もそんな氣兼をしない譯に行かないのだ。

（娘立ち上つてつゝましく御辭儀をして入る。）

伊丹　何といふ眞純な女性だらう。今の社會は、あゝいふ神のやうな人間を乞食にしようとしてゐる。何といふ殘

忍た社會たらう。……僕は腸が煮え返るやうだ。……それにしても、源吉君に一刻も早く取消しをしたければならない。早く戻つてくれれば好いになア。ア、僕としては近來の失敗をやつてしまつた。

(源吉登場。先刻の浮かぬ顏はやせて、何となくソハソハしてゐる。伊丹マゴノヽしながら近付いて。)

伊丹　源吉君、實は其の……君にだね……其何んだ……僕は、大に其……謝罪をしなければならないことになつたのだよ。

源吉　何んですえ。謝罪なんて、何を惡い事をしたつてんです。

伊丹　惡い事をした。確かにした。…　さつき君に云つた一件ね、多美子孃との一件だ。あれは誠に濟まないが……取り消しだ。

(源吉險しい顏になる。)

源吉　取消し?!

伊丹　さうだ誠に相濟まんが取消した。實はアレは僕の間違ひだつた。

源吉　何の間違ひだつたんです。

伊丹　いや何、その……何だ……多美子孃の考をだね、僕はだね、取り違へてだね……。

源吉　何ですつて。

(源吉青くなつて伊丹に迫る。伊丹タヂ〱とアト退りして。)

伊丹　イヤそれは間違ひだ。いや嘘だ、多美子孃の考云々に間違ひ……ではない嘘で……それは僕がつい云ひ損つたのだ、實は多美子孃についてさつき云つたことは、すべて確かで、決して間違ひではないのだ……。

源吉　何を云つてるんです。はつきりと云つてご覽なさい、はつきり。

伊丹　はつきりいふよ。はつきりと云へば、即ちあの僕の家で會見云々は一先づ取消し……。

源吉　オイ〱伊丹先生、あんたはあつしを玩弄にする氣だね。

伊丹　と何うして、決してそんなことはない。すべて眞劍だ。さつきも眞劍なら、今も眞劍だ。

源吉　人を馬鹿にしちや困りますぜ。その眞劍が何うして取消しなんです。

伊丹　マアさう興奮しないで聽いてくれたまへ。實は今、君のおうめさんに逢つたんだ。

源吉　おうめツ子が何うしたつてんです。そんなことは夙うにおめえさんにこてえてあるぢやありませんか。それだからあつしは考へちやつたのに、おめえさんが何のかの云つて、あつしを納得させたんぢやありませんか。あつ

しは今だつておうめツ子のことをも、たしかだ、けどおめえさんのいふのも理窟だし、あつしだつて凡夫の人間だから、うめえ話には一やまかけて見てえ氣になるぢやありませんか。こいつはおめえさんのいふ通り命がけの仕事だが、そこが又面白れえと斯う思つて、すつかり腹を据ゑにしまつたんだ。何んでえ、それを來て見りや『今のは取消しだ』たア何のこつたい。人を馬鹿にするにも程があら。

伊丹　君のいふことは皆道理だ。尤も千萬だ。僕は一言もない。おうめさんに逢つて、あの純な姿を見てだね……純な心持を聴いて見るとだね！　僕も人間だ、もうすつかり參つてしまつたんだ。僕は君に惡い事を云つたとつくづく後悔したんだ。何うか君、許してくれたまへ。

源吉　おめえさんて人は随分薄情なことを勝手にペラペラしやべる人だね。だからあつしはさつきそんな『惡い事』はよしねえと云つた時に、おめえさんは何と云ひなすつた。『惡い事』てえのはあの手合への嘘のつき合ひのことだ。此方のすることは互角の『善い事』だつて云ひなすつたぢやねえか。だからあつしはほんとに命がけになつたんですぜ。命がけになれば『おうめツ子の一人や二人が何んだ』つて氣になるんだ。それを今になつておうめツ子が可哀相だなんて、人を蒟蒻か、煮たりさましたり、人を賣れ殘りのおでんだと思つてゐるから。あつしはもう腹をきめてやつたからね。邪が非でも明日はおめえさん所へ出掛けて行くからさう思つてなせえ。萬が一約束を違へたらたゞは置かねえから。あつしはぐづぐづ文句をいふのは嫌えな人間なんだ、すぐと片をつけつちやふからね。へン馬鹿にしてやがら。

伊丹　そ、それは困る。源吉君、僕はもう全く降服してゐるぢやないか。穴があれば入りたいと思つてゐるんだ。然し君おうめさんのあの心持を知つてゐながらそれを捨てるなんて、そんな不人情な眞似が……。

源吉　おいおい先生、頼みますぜ。今のさつき、おめえさんは何と云つたい。あつしがおうめツ子にそんな不人情は出來ねえといつたらあんたは、人情なんて小さなことだ、俺達の仕事は人情以上の大い仕事だ、だから命懸けなんだつて云つたぢやねえか。豪傑ぶるにも程があらア。

伊丹　それは云つたサ。然しだよ、それは程度の問題で……イヤ程度ではない……本質的に場合が違ふよ。人情といつてもさう一概に……ことに普通人情と稱するものには極めて愚劣な、卑怯未練な……。

源吉　何をぐづぐづ云つてやがるんでえ。あつしは何うしても行きますよ。誰れが何と云つても、一旦命がけの腹を据ゑちやつたんだ。おめえさんが泣いたつて怒つたつて

て、そんなことは此方の知つたことぢやねえんだ。

伊丹　これ源吉君、僕がこれほどまでに云つても、君は許しても聽いてもくれないのか。情ない男だ。僕の胸を割つて見せたら、君はそんな亂暴なことをいつたのを乾度後悔するよ。全くおうめさんの涙が、僕を改宗させた心理を、僕は口では說明が出來ない。然しそれは全く事實だから仕方がない。僕は生來嘘のいへない男だといふことは君も知つてゐるぢやないか。明日は見合してくれたまへ。ね君、拜む。僕は未だ嘗つて、人に手を合はして物を賴んだことなんかない人間だが、今日だけは全く節を屈して君に嘆願する。

源吉　（堪らなく屈辱を感じたやうな顏になつて）ハ、ア讀めたぞ。おめえさんは何んだな。こゝのお孃さんに賴まれて、此のあつしをお孃さんの慰み物にさせようとしたんだナ。それでおうめツ子に泣かれたんで、氣が弱くなつて、急に取消しだなんて云ひなさるんだらう。さう だ／＼、それに間違えねえ。此頃の華族や金持のお孃さんにア、そんなのが澤山あると聽いちやゐたが、自分にお鉢が廻つて來ると、此方に自惚れがあるんで、つひに氣がつかずに乘せられちやつたんだ。忌め／＼しい。何うしてくれよう。俺ら生れてこんな忌め／＼しい目に逢つたことはねえ、オイ先生、おめえさんは矢張り見かけ通りの野幇間だつたんだね。さうだらう。でなけれア大の男が、ブルと同じに、華族のお剩りをいたゞいて、クルクルお廻りなんかしてゐられる理窟はねえや。

伊丹　やい源吉、僕は此度ばかりは自分が失敗つたと思ふから、下から出てあやまり閉口してゐれば好い氣になりやがつて、何を云ひ出すのだ。僕等の心中が、貴樣達のやうな無自覺なけだものにわかつてたまるものか。俺達はナ、貴樣等のやうなけだものに人間並の魂と生活を授けてやらうと思つて、こんなに苦しみ悶えてゐるのだ。

源吉　大きなことをぬかすない。小遣錢まで人から授かつてゐる人間が、人にものを授けるが聞いて呆れらア。何方がけだものだか、裏へ行つてブルに聽いて來るが好いや。

伊丹　馬鹿野郎、默れ。無智蒙昧のけだものでなければ唯は置かねえんだ。

源吉　何だと、只は置かねえたア此方がいふことだ。人を華族樣の馬鹿娘の慰み物にしようとしやがつて……

伊丹　（堪へかねて）默れといふに、まだそれを云ふか。

（と小さな身體を慄はせて源吉に武者ぶりつく。源吉は、大きく拳固で橫に拂ふと、伊丹の身體は二三間ケシ飛んで、地上にへたばる。）

源吉　ざまア見やがれ。

（伊丹は倒れながら頭だけ擡げて苦しい聲で。）

伊丹　貴様は、自分達の救ひの神を抛げ飛ばして威張つてゐるんだ。情けないけだものだ。

源吉　またけだものと抜かすか。抛げ飛ばされて足りなきア蹴飛ばしてやるぞ。

（源吉蹴り寄つて蹴飛ばさうとすると。）

早見子爵　（慌てて）コラ源吉、鎮まれッ。

（源吉ハッと立止る。早見子爵と多美子孃と霞町の若様とが執事を從へて登場。執事は源吉を抑へる。）

子爵　源吉、何でそんな手荒い眞似をする。伊丹君も源吉なんぞを相手にして、一體何うしたんだ。

伊丹　（痛たさうに立ち上つてヒョロ／＼しながら）いや何んでもないんです。私が一寸悪る口を聴いたんで……いや・一寸悪かつたんです。

子爵　源吉、伊丹君が悪る口をきいた位で、そんな亂暴をするといふ法があるか。謝罪しなさい。あやまりなさい。伊丹先生に。

源吉　あつしは謝ることなんかないんです。向ふが散ざばら人を馬鹿にして、揚句にあつしに武者振りついて來たから張り倒したんでさア。

子爵　亂暴にしたとは一體何をしたのだ。

伊丹　いやそれは何でもないんです。つまらないことなんです。

源吉　何がつまらないことなんだ。此方は命がけの腹をきめたんだ。

伊丹　さアそこだよ。だから僕が悪いと云つてるぢやないか。

源吉　ウッフ。おめえさん達ちや豪ら相な口を利いてゐるが、そんなに殿様が怖つかねえのかい。

伊丹　怖くはないさ。いや怖いさ場合によつてはだ。然しそんなことは何うでも好い。マア和解しよう。

源吉　だから呆れた野幇間だつてんだ。一生涯嘘をついたことは只の一遍もないなんて大きな口をきいて、今のそのざまは、それア何です。あつしが見たとこぢや嘘つきそつくりだがネ、おめえさんの國ぢやそれを正直者てますかい。

伊丹　（決心して）ム、源吉君、僕は嘘ばかりは吐きたくない。もう決心した。（子爵に）閣下。僕は、實をいふと、先刻源吉君と相談して、閣下の尊嚴を汚し、且つ確かに早見家の秩序を破壊する仕事を企てたんです。

（子爵は驚いて只眼を瞬つて伊丹を見る。）

伊丹　それはです。僕は平生から、そこにおいでの多美子孃が、貴族生活の虚僞と彼等の頽廢した道徳とに良心の苦悩を感じて、遂にそれから人間の愛を求める様子なの

たことを感知しましたんで、その、令嬢のローマンスのヒーローであるに違ひないところの源吉君に、明日僕のアトリエで多美子嬢と會見することをすゝめて、その手筈をきめたのです。

子爵　（微に慄へた聲で）そ、それは何の意味だ。

伊丹　つまり眞純な愛の成立の爲めにです。

子爵　（怒りに慄へた聲で）何だ、それは媾曳ではないか。

伊丹　如何にも、古い言葉でいふと媾曳です。

子爵　新しい言葉で云つたつて媾曳だ。實に怪しからん。（多美子に）これ多美子、お前はそれを承知したのか。

多美子　（細い慄へ聲で）いゝえちつとも……明日は伊丹さんが私の肖像を描く日なんですから私は行くことにしてゐたんです。

子爵　さうだらう。二人とも何といふ奴等だ。殊に伊丹は忘恩も甚しい。飼犬に手を噛まれるとは此事だ。

源吉　それ先生、殿樣が飼犬だつて云つてゐるぢやねえか。

伊丹　馬鹿は馬鹿相應のことをいふものだ。僕は今日限り、早見家の保護を拒絶する。

子爵　誰れが貴樣のやうな無法者を保護するか。もう二人とも一刻も邸内に置くことはならない。今すぐと出て行け。（執事に）この二人を門の外へ追ひ出せ。いふことをきかなかつたら外のものを呼んで、皆で叩き出してしまへ。

（多美子何か云ひかけようとして子爵に睨まれて默る。青い顏で慄へてゐる。）

源吉　誰れがこんな邸にゐるもんか。玩弄に困つて人間を玩弄にしようとしてやがら。

伊丹　これ源吉君、それだけは全く誤解だんだ。多美子孃を不幸な女性だと思つてくれたまへ。

源吉　往生際の惡い先生だなア、おめえさんにア罪はねえんだ。おめえさんはたゞお幇間を叩いただけなんだ。

伊丹　又幇間とぬかしたな、ウスけだもの！

（伊丹、源吉に殴りかゝる。源吉傍の畫架を振り上げて伊丹に向ふ。執事驚いて、源吉を後ろから押へて、源吉の頸を締めつける。源吉苦しがる。）

（伊丹驚いて、執事の足を持つて執事を引倒す。）

執事　これ伊丹先生、何をしなさる。

霞町の若樣　伊丹君、亂暴をするな。

（霞町の若樣、執事を助けようとして伊丹に組ついて締めつける。こんどは源吉驚いて、伊丹を助けようとして霞町の若樣に組つく。）

早見子爵　これは亂暴な奴等だ。

（子爵、堪りかねて、若樣を押へてゐる源吉に組みつく。）

（自由になつた伊丹が、子爵に組みつく。五人輪になつて組む。）

（子爵令嬢多美子と、その時蔭から出て来た草取娘おうめとが、双方から互に知らずに走り寄つてブツかり合ふ。）

――混亂の間に　幕――

喜劇

根管充塡（二幕）

人物

出島豐　齒科醫
房枝　出島の妻
河井銀　漂泊の女
源兵衞　家主
お仙　源兵衞の妻
山北　刑事
其他

場所

關西のある小都會

第一幕

貧弱な齒科醫の診療室。部屋の片隅に田舍の理髮店にあるやうな舊式な齒科用の椅子一つ、小卓子一つ、小椅子一つ、エンジン一臺、などがあり、中央に火鉢が置いてある。怪しげな口腔解剖圖がかゝつてゐる外何の裝飾もない。正面の襖は取拂はれて、玄關の三疊の間に續き、その奧の玄關の土間まで見通しで、スリ硝子の表戸が閉つてゐる。右手は茶の間へ通ずる襖。舞臺は空。正面のスリ硝子の表戸が開いて、源兵衞老人玄關の土間に現れる。

源兵衞　ご免……。誰も居らんのかいな。出島さんは居やはらんか。奧さんは居やはらんのか。わしが來たので逃げやはつたか。二人とも逃げんで一人は出て來たはれ、どつちやでもえゝがな。ハテ全くの留守かいな。用心の惡いこつちや。なんぼ流行らん齒醫者かて、ひる日中家をあけるといふ方があるかい。（上り込んで座敷をうろうろして、茶の間に入つてすぐ出て來る）居らんな。臺所の方にも居りやへん。（卓子の上を指でこすつて）こりやえらい塵や、字がかけよる。齒醫者かて醫者は醫者やないか、もちと衞生に注意せぬ事にやどもならんがな。客が來んかて道具位はあんじよして置くもんや。妻君も妻君ぢや。ハイカラの女にはどもならん。自分の鼻の上ほか掃除しよらん。（座敷の眞中に坐つて火鉢をのぞき込んで）火鉢に火も埋めてあるぢやなし、座布團一つ出て居らん。尤も座布團はないのかもわからん。これ一は家賃も入れん筈や。氣の毒やが、こつちやも氣の毒や。もう半歳にもなるが、家賃は一度入れたきりやないか。尤

もわしの方ばかりぢやない、米屋も酒屋も、もうかけ賣りせんといふ。そやろ、借りたがしやうが金を拂ふごとはせんのやから。……さてまだ戻つて來よらん、どこへ行きよつたか、のんきな人達やな。煙草など呑みたうなつたがマッチがないのかいな。（立ち上つて茶の間へ入る。）

（臺所の硝子の開く音。）

源兵衛の聲　奥さん、何處へ行つてなはつた。家を明け放しのまゝで。

房枝の聲　まあ源兵衛さんでしたの。どうもすみませんでしたこと。

（源兵衛、房枝、茶の間から現れる。）

房枝　いんえね、實はうちの人が今朝お風呂に行つたきり歸らないのでね。近所を尋ねて廻つてゐましたの。

源兵衛　出島さんが迷子になつたんか。アッハハハ。おきに歸つて來なはるやろ。

房枝　手拭とシャボンをぶら下げて出て行つたきり歸つて來ないんですものね。何處をほつつき歩いてゐるのでせう。今もあなたの所でうかゞつたら、およりしなかつたんですつてね。ほんとうに、患者でもみえたら困つてしまふわ。

源兵衛　それも何とかいふあの將棋の相手の家へでもいているんやなからうか。

房枝　いゝえあすこにも見えないの。

源兵衛　まあ案じることはない。何處へ行つたかて、大の男が家へ歸る道を忘れはしまい。時より、夜分など朝まで戻らんこともありますやろ。アッハハハ。

房枝　そんなことが出來るやうだと結構なんですけど、この頃はそれ所ですか、あなたお米櫃のガタつきで壽命をちゞめてゐるんぢやありませんか。

源兵衛　實はこつちやもやつぱり米櫃のガタつきでな。餘儀なく度々催促するやうな譯やが、何うやろか、一月分でも二月分でも入れて貰へませんやろか。

房枝　ほんとうにお爺さんには相濟まないと思つてますのよ。でもこの頃ときたらちつとも患者がありませんのでね、何うにもかうにも方法がつかないんですわ。

源兵衛　さうやろが、わし共も、もう年をとつて稼ぎは出來ず、ちつとばかりの土地や家のあがりでくらしてゐるのやさかい、あんた方から廻つてこにや、こつちやも乾上るぢやないか。おつゝけ爺さん婆さんの乾物が出來るてもんや。

房枝　ほんとうに濟みませんわね。私共もこの土地に來てこんなことにならうとは夢にも思つてゐませんでしたわ。まあこちらの御厄介になつてゐたればこそ、今日ま

でかうしてゐられんたと思ふと、何と御禮を申していゝのやら、ほんとうにありがたいと思つて居りますのよ。

源兵衛　御禮なんかいふて貰はんかて、家賃さへ入れてくんなはればこつちやも助るのや。何せ出島さんも、こちらが郷里とはいひ條、小さい頃から皆で東京へ出られてしまつて、身内も一人だつてこちらに殘つて居らんやうな譯で、知らぬ土地も同樣やと思ふと、何かにつけ面倒を見あげん事には嘸お困りやろと思うて居つたんやが、いつまで經つても同じやうなんでな、ちと考へていたゞかんければ、わし共の方もさう〳〵は續きやせん。どんなもんやろ、此月中に少し入るやうな見込はないかいな。

房枝　生憎の留守なんでね……。

源兵衛　居つたかて、同じことやらう。アツハハハ。しかしまあ戻つて見えたらよう相談してや。此月中に少しは入れて貰へんかいふて居つたつてな。いつものことやが、こんどは眞劍になつて貰はにやかなはん。おや失禮しますわ。ようい ふてや、此月中に是非いふてたてな。

（源兵衛が玄關に下りる途端に、硝子戸を開けて、背廣の山北刑事現はれる。）

山北　御免。これは源兵衛さん。今一寸あんたのところに寄つて來たのです。

源兵衛　何か用事やつたか。

山北　いや一寸こちらの奥さんに用事があるので、實は……。

（山北と源兵衛とは暫く囁き合ふ。源兵衛驚いた樣子。）

源兵衛　奥さん。この方は山北いふて、こゝの警察の方やが、少しあんたに用事がある相な。會つてやつて下され。おやわしはまた後刻參りますわ。去る

房枝　何うぞお上り。

山北　では一寸（座敷に通つて坐り、名刺を房枝の前へ置いて）私はかういふ者ですが、實はその、早速ですが、出島さんのことについて少し妙なことをお尋ねする次第で……。

房枝　只今出島は留守でございますが……。

山北　（手帳と鉛筆を手にしながら）えゝそれは承知して居ります。實はあなたに伺ひたいのです。少し變なお尋ねですが、しばらく堪へていたゞきます。えゝ、十日、さう七日の晩ですな、出島さんはその晩に何處へかお出かけになりませんでしたか。

房枝　十日？　十日と申しますと今日が十五日、十四、十三此前の土曜日になりますね、いんえ、前の土曜日には何處へもお出かけません。

山北　確かに出られませんでしたか。お思ひ違ひぢやあり

ませんね。

房枝　えゝ出島は大抵夜分に外出いたしますけれど、前の土曜日には、宅へ將棋のお友達が見えたので出ませんでした。……何かさういふことがあなたの方の問題にでもなつて居るのでございますか。

山北　えゝ、一寸警察の方に必要がありますので……しかし七日の晩にこちらの御主人に町でお目にかゝつたといふものがあるやうですが……。

房枝　それは確かにその方の思ひ違ひです。あの晩こちらに見えた方にお聞きになればおわかりになりませう。あの、何院とか申しました、■町のお寺の和尚さんでございます、夜分遅くお歸りになりました。

山北　はゝあ、あの玄璋院の住職ですか、それでは確かですな、成程。（書き留める）ではなほ一つ、やはり少し妙なお尋ねですが、十二日の晩にですね。こちらから佐野屋、あの質店ですな、あすこへ質物をうけにおいでになつたといふことですが、それは間違ひありますまいな。

房枝　（赤くなつて）え、うちで參りました。

山北　それは何ですか、少し異なお尋ねですが、その財源……と申しませうか……。

房枝　金高でございますか。

山北　いや金高ではございません、つまりその、あなたの方の融通の方法……といふやうな問題で……。

房枝　（ムッとして）一體何の必要があつてそんなことをお尋ねになるのでございます。私共が、何か警察からそんなお調べをうけるやうな悪いことでもいたしたんでございますか。

山北　いや實はあなたに警察まで來ていたゞくのですが、警察の方の好意で、なるべく世間にパッとならぬやうに、私が出たやうな譯です。

房枝　御好意かも知りませんが、いきなり私共においでになつて、質がどうの財源がどうのつて、お調べになるのは、まるで私共が贓物買ひか何かのやうぢやございませんか。

山北　それは警察としては已むを得ないのです。實はこちらの御主人は竊盜の嫌疑で今朝警察に引かれたのです。

房枝　（かつとなつて）何ですつて、出島が竊盜をしたんですつて！　あなたは氣が違つてゐるのぢやありませんか。警察でなくて氣違ひ病院からぬけ出して來た方ぢやないんですか。（身を慄はして）出島が竊盜ですつて！　あんまりです。出島が、出島が泥棒をしたんですつて！　あんまりです。何うして出島がそんな眞似をしませう、出島は立派な紳士です。出島は立派な歯科醫です。出島

は立派な學者です。出島は立派な才能と學問とをもつた堂々たる紳士です。いくら生活に困つたつて泥棒なんかする必要はありません。出島が泥棒した！　何といふ恐ろしい侮辱だらう。あゝ私は口惜しい。（身をふるはして泣く）

山北　何うか落ちついて下さい。たゞ嫌疑です。それだけです。警察でも可なり祕密に穩便に取調べを進めてゐるのです。本來ならば、あなたも警察へ引張られる所なのです。

房枝　え、警察へでも何處へでも引張られて參ります。何が好意です、何が穩便です。堂々たる紳士を泥棒呼ばりして、それで人民保護の警察だなんて威張つたつてダメです。善良な人民を泥棒呼ばりして、何が人民保護です。出島を返して下さい。すぐと返して下さい。

山北　嫌疑さへ晴れゝばすぐと返されるでせう。只今承つた所では、私一個の考としては、嫌疑はすぐ晴れ相に思はれます。では失禮します。（立ち上つて、玄關の方へ行く）

房枝　（山北を追ひかけて）私も一緒に連れて行つて下さい。私警察へ行つて出島を取り戻して來ます。出島は一刻でもそんな侮辱を忍ぶことは出來ない人間です。出島はそんな侮辱をうければ死んでしまひます。出島は死にます。（泣く）

山北　（靴をはきながら、機械的に）いや、御主人は間違ひなくすぐ戻られるでせう。たゞの嫌疑です。それも警察の好意で、出來るだけ祕密にして居ます。もしあなたまで召喚でもされたら、今頃はもう町中の評判になつてゐるでせう。

房枝　そんなこと構ひません、私は行きます、出島を取り戻しに行きます。私は行きます。

（硝子戸をあけて源兵衞現はれる。）

源兵衞　奧さん、何うしたんや。まあ靜かにしなはれ。わしも今駐在所で一寸聞いたんやが、まあゆつくり相談するさかい、警察へなんか行きなさることはやめにしなはれ。

房枝　（泣きながら）出島は死にます。出島が死ねば私たつて生きてはゐません。警察は罪もない人間を二人殺してしまひます。警察は人殺しです。人殺しです。

源兵衞　どもならん。奧さん、靜かにしなはらんか。まあこつちやへ來なはれ。（房枝を介抱して座敷に連れて來ながら）山北さん、あんた用事がすんだら早う去にたはれ。奧さんはこつちが引うけるさかいに。

（山北去る。）

源兵衞　そないに興奮しちやどもならん。今あんた山北に

どないに云やはつたか知らんが、あんじよ云やはつたんたら、山北が警察へ歸つて報告さへすれば、出島さんはすぐ戻されますやろ。何の事ありやへん。

房枝　侮辱です、恐ろしい侮辱です。警察では、私達をえたいの知れない風來人か何かのやうに思つてゐるのでせう。私達は立派な教養を持つた人間です。田舍者の郡長や署長なんか、教養の點に於ては出島の足下にも追ひつく人間ぢやありません。私達はたゞ貧乏なだけです。けど貧乏が何です。今日は人間が立派で善良であればあるほど貧乏しなければならない時代です。私達ほど教育があり學問があつて、さうして惡人だつたら、誰れでも大金持になれます。私達が立派な人間でなかつたら何で貧乏なんかしてゐるものですか。出島が泥棒なんか出來る惡人だつたら、とうに局長か重役か議員になつてゐます。こんな田舍にくすぶつて齒醫者なんてしてゐるもんですか。警察はそんな大頭には手が出せない癖に、貧乏な人民をつかまへて泥棒呼ばりをするんです。

源兵衞　警察は、この頃は、議員たら局長たらいふ連中を段々縛りよる。警察も中々やりよりますわい。出島さんの一件は、弘法も筆の誤りで、警察たつて間違ふ時にはやつぱり間違ふやらう。出島さんか警察かとにかくどつちやかて間違つたんや。

房枝　何ですつて、源兵衞さんまでそんなこと仰つしやる？　出島が何を間違つたんです。出島がいつ泥棒をするやうな間違ひを仕出かしました。あんたまで警察と一緒になつて、そんなこと仰つしやるなんてあんまりだわ。（泣く）

源兵衞　奥さん、何をいやはるのや。わしの云ひ方がわるかつたら許してんや。筆の誤りやのうて舌の誤りや。警察といふ奴は、何か事があると、ぢきに前科のある者に目をつけるでな。そいで出島さんも一寸睨らまれなさつたんやろ。

房枝　前科のある者？　出島に前科でもあるつて仰つしやるのですか。

源兵衞　アッ！　あんたそれを知りなはらんのか。

房枝　出島に前科があるのですつて？

源兵衞　そないにいふてゐました。違ひまつか？

房枝　出島が前科者?!（急にヒステリックに）嘘です。嘘です。そんなこと警察のでたらめです。出島は立派な教養のある紳士です。出島が前科者！　何といふ恐ろしい誣告でせう。嘘です、そんな事。嘘です。嘘です。嘘です。

源兵衞　それやあんたのいふ通り出島さんは前科者でないかもわからんが、しかし、學者や紳士にも、前科持ちは

澤山おますやらう。

房枝　誰が出島を前科者だなんて云つたんです。そんな失禮なことを誰が云ひました。

源兵衛　わしも、ほんいま駐在所で聞いたばつかで、嘘か本間か知らんが、警察では出島さんは、詐欺や横領で前科三犯だらいふてゐる相な。あんた全く出島さんから何にも聞いちや居らんのか？

房枝　詐欺ですつて？　横領ですつて？　前科三犯ですつて？　人を馬鹿にするにも程があります。出島にそんな事があつたら私は生きちやゐません。嘘です。嘘です。私命にかけて保證します。それは嘘です！

源兵衛　でも警察の帳面にさう載つてるゐいふから困つたもんや。嘘なら、どないかして、それを取消して貰はんことにや、これからも度々、迷惑をかけられる。

房枝　（考へ込みながら、機械的に）嘘です、嘘です。

源兵衛　（機械的に）嘘だすやろ。嘘だすやろ。

房枝　（何か思ひ當つたやうに、宙を見ながら、機械的に）嘘です。嘘です。

源兵衛　（機械的に）嘘だすやろ、嘘だすやろ。

（房枝急に顔を掩ふて泣き出す。）

源兵衛　そないに泣きやはつてもしよあたらんか。忘れとつた、わしがいま駐在所できいたことわけを話さにやならんかつた。まあ聞きたはれ。十日の晩に、あの表町の、上總屋た、あこの離れに泥棒が入つて隱居の手文庫を盗み出しよつたが、その中に三百兩たら金子が入つてゐた相な。警察では、出島さんが昨日たら一昨日たら、佐野屋からいかいこと買うけをしなはつたといふことをきゝ込んで、疑をかけたんや相な。そこはそれ前科三犯といふことがあるよつて目星をつけたのやらうが、それは嘘かいな。あんた全く出島さんから何も聞いちや居なはらんのかいな。して見ると全く嘘かいな。警察がそないにあわて臭つてはどもならんがな。

房枝　私どうしませう。（急に痙攣的に泣き出す。）

源兵衛　（驚いて）どうしなはつた？

房枝　（泣きながら）私いやです。私いやです。

源兵衛　何がいやなんや？

房枝　前科者なんか私いやです。

源兵衛　前科者がいや？　出島さんが前科者でなけにやよいやないか。

房枝　前科者なんかいやです、前科者なんかいやです。

源兵衛　出島さんが前科者やといふのかいな？

房枝　（痙攣的に）前科者なんかいやです。前科者なんかいやです。

源兵衛　（獨語）はゝあやつぱり前科者やな。（間）けど

あんた、現在眞面目に働いてさへをりや、前科者も何ンもありやせんがな。みんな同じ人間やないか。もう何にも悪いことせん人間を、前科者や前科者やいふのは、よくないこつちや。出島さんが何や知らんけど、人のことを無暗に前科者前科者いひなはんな。警察ぢやあるまいし。

房枝　それならなぜ前科者といふことを妻にまで隠すのです。何故隱してゐたのです。

源兵衞　わしは何にも知らんがな。誰が隠したといひなはるや。

房枝　出島が隱してゐたといふのです。何故自分の妻にまでそれを隱してゐなければならないのです。

源兵衞　さあ、出島さんがあんたにそれを隱してゐたにしろ、それや、わしの知つたことではないが。よしんば、隱してゐやはつたつてよいやないか。悪い云ふたかて今更らしやうもない。

房枝　何がしやうもないのです。悪いことはいつまで經つても良い事に變りやしません。私は今の今まで出島は少しも間違ひない善良な紳士だと信じてゐたのです。出島は自分を私にさう信じさせるやうに仕向けてゐたのです。それが虚僞でなくて何です。虚僞です。瞞着です。私がこんな、皮膚病にかゝつた犬見たいな人間ばかりしか居ない田舍に引込むことを承認したのも、たゞ一個の出島といふ人間を信頼してゐたからです。これからも私はその出島を信頼しなければならないのです。過去の問題ではありません。現在の問題です、將來の問題です。その出島が現に私を欺いてゐるのです。これからも欺いて行かうとしたのです。何が『今更しやうもない』のです。『もう仕方がない』なんて事は、あなた見たいにかぼちやを油紙につゝんだやうな人間になつてしまつてからいふことです。私はまだ生きてゐる人間です。生きてゐる人間は『諦める』なんて意氣地のない氣持になることは出來ません。私は生きてゐます。

源兵衞　誰もあんたを死んでゐるとはいゝませんがな。わしにはあんたのいふことはようわからんが、つまり要領はどないになるのや？

房枝　だから私はもうあんな卑劣な男に追從して行く必要を感じないのです。

源兵衞　卑劣な男とは誰のことや？

房枝　出島のことです、彼は私を欺いたのです。それとも私は彼を欺くことは出來ません。私が私の心の傷みを隱して彼にこの上追從して行けば、つまり彼を欺くことになるのです。私はすぐと東京へ歸ります。

源兵衞　それはあんた少しばかり間違つてゐやせんか。

房枝　私が何を間違つてゐます。間違つてゐるのは彼です。彼は……。

源兵衛　まあ待ちなされ。彼が……いや出島さんがあんたに前科のあることを隱してゐたのは悪いかも知らんが、然し、あんたも苟も一旦夫とかしづいたものに、前科があるからいふて、すぐと去んでしまふといふのは不人情やないかいな。あかの他人同志かて、それを知らないで長い間實ゝしうつき合つて來た以上は、それがわかつたかてすぐと、俺らもう知らぬといふ譯には行くまい。そこが人情といふものや。まして夫婦の間であつて見れば、どつちやかにさういふことがあつて、それがわかつたいふたからて、すぐとおさらばをきめるといふ法がありやすかい。まして妻たるものは常住、夫の幸福をはからにやならん人間やないか。夫がさういふ不幸な人であつたらなほの事親切にかしづいて夫を幸福にするのが法でもあり、又人情といふものや。そやないか。

房枝　妻は夫の奴隷ではありません。妻を欺いた夫に對して、妻は何うして貞淑を誓ふ必要があるのです。

源兵衛　必要不必要いふことやない、それが人情やないかといふのや。石川五衛門の女房かて、見なはれ……。

房枝　そんな、女が男の奴隷だつた時代のことは問題になりません。もしも男子が女子に、あなたのいふやうなことを要求するなら、男子自から女子に對して同様の態度を示さねばなりません。私は、出島が全くさういふ態度を示してゐる立派な男だと信じてゐたのです。然るに彼は私を裏切りました。彼は、自分といふものを私に隱蔽して置きながら、私には毛筋程も隱させまいとしたのです。何といふエゴイステイツクな男でせう。私はさういふ男に反抗することを私の主義としてゐる女です。それは私の氣儘な感情ではありません、私のプリンシプルです。彼とこの上一緒に居れば、私は自分で自分の主義を踏みにじつてゐることになります。私は戰はなければなりません。卑劣な彼などと戰ふのではありません、自分自身の弱い心と戰はなければならないのです。私は戰ひます。

源兵衛　そないな演説をしなはつても、わしのやうな老人には皆目わかりまへんがな。六つかしいことは知らんが、ともかくも出島さんとあんたとは何年か夫妻で居やはつたに違ひないやろ、そんなら夫妻の情合といふものがなけにやならぬ筈や。出島さんに前科があつたいふて、よしんば、これから先き出島さんが人殺しをしやはつたかて、そこは夫妻の情合といふもので、あんたはさういふ夫が倍常しかはいくならにやならん筈やがな。

房枝　僞はられたものに追從するなんてのは奴隷の心理で

す。今日は女だからといつて、人情なんかよりも勇氣を必要とする時代です。人情なんかに溺れてゐれば、いつまでも奴隷でゐなければなりません。

源兵衛　よくはわからんが、わしにはあんたのいふことが腑に落ちん。

房枝　わたしも、あなたのいふことが氣に入りません。

源兵衛　わしのいふことなど氣に入らんで結構やが、出島さんのことはもうちと落ちついて考へて見なはれ。いつまで云ひあつてゐたかて埒あかん。わしはこれから警察へ行つて樣子を見てくるさかい、その間に氣を落ちつけてよう考へなはれ。おつゝけ出島さんが戻つて見えた時に、あんたがそないなことといふてむづかつたら、出島さんも默つて居やはるまいし、それこそ問題や。そんなことよりも、家賃を入れる相談でもしなはれ、ほんまや。(去る)

房枝　もう決心した。あゝ私はすつかり氣が輕くなつた。さつき何うしてあんな男のためにあんなに泣いたのだらう。あんな男のために、私の眞珠のやうな偉い涙を流したのが口惜しい。噓つき！　卑怯もの！

――幕――

第二幕

同じ場所、前幕より數時間後

出島、着流して、手拭とシャボン箱を手にして玄關に現はれる。源兵衛續いて現はれる。二人座敷に來る。

出島　やれ／＼漸く無罪放免か、馬鹿々々しい。

源兵衛　でもまあほんまの泥棒が早うつかまつてよかつた。あやつが捕まらなんだら、あんたはともかくも未決までは行かにやならんかつたかも知れやせん。けんのんな話や。

出島　(茶の間をのぞいて)おい歸つたよ。何うだ此のちらかしやうは、簞笥も何もあけつ放しだ。おい房枝さん、房枝さん！

源兵衛　居なはらんのかよ。おゝこれやどうぢや、えらい取りちらしやうや。空巣狙ひでも入りよつたのやないか。

出島　(卓子の上の紙片を取り上げる。默讀)フム。

源兵衛　何やそれは。

出島　讀んで見て下さい。(紙片を源兵衛に渡す)

源兵衛　何や？(眼鏡を取り出してかける)奥さんの手やないか。えゝと『さやうなら』か。何や『さやうなら』だ。えゝ『私は歸ります。私を尋ねないで下さい。私は私の心の傷を癒やさなければなりません。私は生きなけ

れぱなりません。あなたは、あなたの胸の奧に、私より大事にひめてゐるあなたの前科を抱いて、何うぞあなたの生き得られるやうに生きて下さい』出島さん、これや一體何の事や。けつたいなことを書いたもんやな。また何かいふてある。『ではさやうなら。もう一度さやうなら、永久に。』畜生！　これ出島さん、あの女、あんたの妻君やけど、わしてんからすかんのや。亭主に前科があることわかつたいふて、すぐ『さやうなら』とは何や！『永久に』だとぬかしよる！　わりや人間かいな！

出島　（獨語のやうに）それを隱さなければお前は決して俺の所へ來やしない。それがわかると同時に『さやうなら』をいふお前だから、俺は隱したのだ。

源兵衞　出島さん、見なはれ、（茶の間をさして）空巣狙ひはあんたの妻君や。前の汽車で去によつたに違ひない。わしもぬかつた。さいぜんもな、あんたのことを嘘つきや、卑怯ものやつて、糞味噌にいふさかい、そりやいかん、あんたが間違つてゐる、人情といふものはそんなもんやない。石川五右衞門の女房かてそないにはいはなんだ、まあ落ついて考へなはれつて、わしもこん／＼いふたんやがな。とう／＼逃げよつた。こりや警察へ行かずにあんたの戻らはるまでこゝに居つたらよかつたんや。あんたには濟まんが、全くわしの手ぬかりや。

出島　いや飛んでもない。あなたは私の家内の番人でも何でもないのだから、少しもあなたの手ぬかりのことはありません。何にしても、今度は飛んだ御心配をかけて全く恐縮です。御禮の申しやうもありません。

源兵衞　いや禮などいふて貰ふことはいらん。あんたこそえらい災難や、警察へは引張られる、妻君には逃げられる。これどないしたものや。すぐ追ひかけるか、心當りに電報でもうつか、どないにかせにやなるまい。警察へいふて捕らまへて貰はうか……。

出島　いや／＼放つて置きませう。私の身體に一旦ついたシミは、拭いても洗つてももう消えやしません。しかも隨分念入りに汚れたんですからネ、アツハツハ。

源兵衞　何をいひなはる。あんたがそないなこといひよつたらどもならん。前科があらうが何ンがあらうが、今は立派な齒科醫やないか。それをとやかういふなら、前科者はどないにしたらいゝのや、やつぱり惡いことして喰つて行かにやならんやないか。

出島　さうです。悔い改めの眞似をして見ても、第一自分の女房からが承知しないのだからダメなことです。あゝあ、今日は警察と女から尊い教訓を與へられた。源兵衞さん。これでもう私はこの町に居つたつて誰一人相手にしてくれるものはありません。患者などは無論ある筈は

ない。蟲齒に喰ひ殺されたつて私の所へは來やしません。(椅子によつて) 然し、これで全く重荷が下りた。今日からは、隱したり氣取つたりする氣苦勞がなくなつたんですからね。今朝も刑事に連れられて行く途中で、もう何處かの小僧が『泥棒齒醫者』なんてからかつて居ましたよ。立派な人間ばかりゐる世の中では、惡いことをしたものは、徹底的に追求されます。つまりそんな人間は生かして置かん方がいゝのだからね。(立ち上つて歩き廻りつゝ) 然し、こつちの身になると、生きて行かねばならない。成る程僕は詐欺を働いた、横領をやつた。所が僕はちつとも得はしてゐやしない、臭い飯を喰はされただけが儲け物だつた。何かたいした儲けをしたとでも思はれたらそれこそ間尺に合はない。それで大儲けをしてゐるものもあるだらう。然し、それは僕ぢやない。そんな連中は牢屋へ入らないで、牢屋に人を入れてゐる。いはゞ僕の前科は清算済みだ。差引勘定ゼロになつてしまつてゐる。ゼロどころかマイナスが出て、贓品でもない女にまで逃げられてしまつた。(間) 一體彼等は僕を何うしようといふのだ。僕の方では彼等をどうすることも出來んのだ。彼等は、僕の將棋の駒だけは前に出られないといふ規則を作つて置いて、さうして、僕に勝負しろといふのだ。僕等は逆立したつて勝てる筈はない。それでも僕等は勝たなきやならないんだ。その時は僕等は何うすればいゝのだ。一體何うすれば僕等も彼等のやうに勝つことが出來るのだ。誰かそれが云へるなら云つてみろ!

源兵衞　君方はよう演說をする夫婦やた。

出島　ねえ、源兵衞さん。上總屋は、隱居の臍くり位盜まれたつて、象が蚊に止まられたやうなものだが、盜んだ方では、それで人間一人餓ゑ死を助からうといふんですよ。

源兵衞　まあそない理窟かいな。それはよいが、あんたまあ着物でも着更へて、いつものやうに齒醫者らしうなつたらどうや。妻君は居らんでも、患者は來る。

出島　何が來るもんですか。それに先達時計を賣つて受出した洋服も着物も、皆質屋に逆戻りしてゐますよ。

源兵衞　あんたの洋服まで空巢狙ひが持ていんだか。いよいよ家賃は貰へんことになつた。

出島　源兵衞さんには全くお氣の毒です。わたしももうこの土地に居る必要もありませんから、なけなしの道具を皆賣り拂つて少しでも家賃を入れて置きます。

源兵衞　いや、わしも家賃は欲しいが、あんたの災難を見てゐて『家賃をくれ』とも云へやへんがな。わしの災難も災難やが、わしの災難は高が知れとる。空巢狙ひも家はよう

持つちや行かん。

出島　女といふ空巢狙ひは、自分で自分を持つて逃げます。

源兵衛　アッハッハ、そないもんかい。女といふ奴は、足腰が利かなくならにや本心に立ち歸りよらん、『七人の子はなすとも女に心を許すな』といふてな、女は魔ものや。わしの婆さんだつて相當魔ものだつたんやすぜ。そないことはどうでもよいが、あんた夕飯をどないする？　今晚は、さしむきわしの所から持て來ることにしようか。何せ一軒の家には魔物が一匹だけは居らんとどもならん。とにかくわし家へ歸つて婆さんに相談するわ。

出島　家賃も拂はない上に、そんな御世話にまでなつて全く濟みません。

源兵衛　家賃が拂へるやうなあんたなら、わしは世話など燒きやせん。まあ短氣を起さんとな、ようう思案しなはれ。この土地かてさう見棄てたものでもないやろ。（去る）

出島　あの爺さんでも居なかつた日には慘じめ見るとこだ。あゝあ。いやになつた。突つ立つてゐるのも馬鹿馬鹿しい氣がする、（大の字に寢る）息をしてゐると損をするやうな氣がする、（起き上つて）寢てゐると、生きてゐちやいけないやうな氣がする。けんのんく、（立ち上つて歩き廻る）フン『ではさやうなら』か、『もう一度さやうなら』か、『永久に』だつて?!　人を馬鹿にしてゐやがら。尤も馬鹿にされる値打がないでもないがね。こつちも多少向ふを馬鹿にしてゐなかつた譯でもないんだからな。最初はさうでもなかつたんだが、段々こんな風になつた。お互に、かも知れない。つまり兩方とも地金が出たんだ。てんから地金で行けばいゝんだ。それを兩方共空想の男と女を捉へてゐたんだ。だがてんから地金で行つたら二人は他人だ。影法師が今消えてなくなつたので、二人は他人に返つたんだ。一體こんな面倒臭いことを、俺達は何度繰返へさなければならないのだ。馬鹿馬鹿しい。もうやめだ。全く止めだ！

（硝子戸を開けてお銀現はれる。）

お銀　（ハンケチで片頰を押へながら）御免下さい。

出島　ハイ、何の御用ですか。

お銀　あの、齒の御療治をしていたゞきたいんでござんすが……。

出島　齒の療治？

お銀　あの、こちらは齒醫者さんでおいでなんぢやございませんか？

出島　えゝさうです……今一寸誰も居らんので……。

お銀　あの、先生はお留守で？

出島　いや先生は僕ですが、その、助手が居らんので……然し治療はします、上つてこの椅子にかけて下さい。す

ぐやります。（茶の間に入つて、白い仕事服を着て出て
來る）
お銀　昨晩から急に痛み出しまして、居ても立つても居ら
れないやうに痛みつゞけでございます。
出島　（口内を檢しながら）何、すぐ癒ります。今すぐ神
經をとることも出來ますが、藥を入れて二三日後にして
もいゝです。
お銀　なるべく早く痛みの止るやうに願ひます。
出島　一つは局部麻醉をやつて神經をとつてしまひませう。
（注射をしたり、エンジンを踏んだり、治療に忙しい）
お銀　（飛び上つて）あ痛た。（口にハンケチをあてゝ）あ
らこんなに血が出ましたわ。
出島　今一寸機械が外づれたんで……血止をつければすぐ
止まります。どうぞおかけ。（治療）
出島　すみました。神經をとつてしまつたからもう大丈夫
です。あとは一日二日してセメンで埋めればよろしい。
お銀　（立ち上つて）どうもありがたうござんした。では
あの又明日來ることに……。
出島　私共では一回々々治療代をいたゞくことになつて居
ります……。
お銀　あらさうでしたか……あのおいくら……。
出島　二圓いたゞきます。局部麻醉をしたので少し高くな
つてゐます。
お銀　（もぢ／＼して）誠にすみませんけど、お鳥目が少
し足りませんので、明日お一緒にお願ひいたすわけに參
りませんでせうか？
出島　えゝよろしいです。（紙と鉛筆をもつて）一寸御名
前と年齢とお所を伺ひます。お姓名は？
お銀　あのや……やま、山岸……。
出島　山岸、ハア、お名前は？
お銀　し、しん……。
出島　ぎんですか。
お銀　いゝえ、しん。
出島　しゆんですか。
お銀　えゝしゆんです。
出島　しゆん。お歳は？
お銀　二十三。
出島　二十三。お所は？
お銀　所はあの、何の、あの、表ちやうでございます。
出島　表まちですか。何丁目？
お銀　三丁目……。
出島　表町は二丁目しかありませんが……。
お銀　さう／＼私、二丁目でござんした。
出島　表町二丁目。番地は？

お銀　二十三番地。

出島　二十三番地？　さうするとあなたあの薬屋においでなんですか。旭堂に？

お銀　え、その旭堂に居るんでございます。

出島　あゝさうでしたか。何うやら東京の方のやうだが、旭堂の御身うちでゝも……？

お銀　えゝ、東京でございますが、一寸あすこに厄介になつて……。

出島　さうでしたか。いやあすこは私共でも始終薬を貰つてゐる店で……いや何うもお恥しい話ですが、大分支拂もたまつてゐます。アッハッハ。（間）ぢやいつそあなたにお願ひしませうか。實はあの店から十五日に、つまり今日ですね、勘定をとりに來る事になつてゐるのですが、お歸りになつたら一つ、今日は御覧の通り取り込んでゐて都合がわるいから此晦日にしていたゞきたいといふことを仰つて下さいませんか。實際變なお頼みをしてすみませんが、お互に手數が省けますから。

（硝子戸をあけて、旭堂の半纏を着た若者現はれる。）

旭堂　今日は。

出島　おゝ噂をすれば蔭だ。今日はだめだよ君、實は少し取り込みがあるんでね。それで今、（女に）あなた何とか仰つしやいましたね、さう山岸さん、（旭堂へ）この山岸さんに……君の所に居られる御婦人だ……その傳言を御頼みして居た所なんだ。つまり此三十日にして貰ひたいつてね。

（旭堂お銀を見て怪訝な顔をする。電燈がつく。お銀顔をそ向ける。）

出島　この御婦人だ、君知つてゐるだらう。

旭堂　いんえ。

出島　何、知らん？

お銀　あの、實はこれから參ります所なんで……。

出島　（お銀をジロ〳〵見て、諾く）いやこれから行かれる所なんだ。君のとこの主人公のお身内でね。まあいゝや、とにかく此の御婦人にも話したんだが、晦日にしてくれ給ひ。

旭堂　どうも先生は困らせるな。私店へ歸つていつも叱られるんですよ。

出島　アッハハハ。それは氣の毒だな。然し今日は、此の御婦人が行つてよくお話をするからといつたら大丈夫叱られないよ。叱られたつて、君の叱られるのは、僕はいくらでも我慢する。

旭堂　アッハハハ。先生に逢つちや叶はない。ほんまに今日はダメなんですか。

出島　ほんまにダメだ。歸つたり〳〵。又將棋で敗かしに

行くつて主人公に云つてくれたまへ。

旭堂　晦日にも屹度ダメだらうな。

出島　君は祭しがいゝ。將來えらいものになる。

旭堂　あほらしい！　左樣なら。（歸る）

出島　（小椅子にかけて）はゝあ、あなたも東京ですか。この邊では東京の人が少いので懷しいです。

お銀　ではまた明日參ります。（お辭儀をして行きかける）

出島　一寸お待ち……これから旭堂へ行かれるのですね。當分あすこにおいでといふ譯ですか。

お銀　えゝ……。

出島　あなたは旭堂の妻君の御身内なんですか、あの先達たくなつた妻君の？

お銀　えゝ……。

出島　妻君も氣の毒なことをしましたな。あなたは何に當たられるのですか。

お銀　あの……姪でございます。

出島　ハ、アさうですか。……ではさやうなら。

（お銀お辭儀をして出て行きかける。）

出島　アツハツハツハ……。

（お銀びつくりして立ち止る。）

出島　とう／＼化けの皮を現はしたね。君、旭堂の妻君は亡くなりやせんよ。ぴん／＼してゐるぜ、可哀相に。さうして君よりもずつと若くて、向ふが姪の筈だ。

お銀　（一寸どぎまぎしたが、すぐ立ち直つて）ホッホッホ、とう／＼ばれちやつた。

出島　ウン、中々いゝ度胸だ。（間）一體君は何うした女なんだ。どうして僕のやうな貧乏齒醫者を踏み倒さうとしたのかね。

お銀　でもわたしこれで文なしなのですもの。

出島　成る程。（間）何うして文なしなんかになつたのかね。さうして何處から來たのかね。これから何處へ行かうといふのかね。

お銀　そんなに一時に聞かれたつて返事が出來ないぢやありませんか。

出島　參つた。ぢや先づ、何處から來たのかね。

お銀　刑務所。

出島　『刑務所』なんて、生意氣な云ひ方をするな。で何處へ行くの？

お銀　刑務所。

出島　こいつはどうも。で刑務所行きの原因は何だつたね。

お銀　大てい解つてゐるぢやないの。

出島　どうもこれはヘッポコ齒醫者の掟には合はんわい。でそれは大てい解つてゐなくもないが、どの位居た？

お銀　三月と二年と二度。

出島　振つてゐるな。解つてゐる原因にしては少し長過ぎるぢやないか。
お銀　（人差指で鍵をこしらへて見せて）二度目はこれも手傳つたんでね。
出島　益々痛快だね。何うしてね。生れつきかい？
お銀　まさか！　お客のを一寸失敬しちやつたの。でもつまらなかつたわ、ちつとも使はないうちにこれなんですもの。（兩手を後に廻して見せる）
出島　何うだか。然し君の話はてきぱきしてゐて氣持がいい。ちつとも噓がないといふ氣がする。がそれだけ居たたらちつとは工錢位あつたらうに。
お銀　それはちつとばかり有りましたけれど、何しろどこへ行つても前科者で構つてくれず、隱して行つても、知れゝばすぐお拂箱ですもの。とう〳〵すつてん〳〵になつてしまつて、こんな地獄の一丁目みたいな田舍へころげ込んだのですけど、やつぱりこゝも日本ですわ。
出島　『日本です』はよかつたね。ぢやシンガポールへでも行くか。
お銀　それに如才があるもんですか。
出島　ぢやもう出かけたといふのか。これは何うも、流石の我輩も白旗を揭げる。（立ち上つて）君、本名は何といふのかね。僕を信じて聽かして貰へんかね。

お銀　大層六かしいのね、なんでもないわ、河井銀。
出島　河井銀。お銀さんかね。僕は出島豐といふのだ。でゐて極端の貧乏なのだ。（間）然し、文なしで、旭堂の身內でないとすると、實際の話、これから何處へ行く？
お銀　足の向いた方。
出島　今までは何處で泊つてゐた？
お銀　桂庵たの安宿たの。文なしになつたのでたつた今追ひ出されのほや〳〵よ。
出島　今夜は何處へ寢る？
お銀　こゝへ寢ちやいけない？
出島　さう。萬更らいかんこともない。
お銀　あなた獨り者ぢやない？
出島　僕もたつた今一人者になりたてのほや〳〵だ。
お銀　奧さんがあるのね。痴話喧嘩でせう。
出島　いやもう少し根柢はあるが……たつた今逃げられたのだ。
お銀　逃げられたの？　何うしたの？
出島　僕が前科者だといふことを知つたといふのでね。
お銀　（ムッとして）あなたが前科者？　人を馬鹿にしてゐるよ。何が面白くつて人を玩弄物にするんだい。どいつもこいつもこつちをけだ物か玩弄物だと思つてやがら。人間扱ひにする奴は一人もありやしない。勝手にし

ろい！（行きかける）
出島　待ち給へ。一寸これを見てくれ給へ。（紙片を渡さうとする）
お銀（一寸見て）何ですこんな陳芬漢芬。見たつてわかるもんか。
出島　僕の嬶……ぢやない、ついさつきまで嬶だつた女の置手紙だ。『お前を前科者だといふことを知つたから、もう永久にさやうならだ』と書いてあるのだ。
お銀　ぢやあなたの前科者といふのはやつぱりほんとうの話なの？
出島　無論さ。君が僕にほんとうのことを云つてゐるのに、僕が何うして君に嘘が云へる。
お銀　ほんとうだつたの？　ぢや私すまなかつたわね。今私何か大變わるいことをいつちやつたわ。御免なさい。
出島　あやまることがあるもんか。で此手紙にある通り、僕の嬶はたつた今、僕が前科者といふことを知つて永久にさやうならをきめたのだ。
お銀　ずゐぶん高慢ちきな奥さんね。
出島　高慢ちき？
お銀　でも自分だつていつ何時前科者にならないとは限らないぢやないの、人間だもの。
出島（眞面目に）ウム……。

お銀　でもあなたほんとうにお氣の毒ね。どうにかして捻りが戻せないの？
出島　全くダメだ。それに僕等の嬶としては適任の女ぢやない。何しろ、一日物の喰へない日でもあると、もうすぐ死んでしまふやうな騒ぎをする女たんだからね。高慢なことをいふが、やつぱり男に放り出されると生きて行かれないといふ女の仲間に過ぎないのだ。僕も、居なくなつて肩が輕くなつた處だ。
お銀　ぢやあなた今日から一人ぽつちね。ぢや私こゝへ泊つてもいゝぢやないの？
出島　それはいゝさ、然し實はもう全く喰ふ道がなくなつてしまつたのだ。喰ふ道がなくなつたならいゝが、食ふ物がなくなつた。夜逃げをする兵糧さへなくなつてしまつた。といつてこゝにも居られないから、こゝにある物を屑屋へ賣つてすぐにも立ち退かうとしてゐる所なのだ。
お銀　私も一緒に連れて逃げて頂戴な。精々邪魔にならないやうにするわ。
出島　何しろ自分の身體一つを持ち扱つてゐるのだからね。さうかといつて明日から泥棒稼業をする氣になるといふ程悟りも開けてゐないしな。尤も君たつて同斷たが……。

お銀　さうね。そんな所へ餘計な疣がくつついちやなほお氣の毒ね。（間）けど私……何だかこのまゝお別れするのがいやなやうな氣がして來たわ。

出島　僕もそんな氣がする。

お銀　でも私行きますわ。いまの御療治代はお金が出來るまでお借りします。さやうなら。

出島　まあ待つてくれ給へ。さう急いで行く所もないのぢやないか。

お銀　でも私、長くお邪魔してゐると、なほのこと行くのがいやになり相だわ。どこへも行けなくならないうちに出掛けなきや。

出島　行けなくなつたら行かないまでのことさ。（間）さつき掘じくつた君の齒の穴も塡めなければならないが、僕のこの胸に出來た眞空も充たさなければならないのだ。（いきなりお銀の兩手を取つてぐいと引き寄せ）お銀さん！

（硝子戸が開いて、源兵衛、お仙、玄關に食事の仕度を持ち込む。出島、お銀離れる。）

源兵衛　夕飯をこしらへて來た。無罪放免の祝ひに、こつちで一杯やらうと思つて、婆さんに來て貰うた。あんたも、氣晴しに一杯やつて景氣をつけなはれ。

お仙　あんたさんも飛んだことで、重ね〴〵の御災難やつて、うちもえらうお氣の毒やいふてゐますのや。

（二人はお銀を見つけて怪訝な顏をする。）

出島　それはどうも重ね〴〵有りがたう。ところで、お爺さんにもお婆さんにも喜んでいたゞかなければならないことがあるのです。此の婦人ですがね、今偶然療治に來られて、いろ〳〵話した結果、私に同情してくれて、これから貧乏生活の手傳をしてくれるといふのです。

源兵衛　それは奇特の方もあつたもんや。同じやなこでも、かた〳〵で逃げ出すものがあるかと思ふと、かた〳〵で助けに來るものがある。世の中はよう出來たもんや。これはお婦人、わしは源兵衛といふてた出島さんの家主だす。まああんたも袖すり合ふも他生の緣や、何分よろしく願ひます。

お銀　（驚いて）あれあんな……。

出島　（お銀に合圖して）さうなんです。ねお銀さん。

源兵衛　それはちと早や過ぎる。君方若い者はそれでいかんのや。結婚といへば一生の大禮やおまへんか。出島さんあんた性も懲りもないことを何度でもやんなはる。嫁とるのを猫でも釣る氣でゐなはる。そやさかいぜんのやうな事にもなるのや。

出島　ずゐ分長く考へて居たのです。たゞその相手に今ぶつかつたといふだけです。まあ一つ承認して下さい。

源兵衞　何にもわしが承認するせんと言ふ譯でもないが、もうつと愼重の手續きを踏んでやんなはるがよいではないか。

出島　いくらでも愼重の手續をふみます。何うするのですか。

源兵衞　何うするといふて、先づ媒妁人といふものがなけにやならん……。

出島　それは丁度あなた方に御願ひしやうと思つてるたのです。

源兵衞　まあ聽きなされ、さうして黄道吉日を選んで三々九度の盃をあげる……。

出島　ではそれを早速御願します。重ね〴〵御厄介ですが、源兵衞さん、御面倒序にそれをたつた今片付けていたゞきたいのです。

源兵衞　序に婚禮を片つけるといふ法がありますかい。第一、今が今いふて出來ることではない。

出島　今出來なければ、私共はこれから何處かへ行つて二人で心中してしまひます。

源兵衞　まあ待ちなはれ。緣起でもない。そない事、戲談にもいひなはるな、いやらしい。

出島　でも二人が今結婚出來なければ自然さうなるより外はない。ねえお銀さん。

源兵衞　待ちなはれといふに、誰れも媒妁人にならんとは云はんがな。婆さん、一寸來てんか。どないしたもんや。

お仙　なんせ東京の方は氣が早いに。同じ早やうするなら、心中よりも婚禮の方がえゝやないか。

源兵衞　それは婚禮の方がえゝ。

出島　では早速お願します。その三々九度と言ふ奴をね。

源兵衞　今すぐかいな。

出島　今すぐです。遲れると、それ一方の心中……。

源兵衞　おきなはれ。婆さん、そいぢや三々九度やと。仕度をせにやならん。

お仙　三組の盃がいるのやな。おますかいな。

源兵衞　あほういひなはれ。この家にそないなものあらうかいな。何とか工夫しなはれ。えゝはそこの小皿を二つ組んで、その上に猪口を載せたはれ。そや〳〵それでよい。三組が出來たわ。

お仙　けつたいな三組やな。三寶がありやへん。

源兵衞　その小さい膳がよいわな。さあ出來た。二人ともこの前に向ひあひで坐りなはれ。時に御婦人は何といふお名前や？　仲人が嫁御寮の名も知らんではどもならん。

出島　銀といふのです。

源兵衞　お銀さん。えゝ名やな。それ婆さん御酌や。先づ、小さい盃で、嫁御から始めるのや。そや〳〵それお婿さ

んや。そいからわしがうける。二度目はと、かうと、そや、先づお婿さん……嫁御……さあ婆さんおぬしや……三度目は、下の小皿、でない盃で、かうと、嫁御や……お婿さん……わしがいたゞく。……これで目出度三々九度や。あゝあ肩が凝つた。

出島　あの『高砂や』といふのは何時やるんです。

源兵衛　そや〳〵。これからわしがやる。この二三年仲人もやらんのでな、うまう行くかいな。扇子がないな。扇子をかうこゝとこへ置かにや。

出島　この箸箱では何うです。

源兵衛　けつたいな扇子やな、ま、えゝわ。（箸箱を膝下に置いて）高砂や――この浦風に……。

（お銀、急に袂を顔にあてゝ泣く。）

出島　アハハハハハハ。

――幕――

村山知義篇

ロビンフツド

第一幕

1

大きなタイトル。(暗黒の舞臺に眞赤な字が浮び出る。)

中　世　紀

大きなタイトル。(フエード・アウト。フエード・インで同じく眞赤に。)

暴力と專制と愚劣の時代

大きなタイトル。(フエード・アウト。フエード・インで同じく眞赤に。)

十　二　世　紀

2

闇の中に群集の聲が高まる。

聲a　猶太人だ！
聲b　猶太人だ!!
聲c　猶太人だ!!!
聲d　汚はしい猶太人を追つ拂へ！
聲a　臭い呼吸に觸れるなー
聲b　そつちへ逃げた！
聲c　そつちへ逃げたぞ!!
聲d　そつちへ逃げて行つたぞ!!!

(舞臺明るくなる。老いさらぼへた猶太人が群集に追ひつめられて倒れてゐる。)

群集e　この猶太人がどうしたんだ？
群集f　水を飲んだんだ、水を。
群集a　井戸から、町の共同井戸から。
群集b　俺達の井戸は汚された。
群集c　もう誰一人あの井戸から水を飲むことが出來ない。
群集d　咽喉が乾いたら、自分の咽喉を搔き破るがいゝんだ。
群集e　呪はれた民の飲む水は基督教徒の街にはないぞ。
群集f　こいつ、こいつ、こいつ等は、我々の尊い救ひ主が十字架の上で「水を」とお呟きになつた時、酢をお飲ませしたんだ、酢を。
群集a　さうして、おう、脇腹を、槍で刺したんだ。
群集b　御身體は下の方にずれ下り、紫色がかり、皮膚は隙間なく荊の鞭で搔きさかれ、さゝくれ立ち、關節は延

び、お唇はふくれ上つたのだ。おう。

群集c　こいつを十字架につけろ。

群集d　つけろ！　十字架につけろ。

群集e　救ひ主さまの木像を持つて來い。お苦しみに半ば閉ぢていらつしやるお眼の前でこいつをさいなめ。

群集f　荊の鞭で打て！　槍を肩まで刺し貫け！　救ひ主さまのお苦しみの眼がほゝゑまれる迄なぶり殺しにしろ！

猶太人　或る騎士はその弩弓(いしゆみ)で獸の代りに俺の頭を射た。子供は俺の頭を射た。子供は俺の胸に唾を吐きかけた。俺の右の耳は何處かの若者がほんの手なぐさみに切り落した。おう、基督教徒め！　基督教徒め！

（舞臺が段々暗くなる。猶太人を磔にするための十字架が横たへられる。救ひ主の十字架像が持つて來られる。）

猶太人　（叫ぶ）おゝう！　おゝう、呪ひは貴樣達の上に！　基督教徒め！　この俺の最後の呪ひを受けろ！　すべての光を俺は俺の臭い息で吹き消してやるぞ、呪はれてあれ、呪はれて――

3

舞臺全く暗くなる。猶太人のうめきと釘を打つ音。それがいつの間にか二人の男の烈しい掛聲と武器の音に變る。突然光がはいる。嚴重に甲胄をまとつた二人の騎士が今槍を捨てゝ、徒歩で大きな劍をふるつて烈しく斬り合ひを初めた所である。

騎士一　セント・ジョージよ、この劍を守り給へ！　えゝい！（振りおろす）

騎士二　何と。貴樣のころげ落ちた首に誓つて――（うけとめる）

騎士一　これでもか！　（もう一度振りおろす。胄の眞中にあたる）

騎士二　毛筋程も感せぬわい。今度はこつちの番だ。そら受けて見ろ、ちぎれそこなつた玉の緒め！　（振り降ろす）

4

その間に舞臺はまた眞暗になる。もう一度大きな劍と鎧の打つかる音。それが敬虔なオルガンと女聲の頌歌に變る。明るくなると一人の少女が歌つてゐる。その傍で僧侶が机に據つて、靜に闇に向つて、半ば讀み、半ば說いてゐる。僧侶の足元には角を生し、蹄を持つた青い惡魔がうづくまつてゐる。

僧侶　農夫よ。惠み深き在天の主が汝等に與へ給ひし領主

を感謝せよ。汝等はそこに生えしものを糧とする土地を領主に負ふ。されば汝等は種々の貢物と勞役とに依りて、その負ひめを果たせ。汝等石とモルタルとを運びて領主のために住みよく形麗はしき邸を作れ。六月の末に草を刈り、日に乾かして領主に納めよ。八月には僧院の畠の穀物をとり入れ、車に積んで神に捧げ、借り受けし畠のなり物の四分の一を領主に奉れ。九月八日に八匹につき一匹の豚を出し、十月九日に貨幣にて地代を拂ひ、降誕祭は七羽につき一羽の雞と、大麥一セティール、小麥一クワートを納めよ。復活祭前の日曜日には六匹につき一匹の羊を出し、復活祭には勞役を捧物となし、こゝろばせを盡して領主の爲めに耕し、播き、耙(まぐは)にてならせ。農夫よ。もし汝等その娘をめあはす時は三スーを出して婚姻權を買へ。すべてこれらの貢物と勞役は主の正しと認め給ふ所なり。甘きものは何ぞ？　蜂蜜は甘し。葡萄汁は甘し。天使の歌は甘し。されど最も甘きは主の爲めに物と勞役を捧ぐることなり。見よ、騎士は戰場にのみならず、武術修行のためにさへも、その生命を神に捧ぐるにあらずや。農夫よ、主と今此の契約を結べ。主は雲の柱のうちにゐまして全地をすべ給ふ。その御力は大いなる哉。主よ、この契約を果さざる農夫あらば、領主の御手を通して罰し給へ。

5

暗くなる。上手の端に小さな光。農夫が一人柱にくゝりつけられてゐる。小さな子供がその足にまつはつて泣いてゐる。但し聲は立てない。下手に小さな光。二人の兵士が弓を持つて狙(ねら)つてゐる。舞臺の中央は眞暗。

兵士一　まづ初めに右の股だ。（矢を放つ音。農夫は痙攣する。但し聲は立てない）

兵士二　お次に左の股だ。それが順序だ。（第一の兵士の場合と同じ事が起る）

兵士一　それから腹だ。段々上へあがるんだ。（同じ事が起る）

兵士二　そこで胸だな。（同じ事が起る）

兵士一　最後に眉間だ。（同じ事が起る。農夫は死んでグタリとなる）

兵士二　うんにや、最後は子供だよ。（子供は倒れる。舞臺暗くなる。音樂が響く。「ワルフルギスの夜」）

（暗　轉）

第二幕

第一幕に引き換へて、朗かな線と白の光線で照らされ

料理人一　へい、九十二匹だけ納まりました。

執事シムキン　ほう、また二匹足らんぢやないか。納めないのは誰だ？

料理人一　ロージヤーとパーキンでごせえます。

執事シムキン　ふむ。畜生。またあの二人か。ようし來た。眼に物を見せてくれるぞ。（出て行く）

料理人二　（歌ふ）　君の顔は小麥のパンの如く白く、君の唇は薔薇の如く紅し。その血色は洋紅もて染めたる緋色の布の如し。その髮の毛とその鬚とは泊夫藍（さふらん）の如く黃色し。

料理人一　おいおい、何處の女つ子の夢を見てるんだい。

料理人二　（歌ふ）　彼は巧みに馬に跨りて野の鹿を追ひ、灰色の鷹を手にして空の鳥を獵る。弓の術（わざ）にかけては領内に肩を並ぶる者なく、土俵に爭つて彼より賭物を奪ふ者なし。

料理人一　（叫ぶ）　そりやあローービン樣だ！

料理人二　さうよ。勿論ローービン樣よ。ローービン樣見たいな立派な男が他に一人でもゐたら、俺は遠慮に料理人をやめてしまふよ。うんやめるとも。料理人をやめる所か、世を捨てるよ。森へ這入るんだ。うんはいるとも。

料理人一　お前が森へ這入るなら俺は山へ這入る！

料理人二　お前が山へ這入りやあ俺は一人でローービン樣のお料理を拵へるんだ。ローービン樣のお好きな鷓鴣（しやこ）の肝臟をバタと砂糖と麥粉で料理したやつを拵へるんだ。何しろ俺や膽の太い、曰く付きの男だからお前なんぞの手にやあ合はないよ。

（暗　黑）

4

城の下のどこかの隅っ子に二人の老人が附りそつてうづくまつてゐる。

老人一　ローービン樣には靑いお召物が似合ふだ。

老人二　どうして、どうして。黃色いお召物が一番お似合ひになるだ。

老人一　黃色だと？　飛んでもない。全體お前に色がわかるだか。わかるなら云つて見ろ。黃色とはどんな色だ。

老人二　人をあんまり馬鹿にするな。黃色とはな、それ、あの花の色だわな。えゝ、何んと云つたつけか。ほれ、お城の釣橋のたもとに春になると咲く――

老人一　何を云つてるんだ。黃色はきんぽうげの花の色だ。そいでなきあ、かなりやの色だ。知りもしないで何を云ふんだ。ローービン樣のお召物の色は靑が一番似合ふんだ。靑といふのは、ほれ、天の色だ。よく晴れた日の天の色だな。

の小箱から取出す）あゝ有難や、勿體なや、これこそ救ひ主イエス・キリスト様が呪ふべき猶太人共の手にかゝつて十字架上の露と消え給ひしのち、その御なきがらの御胸から抜き取つたる肋骨の一とかけでありますぞ。近く寄つてようくお拝み下さい。二度と再び拝めるものではない。さて皆さん、この御符の效能のあるのは今迄だけの罪ではない。これから先二ケ月間の罪もみんな消え失せるのですぞ。

下男、女中　まあ。

免罪符賣下人　さあ、これでも高いとおつしやるか。私は殿様方がジョン王御征伐のために城門をお立ち出でになる勇ましいお姿を拝むや否や、入れ違ひに裏口から皆さんの所へ這入つて來たのですぞ。殿様の御征伐は長くて二ケ月で濟む筈だ。さあこの所をよく考へてみて頂きたい。殿様お留守中の二ケ月間の罪がすつかり消えるといふのだから何と有難い天帝の思し召ではありませんか。

（皆々買ふ。何處からか悲しい唸聲が聞えてくる）おや、これは何としたことだ。あの縁起の悪げな唸聲は何です。

下男一　あゝ、あれですかい。何でもありませんよ。ロージャーの野郎とパーキンの野郎でさあ。

免罪符賣下人　で、その二人がどうしたといふのです。

下男二　簀の中で唸つてるんでさあ。

免罪符賣下人　簀でれ、ほう、いづれ罪を犯したんでせうな。

下男一　さうでさ。年貢の豚を納めなかつたんでさあ。

免罪符賣下人　おゝさう。それはいかん。それはよくない罪ぢや。義務をつくさぬ者は人間ではない。どうぢやあの唸聲は。おう唸る、唸る。何と恐ろしい事ぢや。あれは最早人間の聲ではない。悪魔の泣聲ぢや。悪魔の泣聲ぢや。

（暗轉）

9

小さなタイトル。

一ト月後。

10

ローピンの部屋。ローピンが矢を磨いてゐる。

執事シムキン（這入つて來る）ローピン様。

ローピン　ふむ？　シムキンか、何だ。

執事　只今陣地から使が参りました。

ローピン　で、戰の様子はどうだ。

執事　相變らず味方の優勢ではございますが、敵軍も仲々

頑強なやうでございますよ。

ローピン　ふん。

執事　で、殿様の仰せられますには、兵糧が少くなつたから、金銀雑貨、豚、羊、雞などを殿の許へ届けよとの事でございます。

ローピン　うん、今度は大分、御數が多かつたからなあ。

執事　では殿の許へお届けしてよろしうございますな。

ローピン　うん。だがどうやつて調達するんだい？　きまつた年貢はもうとつちやつたんだらう？

執事　年貢を増すのでございますよ。

ローピン　そんなに百姓達から出して貰つていゝのかい！

執事　おや、何をおつしやいます。出して貰つていゝのかなんて、百姓は我々の所有物でございませんか。我々の為に生きてゐるんでございますよ。たゞ、あまり取り過ぎると死んでしまひますから、それで幾らかビク／＼してゐるのでございます。百姓共は生かさぬやうに、殺さぬやうに治めなければなりません。生かし過ぎると贅澤になり、まだ／＼取る餘地は充分ございます。

ローピン　（驚いてぢつとシムキンを見つめる）――で、百姓達は何にも云はないのかい？

執事　云ふ所の話ではございません。當り前の事と心得て居ります。それに、何か云はせるやうなら、立派な領主とは申されません。

ローピン　何でもないのかい、それで。お父様も平氣でいらつしやるんだね。僕、何だか悪いやうな氣がするが。

執事　何が悪いやうなことでございます。當り前の事でございます。武士は武士、百姓は百姓、鍛冶屋は鍛冶屋、靴屋は靴屋でございます。神様のお命じになつた通りの區別でございますもの。それに近頃、幾分贅澤になつて居ります。襤褸でないものを着てゐる百姓を時々見かけますからなあ。

ローピン　で、お前、どうしても出せないものがゐたら？

執事　そんな奴は怠者に相違ございません。さういふ奴のためにこそ、お城の下にわざ／＼窖が掘つてあるぢやございませんか。現に二人ばかり叩き込んでございますよ。ごらんに入れませうか。さあ、いらつしやいまし。やがては領主になる方が、窖もごらんになつたことがないんぢや困りますな。いや、全くの話。さあ、いらつしやいまし。

（無理にローピンの手を引いて去る。）　（暗　轉）

11

小さいタイトル

夏に一月たつた。窓

窓。夜。中央に通路。上手に階段。下手が獄舎。鐵格子。高い所に小さな窓が一つ。十人程の百姓が低くうめいてゐる。遠くの方で酒宴の騷ぎ。誰かが窓の外から押へた聲で、さつきから「おい――おい」と呼んでゐる。

ロージャー (老人。立ち上つて、低く) 誰だ?

ジョン (窓の外で) 俺だ、ジョンだ。番人はゐないのか?

ロージャー 明日殿樣が凱旋だと云ふで、皆酒盛をやつてる。

(百姓達は皆窓の所に寄つてくる。)

百姓一 誰だ、ジョンか?

百姓二 どうした、よく忍び込めたな。

百姓三 村の者達はどうした?

百姓四 どうしてゐる。皆丈夫か?

(此時ロービンが階段の上に現はれる。)

ジョン 皆目だ。皆餓死した。明日の夜此のお城を燒打するんだ。

百姓達 えつ? 燒打?

ジョン 何もかも取られた。皆餓死しかかつてる。戰爭がすんでも、もう穀物も獸もねえだ。ニコラス居るか?

ニコラス (百姓の五) あゝ、居るだ。

ジョン お前のかみさんは雞をかくしたと云うてなぐり殺されたぞ。

ニコラス こ、こ、殺された。おゝ、なぐり殺されたと?

(倒れる)

ジョン さうやつけんより仕方がねえだ。俺達の村は戰地から離れてゐたが、戰場になつた村はもつとひどいだ。飢死した者も、殺された者も、氣違ひになつた者もある。明日の夜だ。六ケ村の者が皆押し寄せてくるだ。城の奴等は、一人殘らず叩き殺すだ。

パーキン (若者) それ! やつつけろ! 殿樣が何だ! 領主樣が何だ! お城が何だ! 神樣が何だ! 叩き殺せ!

ロージャー そりやもうすつかりきまつたのか? 大丈夫勝てるのか?

ジョン 勝てる! 大丈夫だ! 二萬人の人間が死に身になつて押し寄せるだ。こんな城なんか直ぐ開くだ。

百姓一 明日の夜だな。明日の夜だな。

百姓二 城が、城が燒け落ちるんだ!

百姓三 俺達は、十月目に皆と逢へるんだ。

百姓四　何もかも燒き拂つて、その燒跡で酒盛をやるべえ！　踊を踊るべえ！　幾日も幾日もブッ續けて踊るべえ！

百姓五　夜も晝もなしだ！　夜も晝もなしのブッつゞけだ！　あはははははは。

（遠くで酒宴の笑ひ聲が聞える。皆はつとして沈默、間、）

ジョン　（低い聲で）そこの錠前はどうなつてゐる。すぐ[illegible]けられるか。

パーキン　（愕然として）錠前は二重だ。格子は指輪程[illegible]太さの鐵だ。

ジョン　[illegible]は誰が持つてゐるか。

パーキン　[illegible]とハムマーと[illegible]アレンだ、二人の鍵がなくてはあかねえだ。

百姓一　それ火は眞先にかけなきやならねえぞ。

ジョン　さうだ。皆醉つ拂つてゐる時に忍び込んで眞先に火をかけ[illegible]られねえ。俺達にや弓や槍などねえだからなあ。

百姓二、三、四　窖はいつ開けるだ。窖を眞先に開けなきやいけねえ。

（沈默、）

ローランド　（叫ぶ）眞先に火をかけろ！　俺達にかまふな。俺達十人は燒き殺されべえ！　鍵なんか探してゐてバレたらどうする。六ヶ村の者の生命が、村のおしまひで助かるかどうかといふ瀬戸際だ。

パーキン　さうだ。村の衆のかけた火で燒き殺されるのはさぞ樂かんべえぞ！

百姓一　俺達にかまふな。そいかほかの奴等を一人殘らず叩き殺して呉れ！　たとひみんな俺達は燒け死ぬべえとも

百姓達　死ぬべえ。やつつけて呉れ。俺達にかまはないでうまくやつて呉れ

ジョン　（泣きながら）よく皆んな覺悟して呉れた。ぢやあすまねえが眞先に火をかけさせて貰ふぞ。だがそのかはり、きつとやりとげてみせるから安心して呉れ。

パーキン　（窓にとび上りとび上り）ジョン、俺の顏が見えたか。ジョン、お前の顏を見せて呉れ。一目見せて呉れ！（背でパーキンを抱き上げる）

パーキン　（窓に顏を押しつけて）ジョン、顏が見えねえ、もつと右の方へ向いてくれ。うゝ、ジョン、頼んだぞ。しつかりやつてくれ。それから、おふくろに丈夫で暮せと云つてくれ。

ジョン　パーキン、引き受けたぞ。

（パーキンは降りる。）

百姓一　（背のびして手を窓にかける）ジョン、俺の指に

さはつてくれ。うむ。皆ようこゝにゐると云つてくれ。

ロージヤー　さあ、ジヨン、おや、見つからねえうちに早く歸つてくれ。

百姓達　左樣なら、ジヨン。賴んだぞ。しつかりやつてくれ。

（ジヨンは去る。）

ロージヤー　さあ、皆、こゝへ來い。

（皆一所に抱き合つてかたまる。）

百姓六　（まだ少年である。不意に泣き出す。）お母さん、お母さん！

ロージヤー　誰だ。チヤールスか。うん、お前はまだ子供だ。無理もねえ。さ、俺の胸に抱かされ。（彼を抱きしめる）我慢しろ！　我慢しろ！　我慢しろ！

（ロービンにあたつてゐるスポツトを殘して舞臺暗黑。ロービンは顏を痙攣させ、拳で頭を打ちながら階段の上に倒れる。）

（暗　轉）

12

ロービンがベツドで病んでうなされてゐる　翌日の朝である。母がその傍に跪いてゐる。

母　ロービン。可愛いゝロービン。どうしたのだえ。もうおきお父樣が凱旋なさるのだよ。昨日迄あんなにピンピンしてゐたのに、お父樣のお歸りの間際になつて急にこんな病氣になつてしまつて。

ロービン　メリー！　メリー！

母　何だい？　ロービン、誰だい？　おゝ、何て云つたんだらう。さう、メリーと云つたんだね。メリー、誰だい、そのメリーつてのは。

ロービン　お前は魔女だから過去と現在と未來を見透しだ。お前にはそれなら、何の苦惱もない筈だな。お前には、かうしようか、それともあゝしようかといふ咽喉を絞めつけられるやうな、頭を叩き割られるやうな苦しみはないのだな。う、何だと？　成程その苦しみにたいか、他のもつと大きな苦しみがあると？　何だ、何だ、それは。え、ふむ。火あぶりがお前を待つてゐるのか、さうか。だが、それは結局お前自身の、しかもお前一人の運命ぢやないか。自分の心のきめ方一つで、何萬人といふ大勢の生命が救はれるか、自分の一番近しい人達が殺されるかといふ場合とはくらべ物にならないぢやないか。

母　おゝ、恐ろしい、この子は魔女のメリーと話をしてゐるのだ。ロービン！　しつかりしておくれ。これ、氣をたしかに持つておくれ！

ロービン　これメリー、逃げて行くのか。逃かすものか。

ロビンフッド　握手が濟んだから、一つついでに友達にならうぢやないか。
小人のジョン　ならう、友達にならう。
（二人は並んで腰掛ける。）
ロビンフッド　所で自己紹介をやらうぢやないか。
小人のジョン　よし來た。僕はジョン王の領内の鍛冶屋だ。
ロビンフッド　ジョン王のねえ――
小人のジョン　うん、そいで名前は小人のジョンてんだ。
ロビンフッド　小人のねえ――
小人のジョン　うん、そいで鐵を買ひに行く所だ。
ロビンフッド　わざわざ此のシヤアウッドの森を通してかい？
小人のジョン　わざわざつて君、僕の家はこの森の入口だよ。
ロビンフッド　森の入口？　ぢやジョン王の領地ぢやないぢやないか。
小人のジョン　何云つてるんだい。あはゝ、君は未だ知らないんだねえ、もう二ケ月も前だよ、この森の外の地一帶がジョン王に占領されちまつたのは。
ロビンフッド　え？　ジョン王に？　畜生!!　何といふ事だ！　おゝ、お父さん、お母さん、あなた方の死んだのは何の役にも立たなかつたんだ、十人の百姓達が森の中で燒け死んだのも皆無駄だつたんだ。そんなことがあり得るだらうか？　そんな理窟に合はない事が存在し得るだらうか？　待て。俺はちつとも解らなくなつてしまつた。考へなくてはならん。よく頭を働かして見なくちやならん。俺は結局兩方共殺してしまつたんぢやないか。（叫ぶ）おい、皆は何故ジョン王の城を燒き打ちしないんだ。
小人のジョン　駄目だ、あいつは俺と同じ名前だが、飛んでもない惡黨だ。何だつて俺の親父はあんな奴と同じ名前をつけやがつたんだらう。何しろあいつは妙な役人をふんだんにこしらへてどんな道をも歩かせ、どんな壁にも耳を押しつけさせ、どんな節穴からでも覗かせて、ちつとでも不平を云ふ奴がありやかたつ端からひつぱつて行つちまやがる。あいつの城の中には惡魔でも考へ出せないやうな拷問道具が一杯あるさうだ。え？　たつた一日でも人間を監禁して置くといふことはそれだけでも人間性の大きな冒瀆ぢやないか。領主がその取卷共と一緒に大食をしたり大酒を飲んだりする爲の年貢が遲れたからとか、家に病人がゐるために力役に出られなかつたとか、奴等の惡い噂について不平を云つたからと云つて、斟酌なしに引つ張つてつて叩き込みやがる。そればかり

ぢやねえ、鋼の馬に乗つけて突つたり、石を抱かせて膝の骨を潰したり、氣絶する迄棒でなぐつたりしやがる。全く人間の顔をした奴の出來る業ぢやねえ。奴等は人間ぢやねえ、ううん、誰が何てつたつて人間ぢやねえ。見ろ、奴等の仕事と云つたら人間を殺すことぢやねえか。

ロビンフッド　さうだ、さうだ、うん、全たくその通りだ。君の云ふことは、少しも間違つてゐない。領主たとか武士だとか云ふ奴は獣だ。だが奴等にも同情すべき點はある。

小人のジョン　同情？

ロビンフッド　(不確に)　うん、だつて奴等は知らないんだ。

小人のジョン　知らない？　何を。

ロビンフッド　百姓達が苦しんでゐることをさ。

小人のジョン　馬鹿云つちやいけねえ。奴等の中の誰に聞いたつて百姓になるよりや死んだ方がましだといふにきまつてゐら。それに、あんたに大勢縫揃な役人を俺達の中へバラまいて隅から隅迄覗き廻らせやがつて！　俺達がどんな様になつてゐるか解らねえことがあるもんか。

ロビンフッド　うんさうだ。矢張り判つてゐるんだ。たゞ、さうだ、知らない奴もあると云ひたかつたんだ。

小人のジョン　ふん、どんな奴だ。

ロビンフッド　たとへば、領主の子供と云ふやうな奴だ。

小人のジョン　(笑ふ)　子供に解らねえのは當り前だ。

ロビンフッド　いや、君、子供と云つたてもう大きいんだ。もう僕位ゐになつてゐるんだ。

小人のジョン　そんなのは飛切り境遇が結構だつたんだ。さいでなきや馬鹿なんだらう。俺にやそんな奴は考へられねえ。俺なんぞにや赤ん坊の頃からちやんと解つてたんだ。

ロビンフッド　さうだ。確かにさうに違ひなかつたんだ。

小人のジョン　さうとも、さうにきまつてらあな。奴等は百姓がどんなに苦るしんでるかなんてことはすつかり御承知なんだ。だが奴等は自分達が働かねえで食つたり飲んだりする爲にやあ、百姓達から搾らなくちやあならねえ。領地を増して、贅澤をしたり、名譽慾を滿足させたり、狩よりずんと面白い遊戯をしたりする爲に戦をせずにやゐられねえ、そしてその一切合財の費用は矢張り百姓から捲き上げるより他仕方がねえ。何しろ役に立つものを作つたのは俺達だけなんだからなあ。とうたい、かういふわけだ。世の中つてのはさういふ仕組になつてゐるのさ。

ロビンフッド　成程なあ、全く變な仕組だ。
小人のジョン　さうさ、何の役にも立たねえものが上に乘つかつてやがんだ。
ロビンフッド　そして君は鍛冶屋で、そいつらの遊戯する爲の槍、それでもつて百姓をいぢめ殺す爲の刀を作つてやらなくちやならないんだね。
小人のジョン　さうだ。俺はもうそれでつくづく厭になつちやつてるんだ、こんな生活に全然無意味だ。所で君の名は何てんだい。
ロビンフッド　さうさう、君にばつかり自己紹介さしといて、すつかり忘れちまつてた。僕の名はロビンフッドつてんだ。
小人のジョン　ふん、變な名だな。で、仕事は何してんだ。どうも百姓らしかあないが。
ロビンフッド　仕事かい、仕事は泥棒だ。
小人のジョン　泥棒かい、さうかい、そいつあいいや。鍛冶屋より餘つ程いいや。で仲間はあるのかい。
ロビンフッド　いいや、まだ一人つきりだ。
小人のジョン　よし來た、おい今から俺と二人で組むことにしよう。[illegible]仕事はどうだ、見込みがあるのかい？
ロビンフッド　僕は主義として坊主とか武者修業の侍とか感じの惡るい商人だとかしか狙はないんだがね、結構食つてゆくだけはあるよ。
小人のジョン　さうか、そいつあ愉快だ。どんな所に寢てるんだ。
ロビンフッド　來給へ、案内しよう。ちよつとした洞穴だがね、なかなか日向りがよくつて氣持のいい所だよ。

（二人は肩を組み合つて去る。）　（暗　轉）

3

小さいタイトル。
森に近い或る村で――

4

二人の百姓が刈つた穀物を束ねてゐる。鐘の音が聞える。

百姓一　鐘が鳴つてきたぞ。
百姓二　うむ、鐘の音と一緒に仕事のやめられた頃はよかつたな。
百姓一　さうだ。鐘が鳴り始めるとすぐに仕事を止めて鳴り終らない中に家でもう腰かけてゐたものだ。

（間）

に風穴を開ける位？

ロビンフッド　うむ、風穴は危ないが、腕さへしつかりしてゐりや、臍のあたりへピンと帆柱みたいに突立る事位は出來るだらうよ。

大人のミッヂ　大丈夫かねエ親方、そいつア、坊主が殺せねえと來た日にや、生きる氣なんざア全くないんだから。

（小人のジョンがやつて來る。）

大人のミッヂ　おや、小人のジョンの奴、ひどく浮かない顏をしてやつて來たぞ。

ロビンフッド　ほう、彼奴があんなにへこたれた顏をしてゐるのは見た事がねエな。

小人のジョン　親方よわつた事が出來ちやつた

ロビンフッド　如何にもさうらしい顏をしてゐるよ。そのよわつた話と云ふのを聞く事にするか、それとも、もう一息で此の弓が出來上るから、そいつを持つて坊主でも打ちに行つて氣を晴す事にするか。

小人のジョン　處が親方、その兩方なんだ。よわつた話ツてのは、要するに坊主に關係してるんだ。

大人のミッヂ　ほう、お前よりも脊の高い坊主に出くはしたとでも云ふのか？

小人のジョン　うんにや、脊の事であつてくれゝば俺よりぐんと低くつて、まアお前とどつちかと云ふ位なんだから、何の問題もないんだが、情ない事に脊に拘はつた事ぢやないんだ。

大人のミッヂ　ほう、ぢや腦味噌にでも拘はつた事か？

小人のジョン　はて、始めて會つたばかりの坊主の腦味噌がどんな樣體だかわかつてたまるもんか。

ロビンフッド　（大人のミッヂに）これ良いかげんにからかふのは止めておけ。何時まで經つたつて埒があかねえぢやねえか。（小人のジョンに）さア手取り早く云つちまひな。坊主がどうしたつてんだ。

小人のジョン　その坊主が俺達の仲間に入りたいツてんでさ。

大人のミッヂ　なるほど其奴ア珍な事件だ。

ロビンフッド　どうしてお前、其奴のどてツ腹を蹴破つてやらなかつたンだ。俺と初めて丸木橋の上で出遇つた時にや、お前大した元氣だつたぜ。

小人のジョン　そりやね相手が親方みたいな……これで幾何か元氣のある——

ロビンフッド　何だと、やい！

小人のジョン　いや、御免！　御免！　さう云ふ積りぢやなかつたンだ。まるでどうも思ひもよらねえ事を云つちまつた。そのひどく元氣のいゝ大將だと譯なく調子を合

は立派な游撃隊になれるだらうぜ。おや夜になつたら皆を集めて、坊さんタックの入團式を擧行しよう。（小人のジョンに向つて）さあ弓が出來た。こいつは乾度飛んでもなく遠くまで飛んで行くぜ。おい、大人のミッチ。變な顔をするなよ。俺達の仕事はだん／＼大きくなつて行くんだ。小さな貝殻の中にとぢこもつてはいかんぜ。さあまづ何しろ、坊さんタックと仲よしになるんだ。握手をするんだ、握手を。

（二人は握手をする。）

（暗　轉）

6

タイトル。

その晩。

7

タック（出て來る。遠くから大ぜいの樂しさうな聲が聞えて來る）あはははは、なんてをかしな入團式だ。頭から水をぶつかけて、皆で滅茶々々になぐるなんて。全く愉快だ。こんな生活の樣式があるとはちつとも知らなかつた。何て生々した連中だ、自由だからだ、縛られてゐないからだ、恐ろしい力だ、あはゝゝゝゝゝ。おや俺は笑つてゐるぞ。この俺は笑つてゐるぞ。これや素敵だ。おいおい坊さんタックさう浮かれないでまあおちついて考へろ。これやどういふ事の狀態なんだ。うむ成程、さうか、ぎしぎし詰めこまれてゐたいろんな奴隷根性が一度に皆吹き飛ばされてしまつたんだ。素晴しいぞ。よし娘も早速何とかして此處へ引張つて來てやらう。男ばつかり二十人もゐて女は一人もゐないつちや縫物にも不便ぢやないか。あんな小さな人工的な庭よりこの廣々としたシヤアウッドの森の方を娘だつてどんなに好くか知れやしない。よしさつそく引張つて來てやらう。

大人のミッチ（遠くから呼びながら來る）坊さんタック

おゝい。坊さんタック！　おゝい！（見付ける）何だ此處にゐたのか心配しちやつたよ。さあ早く來るんだ。これから俺達のこのグループに名を附けようてんだ。人數も君で丁度二十人になつたんだから、名前がなくつちや變だらう。さあ行かう。君は特に物知りだから何か好い考へがあるだらう、さあ、どんな名前がいゝだらう。

（去る）

（暗　轉）

8

小さなタイトル。

町で。

9

小さな靴屋の仕事場、ヨボヨボの親方と若い職人が仕事をして居る。遠くから多勢の男の笑聲が聞えて來る。

職人　お、親方聞えますぜ、聞えますぜ。

親方　森の中の笑聲かね、どれ聞かせてくれ、俺にも聞かせてくれ。

職人　（窓をあける）ほら、聞えるでせう。

親方　おう、聞える、聞える。何うもいや、おう有難いことぢや。

職人　親方、あの人達は皆な緑色の着物を着てゐるさうですよ。

親方　おう、緑色と云ふと、あゝ木の葉の色ぢやな。

職人　さうですよ。そしてあの人達のグループの名前は、「樂しき人々」と云ふんださうですよ。

親方　ほう、それはいゝ名ぢや。これ以上の名前はありはせんよ。

職人　親方、早くあの連中が森の中を押し出して來て、此の町の通りを歩き出す様になるとよござんすねえ。

親方　もう少し待つてゐろ、あの連中はきつと押し出して來るぞ。そしたら俺達のやうなみじめな靴屋も大きな聲を出して笑へる様になるんだ。

（暗　轉）

10

小さなタイトル。

郡長の館の庭で。

坊さんタックが待つてゐると、そこへ贅澤をきはめたみなりの娘のネルが走つて出て來る。

ネル　まあ、お父さん！（抱きつく）

タック　可愛いゝネル！

ネル　まあお父さん、よく來てくれたわねえ。あら隨分年をとつたわ。どうして此處へはいつて來られて？

タック　門番に賄賂をつかませたのだよ。

ネル　だけどお父さん、誰にも私のお父さんだなんて云はなかつたでせうね。

タック　うん、そんなこと云ふもんか、安心をし。

ネル　あゝいゝお父さんだわ。で、また修道院にゐるの？

タック　いやもうあんな所にはゐたくない。今はシャアウッドの森の中にゐる。

ネル　森の中？

タック　うん、そしてお前をこの嫌な場所から愉快な森の中へつれ出しに來たんだ。

ネル　まあ、どうして此處が嫌な場所なの。私こつこも嬉[illegible]てたまんないわ。

タツク　そんなことを云つたつてお父さんは見てしまつたんだ。お父さんはそれから隨分苦しんだ。お父さんはとうとうお前を此處から連れ出すんだ。

ネル　何を？　何を見たんです？　いや、いやですわよ、私出てなんか行きませんよ。

タツク　何を見たつていゝ。まあ何しろ森の中へ來てごらん。こゝんな處とは較べ物にならない。あそこには愉快な立派な人達が大勢ゐる。そして大聲で笑へるんだよ。腹の底から、え、笑へるんだよ。

ネル　それがどうしたの？　こゝでだつて笑へるわよ、あはゝゝゝ。

タツク　ネル！　私と一處に森の中へ來てくれ。惡い事は云はない！　一緒に來てくれ。

ネル　いやですわよ！

タツク　お前はこんな所にいつまでゐて、評判の惡い部長樣の玩具になつてゐたいと云ふのか！

ネル　何を云ふんです、失禮な。お父さんにそんな事を云ふ資格がありますか。何もかもお父さんが惡いんぢやありませんか。私をおいてきぼりにして、自分の魂とかのために修道院にはいり込んぢやつたんぢやありませんか。私がどんな暮しをしてゐようとお父さんにかれこれ口を出される覺えはありませんよ。

タツク　ネル！　私はお前が閨にはいつてゐる所を見たんだぞ。

ネル　結構ですわ。私もう一度これからはいる所なんですもの。失禮するわ。

タツク　ネル！　お前は間違つてゐる！

ネル　お父さん。あんたには資格がありません。ぢや左樣なら。こつそり歸つて頂戴。（去る）

11

小さなタイトル。

或る日の森の中で。

12

青いリンネルの上着を着、革のバンドをしめた肉屋が驢馬に肉を積んで唄をうたひながら通りかゝる。

肉屋　さあさ、肉屋が大市に出掛けて、私の店に並べ仕込まれて、高く賣られて、買はれて、焼かれて、食べられて、さうすることのみによつて、お前はお前の魂を神に捧げる。さてお恵みに依つて此の肉を賣つて一つ正當な儲けをさせて貰ふことにしようか。肉屋といふ商賣はかうして見れば決して割の惡い商賣ぢやない。百姓の樣に精を打つて靴を揃へるんぢやなし、あはゝ、いゝ心持つたつて

だ。(買手がどつと押し寄せる) 一斤がたつた十クロートだ。

(買手が愈々押し寄せる。他の肉屋達は始めあつけにとられてゐたが、やがて皆一つ所に集つてこそ〳〵と相談し始める。)

肉屋一　おい、牛肉が一斤十クロートたあどうした値段なんだ。

肉屋二　あいつあ一體何だらう。

肉屋三　何てえこつた。俺はもう二十年とい方ノッチンガムの市場へ來ていろ〳〵のものをやつてゐるが、こんな奴に出會つたこたあ無え。奴は商賣と云ふものを滅茶々々にしてしまふぢやねえか！

肉屋四　おい駄目ぢやねえか、ぼんやりしてちや。おいどうするんだい疊んじまふか。

肉屋五　今、手を出したら大變だ。買手が黙つちやいねえよ。

肉屋一　仕方がねえ、あいつが賣り切るまで待つていよう。なあに長續きのしつこはねえ。

肉屋二　うむ、てつきりかうだ。彼奴の親爺がぽつくりと中氣かなんかで死んぢまつたんで、奴急に商ひをしたくちやならねえ破目になつたんだ。てつきりさうだよ。

肉屋三　畜生早く品切になつちまへ。

(ロビンフッドの肉屋は繁盛の眞最中である。)

肉屋四　所でと、かうしてぼんやり立つてたつて仕方がねえ。

肉屋五　たつてお前。あいつの肉が品切れになるまでとにや手の出しようがねえぢやねえか。

肉屋一　品切れになつたら、あいつをどういふ風に片附けるかつていふ手筈をきめるのは、今より他にないぢやねえか。

肉屋五　うむ、さういやあさうだ。どうするかね

肉屋四　何を云つてんだい。疊んぢまふのさ。

肉屋一　それより俺はいゝ考があるんだ。今日は市場の最後の日だ。どうせ皆で郡長の所へ税を納めに行かなくちやならねえ。其處で彼奴を引つ張つてつてすつかり素性を洗ひ出して牢屋へ叩き込んぢまふのさ。郡長だつてお前、俺達の商賣が上つたりになつた日にや御同様に上つたりぢやねえか。

肉屋二　成程そりやいゝ。やつぱりお前さんは頼母しい智恵者だなあ。

(ロビンフッドは肉を賣り切る。買手は皆去つてしまふ。ロビンフッドは店を片附ける。肉屋達も店を片附け始める。)

肉屋一　(ロビンフッドに) おい大將大した景氣だな。お

郡長　うん。こりやうまい事になつたぞ、ネル。お前は全く天の使ぢや。まあちよつと抱かせてくれ。（抱く）

ネル　どう、今度こそよく解つたでせう。だから私に家の中をすつかりお任せなさいつて云つてるぢやないの。妻と云ふものがちやあんとしてゐて、始終氣を働かして經濟をうまくやつて行くか行かないかで、あんたの世の中ががラリと變つたものになるのよ。

郡長　うん、うん。

ネル　だから早くあんた僴つたやうな喰ぶしなんか消へ出しちまひなさいよ。私がすつかりうまくしてあげるからさ。

（暗　轉）

17

小さいタイトル。

あくる朝。

シヤアウツドの森の中。日が照つて小鳥が啼いてゐる。ロビンフツドと郡長が出て來る。

郡長　おい、これはシヤアウツドの森ぢやないか。

ロビンフツド　左樣でございます。私の家はこの道をもう少し行つて、ちよつと右へ切れた森の出口にございます。

郡長　何しろ早くそこへ行きつきたいものぢや。

ロビンフツド　さうお急ぎになることは御座いませんよ。どうです。この木のすく〳〵と生ひ立つてゐること。何にも恐れずに自由に眞直に天を向いて伸びてゐるぢやございませんか。

郡長　だがな、おい、此處がシヤアウツドの森だとすりや、俺達はもつと用心深くしなくちやならん筈だぞ。ロビンフツドと「樂しき人々」といふ惡黨連の住家ぢやからな。

ロビンフツド　いや私は何度もこの路を通りましたが、一遍も會つたことがございませんよ。

郡長　うん、會ひたくないもんぢや。どうあつても會ひたくないもんぢや。兵隊をつれてくりやよかつた。こりや少し早まつたわい。

ロビンフツド　おや、お氣分でもお惡るいのですか？　ブルブル震へていらつしやるぢやありませんか。

郡長　うん、どうもこれは少し早まつたわい。俺にも似合はんことぢや。何、震へてゐるのではないがな、しかし「賢き人は小敵を恐る」と諺にもあるからなあ。

ロビンフツド　左樣、左樣「危險を避るものは危險に陷ることなし」と云ふ諺もございました。

郡長　さうぢや、それから彼の偉大なるソロモン王も云は

れた。「すべてのものについて恐れを抱けるものは幸なり。そは心身の強きを誇れるものは、禍にかゝることあればなり」。

ロビンフッド　あゝ、それから、戰をなすに當りて長き準備をなさば、短き間に勝利を得らる、といふ諺もございました。

郡長　（愕然として）え、何ですと？　何だその諺とかいふのは。お前は今何んと云つたのかね？

ロビンフッド　「もし汝の敵に勝たんと思はば忍耐の德を學べ」とかう申しましたので。

（ガサガサと叢を分けて走つてゆく物音がする。）

郡長　な、な、な、なんだ！

ロビンフッド　ありやお鹿ですよ、郡長様。よく肥つた立派な鹿ぢやございませんか。いかゞです。牛の代りにこいつをお買ひになつちやあ。

郡長　おや、風が出て來たらしいぞ。困つたぞ、これは。何んだかどうも何處か身體の具合がひどく惡るくなつちまつたらしいぞ。

ロビンフッド　どうです、牛の代りにお買ひになつちやあ。無理におすゝめする譯ぢやありませんがね、どうもひどく肥つて、つや／＼してるぢやありませんか。何しろ王室御有の森林の鹿なんだから、思ひつきり生長しちまつたんですなあ。人間だつて同じことだ。郡長様なんざあ、何だか御氣分が惡るいさうだが、それでも脂ぎつてつやつやした顔色をしておいでゝすよ。さあ、あなたの兄弟分をお買ひなさい。そのお腰の嚢の中にお金が唸つてますぜ。

郡長　おい、君、俺は少し考を思ひ違ひしてゐたらしい、金？　ふむ、笑はせるない。金がどうしたつてんだい。この嚢の中には石つころしかはいつてやしないよ。

（ロビンフッドは不意に角笛を取り出して三度吹く。すると小人のジョン、大人のミッヂ、坊さんタックが綠色の服を着た四五人と一緒に現はれる。）

ロビンフッド　お早よう、諸君。

皆々　お早よう、ロビンフッドの親方

郡長　うへつ。（逃げようとするのを小人のジョンと大人のミッヂがつかまへる）

ロビンフッド　さうさう、お客様の手を引いてあげてくれ。有名なノッチンガムの郡長様だ。諸君の中には、どうでもかうでも是非々々お逢ひしたいものだと思つてゐたものが澤山あるだらう。さあさあ、ずつと奥の方へお通ししてくれ。

（皆は郡長を引つ張つて這入る。騒がしい物音。やがて大きな爆發的な笑ひ聲。郡長が着物をボロボロにさ

達は結局或る決論に到達したんです。
ロビンフッド　うむ、どういふ結論だね。
パードルフ　單は所謂「神の定め給うた社會の秩序の中にある」。
ニム　そしてもう少し先迄解つたのです。我々は我々の惡るい境遇から脫け出す爲めに、切り離された自分とか彼とかいふ個人だけを變革しようとしても無駄だ。我々は我々を制定してゐるこの社會の秩序を變革したければならない。
ロビンフッド　うむ。靑年部はえらいぞ。そこでもう一ト息。ではその變革は誰がなしとげるのだ。僕か、君か、それともこの「樂しき人々」か？
パードルフ　無論「樂しき人々」です。
ロビンフッド　いや、さう云つては間違ひだらう。僕達はいろ／＼の異つた動機から、たゞ偶然にこゝに集まつたに過ぎないぢやないか。
ニム　しかし、偶然集まつたとは云ひ條、我々皆を此處に連れてくるには共通した境遇が。
ロビンフッド　そしてさういふ境遇にゐる人はもつともつと多勢居る筈だらう。
パードルフ　さうです。無數に居ます。
ロビンフッド　さうするとさういふ人達皆が當然我々と同じ使命を持つてゐる筈だらう。
ニム　さうです。さうです。
ロビンフッド　するとこの變革をなしとげる者は誰だ。
パードルフ　すべての抑壓されてゐる人々です！
ロビンフッド　よし！　すると我々はその人達全部としつかりと結びつからなければならない筈だ。
ニム、パードルフ　さうです！　さうです！
ロビンフッド　するとあとは方法だ。どういふ風にして結びつくか。さあ靑年部の連中で皆集まつて研究して見給へ。僕達も考へるから。
ニム　え。やります。
パードルフ　（ニムに）十二號の廣場がいゝね。（ロビンフッドに）ぢや、十二號の廣場でやつてゐますから用があつたら呼んで下さい。
（二人は馳せ去る。）
タック　親方、すると私の運命は私一人だけにかゝはつた事ではないのですね。
ロビンフッド　勿論さうだ。勿論さうだ。（歩き廻る）
タック　親方、私は何んだかひどく心臟が踊つてゐるやうな氣がしますよ。（立ち上る）　私は何だか坐つてゐられなくなりました。ちよいと御免なさい、ちよつとあつちへ行つて來ます。（行きかける。立ち止つて）　あゝ、それか

ら親方、私はどんなにあいつに輕蔑されてもいゝから、もう一遍ネルに遇つて來ようと思ひます。

ロビンフッド　うむ。それがいゝだらう。だが辛抱強くしないとゐけないぜ。

タック　え、大丈夫です。（行きかける）あ、それから親方、私は全くこの森へ這入つていゝ事をしましたよ！

（暗　轉）

3

小さいタイトル。
翌日。

4

前の場と同じ場所に同じやうな格好をして、ロビンフッドと小人のジョンが足を投げ出してゐる。

小人のジョン　變なことを聞くねえ、親方。そりや俺にだつてかみさんはあつたさ。何も隱さうとは思はねえ。百姓の娘だ。犬つころ見てえなもんだよ。何も俺を好きだつたつて云ふんでもなし、俺も何ともなかつた。だからかうなつてもちつとも思ひ出したこたあねえ。大丈夫もう誰かのかみさんになつてるよ。

ロビンフッド　ふむ。結婚てそんなものなのかなあ。

小人のジョン　他の奴のこたあ知らねえが俺んとこぢやさうだつたよ。俺の村の奴等んとこでは大抵そんなもんだつたよ。

ロビンフッド　ぢや何故結婚したんだ。

小人のジョン　性慾だよ。他に何も譯はありやしねえ。馬鹿なこつた。俺のお袋なんざあ、俺を入れて八人も生んで、ひからびて死んでつたよ。親爺は銅山で働いてたんだが、二人ともどんなに苦しい事があつても默りこくつて我慢してゐたよ。まるで虫みたいな憐れな人達だつた。俺は長男だつたが初めの内は子供が出來るのをうれしがつてゐたが、しまひには、こんなに食へなくなつても未だ拵へる親父とお袋を憎み出したよ。今はもうすつかりちりちりばらばらになつて、どこにどうしてゐるか解らねえが、一人の弟なんざあ何故自分をこんな世の中へ、自分達のだらしない快樂の爲に生みやがつたんだつて親父の首を締めやがつた。多分そいつだつたか、その下の奴だつたか、氣違ひになつて乞食をしてゐるつて噂を聞いたことがあつたよ。

ロビンフッド　子供を拵へるとか拵へないとかいふそんな事まで、まだ人間の自由にならないんだなあ。

（タック出て來る。）

タック　親方、矢張り駄目でした。ネルの奴は會つてくれ

ませんでした。
ロビンフッド　うむ。ひよつとしたらさうかも知れないと思つたよ。何しろ今得意になつてる絶頂だからね。失望しないでもう少し時期を待つんだね。
タツク　ええ、さうしようと思ひます。私は自分ながら情ないことだと思つてるんですが、何だか段々娘が可愛いくなつて来て了つたんです。
ロビンフッド　それは君が長い間別れてゐて急に出合つたからだ。そして充分にその愛情を楽しむことが出来ないで、他の人の手に渡つて了つてゐるからだ。親父の情と云ふものは、實に強い原始的な動物的な感情だからなあ。俺もその爲には今でもまだ苦しめられてゐる。
小人のジョン　おやおや、大人のミッヂの奴、ひどく參つた顔をしてやつて來たぞ。
ロビンフッド　おほう、成程、あいつにもあんなにへこたれることがあるのかなあ。
（大人のミッヂがやつて來る。）
大人のミッヂ　親方、弱つたことが出來ちやつた。
ロビンフッド　いかにもさうらしい顔付をしてゐるよ。坊さんタツク出現の時の小人のジョンの顔付そつくりだ。
小人のジョン　何だ、何だ。お前よりも脊の低い美人にでも出つ會はしたのか？

大人のミッヂ　うむ、當つたりあたらなかつたりだ。顔は奇麗だが脊は俺よりもずつと高い。そして女ぢやなくつて男なんだが、女にも矢張りかゝはりがあるんだ。だが弱つたことは他にあるんだ。
小人のジョン　おい親方、何とかしてくれ。何を云つてやがるんだかちつとも譯が解りやしねえ。
大人のミッヂ　だから云ふよ。今、實は森の入口でアリナデールといふ小若い武士に出遇つたんだ。
小人のジョン　あはあ、今度は武士か。
大人のミッヂ　さうだ、それで弱つてるんだ。
小人のジョン　何も弱る事あねえ。よし來た。俺がふつくぢいてやる。此處らをうろついてる武士なら、どうせ俺の拵へた劍をぶるさげてやがるだらう。罪ほろぼしに叩きのめしてやる。
ロビンフッド　まあまあ、話を一通り聞かなくちや駄目ぢやねえか。
大人のミッヂ　さうさ。聞いてくれなくちや駄目だよ。そのアリナデールといふ男はね、武士は武士だが、どうしてもその武士は嫌だといふんだ。その譯が俺達には、す解り兼ねるんだが、まあ、何しろ、クリスタベルといふ娘さんと戀をして、結婚の約束をしたんだ。所がジョン王の甥のグロースターといふ奴が、そのクリスタベルに

横戀慕をして、その娘さんの親父を口說き落として愈々明日結婚式を擧げる事になつたんださうだ。アリナデールといふ男は、武士は武士でもあまり身分のいゝ方でなく、どつちかと云へば貧的なんで、娘さんの親父も考へたらしいんだね。どうも見るも氣の毒な程しをれ返つてゐるよ。どうしても仲間に入れてくれつて聞かないんだ。

ロビンフッド　よし會はう。つれて來るがいゝ。

大人のミッチ　ほう、會つてくれるかね。よし來た。すぐつれて來る。（去る）

小人のジョン　親方、武士を入れるかも知れねえんですか？

ロビンフッド　さうだよ。あの男がさういふ家に生れたのはあの男の罪ぢやない。動機は何でも、その脫け出しにくい境遇から脫け出して俺達の中へ這入つて來たいといふなら、俺達はそいつを手助けするのが當り前だ。

（灰色のみすぼらしい服を着たアリナデールが大人のミッチに連れられて出てくる。）

ロビンフッド　一應の話は大人のミッチから聞きましたが、あんたは此處へ這入つてどうしようとなさるんです。

アリナデール　（沈んだ聲で）　私は死んで了ふか、それとも此處へ入れて頂いてこの苦しみを忘れるか、二つに一つしか路がないのです。

ロビンフッド　だがあんた、そんな苦しみを忘れる爲なら、こんな所より修道院の門を叩いた方がよくはなかつたですかねえ。

アリナデール　私は僧侶を憎みます。何故と云つてヒヤフオードの僧正は、一旦私とクリスタベルの婚約を認めて置きながら、忽ち向ふの一味になつて了つたからです。

ロビンフッド　あんたは何故默つてひつこまうとするんです。何故復讐しようとはしないんです。

アリナデール　駄目です。向ふはジョン王の甥です。私一人の力ではとても及びません。それにたとへどんな男でも、結婚して了へばクリスタベルの夫です。その男に危害を加へたくはありません。それにあの娘も妻になつて了へば段々に夫を愛する様になつて幸福になれるかも知れませんから。

ロビンフッド　すると、その娘さんはお氣の毒だが、あまりあんたを思つては居りなかつたと解釋しなくちやなりませんな。

アリナデール　いや、決してさうぢやありません、だがあれはまだ年の行かない弱々しい娘ですから、父親の命令に反く譯に行かなかつたんです。クリスタベルがどんな人間をも私程愛したことがなく、又これからも決して愛

きないだらうと云ふことを私は誰にでも公言出來ます。

ロビンフッド　そんな父親の命令には當然背くべきだとは思ひませんかね。

アリナデール　さう思ひます。だけど氣立の優しい娘ですから——。

ロビンフッド　だからあんたが強くしてやる必要があるんぢやありませんか。弱々しいとか氣立てが優しいとかいふことは、女の美點ぢやなくて大きな缺點ですよ。あんたはあんたのクリスタベルをあいつらの手から取り戻すべきだ。

アリナデール　でもそれは到底出來ません。ジョン王とヒヤフオードの僧正がついてゐます。

ロビンフッド　そんなものがなんだ。たとへ獅子王リチヤードがついてゐようが構つたこつちやないさ。

アリナデール　（驚喜して）出來ますか!?　本當に出來ますか!?　取り戻せますか!?

ロビンフッド　大丈夫だ。結婚式はどこの教會堂だね。

アリナデール　テール・アベー。

ロビンフッド　よし、ヒヤフオードの僧正が來た、と言ふ[illegible]云はない内に掠つさらつて來てあげませう。その後始末はどうするね。

アリナデール　私達は森の中に住つて、あなた方と同じ意識に達する様に務めませう。クリスタベルを奪ひ取つたとなればジョン王とその一味が生きるか、それとも私達が生きるか、二つに一つです。

ロビンフッド　（小人のジョンに）皆を呼んでくれ。明日の手筈を相談しよう。

（小人のジョンは角笛を高く吹き鳴らす。）

（暗　轉）

5

小さいタイトル。

更る夜。

6

森の中、笛吹きの老人に假裝したロビンフッドが出て來る。後からタックがついて來る。遠くの方から歡呼の聲が聞えて來る。

タック　うまく行きましたねえ、親方。私は生れてから未だこんなに胸のすつきりしたことはありませんよ。親方も仲々芝居氣がありますねえ。だが何と云つてもあのヒヤフオードの僧正が眞蒼になつて聖者の名さへ呼べないで、ふるへてゐた所は見物でしたなあ。親方、何んだかひどく考へこんでるぢやありませんか？

ロビンフッド　（笛吹きの假裝を取りはづしながら）うむ。俺は生れて初めて、ひどく美しいものを見たといふやうな氣がした。若い男と女が夢中になつて愛し合ふと云ふことが、どうして俺の感情をこんなに動かすんだらう。初めあのグロースターと云ふいやらしい奴を追拂つて、若い二人をお互の腕の中に抱かせてやつた時は、何だか自分もとろける樣にうれしかつたが、二人が顔を眞紅にして何時迄も何時迄も堅く抱合つてゐるのを見てゐたら、何んだか自分が深い池の底へ、止め度もなく落つこちて行くやうな氣がして來た。で、俺は今考へて居るのだ。この美しいものは決して永續しまい。何故と云へばそれはあまり獨占的な箇人的なものだからとな。

タツク　だが私は私の妻が未だ生きてゐた頃の事を思ひ出します。私はどんな事があつてもあれの懷へ逃げ込めば慰めを得ることが出來、安息を得ることが出來ました。あれもまた私に對して同樣でした。私達はですから二人の他、何もいりませんでした。どんなにつらい境遇が襲つて來ても二人で作つた殼の中へ閉ぢ籠れば、春の樣に樂しくしてゐることが出來ました。そして親方、こいつは永續するんですよ。少なくとも私の場合は、あいつさへ死ななければ何時迄たつて永續したに違ひないんです。その代り、二人を被ふ殼は、一日一日と、固く厚くなつて行つたに違ひないんです。親方、こいつは曲者ですよ。此の人間の一番烈しい本能、性慾と結び付き、一方あらゆるロマンティックなものや、宗教的なものと結びついたこいつは。

ロビンフッド　さうだ。こいつは曲者だ。だが俺に手綱を放して投げ出したくなる。俺は探しさへすれば、いくらでもまだ逃げ口上が見付けられる樣な氣がする。

（騷ぎが近づく。花嫁のよそほひのクリスタベルとアリナデールとが抱き合つて逃げて來る。あとから「樂しき人々」が花を投げ、口々に呼びながら追つて來る。）

〇　女王樣萬歲！

×　花嫁萬歲！

△　森の中の初めての女性萬歲！

小人のジョン　（皆を止めながら）さあさあ、もういゝ加減に寢かしてあげるがいい。二人はさつきから待ちくたびれてゐるんだ。さあさあ、引き取つたり！　引きとつたり！　（押し戻す）

（皆は押し戻されながら叫ぶ。）

●　左樣なら！

×　お休みなさい！

〇　花嫁萬歲！

7

小さいタイトル。

或る日

8

森の中をロビンフッドが黒い甲冑をつけて歩るいてゐる。顔も覆はれてゐる。銀色の甲冑をつけ同じく顔を覆つた武士が一方から出て来る。

ロビンフッド　銀色の甲冑の騎士、名を名のられい、何故あつて此の森を通らるるか、此處へ赴かれるか。それがしの許しなくては此森を抜けることはかなひませぬ。

（相手は默つて立ち止つてゐる。やがて劍を抜いて見構へる。）

ロビンフッド　うむ、答へようとはなさらぬな、悪るい名前と悪い用事と悪るい行先には死がまつてゐるぞ！　覺悟しろ！

（二人は戰ふ。とど銀色の甲冑の騎士はロビンフッドの甲に切り込むと面覆がはられて落ちる。それと同時にロビンフッドは相手の劍を卷き落として相手に切り込まうと踏み込む。）

マリアン（叫ぶ）おお、ロビン！

ロビンフッド（呆然として立ちすくむ）

マリアン（兜を脱ぐと下から美しい娘の顔が表はれる）

ロビンフッド（叫ぶ）マリアン！

（二人は走り寄つて互ひにいたはる。ロビンフッドの額から流れてゐる血をマリアンは布で包む）

ロビンフッド（ちつとマリアンの顔を見ながら）マリアン！　マリアン！　マリアンだ！

マリアン　さうですよ。マリアンですよ。ロビン。マリアンですよ。あなたは覺えてゐて下さつたわね。

ロビンフッド　マリアン、マリアン、あぶない所だつた。こんな格好をしてどうした譯なんです。何處へ行く所なんです。

マリアン　あなたを探しに。

ロビンフッド　え？　私を？

マリアン　私は人の噂を聞いて、シャーウッドの森のロビンフッドといふのは、私の好きなロービン様に違ひないと思つてゐたのです。この間ノッチンガムの市場で私は牛肉を一斤十グロートで賣つてゐる肉屋をチラッと見ました。鬚が生えてずつと頑丈にはなつてゐたけれど、その顔はロービン様にそつくりでした。後でその肉屋が恐ろしいロビンフッドだつたと云ふことが評判になりました。私の考へてゐたことは間違ひではなかつたのです

わ。私はもう居ても立つてもゐられなくなつて、かう考へたのです。私はロービンさまが来た男の子だつた頃の遊び友達たつたに過ぎない。ロービン様は決して私のことを何んとも思つてはいらつしやらないけれど、私は悪るい女の子だから、その時からズツト、ロービン様が大好きで仕様がないのだ。どんなになつても構はないから私は出掛けて行かうつて。あ、あなた咽喉が乾かない？

ロビンフッド　ありますよ。水ならほら此處に。

（二人は小さな泉から水を飲む。）

マリアン　あゝおいしい。話しちやうわね。すつかり。それからね、私、森の中へ女の姿で這入つて行くのは危いと思つたから鎧を着て行くことにしたのよ。それにあなたは近頃武士が大嫌ひだつていふ噂だから、武士のナリをして行けばあなたはすぐにやつつけに飛び出してくるだらうつて考へたの。それからもしかするとあなたが私をもうすつかり忘れてやしないかと思つたんだけど、私は他の女の子と違つた子だつたから、多分覺えてゐて下さるだらうと思つたのよ。私の考へてゐたことは皆本當だつたわね。だけどロービン、ああ、ロビンフッド、あなたどうしてそんなナリをしてゐるの？

ロビンフッド　私はふと昔のことを思ひ出したのです。城櫓、窖、錨――それからあなた。あなたの顔が浮び上つて来たのです。あなたは不思議な子だつた。あなたは私の見ることの出來ないものを始終まはりから見て取つてゐた。私はそれを驚嘆してゐました。そして始めて氣がついたのです。私といふ存在は知らず知らずのうちに、あなたと隨分融合して出來たものだと云ふことに。

マリアン　それは私だつて同じことよ。私も丁度あなたの事をさう考へてゐましたわ。

ロビンフッド　いゝですねえ、マリアン。

マリアン　ええ、いゝわ。ロビンフッド。

ロビンフッド　あなたは無論こゝに止るでせう？

マリアン　ええ。

ロビンフッド　そして私と結婚するでせう？

マリアン　ええ。

ロビンフッド　お父さんやお母さんは？

マリアン　二人とも私を特別に愛してもくれなかつたし、私も少しも愛せないのだから構はないの。

ロビンフッド　だが、あなたは今僕がとんだ仕事をしてゐるか、そしてその爲にはいろいろの苦しみに耐へなければならないか、又何時生命を差出さなければならないことになるかも知れないのだと云ふ事を知つて居ますか？

マリアン　大體は解つてゐるわ。だけどよくは解らない

[illegible]でも私たつてもう構はないわ。私はあなたの云ふことは何でも聞き、あなたの死ぬ時には一緒に死ぬわ。

ロビンフッド　ぢやあきまつた。マリアン。さあ腕を組んで皆の所へ行かう。さあ勇ましく歩るいて行かう。二人二人男の様に、或は二人の女の様に、歩き出す。

——幕——

第五幕

（この場面の轉換はフラッシュ・バック式に迅速である。）

—

大きいタイトル。

闘爭。

小さいタイトル。

（十字軍の陣内、或る夜。）

小さいタイトル——。

溶

中

兵隊の若者二人出る。

若者一　おい世の中がひどく暗澹として來たぢやないか。

若者二　うむ、獅子王リチャードが愈々聖地から歸つて來たさうだ。

若者一　ほう、さうか。愈々歸つて來たか。ぢやどうするだらう。ジョン王は一人で「樂しき人々」と戰ふだらうか。それともリチャード王の援けを求めるだらうか。

若者二　僕の考へぢやあ、たとへ援けを求めなくても、リチャード王の方から乘り出して來ると思ふね。

若者一　さうなつたら、なんぼ「樂しき人々」でも手も足も出まい。

若者二　しかし手だれの者が多いからなあ。

若者一　「樂しき人々」「樂しき人々」と云つた所で百人足らずしか居やしないのだらう。いくら手だれの者が多いたつて勝負にならんよ。こつちにや昔、俺達みたいなのがいくらもゐるし、ジョン王の手の者たつて戰場往來の騎士が何百人もゐるんだ。

（遠くから多勢の笑ひ聲。）

若者二　うえツ。まああの笑ひ聲だ。

若者一　うう、氣味が悪い。

若者二　近頃は又しつきりなしに笑つてやがるな。うう、ゾツとする。（去る）

（時　轉）

3

靴屋の親方と職人が仕事をしてゐる。紙を結んだ矢が射込まれる。

職人　（それをひろつて讀む）　來た！　たうたう來た！　五日以内に森の中でのろしが三發上る。それが合圖た。

親方　よし！　武器を鍛冶屋のベーツの所へいつてこつそり受け取つてこい。さ、急いで隣にも知らせて來い。

（暗　轉）

4

鍛冶屋のベーツが劍を鍛へてゐる。變裝した小人のジヨンが手傳つてゐる。

小人のジヨン　さあ今こそは俺の鎚が本當の目的の爲にきたへてゐるんだ。さあ、打ち込め！

ベーツ　敵の爲に刈る鎌、おれ等の仲間を縛る爲の鎖、あいつ等の劍となつてゐた鐵よ！　さあ今こそお前の無類の強さを現はせ！　無類の鋭さを現はせ！

小人のジヨン　俺の腕が歡呼して居る！

ベーツ　鐵が眞紅に笑つてゐる！

（入口に靴屋の職人が現はれる。）

職人　おい、ベーツ。劍をくれ。

ベーツ　（二本を取つて渡す）　さあ、これだ。しつかりやれ！

職人　大丈夫た。（小人のジヨンを見て）　おゝ小人のジヨンぢやないか。

小人のジヨン　うむ、久し振りだなあ。

職人　街は危險だぞ。見つからないやうに氣をつけて呉れ。矢を射込んで呉れたのは誰だ？

小人のジヨン　大人のミツチだ。お前こそ劍をみつけられるな。（ベーツに）　さあ打ち込め！

（暗　轉）

5

探偵二人。

探偵一　何か見つけたか？

探偵二　怪しい奴が小さな弓をもつて風の樣に馳け行つた。

探偵一　追つかけろ！　どつちだ。

探偵二　面倒だ。それに風の樣な奴だ。

探偵一　馬鹿。貴樣は頼まれ仕事だと思つてゐるのか。俺達探偵の生命にかかはることだぞ！　奴等が勝ちや俺達の生命はないんだ。さあ、追つかけろ！　（探偵二を引つぱつて馳せ去る）

6

變裝した大人のミッドが飛び出して小さな弓で矢を射る。呼笛がなる。探偵が四五人バラバラと飛びかかる。

大人のミッドは弓を川の中に投げ込む。

探偵一　弓を取れ！

探偵二　川の中へ投げ込みやがつた！

探偵三　流れが早いからもう見えない！

探偵四　こら、來い！　畜生め！

（縄を打つて引き立てて行く）

7

小さなタイトル。

農地。

緑色の服のまゝのニムが焚火を取り卷いた百姓達に話してゐる。夜。

ニム　五日以内に森の中でのろしが三つ上つたら、それが合圖だ。諸君、皆の者の手筈はすつかり整つてるんだ。時が來たんだぞ、諸君、しつかりやつてくれ。

（聞き入る）

トム　（立ち上る）皆、ローチヤーを憶えてゐるか、ーーロンドンで殺されたのだ、俺はあの晩、營の窓から街に見たバーキンの顔が忘れられれねえ、俺達十八人は燒き殺されれべえ、村の衆のかけた火で燒き殺されるのはさぞ樂しかんべえぞとバーキンは叫んだ。そして俺達はその次の夜、眞紅に燃える火の中で喚び叫ぶ聲を聞かなかつたか

ーー聞いてゐる百姓達の中に唸る聲、泣く聲が起る。その中にはチヤールスの小僧もゐた。この尊い犧牲を踏みにじつた者は誰だ！　血であがなつた俺達の勝利を[illegible]めしたものは誰だ！　あの時は僅か六ヶ村の者の力だつた。今度はどうだ。森から村から町から、ノッチンガム、シヤーウッド近傍のすべての抑壓された民が立ち上るのだ！　そしてもし獅子王リチヤードまでが敵に手をかせば英國全體の戰の口火になるのだ！　默々として土を耕やしてゐた鋤と鍬を敵の血に飢ゑた武器にするんだ！

（「わあーつ」といふ皆の呼び聲。）

（暗轉）

8

小さなタイトル。

城。

9

徵發された百姓がジョン王の城の堀を掘つてゐる。

夜。

バードルフ　（忍んで來る）おい！

百姓一、二　おゝ「樂しき人々」だな。

（他の百姓も集まつて來る。）

バードルフ　君達は自分が今何をしてゐるかを知つてゐるか？　君達はジョン王の城の堀を掘つてゐるのだぞ。

百姓三、四　知つてゐる。だがどうにも仕樣がねえ。

バードルフ　おや、俺は君達の顏を見たことがないぞ。君達はどつから來たんだ？

百姓五　俺達は遠くから引つ張つて來られた。トレント河の岸から來たんだ。

バードルフ　君達は自分が今何をしてゐるかを知つてるのか？　君達はジョン王の城の堀をだ。

百姓一　だが俺達はお前さんが、おれ達の身方の「樂しき人々」の者だつてこたあ綠色の着物ですぐわかるだ。

バードルフ　よし。そんなら此の堀を掘ることをやめるんだ。俺達は明日明後日にもこのジョン王の城を攻め落すことになつてゐる。君達が掘る一インチ一インチが俺達の仲間を殺す罠になるんだ。さあ仲間を裏切りたくなかつたら、すぐに君達の村へ歸つて行つてこの話を村の人達にするんだ。俺達の勝利は君達の勝利だ。

百姓一　おい、埋めべえ！

百姓二　さうだ、この堀を埋めてしまふべえ。

（堀をどんどん埋め初める。）

10

小さいタイトル。

ノッチンガムの郡長の邸。

11

郡長の邸の裏口。夜。タックがこつそりと出て來て、戸を叩く。やがてあかりを持つた下女が戸を細目に開ける。

下女　駄目よ、また來てさ。奧樣はお會ひにならないんだつたら。

タック　奧樣にさう云つて下さい。たつた一度きり、今度きり、もう生涯お會ひしないんだからつて。お願ひです。是非取次いで下さい。是非お話しなければならないことがあるのだからつて。

下女　絕對に取次いぢやいけないつて云はれてるんだけどねえ。

タック　だから、もうこれつきり、生涯にたつた一度つきりつてお願ひしてるんです。お願ひします。お願ひします。

大人のミッヂ　殺せ――殺せ――（唸る）――犬――惡魔――。

タック　ネル――俺はもしお前に會つたら――裏切つたかも知れないのだな――やくざな父親！　――祕密が安全であるやうに――死ね！！（壁にあたまを打ちつけて死ぬ）

第六幕

1

大きなタイトル青く。

ロビンフッドの死。

小さいタイトル赤く。

同じ窖。その日。

2

ジョン王の城の窖。痩せ衰へたた大人のミッヂが壁にもたれて小さな窓に顏を向けてゐる。夜。

大人のミッヂ　（呟く）まだか――まだか――まだか。

（急に外に騷がしい物音。喇叭。角笛。叫び。武器の音。）

○　起きろ！　起きろ！

△　ロビンフッドだ！

×　樂しき人々だ！

□　一揆だ！

○　出會へ！　出會へ！

×　城壁に登れ！

□　油斷するな！　敵は多いぞ！

（大人のミッヂは壁にすがつて立つ。）

大人のミッヂ　（叫ぶ）萬歲！　火をつけろ！　叩き殺せ！

牢番　（飛び込んで來る）ほざくな！　やかましい。何をよろこんでやがるんだ。馬鹿！　リチヤード王の軍勢がもう目と鼻の先まで來てるるんだ。貴樣から先に地獄へ行け！

（切り殺す。外の騷ぎ愈々激し。）

（暗　轉）

3

小さいタイトル。

丘の上。

堀を埋めた百姓達が十人許りで遠くを見てくる。

百姓一　見ろ見ろ、俺達の埋めた堀の上を黑山の樣に進んで行くぞ。

百姓二　どうだ、あの勢ひは！

百姓三　おゝ城に火の手が上つたぞ！

百姓四　さあ、ジヨン王の城も愈々落城だな。

百姓五　ざまを見ろ！　ざまを見ろ！

百姓六　おや、あすこを見ろ！　あの砂煙は。

百姓七　何だらう？　おゝ、恐ろしい多勢の武士達だ！

百姓八　恐ろしい立派な騎士たちが多勢ゐるぞ。金銀の鎧をつけてゐるぞ。

百姓九　十字軍のしるしをつけてゐる。

百姓十　赤い十字の旗をもつてゐる。

百姓一　獅子王リチャードの軍勢だ！

百姓二　味方の軍勢が無惨に蹴散らされてゐる。

百姓三　城が焼け落ちる！　城が焼け落ちる！

百姓四　すつかり焔に包まれた！

百姓五　おや、いつの間にか戰場の半分以上がリチャード王の軍勢に占領されちまつたぞ！

百姓六　おい、皆、身方は負けさうだ。見殺しにして歸れるか。

百姓　（口々に）　さうだ！
行つて戰へ！
加勢しろ！
加勢しろ！

（皆岡を驅け下りて行く。）

（暗　轉）

4

小さいタイトル。
森の中。

5

小人のジヨンが血だらけになつて出て來る「樂しき人々」が二人三人と手負ひになつて落ちのびて來て倒れる。

小人のジヨン　（叫ぶ）　ロビンフツド！　ロビンフツド！

（ロビンフツド深傷を負つて出て來て倒れる。）

ロビンフツド　殘念だ！　小人のジヨン！　殘念だ！　裏切つた奴があるに違ひない。この日をリチャードに告げた奴があるに違ひない。（不意に立ち上る）う、マリアンだ。不意に姿をくらまし居つて、う奴、間諜だつたた。

（倒れて居たニムが半身起き上つて叫ぶ。）

ニム　見た。俺は見た。銀色の甲冑を着たマリアンが敵軍の中で指揮してゐるのを！　ロビンフツド！　殘念です！　（倒れる）

ロビンフツド　う奴、あ、小人のジヨン、さ、弓を借せ！

（小人のジヨン弓を渡す。）

ロビンフッド　（立ち上つて）う、うぬ、マリアン！　リチャード！（射る。二三間しか飛ばぬ）おう、小人のジョン、飛んだか？（倒れる）

小人のジョン　（泣きながら）おお、飛びました！　飛びました！

（バードルフが飛び込んで來る。）

バードルフ　お、ロビンフッド！　ロビンフッド！　味方は未だ負けはしません！　味方を蹴散らしたのはリチャードの軍の馬にのつて先驅けしてきた貴族や騎士達です。後から來た徒歩の軍兵や傭兵たちはリチャードに叛いて騎士達に攻めかゝつてゐます。一遍逃げ足のたつた百姓達はまた勢を得て盛り返してゐます。

小人のジョン　本當か？　それは？　おゝロビンフッド、聞きましたか？

ロビンフッド　（叫ぶ）聞きましたか？　勝て！　萬歳！　（死ぬ）

――幕――

（一九二七・一二）

進水式（一幕）

人物

カイゼル・ウヰルヘルム二世
宮廷牧師兼皇子教育係　フロムメル
侍從武官オイレンブルク伯爵
第三皇子　アダルベルト
劇作家　ウヰルデンブルッフ
納戸奉行
宮內大臣　フオン・ミケル
式部官
北獨逸ロイド汽船會社支配人　エフ・レイス
納戸奉行の下役　數人

第一幕

所　伯林の宮殿の謁見室

時　一八九八年六月の或る日の午前十一時頃の謁見時間

舞臺　ルネッサンス式とロココ式の混和した、例の通り白と黄金色と深紅色とで彩られた大廣間。天井から飾り澤山のシャンデリヤがさがつてゐる。上手の壁に二つ、下手の壁に一つのドアがある。上手の壁のドアの內、奥の一つは衣裳部屋へ通じてゐる。納戸奉行が常につめかけてゐて、御座の更衣に備へてゐる。下手の壁のドアはもう一つの謁見室に通じてゐる。そこでは多人數一度に參內した人達に謁見するのである。正面上手寄りに窓。下手寄りに二重のガラス扉の外にバルコン。この部屋は二階であるから、ガラスを通して綠濃い樹々の頂が見える。卓子、椅子等適宜に置いてある。特に何のすぐれた趣味も現はれてゐない部屋である。カイゼルはプロシヤ陸軍親衞軍野砲兵大將の通常服を着、劇作家ウヰルデンブルッフと[illegible]なしてゐる。ウヰルデンブルッフは背の高い、瘦せて、顎鬚、頰鬚の黑々と生えた男である、極端に深重な態度で、常に頭をうつむけ、畏る畏る御相手をしてゐる。傍に宮廷牧師兼皇子教育係フロムメルがお手につぶれたシルクハットを持つて立つてゐる。子供のやうに小さな身體の老人である。

丁度カイゼルの坐つてゐる後ろの壁に、メンツエルの描いた等身の「フリードリッヒ大王像」がかゝつてゐる。

遠くの方でかすかに軍楽隊の行進曲。宮殿の前の街路を通り過ぎて行くらしい。

カイゼル　（カルタを續けながら）ふむ、そしてお前はその椅子の上に何を見たといふのぢやね？

フロムメル　私の帽子をでございます。陛下。

カイゼル　ふむ、そして皇太子もまたその椅子の上にゐたといふのぢやね。

フロムメル　いえ、アダルベルト親王がでございます。

カイゼル　ふむ、帽子とアダルベルトとがその椅子の上にをつたといふのぢやね。

フロムメル　いえ、椅子の上には私の帽子だけがあつたのでございます。

カイゼル　するとアダルベルトは何處にをつたといふのぢや。

フロムメル　私の帽子の上にでございます。

カイゼル　ぢやお前の帽子はつぶれたらうが。

フロムメル　はい、此の通りでございます。（つぶれた帽子を差し出す）

カイゼル　（初めてカルタから眼を離して帽子を見る）うわッ、これはいゝ、出かしたわい。アダルベルトの小倅め。フロムメル、これは以前よりずつとお前に似合ふわい。うわツはツは。（帽子をフロムメルの頭にのせる）こりや、アダルベルト、出て來い、偉い奴ぢや、お父さんが頭を撫でてやらう。さあ出て來い。（十一二歳のアダルベルト親王ちよこちよこと隣室から驅け出してくる。此の時ウヰルデンブルッフは札を一枚まくつたが、その表を見るとあわてゝ元に戻さうとする）

カイゼル　（めざとくそれを見つけて）何ぢや、ウヰルデンブルッフ、出せ！　まくつたものは出せ！　怪しげな眞似をするな。（アダルベルトは驚いて途中で立ち止まる）

ウヰルデンブルッフ　はッ――はッ。（止むなく札を出す）

カイゼル　（激怒して）何ぢや？ハートの一ぢや？　馬鹿奴！　（カルタを床に投げつける）ウヰルデンブルッフ！貴、貴、貴樣は何たる賤しい奴ぢや！　ずるにきまつた。貴樣なんぞにハートの一が出る筈がないわ。畜生。つけあがるな。兵六玉め。俺が貴樣をこれつぽつちでも寵してをるなぞと思つたら飛んでもない間違ひだぞ。へん、貴樣のやうな低腦を。誰か！　何だあのざまは。あの「ハインリッヒ四世」といふ芝居は。馬鹿め。あんなものをよくも芝居でございなんどといつて、持つて來られたも

くれた。俺の折角くれてやつた材料も滅茶苦茶ぢやないか。手前の面は全體何故嫌りなんだい。呆れたもんだ。生眞面なことをしてゐると向後貴樣の作品には材料もやらんし手も入れてやらんぞ。（ウヰルデンブルッフは此の間中汗をかいて恐懼してゐる。フロムメルは吃驚してゐるアダルベルトを押してこそこそと隣の部屋へさがらうとする）

カイゼル　何處へ行く、フロムメル。（二人は立ちどまる）行け、アダルベルト。（アダルベルトは去る。フロムメルに向つて）此處へ來い。嘗て文部大臣グッスラーに與へた余の言葉に僕は何と書いたか知つてをるか。

フロムメル　はい存じてをります。

カイゼル　云つて見い。

フロムメル　Sic volo, sic jubeo.（「余は斯く欲し、斯く命ず」）

カイゼル　よし。では司法大臣フォン・フリートベルヒに與へた肖影には何と書いてやつたか知つてをるか。

フロムメル　はい存じてをります。

カイゼル　云つて見い。

フロムメル　Nemo me impune lacessit.（「余を害する者は必ず罰せらる」）

カイゼル　よし。（ウヰルデンブルッフに向つて）わかつたか。わかつたら下れ。今日はもう貴樣の面を見たくないわ。貴樣の駄作にも氣が向いたらその中に手を入れてやらう。いいか、現代にはいい藝術は無いのぢや。何も貴樣に限つたことはないわ。たと云つて貴樣を駄作家にないといふわけには行かんさ。藝術は傳統的、英雄的、國民的、繼大的で、時代に超越したもの眞髓とを持つてをらんければならん。現代を見ろ、皆が墮落しておる。いいわ、不景氣な顏をするな。その中に手を入れてやらう。（ウヰルデンブルッフは退場する。フロムメルに向つて）いいかフロムメル、この言葉をお前の頭の中に藏つておけ。俺の金言集の中にしつかり書き込んで置け、「藝術は王者のものなり」いいか。ラテン語でな。（隣の部屋で鞭の音と子供の泣聲がする）何ぢや？　あれは？

フロムメル　は――は。

カイゼル　何ぢやといふに。

フロムメル　皇子が學友を打つておいでになるのでございませう。

カイゼル　アイテルか？　アダルベルトか？

フロムメル　あの鞭の音はアイテル親王の鞭の音でございます。

カイゼル　さうか。何處かもつと遠くの部屋で打つやうに云へ。

フロムメル　はい、くれぐれもさう申し上げてあるのでございますが――（去る）

オイレンブルグ伯爵　（別の戸口から現はれる）陛下。東プロイセンの農事代表者が次に控へてをります。

カイゼル　東プロイセンの農事代表者？　ふむ、さうか。ちよつと待て。――農業――農業と。緑色のズボンを持て！（細戸奉行が持つて来た緑色のズボンを穿きかへる）ふむ、よし。これでよし。（次の部屋へ、去る。次の部屋で彼は演説してゐる）諸君。農業は國家の柱石である。而して農業を支配するものは諸君地主階級である。吾輩は諸君に對して吾輩も諸君と同じ階級に屬する者なることを告げるの光榮を有する。然も吾輩は最大の地主であるが故に諸君の階級の利害は最大の程度に於てまた吾輩の利害である。吾輩は日夜諸君の爲に肝膽を碎いてゐるのであるが、願はくば諸君もまた吾輩を助くるに吝ならざる事を。農はもと平和の業であつて、都市工業とは根本的にその質を異にしてをる。近年往々にして都市工業界は悲しむべき物質文明の悪しき結果として雇傭主と勞働者間の反目を生んでをる。工業は吾輩の悪しき子である。之に反して諸君の間にはいまだに封建の美風が存し、土地所有者と非所有者と和氣藹々として農事にいそしみつつある状態は誠によろこばしき限りである。その状態が美しければ美しいだけ、吾輩の諸君に對する心配もまた大である。吾輩は衷心よりして諸君に注告せざるを得ぬ。第一に、小作人を無制限に酷使する勿れ。諸君また或る程度の犠牲を忍ぶことは諸君の大いなる徳義なることを銘記せよ。第二に、都市と田園とを異なれる範疇に依屬せしめよ。諸君の農民に都市勞働者の悪風を傳染せしむる事勿れ。（聲をひそめて）諸君の農民に祕かに告ぐるに次の二語を以つてせよ。1、田園の事は田園自身にて解決せよ。2、都市勞働者は農民の搾取者なり。（大聲になつて、）どうかや、解つたか。よし、下れ。（彼は快活に笑ひながら戻つて来る。オイレンブルグ伯がついて来る）あははははは。どうかや。俺の經綸は。こんな事は朝飯前のさよ。おい、君。大臣連から報告が來とらんかつたかな。

オイレンブルグ伯爵　はい、陛下は先刻ポケットにお入れになりましたが。

カイゼル　ポケット？　ポケットだつて幾つもあるぞ。どのポケットだかはつきり云ひ給へ。プロシヤ陸軍現役軍野砲兵大將通常服の上着には胸の内側左右に一つづつ――

オイレンブルグ伯爵　陛下は上着の――

カイゼル　（叫ぶ）まだ濟まん！　腰の外側の左右に一つづつ――

オイレンブルク伯爵　そのお腰の外側の――

カイゼル　（叫ぶ）　[illegible]といふに！　右か左か。

オイレンブルク伯爵　右でございます。

カイゼル　（ポケットから紙片を取り出して讀む）　ふむ。十二、十三兩日に、牛肉百ポンド、犢の頭四箇、羊肉二百六十ポンド、[illegible]、五十本、羊の頭二百ポンドか。十、十一日は大分たべたな。今日の晩餐には久しぶりで豚のカツレツを食はう。（紙片に書きつける）　それから、[illegible]は十一日[illegible]、今日は食ふとしよう。羊の[illegible]に[illegible]、それから[illegible]の一皿にする[illegible]、[illegible]これ[illegible]、野菜は白菜ときめよう。魚は鮭、スープはマカロニ入り白スープぢや。（[illegible]大聲で呼ぶ）　おい、これを大膳職に渡してくれ。（紙片を渡す）　オイレンブルグ！　俺は絶えず、しかもめきめきと食慾が増進する[illegible]。（食慾の無い[illegible]といふものは俺には考へられんよ。食慾のない人間は不健康だ。不健康は[illegible]反對物だ。オイレンブルグ！　昨日[illegible]は何を食うた。

オイレンブルク伯爵　はい。英國風でしたためました。茶[illegible]、[illegible]半熟四箇、[illegible]のビフテキ、羊肉のカツレツ、蟹二匹、ブレーチヘン四箇、ハム、腸詰數片づつ、ビール半リットル、林檎一箇でございました。

カイゼル　ふむ、大體俺と同じぢやな野菜分が足らんな。元來野菜などといふものは鶏の胃袋にある砂と同じもので、それ自身何等の生命力をも持つて居らんが、しかし消化のための一種の媒介物として必要缺くべからざるものぢやよ。一般植物の存在といふものはさういふ消極的な意味しか持つて居らん。（窓から外を見る）　見給へ、醜いぢやよ、植物は全く醜いぢやよ。オイレンブルグ、誰か以前にそんな事を云つた人があるかな？

オイレンブルク伯爵　は、どんな事を？

カイゼル　馬鹿！　植物は醜いといふ事ぢや、聞[illegible]、

オイレンブルク伯爵　さあ、一向に聞き及びませんでございますが――

カイゼル　（叫ぶ）　フ――ロ――ン――メ――ル！

フロムメル　（遠くで）　はあい。（やがて驅込んで來る）　お召しでございましたか？

カイゼル　余言の發見ぢや。書き込んだか？　「およそ植物は醜なり。」

フロムメル　は、「およそ植物は醜なり」でございますな。

カイゼル　さうぢや。さうぢや。（フロムメル去らうとする）　待て。アダルベルトを呼べ。

フロムメル　は。（去る）

カイゼル　（窓から外を見ながら）俺は馬鈴薯は「缺くべからざる惡」ぢやと思ふとるよ。農業も然りぢや。地主も農夫も兩方とも俺には嫌ひぢや。全く氣に入らんよ。しかし俺は強靱でなければならん。俺のトラケネル牧場の栗毛馬の脚のやうに強靱でなければならん。力とは矛盾の中に平氣で生きる事ぢやからな。

フロムメル　（耳に何か囁きながらアダルベルトを押して出て來る）陛下――

カイゼル　（振り向いて）アダルベルト。此處へ來い。（窓の外を指し示しながら）どうぢや、あの綠色の樹を何と思ふな？

アダルベルト　（躊躇なく）醜です！

カイゼル　ほう？（アダルベルトの顎に手を掛けて疑はしげに頰を覗き込む。やがて）ぢやあ何が美しいのぢや？

アダルベルト　（間誤ついて眼を轉がしながら）それは――それは――お父樣のヨットです。ホーヘンツオルレン號です。

カイゼル　ほう？　ホーヘンツオルレン號かな、何故美しいのぢやな？

アダルベルト　大口徑速射砲が三門と、小口徑砲が十二門あるからです。

カイゼル　（ニコニコして）成程。それから？

アダルベルト　速力が二十海里だからです。

カイゼル　それから？

アダルベルト　排水量四千百八十七噸だからです。

カイゼル　（呵々大笑して）よし、よし、フロムメル。此奴にパイを一つやつてくれ。（フロムメルはアダルベルトを伴れて去る）オイレンブルグ。晝飯に繪描きのメンツエルを呼んでくれ。ホーヘンツオルレン號のサロンに壁畫を描かせてやらうと思ふんぢや。ウヰルヘルム一世の戴冠式の圖がいゝと思ふがどうぢや。

オイレンブルグ伯爵　さよう。それにまさつた題材はございますまい。

カイゼル　繪は社會の低劣な姿を寫すためのものではない。わしは繪に限らん、すべての藝術は國民の運命を左右する英雄的人物やその行爲を描き出すためのものぢやと思ふ。肖像畫は風景畫よりも常によい畫ぢや。しかし畫家の持つ事の出來る最大の畫題は偉大な君主の肖像ぢや。こんな解りいい道理に氣が附かんのだから畫家共も困つたものだ。メンツエルにしてからがフリードリッヒ大王樣のやうな古今の名作を描くかと思へば、一方では、ヴェロナの市場とか、列車にて―とかいふ言語道斷の愚作に精力を浪費しとる。俺の治世中に獨逸藝術はまつ藝術で世界

を征服せんければならんのに奴等は勝手氣儘に自墮落な生活を送つとる。馬鹿者共奴が！　技巧の點も全く駄目ぢや、全歐洲に亘る藝術の墮落ぢや、我が國の藝術家の技巧はルネツサンスの巨匠共の技巧の足元にも及ばぬ。その上教授先生方の御意見に依ればルネツサンスにしてからがアンティークには及びもつかんさうぢやないか。藝術上に於ては人類はまさに退歩しとる。戲曲にしてもさうぢや、ウヰルデンブルッフの意氣地なしめ、いくら俺が絶好の材料を提供してやつても、よう書きこなすことすら出來んぢやないか。さうかと思へば愚民共はハウプトマンとかズーデルマンとかいふ泥まみれの襤褸みたいな者に拍手喝采しとる。奴等には藝術のよさはそれが高貴な點にある。藝術家の偉大さはその距離の感じにあるといふ事が[illegible]してもわからんのぢや。愚民共め！　全く愚民ぢや！

オイレンブルグ伯爵　まことになげかはしい狀態でございます。

カイゼル　メンツェルが來年の春の定期展覽會にいい繪を描いたら黑鷲勳章をくれてやらう、ちつとは馬鹿者共の眼をさます役に立つたらう。何しろ早速使ひをやつて今日の晝飯には引張つて來給へ、

オイレンブルグ伯爵　畏まりました。（去る）

宮内大臣ノオン・ミケル（現はれる）麗はしい御機嫌を拜しまして、ええ、誠に幸福でございます。

カイゼル　フオン・ミケルか。何用ぢや。

フオン・ミケル　ええ、實は七月にキール軍港に於て行はれまする戰鬪艦フリードリッヒ三世號の進水式への行幸の帝室列車につき、ええ何か特別のおぼし召しが御座いませうかと存じまして――

カイゼル　ほう「フリードリッヒ三世」には七月に進水するのか。俺は八月ぢやとばかり思つとつた。結構、結構。またまた一つ大演説を考案せんければならんな。よしよし、今度こそは一つ、取つときの名文句を云ふことにするかな。かうぢや。（演説の構へをして）獨逸帝國なく、カイゼルなくんば即ち世界はなきなり！　と云ふんぢや。はははは。所でと、列車の色はもう少し濃い緑色に塗つてくれ給へ。それから皇后用の化粧室をもう少しけんらんたるものにしてくれんと困るね。お蔭で小言をくつたよ。それから皇子を二人ばかり伴れて行かうと思つとるから別に一臺作つてくれ給へ、皆で十臺になる譯ぢや。列車もまた俺の權威のシムボルぢや。充分念を入れんければいかん。

フオン・ミケル　承知致しました。（去らうとする）

カイゼル　（呼び止めて）こら、こら。それからな、その

時は出來るだけ多勢の資本家共をつれて行かうと思ふから餘程澤山臨時列車を仕立てんければならんものと思つてをつてくれ。

フォン・ミケル　承知致しました。（去る）

カイゼル　資本家共も少し敎育して置いてやらんといかんわい。都合のいゝ時にばかりやれ愛國の忠君のとぬかし居つていざ戰爭といふ時に行の繼語などを作りかねん。奴等を俺の思ひのままに操ること、カイゼル！　それがお前の一番大事な仕事だぞ！　いいか。（自分の頭をなぐる）

オイレンブルグ伯爵　（現はれる）ルール炭鑛資本家代表團が參内致しました。

カイゼル　（ハッとして聲をひそめて）次の間に來て居るのか？

オイレンブルグ伯爵　いゑ、溜りに待たせてございます。

カイゼル　よし。次へ入れて置け。

オイレンブルグ伯爵　はつ。（去る）

カイゼル　（別のドアから去る。間もなく胸間に數箇の勳章をきらめかせ、劔を釣つて現はれる。眞直に部屋を横切つて次の間に這入る。やがて、演説する聲が聞えてくる）諸君。諸君は嘗て一八八九年にウエストファリア炭坑の大ストライキに際して吾輩が如何なる處置を取つたかを知つてをる筈である。吾輩はまづ勞働者の代表を引見してその求める所を聞き、その非を諭し、次で資本家代表を引見して勞働者を適度に保護すべきことを說いた。そして吾輩の努力はむくいられて、ストライキは無事に終結したのであつた。この例に限らず凡そ吾輩が絕えず勞資兩者の調定に多大の力を盡し來つたことは諸君が既に充分承知の筈である。今や吾輩は次の如き確信に達してをる。即ち勞働者も資本家も兩者共に先づ第一に獨逸帝國の臣民である。かるが故にすべて兩者間に衝突の起つた場合にはカイゼルたる吾輩に先づ訴ふべきであり、吾輩の裁決に服すべきである。勞働者に對しては吾輩は常に次の如く嚴格に命令してをる。もし汝等の要求が社會主義の煽動に出でたるものなる際は斷乎として嚴罰に處すべし。然らざる場合、即ち純經濟的鬪爭たる限り、カイゼルは汝等のために相當の努力を惜まざるべしと。次に資本家側に對しては次の如く說いてをる。即ち勞働者を無限に酷使することを止めよ。勞働者に適當なる保護を與ふるはこれ實に社會主義を驅逐するに最も有效なる手段なり、と。注意せよ。吾輩は生れたからのカイゼルであり、生れながらの軍人である！　吾輩は吾輩の精鋭なる陸軍と海軍とを所有してをる。諸君が學しむべきニー

カイゼル　（眞赤になつて怒る）阿呆め！　たとへ佛蘭西大使のための饗宴であつても、佛蘭西産のシャンパンを用ゐるといふ事があるか！　佛蘭西は敵ぢや！　從つてシャンパンは惡魔の飲物ぢや！　無論墺地利産のトーカイを出せ！

式部官　はつ。（引つ込む）

オイレンブルグ伯爵　（現はれる）北獨逸ロイド汽船會社支配人エフ・レイス氏が參內致しました。

カイゼル　（急に欣然として）ふむ。愈々出來たな！　早く通せ！　早く。

オイレンブルグ伯爵　はつ。（引込む。すぐにエフ・レイスをつれて現はれる）

エフ・レイス　陛下には御機嫌を拜し――

カイゼル　（早速驅け寄つて兩肩に手を置いて）よし、よし、そんな事は。で、愈々出來たのかな？

エフ・レイス　は。私は世界第一の巨船プレトリア號が昨日無事進水致しましたことを御報告申し上げる光榮を有するものでございます。

カイゼル　（眼に涙をためて）よし、よし。俺は嬉しいんぢや。どうも、いや、全く、まあ、坐れ、坐れ。（抱くやうにして席につかせる）嗚呼、世界一なんだなあ、たうとう。俺はなあ、どうも自身ながら少し變たと思ふよ。何しろ君の會社が新しい汽船の建造にかかつたとか、建造を注文したとか、進水したとかいふことを聞くたんびにかう何だか胸が迫つて涙が出てくるんぢやよ。自分の氣持を解剖して見るとな、俺は汽船が務める仕事、例へば通商とか貿易とかたなあ、そんなものには心が惹かれないんぢや。汽船！　もうそれつきりでいゝんぢや。汽船はまあ例へば野菜のやうに何の役にも立たんものだとしてもぢや、俺は汽船を崇拜するよ。汽船は全く目に見える幸福ぢや。近代的墮落を知らぬ古典的趣味ぢや。單純な、高いものぢや。宗教は道具ぢやが汽船は目的そのものぢや、造つてくれ！　進水してくれ！　儲けてくれ！　よし、よし、（謁見が濟んだといふ合圖をする。エフ・レイスは退出する。オイレンブルグ伯爵に向つて）なあオイレンブルク、全く變ぢやよ。俺は汽船に逢ふと、城主の美しい姫君に出遇つたやうな氣がするよ、かうなとく、温い幸福ぢや。顏がぽおつとするんぢや。汽船は音樂よりも遙に立派な藝術ぢや。ポトシ號、ウヰルヘルム大王號、フルダ號、ヴヰクトリア・ルイゼ號――

オイレンブルグ伯爵　汽船はどうも陛下の唯一の弱點であるらしうございますな。

カイゼル　はつはつはつはつ。さう、それに相違ないわ。確かに弱點ぢやよ。俺の末つ子ぢやよ。八月にはフリー

ドリッヒ三世の進水式に行つたついでにハムブルグに寄つてプレトリア號に乘つて見る事にするかな。
オイレンブルグ伯爵　それがよろしうございます。そして又た皆の意氣を旺んならしめるやうな大演説を遊はして下さいまし。「尊き船よ、愛する船よ、我が海軍を汝の保護者となして、至る處に汝の航路を開け、我が國の將來は海上にあり」といふのは誠に天下の名演説でございました。
カイゼル　さうぢや。俺はかう云つたのぢや。吾輩は單に平和のために我が海軍を作る。海軍は幸福たる汽船の保護のエンジェルなればなり、とな。
オイレンブルグ伯爵　左樣でございました。左樣でございました。割れるやうな拍手喝采でございましたな。
カイゼル　いや俺の演説に拍手喝采はいつもの事ぢやが、ただあの演説は全世界の新聞が擧つて大文字で印刷し居つたよ。
オイレンブルグ伯爵　左樣でございました。左樣でございました。餘程皆の氣に入つたものと見えましたな。
カイゼル　オイレンブルグ。俺は知つとるのぢや、汽船や軍艦の進水式のある毎に俺が出掛けて大演説をするのを、「嫌味な狂言だ」と蔭口をきいて居る奴がゐることをな。
オイレンブルグ伯爵　はつ、どう致しまして。そんな、そんな——
カイゼル　オイレンブルグ！　お前たちこそさう思つとるのぢやないか！
オイレンブルグ伯爵　（青くなつて）そ、そんな、そんな——
カイゼル　お前も思つとるのぢや。俺にはよく判つとるわい。が何と思はうと俺は構はんのぢや。何故と云へば俺は高貴な人間だからぢや。そして高貴な人間とは即ち絶えず一つの役を演じてゐなければならぬ地位にある者のことだからぢや。何故俺が裁縫師を十人、ボタンかがり專門家を五人、ほころび直し專門家を五人、帽子係りを三人、手袋係り三人、靴係り五人、サーベル係り五人、ステッキ係り二人等々々々を詰め切らせて居るかを知つとるか。
式部官　（現はれる）親衛軍騎兵聯隊の新入兵が參内致しました。
カイゼル　よし、庭に通せ。バルコンのドアを開けてくれ。そこから演説をするから。
式部官　はい。（バルコンのドアを開けて退出する。間もなくバルコンの下の方に馬のいななき、蹄の音、劍の音が聞える）

カイゼル　（叫ぶ）プロシア陸軍親衛軍騎兵大將の禮服を持つて來い！

納戸奉行　はつ。（數人の下役をつれて現はれ、更衣の手傳ひをする）

カイゼル　（冑をかぶり、勳章をさげ、髭を撫でつけ、鏡に向つてとみかうみし、やがてバルコンに歩み出る。「敬禮！」といふ號令が下で聞える。カイゼルは手眞似でそれに答へてから、演説を初める）諸君！　吾輩は今日以後諸君を吾輩の兵士として遇する。諸君は吾輩の名譽ある近衛兵であり、諸君の着する所の軍服は特に吾輩の服に型取つて吾輩自ら下圖を描いて作らせた所の神聖なる軍服である。その軍服に名譽を與へよ！　諸君もし吾輩の忠良なる軍人たらんと欲せば、先づ善良なるクリスチヤンとなれ、宗教は諸君を鼓舞して諸君の任務を完全に果させるであらう。諸君は今此處へ來る途中、凱旋道路の兩側に立ち並んでゐる帝王並びに將帥の彫像を見たであらう。彼等は皆歐羅巴平和のために心身を捧げたる武名嘖々たる――

（この演説中、幕靜かに下る）

第二幕

所　キール軍港。戰鬪艦「フリードリッヒ三世」進水式場

時　一八九八年七月

舞臺　正面に戰艦「フリードリッヒ三世」の灰色の腹が舞臺一面に壓倒的に覆ひかぶさつてゐる。舞臺上手にリボンや花で飾られた玉座があり、その上にカイゼルが海軍大將の正裝で腰掛けてゐる。傍にオイレンブルク伯爵が立つてゐる。舞臺にはこの二人がゐるきりである。森嚴な靜寂。

カイゼル　なあ、オイレンブルク。俺はどうも今日は氣分がすぐれんよ。

オイレンブルク伯爵　お顔色がよろしく御座いません！

カイゼル　食ひ過ぎかな、とも思つたが、成程一昨日昨日と大分食ひ過ぎはしたが、この位の運動もまたいつもよりは餘計にしとるんだからなあ。そこでよく考へて見たらなあ、オイレンブルク、（艦をかへりみて）實はこれだ。あれが原因なんだ。（下手の方を指さす）

やつぱり奴隷だ　（人形芝居）

これは手に嵌めて使ふ人形のための脚本である。この技法はごく簡單で費用もかからない。我々の當然着目しなければならない形式である。

人　形

口上云ひ
黑人兵ネポク
士　官
その女
黑人兵ブーカー
フランス兵バスチアン
軍　醫
小隊長
車　掌
稅關吏
アメリカの紳士
産　婆
　其他、黑人兵數人。フランスの士官。種々な佛蘭西人。種々な獨逸人。半黑の赤坊三人。

第一場　セネガルからマルセーユへの軍用船の中
第二場　獨佛戰線後方の一都市。佛軍營倉の門の前
第三場　士官の家の女の部屋
第四場　巴里の街路
第五場　巴里伯林間急行列車の一等室の中
第六場　伯林の街路
第七場　伯林のネポクの住居

一

　幕の前に口上云ひが現はれる。

口上云ひ　（鈴を振る）さあ愈々始まり、始まり。しかけは萬端整つて、幕のうしろに出來てゐますから御安心。
所で私も口上云ひ、
一言云はねば役がつとまりません。
ええ、御見物の皆さん方、
皆さん方は見物人で私共は役者です。
これは勿論云はでものこと。
所がいとも奇妙なのは、
皆さん方は皆さん方だが、
私共は私共ではないのです。

皆さん方が私共の聲だと思つて聞いておいでの聲は、
實は私共の聲ではないのです。
私共の溜息も
私共の喜びも
私共の怒りも
皆隠れて操つてゐる主人の仕業です。
私共は文字通りの木偶、
正眞正銘、木の股から生れたのです。
私共がギクシヤク動くとて、
驚きなさるには及びません。
どうせ木の關節しか持つてゐないので、
いやそんな身振の問題ぢやない、
第一役柄そのものから
私共には撰り好みも出來ません。
私共は魂のない、
ほんの操り人形です。
皆さん方の眼にはさう見えない
主人の思ひのままに踊らされるのです。
だが、人間である皆さん方
うつかり私共を輕蔑はなりませんぞ。
あなた方が自分達のねうちに眼の覺めない限り、
あなた方と私共と何處が違ひませう？

あなた方も生れ落ちるとから
大きな化物の操り人形で
思ふ存分利用されて
いらなくなればポイと棄てられます。
何處かでこんな言葉を聞いた事がありますよ。
「我々は奴隷だ。
奴等にとつては
奴隷が眼をさます程恐ろしい事はないのだ。」
（口上云ひ退場。）
（幕が開く。）

第　一　場

亞弗利加の佛領セネガルからマルセーユへの軍用船の中。黒人兵が暗い下層船室の中でうごめいてゐる。しかし彼等がネグロであることはハツキリ解らなければならない。

——暗い。
——臭い。
——げろだ。
——揺れる、揺れる。
——いつ迄たつても止まらない、いつ迄たつても止まらない。

——誰かこんなざまだと云つたものがあるか？

——フランスは何處だ！ ヨーロッパは何處だ！

——上に出してくれ、四方を見廻はさせてくれ、何處かにもう陸が見えてるのかも知れないぞ。

——さうだ。見させてくれ、何か見させてくれ。

——上には番兵がゐらあ、潜航艇を見張つてるんだ。

——ああ潜航艇！ 俺達はこんな暗闇の中で溺れ死ぬんだ。

——俺は海といふものを知らなかつた。海がこんなものだとは知らなかつた。

——こんなに暗くさへなけりや。こんなに眞暗でさへなけりや。

——上には番兵がゐるんだ。俺達を甲板に上らせまいとして見張つてゐるんだ。

——見せてくれ何か見させてくれ。

——巴里にや女がゐると云つたぞ。巴里にあ。エッフェル塔だ、エッフェル塔だ。文明だ。文明人だ。肩をすり合はせるんだ、鼻をつき合はせるんだ。白い文明人を押し分けなくつちや小路一つ通れないんだぞ。

——俺達が戰をしてやると文明人共が涙を流してよろこぶんだぞ、跪づまくんだぞ、手を握つて接吻するんだぞ。

——接吻！ 女もか？

——女だ！ さうだ、女がだ！

——さうだ、ちよつと戰をしてやりさへすりやあ、ちよつと戰をしてやりさへすりや。

——文明の敵を殺せ！ 野蠻人を殺せ！ 毛の生えた俺達の野蠻人を殺せ！

——俺あセネガルの兵營であのフン族の面とヘルメットを活動寫眞で見た時げろが出さうだつた。

——げろ！

——げろだ！

（吐瀉。嘔聲。）

——奴等は佛蘭西の可愛いい娘達をなぐさんだ。

——フン族を殺せ！

——銃劍を叩き込め！

——惡魔！

——野蠻人！

——毛の生えたフン族！

（絶叫がここで絶頂に達して、突然靜寂に歸する。やがて再び唸聲、吐瀉、泣き聲。）

——（やがて小さな聲で）俺達は活動寫眞で見た

——巴里を、

——エッフェル塔を、

——神樣のやうなフランスの娘つ子を、

――(叫ぶ)そしてあの野蠻人の暴行を!

(再び靜寂。やがて大きな汽笛。)

――汽笛だ!

――着いたんだ!

――着いたんだ!

――フランスか?　着いたのか?　(絶叫)たうとう!!

(ベルの音。遠くからマルセーユ。)

――(皆一度に立ち上つて異口同音に叫ぶ)　着いたんだ!!

第二場

獨佛戰線後方の一都市、兵營の門の前。セネガル植民地兵黑人ネポクが六角形の哨舍の前にしやちこばつて番兵に立つてゐる。

威張つたフランス人の士官がシガーをくゆらしながら營舍の中へはいつてゆく。

ネポクはしやちこばつて捧銃をする。

フランス人の士官が女と腕を組んで前を通る。ネポクは捧銃をする。

女　(士官に)　まあ、おとなしさうな黑坊だこと。

士官　おとなしいんだよ、とても。あんな顔をしてるけどね。

女　あんたちよいと、うちの從卒は頓馬だわね。

士官　ああ頓馬だ。

女　あんたちよいと、あいつ追ひ出しちやつて黑坊を從卒にしない?

士官　うへッ、成程ね、こいつアいい。アメリカぢや列車ボーイまでネグロださうだ。ちよいといい趣味ぢやないか、貴族的でね、人種の異つた奴を從僕にするつてのは一つの人種をさまざま征服したつていふ事がわかつていいもんだ。(ネポクに歩み寄つて)貴様の所屬と名前は?

ネポク　百二十三大隊十二中隊の一等卒ネポクであります。

士官　どうだ、セネガルとフランスとどつちがいい。

ネポク　(熱心に)　フランスであります。

(營所の中から兵卒の合唱が聞えてくる。)

兵卒の合唱

フランスは
フランスは
いいとこ
きれいな國
俺達や進む
武器を手に。

パルレー、ウー、
パルレー、ウー。

士官　どうだ、獨逸人は憎いか？

ネポク　憎くあります！

兵卒の合唱

萬歳、萬歳、俺達や兵士。
カイゼルとつつかまへてひつぱたけ！
カイゼルとつつかまへてひつぱたけ！

士官　貴樣俺の從卒になりたいか？　うまいものを食はせてやるぞ。

ネポク　なりたくあります。

士官　（女に）今晩交渉しよう。（ネポクに）ついでに上等兵にしてやらう。（去）

ネポク　（狂喜して）はッ。

女　まあ可愛いいわねえ。

（二人は去る。）

（ネポクはうれしさで手の舞ひ足の踏む所を知らない。）

（營舍の中から「交替！」といふ聲が聞える。）

（黑人兵ブーカーが出て來てネポクと交替する。ブーカーはだらしなく哨舍の階段に腰かけて煙草を喫む。）

（片腕を釣つたフランス兵バスチアンが通る。）

バスチアン　よう、ブーカー。お前の番か。

ブーカー　よう、バスチアン。どうだ景氣は。

バスチアン　いい天氣だなあ。イゼール河迄ちよつと散歩に行つて來たよ。綺麗な水だつた。だがお前、相變らず怠けてるな。また營倉だぞ。

ブーカー　營倉が何でえ。どつち道同じこつた。一遍こんな中へはまりこんだらもうおしまひだ。怒鳴られ通しだ。命令、命令だ。獸だつてこんな扱ひは受けやしないさ。俺や運送船の上でもう死ぬのかと思つた。小さい時に一遍奴隷狩りに遇つたことがあつたが、その時も死ぬのかと思つた。人間てのは考へてるよりも長持ちするもんだ。軍隊に這入つてこんな奴隷扱ひを受けるなんてことを前に知つてたら、とても堪へられないと考へたに相違ない。だが何處へ行くのかも知らされずに、前進、前進で歩いてゆくうちに、不意に第一線に飛び出して、獨逸兵と鼻をつき合はせて、おや、と思ふ間に毒ガスをかがされた時にや全く死んだと思つたよ。だのに此處でかうして、怠けて煙草を喫んだり、營倉に入れられたりしてらあ。人間なんてものは考へてるよりや長持ち

のするもんさ。

バスチアン　だが同じ目に遇つて來てもネボク見たいな奴もゐらあ。

ブーカー　あははは、あいつあ一風變つてらあ。怒鳴られなくなるにや上官になるより仕方がない。上官になるにやおとなしく勤めなくちやいけない。そこで夢中になつてしやちこばつてやがるのさ。上等兵にでもなつた日にやさぞ威張りやがるこつたらう。所でお前、まだ退院出來ないのか？

バスチアン　ちよつと出來ないね。毎日たつた一時間だけの散歩だ。あとは寢てなくちやならないんだ。所でお前、昨日面白い話があるんだぜ、軍醫の野郎かんかんにたつて怒りやがつた。かうさ。俺がうつらうつらしてたら軍醫の野郎がやつて來て、いやに猫撫聲を出すんだ。

(舞臺暗くなる。)

(一瞬の後明るくなると病院である。)

(バスチアンがベツドに横になつてゐる。)

(軍醫がその枕元に腰かけて話してゐる。)

軍醫　どうだ、氣分は。

バスチアン　よござんす。

軍醫　それはいい。所でお前が癒てなかつたら、ちよいと話をしたいんだが。

バスチアン　へえ。

軍醫　お前は勇ましさうな男だな。さぞ早く傷が癒つて戰線へ戻りたいだらうな。

バスチアン　――

軍醫　ふむ。成程矢張り故鄕へ歸りたい方か。だが歸るにしても義務だけは立派に果してから歸りたいだらうな？

バスチアン　へえ。

軍醫　さうだらう。さうあるべきだ。憎むべき敵、呪ふべき獨逸の惡魔を一人でも多く叩き殺してな。

バスチアン　(身を起して軍醫の耳に口を寄せて)　あんた本當にそんなに獨逸人が憎いんなら、いい事を敎へて上げませう。あんたうれしくつて跳び上りますよ。獨逸の捕虜が毎晩四人あんたに治療して貰ひに來るでせう。あいつ等に毒を塗つておやんなさい。

軍醫　(驚いて)　捕、捕虜は神聖だぞ。

バスチアン　だつて俺等の小隊長は、俺等の食物の少いのは捕虜が多いからだつて云ひましたよ。

軍醫　(怒つて)　貴、貴樣は、何て野郎だ。畜生。人を馬鹿にしてやがる。早速癒して戰線へ送りつけてやるぞ！

(暗くなる。)

(明るくなると再びもとの兵營の門の前。)

ブーカー
バスチァン｝あつははははは。
小隊長（門の中から出て來る）馬鹿。貴様まだ怠けとるな。營倉だ！（ブーカーの襟を取つて門の中へ引つ張り込む）

第三場

士官の家の女の部屋。

女　ネポク！
ネポク　はい。（戸口に現はれる）
女　紅茶！
ネポク　はい。（引つ込む。紅茶を持つて現はれ、置いて去る）
女　ネポク！
ネポク　はい。（現はれる）
女　ペパミント！
ネポク　はい。（引つ込む。ペパミントを持つて來て去る）
女　ネポク！
ネポク　はい。（現はれる）
女　煙草！
ネポク　はい。（引つ込む。煙草を持つて來る）
女　ネポク。お前は幸福者だよ。あんな兵營を出て、樂な從卒になれてさ。その上もう上等兵ぢやないか。お前、さう思はないかえ？
ネポク　はい、幸福であります。
女　それにお前、昔のことを考へりや、お前さん達はどんな事だつて幸福過ぎる程幸福だと思はなくちやならないんだ。昔はお前さん達は否應なしに奴隷に賣られちやつたんだからねえ。私は學問があるから、教へてあげるが、お前さん方が始めて奴隷に賣られるやうになつたのが凡そ五百年前さ。それからといふもの年々輸出の數がふえて、やがてアフリカの奴隷貿易の特別の會社が出來てさ、毎年十萬人づゝも輸出されるやうになつたのさ。が、ちやんと賣られた先迄着いて働けるのはまだいゝ方で、奴隷狩の最中や運搬の途中やで死んでしまふものが毎年その十倍の百萬人もあつたんだからねえ。今ぢやどうだい。ヨーロッパ人と何の異つた所もないぢやないか。暫く艱難の中で我慢してりや巴里へ行つてしたい放題の事が出來るんだ。いいねえ、ええ、幸福だらう！　幸福ぢやないか。
ネポク　幸福であります。
女　（ペパミントと煙草をのみながら）私、聞いたんだけど、黒坊てのはとても情熱的なんだつてね、オーギュスト・コントが云つてるわ、「黒人種は白人種に比すれば

智識に於ては俺等であるが、それと同じ程度に於て感情に於ては優等であるって。黒人は自然物――天候や動植物に對してとても敏感なんだって。黒人の頭は始終熱い血で、時で滿ちてゐんだって。肉體は強靱で感情の忠實な奴隷なんだって。ネボク、お前、わかつたか、お前、お寄り。お前の手にさはらせてごらん！

下官　（跪ずいて來る）こいつ、こいつ、俺の恩を無にしやがつて！（ネボクを窓から摑み出す。女をなぐる）

女　おれをすれぬ！　畜生！　……つたれ……！

（二人は泣き聲を立てゝ格鬪する）

第四場

滿艦飾の巴里の町。

耳を聾するやうなマルセーユ。

喝采、歡呼。

種々樣々な人形が一人或ひは二人づつ出て叫んでは引つ込む。

小さな花火があがり、空に天女が飛ぶ。

――萬歳！

――平和萬歳！

――フランス共和國萬歳！

――戰爭は終つた！

――平和だ！　平和だ！

（教會の鐘の音。イッツ・ア・ロング・ウエーイの合唱。マルセーユ。）

第五場

巴里、伯林間急行列車の一等室の中　ネボクがたつた一人で、紳士のなりでふんぞり返つてマンドリンをかき鳴らしてゐる。

列車は猛烈な速度で戰場の跡を疾驅してゐる所である。

ネボク　（歌ふ）

綺麗なケーテ、
キ、キ、ケーテ、
綺麗なケーテ、
キ、キ、ケーテ。
綺麗なケーテ、
キ、キ、ケーテ。

……

（肥つた車掌が這入つてくる。）

車掌　ええ次はケルンでございます。稅關の檢査の御用意を願ひます。

ネポク　税關か？　これでうまく頼むよ。（金をポケットから摑み出してやる）

車掌（受け取つて）へ、畏りました。御安心下さいまし。（去る）

（汽車がゴトンと音をさせてとまる。外に停車場の雜踏、物賣りの聲。車掌が出て來てネポクの車室のドアを閉めてしまふ。）

（稅關吏出て來る。）

稅關吏（ネポクの車室のドアの前にとまる）この中は？

車掌　へ、空つぽなんで。（金を稅關吏に握らせる）

稅關吏　空つぽか、ぢやよし。（去る）

車掌（ドアを開けて、ネポクに）へ、もう濟みました。

ネポク　どうも大分客が乘るらしいぢやないか、俺んところへは一人も入れないでくれ。（金をやる）

車掌　へ、畏りました。（ドアをしめて去る）

アメリカの紳士（一遍ネポクの車室の前を通り過ぎてまた戻つて來る）おい、車掌。席はないのか？　席は。

車掌（出て來る）へ、滿員なんで。お氣の毒樣。

アメリカの紳士（金を握らす）

車掌　は、これはどうも。ぢや、この無理に賴んで見ませう。（ネポクの車室のドアを開けて）どうも誠に相濟みません。他が全部ふさがつてしまつてをるものでして。

いや、どうも、誠に。

（アメリカの紳士は中へ這入つてネポクと向ひ合つて腰かける。車掌は去る。）

（ベル。汽笛。ゴトンと音がして汽車は發車する。）

アメリカの紳士（ネポクに）御盛んですな。どちらへ。

ネポク　伯林へ。

アメリカの紳士　へえ、伯林へ。失禮ですが御商賣で？

ネポク　いや、私や兵隊だつたんですよ。セネガル植民地兵でさあ。所が、戰爭が濟んだら上官が金をくれましてね、伯林へ行つて遊んで來いつてんでさ。伯林にや女が餘つてるんだ。男一人に女が十人だ。撰り取りだ、とかうでさ。

アメリカの紳士　ほう。上官がね。

ネポク　政府の命令だつてんでさ。それが。

アメリカの紳士　ほう。政府のね。（考へる）

（ネポクはまたマンドリンをかき鳴らす。）

ネポク（歌ふ）

綺麗なケーテ、
キ、キ、ケーテ。
綺麗なケーテ。
キ、キ、ケーテ。

アメリカの紳士　所であんた、失禮ですが政府はあんたに金をくれる前に、から檢査をしませんでしたかね。から、身體檢査と云つたやうなものを。

ネボク　ああ、やりましたよ、身體檢査をね。へへへへへ。

アメリカの紳士　(跳び上る)　えらいッ。さすがはフランスの政府だ。握手しませう。あんた。ええと、お名前は何でしたつけ。

ネボク　ネボク。

アメリカの紳士　おやネボクさん、しつかりおやんなさい。頼みますよ。盛んに發展なさい。獨逸の女は家庭的ですよ、家庭的。全くいい所がありますよ。(札束を取り出す)さ、これをお取りなさい。遠慮はいりません。お近づきのしるしだ。さ、これで盛んに發展して下さい。

ネボク　(受取つてポケットの中へしまふ)　いや有難う。愉快です。アメリカの方は全く愉快ですなあ。所であんた、音樂はお嫌ひぢやないでせうな。一つやりますかな。

(マンドーリンをかき鳴らして歌ふ)

綺麗なケーテ、
キ、キ、ケーテ、
綺麗なケーテ、
キ、キ、ケーテ、
綺麗なケーテ、
キ、キ、ケーテ。

第六場

伯林の町。

黑人が右から左へ、貴婦人と一緒に一頭立の馬車に乘つて過ぎる。

黑人が左から右へ、女優と自動車へ乘つて過ぎる。

黑人が右から左へ娘と手を組んで通り過ぎる。

醉つ拂つた黑人が淫賣の肩にすがつて左から右へよろけて過ぎる。

黑人が獨逸人の細君をつれて、半黑の赤坊を抱いて右から左へ通る。

黑人が獨逸人の細君をつれて、半黑の赤坊を二人抱いて左から右へ通る。

種々の階級の獨逸人が多勢出て來て叫ぶ。

――黑坊だ。

――黑坊だ。

――伯林は黑坊だらけだ。

――半黑の赤坊だ。

――伯林は半黑の赤坊だらけだ。

第七場

伯林のネポクの住居。

彼の細君は衝立の蔭のベッドで唸つてゐる。産婆が世話をしてゐる。

ネポクは中央のテーブルに頭をかかえてつつぷしてゐる。

突然「おぎやあ」といふ聲がする。

産婆（衝立の蔭から首を出して）お目出度うございます。立派な男のお子さんでございます。

ネポク（跳び上つて叫ぶ）俺はたうとう自由人だ！　たうとう文明人だ！　俺の血は自由人の血とまざり合つたんだ。俺は奴隷だつた。俺達は五百年以来白人の奴隷だつたんだ！　俺になつて、俺の代になつて、たうとう俺の血統は解放されたんだ。俺はもう奴隷ぢやない。俺はもう奴隷ぢやない！

（窓の外に多勢の聲が聞える）

──黒坊だ。

──黒坊だ。

──伯林は黒坊だらけだ。

──半黒の赤坊だ。

──伯林は半黒の赤坊だらけだ。

（號外の鈴の音が聞える。）

──號外！

──號外！　黒人間題！　フランス政府の大陰謀！

──（大きな聲が號外を讀み上げる）フランス政府はセネガル植民地土人を戦場に送つて「消耗品」たる役目に供したる後、平和克復後は彼等に金錢を與へてベルリン、フランクフルト、ダルムシユタツト、ハムブルグ、ウイースバーテンの諸都市に送りて性慾の自由を許せり。ルーデンドルフ將軍は本日聲明書を發表して云へり。「彼等は戰時中にドイツ人の血を吸へる黒人軍をその儘解散し、更にその暗黒なる血液をドイツ人の血管に傳へ、永久に我等の文明を低下せしめつゝあり」と。

ネポク（眼を見開いて立つ。絶叫する）ああ、俺は矢つ張り奴隷だつたんだ。

──幕──

沙漠で（一幕二場）

第一場

時　一九一五年四月某日。夕暮。

所　アラビア、紅海沿岸、ジッダを去る一日行程の沙漠の中。

人

南洋コヽス島で沈没した軍艦エムデンの生殘者、全部で五十名が四つの團塊の中に別々にひそんでゐる。その一つにひそんだ人々。

エムデン副長、フオン・ミユツケ大尉。ヒンデンブルグ型のガツシリした男。

ギースリング中尉。瘠せた、せいの高い男。

他水兵九人。

舞臺　赤黒く灼熱した沙漠の中に掘られた穴。周圍には沙嚢や取りはづした鞍や、駱駝の死骸などで防禦陣地が作つてある。

ボロボロの服を着た死人のやうな水兵達が、穴の底に横たはつたり掩護物に倚りかかつたりしてゐる。機關銃が二門、据ゑつけてある。士官二人は水兵達から離れてゐる。

水兵一　（眼を瞑つたまま）ああ、にほひ。俺の鼻。畜生。

水兵二　（眼を瞑つたまま）うむ。煙を立ててゐる。

水兵三　（眼を瞑つたまま）くさい。燃えてゐる。燃えてゐる。

水兵四　（泣き出す）ああ、臭い。神様。このにほひに勝たせて下さい。

水兵五　（悲しげな呻り聲をあげ初める）

水兵六　呻つたつて駄目だ。呻つたつて駄目だ。

水兵一　俺の鼻。俺の鼻。

水兵三　（眼を瞑つたまま叫ぶ）燃えてゐるんだ！　燃えてゐるんだ！　聞えないか。燃えてゐるんだと云つてゐるんだぞ！

水兵七　（不意に飛び起きて、掩護物にしてある鞍にさはる。鞍からは煙が立ち上つてゐる。叫ぶ）起きろ！　起きろ！　鞍が燃えてゐるぞ！　鞍が燃えてゐるぞ！　鞍が燃えてる！

（水兵七八人飛び起きて、砂をかける「消しちまへ」と叫びながら、夢中になつて砂を鞍に掛けてもみ消す。又、次々に倒れてしまふ。）

水兵七　沙漠だ。そこら中が燃えてるんだ。

水兵六　畜生。何て太陽だ。畜生。

（間。）

ミュッケ大尉　誰か隣のゲォッツ中尉の塹壕に行つて水を貰つて來い。

水兵數人　水！　水だ！

ミュッケ大尉　行け！　シュミット行つて來い。

（若い水兵四が機械人形のやうに穴から這ひ出すや否や、何處からともなく小銃彈がバラバラ飛んで來て、小さな砂煙りをあげる。若い水兵は手を射たれて穴の中にころがり落ちる。）

ミュッケ大尉　畜生。しつつこい土人だ。今朝から水一杯飲めやせん。うう、何て熱さだ。

ギースリング中尉　三日目ですよ。隊長、今日で三日目ですよ。このベドウイン族といふアラビヤの强盜共は疲れませんな。しつきりなしに、眼を皿のやうにして監視してますな。

ミュッケ大尉　奴等は段々ふえてくる。初めて襲はれた時は二百位ゐだつたが、今日はもう五百は確かに越えてゐる。

ギースリング中尉　十倍だ、隊長、十倍だ。こつちは段々減つて行くのに、向ふはふえる一方だ。

水兵四　俺の頭に何か蟲が喰ひ込んだ。取つてくれ。おい、取つてくれ！

水兵六　蟲は何處へでも喰ひ込む。一遍喰ひ込んだら、どうしたつて取れない。小さな惡魔だ。惡い觀念みたやうなものだ。

水兵二　去年の八月、エムデンに乘つて青島を出て以來半年以上も死が毎日のやうに俺の眼の前にぶら下つてゐた。俺はもう慣れつこになつた。死が何だ。消えるだけだ。こんな腐つた世の中から消えるだけだ。愛情だとか、犧牲だとか、たかにも母の愛だとか、そんなものはこの上もない無駄な浪費だ。意味のない暇つぶしだ。有難がる必要もたつとぶ必要もない。勝手にしやがれ。蠅だ。蟲だ。動物だ。完全な無意味だ。

水兵四　さうだとすりやあ、あの昔の美しかつた頃は何だ。あれが夢か？　それとも詐欺か？　希望があつたし、愛があつたし、信じることがあつた。だのに大きくなるにつれて俺達はバラバラになつてしまつた。誰も俺達を構つちやくれない。敵は何處にでもゐて、あとからあとか

家だ！

水兵六　ふん、静かにしてくれ。見つともない。それがそ自分達を何だと云ふんだ。矢つ張り人殺し専問家ぢやないのか。

水兵六　何時俺達が金で買はれた？　何時俺達が金で買はれた？

水兵八　正義を權力に賣つたんだ！

水兵六　俺は祖國の爲に戰つてるんだ！

水兵八　祖國なんてものは何處にもない。あるのは資本家共の大きな掠奪の競闘と、欺されてゐた俺達の憐れな夢だけだ。

水兵二　貴様何處からそんな事を聞いて來たんだ。今迄そんな事を云つた事はなかつたぞ。

水兵八　俺は俺の生命と引き換へにその事がわかつたんだ。人間はそんなに下らないものぢやない。俺達はただ無駄に苦しむために生れて來たんぢやない。誰も彼もが無駄に苦しんでゐる。誰も彼もが潜航艇の中や海の底や砂漠の眞中で死ぬんならいい。ただ、他人の利益のために、俺達はこんな苦しみを嘗めこんな死を死ななければならないんだ。

水兵九　ミユツケ大尉に聞いて見ろ。この事をもつとよく知つておいでに違ひない。

水兵八　奴等だつて同じ事だ。見ろ、俺達と一緒に、世界中の人間を取り殺さうと誓つた怨靈みたいに八ケ月間も海の上をうろつき歩いて、何度も死にそこなつて、揚句の果に此の穴の中で腐つちまふんだ。

水兵九　俺達の場合はさうだ。だがこれはまともな状態ぢやない。曹長の時のことを考へろ。俺達と士官達との間程大きな違ひが世の中にあるか。リヒテンシユタインとかリヒテンベルクとかの侯爵夫人だつて、スチンネスの奥方だつて俺の頬げたを張りはしたが、場合に依つたら俺達を銃殺しちまふ權利なんか持つてゐやしないぞ。

（突然ベドウヰン族の一齊射撃が初まる。穴の周圍は砂煙で包まれる。水兵達も皆壁に上つて、應射し初める。機關銃も活動し出す。）

ミユツケ大尉　（大聲で叫び出す）戰へ！　これは我が祖國に對する我々の最後の奉仕だ！　我々の名は世界中に宣傳される。我々の名は永久に記憶される。エムデン萬歳！　軍艦は南洋で破壊されても、しかも無形の戰闘艦を砂漠の中にまで持ち込んだエムデン乗組員萬歳！

（誰一人之に和す者がゐない。ただ機械のやうに射撃し續けてゐる。）

――やがて突然向ふからの射撃が止む。こちらも止めて穴の底へずるけ落ちる。

水兵四　あゝ、手が痛い。手が痛い。
水兵五　火傷だ。大火傷だ。
水兵一　銃身が熔けさうだ。
水兵四　俺の手がふくれ上つてゆく。眞黒にふくれ上つてゆく。

ミュッケ大尉　奴等は何だつて急に射撃を始めて、何だつて急に止めたんだ。

ギースリング中尉　昨日も丁度今頃こんな事がありました。昨日も同じ事でした。隊長はそのたび毎に無駄に最後の叫びをお擧げになりました。

ミュッケ大尉　畜生。奴等は毎日交替してゐるんだ。毎日新しい勢力で、俺達が焼け死ぬ迄圍んでゐる氣なんだ。あゝ、たつた一日でジッダに着けるんだ。そこから舟に乘つてエル、ウイークかデメラあたりで上陸して、樂な陸路をエル、アラへ行きさへすれば、そこにはヘヂヤス鐵道の大きな機關車が、俺達をコンスタンチノープルに運んで行かうとしてしびれを切らしてゐるんだ。そこ迄行けばもう獨逸迄は一と息だ。

ギースリング中尉　ああ、シャンパン！　葡萄酒！　ビール！

水兵一　誰だ。そんな事を云ふ奴は。

水兵七　死なせてくれ！　俺を靜かに死なせてくれ！

ミュッケ大尉　あんなに長い間、敵の艦隊の嚴重な警戒の網の中で荒れ廻つて來てゐながら、たうたう軍艦をなくし、汽船をなくし、帆船をなくし、ボートをなくして、ちよつと陸に上つたと思つたら忽ちこれだ。それもフランスとかせめてイタリーとか性のわかつた敵ならいゝが、見たこともない土民の强盜だ。眞直にベルリン迄延びてゐる鐵道は鼻の先にブラさがつてゐる。死んだ後の榮譽。死んだ後の榮譽。それは本當に「何物か」なのか。俺が全く欺かれてゐないといふ事は確實なのか。馬鹿。今になつてそんな事を考へて何になる。一生の信念を死の間際にひつくり返すとしたら俺は何て間拔な商賣人だ。何の尊敬にも値ひしないぞ、それこそ。

ギースリング中尉　隊長。あなたは怪軍艦エムデンの副長として人間業と思へない大きな仕事をなしとげなさいました。あなたが此處で死んでも生きてもあなたの名前は既に全世界に擴まつてゐます。あなたの歷史上の位置はもう確立して動かすことは出來ません。あゝ、我々は勇敢でした、隊長。我々程祖國に忠良だつたものがゐるでせうか。隊長。敵艦船を捕獲擊沈拿捕すること二十六隻、十萬四千噸。エムデンの名は不朽です。我々の名は不朽

です。もう我々は安心立命の境地です。この名聲を汚さないでゐさへすれば其でいゝのです。

ミュッケ大尉　さうだ、俺達の仕事にもう濟んだ。今度は祖國が俺達に支拂ふ番だ。俺は兩方ほしい。生きてゐるうちも、死後も。誰が笑へる。俺達のやうに忍んだものがあるか。俺達は値ひしてゐる。少くとも俺は値ひしてゐる。畜生、ベドゥヰン族！　何て呪はれた畜生だ。俺を通せ。俺を獨逸へ歸せ。それが貴様等と何の關係があるんだ。名もない犬め。腐つな蛆虫め。

水兵一　腐つてる。腐つてる。

水兵二　あゝ、何て臭ひだ。

水兵三　鞍は燒けてはゐないぞ。鞍には砂がかゝつてゐる。

水兵四　もつとひどい臭ひだ。空氣がすつかり腐つてゐる。俺の胸が腐り始めたらしい。

水兵一　俺の鼻。俺の鼻。

水兵七　外だ。外からにほつてくる。（掩護物を攀ち上る）駱駝だ！　駱駝だ！　皆輕氣球のやうに膨れ上つてゐる。脚と脚が離れて夫々天に向つてゐる。一匹の駱駝が膨れ切つて破裂した。おゝ、ギラギラ光つた內臟が跳び出した。眞靑だ。眞赤だ。生きてゐる、そいつらが、うねくつてゐる。呼吸をしてゐる。立ち上る湯氣。そいつらがまた膨れる。そして破裂する。にほひ。塊りだ。化物だ。流れる。あそこが今にも破裂する。かたまつた。しみ込む。おゝ、解體。めまぐるしい解體。一部分は空に。一部分は地に。そして骨だけが殘る。臭い！　何てにほひだ！　はらわたが俺のまはりをうねくりながら飛んでゐる。おゝ、俺の手もまた解體を始めたな！（ころがり落ちる）

水兵六　駱駝に砂をかけろ！　駱駝に砂をかけろ！

ミュッケ大尉　何てにほひだ、上れ！　上つて駱駝に砂をかけろ！　行け！　貴樣行け！

水兵八　いやだ！

ミュッケ大尉　何？

水兵八　首を出せば打たれる。いやだ！

ミュッケ大尉　行け！　命令だ！

水兵八　いやだ！　貴樣行つてかけて來い！

ミュッケ大尉　貴樣！（水兵八の首を締める）

水兵八　（締められながら）貴樣も俺達を無駄に死なせて德をしてゐる奴等の仲間だな！　畜生！　奴等の仲間だな！

水兵九　馬鹿！（ミュッケ大尉を突きのける）人間對人間だ。死ぬんなら一緒に死ね。（水兵達がそれに和して

立ちかゝる）

ギースリング中尉　やめろ！　何をする　死か其とも生か。どうせにしろ今が最後の瞬間だぞ。俺達の名聲を貴樣達はこの最後の瞬間に滅茶滅茶にしようといふのか。

水兵九　ふん、生。こんなになつてもまだ生があるといふのか。沙漠だ。水もない。食物もない。腐つた空氣。取り卷いてゐる五百の小銃。燒き、腐敗させ、破裂させ、ひからびさせる太陽。其でもまだ生があるといふのか。

水兵八　出鱈目はもう澤山だ。俺は貴樣を殺してやる！

（再びミュッケ大尉につかみかゝる）

ミュッケ大尉　（それを跳ねのけ、飛び起きて叫ぶ）援軍が來る。確かに援軍が來る。メッカの都督は我々が三月二十八日にソートを立つた事を知つてゐる。それに最初にベドウヰン族に襲はれるや否や、我々を棄てゝ逃げ出したアラビヤの駱駝曳き共の中にはジッダ迄逃げのびた者があるに違ひない。俺は今こそ援軍が來る事を信じる。我々はこれでおしまひになるのではないぞ。生だ。我々の前にはまだ以前の制度が、組織が續くのだぞ。

（水兵達は士官を離れて一方へかたまる）

ギースリング中尉　（泣き出す）おゝ、隊長、すると、援軍が來るんですね。生だ。榮轉だ。シャンパンだ。コンスタンチノープルの女だ。鐵十字章だ。全世界の稱讚を自分の眼で見、自分の耳で聞くんだ。この惡夢の一瞬は過ぎ去るぞ。規律を保て。僅かの辛抱だ。ほんの一瞬間だ。すると一生涯の輝かしい生活だ。

水兵一　援軍が來ると云つてるぞ。

水兵二　援軍が來るのか？

水兵三　俺達は救はれたのか？

水兵五　一生涯の輝かしい生活と云つたな。俺に踊りが歸つて來ると云ふのか？

水兵六　俺に音樂が歸つて來ると云ふのか？　桃色の輝くエンゼルが歸つて來ると云ふのか？

水兵一　砲塔はないのか？　鐵の部屋はもうおしまひだと云ふのか？

水兵二　火藥と爆裂はもう俺達から遠ざ去つたと云ふのか？

水兵五　踊りが歸つてくる。

水兵六　音樂のエンゼルが歸つてくる。

ギースリング中尉　シャンパンだ。コンスタンチノープルの女だ。そして鐵十字章だ。

水兵五　覗いて見ろ。援軍が見えてゐるかも知れないぞ。

水兵六　さうだ、きつと俺達は無駄に悲しんでゐたんだ。

（攀ち登つて覗く）見えない。砂ばかりだ。何も見えな

い。

（猛烈な一齊射撃が起こる。水兵六は頭を貫かれてころがり落ちる。）

水兵七　死んだ。早く埋めろ。もう解體しかゝつてゐるぞ。早く埋めろ。

（五六人の水兵は寄つてたかつて水兵六の屍體を埋めてしまふ。）

水兵四　援軍は來ない。何も見えないと云つたぞ。

水兵九　來るもんか。皆うそだ。

ミユツケ大尉　（叫ぶ）來る！　援軍は來る！　まだ見えない。だが來る。もうぢき見える。もう一瞬だ。

水兵一　確かに援軍が來ると云つてゐるぞ。

水兵二　援軍が來るといつてゐるぞ。

ギースリング中尉　來る！　確かに來る！　俺の耳はその足音を聞いてゐる。全速力で走つて來る。

水兵四　全速力で？

水兵五　全速力で!!

ギースリング中尉　榮譽だ。鐵十字章だ。

水兵一　ペナンで露西亞のゼムチウグを爆沈させた魚雷は俺が發射したんだ。

水兵二　青島を出て一番初めに露西亞のリヤサンに艦首の十サンチ半を打つ放したのは俺だ。

水兵三　ココス島の無線電信柱の根元に埋めた爆藥に點火したのは俺だ。

水兵四　ボンベーの石油タンクへ最初の命中彈を送つたのは俺だ。

ミユツケ大尉　祖國に名譽を與へた忠良な勇士。援軍は近いぞ。恥しい行動をするな。立派な規律を保て。

（間。）

水兵四　援軍が來ない。

水兵三　援軍はどうした。

ミユツケ大尉　（叫ぶ）來てゐる。俺の耳には聞える。もう見えてゐる。

水兵八　隊長に見て貰へ。

水兵九　さうだ。隊長に覗かせよう。

（水兵たちは突然狂氣のやうになつてミユツケ大尉に襲ひかゝる。彼は死にもの狂ひに抵抗するが、つひに背に持ち上げられて、半身を掩護物の上に突き出される。が、ベドウヰン族の一齊射撃はおこらない。靜寂。ミユツケ大尉はそれに氣がついて、意を決して見廻す。）

ミュツケ大尉（叫ぶ）ベドウヰン族は一人もゐない！
（不意に躍り上る）おゝ！ 援軍だ！ メッカの都督の援軍だ！

（水兵達はその聲を聞くと、奇妙な叫び聲をあげて一人殘らず穴の外に跳び出す。口々に「援軍だ！ 援軍だ！」と叫んで、手を振り、銃を振る。その聲を聞いて他の四つの穴からもエムデンの殘員が飛び出して同じく「援軍だ！」と叫んでゐる聲が聞える。）

ギースリング中尉（最後に攀ぢ上りながら）規律を保て！ 秘密を守れ！ この穴の中で起つた事を誰にも云ふな！
（やつと穴の外へ出て叫ぶ）援軍だ！

第二場

時

同年五月一日。夜。

所

アラビア。ヘヂヤス鐵道の起點、エル・アラ停車場のプラットフォームから今や出發しようとする特別列車の車室。

舞臺　立派な車室の横斷面だけが見えてゐる。他は全部眞黑く覆つてある。左手がプラットフォームのつもりで、見送人の聲はそこから聞えて來る。車室の中には廣々とベッドが三つ並べてある。その一つに水兵八が寝てゐる。ミュツケ大尉とギースリング中尉とが窓の所に立つて挨拶してゐる。手にそれぞれシャパンの盃を持つてゐる。胸には鐵十字章をさげてゐる。

外の聲　勇敢なる四十九名のエムデン乘組員諸君！ 我々ヘヂアス在留の獨逸人はかゝる勇敢なる將卒を有し給ふ獨逸皇帝陛下と一致して世界平和の敵を撃滅するてふ名譽ある戰に從事する土耳古國民と共に、世界にその名を轟かしたる神の如き諸君と親しく相見え、のみならず我我の手に依つて諸君を祖國に向けこの光輝赫々たる旅路に送り出すの光榮を有した事を深く神に感謝するものであります。諸君は今や友邦土耳古の温くして安全なる懷の中に居られます。我々はまづ此の機會に尊敬すべき土耳古軍隊の最近の偉功を獨逸國民として、エムデン乘組員諸君と共に心から賞讃したいと思ふのであります。即ち英佛の大艦隊は三月十八日を期してダーダネルス海峽闖入を企てはしたが、忠烈なる土耳古要塞守備隊は同日夕刻迄のうちに佛艦ブーヴエー、英戰艦イレシスティブル、同オーシャンを撃沈し、佛艦ゴーロア、英巡洋戰艦インフレキシブルに大損害を與へて完全なる勝利を占めたのであります。更に四月二十五日英佛陸海軍協同にて大規模に決行せられたるガリポリ半島上陸行動も土耳古

陸軍の赫々たる勝利に歸したのであります。友邦土耳古萬歲！（車内のミュッケ大尉、ギースリング中尉も之に和す）さてエムデン乘組員諸君。仁慈なる我が獨逸皇帝陛下は夙に諸君の忠勇義烈の行動を聞し召され、その賞讃と感謝の御心は既に鐵十字章となつて諸君の胸に燦然たる輝きを放つてをります。今や戰はたけなはであつて、最近我が陸軍はヴュルテンベルヒ公の率ゐる第四軍の毒瓦斯を利用せる猛烈たる攻勢に依り、イーブル北方の英佛聯合軍をして總退却の止むなきに至らしめましたが、約束された我等の最後の勝利は、尚ほ幾多の奮鬪を經ずしては贏ち得られません。かゝる重大なる時機に當つて、諸君が歸國せられたならば、祖國陸海軍人の士氣を振興する事いくばくでありませう。我々はそれを思ふとうれし涙が頰を傳うて流れるのを禁ずることが出來ません。（間。突然叫ぶ）エムデン萬歲！

（それに和して滿場をゆるがすばかりのエムデン萬歲の聲が起る。）

ミュッケ大尉　諸君！　諸君の熱誠なる待遇に接し、我々エムデン艦員は感謝の辭を見出すことが出來ません。我我は只一死以つて祖國に報ずるの念を以つて、軍人として當然の職務を果したに過ぎないのでありますが故に、諸君の賞讃の前に立つて、ただ顏に汗するのみであります。我々は我々が一九一四年八月靑島を出港致しまして以來現在に至る九ヶ月間になしとげたる小さき仕事に決して滿足しては居りません。祖國は我々を要求して居ります。我々は直ちにいづれかの軍艦に乘り組んで、更によろこばしき報告を諸君に送り屆けたいものであります。腐つた水のみを、それも不足勝ちに供給されてゐた我々の胃袋は、今や諸君の御厚志に依るシャンパンのために大混亂を呈して居ります。私の言葉の足らないのはどうぞその爲だとお察し下さい。

（盛んなる拍手。）

（獨逸國歌の吹奏。合唱。）

（歡呼のうちに列車は出發する。）

（騷ぎは段々遠ざかる。）

ギースリング中尉（ドッシリとベッドに腰かけながら）コンスタンチノープルですなあ、愈々。

ミュッケ大尉　そこでの歡迎が思ひやられるぞ。俺達の名聲は豫想したより遙かに遙かに喧傳されて居るぞ。

ギースリング中尉（盛んに飮みながら）世界中がエムデン熱にをかされてゐますぞ。

ミュッケ大尉（盛に飮みながら）三千六百五十噸のへんぺんたる輕巡洋艦の副長が今や世界的ヒーローだ。全世界が叫んでゐるのが聞えるぞ！　エムデン萬歲！　ミュ

ツケ大尉萬歳！
ギースリンク中尉　いや、それがもうおそい。ミュツケ少佐萬歳！と變りますよ。
ミュツケ大尉　そしてギースリンク大尉萬歳か。
ギースリンク中尉　あはははは。（うれしくて笑ひがやまない）
ミュツケ大尉（齒痛をふたたび出す。）
ギースリンク中尉（眠つてゐる水兵八に氣が附く）此の野郎は勝手にとん／＼出世して遠くへ行つて來て縊てしまやがつた。
ミュツケ大尉　本當に病氣なのかい？
ギースリンク中尉（水兵八の額に手を當てゝ）非常な熱です。
ミュツケ大尉　沙漠の中で此奴は最初に俺に反抗しやがつた。そして銃先に立つて俺の首を拳銃の上へ突き出させやがつた。
ギースリンク中尉　あなたを突きのけたラーデマツヘルの奴はすつかり改心しましたが、此奴は愈々圖々しくなる。
ミュツケ大尉　ギースリンク中尉！　此奴が俺達の生命にあがなつた名譽を叩き壞すぞ！
ギースリンク中尉　此奴は決してあの秘密を守りませんぞ。
（間）
ギースリンク中尉　此奴は死にさうな病氣だ。
ミュツケ大尉　だが死なないかも知れない。
ギースリンク中尉　此奴は死にさうな病氣だ。
ミュツケ大尉　さうだ、死にさうな病氣だ。
（二人は同時に水兵八の首を締める。）

――幕――

仕事行進曲（一幕）

人物

エミリエ・ニッツオールト　　母（三十九歳）
リア・ニッツオールト　　娘（十六歳）
カアル・ニッツオールト　　息（十八歳）
服部光雄　　畫家（十九歳）
カアルの友人・　數名

時

一九二二年六月二十七日
獨逸多數社會黨（右翼無産政黨）の組織した牛ルト内閣の外相ラテナウが反動主義者のために暗殺された三日目
（當時の事情を詳しく知りたい方は森戸辰男氏著「最近獨逸社會黨史の一齣」を讀まるべし。）

所

伯林町はづれの五階建の家の三階。ニッツオールトの住居の一室。服部光雄に貸してある

舞臺　何もかも古くて、色褪せ、すり切れてゐる。
三方壁。上手の壁にはドアと洗面臺と鏡。
正面の壁には中央にドア、下手寄りにベット兼用の長椅子。
二つの壁で出來た隅にタイルで疊んだ作りつけのストーヴ。下手の壁には二重の硝子戸とその外にバルコニー。
椅子が二脚。書架とその上に未完成の大きな繪。繪具箱、筆壺、パレット、枠、卷いたカンバスなどが邪魔にならない所においてある。壁にあちこちに繪が掛けてある。皆服部の描いた繪で表現派であるが、舞臺裝置は充分に寫實的でなければならない。
午後、傾いた日が少しばかり部屋の中に差し込んでゐる。

エミリエが長椅子に腰掛けて、大きな紙包をそおつと開けて見てゐる。エミリエは小柄な、貧にやつれてはゐるがしかし羊のやうな女。洗物を終つたばかりらしく、前垂をしめ、腕をたくし上げてゐる。紙包の中から女の美しい絹の下衣や、透き通るやうな靴下や、しやれた天鵞絨の大黒帽やジャケツが現はれて來る。エミリエはそれをこはごは取り出して、一々丁寧にとみ

かうみしてゐる。不意に愕然としてそれをしまひ初める。息子のカアルが歸つて來た音がしたのである。

カアル（廊下で） お母さん。何處？

（エミリエは返事をしないで、愈々あわてゝ擴げたものを包んでゐる。）

カアル（正面のドアを開けて、エミリエと顔を合はせる。きたない背嚢を背負ひ、脇に白い大きな紙の卷いたのを持つてゐる）おや、此處だつたの。

エミリエ（失つたまゝ、包みをかくしながら） あゝ、カアル。どうしたの？ こんなに早く。

カアル 今日は仕事には出なかつたさ。伯林全部の勞働者の今日のストライキだ。

エミリエ うむ、やつたね。さうだ。おやり。しつかりおやり。今度こそは國粹黨の獸共に目に物を見せてやらなくちやならないんだ。

カアル 僕達の方の委員は政府と議會とに提出する全勞働者の協同の要求の草案を作つてゐる。もう明日中に出來上る筈なんだ。今度こそはどうしたつて政府も眼をさめるだらう。何しろガーライス、エルツベルガア、ラテナウと三人續けさまに反動主義者に暗殺されたんだからなあ。改良主義的社會黨なんてものはまるで反動勢力の進撃のための太鼓を叩いてるやうなものぢやないか。だが何しろ今の所僕達全戰線は協同して大々的なプロテストをしなくちやならない。僕達のスロオガンは「白色殺人隊をやつつけろ」だ。自分の内閣の閣僚が順々に暗殺されてゐるのに反動勢力とはつきり手を切ることが出來ないでゐるなんて何ていふ意氣地なしの政府だ。

エミリエ だが流石の意氣地なしも今度こそはちつとは眼をさめるだらうよ。頼みの綱のラテナウをやられたんだからね。

カアル 僕達の仲間は今三ケ所で示威集會をやつてゐるんだぜ。だが僕は明日迄にポスターを五十枚描かなくちやならないんで先に歸つて來た。宣傳部の連中は氣の毒なほど忙しいんでね。それからK・D・W（デパートメントの名）に寄つてマリアに靴下を一足買つて來てやつた。素敵だぜ。ほら。（ポケットから木綿の靴下を引き出す）マリアは？

エミリエ もうおつゝけ歸つてくるかも知れないね。

カアル あゝ、あそこはストライキをやらないんだつたな。ふむ。組合に這入つてない所は仕樣がないね。（包みとはみ出してゐる絹の靴下に目をつける）おや、それは何？

エミリエ（蒼くなつて） え？ ああ、何だか。來て見たら此處に置いてあつたんだよ。

カアル　（エミリエの手から包みを取つて開けて見る）　ふむ。（一々あらためて見てゐる）　ふむ。ハツトリが買つたんだな。（鋭くエミリエを見て）　お母さん。お母さんは一體どうするつもりなんです。

エミリエ　どうするつて、お前、たゞ此處に……。

カアル　さうぢやないんですよ。お母さんは一體リアのことをどう考へてゐるのかつて云ふんですよ。

エミリエ　（恐怖して）　リアのことつて……。お前……

カアル　リアがあんな日本人にどうかされるのを默つて見てゐるのかと云ふんですよ。

エミリエ　あんな日本人だなんて、お前、ヘル・ハツトリは眞面目な繪描きさんぢやないか。

カアル　何が眞面目な繪描きなもんか。こんなに死物狂ひになつて苦しんでゐる國へ、やつて來て、僞替相場のお蔭で氣樂な暮しをして見せびらかしてゐるだけでいゝ加減な罪惡だのに、こんな誰にも判らないやうな繪しか描けないぢやないか。

エミリエ　だつて私達に藝術の事なんか解る筈はないんだから……。

カアル　僕達に解らない、ブルジョアにしか面白くない藝術が何の役に立つんだ。明日のポスターにだつて繪がはいずればつと効果があるんだが、ハツトリなんぞに頼めやしないぢやないか。繪とは眼に訴へる宣傳だ、繪描きとは繪に依る煽動者だ。

エミリエ　（默つてハツトリの繪を眺めてゐる。やがて）　だがね、昨日來た伊太利のブランなんとかつて云ふ有名な繪描きさんもヘル・ハツトリの繪を見てひどく感心してらしつたし、こなひだの個人の展覽會だつて新聞でひどく評判がよかつたんだからね、色彩交響樂の大才だとかつて……。

カアル　そんな藝術なんてものはもう古い世界のものなんですよ。くだらない遊戯だ。それどころか反動運動だ。繪とはそんなくだらないものぢやない。それは我々の運動を助ける端的な宣傳者・煽動者・暴露者、教育者であり、やがては新しい社會の美しい裝飾者であるべきなんだ。

エミリエ　だが、考へてごらん。もしヘル・ハツトリが此部屋を借りてくれなかつたら私達の生活はどうなつたか。

カアル　（鋭くエミリエの肩を摑んで）　お母さん。あなたはまさかまたリアをハツトリに賣りはしなかつたでせうね？

エミリエ　何を？　お前は何を云ふんだい？

カアル　ごめんなさい。（包みを長椅子の上に戻さうとす

ゐが、不意に床の上に投げ出す。エミリエはおそるおそるそれを拾ひ上げて長椅子の上に置く）お母さん、お願ひだから二人をよく監視して下さいよ。リアはまだ自分の事を處置するには子供過ぎるんだから。（彼は母に背を向けて椅子の一つに腰をおろして顔を覆ふ）

エミリエ（立ち上つてカアルに近寄らうとするが、止めてまた腰をおろす。間。彼女は不意にあわてゝ下衣や帽子や靴下を疊み直して包み初める。獨語のやうに）リアがもう歸つてくるかも知れない。

カアル（立ち上つて正面のドアに手を掛けながら）いゝですか、お母さん。あなたの責任ですよ。

エミリエ（機械的に幾度もうなづく。ふと包みかけてゐた手をやめて美しい下衣を擴げて見る。カアルがもうゐないのに氣が附かずに）ねえ、カアル。なんて綺麗なんだらう。可哀さうにあの子はこんなものは生れてからまだ一度も着たことがないんだよ。（やがてまた急いでそれを包んで長椅子の上に置く。二重戸越しに下の通りを見て、急いで部屋を出てゆく。舞臺空虚。日はもう部屋に差してゐない。風が吹き初める。遠くの方から舞踏曲が流れて來る。間。リアの歸つて來た音がする。）

リア（廊下で）ミッちやん！（上手のドアをノックする。開けて這入つて來る。年の割に大きな娘。髪は淡い褐色でたぐぐる／＼と後で束ねてある。卒直な顔をした無邪氣な娘）たゞあんた。からつぽか。（正面のドアを開けて叫ぶ）お母さん、只今。

エミリエ（遠くで）お歸り。

リア　ミッちやんは！

エミリエ　お晝を食べに何處かへ出掛けて行つたが——

リア　へえ。（ドアを閉めて長椅子に腰を降ろす。紙包を見つける。擴げて歡喜する。早速靴下を穿きかへて歩き廻る。帽子をかぶつて鏡の前に行つて氣取つて見る）

カアル　リア！（さう云ひながら正面のドアから這入つて來る。手には筆を持つてゐる。リアの姿を見てぎくつとする）

リア　おや、カアル。今日は馬鹿に早いんだわねえ。どう？ちよいと。あたし。

カアル（吐き棄てるやうに）ふむ。（彼は長椅子に腰をおろしてぢつとリアを見續けてゐる）

リア（口眞似をして）ふむ。（急いでジヤケツを前に當てがひながら、ひどく氣取つて）あたくしあなたをひどく／＼お驚ろかせ申したやうでございますわね。さうだつたら御免遊ばせ。あの、あたくし、フロイライン・リア・ニッツオールトと申す者でございますの。宣傳部委員としてのあなた樣の御名聲はつとに承知してをります。以後何

卒よろしくお願ひ申します。
カアル　ちよつあの窓の所へ立つてごらん。
リア（窓の所へ行つて）かう？
カアル　うん。さう。（彼はなごやかな眼をしてみつめてゐる）お前にはこんな繪がわかるのかい？
リア　そりやわかるわ。その點では兄さんなんかより上よ。
カアル　この繪は何たい？（畫架に立てゝある描きかけの繪を指す）
リア　それは私の魂さ。
カアル　へえ。お前の魂はこんたなのかい？
リア　うん、さう。その通りなの。
カアル　ミツちやんにはお前の魂が解るのかい？
リア　すつかり解るの。私が自分で解るよりももつとよく解るんだつてさう云つてたわ
カアル　この繪の解る人か他にもあるのかい？
リア　そりやあよつぽど偉い人でなくつちやあね。この繪なんかはまああたしとミツちやんだけにしか解んないかも知れないわね。
エミリエ（遠くで）リア。
リア　なあに？
エミリエ　ちよつと買物だよ。
リア　チエツ。（舌打ちしながら出てゆく。カアルは繪の前に立つて見てゐる。リアが外へ出て行く音。エミリエが這入つて來る）
エミリエ　カアル。お前はヘル・ハツトリがどうしても嫌ひかい？
カアル　嫌ひにも何にも、何のいゝ所も示してくれない人間をどうにも思ひやうがないぢやないですか。ハツトリはひどく惡い奴かも知れない。或ひはそんなに惡い奴ぢやないかも知れない。しかし少くとも何の役にも立たない人間だといふことだけは解つてゐる。
エミリエ　お前ヘル・ハツトリと一遍話し合つて見てくれまいかね。
カアル　さう。今迄は問題にしてゐなかつたが、どうも話し合つて見る事が必要らしいな。
エミリエ　さうして見ておくれ。さうして見ておくれ。
カアル　よし、歸つて來たら一つ話し合つて見よう。（鋭い眼でエミリエを見ながら）そして話し合つて見て、もし駄目た人間だつたら――？
エミリエ　駄目な人間だつたら――駄目な人間だつたら――そしたらお前はヘル・ハツトリを引き上げる事か出來るぢやないか。
カアル　引き上げるか。しかしあゝいふ人間達は大抵僕達

の方を引き上げるつもりでゐるでせうよ。まあ何しろ歸つて來たら話し合つて見よう。（去る。エミリエは隱し得ない心の中の動搖の爲に、あちこちを歩いてゐる。やがて窓に走り寄つて下を見る。それから上手のドアに驅け寄つて、それが開けられるのを待ち構へてゐる。服部光雄が這入つて來る）

エミリエ　（低い聲で）しつ！　ヘル・ハットリ。あなたはいゝ人間でせうね？　いゝ人間でせうね？

服部　何がです？　なほさん、不意に。

エミリエ　あなたは僞をつくやうな人ではないでせうね

服部　その點では僕は信用されてもいゝと思ひます。

エミリエ　ぢや、本當の事を云つて下さいよ。あなたはまだリアと何の關係もないでせうね。

服部　（はつきりと）えゝ。

エミリエ　あゝ、有難い。ヘル・ハットリ。有難う。有難う。あなたはあなたは本當に何といふいゝ人なんだらう。あなたは私の惨めな氣持をわかつてくれたんですよ。私はたゞ、彼處の穴を覗き込んでゐたんです。（うれしさのあまり泣き出す）あなたは、あなたは本當に珍らしい方です。（椅子に腰掛けて涙を拭く）だけど、ヘル・ハットリ、あなたには氣が附いてゐた事はゐたんでせう？　私がわざとちよいちよい家をあけて、あなたとリアを二人切りにして置いた事を。

服部　えゝ。氣が附いてゐました。

エミリエ　リアに床のあげおろし迄すつかりあなたの身のまはりの世話を任せきつてしまつたのも私がわざとしたのだつていふ事も。

服部　えゝ、知つてゐました。

エミリエ　それだのにあなたはそれに乘じようとはしなかつたんですね。あゝ、あなたは何ていふ珍らしい方だらう。私はあなたに千遍お禮を云つても足りません。私は心配してたんですよ。あなた、私はさつきから死にさうに心配してたんですよ。（服部は長椅子に腰をおろす）有難う。ヘル・ハットリ。（彼女は立ち上つて出てゆく）

リア　（遠くで）ミッちやんは？

エミリエ　（遠くで）歸つてらしたよ。

リア　（ドアを開けて）ミッちやん！（立ち上つた服部の手を握つて）あんた歸つてくれたの。私もう見ちやつたの。とてもうれしかつたわ。

服部　僕が歸つてから驚かしてやらうと思つたのに。

リア　駄目よ、そんなこと。だつてまるでさあ開けてごらんなさいつていふやうにちやんと置いてあるんだもの。

服部　おやおや、見ちやつた所かもうちやんと靴下を穿いちやつてるぢやないか。リアに逢つちやあかなはないな

あ。

リア　えゝ、えゝ、かなふもんですか。お母さんたら馬鹿よ。私がこんな靴下を穿いてゐるのに氣が附かないんだもの。お母さんの馬鹿に見せて氣絶させてやらう。（ジヤケツや下衣の方へ手を出す）

服部　をばさんはもう見ちやつたよ。

リア　あら。

服部　今お前の留守の間に來て見ちやつたよ。

カアル　（ノツクしながら）ヘル・ハツトリ。

リア　兄さんよ。

服部　どうぞ。

カアル　（這入つてくる。紙の巻いたのを抱へてゐる）一寸お願ひがあつて。リア、お母さんが用があるさうだよ。

リア　また？（出てゆく）

服部　お掛けなさい。どうぞ。

カアル　有難う。（掛ける）ラテナウの暗殺にプロテストするために僕達が共同運動を起したのを御存じですか？

服部　えゝ、知つてます。實はさつきルストガルテンでちよつとその示威演説を聞いて來たんです。實に盛んな勢ですね。

カアル　さうでせう。實に盛んでせう。そこでね、明後日の示威運動のためのポスターにちよつと繪を描いてほしいんですがね。

服部　どんな繪を？

カアル　皆を力づけ、反動主義者を叩きのめすやうな、誰にでも解る繪です。

服部　難しいですねえ、それは。どうも困りましたなあ。

カアル　おやあ、あなたの藝術はかういふ目的には役に立たないのですか？　僕の仲間にもちよつと繪の好きな男がゐるんです。その男から聞いたんですが、表現主義といふのはブルジヨアジーに對する反抗の藝術ださうぢやないんですか。それともそれは間違ひなんですか？

服部　いゝえ、間違ひぢやありませんよ。ブルジヨアジーに對する反抗の藝術です。

カアル　さうでせう。だから僕は近頃の所謂新傾向の藝術が、古い藝術よりも進歩してゐると思つてゐるんです。何しろ古い藝術は我々の運動に關しては、局外者の立場を固執してゐるばかりか、まるで理解することが出來ないんです。そして奴さん達の半分死んだ濁つた眼には我我の運動は狭つくるしい思想の無頼漢的狂暴としか見えないんです。しかしあなた方の藝術は少くとも我々の運動を感じてゐるんです。もう一歩進んで同感してゐるんです。

服部　僕にはよく解つてゐます。あなたの云はうと思つて

ることがよく解つてるんです。あなたはかう云ひたいんでせう「同感してゐるだけでは仕樣がない。何故一緒に働かないか」つてね。所が駄目なんです。僕はさういふ風に生れてゐないんです。僕は自分が非常に特別な人間で、普通の人とはちがふ人物にならないやうな非常に豐富な思想と感情と表現手段を持つてゐると確信しないでは生きてゐられないんです。そして事實私はそれを持つてゐるんです。私は自分の才能の手綱を無理に引きしめる事は出來ません。僕は自分自身に捉れをたしてゐるんです。僕は普通の人間のやうに馴らされ訓練される事の出來る人間ではありません。それは私の才能に對する冒瀆です。その場所で僕は自分の藝術の上で益々不覊奔放に飛翔することにあらゆる望みをかけてゐるのです。

カアル　あなたの云ふ事にひどく矛盾してゐるものがありますね。もしあなたがそんなに豐富な才能を持つてゐるなら、あなたは何もそんなに追ひつめられた壊れ易い玩具みたいに自分をあぶなつかしがらないでもいゝ筈ぢやありませんか。それからまたもしあなたが——

服部　解つてゐます。僕にはあなたの云はうとしてゐる事がよく解つてゐます。要するにあなたは僕がプチ・ブルジョア的個人主義者だと云ふのでせう？　えゝ、如何にも僕はプチ・ブルジョア的個人主義者です。併し僕は特別な藝術家だから、僕一人位はさうであることは許されてもいゝと思ふのです。

カアル　するとかうなんですね。あなたは我々の運動に同感はしてゐる。しかし、それは我々の運動の含んでゐるエネルギーがあなたを刺激する限りに於てです。或ひは我々の運動が新しい顔をしてゐるので、それがあなたに新しい形式を與へる限りに於てです。

服部　さうです。僕は白狀しちまひませう。僕は本當の所を云へばルネッサンス時代に生れるべきだつたのです。僕は始終腹の中で苦蟲を噛みつぶしてゐるのです「今は何といふ一般的低劣さの時代なんだ！」つてね。私はどつちを向いても抑へつけられてゐる。どつちを向いても苦情を持ち込まれる。あなたはもし僕が豐富な才能を持つてゐるなら追ひつめられた壊れ易い玩具のやうに自分をあぶなつかしがらなくてもいゝ筈ぢやないかつて云ひましたね、僕が今にも絶望の淵につけ込まれさうになつてゐるのは、正にその僕が豐富過ぎるからなのです。僕には自由が欲しい。思ふまゝに自分の藝術的才能を發展させてくれる自由な狀態が欲しい。

カアル　誰かゞ云ひましたよ。「自由とは、最高限度に於ける消極的な何物かである。もつと正確に云へば、自己のうちに積極的なものを含んでゐない何物かである」つて

れ。個人主義的自由は結局消極的なものに過ぎません。僕はあなたがルネッサンスの時代に生きてゐたとしても、僕達が現に味ひ、更に將來一層完全な形で味はうとしてゐるの百分の一つの自由も持てなかつたらうといふことを斷言出來ますよ。あなたは要するに超人になりたがつてゐるのです。反對する必要はありません。何故と云つてニイチエはさう云ふのを超人と名附けたのです。彼の定義に從へば超人とは「人類の贅澤の疎隔された餘剩」なんださうです。さうしてあなたにとつてはさうである事が誇りなんぢやないんですか？ 一體全體何故あなたはそんなに弱々しいんです？ あなたは何故始終、責任を感じたり、救ひを求めたり、さうかと思ふと大聲を擧げて威張つたり罵倒したりしないではゐられないんです？ それはあなたの理想と正に反對してゐるんぢやないんですか。

服部　僕は何とかして君のやうな人間に遇ひたくないものだと思つてゐたのです。だからこれ迄も一つ家の中にゐたから出來るだけ顏を合はせないやうにしてゐたんです。何故と云へば君は僕をいくらでも責める事が出來るが、僕は君を責める事が出來ないからです。

カアル　何故君が僕を責める事が出來ないかを僕は知つてゐますよ。それは君が「狹くなくて豐富過ぎる」からなんでせう？ 所が僕達の言葉でいふとそれは君が「中間狀態」にゐるからなんです。所で狀態は益々「惡化」するんです。君はます〳〵ひどく齒ぎしりし續けてゐなければならないことになるんです。

服部　さう。益々齒ぎしりし續けなければならない。人を輕蔑しながら自分も又輕蔑されなければならない。これは現世の地獄ぢやありませんか。だが僕は君に、それぢやどうしたらいゝんでせう？ なんて泣きつきはしませんよ。何故と云つて僕と君とは範疇の違ふ人間だからです。

カアル　さうでせうか。僕はさうは思ひませんよ。成程僕は藝術家ではない。しかし僕達の仲間には多勢の才能のある藝術家がゐますよ。そしてその連中は少くとも君のやうにびくついたり、絶え間なく腹の中で苦蟲を嚙みつぶしたりしてブラ〳〵してはゐませんよ。その連中の創造力は遙かに君よりも旺盛ですよ。そして一番不思議なことには遙かに君よりも自分自身を自由と感じてゐるらしいのですよ。

服部　そんな事は考へられない。

カアル　所が事實なんです。それは彼等が個人主義的な壁を打壞して、大きなプロレタリア全體と結び合つたからなんです。彼等が大きな運動の中に浸入して、小さな個

人個人の區別を感じなくなつたからなんです。彼等は殆んど「死ぬ事のない大きさに迄擴大した」と云つてもいいんです。それに彼等の敏感さと敏捷さは驚くべきものです。どんな突發事件にぶつかつてもパンパン片つぱしから感受して處理してゆきますよ。組織は拘束ではない。それは積極的自由です。

服部　もう止めて下さい。たとへそれが眞理であつても僕は聞きたくはありません。それにかうなつては僕はもうあなたの家に御厄介になつてゐるわけには行きません。僕はもう此の家では絶對に繪が描けなくなつてしまふに違ひないからです。（彼は既に壁から繪を取りはずし初める）僕の才能はこんな家では窒息してしまひます。僕の製作には一定の雰圍氣が、誰が何と云つても、絶對的に必要なんです。（彼は長椅子の下からトランクを引きずり出して整理し初める）それに僕にはたうたうはつきり判つたんです。あなた方の運動は僕達藝術家にとつては敵だと云ふことがね。僕はもう一刻も我慢出來ません。（彼はリアに買つて來たものに手を觸れようとするが、そのままにして置く）

カアル　さうですか。それならお別れしませう。行く先さへ判つてゐるなら、荷物は後から片附けて屆けさせませう。

服部　さうですか。ぢや此の、友人の家へ屆けといて下さい。（ポケットから名刺を出してカアルに渡す）何しろ僕は一刻も早く此處を出かけなければならないんです。をばさんにもリアにも逢はずに行きますからよろしく。（彼は上手のドアへ行く）

カアル　あゝちよつと。僕はあなたにたつた一つ、お禮を云ふ事があるんです。

服部　（閾を跨ぎかけて振り返つて）あゝ、さうでせう。そして僕はたつた一つ殘念でならない事があるんです。

カアル　左樣なら。

服部　左樣なら。（出て行く。バタンといふ玄關のドアの閉まる大きな音）

リア　（エミリエと一緒に正面のドアに現はれる）どうしたの？　ミツちやんは。（エミリエは彼女をしつかりと抱く）

カアル　（畫架だの繪具箱だのを片附けながら）お引越だ。

リア　あら。どうして？

カアル　この家が氣に入らないんだらう。

リア　そんな事ないわ。うそだわ！

カアル　本當さ。此の家では繪が描けないんださうだ。

リア　（バルコニーへ飛び出して、遠くに向つて叫ぶ）ミツちやあん！　（泣く）

カアル　仕方がない。ちつと位ゐは。（リアへの贈物の下衣やジャケッツや帽子などをトランクの中に仕舞ふ）
エミリエ　お前、それは頂戴しといたら？
カアル　みんな返しちまはう。（どんどん片附ける。リアはバルコニーですゝり泣きながら部屋の中を見てゐる）
エミリエ　（溜息をついて）そして私達のくらしは？
カアル　よろしい。僕が夜業します。それでも足りなければ何處か町の外のもつと小さな小屋に行きませう。よござんすか。お母さん。あなたは大きな誤ちを冒したんです。思ひ切つて反動勢力と手を切れないキルト内閣と丁度同じぢやありませんか。幸ひ僕達のハットリは神經衰弱的な臆病者だつたからよかつたけれど、さうでなかつた日にはあなたはたつた一人の娘を、僕はたつた一人の妹を失はなければならなかつたんです。あなたはさつき二人の間に何の關係もないのを知つた時、臺所で僕に抱きついて狂人のやうに泣いたぢやありませんか。（舞臺が段々暗くなる）これは全く偶然だつたんですよ。ああ、考へてもぞつとするぢやありませんか。
（舞臺全く暗くなる。）
（瞬間の後また段々と明るくなる。）
（舞臺面は前の通り。たゞ一面に幾分暗いアムバーにひたされてゐることに依つて挿入劇であることを示してゐる。リアはカアルにむしやぶりついてゐる。）
リア　寄越して頂戴。そのアドレッスを寄越して頂戴。私は行くんです。私は出て行くんです。
カアル　駄目だ。お前は此處にゐるんだ。あの男はろくでなしだ。お前はお母さんと兄さんにまかせて置けばいゝんだ。
リア　ろくでなしだらうと何だらうと、兄さんの知つたこつちやないんだ。私の自由を何故さまたげるんだ。（彼女はたうとうアドレスを奪ひ取る。出て行かうとする）
エミリエ　リア！　出て行くんぢやないよ。お前の子供は私達が大事に育てゝあげるよ。リア！　出て行かないでおくれ。
カアル　リア！　お前はどうしても行くんだな。お前はプロレタリヤの娘はブルジョアにはやれないつていふ事を僕にはつきりと云はせてはくれないんだな。
服部　（上手のドアを開けて現はれる）さあ行かう、リア。（彼はリアを抱き取る）カアル、僕はたつた一つの點で君に勝ちましたよ。（二人は出て行く）
エミリエ　リア！　（カアルの胸に倒れる）勘忍しておくれ、勘忍しておくれ！　私が惡かつた。私が惡かつたんだ！
カアル　お母さんは子供の愛し方を間違つてゐたんです。

だけど僕はリアに望みをかけてゐます。リアはやがて僕達の懐へ帰つてくるに違ひありません。(舞臺段々暗くなる)僕はリアに望みをかけてゐるんです。

(舞臺全く暗くなる。)

(瞬間の後また段々と明るくなる。)

(舞臺面も人物の位置も、この挿入劇の初まる前のまま。)

カアル　さあ、片づけちまはう。すつかり片づけちまはう。

エミリエ　さうだ。町の外の小屋へ行かう、純粋に、強くなつて戦はふ!

(リアは靜かに長椅子に腰を降ろして、のろ〱と絹の靴下を脱ぎ初める。)

(急に玄關のドアの外が騒がしくなる。)

○　カアル!　開けてくれ!

×　僕達だ、僕達だ。

△　時間がないんだ。大至急、大至急。

カアル　や、繪畫部の連中だな。(跳び出して行つてドアを開ける。元氣な青年達が筆や繪具を持つてドヤドヤと押し込んでくる)

一同　をばさん、やあ、リアさん、今日は。

エミリエ／リア　(ニコニコして)今日は。

□　(そこに置いてある白い紙を擴げて見て)何だい、まだ何も書いてないぢやないか。

カアル　あゝ、これからなんだ。これからなんだ。だがよく時間のくり合はせがついたねえ。

○　うん、素晴らしいスピードで片附けちやつたんだ。そおれ、仕事にかゝれ!

(一同はめまぐるしい元氣でポスターの製作にとりかかる。窓の下が騒がしくなる。「行進の歌」が近づいてくる。二三人がバルコニーへ飛んで行く。)

□×△　おゝい、示威行列が來たぞ。

○　仕事だ!　仕事だ!

(皆は窓の下を通つて行く「行進の歌」に合せて口々に歌ひながら仕事をする)

――幕――

(二七・三)

スカートをはいたネロ

（人形芝居十場）

人形

カザリン二世の過去のスカート
同じく現在のスカート
同じく未來のスカート
カザリン二世
プロタソフ伯夫人　女官長
ムラン夫人　シムビルスク聯隊長
ランスコイ　シムビルスク聯隊旗手。後に大尉
　士官
老人
當番の兵士
侍從
處刑官
　その他露軍及び土耳古軍の兵士多數。近衛兵
官廷の人々。侍女。首斬人。僧侶。馬。御者
等

時

一七八八年。初秋から眞冬へかけて

所

第一場　ツアールスコエ・セロの離宮のカザリン二世の寢室
第二場　キムブルンの土耳古軍要塞を前に控へた露軍の陣地
第三場　露軍の陣地の後方の墓地
第四場　第二場に同じ
第五場　ペテエルブルグ、ネワ河上
第六場　エルミタアジュの秘密室
第七場　冬宮内のカザリン二世の居間
第八場　獄室
第九場　刑場
第十場　キムブルンの要塞前の斜面

注意

△すべて舞臺を人形に比して非常に大きく作ること。
△この戯曲はマゾッホのカザリン二世に關する五六種の短篇に負ふ所が少くない。
△人物が性質、動作、セリフに到る迄人形的に取扱つてあるから、特種な演出に依るのでなければ人間の俳優には移せない。

第一場

古風な典雅な追憶的な波蘭舞曲(ポロネーズ)が暫く續いたのち、靜かに幕があがる。

ツアールスコエ・セロの離宮のカザリン二世の豪奢な寢室。シャンデリヤの蠟燭の光がうすれて、夜が明けかゝつてゐる。正面の重い紫天鵞絨の幕の後が寢室である。

波蘭舞曲(ポロネーズ)はまだやまない。

不意に、カザリン二世の過去のスカートが現はれて、歌を唄ひ出す。それは小さな、鯨鬚でつつぼられた、常春藤や苔などで飾られたスカートである。

過去のスカートの歌

私の主人は獨逸で生れ、
十五の年に露西亞に來ました。
そこで露西亞語を勉强したが、
生れつきのきかぬ氣とて、
冬の眞夜中寢着一枚、
靴下も穿かずに勉强したので、
小さな肺に充血を起し、
危いところで死にかけました。
さて、死んだ方がよかつたかどうかは・

スカート風情には解らぬことです。
とも角病氣は間もなくなほり、
佛蘭西露西亞を結ぶ紐の
お役目だけは果したのです。
夫となつたピョートル大公は
あばただらけの人でなし、
觀兵式と軍服と金のボタンが大好きで
それつきりといふ生物(いきもの)でした。
たつた十六の私の主人は
早速この獸を輕蔑しました。
人間らしい生活の反對、
我儘と權力と遊惰の眞ン中で
私の主人がどんなに腐つても
ちつとも不思議はないのですが、
さてその腐り方が一ト通りでない。
まあ、あらまし聞いて下さいまし。
まづ第一に私の主人は
恐ろしい性的自墮落に陷りました。
强くて綺麗な男なら手當り次第、
兵士だらうと將校だらうと、
外交官だらうと繪描だらうと
私に厄介をかけないものはない。

美食家にはおいしいばかりでなく、
毎日變つた御馳走が必要です。
ソリコフやミロウヰッチ、
大分長續きをしてゐるパチョムキンを初めとして
歴史に殘されつきとした情人だけでも
頭のない私には覺えきれません。
現在のスカートさんも未來のスカートさんも、
これには苦勞をなさるでせう。
さて、結婚してから十八年目に
エリザベス女王が死んだので
ピョートルは皇帝になりました。
夫を憎んでゐた私の主人は
當時の寵臣グレゴリイ・オルロフが
近衞の司令官であるのを幸ひ、
不意に謀叛して玉座を奪ひ、
ついでにピョートルの命も奪ひました。
かうして有名なカザリン時代が
世界の舞臺に登つたのです。
さて絶世の美人だつた私の主人も
今年は寄る年波も六十です。
うつとりとするやうない姿も
今は和蘭の鰊の樽にまがひ、
妙な臭ひさへ發散するのです。
（鷄がトキを作る。）
おやもう夜が明けます。
鰊の樽が眼をさまして
あの幕の後ろから出て來ますから
御自分の眼でとつくりと御覽下さい。
（下手に向つて。）
では現在のスカートさん！
私はこれで失禮をします。
（上手に去る。鷄がまたトキを作る。窓の外にもう明るくなつてゐる。下手から現在のスカートが出てくる。眼も眩むばかりに寶石で飾り立てられた大きな堂々たるスカートである。）

現在のスカートの歌

まあおしやべりな過去のスカートさん。
尤も六十年は長い年月、
事件もいろ〳〵あつたのでせう。
それに引き換へて樂なのは私、
現在はこれから皆さん方が、
この舞臺の上で御覽になる通り。
私のおしやべりは不必要です。
（朝日が床の緋羅紗の上に差し込んでくる。）

おや、日が差し込んで來た。幕の後ろから、怒鳴られないうちに急いで行きませう。

（下手に向つて。）

では未來のスカートさん！

この十場のお芝居が濟んだら、

あとはあなたにおまかせします。

（正面の幕の後ろに驅け込む。未來のスカートが下手から出て來る。氣違染みた飾のついた見るもいやらしくデコついたスカートである。）

未來のスカートの歌（聲をひそめて）

未來の事をあまり云ふと、

自然の法則が狂ひます。

要する所あの婆さんは

ヒステリーが嵩じて氣が違ひ、

土耳古征伐がやつと濟んだと思ふと、

途徹もない印度征伐などを企てゝる内に、卒中でポックリ死んでしまふのです。

（幕の後ろで欠伸の聲がする。）

おやお目覺めだ、見附けられては大變、

皆さんごゆつくり御覽なさいまし。

（下手へ引つ込む。）

カザリン二世（幕の後ろで叫ぶ）プ、ロ、タ、ソーフ！

プロソタソフ伯夫人　はあい。（上手から驅け込んで來る。三十歳。ルーベンス式の美人。幕の外に立ち止つて）お眼覺でございますか。

カザリン二世　あゝ、お眼覺だよ。私を起しておくれ。

プロタソフ伯夫人　はい。（幕をかゝげて中へ這入る）

カザリン二世　よいとこどつこいしよ。（やがて彼女は幕の外に驅け出して來る、この莫大な容積の身體は最上等のフランダースのレースで縁取られた白い寢衣に包まれてゐる。その顏は放逸な生活のために損はれてはゐるが、流石に嘗ては絶世の美人だつただけに、到底六十とは思へない。せいぜい四十位にしか見えない。眼だけは昔の通り、美しく、誘惑的で、威嚴がある。髮は雪のやうに眞白である。しかし何はともあれ、ブクブクの婆さんであるといふ事は否めない。眞直に姿見の前に行つて氣取つて見る）ふうん。（滿足らしい樣子）

プロタソフ伯夫人　御綺麗でいらつしやいますわ。今朝はまた特別に輝やかしい程でございますわ。

カザリン二世　さうだね。本當に今朝はきわだつてるね。どうだい、此の頰ッぺたの色は。寶石だね。下の下から光りが出てるよ。かういふ光といふものは凡そ下素や弱蟲には縁がないものさ。アマゾンの女王だつたら持つてゐたかも知れないがね。

プロタソフ伯夫人　でもアマゾンは神話ではございませんか。

カザリン二世　馬鹿をお云ひ。學者達は都合の悪い事は皆神話にしてしまふのさ。男性の横暴に對して女性が奮然として立つて國家を組織したつて何の不思議もない當り前の事ぢやないか。所で私はたつた一人でそれをやらうと云ふんだからねえ。そりや私の軍隊にはムラン夫人のやうな將軍もゐるがね、何のことはない、昔ながらのお嬢様に緋色の天鵞絨の上衣を着せ、金モールとサーベルをぶらさげさせ、金の握りの附いた象牙のステッキを持たせたといふだけの事ぢやないか。私は選ぶ。私はアレキサンダーの生れ變りだ。私はネロと同じやうにどんな氣まぐれでもやり通すのさ。

プロタソフ伯夫人　お召換になりませんか？

カザリン二世　（耳もかさずに）そこでさ、私のほしいのは友達ぢやなくて奴隷さ。そしてお前さんにや解るまいが、民衆のなりたがつてゐるのも、友達ぢやなくて奴隷なのさ。そしてそれだからこそ、そも〳〵露西亞が榮えられるんぢやないか。ペテエルブルグにしてからが農奴の屍の上に建つてるんだからねえ、沼の中へ杭と一緒に農奴の屍骸を打ち込んで建てたんだからねえ。

プロタソフ伯夫人　左樣。奴隷でございます。陛下のまはりには奴隷ばかりしか居りません。玩具でございます。飼犬でございます。お飽きになればすぐ抛つておしまひになるのでございます。そして皆それを心から喜んでゐるのでございます。

カザリン二世　さあ、さう一概にも云へないがね、何故つてお前、農奴の生命と引き換へにこつちが生きてゐるのだからね。それ離宮を建てる、それ戰爭をする、皆農奴がゐなくつちや出來ないぢやないか、きたないとか臭いとか云つて、さう勝手に抛つてしまふわけには行かないさ。飽きたらいつでも抛つてしまへる奴隷はお前さんたちさ、さ、お跪づき！　私の足の裏に接吻をおし！（嚴然として命令する。プロタソフ伯夫人は命ぜられた通りにする）さあ、よし、そこでお召替へだ。（親しげにプロタソフ伯夫人の肩に手をまはして正面の幕の中にひつ込む）

ムラン夫人　（下手から急ぎ足で這入つてくる。すらつとした若々しい美人である。カザリンが先刻云つた通りの凛々しい服裝で幕の前に立ち止まり、漆塗りのピカピカした長靴をピタリと寄せ合はせて云ふ）シムビルスク聯隊長ムラン夫人が土耳古遠征のお別れに參上致しました！

カザリン二世　（幕の陰で）あゝ、私の可愛いゝ勇ましい

アマゾン。ちよつと待つとくれ。（プロタソフ伯夫人に）粉！――もつともつと澤山！――さあ、スカート！――（ムラン夫人に）お前さん、今すぐお出掛けかえ？

ムラン夫人　はい、此の足で！

カザリン二世　（幕の陰で）そしてパチヨムキンには何處で追ひつくつもりなのかえ？

ムラン夫人　司令官殿にはノヴゴロッドで追ひつくつもりで御座います。

カザリン二世　（幕の陰て）それで、お前さんの聯隊は皆つれて來てゐるのかえ？――（プロタソフ伯夫人に）駄目だよ！　この雛ぢやない、そつちの百合の花飾のついた方だよ！

ムラン夫人　はい、御門の前に待たせてございます。

カザリン二世　（幕の間から、化粧の濟んだ首だけ出す。年甲斐もない厚化粧て、唇にベツトリと紅をつけ、濃い頰紅を塗つた上に化粧ぼくろが三つ描き込んである。その首を突き出して、唪をひそめて）お前さんの聯隊の旗手だつたね、あのランスコイといふ好男子は？

ムラン夫人　はい。

カザリン二世　あれも出掛けるのかい？

ムラン夫人　はい。

カザリン二世　おやおや、私の飛んだ手ぬかりだよ。今になつちや仕方がないや。あの兒の顏は少し長過ぎるが、口がいゝよ、口が。口と頤の具合がね。口がかうチヨンボリとつまんだやうに突き出してゐて、（と云ひながら右手を幕の陰から出してつまむ眞似をする）頤がまた、ねえお前、ちよいと生意氣過ぎると思はれないでもないけれど、かうしやくれてるぢやあないか。それから胸から腰の恰好がさ、（と云ひながら左手も出して）かう云つた調子さ。

プロタソフ伯夫人　（幕の陰で）陛下、どうぞそんなにお乘り出しにならずに、もらすこし御辛抱遊ばして。

カザリン二世　（仕方なしに兩手をひつ込めながら）ね、ちよいと此處へ呼んどいで、あの兒を。

ムラン夫人　ランスコイをでございますか、は、畏りました。（去る）

カザリン二世　（首をひつ込める。が、間もなく着換へが濟んでプロタソフ伯夫人と一緒に出て來る。「現在のスカート」を穿いてゐる）私はあの兒を春の觀兵式の時に見つけたんだよ。シムビルスク聯隊が左翼に並んでゐた。私が閱兵してゐたら、急に馬がはねた。「おや」と思つて手綱を引きしめたら、鼻の先に可愛いゝ顏が眞紅になつてヂツと私を見つめてた。それがあの兒さ。あの時歸つたらすぐ呼ぶ氣でゐたのが何かの拍子で胴忘れしちまつた。

可哀さうにまた陛下にくすぶつてるんだよ。

ムラン夫人　（ランスコイの耳に何か囁きながら這入つて来る。ランスコイは生々した美しい青年士官である。ちよんびりと髭を生やしてゐる。旗を袋に入れて持つてゐる）ランスコイをつれて参りました。（ランスコイは茫然として只深くお辞儀をする）

カザリン二世　さう／＼、お前だつたね　お前だつたね　いゝ児だ。もつとこつちへ、おいで。（ランスコイはビクビクしながら近寄る。カザリンは彼の顎に手を掛けて顔を引き寄せる）ぢつとしておいで。ぢつと。ふん、さう／＼。私はカザリンだよ。

ランスコイ　（どもりどもり）　陛下は——何と——お美しい——事で御座いませう。

カザリン二世　よし、よし。私はね、お前に先から眼をかけてゐたんだよ。お前は仲々立派な軍人だ。

ランスコイ　（ムラン夫人に教はり教はり）　私はたゞ——陛下の——奴隷で——御座います。——玩具で——御座います。

カザリン二世　ふむ、ふむ。

ランスコイ　な、ぐ、さ、み、物で——御座います。——飼——犬——

カザリン二世　（上機嫌で）　私は本當に美しいとお前の眼に見えるかえ？

ランスコイ　（ムラン夫人につゝかれながら）　見えますで御座います！　お美しう御座います！　本當に、本當に、本當に、お美しう御座います！

カザリン二世　（ムラン夫人に）　よし、よし、此の男に伸伸能のある男らしい。大尉にしてやらう。（ランスコイは驚いて旗を取り落しさうになる。ムラン夫人は小声で「はつ」とお辞儀をする）それからパチヨムキンに私から手紙を書くから、ムラン夫人、お前さん持つてつて渡すんだよ。

ムラン夫人　はい。

カザリン二世　（プロタソフ伯夫人が持つて来た小卓の上で手紙を書き初める）　ムラン夫人、これはお前の聯隊を最後まで豫備隊にして置けといふ——（その時急に外で軍樂隊の奏樂が起る。一同ぎよつとする。するとその軍樂隊が段々遠ざかつて行くらしい）

ムラン夫人　（狼狽して窓に駈け寄る）　あら、あら、私の聯隊が出發しちまつたわ！　（ランスコイはそれを聞くなり脱兎の如く駈け出して行く）

カザリン二世　何だつてえ？　出發しちまつたあ？　聯隊長と旗手を置いてきぼりにしてえ？

ムラン夫人　（窓の外に向つて叫ぶ）　止まれえ！！　止ま

れえ!! 止まつてえええ!!!! 止まつて頂ーダーイ!!!!! (しかし、軍樂隊はどんどん遠ざかつて行くので、走り出さうとする)

カザリン二世 (狼狽して) お待ち、ムラン! お待ちつたら! 手紙が、手紙がまだ書けないんだつたら! (そして、ムランと夫人に一寸躊躇したが、やはり猛然として驅け出さうとする)

カザリン二世 (小卓をひつくり返しながら追ひかける) これ! ムラン! 待つんだ! 馬鹿!!!!

—— 幕 ——

第二場

大砲の音、小銃の音、喚聲「ウラー」といふ叫びなどの轟然響くうちに幕が上る。キヤヴアルリの土耳古軍要塞の前に控へた露西亞軍の陣地。

舞台下手寄りに小高い丘とその上に築かれた要塞が半分見える。上手に所々破れ損じた露軍の天幕の断面。その中には汚い藁が一面に敷いてあるだけで毛布などはない。歪んだ桶や鍋がぶらさがつてゐる。今、露軍は要塞を攻撃した後退却して、ぞろぞろと引き上げて來た所である。

泥と血だらけの、襤褸を身にまとつた兵士達が下手から上手へと通り過ぎる。そのうちの七八人が此の天幕の中に這入つて藁にもぐり込んで眼を瞑る。物を云ふ元氣もない。その上みんな半分は氣が狂つてゐる。兵士達が夫々の天幕に歸つてしまふと、あまり遠くない所から波蘭舞曲(ポロネス)が聞えて來る。それから女達の多勢でドッと笑ふ聲。拍手。日が暮れて、星がかゞやきはじめる。

兵士一 (不意に大聲で笑ひ出す) あはははははは。

(間。兵士達のうはごとが燈火もない天幕の中で聞える。)

兵士二 (低い聲で泣いてゐる) 痛いゝ。痛いゝ。痛いよう

兵士三 (つぶれた聲で) ウラー! つゝ込めえ!

兵士四 (口の中でブツブツと) いゝなあ、あしこぢやウオトカがしよつちゆう鼻の先に垂れてゐんだ。いつ迄もいつ迄も鼻の先に垂れてゐんだ。牛と豚と牛と豚と、しかもやまあ全く豪勢な御殿だ。踊れ、ワリンカ、ワリンカ、ワリンカ。それから可愛いゝマリア・ドミトリエヴナ。貴方に御済みませんが其の御手にあるパイプを取つて頂きたいもので。はいはい、これでございますか、まあ大層お立派なパイプでございますこと。いや、何ね、さうおつしやられると却つて恐縮でございますよ、マリア・ドミ

トリエヴナ。實はこのパイプはね。おや司祭樣。あなたは何でお泣きなさる。え、お子さんがコレラでお死になすつた。それはどうも。いや、旦那、左樣なら——

兵士五（調子はづれて歌ふ）

　パチヨムキン樣ア木の御殿。
　こりや、マリア、ありや、カーチヤ、
　よるひる忘れて、御宴會。
　こりやこりや兵士近う寄れ、
　そもそも今度の戰ひで、
　是非ともわしが手に入れにやあ、
　ならぬはゲオルギー大勳章。

　（こゝらから二三人の兵士が聲を合せてうたひ初める。）

　いかに俺らがカザリンの
　情人でも實戰せぬことにや、
　お手々にいらぬは此の勳章、
　そこで初めた戰さゆゑ
　上耳古の兵士が強くとも
　勝たなきやならぬ戰さぞよ。

士官一（歌聲を聞いて驅け込んで來る）こら！　誰だ。歌つてたのは。その歌をうたふ奴は銃殺だと云つてあるぢやねえか。どいつだ。こら、（蹴飛ばす）起きろ！　貴樣だらう。（兵士五の襟を取つて藁の中から引きずり出す）他の奴等も、今度だけはゆるしてやる、今度うたつたら一人殘らず銃殺だぞ。（腰にはさんでゐた鞭を取り出して四方八方を滅茶苦茶になぐり廻す。兵士達は急に正氣づいてヒーヒー泣き出す）歩べ、外へ出ろ！　貴樣は銃殺だ！（泣きわめく兵士五をこづきながら天幕を出て行く）

兵士二　痛いい、痛いゝ、痛いよう。

兵士四（泣き出す）あゝ將軍樣もあんまりだあ、死んでからいゝ事アあるめえなあ。

兵士一　あはははは——

兵士三　隊長ッ！　やられた。

兵士四　あああああ恐ろしい、恐ろしい、お前察しておくれよ。

（遠くで銃聲がする。二三人の兵士が愕然として身を起す。）

兵士二　あゝ！

兵士六　銃殺されたんだ！

兵士四　おゝ神樣。（そして彼等は十字を切る）

（間。波蘭舞曲がまた聞えて來る。）

兵士七　腹が減つたあ。（すると皆自分達が饑死しさうに腹が減つてゐることに氣がついて、悲しげな聲で口々に

「腹が減つたあ」と唸り出す）

兵士四　あそこには、パチコムキン様の所にはあるだよ。牛。豚。牛。豚。あゝ何でもあるだよ。そしてウオトカがしよつちゆう鬚の先に垂れてるんだ。いつ迄もいつ迄も鬚の先に垂れてるんだ。

（暗　轉）

第　三　場

陣地の後方にある共同墓地の月夜。粗末な十字架が雪まみれの土の上に立つたりころがつたりしてゐる。

ランスコイが石に腰かけて茫然としてゐる。時々大砲の音が聞える。闇の中で突然叫聲が聞える。

ランスコイ　（叫ぶ）誰だ！　（答へがない）誰だ！　返事をしないと射ち殺すぞ！

老人　（泣きながら後の穴の中から出てくる）御免なせえまし、あゝ、御免なせえまし。悪うかした。悪うかした。

ランスコイ　お前、何をしてたんだ。何だ、それは、何をかゝへてるんだ。

老人　あゝ、御免、御免なせえまし。

ランスコイ　（無理に奪ひとる）う!?　軍服ぢやないか、貴樣死骸を剝いでたんだな。

老人　悪うかした。悪うかした。

ランスコイ　（やがて不意に笑ひ出す）あははは、いゝだらう、却つて。こんな穢はしいものをすつかりぬいで、眞裸で雪の中に埋まつてしまふがいゝ。だが貴樣何だつてあんな叫聲をあげたんだ。

老人　おゝ、神樣、恐ろしい物を見ましたので——

ランスコイ　何を見た。

老人　御覽なせえまし、あそこを、あそこを。聞えましねえか、あれ、あの唸聲が。

ランスコイ　聞えんぞ何も。だがあの蒼白いものは何だ。

老人　死骸、死骸でごせえます。だがまだ死んでは居りましねえだ。

ランスコイ　まだ死んでゐない？　（穴の中に飛び込む。やがて穴の中から出てくる）死んでるぞ、もう。だが、貴樣あんな所まで引張つて來たのか。

老人　死にましただか、はあ、今の先まで生きて居りましたた。唸りながらピク／＼爬つて居りましたた。

ランスコイ　さうか。昨日病死人を三十五人一度に穴の中へ抛り込んだ時に、死なゝい奴迄一緒に投げ込んだんだ。あそこまで爬ひ出して來て力が盡きたんだな。

老人　さうに違えごせえません。おゝ、恐ろしいことでごせえます。

ランスコイ　何が恐ろしい事だ！　貴樣はその死骸を剝い

でゐるたぢやないか。鬼のやうな野郎のくせをして何て出鱈目な口をきくんだ。

老人　(叫ぶ)　鬼、鬼でごぜえます。だが、たゞ死骸を剝ぐだけの私と、人殺をするあなた方とどつちが悪い鬼でがす。あんた方は俺等の村で急に戰爭をぶつ初めた。田も畑も大砲の彈丸でほじくり廻してしまひなすつた。家や納屋を燒き拂つてしまひなすつた。いらなくなつた着物でも剝がねえでどうして俺等が生きて行きますだ。俺は正直な百姓だ。あんた方のやうな恥しい商賣をしてゐる者ぢやごぜえません。俺等を鬼にしなすつたのは誰だ。あんた方ぢやごぜえませんか。

ランスコイ　(微かに)　俺ではない――俺ではない――

老人　さ、見てなさるがいゝ！　あんた方は俺をこんなにしてしまひなさつた。見てなさるがいゝ。俺は今の男の死骸を剝いて來ますだ。(彼は穴の中に隱れる)

(暗　轉)

第　四　場

第二場に同じ。

兵士四　あしこにはパチヨムキン樣の所にはあるだよ。牛。豚。あゝ何でもあるだよ。そしてウオトカがしよつちゆう鬚の先に垂れてるんだ。いつ迄も、いつ迄も鬚の先に垂れてるんだ――

當番の兵士　(皆の分の糧食を持つて天幕の中にスルリと滑り込んでくる)　おい、晩飯だぞ、起きろ、起きろ。(皆は彼のまはりに押し寄せる)　おい、大事な話があるんだ。ちよつと一人入口を見張つてくれ。(兵士七に)　お前見張つてゝくんねえか。

兵士七　よし。(入口へ行く)　あゝ雪が降つてきただ。

當番の兵士　おい皆よく聞くだぞ。他の聯隊ともすつかり相談して、愈々ペテエルブルグへ使者を出す事になつただ。

兵士四　神樣、可哀さうな使者をお守り下さいまし。

兵士二　誰だ。その使者は！

當番の兵士　ランスコイ。あの色男のランスコイ大尉だ。

兵士三　えゝ！　ランスコイ大尉ならえゝ！　あれなら俺等の女王樣(ツァリツァ)のお氣に入りだから、パチヨムキン樣の悪口でもお取り上げになるべえ。俺等は蟲けら見たやうなものだが、お願ひだけはして見ねばならねえ。

兵士四　俺等の女王樣(ツァリツァ)は俺等がこんなになつてゐる事を御存じねえだ。で、かう〳〵でごぜえますと本當の事を申し上げれば、びつくりして大きな涙をおこぼしになつて、可哀さうな子供達や、勘辨しておくれ、私はちつとも知らなかつたんだからつておつしやるだ。

番兵の兵士　さうだ　さうに違えねえだ。それで、ランスコイ大尉に、何もかも洗ひざらひお話してくれつて頼んだたつ。パチョムキン様は立派な御殿を建てゝ二十人も外國の美人を集めて毎日酒宴をしたり、舞踏會をしたりしてござらつしやる。それだのに俺等は糧食がなくて餓死しかゝつとるだよ、それから病氣にかゝる者が多いし、人はバタバタ死んでゆくばかりだとよ。司令官が遊んでござらつしやるで、毎日餓死ばかり多くて、キムブルンの要塞もいつ落ちかゝつても抜けんとた。

（その時兵營の外で、百姓姿に身をやつしたランスコイ大尉が十人ばかりの兵士に護られてやつて來る。）

ランスコイ　（小聲で）さ、見つからんうちに歸つてくれ。俺は生命をかけてやりとげるから安心して待つてゐてくれ。

兵士七　お、ランスコイ大尉。有難うごぜえます。有難うごぜえます。（彼の裾に接吻して泣く。天幕の中の兵士達も躍り出して、泣きながら逃る。波蘭舞踏曲(ポロネーズ)がまた聞えてくる）

――幕――

第五場

ペテルブルグ。まだ河上に冬宮が見えてゐる。河はすつかり凍りついてその上に雪が一面に降りつんでゐる。下手の方に高さ七、八間の雪の山が出來てゐる。ガラスのやうに滑かな斜面が作つてあつて橇で滑り降りて遊ぶやうになつてゐる。その滑走路の兩側には樅の木が一列に綺麗に差し込んである。頂上に登るためには裏の方に木の階段が作つてある。樂しさうな歡呼、ふざけた叫聲、橇の鈴の音などの中に幕が開く。

防寒具を身にまとつた宮廷の人達が橇滑りをして遊いでゐる。近衛兵達が橇を氷山の頂上に引き上げたり、突き落したりする仕事をしてゐる。

幕が開くとそのとたんにカザリン二世がプロタソフ伯夫人と一緒に橇に乘つて滑り落ちて來た所である。

プロタソフ伯夫人　（橇から降りながら）まあ、こは！

カザリン二世　（近衛兵に橇の綱を渡して）さあもう一度！

プロタソフ伯夫人　まあ、お止め遊ばせ、これは確かに身體に障りでございますわ。心臓が後に殘つて身體だけ先へ行くやうな氣が致しますもの、身體に悪いに違ひございません。眼の先があんまり早く動くから眼にだつて確かによくはございませんわ。眼が視點といふものを定めることが出來ませんもの。

カザリン二世　お前心臓だの眼だのは棄てておきつて早く、私

についておいで！

（この時ムラン夫人が女の服を着て二頭立の橇に乗つて出てくる。）

カザリン二世　（叫ぶ）あゝ、私の可愛いゝ勇ましいアマゾン。（彼女の傍に駆け寄つて）よく出て来たね。おやもう脚の傷はすつかり癒つたのかい？

ムラン夫人　（橇を降りて深くお辞儀をして）はあ、もうすつかり癒つてしまひました。

カザリン二世　お見せ。

ムラン夫人　はあ。（スカートを少しかゝげて靴下を降ろして足首の傷の痕を見せる）

カザリン二世　（しやがんでさはつて見て）おや弾丸の通り抜けた痕つて奇妙な風になるものだね。まあ〱顔たの胸だのでなくつて結構だつた。所で、癒つたんならもう一遍戦地へ帰るかい？

ムラン夫人　おゝ！　眞平！　私、死んでもあそこのことは忘れられまいと思つてビクビクしてゐるんでございますわ。

カザリン二世　おや〱、みじめな事になつたもんだねえ。だがいゝさ、私は初めからさうだらうと思つてたんだから。軍服も似合ふが、かうして女の服を着たお前さんの方が私は一層好きさ。その代り二度と勇ましさうな口をおきゝでないよ。（プロタソフ伯夫人に向つて）さあやらう。（二人は氷山の絶頂に達し、非常な勢で滑り出す。半ば程滑つた時上手からランスコイが百姓姿で現はれる。そのとたんに滑つてゐた橇が引つくり返つてカザリンとプロタソフ伯夫人は氷の上に抛り出される。皆が色を失つて駆け寄らうとするうちに、カザリンは平氣で起き上つて、生きた心地もないプロタソフ伯夫人を抱き起して橇に載せて後の半分を滑り降りる）

ムラン夫人　（駆け寄つて）どうなさいました？　まあ私吃驚して、胸がまだこんなにドキドキして居りますわ！

カザリン二世　あの兒が見えたんだよ。不意にあの兒の顔が。それでハツと思ふ間に舵を取り違へてひつくり返つちまつたのさ。

ムラン夫人　あの兒とは？

カザリン二世　ほら、お前の聯隊の旗手だつた男さ。ラン――ラン――！

ムラン夫人　あゝ、ランスコイ。

カザリン二世　さう、ランスコイさ。

ムラン夫人　何處に？

カザリン二世　（まはりを見廻しながら）何處かにちよいと見えたんだよ。あの兒の何だかひどく蒼い顔がね。

ランスコイ　（人を押し分けて出てくる。膝まづいて）女

王陛下。

カザリン二世　やつぱり居たんだね。一體どうした格恰なんだい。何時戰地から歸つて來たんだい？

ランスコイ　實は祕密に重大なお願ひがございまして。

カザリン二世　（彼の頤に手をかけて引寄せながら）おやそれは〳〵、だがお前さんの願ひを聞く前にお前さんもこつちの言ふ事を聞いてくれなくちやいけないね。（彼の耳に口を寄せて）今晩十一時にエルミターヂユの裏門においで。（プロタソフ伯夫人に）もう歸らう。

プロタソフ伯夫人（足をひきづりひきづり）僞ぢやない、本當に引つくり返つてしまつたんでございますからねえ。あゝ、こり〳〵致しました。何とおつしやつたつてもう二度と滑る事ぢやございません。（二人は二頭曳の橇に乘つて去る）

ムラン夫人（跪まづいたまゝ呆然としてゐるランスコイに近寄つて）ランスコイ、お前は幸福者だよ。一體何たつてこんななりをして戰地から逃げて來たのか知らないが、何しろ今晩は間違ひなくエルミターヂユにおいで。女王様はお前さんに惚れておいでなんだよ。（ランスコイは色を失ふ）これさ、こはがる事はちつともないさ。女王様(ツアリツナ)のおつしやる通りになつてりやいゝんぢやないか。お前の重大なお願ひとかいふのもわけなく成功するよ。

――幕――

第六場

カザリン二世の密會所、エルミタージユの秘密室。神話的油繪で覆はれた壁。眞紅の布で張られた家具、くらい蠟燭の灯。カザリンは桃色の薄い寢着を着ただけで、ストーヴの前の長椅子の上にかゞんで火を掻き立てゝゐる。暫くすると上手の戶の外に足音が聞える。

侍女（戶の外で）さあ、この戶を開けて中へお這入り遊ばせ。幸福が待ち受けて居りますから。（そして戶が開いて、陸軍大尉の正裝をしたランスコイが子供のやうにオドオドしながら這入つてくる）

カザリン二世（振り返らずに）寒いわ、こゝは。それともあんまり薄着をし過ぎてるのかしら。

ランスコイ（ふるへ聲で）私――私が――火をお焚き致しませう――陛下。（彼は彼女の足元に蹲つて一生懸命で火を焚ぎ初める）

カザリン二世（火に照らされて赤くなつてゐる彼の横顏を暫くぢつと眺めたのち、彼の肩に手を置いて）ランスコイ。お前が戰地に行つてから、私はお前の事ばかり思つてゐたよ。お前も私のことを思つてゐてくれたらうね。

ランスコイ　は、はい。私も——陛下の事ばかり——はい。

カザリン二世　私は淋しい女なんだよ。愛に飢ゑてゐる女なんだよ。

ランスコイ　飛んでもない。陛下はあらゆる——權力を握つておいで遊ばします。

カザリン二世　いくら權力を持つて居たつて、愛せよ、と命令することが出來るだらうか。

ランスコイ　は——はい、お出來にたります。それは——確かに——お出來になります。

カザリン二世　お前知つてるだらうね。私を愛するといふ事が何を意味するか。

ランスコイ　は——はい、確かに——まだ、覺えて居ります。それは——奴隷になることでございます。——玩具に——なぐさみ物に——飼犬になることでございます。

カザリン二世　さうだ。だがそれつきりぢやないのだよ。まだ／＼あるのだよ。ぢきに解る。お前こゝの上に顔をおのせ。（彼女は彼の顏を自分の膝の上に引き寄せて兩手で挾む）

ランスコイ　陛下——實は私は——土耳古征伐軍の代表として——重大なお願ひが——

カザリン二世　シツ。お黙り。今私はそんな事なんか考へてゐないんだよ。

ランスコイ　でも陛下、多勢の生命に——

カザリン二世　（彼の口をふさいで）お黙りつたら。あの戰はパチヨムキンがしたいといふからさせてあるんだよ。パチヨムキンがする戰だからパチヨムキンが好きなやうにすればいゝのさ。私には何の關係もない。二度と云ふんぢやないよ。それに覺えておいで、パチヨムキンはお前の先輩だよ。お前は今何につた。私を愛することは奴隷になる事だ。さあ、默つてあそこに行つて横におなり。（部屋の奥の天蓋のついたベツドを指さす。ランスコイに力無く立ち上つて、そこに行つて倒れる。カザリンが覆ひかぶさる）

——幕——

第七場

冬宮内のカザリン二世の居間。外は盛んに雪が降つてゐる。

カザリンは豪奢なレースの一杯にくつゝいた黄色い部屋着を着、ストーヴに足の先をあぶりながらウオルテールから來た手紙を讀んでゐる。

プロタソフ伯夫人が這入つてくる。

プロタソフ伯夫人　早く出しておやり遊ばせよ、陛下。もう大方一ト月になるぢや御座いませんか。

カザリン二世　（手紙を讀み續ける）　しツ！　まあ、ヴォルテール！　あらまあ、ヴォルテールつたら。あはははははは。

プロタソフ伯夫人　陛下！　ランスコイが可哀さうぢやございませんか、早く牢屋から出しておやり遊ばせツて申し上げてるんでございますよ。

カザリン二世　だから私は「シツ」ツて云つてるんぢやないか！　うふふふふ、ヴォルテールのおぢいちやんたら。（不意に笑ひやめて）あ、お前、その卓の上の書附を取つとくれ。サインするのを忘れてゐた。

プロタソフ伯夫人　（その書附を手に取つて見て驚く）あら、これはランスコイの死刑執行命令書ぢやございませんか。

カザリン二世　さうさ。ペンとインクを持つて來とくれ。

プロタソフ伯夫人　陛下、本當にサインなさるおつもりなので御座いますか？

カザリン二世　さうさ、明日の朝、ポツクリとあの首を落としてやるのさ。早くペンとインクをお寄越し。忘れたのかい、お前さんは私の召使だよ！

プロタソフ伯夫人　はい。（ペンとインクを渡す）

カザリン二世　（サインする。手を鳴らして侍從を呼ぶ）これをネッリエーソフに渡しておくれ。明日の朝七時きつかりに執行するんだ。私も見に行くからつて云つておくれ。

侍從　畏まりました。（書付を受け取つて去る）

カザリン二世　さあ、これでまた一人きりになつた。好きな玩具は飽きないうちにこはしてしまはなくちやいけないんだ。

――幕――

第八場

ランスコイの捕へられてゐる獄室。月の光が高い小さな窓から差し込んでゐる。藁を敷いた木のベッドが一つ。その上にランスコイが横になつてゐる。

石疊の廊下に足音がして、燈がパツと差す。鐵の扉を開けて這入つて來た人がある。それはプロタソフ伯夫人である。ランスコイはぎよいとして起き上る。その顏は痩せおとろへてはゐるが美しく剃つてある。

プロタソフ伯夫人　（小聲で）私、私ですよ。プロタソフ伯夫人ですよ。ランスコイ。お前さんはまあ可哀さうに。

ランスコイ　（跪まづいて）何か御用でございますか？

プロタソフ伯夫人　（ランスコイの顏が綺麗に手入れしてあるのに氣がついて吃驚する）おや、お前さんの顏は、まあどうしたの？　この手入れの仕樣は。

ランスコイ　女王様の御言ひつけでございます。女王様は毎晩此處へ忍んでいらしつて――

プロタソフ伯夫人　え？　女王様が毎晩？

ランスコイ　はい、毎晩、夜中に忍んでいらしつてその時私の顔が綺麗に手入れしてないと御機嫌が惡いのでございます。

プロタソフ伯夫人　女王様が毎晩。まあ、私ちつとも知らなかつた。

ランスコイ　えゝ毎晩丁度十二時頃、この石の壁の裏から這入つておいでになります。

プロタソフ伯夫人　十二時といへばもうぢきだわ。ぐづぐづしちやゐられない。だがまあ女王様は何ていふ方だらう！　こんな所にも秘密を持つておいでになる。しよつちゆうおそばに仕へてる私にもおつしやらないで。私は女王様の秘密をすつかり知つてゐると思つてゐたのに、何て恐ろしい方だらう。今だつて何處かで聞いてらつしやるかも知れないわ。だけどランスコイ、お前さんは不幸な人だわ。お前さんは死刑になるのよ。

ランスコイ　（驚いて）本當でございますか？　それは。

プロタソフ伯夫人　えゝ。

ランスコイ　そんな筈はございません！　そんな筈は。女王様はほんの一ケ月も這入つてゐればすぐ出してやるとおつしやいました。脱走兵だから軍隊の體面上、我慢して這入つてゐてくれとおつしやいました。

プロタソフ伯夫人　お前さんは明日の朝七時に死刑になるのです。

ランスコイ　うそです！　うそです！　そんな筈はありません。私は信じません。そんな無茶な事を信じる事は出來ません。

プロタソフ伯夫人　女王様は今日お前さんの死刑執行命令書にサインなさいました。私は此の目でサインなさる所を見たのです。

ランスコイ　うそです！　うそです！　女王様は私を本當に愛して下さつてるんです。

プロタソフ伯夫人　女王様はお前さんを本當に愛しておいでたのかも知れない。だがお前さんは明日の朝七時に首を斬られるのです。私はお前さんを逃がさうと思つて來たんです。さあ早く私の後についておいでなさい。今にも女王様がおいでになるかも知れない。さあ早く。（扉の方へ行く）

ランスコイ　（二三歩その後を追ふがベタリと膝をついて、半分泣きながら）女王様は私を愛しておいでなんです。あなたにはお解りになりません。

プロタソフ伯夫人　（ランスコイの手を取つて無理にも引

張つて行かうとする）さあ早く！

ランスコイ　（跪まづいたまゝ又少し扉ににじり寄るが、彼女の手を振りきつて泣き出す）あなた、私は女王様(ツアリーナ)から程女に愛された事はありません。

（その時上手の右の壁が音を立てゝ動く。プロタソフ伯夫人は愕然として扉を閉めて逃れ去る。ランスコイはそのまゝ前に倒れる。右の壁が開いて、寢著の上に純白な毛皮の外套を着て、手に蠟燭を持つたカザリンが現はれる。ランスコイは動かない。カザリンは驚いて、蠟燭を置いて驅け寄つて抱き起す。）

カザリン二世　（彼の上半身を膝の上に抱き上げて）ランスコイ！　ランスコイ！　私の可愛い可愛いランスコイ。どうしたの？　お前は。

ランスコイ　（小さな聲で）カザリン！

カザリン二世　おゝ。（彼を抱き締めて夢中になつて接吻する）駄目よ、お前、こんな所へ寢てゐては。風邪をひくよ。それにね、お前明日の朝は仲々大仕事があるんだから。

ランスコイ　明日の朝。

カザリン二世　えゝ明日はね、お前に大變な芝居を打つて貰はなくちやならないんだよ。今話してあげるからね、さ、ベッドに腰掛けよう。（彼をベットにつれて行つて腰かけさせ、自分はその足元に蹲る）お前は強い軍人だからね、平氣で芝居をしなくちやいけないんだよ。その芝居といふのはね、お前が斬首臺に上つて今にも殺されさうになるのだよ。

ランスコイ　（跳び上つて）斬首臺！

カザリン二世　驚くんぢやない。たゞの芝居だよ、お前が皆の前であはや殺されようといふ時に私が驅けつけて赦免の命令を出すのだよ。大臣達も人民もどうしてもお前を死刑にしなくちやいけない、軍隊脱走者は當然死刑にしなくちやいけないつて主張して聞かないのだ、もしお前を死刑に處して置かないと、今でさへ優勢でない土耳古征伐軍に脱走者が相ついで忽ち負けてしまふだらうと云ふのだ。だが今にも首を斬らうとする時に私が赦免の命令を出せば、それで皆は乾度滿足するに違ひないのだ。いゝかいお前、だから明日は平氣で一つ此の大芝居を打つておくれ、お前大丈夫出來るだらうね？　出來なけりや本當に殺されちまはなくちや　ならないんだからね。

ランスコイ　私は陛下を信じます。私は陛下を心から愛してゐるのですもの。

カザリン二世　可愛いゝ可愛いゝランスコイ！　今夜つきりでお前はもう此のいやな牢屋を出られるんだよ。そし

たら私はお前に小さな綺麗なお家を建てゝあげよう。庭には一杯樹を植ゑよう。それから立派な橇を上げよう。明日はだから平氣で臺に上るんだよ、私の戀人がブルブル震へたりしたらをかしいものねえ、可愛いゝランスコイ、可愛いゝ！──（彼女はランスコイの上にのしかゝる。蠟燭が倒れて消える）

ランスコイ　（樂しげに）カザリン！

──幕──

第九場

刑場。一面に雪が降つて段々上つてくる朝日に輝いてゐる。正面に斬首臺、それを取り卷いて步兵。その外側には無數の群集。兵士の列の中には高貴な婦人達が美々しい橇を並べて、オペラグラスの度を合せてゐる。僧侶や處刑官等がブラブラ步いてゐる。やがて單調な太鼓の音を先に立てゝ、後手に縛られたランスコイが曳かれて出てくる。彼は平氣な樂しげな顏をしてゐる。臺の下で彼は僧侶の差出した十字架に接吻する。處刑官がカザリンの命令書を讀み上げる。

處刑官　シムビルスク陸戰步兵大尉セミヨン・ミハイロウイツチ・ランスコイ。一七八八年十一月八日、キムプルン要塞攻擊軍より脫走したるを以て斬首の刑に處すべし。カザリン。

（遂にランスコイは斬首臺の上に立つ。下手の方を見るが、カザリンの橇の音もしない。人々は眼かくしをさせようとするが彼は拒む。彼はその上に首を伸ばすべき臺の前に膝をつく。そして又下手の方を見る。首斬人は斧を握る。その時、賑かな鈴の音をさせて、華麗な橇に乘つてカザリンが驅けてくる。その橇は臺のすぐ傍、下手に止まる。カザリンは毛皮に包まれたまま、ぢつとランスコイの顏を見る。首斬人が斧を振り上げる。カザリンはにや／＼と笑ふ。首斬人に斧を振り下ろす掛聲をする。）

ランスコイ　（そのとたんにすべてが頭に閃いて、飛び上らうとして物凄い叫びを上げる）うわあつ！　畜──

（斧は落ちて、ランスコイの首は眞赤な血を迸せながらカザリンの足元に轉落する。カザリンは晴れやかに笑ふ。）

第十場

キムプルン要塞前の傾斜地。夜。吹雪。露軍の兵士が數十人上手から吹雪の中を爬つて來る。

兵士Ａ　動けるだか。

兵士Ｂ　要塞は──要塞はまだか？

兵士C　眼の前だ――眼の前だ。
兵士D　動けない。
兵士E　あゝ。
兵士F　もうだめ――死ねるだ。
兵士G　もうだめ――飢死んだ。
兵士H　元氣を――元氣を――出せ。
（下からも土耳古軍の兵士が同じやうにして匍つて出て來る。）
土耳古軍の兵士A　苦しい、苦しい。
同じくB　苦しい。
同じくC　早く――早く行つて――前に死なう。
（兩軍は要塞の中央で出合ふ。）
露軍の兵士A　誰だ。
土軍の兵士A　誰だ。
露軍の兵士B　誰だ。
土軍の兵士B　誰だ。
（兩軍は彈のない銃をふるつて立ち上つて戰はうとする
[illegible]）
露軍の兵士B　待て！　誰か露西亞語の話せる者はゐねえか。
土軍の兵士B　おう。
露軍の兵士B　何で要塞から出て來たた？

土軍の兵士B　糧食がねえだ。もう五日間も何も食はねえだ。俺達はもう二十八人しかゐねえだ。
露軍の兵士B　俺達も糧食がねえだ。五十六人しかゐねえだ。俺達はもう立てねえだ。
土軍の兵士B　俺達も立てねえだ。
露軍の兵士B　それでも俺達は戰ふだか？
土軍の兵士B　その他にどうしべえ。
露軍の兵士（叫ぶ）　俺達は仲直りすべえ。
土軍の兵士（驚いて）　おう。
露軍の兵士B　俺達の司令官は俺達の敵だ。俺達の女王様は俺達の使者の首を斬つただ。そしてペテルブルグの者達は誰一人それをいけねえとは云はなかつただ。俺達五十六人の他は露西亞中が皆敵だ。
土軍の兵士B　おう、俺達もさう思つてただ。俺達二十八人の他は土耳古中が皆敵だ。それで俺達は司令官や士官を殺して、今度は自分達が殺されに降りて來ただ。
露軍の兵士數人　（一度に）　俺達も殺して來ただ。
今、首を叩き落して來ただ。
火をつけて木の御殿を燒いて來ただ。
土軍の兵士B　俺達は仲直りしべえ。
露軍の兵士B　そして此處で一緒に仲よく死ぬべえ。
土軍の兵士B　さうだ抱き合つて一緒に死ぬべえ。

露軍の兵士（口々に）一緒に死ぬべえ。
抱き合つて――
一緒に――
（そしてその後無言。吹雪ますます〳〵はげし。）
――幕――
（二七・三）

金子洋文篇

洗濯屋と詩人（一幕）

人

洗濯屋の主人
たね（娘）
詩人
酒屋の小僧
辯護士
老婆
青年
職工
その他通行人、新聞屋、うどん屋

時

現代

所

東京市内の人通りの少ないある街路

第一幕

舞臺

ある街路。

みすぼらしい洗濯店と小路をへだてゝ、富豪の石塀が高く聳えてゐる。それは恰も富める者が貧しき者を威嚇してゐるやうである。洗濯店の家根に、痩犬のやうにヒヨロヒヨロした高い物干臺がたつてゐる（幕）

（舞臺の設計はリアルではいけない、リアルよりなおしくとも未來派か、表現派の裝置がずつといゝ）

秋の黄昏である、空が赤い、洗濯店の主人が戸口に腰をおろしてぢつと空虚をみつめて、物思ひに沈んでゐる、蜩の聲がする、少しはなれて、豆腐屋のラッパと聲が聞えて來る。人が通り過ぎる、……しーんとなる。暫くすると、『父さん、父さん』と呼ぶ娘の聲が家の中から聞えてくる、併し、主人は無言でゐる。間もなくハーモニカの進行曲が聞えてきて、酒屋の小僧がやつてくる、彼は主人の姿をみつけるとハーモニカをやめて、石塀によりかかる、そして無言で主人の様子を眺めてゐる、數分の後。

小僧　小父さん、何を考へてゐるんだね。
主人　誰だ。
小僧　憎まれ小僧だよ。

主人　また道草を喰つてゐるな。
小僧　道草でも喰はなければ、おなかが一つぱいにならないよ。
主人　また減らず口をたゝいてゐる。
小僧　小父さん、洋服屋の旦那がね、とう／＼醫者にかゝつたよ。
主人　それがどうしたと言ふのだ。
小僧　をかしいぢやないか、あの旦那は醫者と坊主が大嫌ひだつたのに。
主人　誰だつて病氣になつちや仕方がないさ。
小僧　それで降參だ。
主人　降參だ。
小僧　俺は降參しても心は大威張だよ。
主人　俺だつて大嫌ひだ。
小僧　それなのに、小父さんは何故負けて默つてゐるんだ。
主人　俺が負けた。
小僧　近所ではみんなさう言つてゐるよ、強情張りの洗濯屋も今度こそ往生したつて。
主人　何處の何奴がそんなこと言つた、そいつ等は澤沼の親仁を知つて口を開いたんだ。
小僧　だが、さう力んでも駄目だよ、小父さん
主人　何が駄目だ。（立上る）
小僧　小父さんの耳にはあの元氣のいゝ大工の唄と、金槌の音が聞えなかつたのかい、物干臺より五倍も高い板塀はもう昨日のうちに出來上つたよ、小父さんの眼は盲目になつたのだらう。
主人　（低く）畜生ッ……（小僧に）俺の眼はまだあいてゐるぞ。（歩き出す）
小僧　おや何故默つて考へてばかりゐるんだ、小父さんが毎日歌ふ面白い唄は何處へ逃げて行つたんだ。
主人　唄なんかどうだつていゝ。
小僧　噂言つてらあ、近所の人達は小父さんの唄で天氣がわかると言つてゐる位だよ、小父さんのおてんとさまは昨日も今日も寝ぼけてらあ。
主人　うるさい、もう默れ。
小僧　默らないよ、姉さんは今朝泣いてゐたよ、俺だつてくやしくつて一晩泣いた位だ。
主人　馬鹿ッ、泣く奴は弱蟲だ。
小僧　小父さんはそれでも弱蟲でないのかい。
主人　何だと。
小僧　小父さん、澤沼の園遊會は明日だよ、こんなにいゝ夕燒ぢや、明日も天氣だ。
（短い沈默。蜩がしきりになく。）
小僧　（塀の内を見あげて）俺達を笑つてらあ。（小石を

とつてなげろ）あつちへ行け。

（豆腐屋のラッパが遠くから聞えて來る。）

小僧（戸口に近づいて）姉さん、姉さん。

たれ　雄ちやんかい、（戸口に顔を出す）お酒を持つて來たの。

小僧　さうだよ。（酒を渡して低く）姉さん、先生の手紙だよ。

たれ　しッ。（ためらふ）

小僧　どうしてとらないのさ。

たれ　父さんに叱られるよ。

小僧　叱られたつてかまふものか。

たれ　いや。

小僧　いやなら持つて歸るよ。

たれ（引込ますのを急に奪ひとつて）お馬鹿さん……父さん、もう御飯ですよ。

主人　俺はまだ食べたくない。

たれ　どうしたの、お晝だつてちつとも食べないぢやないの、今夜は父さんの好きな御馳走をどつさりこしらへましたよ。

小僧　小父さん、一つぱいおやりよ、今日は一番上等の酒を持つて來たんだよ。

主人　酒なんかのめるものか。

小僧　小父さんは馬鹿だね。いゝ考へなんかしらふぢや浮ばないものだよ、俺の先生なんかは酒をのんぢや考へごとをするんだ、……小父さんは星は何だか知つてゐるかい、あれはね、お日様とお月様の子供なんだよ、ところがお日様がおこりつぽく、お月様が嫉妬やだから、そこで不良少女が出來るのさ。

たれ　不良少女。

小僧　さうさ、流星は後尾の輕い不良少女だよ。

たれ　そんなこと、誰が教へたの。

小僧　俺の先生さ。

主人　そいつは餘程の馬鹿者だ。

小僧　馬鹿なものか、俺の先生はえらい詩人だよ。

主人　詩人つて何だ。

小僧　詩人つて、考へる魔法使さ、指の先から人形を出したり、天氣のいゝ日に大雨を降らしたり、乞食を王様にしたり、金持を牢屋にたゝき込んだりするのさ、そしてね、（娘の方を一寸見て）しまひには洗濯屋の別嬪に惚れるんだよ。

たれ　お馬鹿さん。（家の中に引込む）

主人（急に歩きとまつて）雄吉、今の話は本當か。

小僧　本當とも、俺の先生はえらい發明家だよ、日本一の學者だよ。

主人　（急に元氣になつて）おい雄吉、その先生を大急ぎで連れて來てくれ。
小僧　（少しおどろいて）先生を、どうして。
主人　先生にたのみたいことがある、智慧を貸してもらひたいことがある。
小僧　智慧を。
主人　さうだ、俺の考へではもう明日に間に合はない。
小僧　（飛上るやうに手を拍つて）小父さん、ぢややるんだね。
主人　やらなくてどうするものか。
小僧　うまいぞ、小父さん、先生を味方にしたら大丈夫こつちの勝だよ。
主人　だが、先生の智慧はあの板塀に勝てるかしら。
小僧　あんな物、へボ大工の細工ぢやないか、先生の考へはもつとすばらしいよ、あんな塀なんか一つぺんにたゝきこはしてしまふよ。
主人　そいつはえらいな。
小僧　だけど小父さん、詩人は洗濯屋の娘に惚れつぽいよ。
主人　そんなこと、どうでもいゝ。
小僧　でも先生が姉さんに惚れたら、どうするんだね。
主人　たねに、かまはないくれてやるさ。
小僧　（飛びついて手を握る）やあ、小父さんはえらいな、ぢや俺は飛んで行つてくるよ。
主人　しつかりたのむよ。
小僧　いゝとも。
（小僧飛んで行く、主人喜びに昂奮して歩きまはる。）
たね　（物干臺にあらはれる、四五枚の洗濯物を片づけた後）父さん、お燗がつきましたよ。
主人　さうか、ぢや一つぱいやるとせうか、（行きかけて）いや、もう少しあとにせう、先生に會はないうちは、おちついて酒なんか飲んでをられない。
たね　先生！
主人　さうだ、えらい先生がこつちの味方になるんだ、明日の勝負はこつちの勝だよ。
たね　まあ、先生が。
主人　どうして赤い顔をするんだ……さうだ、詩人は洗濯屋の娘に惚れつぽいと言ふから、氣をつけろよ。
たね　（うれしさうに）いやな父さん。（引込む）
主人　あはゝゝゝ。
（そこへ淺沼の執事をしてゐる、辯護士がやつて來る、主人はその姿を見かけると、不快さうに後向となる。）
辯護士　坂田さん、今日は。
主人　（後向のまゝ）何だね、洗濯物なら今こんでゐるから御免だよ。

辯護士　私だよ、お爺さん、となりの辯護士だよ。

主人（振返つて）なる程、これはとなりの三太夫だね。

辯護士　その通り、お前さんの大嫌ひな澤沼の番頭だよ。

主人　俺はお前に口をきかないことにしてゐるから、呼びかけられる理由がない。

辯護士　なに、今日は話しに來たのぢやない、お前さんに見せたいものがあつてきたのさ。

主人　見せたいもの、そりや何だ。

辯護士　お爺さん、ホラ、あの夕日に映えてゐる、高い板塀をお前さんに見て貰ひたいのだよ。

主人（ぐつときたがこらへて）それがどうした。

辯護士　なに、たゞあれを見てもらひたいのさ……お前さんの眼が悪けりや、私の金縁眼鏡をかしてあげてもいゝよ。

主人　お前の金縁眼鏡だと、法律をごまかしたり、藝者に色眼をつかふ眼鏡か、俺の眼にあふと思つてゐるのか、たはけ奴、親切氣があるなら、鐵緣の老眼鏡でも持つてこい。

辯護士　なる程、これは理窟だ、だがお爺さん、あの塀はかすんで見えなくとも、これなら結構見えるだらう。

（のしのかゝつた紙包をとり出す。）

主人　その紙包がどうしたと言ふんだ。

辯護士　明日は澤沼様の六十年の御誕生日だ、それで近所にくばつた酒肴料だよ。

主人　ふん、そこで近所の奴等が澤沼をありがたがつたといふのだらう、なか〳〵結構な慈善だ。

辯護士　その通りだ、昔から、金持に頭を下げて損をした者は一人もないからね。

主人　何だと、金持に頭を下げて損をした奴が一人もゐない、そんな白々しい嘘を言ふと、はり倒すぞ。

辯護士　だがお爺さん、お前さんもいくら強情張つたつて、もう駄目だよ、あの高い板塀をごらん、お前とこの物干臺は谷底に消えてしまつたぢやないか、御殿からは汚ない洗濯物は一枚も見えないよ、どうだ、もうそろ〳〵降參してもいゝだらう、お前が今降參するなら、二千圓の引越費を三千圓にしてやつてもいゝ、いや、五千圓でもきつと引受けてやる。

主人　うるさいッ、貴樣は何度同じことを繰返へすのだ、職工の汗からしぼりとつた金を一萬圓つんだとて、この俺がうんと言ふものか、馬鹿者奴、もう歸れ。

辯護士（獨言）狂人につける藥はない……ぢや歸るよ因業爺さん、耳をよくほつておくがいゝ、明日は賑かなおはやしが聞えてくるだらう。

主人　馬鹿ッ。

辯護士　（冷嘲的に）あはゝゝゝゝゝ。（歸る）

主人　畜生ッ。

（おこつて歩きまはる、ペツ、ペツ唾をする、黄昏の雜音が聞えてくる、遠くで汽笛がなる、そこへ詩人が新聞紙に包んだものを持つてやつて來る、口笛でチヤイコフスキーの、アンダンテ、カンタビルを氣持よさゝうにうたつてゐる、洗濯店の戸口の前でとまる、一寸のぞく、その時、人が通る、びつくりして引返す、口笛を吹く、また戸口のところまで來て、のぞく、女を呼ぶ口笛を吹く、そこへ主人が近づいて。）

主人　（大きな聲で）誰だッ。

詩人　（びつくりして）あツ……こ、今日は。

主人　お前さんは犬だな。

詩人　えッ。

主人　お前さんは犬だな。

詩人　僕が犬ですつて。

主人　さうだ。

詩人　あゝ、あなたはあの事を言つてゐるんですか、僕が犬と共同生活をやつたことを……あの當時、僕は全く幸福でした、たゞ可哀相にあいつは、僕の留守中にとうとう殺されてしまつたんです

主人　お前さんは何の用事があるんだ。

詩人　あゝ、さう〳〵、僕は、非常に急いでゐる用事があるんです、僕は洗濯物を持つて來ました。

主人　洗濯物、どれ。

詩人　さあ、どうぞ。

主人　（新聞紙をひらく、中から汚ないシヤツが出てくる、それをひろげて見て）これか、何だ。

詩人　僕のシヤツです。

主人　シヤツ。

詩人　さうです、僕はこのシヤツを五年間の保證付で銀座の夜店から買つたんです。

主人　五年間……

詩人　え、五年間です、僕はこの言葉が氣に入つて買つたんです、彼の嘘が氣に入つて買つたんです。

主人　お前さんは、このシヤツをどんなに長く着てゐたのだ。

詩人　丁度四月です、買つてからずつと着てゐたのです。

主人　四月……お前さんはそれで平氣でゐたのか。

詩人　いや、平氣ではなかつたのです、けれども、僕は自分の身につけたものをはなしたくはないんです、これは決して資本家の所有慾ぢやありません、愛です、裏切られたものゝ愛です、まあ、聞いて下さい、僕はこれまで大勢の女に戀して來ました、女學生に、全く僕は女學生が

好きであつたのです、僕の詩はたゞ〳〵女學生の讃美であつたのです、だが、彼女等は私に何を與へたと思ひます、惱みと苦しみです、いや、さうぢやない、そんな尊いものぢやない、もつと淺薄な、もつと不愉快なものです、半可通な物識、高慢、虚榮、かゝとの高い靴に等しい高遠の理想、おしやべりな唇のやうに薄い人生觀、何が令孃です、何が淑女です、彼女等はおめかしをした豚に過ぎません。

主人　そこでお前さんはこのシャツをはなさなかつたのだな。

詩人　さうです、たしかにさうです、僕は彼女等の侮辱に會つてすつかり僕の戀愛觀をかへてしまつたのです、いや、それは誰でも必然的にさうならなければならないのです、美は不自然に飾られたところにあるものではありません、美は吾々が見逃してゐるつまらないものにかくれてゐるのです、ごく手近なところに、虐げられてゐる魂のうちに、貧しき人間のふところに、眞理と共に住んでゐるのです、僕の求める戀人は寂しく、ほゝゑめる女です、貧乏人です、洗濯屋の娘です。

主人　洗濯屋の娘。

詩人　さうです、洗濯屋の娘です、ソニアです、我々の尊敬するソニアです、彼女等は惱める魂の所有者です、近代の美と眞理はその寂しい魂のうちに住んでゐるのです、まあ、聞いて下さい、僕はそのことをたしかに發見したのです、僕がかつて蒼白き巣窟に行つた翌日のことです、僕はなやましい悔恨を抱いて、雨にたゝかれたから帝劇へ、オペラを見に行つたのです、僕は三等の隅に坐つてゐたが、その時僕は二階の上等席に、如何にも藝術の理解者のやうな顔をして、星のごとくゐならんでゐる、紳士、貴夫人、令孃を見たのです、僕はハッと思ひました、僕の心は實に一瞬間を境にして顚倒したのです、一切の價値が顚倒したのです、僕は初めて美の神髓にふれ、眞理の奥に到達することが出來たのです、貧しき者、惱める者、苦しめる者こそ、新時代の建設者です、闇にうごめいてゐる彼女の魂こそ新しき美と眞理を生む母なのです。

主人　まあ、一寸待つてくれ、お前さんの言ふことはすつかり判つた、そこで俺は、このシャツを洗濯するのは御免蒙るよ。

詩人　何故です、何故このシャツがいけないんです。

主人　このシャツがいけなくない、お前さんの演説がいけないのさ。

詩人　何故演説がいけないのです……いや、僕のは演説ぢやない、詩です、詩人の音樂です。

主人　詩人、（ハッと思つて）ぢや、お前さんは詩人さんかね。

詩人　え、僕は詩人です、人間の魂をつくり出す詩人です、一切の醜いものを美しくする詩人です。

主人　ぢや、お前さんは、雄吉の先生ぢやないかね。

詩人　雄吉、酒屋の小僧さんでせう。

主人　やあ、さうだ、やはり先生だ、先生、このシャツは洗濯します。明日のうちにきつと洗濯しますよ。

詩人　えッ。

主人　あなたのものなら何でも洗濯します、洋服でも、帽子でも、靴下でも何でも洗濯します、どん／＼持つてきて下さい、お錢なんか一錢も入りませんよ。

詩人　（無言）

主人　先生、あなたは何故默つてゐるんです、わしは先生を尊敬してゐますよ。

詩人　僕は何だか、急に寂しくなつてきました。

主人　どうしてそんな心細いことを言ふんです、先生あなたはわしの恩人ですよ、わしを殺すのも生かすのもあなたの考へ一つなんだ、まあ、あの板塀を見て下さい、あの板塀がわしの元氣も唄も仕事も、みんな何處かへ持つて行つたのだ、わしを殺してしまつたのだ、（急に堅く手をとり）先生、あの板塀を飛越えるうまい工夫がありませんか、金持をやつつけるうまい考へがありませんか、わしを助けると思つてあなたの智慧をしぼつて下さい。

詩人　まあ、まあ、一寸待つて下さい。

主人　いや、わしは一刻も待てない。

詩人　あゝ痛い……、まあこの手をはなして下さい。

主人　いや駄目だ、先生、逃げようたつてわしは逃がしはしませんぞ。

詩人　僕は決して逃げません、だからこの手をはなして下さい。

主人　いや、はなさない、さあ、わしの家にはいつて下さい、あなたと一盃やりませう、わしの娘に酌をさせませう。（無理にぐん／＼引張つて家に連れ込む）

（舞臺空虚、新聞屋が來て夕刊をはふつて行く、パッと電燈がつく、ポウと方々で汽笛がなる、間もなくうどん屋が鈴をならして通りすぎる――數分の後、物干臺に詩人と娘の姿があらはれる。）

詩人　（獨言）これが話の板塀だな……だが、僕には全く理解することが出來ない、戀は雷だと言ふが、この戀は雷でなくて神秘だ、夢だ。

たね　何を獨言言つてらつしやるの。

詩人　僕は何だか寂しい、まるで夢の中で女の手をさゝつてゐるやうな氣がする。（たねに）僕にはあなたの愛が

わからないんです。

たね　何うして。

詩人　あなたは昨日まで僕をきらつてゐたぢやありませんか。

たね　嫌つてゐたのぢやないわ、あなたがあまり脅かすので、私は自分の心をはつきり言へなかつたのだわ。

詩人　僕が脅した、そんな馬鹿なことが、僕はたゞ夢中であなたを戀してゐたのです。

たね　でも、來る手紙／＼、堕落をするの、心中をするのと書いてあるんですもの、女の心はあなたが考へてゐるより、ずつと小さいものよ。

詩人　僕は戀はさういふ言葉で表現するより外に仕方がなかつたのです、僕は澤山の深傷をうけてゐるのです、自分でもよく生きてゐられると思ふ位、心臓が穴だらけです、僕はいつでも過去に脅やかされてゐるのです、僕が戀するときはもう失戀してゐるときです、だから僕の手紙は戀文でなくて、失戀の泣言となるのです。

たね　でも今度はもうあんな恐しいことは書かないでせう。

詩人　（近寄り急に手をとつて）おたねさん、はつきり言つて下さい、あなたは本當に僕を愛してくれるのですか。

たね　まあ、まだ疑つてゐるの、私はあなたを一眼見た時から愛してゐるのです。

詩人　本當ですか。

たね　え。

詩人　あゝ、ありがたう。

（彼は夢中で女を抱きしめて接吻する、そして昂奮して歩きまはる。）

詩人　あゝ、何といふ美しい空の色だ、何だかあの眞赤な空の色を見てゐるとまるで自分の胸のうちを見てゐるやうな氣がする、あのはるかな廣い空は、空虚なものとは思へない、神祕な實在だ、大きな幸福だ、自由と平等の靜かなる世界だ、あゝ、僕は詩人以上だ、僕の身體は詩と一緒にあの眞赤な空にとんで行きさうだ……（また女の手を握つて）おたねさん、あなたは僕の永遠の[illegible]人です、いや、僕の妻です。

たね　まあ、あなたは洗濯屋のお婿さんになつて下さるの。

詩人　なりますとも。

たね　では汚ないものを洗濯なさるの。

詩人　汚いもの……さうだ、洗濯屋は詩人の仕事です、汚いものを美しくする詩人の仕事ですよ。

たね　まあ、さうだつたら、どんなに嬉しいでせう。

（二人は昂奮してまた接吻する。その時小僧急いで來る、ふと、二人の姿を見つけて。）

小僧　（獨言）やあ、先生だ……何んだ、もううまくやつてゐらあ。

― 幕 ―

第二幕

舞臺　ある街路（一場と同じ）

物干臺の一方の隅に普通位の高い柱棒を結へつけてある、その柱棒の尖端に（觀客からは見えない）滑車がついて、綱が地上まで下つてゐる。洗濯店の戸口に赤丸をつけた物々しいビラが貼つてある、それには（破れた最も汚ない洗濯物を最も高價で買求める、貧乏人よ來れ、而して汝の苦しき生活を語れ）と書いてある。からりと晴れた小春日和の午後、淺沼の邸内から賑かな話し聲が聞えて來る、何となく舞臺の空氣が緊張してゐる、詩人が綱に汚ない自分のシャツを結んでゐる、とまもなく酒屋の小僧が出て來る。

小僧　先生。

詩人　おゝ、淺沼の形勢はどうだ。

小僧　大變な人だよ、もう園遊會が始まつたよ。

詩人　さうか。

小僧　先生、今ね、大臣が自動車でやつて來たよ。

詩人　大臣が來た。

小僧　大臣は眞赤な顏をしてゐたよ。そしてでぶ〳〵太つてゐたよ。

詩人　さうさ、大臣は太つてなければつとまらないものだよ。

小僧　大臣はえらいんだらう。

詩人　そりや偉いさ、彼等はどんなことでも出來る、いゝことも出來るが、惡いことだと尙よく出來る、彼等は澤山の牢屋を自分のふところに持つてゐるのだ、そして人間の思想や、自由や、正義や、愛や、眞理をどん〳〵縛りつける、そしてしまひには自分の心も牢屋にたゝきこんでしまつた、ただ大臣にも一つ持てないものがあるのに。

小僧　それは何だね。

詩人　洗濯屋だよ。

小僧　洗濯屋。

詩人　さうさ、彼等はいつでもきれいなものを身につけてゐなければならない、でなければすぐ巡査につかまつてしまふのだ、だから彼等の惡いことは洗濯屋が一番よく知つてゐるんだよ。

小僧　何だか俺にはわからないな……先生、職工さん達は

來てゐるかい。

詩人　あゝ來てゐる、裏の空地で祝杯をあげてゐるよ。

小僧　姉さんもゐるの。

詩人　姉さん、あゝゐるとも。

小僧　ぢや行つて見よう。（行きかける）

詩人　おい、雄坊。

小僧　え。

詩人　おたねさんにね、（まご／＼して）こつちへ來ちやいけないつて言つてくれ。

小僧　來ちやいけないつて、（少し笑つて）あゝいゝよ、（行きかけて戸口の貼札を見る）先生、この貼札は大評判だよ、（高く讀む）『破れた最も汚なき洗濯物を最も高價で買求める、貧乏人よ來れ、而して汝の苦しき生活を語れ。』うまいなあ。

（家の中にはいつて行く、詩人がもう一枚の汚ない破れた職工のヅボンを綱に縛りつけようとするところへ、娘が出て來る。）

たね　先生。

詩人　あゝおたねさん。

たね　私、こつちへ來ましたわ。

詩人　どうして。

たね　だつてあなたが來いと言つたでせう。

詩人　そんなこと、誰が言つたのです。

たね　雄ちやんが。

詩人　あッ、またやられた。

たね　まあ、噓だつたの。

詩人　あなたに來ちやいけないつて、言つてやつたのですよ。

たね　どうして、どうして來ちやいけないの。私、職工さん達の傍にゐるのは、いやだわ。

詩人　何故。

たね　だつて、あの人達は奥さん、奥さんと呼ぶんですもの。

詩人　え、奥さん、（びつくりして手に持つてゐたヅボンを落す）誰の奥さんです。

たね　あなたの。

詩人　え、僕の。

たね　だつて、先生の奥さんて、呼ぶのよ。

詩人　あゝ、僕は幸福だ。

（主人、物干臺に出て來る。）

主人　たね。

たね　あら、父さん。

主人　どうして逃げて來たんだ、職工さん達に何故酌してやらないんだ。

たね　でも。

主人　先生、たねをあつちへかして下さい。

詩人　さあ、おたねさん、あつちへいらつしやい。

たね　いやだわ。

主人　（やさしく）馬鹿ッ。

（たね、逃げて行く。）

主人　先生、となりの方はもう始まつたね。

詩人　え、始まりましたよ、今に奴等をあつと言はせて見せますよ。

主人　（耳をすまして）忌々しい奴等だ……先生、品物は大丈夫かね。

詩人　大丈夫です、何しろ一時間前に行つたから、今頃貧民窟では大騒ぎをやつてゐますよ。

主人　あはゝゝゝ面白いぞ、だが、わしはあつちの相手をしてますから、あとは先生にたのみますよ。

詩人　大丈夫です。

（主人の姿見えなくなる、そこへ浅沼の辯護士が昂奮してやつて来る。）

辯護士　おい／＼。

詩人　何ですか。

辯護士　君は一體誰だ。

詩人　（姿をじろ／＼見て）さういふ君は何者です。

辯護士　わしは浅沼の辯護士だ。

詩人　ふん、なる程、君はそんな真面目な顔をしてゐるなから、法律の穴をさがしまはつてゐるんだね。

辯護士　馬鹿を言へ、君は一體誰だ。

詩人　僕は詩人だよ、こゝの主人の友人さ。

辯護士　詩人なら何故物事をよく考へないんだ、今日は浅沼家の園遊会で立派な方々が大勢いらしてゐるのだ、それだのに何だ、この高い柱棒［はしら］は、君等はこの高い柱棒を立ててどうさうとするのだ。

詩人　この柱棒［はしら］は僕の詩だよ、詩人の空想の具象化したものさ、それに對して何の異議があるのだ。

辯護士　常識をもつて考へて見給へ、浅沼家の御殿からこの高い柱棒［はしら］がどう見えると思ふのだ、これは立派な脅迫だ。

詩人　脅迫……をかしい、僕の詩が脅迫であるといふのは初めてきかされる批評だ、君は實にえらい批評家だ、だが待ち給へ、それは決して詩の罪でない、詩はいつでも詩の領域以外に出しやばりはしない、それは丁度自然のやうなものだ、君は美しい太陽をおそれて夜のみをほつきまはる無頼漢を知つてゐるだらう、若し君等が僕の詩に脅迫されると言ふのなら、君等は正に自然をおそれる無頼漢なのだ。いや、さうぢやない、君等は無頼漢以上

だ。何故なら無頼漢は太陽をおそれてゐる、自分の罪を自覺してゐる、けれども君等はさうぢやない、君等はフルックコートを着て、金縁をかけて、おまけに眞理に向つてくゝつてかゝる、君等は正に山師だ。

辯護士　おい、お前は何を言つてゐるのだ、そんなことがあの柱棒と何の關係があるのだ、わしはあの柱棒を何のために立てたと聞いてゐるのだ。

詩人　それは今も言つた通り、僕の詩の具象化なのだ、貧乏人の勝利の詩なんだ。

辯護士　君は法律を知つてゐないな、人心を脅迫する行動は君等が唱へる自然主義以上の罪なのだ。君は誰の許可を得てあの柱棒を立てたのだ、それをはつきり言ひ給へ、君は警察の許可を得たのか。

詩人　これはます／＼をかしい、君は實に奇妙な批評家だ。僕が詩をつくるのに何故警察の許可を得なければならないのだ、法律が何んで僕の詩に交渉があるのだ、法律をけなしたり、政治家を嘲笑したりする詩は、最早僕達にはノンセンスだ。それは時代おくれの藝術だ、僕の觀照の眼はすぐさま人間の魂にとび込んで行く、そしてそこで人類の惱ましさ、苦しさを知り、人類の進むべき途を見出すのだ、僕の眼は希望に燃え出す、僕の血は踊り出す、そして僕は貧しき人々の讃歌を歌ふのだ。

辯護士　あゝ馬鹿々々しい、君はあの親爺を新らしくした狂人だ、わしは警察に訴へ出る。

詩人　おもしろい、大いに訴へ給へ、すると僕は忽ち有名になるだらう。

辯護士　馬鹿ッ。

詩人　あはゝゝゝゝ。

（辯護士おこつて踊る、そこへ一人の老婆がとこ／＼やつてくる。）

詩人　や、來たぞ。

老婆　あ、一寸あなたに伺ひますが。

詩人　はい、はい。

老婆　この邊に坂田といふ洗濯店がありませんかね。

詩人　その洗濯店はこゝですよ。

老婆　おや、さうですか、やれ／＼、これでまあ安心だ、ありがたうございました。

（行きかける。）

詩人　一寸、お婆さん。

老婆　はい、はい。

詩人　お前さんの用事は、私がきゝたいんだがね。

老婆　おや、まあ、あなたがこゝの旦那でございましたか、そりやまあ、とんだ無調法をいたしましたね……何しろ眼がすつかり駄目になりましてね、自分の足許に金貨が

ころがつてゐても、眼が知らせてくれないんですよ。でもね旦那、誰が私をこんな風にしたか、ちやんと知つてますよ。知つてますとも、それを忘れてどうなるものか、みんな慾の深いあいつらですよ。あいつらは一番先に貧乏人の眼をつぶしてしまふのですよ、でもね、いくら眼が見えなくなつても耳がしつかりしてゐるから、あいつらのやる悪い事は何でも知つてゐますよ。一昨日も私は職工を三百人馘首にするあいつらの相談をきゝつけたのですよ、するとどうでせう、あいつらは方々に犬を見張番にしてゐるものだから、すぐ私のことをかぎつけたのですよ、そしてあいつ等は夢の中にまでやつてきて私の耳をのみで破らうとしたのですよ、だけど、私があばれ出したので逃げて帰つたが、旦那、あいつらのすることは何でもこの通りですよ。

詩人　や、お婆さん、お前は立派な詩人だ。

老婆　なに旦那、ひどい貧乏をすると何でも覚えるものでヘエ、それはさうと、私の仲間にもう来ましたか。

詩人　いや、お婆さんが一番だよ。

老婆　さうでなさい旦那、私の耳にはどんなことでもすぐ、この噂をきゝつけたのですよ。私の死んだ連合は、口ぐせにお前の耳は強欲耳だ、よその悪い噂をきゝかじつては世間へふれまはると、悪口言つてゐましたが、でもこの耳のおかげで私の連合は工場を馘首になるのを二度も助かつたのですよ、私は工場長の悪いことも知つてゐたし、息子さんの悪い遊びをしてゐることも知つてゐましたから、ね。だが旦那、私は今度の噂ほど、ありがたいことをきいたことがありませんよ。

詩人　お婆さん、お前さんはどんな汚ないものを持つて来たんだね。

老婆　さあ見て下さい、汚いものつて、こんなに汚いものはたんと世の中にないでせう。

（詩人、新聞包をひらく。中から油で真黒になつた上着が出て来る。）

詩人　お婆さん、これは何だね。

老婆　これは私の連合が着てゐた仕事着なんですよ。十年もこの仕事着を着て、真暗な汽罐の中にはいり込んで、がん／＼やつてゐたのですよ、だが旦那、こんなにひどい難儀をしたつて、誰一人連合をほめてくれた人はないんですよ、そしてあげくの果に狂人になつて死んじやつたんです、三十年もひどい貧乏と、がん／＼なる汽罐の中に住んでるなら、誰だつて狂人になるのはあたりまへですよ、旦那これを見て下さい。（と言つて一枚の紙片を渡す。）

詩人　これは何だね

老婆　連合の遺言狀ですよ。
詩人　（遺言狀を讀む）『この仕事着はすばらしい値打のするものだ、安く手放すな、これを賣つて俺の葬式を出してくれ』これは立派な遺言狀だ。
老婆　ホラ、立派な遺言狀でせう、けれどね旦那、世間の馬鹿者共にはこの遺言狀が少しもわからないんですよ、私は足を棒にして、百軒ほどの質屋をとび歩いたが、一錢もかしてくれないばかりか、連合と同じ狂人にされてしまひましたよ。私はその時、連合と一緒に死んでしまひたかつた。
詩人　お婆さん、この仕事着を二十圓で買はう。
老婆　二十圓、二十圓、旦那そりや本當ですか。
詩人　本當だとも。
老婆　あゝ、あまりいゝ値で私の耳が遠くなつたやうな氣がしますよ。
詩人　さあ、二十圓。
老婆　どうもありがたうございます、旦那。人間は長生するものですね、これで私の連合も安堵して眠ることが出來ませう。では左樣なら旦那、しつかり儲をとつて下さい、今日の日を一生忘れないで覺えてゐますよ。
詩人　左樣なら、お婆さん。
老婆　御免なさい。

（お婆さんは喜んでトコ〳〵歸つて行く。）

詩人　（仕事着をひろげて見て）すばらしい旗だ、金で買へない立派な記念品だ、さあ、いよ〳〵面白くなつて來たぞ。

（喜んでその仕事着を綱に結びつける、そこへ一人のやせた、顏色の惡い、勞働者風の青年がやつて來る、戶口の貼紙を眺め、次に詩人を見つけて。）

青年　（近づいて）一寸伺ひますが。
詩人　や、いらつしやい。
青年　あなたに話していゝでせうか。
詩人　え、どうぞ。
青年　私は貧民窟の人間ではないが貧しい浮浪人です、あなたのところで私のものを買つてくれませんか。
詩人　よろしい、大いに買ひませう。
青年　有難う、あなたはよく物のお分りなさる人の樣に思ひますから、私はお話し致しませう。
詩人　どうぞ、話して下さい。
青年　私はひどい肺病患者です。
詩人　肺病患者。
青年　さうです、私の生命はもう幾日もありません、私は近い内に自殺せうと思つてゐます。
詩人　エッ、自殺……それは本當ですか。

青年　本當です、あなたはとめるやうなことはしないでせう。

詩人　いや、決して、決して、おゝ、僕は寧ろあなたの悲壮な死を讃美します。

青年　（さみしく笑つて）どうぞさういふことは言はないで下さい、私の國は秋田です、すたれた港です、私はその寂しいふるさとの海で死にたいと思つてゐます。

詩人　おゝ、あなたの死は全く詩です、あなたは眞に病氣と貧乏に苦しんで來られたのではないでせう、あなたはきつと失戀しなさつたのでせう、どうか僕にあなたの生活をきかして下さい。

青年　いや、それは話したくありません……これが買つてもらひたいものです。

（詩人受け取つて新聞紙を開く、眞赤な血がついた汚ないシャツが出てくる。）

詩人　これは血ですか。

青年　さうです、これがいたましい、私の反抗の生活のしるしです。

詩人　買ひませう、いくらあげればいゝでせう。

青年　汽車賃があるといゝのです、どうぞ。八圓下さい。

詩人　さあ、どうぞ。

青年　十圓ですね。

詩人　これだけ持つて行つて下さい。

青年　ありがたう、もらつて行きます、では左樣なら。

詩人　あなたの手を握らして下さい。

（青年は少しほゝゑんで手を出す、二人握り合ふ。）

青年　あの賑かなはやしは隣ですね。

詩人　さうです、今にびつくりさせてやります。

青年　では左樣なら。

詩人　左樣なら。

（青年、歸つて行く。）

詩人　あゝ何だか、急に寂しくなつてきた、あのシャツを見てゐると、あの人のこれまでの生活が、はつきり眼に浮んでくるやうな氣がする。

（そこへ、集會場で鼠色の服を着た一人の職工がやつて來る。）

職工　先生、待つてゐます。

詩人　あ、御苦勞さん、いゝのがあつたかね。

職工　いや、何しろ大急ぎなものですからね。（風呂敷包をひらく、中から汚ないものがどつさり出て來る）どうです。

詩人　これはすばらしい……さあ君、手傳つてくれ、急いで飾りつけよう。

職工　え、やりませう。

（二人は急いでその汚ない品物を壁に飾りつける、戸

口に小僧が顔を出す。）

小僧　先生、用意は出來たかね。

詩人　出來たよ、小父(をぢ)さんを呼んでくれ。

小僧　よしきた。

（小僧が引込むと、すぐ主人が物干臺にあらはれる。）

主人　やあ、先生、すつかり出來ましたね。

詩人　どうです、實に天下の逸品ぞろひでせう。

主人　あはゝゝゝ、さあ、あなたはあつちへ行つて指揮して下さい。

詩人　よろしい、（職工に）さあ君、あつちへ行かう。

（詩人と職工が急いで家の中にはいつて行く。）

主人　やつてゐるな……眼のたかい立派な連中に、この古物(こぶつ)がとんなにうつるか見物だらう。

（この時、嵐のやうな管絃樂が奏される、と同時に勞働者の歌が、すばらしい威勢で觀客の耳を襲ふ、綱は主人の手でする〳〵とまきあげられる。見よ、風に飜る貧乏人の旗を！　主人は大空にのぼつて行く、この汚ない洗濯物を眺めてこゝちよげに高笑する。）

——幕——

附　記

上演の時は汚ない洗濯物が風にハタ〳〵と鳴るやうにしてもらひたい。（大正十年十月廿一日作）

狐（三幕）

人物

直子　鑛泉場の女主人（寡婦）
外山貞藏　養子（石油會社員）
よし子　貞藏の妻
治助　鑛泉場の爺や
太田欣二　石油會社の職工
五助　村の若者
東藏　村の百姓
たつ　東藏の女房
東吉　東藏の子供

時代　現代

場所　東北の[illegible]山間の鑛泉場

第一幕

場面

鑛泉場の茶の間、古い田舍の建物で、東北の山間に見うける家の感じがよくあらはれてゐる。家の前は清流、その河をへだてゝ山腹がつらなり、油掘る櫓が所々に散見してゐる。川の音……新秋のある日の午前十一時頃。鑛泉場の爺やがお爐傍で網をつくつてゐる（六十歳位、大きな眼鏡をかけてゐる）そこへ、村の若者が手拭で顏をふきながら湯殿から出てくる。二十四五歳のおとなしさうな若者。

若者　爺ちやん、ひどく一生懸命だすな。
治助　あゝ。
若者　（爐の傍にすわり、爺から麥湯をくんでのみながら）それで雜魚でも捕るのけ。
治助　うゝん、雜魚でやねえ、狐を捕へるのだ。
若者　また鷄を盗られたのだすか。
治助　昨夕はあぶなくやられるところだつたよ。
若者　作藏のところでも先達の晩めんどりを盗られたつてことだすて。
治助　この頃の狐は醉つぱらひをたますのをやめて、鷄はかり盗みあるく。
若者　本當だな。
治助　秋風がたつて鷄もだん／＼うまくなつてきたから

な。

若者　夜中にけ。

治助　さうだ一時頃であつたべ、廿三夜のお月様が山から出てござつた時だ。

若者　盗られねえでよかつたすな……廿三夜のお月様は舟のやうだつて言ふが本當け、俺あ婆からよくきかされるが、まだ一度も見たことはねえだす。

治助　そりやありがてえもんだぞ。

若者　お月様が舟のやうに見えるつて本當け。

治助　本當だとも、まるで立派なお舟だぞ、そのお舟の両側に、眞赤に蝋燭がもえあがつて、中に坊様が三人立つてござらつしやるだ、俺は生れてから三度拜んだことがあるぞ。

若者　昨夕もさうだつたすか。

治助　昨夕か、昨夕は狐が屁をひつたと見えて坊さんはゐなかつただ。

若者　（何だ、つまらないと言つた顔をする）

治助　やれ〲、やつと出來た。

（眼鏡をはづし、爐の方に向きかへて煙管を出す。）

若者　今晩罠をかけるのけ

治助　あゝかけるとも、今晩來ると、きつと捕へてやるぞ。

若者　俺あ今晩見に來るかな。

治助　（煙草を吸ひながら）つまらねえ、何か面白いて、それより冷えると脚に悪かべ。

若者　脚の方はすつかり癒つたすて。

治助　そりやよかつた、時候が冷たくなつたで脚氣も逃げて行つたのだべ。

若者　朝晩は袷でも寒くなつたすな。

治助　さうだな、これから熱い湯がありがてえな。

若者　本當だた。刈あげがすんだらお客さんがどつさり〱るべな。

治助　百姓でいつぱいだ、冬の湯はいゝからな、百姓も一年中働いた甲斐があるべ。

若者　本當だた。

治助　今日のお湯はあつくなかつたか。

若者　丁度いゝ按排だつたすて……さあ、そろ〱歸るかな。

治助　もう行くけ。

若者　どつこいしよ。（立上り戸口に行き眼下の川を見ながら）おや〱、市三がまだ同じところで鮎を見てゐるすて。

治助　さうけ、鮎とりにかけちや、怠け者の市三も熱心なもんだな。

若者　本當だな。（草履をはいて）いゝ年になつても身體

[illegible]にた、あはえ。
(段々下りて行く。)
治助　あゝ。(それから二三服煙草を吸つて) どれ、鶏を見てきえへかな。
(立上つて戸口に行き川の方を見る、それから大きな聲で、「嫁さん」と呼ぶ、二度目に呼んだとき意味がわからない答へる聲が下から聞えてくる。「とつたか」と治助は再びきいたが、返事がきこえない、手で答へたらしい。)
治助　(大きな聲で) ほう、えらいもんだな。
(それから奥座の方にまはつて行く、とう、とう、とう、と鶏を呼ぶ聲がする。そこへ嫁のよし子が出てくる、二十三歳、しつかりした美しい女、ことに眼が美しいこと、何か心配なことがあるらしく、顔色がすぐれてゐない。)
よし子　爺ちゃ、……爺ちゃ。
治助　(外で) とう、とう、とう……おや、ミノルカの奴……
(よし子その聲をきゝつけると戸口に近づいて大きな聲で呼ぶ。)
よし子　爺ちゃ、爺ちゃ。
治助　(外で) 嫁さん、何だす。
よし子　一寸用があるから来てたんえ。
(よし子、爐の傍に跡つてすわる。)
治助　(戸口に姿をあらはし) 嫁さん、ミノルカがひどく翅をいためてゐるすて。
よし子　おや、昨夕やられたのだすか。
治助　朝見た時はさうでもなかつたが、今行つて見ると、草の中に寝てクウ、クウ、うなつてゐたす。
よし子　やつぱりやられたのだすな。
治助　(顔をしかめて) 太てい奴だすな、今晩きつと捕へてひどい目にあはしてやるす。
よし子　ミノルカは駄目だすか。
治助　うゝん、死ぬやうなことはねえすべ、お前さん、仁丹持つてゐねえすか。
よし子　持つてるす。(帯の間から仁丹を出して治助にやる) 爺ちゃ、昨夕あの騒ぎのあつたのは一時頃であつたすな。
治助　まあ、そんな刻限だすべ。
よし子　お前、あれまで何も知らねえでゐたのけ。
治助　うゝん、昨夕はお酒を飲み過ぎたもんだ、何にも眠られなかつたす。
よし子　それからお前に、鶏のさわぐ聲をきくと、すぐ飛出して行つたんだのすな。

治助　さうだす。（立つてゐたが話に不安をおこして腰を下ろす）

よし子　あの時あんさん（貞藏のこと）がお湯にはいつてゐたのを、お前知つてゐたすべ。

治助　そりや隣室たもの、よく知つてゐたす、俺あちつとも眠れねえであんさんがざあ／＼湯をかぶる音を、だまつて聞いてゐたのだすて。

（短かい沈默。）

治助　どうかしたしか。

よし子　（疑ひながら）それで何も不思議がなかつたのけ。

治助　不思議つて……それから間もなく、あの騒ぎが起つたのだからねす。

よし子　お前が飛起きた時、湯殿の戸が掃除したまゝ、開けてあつたすべ。

治助　さうだす。

よし子　その時あんさんの外に、誰も見なかつたすか。

治助　俺あ、誰も見ねえすて嫁さん、第一あんさんに聲をかけねえで外へ飛出して行つたのだからねす。

よし子　何うしてあんさんに聲をかけなかつたのけ、あんさんがゐるのに默つて行くのはをかしいねすか。

（沈默。）

よし子　爺ちや、お前私に嘘をついてゐるのだねは。

治助　（弱く）俺あ嫁さんに嘘など言はれねえだす。

よし子　うゝん、たしかに嘘を言つてるのだす。お前はあの騒ぎにたせ義姉さんが起きてこなかつたか知つてる筈だねすか。

治助　とんでもねえ、お主婦さんのことだんか、俺あ何で知るもだてけ。

よし子　いや、たせ義姉さんはあの騒ぎに起きてこなかつたのだす、水車の音が氣になつて寝られねえほどの人が、あの騒ぎを知られねえわけがねえすか。

（沈默。）

よし子　お前は義姉さんとなかいことを一緒に御飯をたべて來たのだから、義姉さんをかばふのは無理はねえす、そんだが、お前がいくら蓋したからつて、腐るものはなほ腐るだけだすて。

治助　そりや嫁さんのひがみと言ふものだす、俺あの心にはそんな蝙蝠は住んでゐねえすて。

よし子　だつて爺ちやはこの前にも私をだましたすべ。

治助　いつ俺めが、嫁さんをだましたことがあるだけ。

よし子　お前はまだかくさうとしてゐるのけ、義姉さんがなせ夏の間東京へ行つたのか、わそれを知られねえと思つてるのけ。

治助　お主婦さんが東京へ行つたのは病氣のせゐだすべ。

よし子　さうだすべ、こゝにゐては癒らねえ病氣つさゐたす、

治助　東京にはいゝお醫者さんがゐるからな。

よし子　市の赤十字にだつて赤坊を生ます位のお醫者さんは有るもんでえすて、そんな世間の眼をくらますことの出來るお醫者さんは東京には無かつたのだすて。

治助　お主婦さんの病氣はそんなもんでなかつたべ、胃病であつたすべ。

よし子　爺ちや、お腹がだんだん大きくなる胃病つてあるものだすか。

治助　そんなこと俺ら知らねえが、何しろ四百四病の病つて言ふからねす。

よし子　お前はなぜそんなに私をだましてゐるのだす。私は何もかも知つてゐるのだすて、私がくる前からあんさんと義姉さんが仲よかつたことも、義姉さんの子が先のあんさんの子でねえことも、皆知つてゐるのだすて。

治助　そんな先の旦那さん、つれあひが死んだあとで赤坊が生れることは間々あることだすて。先のあんさんが死んでからまだ一年にもならねえからねす。

よし子　それだや、その赤坊はそつくり似てゐたす、先のあんさんにけ、今のあんさんにけ。

治助　とんでもねえ嫁さん、俺あなんでそんなこと知るもんだすて。

よし子　嘘つきしや、一昨日お前があんさんと二人で、市の停車場へ義姉さんを迎へに行つて、歸りに何處へ寄つてあんなにおそく歸つたか、私皆知つてゐるすて。

治助　そんなこと……。

よし子　爺ちや、お前は赤坊を市の三治郎大工の所にくれに行つたのだすべ。

治助　（非常に慌てゝ）そんなこと……、誰がお前さんにそんなこと言つたのだす。

（短い沈默。）

よし子　（ため息と一緒に）夜暗い湯殿にはいつてゐると、世間の噂が一つのこらず、耳にはいつてくるものだす。

（沈默。）

よし子　爺ちや、私はあんさん一人だけ憎んでゐるども、お前や義姉さんは決して憎んでゐねえのだす。義姉さんの身になつて考へれば、一年も狂人の夫と一緒にゐた後だもの、あんさんの誘惑をはねつけることも出來なかつたのは無理もねえことだす。また、お前だつてこの家を潰したくねえと思へば、私をだますより仕方がなかつたのだす、、そんだから爺ちや、私の身にもなつて考へてくれしや、私は世間をくらますための道具に、いつまでもなつてゐるといふのだす。

治助　（無言でうなだれる）
よし子　爺ちや、私は今まで盲になつてゐたのだす、あんさんとお前と三人でやる芝居も何も知らない風をしてゐたのだす、今に義姉さんの身體が二つになつたら、何もかもおしまひになるのだと思つてねは、そんだが私の考へてゐたことは皆まちがつてゐたのだす。
治助　嫁さん、俺あお前さんに面目ねえす。
よし子　私、あんさんの心がすつかりわかつてしまつたす、あんさんは私を愛してはゐるが、それより義姉さんの持つてゐる二千圓の銀行の通帳がほしいのだす。
治助　（うなづく）
よし子　それだからいつまでたつても義姉さんをはなさねえのだす、爺ちや、私何うすればいゝのだす。
治助　俺あにも何うすればいゝか、わからねえす。
よし子　（暫くたつて）爺ちや、お前昨夕見たのだすべ。
治助　（びつくりして）何をけ。
よし子　湯殿に義姉さんが一緒にゐたのえさ。
治助　（無言）
よし子　やつぱりさうだつた。（急にカッとなり帶から櫛を出してたゝきつける）爺ちや、この櫛を義姉さんとこへ持つてゝくれ、そして昨夕の男湯に落ちてゐたと言つてやつてくれ、……あゝ、みんな惡黨ばかりだ、密通くなら密通くで男らしくやるといゝぢやねえか、私を玩具に使つて、私を玩具に使つて、自分達ばかり面白いことをしてゐやがる。（涙をのむ）

（苦しい沈默がつゞく、丁度そこへよく來る石油會社の職工の欣二がやつてくる。二十八九の快活さうな若者、思慮が深く意志が強さうな顔をしてゐる、上衣を手に持つてシャツの上から學生のヅックの鞄をさげてゐる、袖の長いシャツを腕首までめくつてゐるので、右手にニッケルの腕時計のあるのがわかる。半ずぼん、黑い靴下。あみあげの靴）

欣二　今日は。
治助　（やゝびつくりして）おや欣さんけ……會社を休んで何處かへ出かけるのけ。
欣二　まあ、そんなところだ……およしさん今日は。
よし子　（仕方なしに）今日は。
治助　樣子が變たな、欣さん、何うかしたのだすか。
欣二　（よし子の樣子から何やら感づいたが、平氣で後向きに腰を下ろして靴をぬぎながら）會社をくびになつたのさ、およしさん、四五日御厄介になりますよ。
よし子　（初めて氣持をその方に向け）まあ、くびになつたすて、何うしてあなたのやうにいゝ人が、そんなことになつたのだす。

欣二　私なんぞあまりいゝ人間ぢやありませんよ、ことに石油會社にとつては尖よりいやがる奴ですよ。

よし子　そんなことあるもだてけ、技師の倉田さんがあなたをほめてゐたすて。

欣二　さうですなう、最初の内は猫をかぶつて勤勉に働きましたからね。

治助　その猫の皮がはげたのけ。（輕く笑ふ）

欣二　まあ、そんなわけだ、（靴をとつて）どつこいしよ。

よし子　これから何處へ行くのだす。

欣二　（爐に近くよつて）さあ何處へ行くのか、また何處へ行つていゝやら、かいもく、わかりませんね、（爐の傍にあぐらをかいて）まあ、此處にゐる内ゆつくり考へませう……何しろ失戀はする、會社はくびになる、まあそこでさすらひの旅といふところでせうね。

よし子　（つい話につりこまれ）まあ、のんきなこと言つてゐること、失戀なんてそんなに洒落たことを何時の間にやつたのだす。

欣二　やあ、それがまたはつきり判らないんですよ、自分だけでもう失戀ときめてゐるんですからね。

よし子　（輕くほゝゑんで）何うしてけ。

欣二　だつて惚れた女へはまだ一度も自分の心を打ちあけたことがないんですから、而しこゝへ來た日から、今日まで半年の間、その女のことを思つてゐましたよ。

よし子　おやおや大變な話だすた、そんだかさう熱心に思はれる女の人は幸福だすな。

欣二　さう思ひますか。

よし子　私だと幸福だと思ふねは。

欣二　幸福なもんですか、それにそんなに熱心と言ふほどぢやなかつたのですからね。

よし子　熱心でなかつたのだすか。

欣二　私達のやうな身になると、惚れにも熱心にはなれませんよ、惚れられた女が氣の毒ですからね、それに三十の峠が見えるやうになると、戀をしても分別がはなれませんからね。

治助　欣さんにも、分別なんてものがあるのけ。

欣二　あるませんや、だから勝手に失戀なんかするぢやない。

治助　そんなに分別ある人が、會社をくびになるなあ、をかしいねす。

欣二　だつて悪いことをしちや、くびになるにきまつてるぢやねえか。

よし子　どんな惡いことをしたのす。

欣二　實は、仲間と一緒に會社に對して賃銀の値上げをやつたのですよ。

治助　その噂は一寸きいたが、あの時の張本人は欣さんだつたのけ。
欣二　俺が言ひ出したのだから、張本人と言へば張本人だね。
よし子　それが會社に知れたのだすか。
欣二　え、仲間の一人が倉田さんに告げたのですよ、それもこつちが手ぬかつたからです。
治助　どんな手ぬかりをやつたのけ。
欣二　それも皆慾なんて濡れた眞似をした天罰さ。
よし子　隨分よくない別嬪さんだこと。
欣二　別嬪さんはこつとも惡いことありませんよ、こつちの警戒が手ぬかつたからですよ、ほら四五日前ひどく雨の降つた晩があつたでせう。
よし子　あなたが醉つてこゝへ宿つた晩だすか。
欣二　え、あの晩ですよ、越後から來てゐる顔の細ながい永助つて奴がゐるでせう、あれがうまく倉田さんの手にだまされて今度の計畫をすつかりしやべつてしまつたんですよ。
よし子　あなたがあまり酒に醉つたから、いけなかつたのだすで。
欣二　…………。
治助　そこで何うなつたのだす。
欣二　何もかもぶちこはされ、折角同盟罷業まで企てゝ何もならなかつた。
治助　同盟罷業などやるつもりであつたのけ。
欣二　さうさ、賃銀上げるのがいやだと言つたら、罷業するつもりでゐたのさ、それでもうんと言はなかつたら、一日五十石宛出てゐる十九號の井戸をたゝきつぶすつもりでゐたのだよ。
治助　ひどいことを考へたものだすな、そりや欣二さんよくなかべ。
欣二　なにさうでもしなければ會社の奴等の眼がさめるものか、あの仲間はいつでも何でもかでも搾りとつてゐるこんだ。油ばかりぢやない、人の血まで搾りとつてゐるんだ、さうでもしなけりや、奴等の眼があくものかね。
治助　それでもそんなこと無茶だい。
よし子　その結果はどうなつたのだす。
欣二　會社に先手を打たれたんですよ、要求せうとした二割づつの賃銀を皆にあげて、それから張本人の私をくびにしたんです。
治助　お前さんは何ももらひはなかつたのけ。
欣二　給料と積立金ともらつただけさ。
治助　それで仲間はお前さんを見殺したのけ。
欣二　さうさ、こゝの連中は、大てい斉つた越後衆だか

らね。

治助　ひどいすな、……だから欣さん、それも悪事をたくらんだ天罰だすて。

欣二　さうだ、まあ天罰だな。

よし子　あなた昔大學に行つたつて本當だすか。

欣二　そんなことを何處できゝましたね、（輕く笑ふ）一寸行つたこともあつたがそこもやはり追出されたのですよ。

よし子　まあ、何うしてだす。

欣二　あまり本當のことを考へたり、言つたり、行つたりしましたからね。

治助　大學つてところは本當のことを考へたり、行つたりすると追ひ出されるところけ。

欣二　まあ、さうだね、一體今の世の中では本當のことは通用しないよ。

治助　本當のことつて何だす、欣さん。

欣二　本當のことかね……さうさ、まあ、南無阿彌陀佛だね。

治助　南無阿彌陀佛……欣さんは俺あを無學だと思つてひやかすのけ。

欣二　ひやかすものか、眞面目に言つてるのだよ、わかりやすく言へば、お釋迦さまが言つた南無阿彌陀佛を、坊さんだちのやうにごま化さないで生かさうとするのが、本當のしごとなんだよ。

治助　おや十九號の井戸をぶつつぶさうとするのも本當の仕事だすか。

欣二　さうとも、そこでつぶした井戸を貧乏人や、眞直な心を持つてゐる者が、協力して掘りかへしたら、極樂淨土がこの世にやつてくるんだ。

よし子　（熱心になつて）それから、あなたは何うしたのだす。

欣二　いろ〳〵な苦しいことや面白いことをやりましたよ、瓦斯會社の人夫をやつたり、鑛山で飯炊きをやつたり、洗濯屋をやつたり、ある時は坊主の眞似をして、徒歩で新潟まで行つたこともありますよ、そして、二十九日間警察へ泊められたこともあるし、監獄に行つたこともありますよ、あそこはいゝ人間のゐる所だが、なかなか面白いところですよ。

よし子　何のためにあんなところへ、行かなければならなかつたのだす。

欣二　本當のことをやり過ぎたからですよ。

よし子　（追ひかけて）どんなことをやつたのだす。

欣二　そんなにせつかちに責めちやいけませんね。その内寛り話しませう、さあ、お湯にはいつて一杯飲まうかな。

よし子　あなた、四五日泊つてゆくすべ。
欣二　え、失戀の思出にね。
よし子　惚れた別嬪さんのゐない家だと、あまりいゝ思出にならねえかすべ。
欣二　ところが、ひよつとするとこゝがその家でないとも限りませんからね。
よし子　（笑つて）それこそ、お門違えだすべ。さあ、室へ案内するからその鞄をたんえ。
欣二　（鞄を渡し乍ら）今日はおよしさんの調子が、いつもと少しちがひますね。
よし子　失戀の話などきかされたせゐだすべ、さあ行かあねは。（立上る）
欣二　（立上つて）爺ちや、あとで二人で飲まうね。
治助　いゝすな。
（二人室のある方に去る。爺やが欣二の靴を下駄箱に入れてゐるところへ直子が自分の室から出てくる。三十三四歳の優しいしづかな女、産後の疲勞がまだ癒から去つてゐない。）
直子　嫁さんは。
治助　お客さんを室に案内して行つたす。
（直子うなづいて爐の傍にすわりかけてふと落ちてゐる自分の櫛を見つける、吻つとしたらしく、手にとつて爺やと顔を見合せる、力なくすわつて。）
直子　爺ちや、お前この櫛をどこで見つけたのだす。
治助　俺あが見つけたのでねえす、嫁さが湯殿から夜中にひろつたのだす。
（沈默。）
治助　お主婦さん嫁さんは前のことも、昨夕のことも皆知つてるすて。
（苦しい沈默。）
治助　お前さんはなぜまた昨夕のやうなことしたのだす。
直子　（すつかりうなだれて）爺ちやお前に面目ねえす、私あゝなる氣はちつともなかつたのだとも。
治助　あんさんは立派な服裝をした鬼だすて、あの人は昔銀行にゐただけあつて、皆帳簿で物事を考へるのだすて、俺あこれまで何べんお前さんに注意したかお主婦さんだつて忘れるわけねえがすべ。
直子　そりやよく判つてゐたども、あんさんが昨夕來いと言つたものだから……それに子供のことも話したかつたからねは。
治助　そりやお主婦さんの心持は、俺あにもわからねえことねえが、そだつてまた元通りになると、しまひにはあんさんに血まで吸ひとられてしまふすて。
直子　爺ちや、私には何うしていゝかわからねえのだす。

治助　蛇に見込まれた因果だ、お前さんの持つてゐる金を皆とつてしまつたらいゝかすべ、そしたらあんさんはお前さんを振向きもしなかべ。

直子　さうしたら、私は何うなるのだす。

治助　お前さんはまだ若い年だもの、何處かへ嫁にゆくといゝかすべ。

直子　そんなこと何として出來るかなだてば。

治助　わけのねえことだすべ、お主婦さん。

直子　そんなことしたら世間が笑ふすべ。

治助　何うしてけ、二度目の緣談は皆やつてゐることだすて、それより世間ではとうにお前さんを笑つてゐるすて。

（沈默。）

治助　お主婦さんは今だにあんさんに惚れてゐるのだすな。

直子　（無言。）

治助　あゝ、お前さんも因果だ人だた、前の連合には三年も他人であられて居なし、今度は心のとゞくねえ嫁の連合に惚れるなんて。

直子　治助や、あんたに私を責めねえでおくんさえ、皆私が悪いのだす。

治助　お主婦さんが悪いことはねえだす、皆あんさんの慾の深い心から起つた罰だす、またゞ情けねえな、お主婦さん、お前さんもつと強い心になれねえかな。

直子　私は初めから他人に酷めらるるために生れてきたのだす。

治助　情けねえた、情けねえた、もつと強かつたら悪黨なとに負けなくていゝものをな、弱いものはみんな悪黨の餌じきとなつてゐるのだな、情けねえな、俺なら悪黨はみな皆殺しにしてやるだがなア。

（沈默。）

直子　およしさんは私を憎んでゐるだすべ。

治助　うゝん、嫁さんはあんさんを憎んでゐたが、お前さんとこは憎んでゐねえす、あの人は元氣があつていゝな。

直子　本當だけ。

治助　本當だとも、嫁さんはお前さんを可哀さうだと言つてゐたすて。

直子　すまねえすな。

治助　やつてしまつたことは、仕方ねえかへ。

直子　私達はこれから何うたつてゆくすべ。

治助　なるやうにしかならねえすべ、これだけの佛様の罰があたらねえですむとは思はれねえすた。

直子　爺ちや、私死んでしまひてえすて。

（シクシク泣き出す。沈默。）

よし子　（湯殿から快活な聲で叫ぶ）爺ちや、湯が熱いす

て、早く水をうめてたんえ。

治助　さうけ。今すぐうめるすて、（立上つて直子に）おかみさん、そんなに氣をおとさねえ方がいゝかすて。

（治助、裏の方へまはる。やがて、ガタン／＼とポンプをあげる音がきこえてくる。直子の泣き聲が次第に高くなる。）

――しづかに　幕――

第二幕

場面（一幕目より三日間經過してゐる）

鑛泉湯の客間、この室は上等ではないが、眺望が大きく、鑛泉湯では一番氣持のよい室である、夜、美しい秋の星空があざやかに見える、蟲の聲。

湯から歸つた欣二は一人で酒を飲んでゐる。ネルの筒袖の寢卷）嬉しさうだがおちつかない樣子である、時々頭をふつて見たりする、はなれた湯殿からおばこ節がきこえてくる、四五人の男女がはいつてゐるらしい。

（唄）

娘子（おばこ）

心もち

池の端の蓮の葉の

たまり水

すこし

ふれると

ころころ轉げて

傍による

ハア、オエサカサツサ

オバコデ、ハイハイ

娘子（おばこ）

幾歳（いくつ）になる

この年暮らせば

十と七つ

十七

娘子（おばこ）など

何しに花こたど

咲かねえとな

咲けば

實もなる

咲かれば日蔭の

色紅葉

ハア、オエサカサツサ

オバコデ、ハイハイ

（よし子がきれいになつて、お湯から歸つてくる。）

欣二　（何かごま化すやうに）女の湯はながいものですね。

よし子　一人で飲んでゐたんだすか。

欣二　いゝ塩梅に、お迎ひに行つたんで。

よし子　さう、何とおつしやいます。

欣二　（ごまかすやうに）冷たい夜風にあたつたら、すつきりしましたよ。

よし子　まあ、冷たいゝ風だこと、障子をしめるすか。

欣二　え、少し冷え過ぎますね。

よし子　（氣持よささうに風に吹かれながら）おや、何處か隣をとつてゐるやうな、太鼓の音があなたに聞えるすか。

欣二　いや、（耳をすまして）ぼんやり聞えてきますね。

よし子　山の蔭だべか……あゝいゝ氣持だこと。

欣二　……こうして座つてゐると、白粉の香ひがしますよ。

よし子　さうけ、あなた白粉の香きらひだすか。

欣二　さあ、わるくないものですね。

よし子　あなた白粉の香をいやに思つたことねえすか。

欣二　そんなこと判りませんね。

よし子　何とだか……障子をしめらねは。（障子をしめる）

欣二　白粉つて面白いものですね。

よし子　どうしてだけ。

欣二　年の二つ三つすぐごま化せますからね。

よし子　さうだすか……お酌……おや私はどうだす。

欣二　いつもよりぐつと若くなりましたよ。（酒を飲みながら）だが、もう私はごま化されませんよ。

よし子　おや、どうしてだけ。

欣二　私はちやんと見つけましたからね。

よし子　何をだけ。

欣二　あなたな二十位にしか見えないが、二十三でせう。

よし子　まあ、よくあたつたこと。

欣二　（笑つてゐる）

よし子　どうしてそんなことがわかるのだす。

欣二　私には易を見ますからね、戀愛線、結婚線、放浪線、幸福線、何でも見ますよ、見てあげますか。

よし子　いやだす。

欣二　（笑つてゐる）

よし子　どうして私の年がわかつたのだす。

欣二　あなたのお乳のところに黒子がありましたからね。

よし子　まあ、（乳の上に手をやつて）……いつそんなもの

を見つけたのだす。
欣二　さつきですよ。
よし子　（考へて）拘留所で巡査が狂人に水をかぶせられた話をしてゐた時だすか。
欣二　いや、ずつとそのあと。
よし子　ではあなたが工場の塀にあがつて演說をした話の時だすか。
欣二　え。
よし子　まあ、狡るい、私あの時夢中になつてきいてゐたのだすて。
欣二　私だつて夢中で話してゐたのですよ。
よし子　それで何うして黒子などに氣がついたのだすべ。
欣二　ほら、あなたがびつくりして胸に手を持つて行つた時があつたでせう。
よし子　え、あなたが壯士に袋叩きにされたときいた時だす。
欣二　あの時です、チラと僕の眼に黒子がはいつてきたんですよ。それからあなたの身體全體か氣になつて、自分が何を話してゐるのか、ちつともわからなくなつてしまつたのです、しまひには眼のまはりを眞白なものがくるくるまはつてゐるやうな氣がして仕方がなかつたんです。

（短い沈默。）
よし子　それであなたは急に話すことをやめたのだねは。
欣二　頭がぼうとなつたものだから。
よし子　私あの時びつくりしたから。
欣二　すみませんでしたね。
よし子　うゝん。あんな時は寢てゐるといゝのだすつて、それだのにあなたは、慌てゝ逃げ出したりするもの。
欣二　何だかあの時急に恐しかつたのですよ。
（沈默。）
よし子　あの時あなたが私にどういふことをしたか、覺えてゐるすか。
欣二　何にも……私が何うかしましたか。
よし子　あなたが私の手を握りしめて逃げ出した時、ひどく私の顏をぶつたから。
欣二　本當ですか。本當にそんなことをしましたか……私は何も氣がつかなかつた。
よし子　あなたは慾ばつてお湯にはいり過ぎたからいけなかつたのだすて、それに私が話をせがんで、あなたを興奮させたからねは。
欣二　あの話をするのは禁物なんです、すぐ興奮するんで。
よし子　でも私には面白い話であつたから、私あなたの話をきいてゐると、凝つとしてゐられないやうな氣がする

から、自分もその恐しい中に飛び込んで行きたい氣だすろから。

欣二　併し女の人には面白い仕事ではないでせう。

よし子　どうして、私には面白いから、どんなに苦しくても、こんなくさつた生活をしてゐるより、どれだけ生甲斐があるか知れませんわ。

欣二　だが、その苦しい中にはいつて行くと、すぐまた別の生活が眼につくものですよ、のんきな、樂な生活がね、ことに女の人は樂な生活でなければ長つゞきしないものです。

よし子　どうしてだす。

欣二　今の女には自分の生活といふものがありませんからね。

よし子　それでは女は正しい生活が出來ないと言ふのだすか。

欣二　正しい生活が出來る、出來ないの問題ではないんです、もつと手前の問題ですよ、極端に言へば現代の女には生活がないと言ふことなんです。

よし子　…………。

欣二　まあ、さうでせう、女は生れてお嫁さんになるまでには兩親と一緒にゐて兩親の生活をしなければならないでせう、學校へ行くと學校の生活、社會へ出て行くとよくない社會そのまゝの生活、そしてお嫁さんに行くと、一から十まで悉く夫の生活をしなければならないんです、だから女は一生涯自分の生活といふものを持たないで死んでしまふのですよ。

よし子　すると女はどうするといゝのだす。

欣二　社會や、道徳や、習慣や、男性に奪はれた破壞の力を、自分の心に呼びかへすのですよ。

よし子　（無言）

欣二　別の言葉で言へば自然の意志に從ふのです、自然が我々に與へた最も偉きな力は愛と破壞の二つの力です、破壞のないところに新らしいものが生れてきません、愛のないところに新らしい種は育ちません、女が先づ自分に歸るには、これまでの生活をたゝきこはすより外に途がありませんよ……併し大抵の女は美しい牢獄が好きですね。

よし子　いゝえ、嫌ひな女たつてゐるだから。

欣二　殘念ながら私はさういふ女を信ずることが出來ませんね。

（沈默。）

よし子　欣さん、あなたはなぜもつと私を知つてくれないのだす。

欣二　…………。

よし子　あなたは私のたつた一つの黒子しか見てくれなかつたのだすか。

欣二　でも、私はそれ以上知つて何うするんです。

よし子　（獨言のやうに）何もかも知つてもらひたいと思つてゐるのに私がこんなに苛々してゐるのに……あなたはなぜ本當のことを言はないで、逃げてばかりゐるのだすべ。

欣二　私に、本當の心を言へと言ふのですか。

よし子　欣さん、私の心はせつぱつまつてゐるのだす、私の心はあなたのたつた一言で飛上らうとしてゐるのだす、あなたはなぜその言葉を惜しんでゐるのだすべ。

欣二　私はあなたを不幸にするのを恐れてゐるのですよ、そのくせ私はとうにあなたを不幸にしてゐるかも知れません、私は現在を恐れてゐないが、この先を恐れてゐるのです、あなたが今よりもつと苦しい貧乏の牢屋にはひり込むことを恐れてゐるのですよ。

よし子　うゝん、私はその苦しさなら決して恐れてゐねえだす、欣さん、あなたはこの先のことばかり心配して、何故いまの私を少しも考へてくれねえのだす、私達三人は一つ牢屋に鎖で縛られてゐながら、睨み合ひ、だましあひ、嘘み合ひしてゐるのだす、私はもう呼吸がつまつてしまひさうだす。

欣二　（考へて）三人と言ふと誰々です。

よし子　おいらさんと義姉さんと私だす。

欣二　それぢやあの噂は本當のことですか。

よし子　本當だす。

欣二　赤坊も。

よし子　え。

欣二　（顏をしかめて）たまらないな。

よし子　私は昨日まで何も知らなかつたのだす、知つてゐたのは、半分あきらめたり、他人を憎んだり、呪つたりして自分の魂をくさらすことであつたのだす、そんなだに私はあなたのおかげで漸く本當のことを知つたのだす、私はもう我慢出來ねえだす、こんなくさつた生活は一日もいやだす、こんな生活をつゞける位なら、死んだ方がずつとましだす。

（沈默。）

欣二　（急に強く）あなたに、こゝを飛出すだけの勇氣がありますか。

よし子　え。

欣二　……………………………………。

よし子　……………………………。

欣二　あなたは私などについて來られますか。

よし子　（頭をふる）

欣二　私の仕事が恐しくありませんか。
よし子　うゝん。
欣二　永い苦しみの旅ですよ、恐しい迫害が待つてゐますよ。
よし子　覺悟してゐます。
欣二　よしツ、私はあなたを連れてゆかう。
（接吻する、永い沈默。この時初めて作踊の太鼓の音が觀客に聞えてくる。）
欣二　（うつとりして）よく聞えてきますね。
よし子　えゝ。
欣二　……。
よし子　私達はあの山を越えて行くのだすな。
欣二　山のかげには新らしい生活が待つてゐますよ。
よし子　（幸福さうに）あゝ。
欣二　併し嶮岨の生活ですよ。
よし子　私はどんな迫害でも恐れねえす。
欣二　およしさん。
（短い沈默。）
よし子　私は、幾度この山を逃げ出した夢を見たか知らねえから、そんだが私はいつでも山を越すことが出來ねえかつたす、夢の中でさへ、しよつちう、捕つてしまふのだす、あゝ、私は今度こそ本當に、この地獄を逃げ出すことが出來るのだすな。
欣二　私達は逃げなどしませんよ、私達はのんきに、たのしく歌をうたつて、あの山を越えて行きませう。
よし子　あの山のてつぺんで醉いつぱいうたつたら、どんなにいゝ氣持だすべ。
欣二　……。
よし子　欣さん、私もすこし作踊を踊つていゝすか。
欣二　いゝとも、何なら私も一緒に踊つてもいゝ。
よし子　あゝ。
（男にすがりつく、沈默。作踊の太鼓の音がますます はつきりきこえてくる。）
直子　（外で）およしさん。
よし子　誰だす……姉さんけ。
直子　あ。
よし子　（欣二からはなれて）はいつてたんえ。
直子　はいつていゝすか。
よし子　あ。
欣二　さあ。はいつて下さい。
直子　（障子を開いて）御免なさい。
よし子　（暫くして）あんさんは會社から歸つたすか。
直子　（暗い顔をして）歸つたど、またすぐ出て行つたす。
よし子　さうけ。

（短い沈默。）

欣二　（この空氣を察して）　私、一寸お湯にはひつて來ませう。

よし子　お酒を飲んでからお湯にはいるのはよくねえから。

欣二　それなら、その邊をぶら〳〵歩いてきます。

直子　すみませんね。

欣二　いや、ぢや失敬します。

（出て行く、沈默。）

よし子　あんさんは何處へ行つたのだすべ。

直子　多分また料理屋へ行つたのだすべ。

よし子　昨夕は歸らねえやうだつすな。

直子　（苦しさうにためらひながら）　歸つたのは夜明だつたす。

（短い沈默。）

よし子　義姉さんの室に行つたのだすか。

直子　（無言でうつむく）

よし子　（吐き出すやうに）　その方が本當なのだすべ。

（短い沈默。）

直子　およしさん、私は今まで恐しい罪ををかしてきたのだす、お前さんに顏向けの出來ない惡いことをしてきたのだす。

よし子　（憎しみが顏に出てくる）　どんなことだす。

直子　（察して）　お前さんは私を憎んでゐるすべ。

よし子　…………。

直子　憎むのはあたりまへだす、どんなに憎まれても、私は何も言ふことが出來ねえのだす。

よし子　…………。

直子　私がこの夏東京へ行つたのは赤坊をもつために行つたのだす。

よし子　胃病でなかつたのだすか。

直子　さうだす。

よし子　その赤坊は誰のものだす。

直子　（かすかに）　あんさんのだす。

よし子　（冷たく）　それぢや義姉さんは、あんさんと二人で、今日まで私をだましてゐたのだすた。

直子　（シク〳〵泣き出す）　皆私が惡いのだす。

よし子　×××××××××××××××××××××××××

×××××××××××××××××。

直子　×××××××××××××××××××××××。

よし子　×××××××××××××××××××××××××

×××、×××××××××

直子　（むせびながら）　×××××××××××××××××

×××××××××××××××××××××××××××

××××××。

よし子　それぢや、二人でたくらんで養子になつたのだすか。

直子　さうでねえす、さうでねえす、私は今のあんさんにおどかされたのだす、それで仕方なしに死んだおかさんを判斷にたのんで養子にもらつたのだす、それも皆私が悪いのだす、私が今のあんさんに惚れてゐたのが、惡かつたのだす。

よし子　それで、たゞ私を嫁になどもらつたのだす。

直子　あんさんが湯治に來てゐたお前さんに惚れたからだす、私はいやだと言つたどもあんさんはきかなかつたのだす。

よし子　その時義姉さんは嫉妬してゐたのだすべ。

直子　さうだす、あんさんはそのことも恐しかつたのだす、お嬢さんさへ貰へば世間の眼をごま化すことが出來ると思つてゐたのだす。

よし子　義姉さんはなぜその時強く反對しなかつたのだす。

直子　あんさんに捨てられることが怖かつたのだす、あんさんはお前さんを貰はなければ、出て行くと言つて暴れたのだす。

よし子　さういふ人に同情して　義姉さんは私より不幸な人だすな。

直子　私はこれまで何うしてもあの人を諦めることが出來なかつたのだす。

よし子　義姉さんは先達の夜、あんさんと會つたすべ。

直子　（ますます泣いて）さうだす、私は今度もまたおよしさんをだましたのだす、私は毒婦のやうな女だす。

よし子　…………。

直子　およしさんどうか先達の私の罪を許してたんえ、私は漸くこゝを出る覺悟をきめたのだす。

よし子　何うしてそんなことを考へたのだす。

直子　漸く眼がさめたのだす、自分が一番恐しい惡黨であつたことが判つたのだす、私が弱かつたために、あんさんの惡心をはねつけることが出來ずに、罪に罪を重ねてきたのだす。

よし子　義姉さんが出て行くと言つてもあんさんが離さねえすべ。

直子　うゝん、あんさんは私を愛してゐねえのだす、あんさんはたゞ私の持つてゐる金をほしがつてゐるだけだす。

よし子　それが義姉さんにわかつてゐたのだすか。

直子　東京へ行つて獨りで考へるやうになつてから、そのことがよくわかるやうになつたのだす、それでゐながら

歸つてきて、あの人の顏を見ると、誘惑をはねつけることが出來なかつたのだす。

よし子　…………。

直子　私はあんさんに金をやることに覺悟したのだす。

よし子　金をやるすて、そ、そんなことを、義姉さんはこれからどうする意だのけ。

直子　さうしなければあの人は私を出してくれねえす。

よし子　そんだつて。

直子　（再び泣き出して）何とかなるすべ、若し飢ゑ死するやうなことがあつたら、それが丁度いゝ佛樣の罰なのだす、その方が私にとつても、せめての慰めだす。

よし子　（うつむく）

（短い沈默。）

直子　およしさん、何うぞ私の罪を許してたんえ、そしてこれからあんさんと仲よく暮らしてたんえ。

よし子　（おどろいて顏をあげる）

直子　およしさん、あんさんも可哀さうだすこ。

よし子　（いぶかつて直子の顏を見る）

直子　あんさんがこの二三日酒を飲んだり、料理屋に泊つたりするのは皆およしさんを愛してゐるためだすて。

よし子　（憎惡か顏にあらはれる）

直子　およしさん、あの人も可哀さうだす、あんさんはお前さんなしで暮していけないのだす、あんさんは今嫉妬てるのだす。

よし子　…………。

直子　およしさん、危いことをやめてたんせ、そしてあんさんを愛してやつてたんえ、これが私の一生のお願ひだす。

よし子　義姉さん、それはもうおそいす。

直子　どうしてけ。

よし子　…………。

直子　お前さんはあんさんを憎んでゐるのだすか。

よし子　さうだす、私はあの人のことを考へるだけで嘔吐が走るほど、いやなのだす、あの人は根からの惡黨だす、私はもうあの人の傍へ行くのはいやだす。

直子　それぢやどうする意だす。

よし子　私はもうこの面白くない家を捨てるのだす。

直子　（おどろく）

よし子　私は二三日中にこゝを出て行くす。

直子　一人でけ。

よし子　欣さんと一緒だす。

（ごく短い沈默。突然障子の外から荒々しい貞藏の言葉か聞えてくる。）

貞藏　（外で）欣さんと一緒だッ。

（庭から緣側に飛上り、荒々しく障子をあけてはいつてくる。三十二三に見える男。酒を飲んでゐる。）

貞藏　お前に何處へ行くのだ、油でも掘りに行くと言ふのか。

よし子　油掘りに行つちや惡いすか。

貞藏　誰の許しを受けて行くのだ、誰が隣の男と一緒に油掘りに行けといひつけたのだ。

よし子　それでも、誰が私達の話を盗聞きしろと云つたんだす。

貞藏　俺はこゝの主人だ、俺が、何處に立つてゐようと、何處で他人の話を聞かうと、それは俺の勝手だべ。

よし子　主人なら主人のやうなやり方をしたらいゝかすべ、障子下で他人の話を盗聞きするのはたゞ乞食眞似のもんだすべ。

貞藏　この野郎ッ、俺をも食ふ犬扱ひにする氣だな。

（とびかゝらうとする、直子慌てゝとめて。）

直子　一寸、一寸、待つてたんえ。

貞藏　離せツ離せツ、亭主の家で男と一緒に湯に入つてふざけるやうな女の面の皮を剝いでやる。

直子　（押して）いけねえがす、いけねえがす。

（直子の力でべつたりすわる。）

よし子　それだもお前さんは女房のゐる家で何をしたかつたのだすか。

直子　（振返つて嘆願するやうに）およしさん。

貞藏　俺が何をしたと言ふのだ。下婢へ手をつけたのは俺がやれえぞ。

よし子　おやく恐いと見えて、別の方へ逃げたれす。

貞藏　何が別の方だ、何が恐い、俺には疚ましいことは少しだつてねえんだ。

よし子　それおや、義姉さんの東京へ行つたのは何のためだす。

貞藏　（内心慌てたが）そんなこと、知るものか、義姉さんに聞けッ。

よし子　義姉さんにはとつくに聞いたす、その時もつた赤子は誰のだす。

直子　およしさん。

よし子　義姉さん默つてゐたんえ、さあ、白狀しれしや、誰の子だか白狀しれしや。

貞藏　…………。

よし子　言へねかべ、言へねかべ、嘘つき、惡黨ッ、惡黨ッ。

直子　（泣き出す）

貞藏　（前より弱く）貴、貴樣は俺の罪をならしたてゝ、自分の口を拭ふつもりだな。俺は貴樣をやるものか。

（立上らうとする、直子泣きながら押へつける。）

よし子　私の勝手だ、押へようたつて私はきつと逃げて行く。

貞藏　畜生ツ、貴樣はあの惡黨にすつかりだまされたのだな、俺は承知しねえ、さあ、あの狼犬を何處へかくした。

よし子　そんなこと、誰が知るもだて。

貞藏　（わめく）畜生ツ、男を出せツ、男を出せツ。

（丁度この時欣二は騷音をきゝつけて下の途から叫ぶ。）

欣二　（下で）およしさん、およしさん。

（ごく短い沈默。）

欣二　（下で）およしさん。

貞藏　（飛上つて）あいつだ、あいつだ、俺は貴樣をだましたごろつきを殺してやる。

（脫兎の勢で庭へ飛出して行く。）

直子　（後から）あんさん……爺ちや、爺ちや、大變だす、大變だす。

（直子茶の間の方にわめきながら走つてゆく、よし子は恰も心を失つた人のやうに呆然としてゐる。下の方でわめく聲がする、よし子その聲をきゝつけて立ちかけたが、またべつたり坐る。永い沈默。間もなく欣二が片手を血に染め、顏色をかへて蹌踉としてはひつてくる。）

よし子　（ひくく）欣さん。

（欣二にすがりつく、二人無言でべつたり坐る、……）

――しづかに　幕――

第　三　幕

場　面　（二幕目の翌日）

第一幕と同じ茶の間。黃昏夕陽の光が雲を染め、山に反映してゐる。

治助が爐の傍にすわつて酒を飮んでゐる、その後の柱に狐の皮がぶら下つてゐる、そこへ村の若者が手拭をぶら下げてやつてくる。

若者　いゝ晚になつたな。

治助　（言葉がさびしい）誰だツ。

若者　爺ちや、俺だよ。

治助　俺あてにはわからねえ、貴樣もまた何か嘴を出さうと思つてやつてきた奴か。

若者　（戶口に立つたまゝ）爺ちや、何憤つてゐるのだす、俺あだよ、五助だよ。

治助　さうか、そたか今日は湯はねえぞ。

若者　どうしてけ。

治助　そんなこと、あまのじやくへでもきくがよかべ。
若者　（少しおどろいて、呼びかける）
治助　おい、お前酔つた気か。
若者　あ。
治助　まあこつちへ上れ。
若者　上つていゝのけ。
治助　お前は温んでゐるかべ、こつちへ上れ。
若者　（上つてきて）爺ちやは酒を飲んでゐるすな。
治助　こんな日に酒を飲まねえでどうするんだ、さあ、お前も一杯やれ。
若者　俺はまだ酒に飲まれねえす。
治助　さうか、どら、お前の顔を俺あに拝ましてくんろ。
（と言つて若者の顔をさしのぞく。）
若者　（薄気味悪く）爺ちや、何としたのたす。
治助　ふん、お前は何も知らねえだ、お前の顔には佛様が宿つてござらつしやる。
若者　爺ちや何ぬかつたのけ。
治助　そろ／＼始めたな、そんなことを聞くと折角ありがたいその顔が鬼になるぞ、お前はお庚申様を信心したことがねえのか、見ざる、聞かざる、言はざるだ。
若者　俺は何もきゝたくねえがすて。
治助　さうだべ、さうでなかつたら俺はお前をたゝき出すまでだ、さあ一杯飲め、いやお前はまだ飲まれたかつたな、さうだ酒なんてあまり飲むものでねえぞ、魂すだ飲まれるからな、おい五助、俺あお前によく言つておくが、こゝの奴等はそろひもそろつて皆悪党だぞ、人だつて満足な魂を持つてゐる奴なんかゐねえ、奴等は酒つぱらつてこゝへ来て何か喚き出さうとしてゐやがる、だから、俺は酒を飲んでこいつ等を追払つてゐるんだ、こいつ等の臭つ骨皆曲つてしまつた。
若者　（うつかり）爺ちや、一體何があつたのたす。
治助　馬鹿ツ、そんな口を聞く奴等は、太平山の鬼に喰はれて行きあがれッ……お前は外に口のきゝやうを知らねえのか。
若者　あ、勘弁してくれ爺ちや、俺はもう何もきかねえよ。
治助　どうしてだ、どうして何もきかねえんだ、お前はその大きな口をどう扱ふつもりだ。
若者　（仕方なしに黙つてゐる）
治助　五助、お前は黙つてゐるな……よし、俺あが悪かつたなら勘辨してもらふ。
（短い沈黙。）
治助　おい五助、さう黙つてゐねえで、俺あの後を見ろ。
若者　何をだね、おや、とう／＼狐を捕へたねす。
治助　あはゝゝ、さうだ、えらいものだらう。

若者　いつ捕へたのだす。

治助　昨夕の二時だ、それから俺あそつとも寝ねえで、皮を剝いでやつただ……何もかも一緒くただ。

若者　（立上つて皮のぶら下つてゐる所へ行く）大きな狐の皮だすな、太つてゐたすべ。

治助　丸々と太つてゐたど、あいつ奴、これまでどんなに悪いことをして來たか、知れねえだ。

若者　それで爺ちやは祝酒をやつてゐるのだすな。

治助　そんなもんだべ。

若者　いゝことをしたな、こんなにいゝ皮だと町へ持つて行くと、大變な値打がするずて。

治助　酒の一斗も買へるかな。

若者　一斗どころか四斗樽一本買へますで、四十圓から錢一文もかけねえで、飛んでゆくべ。

治助　ええ儲けだな、よし／＼賣れたらお前にも何かおごつてやるぞ。

若者　本當け。

治助　本當だとも、俺あ二枚舌は使はねえぞ。

若者　（いろ／＼さはつて見て）本當にいゝことをしたたな。

（爐の方へ歸らうとした時、離れた室から貞藏のわめく聲が聞えてくる。）

貞藏の聲　油鼠奴め、さあ、俺を殺すなら殺せ、おい巡査を呼んで來い、巡査を呼んで來い。

若者　（びつくりする）爺ちや、あれ、何だす。

治助　馬鹿ツ、お前の耳に栓をしろ、誰がお前に聞けと言つたのだ。

若者　（立ちすくんでゐる）

貞藏の聲　あいつは何處へ逃げて行きあがつた、巡査は何故來ねえんだ、巡査を呼んで來い、さあ、巡査を呼んで來い、貴様等、皆組んでゐるのだへ。

治助　（吐き出すやうに）馬鹿野郎。

若者　爺ちや。

治助　何でもねえだ、あれは狐が婆をだます時の聲だ。

若者　誰だす、このお客さんけ。

治助　誰でもねえ狐だ、婆をだまさうとしてゐる聲だ、うまく行つたら婆を殺して鍋汁にでもこしらへるつもりだべ。

若者　爺ちや、こゝで何か事件があつたのだすべ、それで湯を休んだのだすべ。

治助　さう思ひたけや勝手に思へ……貴様、俺の拳骨を喰ひたくなかつたら、さつさと歸つたらよかべ。

若者　爺ちや、憤るといやだすて。

治助　そんなら口に錠ぶつて何も言はねえとよかべ。

若者　そんだら、俺あ歸るす。

治助　勝手にしろ、だが今聞いた譯をお前の口から出したら俺は承知しねえぞ、お前の口や二つにさけるから用心しろ。

若者　俺あ何も言はねえすて。

治助　言はなかつたら、佛樣がお前の身體を元通りにしてくださるべ。

若者　俺はきつとしやべられえよ……おや。あばえ。

治助　あ、二三日たつたら、お湯もわくべえからやつて來い。

（若者歸つて行く。）

治助　畜生ツ、一人でわめいてゐやがる……自分で人を殺さうとしあがつて、巡査もくそもあるものか、そんなに巡査や裁判官が好きなら、女房に買つたらよかへ、大した傷でもねえくせに、泣いたり、わめいたり、叫んだりしあがつて、皆自分の顏に泥を塗ることがわからねえのか、惡黨奴ツ、さんぐ惡いことをしあがつて、二人の女の生命を見布のやうにきざみやがつて、おまけに短刀を振りかざつて人を殺さうとしあがる、誰が、手前のやうた惡黨に殺されてゐるものか、貴樣のうけた傷は、皆佛樣の罰たぞ、地獄に行かなかつただけでも、ありがてえと思へ。

（そこへよし子バスケツトと欣二の鞄を下げて出てくる、東北のもつぺいいをはいて旅の姿をしてゐる。顏に不安の色がこくあらはれてゐる。）

よし子　爺ちや、お前一人で何をわめいてゐるのだす。

治助　惡黨の野郎のことだす、あいつはあんなにわめいてお前さん達を監獄へたゝき込まうとたくらんでゐるのだす。

よし子　（心配さうに）お前、大變醉つてゐるねえすか。

治助　嫁さん、俺あ何も醉つてゐねえす、俺あの心はしつかりしたもんだすて。

よし子　お前がしつかりしてゐてくれないと、私達はどうしていゝかわからねえのだすて。

治助　大丈夫だす、俺あがこゝにかうつ頑張つてゐる内は、大丈夫だす。

（又酒を飲む。）

よし子　もう酒をやめてたんえ、心配だから。

治助　そんならやめろべ、そだが、こんな時は、酒を飲んで心を据ゑてゐねえと、何處からでも鬼がはひつてくるものだすて、心の內に隙を見せちやいけねえ、俺あ、巡査が來ようと、山の鬼が來ようと、指一本だつてこゝへは入れらせねえ、とつくんで外へたゝき出してやるばかりだ。

よし子　東藏のおつ母はまだ駐在所から來ねえすか。

治助　すぐ歸つてくるべ、今頃駐在所を出た頃だべ。
よし子　欣さんは今日中に歸つて來るすべか。
治助　大丈夫だす、心配なことは少しもねえす、一體こんな小せえことで自分から駐在所へ訴へ出るなんて、欣さんも堅すぎると言ふものだべ。
よし子　そんだつて。
治助　さうでねえか、まんで道筋がちがつてゐるべ、第一短刀を持つて他人を殺さうとしたのはあんさんだべ、欣さんはそれを防いだだけだ、そりや正當だべ、誰が考へたつて正當なことだべ、それに欣さんの方だつて手に傷をうけてるすて、そんなら訴へるのは欣さんの方で、巡査に縛られて監獄へたゝき込まれるのはこつちのあんさんだべ。
よし子　さう考へるのが本當だと思ふども、それでもあんさんの傷が重いからねは。
治助　なに、重いことがあるものけ。
よし子　そんだつてあんなに唸つたり、どなつたりしてゐるもの、私はあの聲を聞いてゐると、心配で〳〵何もかもわからなくなつてしまふのだすて。
治助　ふん、あれは皆芝居だすて、(會社のお醫者さんが笑つて今朝俺あに話しただ、(何でもねえ、輕い傷だ、十日間位ですつかり癒るが、あの呻いたり叫んだりするのは一生かゝつても私の手でなほされねえ）でな。
よし子　本當に傷が淺いといゝどもねは。
治助　淺いにきまつてゐるだ。
よし子　それで昨夕からちつとも寢ないし食べないと言ふからねは。
治助　皆が憎いのでお腹が一杯なのだべ、今にお前さん達二人がゐなくなつたら、乞食のやうに飯にかぶりつくことだべ。
よし子　私達は今日立つことが出來るすべか。
治助　今日立てなかつたら、明日立つて行くことが出來るべ、それが俺あの考へだや、欣さんは今晩中に歸つてくるにちがへねえ。
よし子　今晩若しおそかつたら、明日の朝早く立つて行かねは。
治助　嫁さん、そりやいけねえす、欣さんが歸つてきたら、夜中でもかまはねえ、早くこゝを立つてしまへなせえ、惡い奴等が何を考へ出すか知れねえからだ。
よし子　さうだねす。
治助　夜中だつて、あらしの夜だつて、馬にさへ乘つて行けあ何でもねえ、あんな低い山位、まるで石ころ一つ跨ぐと同じこつたべ、馬の用意は出來てゐるし、欣さんが歸つてくると、すぐ立たれるす。

よし子　馬は一疋でいゝすべか。

治助　大丈夫だべ、欣さんは手を痛めてゐるから、歩いて行つた方が勝手よかべ。

（短い沈默。）

よし子　あゝ、山を越えたら、どんなにせい〳〵するだらう。

治助　さうなつたら嫁さんも初めて幸せになるべい、あの人はいゝ人だな。

よし子　嫁さんにもいろ〳〵世話になつたすた。

治助　そんなことは無えゝ、俺あこそ嫁さんに面倒になつたのだす、それだのに俺あ嫁さんをだまして面目ねえがす。

よし子　そんなこと氣にしなくてもいゝす。たゞ義姉さんのことをお前にたのんで行くすに、どうか義姉さんをあんたが見てやつてたんえ。

治助　いゝがす、俺あ死ぬまでこゝを動かねえでゐるつもりだす、そだが、お主婦さんは一生幸福な芽を見ることが出來ねかべ。

よし子　義姉さんはあの人を思ひきることが出來ねえすべ。

治助　本當に因果な人だすた、俺あお主婦さんの弱いのには腹が立つが、あの優しい心には涙がこぼれるのだす、あんな惡黨の傍に、一晩眠りもせずにつききつてゐる、あの心だけは佛樣のやうにありがてえすた。

よし子　私は一度も顏を見せねえから、義姉さんは憤つてゐるかも知れねえすな。

治助　うゝん、嫁さんはあんなところへ顏を出すちやいけねえす、お前さんが行つたらあの惡黨は何をしでかすか、わかつたものでねえ。

よし子　それでも餘りひどいからねす。

（この時貞藏の聲がする。）

貞藏の聲　貴樣の顏など見たくねえ（この間とされる）畜生ッ、出て行け、よし子はゐねえのか、何處へ行つた、よし子をつれて來い、巡査はどうした、巡査はなぜ來ねえのだ。

治助　聞えたり奴、惡黨奴ッ

よし子　義姉さんを憤つてゐるのだすか。

治助　あいつは指の先まで惡黨に生れついてゐるのだ、あんなに誠をつくしてゐるお主婦さんの心があいつに通じねえのだ、あいつの心はまるで鐵でかたまつてゐる男匪石だ、強欲鬼め、くたばつてしまへ。

よし子　いつまでもあゝだつたら、義姉さんは何となるすべ。

治助　あいつは死ぬまでお主婦さんを虐める氣だべ、それで佛樣の罰があたらなかつたら、この世は暗闇だべ。

よし子　爺ちや、お前だけでも義姉さんを棄てねえでたんた。

治助　心配することはねえ、若しもの時は俺がきつと一緒に地獄に行くまでだ、慾の罠をかけたら、狐みてえにうまくひつかゝるべ。

よし子　本當に義姉さんは不幸な人だすな。

（短い沈默、ボウと六時の石油會社の汽笛がなる、電燈がつく。）

よし子　六時だすな……おや、誰か來たやうだすて。

（立上つて戸口の方へ行つて見る。）

治助　おつ母だべ、きつとおつ母だべ。

よし子　あゝ、おつ母だ。

（そこへ駐在所へ辨當を持つて行つた東藏の女房が辨當を持つて歸る。）

よし子　お母、欣さんはどうしたす。

治助　（殆んど一緒に）その辨當はどうしたのだ、何故持つて歸つたのけ。

女房　西野巡査が持つて歸ろつて言つたゞよ。

治助　どうしてだ。

女房　そんなこと聞かれるものけ、おつかねえ眼をして言ふだもの。

治助　馬鹿だな、巡査の眼なんかおつかねえくてどうするだ。

女房　そんだつてあの巡査はすぐ怒つてぶつだよ。

治助　しようがねえた。

よし子　おつ母、欣さんはどうしてゐるかわからねえかつたすか。

女房　俺は何もわからねえたよ、そだが駐在所へ市の檢事樣がきて調べてゐると皆が言つてゐただよ、それから會社のお醫者さまも一緒だつてことだす。

よし子　（おちつかず）爺ちや、どうしたらいゝすべ。

治助　心配することはねえ、嫁さん、會社のお醫者さんが行つたなら、何もかもわかるべ、心配することはねえ。

よし子　どうして辨當をかへしてよこしたのだすべ、今晩泊るやうだつたら、晩飯はどうするつもりだすべ。

治助　調べがもう片つくんで、晩飯がいらねえつてわけだべ、嫁さん心配することはねえ、欣さんは今すぐ歸つてくるべ。

よし子　さうだといゝがねは。

（そこへ直子がやつれた顔をして出てくる。）

よし子　義姉さん。

直子　欣さんはまだ歸らねえのだすか。

よし子　まだだす、晩の辨當をやつたら、かへされたす。

直子　困つたすな。

治助　いゝいゝ、あんさんはどうしたす。
直子　今漸く眠つたので、こつちや心配で來て見たのだす。
よし子　義姉さんばかりへ心配かけてすまねえすな。
直子　そんなことねえす。あの人が悪いためにこんなことになつて、それも原因をたゞせば皆私から起つたのだす。
よし子　どうかさう言はないでたんえ、私も悪かつたのだす。
直子　（シク／＼泣いて）どうか私を恨まないでたんえ。
よし子　恨みたりしねえす。
（皆愁に沈む、沈默、この時東藏の子供がかけてくる。）
子供　おつ母、おつ母。
女房　何だ、うるさいから、あつちへ行つてろ。
子供　おつ母、俺あ知らせに來たゞよ、會社の人が車で來たゞ。
女房　（不審かつて）お醫者さんけ。
子供　んださ、こゝへ泊つてゐる人だ。
（皆一樣にホッと思ふ。）
女房　本當か。
子供　本當だぞ、（戸口から立つて出て）そら、もう來たた。
女房　（戸口から走り出て）まあ、欣さんだ、欣さんが歸つて來たゞ。

（下へ飛んで行く、皆戸口の方に行く。間もなく女房と一緒に欣二來る、負傷した左手を肩からさげてゐる。）
女房　本當によかつたた。
治助　欣さん、歸つて來たな。
よし子　まあ、欣さん。
欣二　（寂しく笑ひながら）無事に歸つてきましたよ。
よし子　まあ、よかつたねは。
（腰をかけて靴をぬぎかける、よし子がそれに手傳ふ。）
よし子　皆どんなに心配したか知れねえかつたすて。
治助　俺あ、初めからかうなると判つてゐたゞ。
欣二　皆に心配かけてすみませんでしたね。
（靴をとつて上る。）
治助　欣さん、馬をすぐ呼びにやつちやどうだすか。
欣二　馬を……あ、お醫者さんにも堅く言はれたから今直ぐこゝを立つことにせう。だが、私は馬はいりませんよ。
治助　お前さんは手が悪いから歩いた方がよかべ、……。
欣二　（心持顔を赤くして）あゝ、爺ちやに任せます。
治助　それぢや、おつ母、おつ父に馬をすぐ連れてくるやうに言つてきてくれ。
女房　あゝいゝとも、支度はずつかり出來てゐるから、わ

けたかべ、（子供に）おい一緒にこい。

（二人出て行く。）

欣二　（爐の傍にすわつて直子に）どうもいろ〳〵心配かけてすみませんでした、あんさんはどんな工合です。

直子　少し前漸く眠つたす。

欣二　お醫者さんはどう言ひました。

直子　心配することはない、二週間位で癒るだらうと言つてゐたす。

欣二　さうですか、さつき駐在所できいた時も大丈夫だと言つてゐましたが、私の間違からとんだ心配をかけて、まことにすみませんでした。

直子　（苦しさうに）うゝん、皆あの人が悪いのだす、かへつてあなたに心配かけて心苦しいのだす、災難だと思つて勘忍してたんえ。

欣二　いや、私は何とも思つてゐませんよ。

よし子　警察の方はすつかりすんだのだすか。

欣二　もう何も残つてゐません、案外物のわかつた檢事でしてね、何事もなかつた事にせうと言ふんですよ、その會社の證言がなかつたら、もつと早く歸れたのですが、駐在所の巡査が江戸の響を長崎でとるつもりで何もかもしやべつたのでね。

治助　あいつはいつでも悪黨の味方ばつかりしやあがる。

欣二　私が朝にたつて自首したのもよかつたが、それより會社のお醫者さんの證言が一番よかつたのですよ、あの人は檢事に向つて、この事件は私が自首する性質のものでなくて、訴へるのが順序だ、私が加害者でなくて被害者だと言ふんです。

治助　さりとも、誰が見たつてそれが正當だべ。

欣二　そして私の傷の方が、あの人の傷よりいけないと言ふんですよ、だからどの點から考へても、私の方が加害者でないと頑張るんです。

よし子　（うれしさうに）まあ。

欣二　然しあの證言は少し私の方に有利であり過ぎたやうですよ、私の考へぢや、この手の傷はそんなにひどいと思はれないんです、あんさんの方は何しろ顔ですからね。

よし子　（ホツとして）それでは何もかもすんだのだすな。

欣二　え、何もかも。

よし子　あゝよかつた、私どんなに心配したすべ。

治助　佛様が何もかも見てござらつしやるだ。

よし子　でも今度は傷の方が心配だねは。

欣二　なに大丈夫ですよ、あのお醫者さんは親切に車で送つてくれたり、それから市の醫者へ紹介狀まで書いてくれましたよ、そして赤十字へ行つて五日も洗つて貰ひな

治助　俺あもお前さん達二人を忘れねえでゐるべ、欣さん達あには何もねえ、これがお二人へのお土産だ、笑つてとつてたんや。
欣二　あ、昨々捕へた狐の皮か……いゝ記念だ。
治助　鷄の奴等もこれで心配はなくなるべ。
欣二　いゝ記念だ、ありがたく貰つて行くよ。
治助　欣さん、嫁さんをたのみますで。
欣二　（うなづく）
（欣二下へおりて靴をはく、よし子それに手傳ふ、そして立上つた時、夢の中で貞藏の叫ぶ聲がする。）
貞藏の聲　（夢の中で）畜生ッ、畜生ッ。
（凡ての人はハッとする、短かい沈默、馬のいなゝく聲が下から聞えてくる。）
治助　さあ、急がなければ山は越せませんで。
よし子　義姉さん、あばよ。
直子　（走りよつて手をとる、泣きながら）およしさん。
欣二　左様なら爺ちや、まめでゐてくれ。
治助　お前さんもな。
よし子　爺ちや、あばよ。
（よし子手をはなし、急いで二人出て行く。）
貞藏の聲　（夢の中で）愚黨ッ。愚黨ッ。（時々聞えなくなる）よし子ッ。よし子を連れてこい。

よし子　（下から、）あばえ、義姉さん、爺ちやとめでたこしたんや。
欣二　（下から、）左様なら
（馬の鈴なる。）
治助　（無言で腰を下ろして涙を押へる）
女房　（下で）あばえ、嫁さん。
子供　（下で）あばえ、嫁さん。
よし子　（下で）あばえ。
（短い沈默。）
子供　（下で）おつ母、嫁さんが提灯をふつてゐるぞ。
女房　（下で）あばえ、
子供　（下で）あばえ。
貞藏の聲　（夢の中で）俺を殺せ、俺を殺せ、助けてくれ……。
よし子　（遠くで）あばえ。
（馬の鈴音次第に遠ざかる。爺つぁは無言、目に手あてゝすゝり泣く直子の聲つゞく。）

――しづかに　幕――

（一九二二、九、三〇）

俺の國は自由だ、戰はこれからだ。

甲　その一人の踊子もすぐこつちのものにするぞ。

乙　やるものか……畜生、金銀を動かして來たな。

甲　どうだ。

乙　やるものか。

甲　逃げたな。

乙　金を棄てるのか、とるぞ。

甲　慾ばり奴、さあどうだ。

乙　………………………。

甲　手をはなせ。

乙　いやだ。

甲　踊子をよこせ。

乙　いやだ。

甲　もう俺の方が勝つたぞ。

乙　踊子なんかくれてやる。

甲　降參しろ。

乙　まだ負けない。

甲　もう歩兵しかのこつてゐない。

乙　また馬と槍がある。手に金をもつてゐる、行くぞ。

（はげしく駒をうごかす音。間。）

乙　槍だ。

甲　あツ、王様をやられた。

乙　馬だ。

甲　待つてくれ、待つてくれ。

乙　駄目だ。

甲　待つてくれ。

乙　駄目だ、手をはなせ。

甲　待つてくれ。

乙　駄目だ、王様をとうとう生捕つたぞ。

甲　待つてくれ。

乙　駄目だ。（駒をなげつける）俺は勝つたぞ。

甲　…………。

乙　左様なら。

甲　…………。

（乙甲の二人左と右に別れて闇に消える。）

（間。）

（鳥の聲。）

（蟇の聲。）

（おけらの聲。）

（と同時に空中にぶら下つてゐる理髮標がくら／＼廻轉し、剃刀は左右にうごき、鋏はさき／＼と髮をきる時の音を出す。）

（間。）

（鏡の中に陶醉にみちた光がながれ始める。それが次

第に不安な色にかはつて行く、——忽然と、鏡の中に二箇の人間（市長と巨人）の姿があらはれる。）

（恐怖と憎惡の對立した二つのポーズ。）

（やがて市長が巨人のために刺されて倒れる。）

（間。）

（凡てのものが平靜にかへる。）

（女登場。）

女　今晩は。

理髪師　…………。

女　今晩は。この人は眠つてゐるんだよ。

（女近づいて男に接吻する。それから鏡に向つて、いろ／＼なポーズをこしらへ始める。）

女　この人は、私が眉を小さくして笑ふのが可愛いゝと言つた。お前の唇に生甜があるし、お前の笑顔は甘い葡萄酒のやうだと言つた。本當かしら。

（女、さうしたポーズをなして突然笑ひ出す。理髪師眼をさます。）

理髪師　誰、誰だ。

女　あなたの甘い葡萄酒。

理髪師　血だ、血だ。

女　どうしたの。

理髪師　誰だ。

女　私よ。

理髪師　私は夢を見てゐた。

女　どうして宵のうちから眠つたりするのよ。今晩眠らせないからいゝ。

（男の肩に手をかけて接吻しようとする。）

理髪師　（手をはらひのけて）恐い、恐い、……鏡の中に誰かゐる。

女　あなたと私と二人つきり。

理髪師　敵と味方だ。

女　男と女。

理髪師　立派な紳士が惡魔のために刺された。

女　私今晩、あなたを殺してあげるわ。

理髪師　殺す……。

女　女の髮をきつたから、女の幸福を、女の夢を鋏できつてしまつたから。

（ごく短かい沈默。）

理髪師　夢だ。

女　さあ、行きませう。

理髪師　やはり夢だつた。

女　さあ行きませう

（女男の手を握りしめる。）

理髪師　お前の手は冷たいね。

女　夢、たすつかりさめたの。
理髮師　恐しい夢だつた。
女　私の眼を見るといゝわ、私肩を小さくして笑つてやるわ。
（理髮師、女の頭に手をまいて接吻する。）
（間。）
女　あなたの唇は火のやうだ。
理髮師　お前の唇は血の味がする。
（間。理髮師再び輕い不安にとらはれる。）
女　さあ行きませう。
理髮師　町は暗いだらう。
女　監獄の前を通つて來たわ。
理髮師　何もきかなかつたか。
女　何も。
理髮師　それから。
女　寺の前も通つたわ。
理髮師　何もきかなかつたか。
女　梟がないてたわ。
（梟の聲。）
理髮師　墓もないてたらう。
（墓の聲。）
女　おけらも。
（おけらの聲。短かい間。）
（鋏がうごき出して髮をきる時の音が聞える。）
理髮師　あつ、鋏がうごき出した。
女　なに言つてるの。
理髮師　鋏か。
女　動いてなんかゐないわ。
理髮師　お前に見えないか。
女　何にも。
理髮師　髮をきる音が聞えないか。
女　何にも。
（理髮師、おそるおそる鋏に近よつて、突然停止する。）
理髮師　あッ、大きな鋏だ。
女　どうしたの。
理髮師　魔者だ、魔者だ。
女　あなた。
（剃刀左右にうごき出す。鏡の中を不安な光が走る。）
理髮師　魔者だ、鏡も剃刀もみな狂ひ出した。
女　行きませう、行きませう。
理髮師　恐い夜だ、こゝは俺の店でない、魔者の店だ。
女　早く行きませう。
（理髮師、女退場。）
（すべて平靜にかへる。）

何處にも血などついてゐません。（再び觀客の方に向きかへる）さういふ間違は、私の外面の姿に氣をとられてゐるためです。私を見てはいけません、私の姿を見る前に、この清淨な世界を反射しつゝたつてゐる巨大な鏡を見て下さい。

私は人類の不幸をかりとる理髮師でございます。理髮師の仕事は鏡の奴隷となることです。鏡と眞理の下僕となることでございます。

眞理の光のやうに眞純です、虚僞にあることを許しません。私の鏡は虚僞を憎みます。自然に反する虚飾を許しません。人間が私の鏡の前にたつ時、彼の身につけてゐる虚飾は、ことごとく剥ぎとられます。鏡の中にうつるものは赤裸々な魂です、纖塵もいつはりのない清淨潔白な魂です。（鏡が次第に銀光に輝き出す）人類の視覺は、自然と人間の間に介在してゐる惡魔のために、ことごとく惑はされてゐます。人類が正しい視覺に歸るには、一度私の鏡の前に立つことが大事です。

（鋏うごき出す。）

巨人　さて皆樣。私の鋏は歡ばしさうに動き始めました。お客樣のお出になるのを待つてゐるのでございます。私の店では決して莫大な料金などいたゞきません。無料でございます。皆樣は莫大な料金をとられて虚僞でつゝまれた姿の前に立つてゐます、そして自己陶醉の重い疾病にとりつかれてゐます。

私の店に來て下さい。そして御自分の姿をよく見て下さい。皆樣は裸體にされた自分の姿を見て、一時不滿に思はれるかも知れません。しかし、疾病は忽ち逃げ去り、全身を掩つてゐた重い病毒がとりのぞかれて、赤子に蘇生つたやうな清々しい氣持になられます。

眞理の前にたつことを躊躇なすつてはいけません、鏡の前で眼をとぢてはいけません、正視して下さい、皆樣は私の鏡の中に人類の苦惱を救ふ光を見るでせう。

（巨人、鋏をとりはづして觀客に示す。）

女の聲　恐い、恐い。

巨人　いや、少しも恐いことはありません、（動かしてみて）このとほりおどけた音をたてます。

女の聲　恐い、恐い。

巨人　（きびしく）御婦人方、どうぞお靜かに願ひます。この鋏は御婦人方の味方です、男性に虐げられ、蹂躙されてゐる皆樣の愛護者です。

御婦人方、皆樣はかつて、一度でも女の不幸は何であるかをお考へになつたことがありますか……それは皆樣があまりに美しい長い髪をもつてゐるからでございます。

婦人の解放について數萬言を費すことは無駄です、最

刑事　急いでやつてくれ。
巨人　かしこまりました。
刑事　私は刑事だ。
巨人　私の店はどなたでも無料でございます。
（刑事椅子に腰かける。）
刑事　柔かい椅子だ。
巨人　愛でございます。
刑事　實にすばらしい大きな鏡だ。
巨人　朝來でございます。
刑事　私の鋏は實に立派だ、私はいつでもこの鋏で犯人の居所を嗅ぎつける、私の鋏でつかまつた犯人は何百人か數知れないほどだ。
巨人　見事なお鋏でございます。
刑事　急いでやつてくれ。
巨人　はい。
刑事　私は姿を變へなければいけない、お前の腕で私の顏を變へてくれ、私はこれから重罪犯人を捕へなければいけない。
巨人　重罪犯人でございますか。
刑事　さうだ、市長様を殺した奴だ。
巨人　市長様を……。
刑事　恐しい奴だ。
巨人　まだ捕まらないのでございますか。
刑事　まだ捕まらん、まるで闇のやうで手がかりがない。
巨人　先生のお鋏でも。
刑事　私はぶしやうしたのだ、大事な鋏に食物をやらなかつたのだ。
巨人　それではどつさり食物をやりませう。
刑事　私は刑事だ。
巨人　私の店はすべて無料でございます。
（鋏で仕事にかゝる。）
刑事　實に柔かい椅子だ。
巨人　愛でございます。
刑事　私は非常に疲れてゐる。
巨人　お頭をもつとあげて下さい。
刑事　かうか。
巨人　恐入ります。
（間。頭の上で鋏をうごかす。）
刑事　實にいゝ氣持だ。
巨人　ありがたうございます。
刑事　私は重罪犯人を捕へなければいけない。
巨人　左様でございます。
刑事　顏をすつかりかへるのだよ。
巨人　かしこまりました。

刑事　私の髯は飢ゑてゐる。
巨人　上等の油をどつさりあげませう。
刑事　私は刑事だ。
巨人　私の店は無料でございます。
（間。）
刑事　實に柔かい椅子だ。
巨人　刺客でございます。
刑事　私は非常に疲れてゐる。
巨人　お頭が下ります。
刑事　さうか。
巨人　恐入ります。
（間。）
刑事　柔かい椅子だ。
巨人　愛でございます。
刑事　私は疲れてゐる。
巨人　もし、もし。
刑事　私は……。
巨人　お眠りなすつてはいけません。
刑事　うゝゝ……。
巨人　鏡の前で眼をとぢてはいけません。
刑事　…………。
巨人　眞理に眼をふさいではいけません。

刑事　…………。
巨人　とう〳〵眠つた。
巨人すばやく鋏をうごかす、刑事の頭は忽ち丸坊主となる。次いで剃刀を皮砥にかける。）
（そして刑事の髯をきり落してしまふ。）
巨人　（髯を眺めて）すばらしい髯だ。
（巨人。その髯の臭ひをかぐ。）
巨人　くさい、くさい、まるで泥溝のやうな惡臭だ、この髯は今まで人生に於けるあらゆる醜態を嗅ぎまはつてゐたのだ。闇をほつつきまはつて、人の弱點をかぎつけては、邪惡な心を肥やしてゐたのだ。（再びにほひをかいで）くさい、くさい、實にくさい。
（間。）
巨人　さて皆様、私は人類の不幸をかりとる理髪師でございます。私は市民の幸福のために禍をかりとりました。しかしスパイは私を取押へようとしてかぎまはつてゐます。私は一時姿をかへて、この店を去らなければなりません。
（巨人、白衣をぬいで壁にかゝつてゐる軍服に着替へる。鼻下に刑事からとつた髯をつけて、それから鏡に吸ひついてゐる艶書を手にとる。）
巨人　さあ皆様。私の髯を見て下さい、私は立派な紳士で

す。この軍服を見て下さい、堂々たる將官です。（觀客に艷書を示す）これはある美しい貴夫人が、私によせた艷書でございます。彼女は、今、公園の池のほとりで私の行くのを待ちうけてゐるのです。かんばしい夜の木蔭、暖かい女の胸、綿々とつきない口說、幸福な抱擁、甘い接吻……私は一刻も早くたのしい媾曳に急がなければいけません。左樣なら、皆樣、人類の不幸をかりとる理髮師を、いつまでも忘れないで下さい。

（巨人退場。）

（間。）

（監獄の鐘なる。闇に入り亂れる靴音。刑事眼をさます。）

刑事　おゝ寒い、寒い、おや。

（刑事、鏡にうつつてゐる自分の姿を見て、おどろいて立上る。）

刑事　お前は誰だ。

（間。）

刑事　坊主だ。こらつ、貴樣は誰だ。

（間、不安のために鏡の前を去る。）

刑事　寒い、寒い、理髮師はゐない、何處へ行つたらう。……おい、おい、おい……寒い、寒い、身體がぞくぞくする。

（刑事、ふと鼻下に手をやる。髯がないのでおどろく。）

刑事　髯、……。

（刑事顏中をさがしまはる、頭に手をやつて坊主になつてゐるのを知つて更におどろく。）

刑事　坊主だ、坊主だ。髯がない、大事な髯がなくなつた。畜生ッ、おい理髮師、理髮師。けしからん奴だ。

（刑事振りかへつて鏡に自分の姿をうつして見る。）

刑事　なんて滑稽な剃り方だ……坊主だ、髯がない、大事な髯が……。

（短かい間。）

（梟の聲。）

（蛬の聲。）

（おけらの聲。）

（鏡に冷笑の光はげしく走り、鋏、剃刀はうごき出し、理髮師は哄笑するやうに廻轉する。）

（風の音のやうな民衆の歡喜の聲。）

刑事　寒い……（鏡を見て）おゝ恐しい、恐しい。

（刑事、丸い頭を抱へてうづくまる。）

――幕――

（一三、六、一二）

出帆（一幕）

人物

健吉　船具屋の若い主人
咲子　妻
平野　友人
駒三　河口の見張番をしてゐる老人
魚賣女
葱賣女
老婆

時　現代、東北のさる小さな港の出來事

舞臺
船具賣る家の一室。
初秋の日の午後四時すぎ、窓を開くと廣い雄物川が見える。
窓傍で若い美しい妻が帳面をよみ、健吉が算盤をはぢいてゐる。

咲子　……それにさしこんでは七圓と八十五錢なり、倚さしこんでは十一圓二十五錢なり、九圓三十錢……。
健吉　一寸待つてくれ、九圓三十錢だね。
咲子　あ。
健吉　（算盤をはぢいて）　九圓と三十錢……
咲子　（讀みつゞける）　それにさしこんでは十圓六十五錢なり、倚さしこんでは八圓なり、またも八圓、それにさしこんでは十九圓……これ、いくらだすべ。
健吉　品物は何だね。
咲子　喜利丸へやつたロップの代金だす。
健吉　そりやお前が受取つた金だらう。
咲子　あ、この字ににじんでゐて、五かしら。それとも三だすか。
健吉　（帳面を見て）　三だよ。（獨言）あの晩つけたのだ。
咲子　十九圓三十錢なり、それにさしこんでは十二圓と十錢、またも十二圓と十錢……皆でいくらだす。
健吉　二百二十九圓九十錢、合つたか。
咲子　（頭をふる）　うゝん、二百三十五圓二十錢だがら。
健吉　また、六圓近くちがつたな。
咲子　………。
（健吉、算盤を上下にふる。やゝ苛々した表情。）
健吉　もう一度讀んでくれ。
咲子　……はさんであげましては、七圓十五錢なり、それに

さしこんでは二十五圓六十錢なり……。

（この時、外を魚賣女がふれて通る。「鰈こいかすか鰈こ、烏賊こいかすか烏賊こ……」。）

咲子　（讀みつゞける）なほさしこんでは十八圓七十錢なり、次にさしこんでは二十圓とんで八錢、それにさしこんでは三圓と十錢……。

（魚賣女、戸口から顔を出す。）

魚賣女　女房さん、魚こいゝすべか。

咲子　（讀みつゞける）なほさしこんでは六圓十錢なり……。

魚賣女　いらねえすか。鰈こと烏賊こだえ。

咲子　（魚賣女に）今日はよかつたす。

魚賣女　何もいらねえすか。

咲子　あ。

健吉　晩の魚はあるのかい。

咲子　駒爺さんが、歸りに濱から買つて來てくれるす。

魚賣女　新らしいぴん〳〵した鰈こだえ。

咲子　今忙しいからいらねえす。

魚賣女　さうけ、また今度買つてたんえ。

（魚賣女、ふれて去る。）

咲子　六圓十錢に入れたすか。

健吉　…………。

咲子　どうしたのだす。

健吉　（算盤をくづす）何度やつても間違つてばかりゐる、今日はもうよさう。

咲子　さうけ。

健吉　酒をやめてしまつたら頭も身體もまるでぼけてしまつたやうだ……店へ片づけてくれ。

咲子　あ。

（咲子、算盤や、帳面や、硯箱等を持つて退場。沈默。）

健吉　……間違のもとは俺の酒のせゐだと平野が言つた。咲子もさう思つてるやうだし、俺もなるほどと思つた。それで親父に勘當されてもやめなかつた酒をぷつつりたつた、酒さへやめりや、三人の關係が何もいやなものが殘らないで、元通りさつぱりしたものになると思つたからだ。ところがどうだ。まるであべこべだ、毎日來てゐた平野が來なくなる、たまに來ても虫を噛んだやうた顔をして、そは〳〵してすぐ歸つてしまふ。咲子とは一言も話さない、顔さへ見ないやうにしてゐる……それに咲子は咲子で啞のやうに默つてしまふ、俺が一人でしやべつたり、笑つたりするだけだ。なんてこつた、好きな酒はやめる、頭がぼんやりして帳面つけがおつくうになり、算盤やつても間違つてばかりゐる。兄弟同樣のたつた一人の友達はだん〳〵遠ざかつて來たくなる、あいつはあ

いつて濕つぽい顔をしてゐる、叱ろと泣く、離緣してくれなどと言ひ出す、おとなしいあいつがなんてこつた……
……。

（健吉煙草を吸ふ。濱から帆前船を呼ぶ聲が聞えて來る。（御風丸……おうい、御風丸）。咲子登場。）

健吉　咲子。

咲子　何け。

健吉　濱を見てくれ。

（咲子窓を開いて濱を見る、黄昏の色が一面にかゝつてゐる。）

健吉　西はどうだ。

咲子　おや、男鹿山がもう見えねえやうだから。

健吉　雲が出たのか。

咲子　あ、いやな天氣になるやうだすて。

健吉　今晩は雨だな、永くもちこたへたからね。

咲子　風が變つたやうだす。

健吉　海に漁船が見えないか。

咲子　一艘も見えねえす、もう河に歸つたのだすべ。

（短かい沈默。）

健吉　勝利丸でまた荷役をしてゐるのかい。

咲子　（かすかに）うゝん。

健吉　すんだのかな、板を積んだ艀船がついてゐないか。

咲子　あ。

健吉　はてな。（爐傍かはなれて妻の傍に行く）やはり、もうすつかり荷役がすんだのだな。

咲子　……………。

健吉　今晩は雨だよ。

咲子　……………。

健吉　おい、何處を見てもやはり鷗がゐないね。

咲子　昨日まで飛んでゐたのにどうしたのだすべ。

健吉　（獨言）やはりさうだ

咲子　……………。

健吉　お前夜明に、鐵砲のなつたのを聞いてゐるかい。

咲子　あ。

健吉　あの鷗を誰かうつたのかも知れない。

（沈默。）

健吉　お前あの時眼をさましてゐたのか。

咲子　（かすかに）あ。

健吉　昨夜も眠らなかつたのだね。

咲子　……………。

健吉　こまつたものだ。

咲子　あの時、お前さんも眼をさましてゐたのだすか。

健吉　俺はよく眠つてゐたが、あの鐵砲の音で眼をさましたのだよ。

けして晩飯の仕度にかゝろ。）

（健吉爐に歸りながら。）

健吉　瓶に水があるかい。

咲子　いゝから。

健吉　夜になつてきれると困るよ。

咲子　（瓶の蓋をとつてみる）

健吉　明るいうちに一つくんできてやらう。（土間に下りて行く）

咲子　すまねえす。

健吉　駒爺さんはおそいね、

（水桶を下げて外へ出行く。間。）

（葱賣女が外をふれて通る。「葱、葱……葱、葱」。咲子戸口へ行つてよびとめる。）

咲子　葱賣はえ。

葱賣女　（戸口に顔を出し）女房(あね)さん、晩になつたすな。

咲子　葱を十錢たんえ。

葱賣女　十錢け。（荷籠をおろす）

咲子　おや、どつさりあることと、これから船へ賣りに行くのけ。

葱賣女　うゝん……船へ行くと男達がくせい／＼と言ふから行かあねえす。

咲子　おやはあ。

葱賣女　船の人つたら上方辯で面白いども、うるせいねすはい十錢。

咲子　やつぱりからかふすか。

葱賣女　／せい／＼と言つて、俺あを眞裸にしたことあるす。

咲子　（輕く笑ふ）

葱賣女　女房(あね)さんまけてやるから、のこつた葱、皆買つてくれねえすか。

咲子　さあ。

（健吉水のはいつた桶をさげて歸つて來る、水を瓶にあける。）

葱賣女　若主人(あにさま)、晩になつたすな。

健吉　皆買つてしまつたか。

葱賣女　うゝん、まだどつさりのこつてゐるす。

健吉　（籠を見て）皆でいくらにまけるね

葱賣女　三十錢にまけてやるす、（籠から出して）ほらこんなに……五十錢價あるすて。

健吉　皆買つてやらう、そのかはり船へ持つてもらふよ。

葱賣女　何の船け。

健吉　勝利丸だよ。

葱賣女　いゝがす。

咲子　（財布から金を出して）はい四十錢。

惣賣女　どうもありがたうあんした。
健吉　勝利丸へ行つたらね、船長さんに今晩待つてるから、ぜひ來てくれと傳言てくれ。
惣賣女　はい、はい、（荷籠を背負つて）女房さん、またどうか——あばえ。
咲子　あばえ。
（惣賣女退場、健吉壇にあがつて爐に炭を入れる。一寸間。）
（惣賣女の呼聲が聞えてくる。勝利丸……勝利丸。）
（間。電燈つく。同時に流にたつてゐる咲子が、ふりかへつてうなだれてゐる夫の様を見る。）
（暫くして駒三、河口出入の合圖の旗と、ランプと、小鯛[illegible]をぶらさげて登場。）
駒三　今晩は、女房さん。
咲子　[illegible]。
駒三　[illegible]——御主人今晩は。
健吉　いゝ小鯛だね。
駒三　一番しまへに來た漁舟から買つて來たのだす。
咲子　（駒三から魚をうけとつて）まあ、肉がしまつてぴんぴんしてる、何ぼかうまいだか。
駒三　はい女房さん、おつり。（咲子に釣錢を渡す）
咲子　おほきにえ。
（咲子流で魚をこしらへ始める、駒三は爐によつて煙草を吸ふ、健吉茶をくんでやる。）
健吉　あの位の小鯛はよほど沖に行かなけや、とれないだらうね。
駒三　汽船のとまる場所から二里も沖へ出なけりやいけねえだす。
健吉　それぢや船川の方が近い位だ。
駒三　漁りが大變だす。
健吉　今晩は降るね。
駒三　雨が赤いから、雨ばかりでなく風も[illegible]れるだす。
咲子　小鯛を三尾[illegible]。
健吉　あ、
駒三　お客さんけ。
健吉　あ。
駒三　勝利丸の船長さんだすべ。
健吉　（うなづく）
駒三　仲いゝもんだな、皆言つてるすて、まるで兄弟みていだつて、あの人若いがなかなか立派な船長さんだな、いくつになるべ。
健吉　二十八だよ。
駒三　[illegible]だな。

健吉　…………。

駒三　ぢやお前さんの方が二つ上の兄さんだ。

健吉　俺の方が兄貴らしく見えるかね。

駒三　さうだな、顏だけぢやどつちも同じ位だが……あの人は竹をわたつたやうなさく／＼な人だし、お前さんの方はあべこべだ——まあ兄さんだな。

健吉　ところが俺の方がしよつちう醉つぱらつて平野の看護をうけたものだ。

駒三　あの人酒飲まねえのけ。

健吉　三杯のむと眞赤になるよ。

駒三　船の人ぢや珍らしいな、あの人函館衆かい。

健吉　江差生れだ。

駒三　追分の本場だな。

健吉　さすがにうまいもんだよ。

駒三　函館の學校で一緒になつたのだすべ。

健吉　さうだよ、しかし仲よくなつたのはそのあとだ、俺は三年で學校を追ひ出されたんだ。

駒三　なんで。

健吉　練習船で酒をのんだ時教頭を海につきおとしたのだよ。

駒三　へえ、たまげたな、死なゝかつたのけ。

健吉　死なゝかつた、月のいゝ晩でね、暫くして教頭がぶく／＼つと水から頭を出した時、皆手をたゝいて笑つたり、踊つたりしたものだ。

駒三　海の人は氣が荒いな。

健吉　その教頭つて奴は、休職の海軍中佐ですぐ生徒をなぐるんで憎まれ者だつたのさ、俺ばかりでない、皆今に見ろと待ちかまへてゐたのだよ。

駒三　それぢやいゝ氣味だ。

健吉　おかげで俺は放校、手を拍つて笑つたり、踊つたりした連中は三日の停學さ。

駒三　勝利丸の船長さんも三日組け。

健吉　さうだ。

駒三　お前さんはふだん、おとなしくして蟲も殺さない人だが、のむとからつと別人になつた……俺あ、刀をふりかぶつて親父さんを追ひまはした時には、全く膽をつぶしたつけ。

健吉　あの頃は酒をのむとすぐあばれた、俺と親父は隊同志であつたかも知れないよ。

駒三　それから若主人(あんさん)は泣上戸であつたすて。

健吉　(一寸間をおいて)　爺ちや、俺あ今度酒をよしたよ。

駒三　本當け。

健吉　本當さ。

駒三　どうしてそんなことするへ、お前さん函館から歸

うが、うかれた奴は大學を出ても間拔だ、人の股をくゞつても、酒をのんでゐてもえらくなる人はえらくなる、それが立派な勉強だすべ……　俺あお前さんに胡麻するのぢやねえが、勝利丸の船長さんのやうな立派な友達をもつてるだけでも、自分を自慢していゝかすべ。

健吉　あれは全く立派な奴だ、俺が方々喰ひつめてどうにも仕樣がなくなつた時、俺を救つてくれたのはあの男だよ。

駒三　若主人（あにさん）の腹を見ぬくだけでもあの人はえらいもんだな。

健吉　俺は、親父の死んだ知らせが來るまで、丁度足かけ二年間、平野の宿に轉げこんでゐたのだ。

駒三　それが今ぢや一方は船具屋の主人で、一方が帆前の船長さんだ、そして年に二度鰊と鮭を積んで、こんな小ぽけな港に住んでる友達に會ひに來る――世の中はまだすたられえな、人間の本當の情合がまだこの世にのこつてろ、俺あ、それだけでお前さん達二人を見るのが嬉しいすて。

健吉　………。

駒三　今度の鮭の商はどうだつたす。儲かつたすべ。

健吉　非常に儲かつたよ。

駒三　よかつたすな――俺あ番小屋にたつてゐて、勝利丸がはいつて來た初つから、さう思つたすて。

健吉　どうして。

駒三　あの船に鷗が一緒について來たからねす。

健吉　鷗。

咲子　（一寸振返る）

駒三　こんなこと何十年振だすて、春の鰊船に鷗がどつさりついて來るのはあたりまえだが、秋になつて鷗が船について來るなんてねえことだすて、鷗は緣喜のいゝ鳥だからねす。

健吉　函館邊では何とも思つてゐないが、こゝではどうして鷗をかつぐんだらうね。

駒三　それやこゝの港を開いたアイヌが、鷗を大事にするからだすて、それが傳はつてゐるのだす、それはかりぢやねえ、ほら、山金の印を知つてゐすべ、ありや鷗だすて、あそこが今のやうな財産家になつたのは、先代が鮭船で儲けたからだす、その時も時節でねえのに鷗が船について來たさうだす、だから鮭船に鷗がついてくるなんて目出度いことだすて。

（短かい沈默。）

健吉　咲ちや、今日鷗を見たかい。

駒三　今日……はこたな。

健吉　今日は飛んでゐなかつたよ。

健吉　こんな時出帆するなんて、俺、俺にだまつて出帆するなんて――俺が行つてとめてくる。

（健吉狼狽(あわ)てゝ退場。咲子ぼんやりして室に上り、氣づかはしげに窓から河を眺める。）

（河の面が次第に暗くなつて行く、向濱の浪の音が聞えて來る。間。）

（平野登場。）

平野　（かすかに）　今晩は。

咲子　まあ。

平野　森田君は。

咲子　今船へあなたを迎へに行つたす。

平野　さうですか。

咲子　すぐ歸るから、上つてたんえ。

（平野室にあがる、窓に近づいて外に眼をやる。間。）

咲子　急に、出帆するつて本當のことだすか。

平野　え、荷役がすんだので。

咲子　…………。

平野　あなたは、私を卑怯者だと思ふでせうね。

咲子　（顏をあげて見る）

平野　しかし、私は卑怯者になるより仕方がないのです。

咲子　私、あなたの心はわかつてゐるす。

平野　わかつてる……。

咲子　今日の夜明方、鷗を殺したのはあなただすべ。

（短かい沈默。）

平野　あの音をきいたのですか。

咲子　私昨夜も眠らなかつたのだす。

平野　私も眠らなかつた、あれから一晩も滿足に眠つたことがない。

咲子　なぜ、鷗を殺したのだす。

平野　…………。

咲子　わかつてゐるす……私をすてる氣になつたのだすべ。

平野　…………。

咲子　あなたは、あの晩言つたことを……。

平野　あの晩のことは忘れて下さい……私達は氣がちがつてゐたのです――なんて馬鹿なことを言つたものだ――私は森田に、間違のことは君の氣のせゐだと言ひました。その一言を思ひ出しても、熱湯をあびるやうな氣がします。

咲子　平野さん。

平野　……　……。

咲子　あなたは何もかも嘘言にする氣だすか。

平野　さうとつてくれては困ります、しかし、今になつてあの時の二人の約束だと何になります。私達は辯解で罪

をかくさうとした、しかもその罪を森田にぬりつけようとしたのです――私達は全く氣がちがつてゐた、でなかつたら、あんな恐しい罪ををかす筈がない――あの晩のことは何もかも忘れて下さい。

咲子　と、どうして忘れること、出來るす、忘れることが出來た位なら、こんな苦しみはしねえす。

平野　――森田が小舟で歸つて來た、咲子さん、もう何も言はないで下さい。

咲子　（泣く）

平野　俺、俺はどうしても出帆する――早く陸の見えない海の中へ行きたい、俺は友を賣つた、俺は深く自然の罰をうけべ、それより外に俺のとる途がない。

（沈默。）

咲子　平野さん、

平野　…………。

咲子　私を一緒につれて行つてたんえ。

平野　一緒に……。

咲子　私こゝにゐられねえす。

平野　（短かい間）いや、あなたは森田を愛してゐないのですか。

咲子　愛してゐない、そんなこと……。

（咲子再び泣き出す。）

平野　…………。

咲子　私あの人を愛してゐるす、だからこゝにゐるのがせつねえのだす。

平野　…………。

咲子　平野さん。

平野　私には出來ない、私は森田を賣つた、この上森田の幸福まで奪ふことは出來ない――私を卑怯者にして下さい。

咲子　…………。

平野　森田が可哀さうです……咲子さん、森田を愛するなら、その考へを棄てゝ下さい、あなたが私と一緒に行つて苦しまうと言ふのは間違つてゐる、本當に自分を苦しめようとなさるなら森田の傍をはなれないで下さい、森田は、あなたに去られたら、生きる力をなくすでせう。

咲子　（泣きつゞける）

（間。健吉登場。）

健吉　（平野の姿をみとめて）あ、ゐてくれた。（室に上つて平野の手をとる）おい、君は氣がちがつたのか、日が暮れて鼻つ先に暴風雨が來てゐるのに出帆するなんて本氣の沙汰か。

平野　…………。

健吉　俺は今船へ行つて、船夫達をどなりつけて來た、船

長がなんて言つたつて、こんな時に船を出す奴があるかつて——おゝおい、俺に無言で出帆するなんて、あんまりひどいよ。

平野　…………。

健吉　おいどうした、なぜ黙つてゐる。

平野　（うなだれる）

健吉　おや君は、本當に出帆する氣か。

平野　船川まで船をやるつもりだ。

健吉　船川まで……なるほど船川はすぐだから暴風雨に會はないかも知れない、しかしこんなにおそく、まるで逃げ出すやうに、なぜ、出帆しなくちやならないんだ、小樽へつけばあとは圍ふ船だ、明日でも明後日でも、いゝ天氣をえらんでゆつくり出帆してもちつとも差支ないぢやないか……それを、それをこんなにおそく出帆するなんて、君は船夫達を可哀さうに思はないか。

平野　…………。

健吉　君は黙つてゐるね……わかつた、君は俺を苦しめたいんだ。

平野　森田。

健吉　わかつてる、俺はよくわかつてる……しかしそりや卑怯だ、君はなぜ俺の心をくんでくれないのだ。

平野　森田、俺は卑怯者だ。

健吉　いやだ、俺はこんなことで二人の仲を傷つけたくない。

平野　…………。

健吉　君が今出帆するつてことは、俺に絶交を宣告すると同じことだ、俺達の仲はそんなものでなかつたはずだ、君は二人の誓ひをどうするつもりだ。窒息しさうな長い間の冬の生活、吹雪の音をきゝながら、しつつこく春を待つてる港の人々の生活、俺がこの冬に耐へて、呼吸苦しい生活に滿足してゐるのは、君との誓があるからだ、春が來る、雄物川の氷がとけてながれ始める、すると、君が鰊を積んで、笑顔と一緒に俺の傍にやつて來るのだ——俺の光、俺の歡び、俺の唯一の希望は、荒い海を越えて春と一緒にやつてくる君の姿だ——君が今出帆することは俺を絶望におとしこむものだ。

平野　許してくれ。

健吉　…………。

平野　俺は君の言葉に價しない人間だ。

健吉　おや、君はこれつきり來ない氣か。

平野　さうぢやない、君が許してくれるなら、俺は來春やつてくるつもりだ。

健吉　本當か。

平野　本當だ。

健吉　ありがたい、ありがたい……なんでもなかつた、俺は心を曲げて君を疑つたのだ。
平野　…………。
健吉　これで漸く安堵した――おい、今晩ゆつくり語らう、咲子に二人の昔話をきかして、三人で笑はうぢやないか、そら、例の松前での話さ、君は忘れないだらう、一人の女に二人で惚れ合つた話さ……俺は咲子に皆話してしまつたが、あの一件だけはとつておいたんだ、三人あつた時話さうと思つてね……。
平野　（苦しさうにする。）
健吉　どうしたんだ。
平野　船夫達が俺の帰りを待つてゐる。
健吉　船夫達……
平野　…………。
健吉　（がつかりして）ぢやアやはり出帆する気か。
（沈黙。）
平野　吉田、許してくれ。
健吉　…………
平野　来春は俺きつとやつてきつと戻るよ
健吉　やはり出帆するのか。
平野　どうか、やつてくれ。
（長い沈黙。）

健吉　ぢや、とめない。
平野　ありがたう。
健吉　来春はきつと来てくれるな。
平野　きつと来る。
健吉　その言葉を信じてゐよう。
平野　左様なら。
健吉　左様なら、たつしやでゐてくれ。
平野　（行きかける）
健吉　おい、お別れに逢つて行く気か。
平野　…………。
健吉　言葉をかけに行つてくれ……春が来て君の船が入口に見えたら、二人で河口まで迎へに行くよ。
平野　（咲子に囁く）左様なら。
（平野退場。咲子泣きじやくる、間。）
（老婆。死んだ鴎(かもめ)を手にさげて戸口に顔を出す。
老婆　今晩は……若主人、死んだ鴎買つてくれねえすか。

――静かに　幕――

息子

人物

松　三
と　き
信　吉
町　長
居酒屋の主婦
船　夫（甲、乙、丙）

舞臺　東北の港

濱の居酒屋。
窓から河港に碇泊してゐる帆前船の燈が三つ四つ見える。
九月の夜。
作踊の太鼓の音が冷えた夜をながれて聞えてくる。
主婦が櫓から銚子へ酒をついでゐる。
ときが戸口に後姿を見せて外を見てゐる。

とき　まあ、よく光つてゐること。
主婦　（顏を向けて）何さ。
とき　お星さんだよ。
主婦　北斗七星さんかい。
とき　あゝ。
主婦　風が冷えてきたからね。
とき　（はいつて來て）あの星何處へ行つても見えるかしら。
主婦　そりやさうさ。
とき　東京でも。
主婦　東京だつて田舍だつて空にかはりつこないさ。
とき　やはり北空に見えるだらうね。
主婦　東京で見たら丁度この邊にあたるだらうよ。
とき　主婦さんは東京へ行つたことあるかい。
主婦　私の見たのは函館さ、東京つて函館の少し大きな街だつてことだよ。
とき　…………。
（間。主婦ふと氣づく。）
主婦　お前東京へ出ようと思つてゐるのかい。
とき　（どきつとする）
主婦　そんなこと考へない方が悧巧だよ。
とき　…………。

主婦　お前いくらくよ〳〵思つたつて、父つあんがゐるうちどうにもならないよ。
とき　私だつてちやんとあきらめてゐますよ。
主婦　父つあんは昨夕五社稲荷の前の溝にはまつてゐたつてことだよ。
とき　また……主婦さん誰から聞いたの。
主婦　御風丸の會計さんからさ、仕事のかへりにみつけたつて……。
とき　會計さんが。
主婦　さうさ、夜中の二時だつたとさ、會計さんが溝からひきあげて、家に連れて行つたつてことだよ。
とき　……………。
主婦　父つあんも兄ちやんをなくしてから、すつかり悪くなつたね。
とき　父つあんは兄ちやんのことなど氣にするものですか。
主婦　でもしよつちう、口にしてゐるぢやないか。
とき　あれは別のことですよ、父つあんがあゝなつたのは政府からもらつた金のせゐですよ。
主婦　あの當時、みんなうらやんだものだがね。
とき　うらやんだつて……。
主婦　五百圓ももらつたら大したものぢやないか。
とき　兄ちやんの生命のかはりにかい。
主婦　そりやお國の御用だもの、仕方がないさ。
とき　馬鹿々々しい。
主婦　でもお前、このせつ一生かゝつたつてそんな大金のこせるものぢやないよ。
とき　今ぢや文無しだらう。
主婦　そりや父つあんのやうに酒をあびちや、千萬あつたつてたまらないさ。
（短かい間。）
とき　（ほろりとして）あんないゝ父つあんが、この頃ぢやまるで生甲斐なしの無頼漢だ。
主婦　飲手だつたが、子煩惱でいゝ人だつたがね。
とき　……………。
主婦　母さんに死んで、お前をこゝへよこす時など泣いたもんだよ……やつぱり兄ちやんをとられたせゐだよ。
とき　春からこのかた毎日毎晩よつぱらつて一度も海へ出たことがない、漁舟は水につけないから口あいて役にたたないし、網はくさつてぼろ〳〵だ……父つあんがあゝなつたのはみんな金のせゐさ。五百圓の大金もらつたおかげで、私の苦勞はますばかりだ。
主婦　だから私お前にすゝめるのぢやないか、お前さへうんと言ひや……。

とき（強くさへぎつて）いやですよ、誰が身體を賣るものですか。
主婦　身體を賣れたんて言ひやしないよ。
とき　でも同じことぢやないの。
主婦　ときちやん、私はね、慾得で言つてるんぢやないよ。
とき　…………。
主婦　お前、この頃父つあんが何考へてゐるか知つてるのかい。
とき　…………。
主婦　父つあんは町長さんからどつさり借りたつてことだよ。
とき　お金を……。
主婦　さうさ。
とき　主婦さん、そりや本當ですか。
主婦　私、昨夕町長さんからきいたんだよ。
とき　…………。
（短かい間。）
主婦　お前いつまでも强情はつてりや、父つあんは本當にお前を新地へ賣つちやふかも知れないよ。
とき　誰が勝手に賣られるものか……主婦さん私たつてね、いつまでも父つあんの勝手になつてゐませんよ。
（三人の船夫登場。）
（作踊に出るためそれぞ〻假裝してゐる。）
（甲は魚賣女に。）
（乙は人足女に。）
（丙は百姓娘に。）
（丁は白痴に近い男。）
船夫甲　今晩は。
船夫乙　今晩は。
船夫丙　…………。
主婦　おやまあおどろいた。
船夫甲　主婦さん冷酒を一つぱいくれ。
船夫乙　おときちやん、いゝ女だらう。
主婦　今晩はまた誰も彼も汚ない假裝したものだね、それぢや懸賞にありつきつこないよ。
船夫甲　懸賞なんてつまらねえこつた、俺あ昨夕で慎慨しちやつたよ。
主婦　どうしてさ。
船夫甲　考へてみねえた、作踊は田舍の御芝居ぢやあるめえ、それを何たい、馬の假裝に一等くれるなんて本當に馬鹿々々しいや。
主婦　二等は花魁の道中だつたね。
船夫乙　あれだつて大根役者の眞似た。
船夫甲　どつちも踊りもしねえでぶらりぶらりねつて歩くだ

けさ、あれおや假裝たけの面白味で作踊とちつとも釣合はねえよ。

船夫乙　肥料(こやし)のにほひかいたことのねえ、町會議員なえらむんだもの、せうがねえさ。

主婦　えらい權幕だね。

船夫甲　と、何言つたもの、、あの太鼓の音をきいちやおつとしてゐられねえや。

主婦　その腹いせで、今晩は三人が三人とも汚ない假裝をしたんだね。

船夫乙　まあそんなわけだ。

主婦　（丙に）もう飲まないの。

船夫丙　（手を大きくふる）

主婦　德さんは相變らず無口だね。

とき　でもよく似合つてゐるよ。

主婦　本當にさ、そんな赤いもの誰からかりて來たの。

船夫甲　色女からよ、（かへりみて）なア德。

主婦　えへ、初耳だね。

とき　德さんいつそんないゝ女子(をなご)をこしらへたの。

船夫丙　お、おときちやん、おときちやん、そ、そりや嘘だよ。

主婦　（高く笑つて）德さんは可愛いゝね。

とき　德さん、今晩私もおどりに行くよ。

船夫乙　本當かね。

とき　本當さ。

船夫甲　それぢや、俺あおときちやんと一緒に踊りたいもんだな。

とき　忠さんは手くせが惡いから厭さ。

主婦　德さんと踊るといゝよ。

船夫乙　主婦さん本當かい。

主婦　本當さ。

船夫乙　珍らしいことだな。

主婦　いくら堅いたつてまだ若いもの、毎晩あの威勢のいい音をきいてると、私だつて踊りたくなるよ。

船夫甲　おときちやんは何(ど)んな假裝するんだ。

とき　海産物商人(いさはあきんど)にさ。

船夫甲　海産物商人(いさはあきんど)。

船夫乙　なぜ船夫にならねえんだ。

とき　海産物商人(いさはあきんど)の方がいきだからね。

船夫甲　ほら、嫌はれた。

船夫乙　おや仕方がねえ、行かうよ。

船夫甲　あ、いゝ氣持だ。

主婦　（乙に）音さん、若い娘(かわ)つ子(こ)引つぱつちやいけないよ。

（三人の船夫それぞれ手拭で頰冠りする。）

船夫乙　御馳走さん。
主婦　歸りにときちやんを送つてきてくれ。
船夫乙　いゝとも。
船夫甲　（魚賣の聲色をまねる）鮒こいゝかしか、鮒こ。
（主婦片づける。）
主婦　ときちやん、私一寸勝榮丸へ行つて來るよ。
とき　何か用事があるの。
主婦　そら、喜三郎の賃金をとりにさ。
とき　今時分船にゐるかしら。
主婦　今日小倉に會つたら風邪で寢てゐるつて言つてたから
ね。
とき　さう。
主婦　それから……私の留守ね、町長さんが來たら待たし
ておいておくれ。
とき　あいつ、また今晩も來るの。
主婦　そんな口、きくもんぢやないよ。
（主婦退場。）
（暫くして波止場で船を呼ぶ聲がする。）
主婦の聲　勝榮丸――。勝榮丸――。
（間。）
主婦の聲　勝榮丸――。
（とき戸口へ行つて外をのぞく。）

（船で、おういと答へる聲がする。）
（間。）
とき　誰。
（短かい間。）
とき　信さんぢやないの。
信吉の聲　（低く）さうだよ。
とき　どうしてそんな所へぼんやり立つてるの、おはいり
よ。
（信吉登場。）
とき　どうしたの。
信吉　誰もゐないの。
とき　私だけよ。
信吉　主婦さんは。
とき　今、勝榮丸へ出かけて行つたの。
信吉　おや今のは主婦さんだつたな。
とき　どうしたのさ。
信吉　何でもない……やはり具合惡くてはいりにくかつた
のさ。
とき　どうして。
信吉　だつてさ。
とき　（取りすがるやうにして）お前さん、しつかりして
くれなくちや……。

町長　おときちやんは、あんなこと嫌ひなのかね。
とき　え、嫌ひですよ。
（銚子をもつて來て町長の卓子の上におく、酌しようとしない。）
とき　まだ、ぬるいかもしれませんよ。
町長　なにいゝよ……あの威勢のいゝ太鼓をきいてもかい……。
とき　（はなれて）何ですか。
町長　作踊のことさ。
とき　私、嫌ひです。
町長　さうか、若い娘に珍らしいね、ぢや、おときちやんは何が好きだね。
とき　何でも嫌ひです。
町長　何でも……そんなことあるものか、若い好い男なら嫌ひでもないだらう。
とき　大嫌ひですよ。
町長　ぢや、年寄は……。
とき　………。
町長　私のことぢやないよ、私はまだ年寄でないさ、五十になつたばかりだ、これからが働きざかりだからね……私はたゞきいてみるのだ、おときちやんの心を知りたいためにね。
とき　………。
町長　年寄は親切なものだよ、好きか、それとも嫌ひかね。
とき　男はみんな嫌ひです。
町長　こりやおどろいた、まるで男鹿石のやうなこと言つてる……ぢや男の子ならどうだ、赤坊だよ、赤坊ならおときちやんも可愛いゝだらう。
とき　あんなうるさいもの……。
町長　赤坊も嫌ひか……こりや臼だ、金臼だ。（笑ふ）
とき　どうせうすのろですよ。
町長　いや、いや、そんな意味で言つたのぢやないよ、そら、金城鐵壁の意味だ、堅いといふことさ、娘は堅すぎる方がいゝよ、堅くない娘はのびた餅のやうに仕末の悪いものさ……だが、おときちやん、父つあんだけは別だらう、お前父つあんは好きだらう。
とき　………。
町長　そりやまあ、誰だつて好きにきまつてる……なあおときちやん、私もお前の父つあんは氣に入つてるよ。大好きさ。
とき　………。
町長　それにお前の兄ちやんは國家のために生命をさゝげたのだからね、だから私はとくに父つあんに眼をかけてゐるのだよ、そら兄ちやんへ政府からおりた金さ、あれ

だつて私は軍隊の方へかけあつて、特別多く出してもらつたのだよ。

とき　(怒りを抑へた暗い顔になる)

町長　まあ、こんなこと今更言ひ出すのは、おときちやんにかへつて悲しい思ひをさせるかもしれないね。……いや、私はね、お前の父つあんをいつまでも危ない海へやつて苦勞させない意だよ。何しろ一人息子がお國のため立派な犠牲となつてるのだからね、私は近いうちお前の父つあんを役場の方へ使ふつもりでゐるんだ。

とき　役場へ使ふんですつて。

町長　さうさ、まあ立派な出世といふものだ、漁夫から官員さまになるんだからね。

とき　あんな醉ぱらひを役場につかつてなにになるんです。

町長　そりやよくのみこんでゐるさ、だが、私がついてりや大丈夫だ、大船へ乗つたも同然だよ。

とき　そんなこと、やめて下さい。

町長　やめろつて、どうしてさ、お前の父つあんの出世ぢやないか。

とき　いらないお世話ですよ。

町長　おどろいたな……お前自分の父つあんまで嫌ふのか。

とき　あんな無頼漢。私の父つあんぢやありませんよ。

町長　こりやおどろいた……まあそんなにむきになるものぢやない、(銚子をふつてみて) もうない、おときちやんもう一本つけておくれ。

(とき、銚子をつける。)

町長　主婦さんはおそいね。

とき　…………。

町長　今時分、勝榮丸に何しに行つたんだね。

とき　貸金をとりにですよ。

町長　貸金を……喜三郎つて奴のだな。

とき　…………。

町長　あいつは惡黨だ、なあおときちやん、お前の父つあんはいゝ人だが、あんな惡黨とつきあつてるからいけないんだよ。

(とき、それに答へないで、柱鏡に向いて髪をいぢつてゐる。)

(間。)

町長　おときちやんの髪はいつみても漆のやうできれいだな……心は頑固だがさうしてゐるところはどうしたつてやさしい女だ。

(とき、髪をいぢるのをよす。)

町長　おときちやん、私の所にね二十年ばかり前馬關がへりの船土産にもらつた、珍らしい瑪瑙の珠があるんだが

ね……そりや大したものだ、このせつ新地の藝者がさしてゐる安ものとは、とてもくらべにならないさ、さうだね二十匁もあるかな、まあ大したものだ、その珠にね、表面一寸白つぽくみえるが、うちは血のやうに眞赤なんだ、そりや珍らしいものだ、それに金の台を入れて、おときちやんの髮にさしたら、どんなに似合ふかしれないね、十倍も綺致があがるだらうよ、ね、私はそれをお前にやりたいと思つてゐるがどうだね。

（とき、銚子をもつて町長の傍に行く。）

町長　ね、おときちやん。

とき　何ですか。

町長　そら、今話した瑪瑙のことさ。

とき　瑪瑙……。

町長　私、私は（急にときの手をとる）私はそれをお前にやるよ。

とき　何するの。

町長　お、おときちやん、おときちやん。

（町長の様子がエロチカルに急變する。）

（ときの手を堅くとつて抱き寄せようとする。とき、それに抵抗する。）

（ごく短かい間。）

とき　（叫ぶ）信さん。

（信吉登場。）

（女の姿に假裝してゐる。）

（長襦袢に女帶をぐる／＼腰にまきつけ、それに派手な色の前かけをしめてゐる。）

町長　（口の中で）あッ、お前は……。

信吉　これから作踊に行くのさ。それより、お前は何してゐるんだ。

町長　（笑ふ）なんだ作踊の假裝か、私は女坊主がぬつと出て來たので膽をつぶした。（笑ふ）

信吉　何がをかしいんだ。

町長　どうもおどろいた。（笑ふ）髮がないんだからな、髮がないんだからな。

信吉　町長、笑つて胡麻化さうたつて駄目だぞ、お前今おときちやんになにしたんだ。

町長　なにするもんかね、髮をほめてゐたところさ、おときちやんの髮がいつみても綺麗だつてほめてゐたところさ、そこへ髮のない別嬪が飛出して來たんだらう、をかしくて、をかしくてしやうがないさ。（笑ふ）

とき　（叱るやうに）信さん……。

信吉　畜生ッ。（飛びかゝりさうになる）

町長　（笑ひつゞけながら）お前さんの假裝はなか／＼似合ふよ、きつと懸賞をもらへるよ……それおときちやん

の長襦袢ぢやないか、おやすくないね。（笑ふ）

信吉　…………。

とき　憤
おー
つちや駄目、憤つちや駄目、大事な晩ぢやないの。

町長　（酒をのんで）おツ、熱い、燗
かん
がつきすぎちやつた。

信吉　…………。

とき　行李をどうしたの、奥へ行つて早く持つて來てよ。

（押しやる）

（信吉退場。）

町長　おときちやん、ありや何處の人だ。

とき　（とつさに）主婦さんの甥さんです。

町長　ほう、そんな人があるたかね。

とき　…………。

町長　いゝ若い衆だ、何してゐるんだね。

とき　（不快な抑へて）大工さんです。

町長　さうか、大工さんか、ありや何の假裝だね。

（ごく短かい間。）

とき　（きつぱりと）斷落女です。

町長　へえ、こりア面白い趣向だ、おや、何かかつぐだらうね。

とき　…………。

（信吉登場。）

（前の姿で背に行李を背負つてゐる。）

町長　（笑ひながら）やあ上出來〳〵、そつくり斷落女だ、その假裝ならきつと一等とれるよ。

（主婦登場。）

主婦　（戸口で）町長さん、いらつしやい。

町長　やあ、主婦さん、お歸り。

主婦　高い笑聲ですね、何がそんなに嬉しいんです……おや〳〵、信さんすつかり出來ましたね。

町長　ね主婦さん、私は今ほめてゐたところさ、全く面白い趣向だね、斷落女そつくりぢやないか。

主婦　おとなしい信さんまでこんな趣向で踊るんだものね。

信吉　ぢや行つてくるよ。

主婦　一年分踊つておいでよ。

町長　私もあとから踊ぶりを見に行きますよ。

（信吉退場。）

主婦　（柱鏡に行きながら）今晩は全くどうかしてますよ……ね町長さん、ときちやんまで踊るんですつてさ。

町長　へえ、本當かね。

主婦　本當ですとも。

町長　やはり假裝してかい。

主婦　海産物商人
いさはあきんど
になるんですつて。

町長　へえ……おときちやんひどいね。

主婦　どうかしたんですか。

町長　さつき私に作踊なんか大嫌ひだつて嘘言つたんだよ。

主婦　あとでおどろかすため、もたせたんですよ。

町長　ぢや、おときちやんの男嫌ひもあやしいもんだね。(笑ふ)

主婦（町長の傍に腰かけて）さあ、お酌しませう。

町長　勝榮丸へ行つたつて……。

主婦　え、あいつの貸金をとるためですよ。

町長「川風に吹かれて歸る阿呆鳥」かね。(笑ふ)

主婦　ところが大ちがひ。

町長　へえ。

主婦　二つ返事で新らしいきれるやうな紙幣をくれましたよ……今晩は全くどうかしてる。

町長　おどろくね……（ふと氣づいて）その紙幣を一寸みせておくれ。

主婦（財布から出して）これですよ。

町長（手にとつてみて）やはりさうだ、主婦さんこの紙幣はね、三日前私が松三さんにやつたものだよ。

主婦　まあ、ぢやまたあいつにだまされたんだよ……ときちやん、お前の父つあんはさうなんだからね。

とき　私の知つたことぢやありません。

主婦　でも、お前の親であれば仕方がないぢやないか、町長さんがいくらめんどうみてやつても、これぢやなにもなりやしない。

町長　いや、いゝよ、いゝよ、僅かばかりの金だ。

主婦　でも、あまり甲斐性がありませんからね。

（とき、無言で奥へ行かうとする。）

主婦　何處へ行くの。

とき　私も仕度して出かけます。

主婦　一寸位町長さんにお酌してあげてはどうだね。

町長　いゝよ、そんなこと……おときちやん私にかまはず仕度おし……さあ、私もあとで出かけておときちやんの踊りぶりをみるかな。

（とき、退場。）

町長　今晩は面白いな……（急に聲をおとして）どうだ、話はすゝんでゐるか。

主婦　え、え、もうぢきですよ、さうするのがあの娘にとつても一番幸福なこつてすからね。

町長（うなづく）

主婦　急いちやいけませんよ町長さん。（手をふつて眼でさゝやく）

町長　なに、私は決して急きやしないよ。

（間。）

（風が出てくる。）

（木の葉が地面を走る音がする。）

（二三の行人が話しながら通る。）

明日はあれるよ。

陽の入りが馬鹿に赤かつたな。

作踊も今晩で終りだ。

（一人が大きく唾をする。）

（短かい間。）

（不意に外が騷しくなる。）

（後、嘲笑おこる。）

松三の聲　笑やがつたな、やい、やい來い、俺に向つて唾ひつかけるとはなんだ、畜生ッ。俺を誰だと思つてるんだ。（戸口の柱に一つの手だけかゝる）こ、この俺を誰だと思つてるんだ、漁夫の松三で、勇士の父つあんだ、手前等知るめえ。畜生ッ、馬の骨、こゝへ來い、耳をほつてよくきけ、俺の息子は國家の忠臣だぞ、軍神だぞ、パルチザンを百人もたゝき斬つて、名、名譽の戰死をとげたんだ、ウ……。

へん、どうだ。たまげたらう。

馬鹿野郎……。

（松三登場。）

松三　やあ、町長さん……。

町長　相變らずだね。

松三　今晩は。（頭を下げる拍子に前に轉げかける）

主婦　あぶないよ。

松三　大丈夫だ、大丈夫だ、俺あ、まだそんなに醉つてゐねえ。

町長　誰にどなつてゐたんだ。

松三　なあに、あん畜生等、ふざけやがつて俺のくる途に唾をひつかけやがつたんだ……なあ町長さん、町の奴等あ薄情でさあ、全く薄情ですせ、俺あの一人息子が何のために死んだと思つてるんだ。國家の爲でさあ。お國のために恐しいパルチザンをやつゝけたんだ。

ところが、どうだ、町の奴等あ、もうけろりかんと忘れてけつかる、そんなこと、あつたかしらつてな顏してけつかる。

ウ、、、、。

初めのうちだけだ。軍神だ、町の名譽だ、父つあんは偉い息子もつて幸福だつて、俺をちやほやしたなあ……この頃ぢや、こ、この頃ぢや鼻もひつかけねえ、どいつもこいつも金のある時だけ俺をかつげやがつて、金がきれたら鼻もひつかけねえ。

なあ町長さん。

そりや、そりや薄情といふもんだ、義理知らず、恩知ら

ずだ、國家のため一つしかねえ大事な生命をすてたんだ、その大恩人の親父の俺を、半年たゝねえうちに忘れちやふのは、まるで人情のねえ畜生と同じこつちやねえか……。

町長　わかつてる、よくわかつてるよ松三さん……まあ、そんな奴等にかまはず一つぱいのんでくれ、私はね、いつまでたつても父つあんの恩は忘れないよ。

松三　本當かい、町長さん。

町長　本當さ、だから私は今でもお前さんと交際(つきあひ)してるぢやないか。

松三　本當だ、ありがてえ……町長さん俺あお前さんの心よくわかつてゐる。（頭を下げる）俺あ、お前さんから金借りて面目ねえ……。

町長　そんなつまんないこと言ふもんぢやないよ。

松三　（盃をかへして）ありがてえ町長さん……俺あ、息子の葬式の日のことまだ忘れねえ、俺あ町長さんが讀んだ文句今でもちやんと暗記してゐるんだ、ほら、ほら、「軍神佐藤芳三君は數名のパルチザンを斬り殺し……ウウ、、、」俺ああの時ふるへた、ぶる／＼つとふるへた、「芳三、よくやつてくれた、よくやつてくれた、お前がゐなくなつたつて父つあんは泣かねえぞ、よく／＼、よくお國のために死んでくれた」俺あ腹の中でかう言つたんだ。ありがてえ、町長さん、お前さんの親切はありがてえ、俺あの息子は立派な男だ。

町長　全く芳三さんは立派な働きをなすつたよ。

主婦　本當にね。

松三　さうだらうお主婦さん。

主婦　（うなづく）

松三　それだのに、それだのになんだ、町の奴等あもうとつくの昔忘れてけつかる。息子も俺あをもすつかり忘れてけつかる。町長さん、あいつ等は俺あにもう鼻もひつかけねえ、誰もつきあつてくれねえ、俺を乞食のやうによせつけねえ。主婦さんそんな馬鹿なことがあるかい、息子をとられた外に、俺あなんで世間からつまはじきにされるんだ、つまはじき、つまはじき……。主婦さん俺あ寂しい、かう醉つぱらつてゐるが俺あ寂しいんだ、俺あもう、ときどき、ときどきより頼る手がゐねえ……（泣く、そのまゝ俯向く）

町長　よほど醉つてるね。

主婦　近頃は醉ふとすぐ愚痴になるんですよ。

町長　氣候のせゐかな。

主婦　だん／＼死んだ息子のことを思ふんでせうね。

松三　（俯向いたまゝかすかに、ときどき……。

とき　私今日までこらへて來たが、もう我慢出來ない、何もかも言つてやる。

主婦　お前、どうしたのさ。

とき　默つてゝ下さい……父つあんお前さつきもならべてゐたね、兄ちやんを國家の忠臣だ、軍神だ、パルチザンを百名殺したつて……お前まだそんなこと本氣で言つてるのかい……。

松三（娘の强い言葉にのまれてぼんやりしてゐる）

主婦　ときちやん。

とき　父つあん、お前もう兄ちやんのこと忘れてしまつたのか、二十何年間育てた兄ちやんのことを。兄ちやんはそんな男ぢやない、人間百人も殺すやうなそんな惡黨ぢやない、兄ちやんは町でも一番やさしい氣の弱い男であつたんだ、人間どころか、蟲一疋殺すことの出來ない人だつたんだ。お前兄ちやんを床屋に弟子にやつたことを忘れちやつたのかい、お前よくそのことを兄ちやんの前で話したぢやないか「お前は弱蟲だつた、床屋へやつたら剃刀がこはいと言つて逃げて來た、仕方がないので吳服屋へ奉公にやつたんだ」つて……床屋の剃刀さへこはがつた兄ちやんが、どうして人間を殺すことが出來るんだ。

松三　……………。

とき　それだのに、兄ちやんを爪の垢ほども知らない町長の出鱈目を本當にしてありがたがつてる……勇士だ、軍神だなんてそんなこと皆嘘の皮だ。

松三　貴樣、町長さんまで毒づくのか。

とき　言ふとも。

松三　町長さんは俺等の恩人だぞ、五百圓の大金もらつたのを忘れたか。

とき　五百圓、兄ちやんの生命のかはりに……父つあん、お前その大金もらつてちつとでも幸福になつたのかい、毎日毎晩醉つぱらつて今ぢや文無しぢやないか、仕事をなげて漁舟や網はくさるし、その上世間からは乞食扱される、父つあん、お前それでも寂しくないのか、兄ちやんをとられ、仕事をなくし、それでちつとも寂しくないのかい。

松三　畜生ッ、町長さんの恩を忘れて勝手な熱吹きやがつ、そこ動くな、貴樣のやうな奴ぶち殺してやる。

（松三立上る。）

（町長と主婦それを取押へる。）

とき　いくらでもありがたがるといゝ、自分の娘がそいつの手に買はれかけてゐるのがわからないのか。

松三　何だと。

主婦　ときちやん。

とき　さうさ。……父つあん、町長は私を買ふ氣でお前に金をかしたんだ。

松三　畜生ツ。

（松三二人の手を拂ひのけてときを追ひかける。とき、外へ逃げ出す、松三よろめきながらつゞく。）

（風はげしくなる。）

（向濱にあたる浪の音がきこえてくる。）

（間。）

（松三登場。）

（戸口につゝたつ。）

松三　町長ツ。

町長　さあ、こゝへ來なさい、もう何も言はず二人でゆつくり飲まう。

松三　いやだ、今ときが言つたのは本當か。

町長　そ、そんな馬鹿なこと……お前あの金をさうとつちやこまるよ。

松三　馬鹿化すな、俺あお前の腹今漸くわかつたぞ、お前俺あの息子を何んて言つた……。

町長　そ、そりやお前……。

松三　何て言つた、今一度言つて見ろ。

町長　お前……ありや弔辭ぢやないか。

松三　嘘つき、貴樣、佛さまの前でべん／＼と俺をだましやがつたな。

町長　そ、そんなこと……。

松三　貴樣かほめた奴は俺あの息子でねえ。（近よる）貴樣俺あの息子何處へやつた。

町長　（狼狽する）そ、そんな……。

松三　俺の息子かへせ。

（町長逃げ出さうとする。）

（松三手をのばす。）

主婦　父つあん何するんだね。

（主婦松三を取押へようとして突飛ばされる、遂に町長に手がかゝる。）

町長　お、お前……。

松三　貴樣何處へ逃げる。

町長　わ、私は作踊へ……。

松三　ときをつりにか。

町長　いや、いや、濱、濱へ行く……。

松三　濱へ行く、よし一緒に行かう、俺あの息子をさがしに一緒に行かう。

町長　そ、そんな無茶なこと……。

松三　いや行く。さがしに行く、濱へでも海へでもさがしに行く、さあ來い（ひきずり出す）若しみつからなかつたら、貴樣を海へたゝきこむぞ。

（松三、町長をひきずつて退場。）

（主婦おそれてぼんやり見送る、外の松三の荒々しい聲を消して、風と浪の音次第にはげしくなる。）

―― 幕 ――

（一九二四、一〇、一〇）

盗　電（一幕）

人

みすぼらしい男
女
太つた人
女中

時

現代四月の下旬

處

瀟洒な洋室

幕あく。
瀟洒した住み心地のよささうな洋室。
みすぼらしい男登場。女後から追ひかけて來て男をさへぎる

女　こんな所までのこ〳〵入りこんで來てどうするつもりです、お前さんは女許りと思つて馬鹿にしてゐるんですか。

男　ごめん下さい、奥さん、私はこんなことはしたくないんです、全く厭なこつてす。けれども、さうしなければ私は生きて行く事ができないんです。

女　だからさつきから云つてゐぢやアありませんか、そんな事はないつて……。

男　ごめん下さい、奥さん……。

（彼は女を輕くのけて電燈のぶら下つてゐる所へ行く。）

女　ま、なんて圖々しい男だらう。

男　（電燈の球を調へ乍ら）いゝえ奥さん、私は決して圖々しい男ぢやありません、私はたゞ自分を可哀さうな男と思つてゐます、他人に不快を與へるこんなことまでして生きて行かなければならないんですから。（電球を調べ終つて）何でもありませんね。でも會社ではかう云ふんです、あすこの家は實に狡るい、四五回見つかつてゐるくせに徇こりずに盗電する、お前今日行つてみつけて來い、みつけて來なかつたらお前を馘首にするぞ……かうです奥さん、私は馘首になると明日から路頭に迷はなければなりません、全く可哀さうな男です。

（周圍を見廻す。）

女　もういゝでせう、盗電してゐないことが分つたでせう、さあ歸つて下さい。

男　歸れと仰有るんですか、いゝえまたなか〳〵歸ること

は出來ませんよ……。

女　こんなに調べてまだ疑つてゐるんですか、この外に室なんかありませんよ。

男　そりや分つてゐます、この位ですむなら、私の仕事も樂です、だがこれからもつと辛い事が殘つてゐるんです。

女　え、これから。

男　さうです奥さん、會社ではかう言つてゐるんです、盜電は貧乏人に少なく反つて知識階級と金持の方に多い。無理もないこつてす。知識階級の人は九ポイントの本を讀まなければならないし、金持の人は細かい數字書類を讀まなければなりません。その點終日働く貧乏人は、夕飯を食べると疲れてすぐ寢てしまふから盜電する必要がないんです。

（歩き出す。）

女　何處へ行くんです。

男　何でもありません奥さん、ところで私達にとつて一番困ることは金持の家です、知識階級の家では電球をかくすにしても本箱の隅ツこ位ですが、金持の家ではこの通りたくさんのかくし場所を持つてゐます、それを發見することが一番難しいいやな仕事なんです。

女　まアあきれた、ぢやお前さんは私のところで何處かへ電球をかくしてゐると思つてゐるんですか。

男　この前は何處へかくしてみつかつたんですか。

女　（無言）

男　もう一月もたちますから……この室は毎晩おつかひなさるでせう。

女　ええ

男　それなのに電球を見ると昨夕つかつた模樣はありませんね。

女　三日ばかり使はなかつたんです。

男　三日間！　三日間ゐらつしやらなかつたんですか。

女　（無言）

男　いや何でもありません、ところが三日どころぢやありません、あの電球を見るとまだ一度も使つたことがないやうに思はれるんです。

女　（無言）

男　奥さんどうぞ私のすることを許して下さい。

（男棚の方に行かうとする。）

女　お、お前さん。

男　いゝえ何でもありません。

（女のさへぎる手を輕くはらつて棚に近づく。）

女　何をするんです。

男　奥さん、失禮ですがこの棚をあけてくれませんか。

女　いけないく。

男　おや私がお開けませう。

女　お前さん何て亂暴なことをすんです。

男　でも奥さん、この前はこゝから五十燭の電球が出た筈です。

女　いけないッ。

（男棚を開き、大きな球を發見する。）

男　同じ所へ入れて置くなんて正直すぎますね……奥さんどうぞ心配しないで下さい、この位のことは誰でもしてゐるんですから。全く厭なこつてす、全く厭なこつてす、私はむしろ貴方にお詫びしたい位です。

女　（無言）

男　奥さん甚だ失禮ですが私に紅茶を一杯おごつて下さいませんか。

女　紅茶を？

男　咽喉がかわいて……さつき臺所の電燈を調べてゐる時女中さんが入れてゐるのをチラと見たんです。

（彼女は呆れて椅子に腰を下す。）

男　あゝくたびれた、失禮ですが一寸休ませて下さい。

（彼は彼女と向き合つた椅子に腰を下す。）

女　まあ。（彼女は驚いて立上る）

男　何をそんなに驚きなさるんです。

女　（無言）

男　成程……あなたの怒りに充ちたその美しい眼を見るとよく分ります。あなたはいつもあの人を見る椅子に、私のやうなみすぼらしい男を見たのでびツくりされたのでせう、だが奥さん、もつとよく見て下さい、聰明なあなたの心の眼で……ひよつとしたらいつもあなたがこの椅子に見る立派な太つた人は、本當はこんなみすぼらしい姿をしてゐるかも知れませんよ……そりやさうと紅茶は冷めないでせうか。

女　どうならうとお前さんが心配する事はないでせう。

男　私は非常に喉がかわいてゐるんですがね。

女　…………。

男　仕方がありません、この葉卷を一本いたゞきます。

女　（無言）

男　かう云ふ舶來ものは私の舌には勿體ないんですか。

（女は決意の色で男と向ひ合つた椅子に坐る、そして男のすることをヂッと見つめてゐる。）

（男は葉卷に火を點ずる。）

男　これは獨逸から來たものらしいな……いゝ匂ひですね……（むせんでひどくせきこむ）こ、これです、これです、貧乏人が金持の眞似をするからすぐこんな醜態を演ずるんです。何でもすぐお腹に入れようとするんですから。（輕く笑ふ）

女　（可笑しさをこらへてぢつとしてゐる）
男　全くいゝ匂ひです、……それにかう紫色の烟がゆらゆら上つてゐるさまは實にいゝ氣持ですね、……アルト・ハイデルベルヒ、獨逸……奥さんあなたは獨逸の哲學を知つてゐますか。
女　そんなものは知りません。
男　私も知らないんです、しかし哲學はドイツが本場ださうですね、それにビールも本場だつて云ひますよ。日本のビールよりずツとうまいさうです……あゝビールをのみたいな、せめて紅茶でもいゝ……。
女　お前さん。
男　……………。
女　お前さんは用もないのにいつまでぐだらないことを喋つてゐるんです、……用がすんだらさつさと歸つて下さい。
男　……………。
女　それとも外にまだ用事があるんですか。
男　奥さん、私はさつきから、この五十燭光の電球をどう處理したらいゝかと迷つてゐるんです。
女　お前さんは何て煮え切らない惡黨だらう、餘計な事を言はず何故ハッキリ言はないんです。
男　奥さん。
女　わかつてますよ、お前さんは女ばかりと思つてゆすりに來たんだ。
男　とんでもない。
女　私はね、お前さんのやうな惡黨に、ゆすられて、こはがるやうな女ぢやありませんよ。お前さんがはなからさうと正直に云つてくれたら、私は財布をそつくりお前さんにやつたかも知れないよ、だけどかうなつたら鐚一文だつてやるものか。……電氣屋さん、家ではたしかに盜電してゐました、さあ早くその證據品を持つて警察なりどこへなり訴へておくれ。私、私も……。
男　（立上つて）奥さん、奥さん、一寸お待ち下さい。そりや貴方の邪推といふものですよ。（間。腰を下し乍ら）なぜもつとよく私を見てくれないのかな……なるほど、私のやり方は圖々しかつたに違ひありません、あなたが今のやうにとつたのも無理がないことです。しかしそりやまだ本當の私を知つてくれないためです。奥さん、私はほんとうにいやな自分の仕事や盜電のことなんかを忘れてゐたんです。私は非常に幸福であつたんです、いや今でも非常に幸福です。私がかうして椅子に辷りこんで煙草をくゆらしてゐるのも、馬鹿々々しいお喋りをしてゐるのも、幸福な時を一分間でも長く味はつてゐたいためなんです。嘘ぢやありません、決して嘘ぢ

やありませんか。さあこの電球をあなたにお返ししませう、棄てるなり壞すなり勝手にして下さい。私はもうたくさんなものをあなたから奪つたのです、これ以上奪らうなんて惡い了見は露ほども持つてゐません。

（電球を女の方にやる。）

女　（男の氣持を理解することが出來ずボンヤリ眺めてゐる）

（間。女中登場。）

女中　（低い聲で）奥さん、紅茶がさめてしまひますが……。

女　二つとも、持つておいで。

女中　こちら（あの……）

女　お客さんのも持つておいで。

（女中不思議に思ひ乍ら退場。）

男　奥さん、失禮ですがもう一寸の間私をこゝにおいて下さい、私は決してあなたの御迷惑になるやうなことはしませんから。

女　（無言）

男　柔かい手觸りのいゝ椅子ですね、私はこんな椅子に腰かけたのは初めてゞす……（足をぶら〳〵させて）かうしてゐると子供の時のことを思ひ出されます。

（女中登場、紅茶をおいて行く。）

女　（無言で一つの茶碗を男の方にやる）

男　ありがたう。（二口で吞み干す）これで漸く助かりました

（短い間。男葉卷を燻らす。風に流れてオルガンの音が聞えて來る。）

男　オルガンが聞えて來ますね、（立上つて窓による。戸を開く）靜かな日ですな。晩春、春が逝く、あゝ、……眞つすぐに見える赤煉瓦の家はなんでせう。オルガンがあすこから聞えて來ますね。教會かな。あゝ分つた女學校だ……かうした窓から見る人生は少しの苦しみも惱みもなささうだ。（窓によりかゝつて女の方を向いて）奥さんあなたは東北の方ではありませんか。

女　（輕くうなづく）

男　越後でせう、きつと越後でせう。

女　（頭をふる）

男　違ひましたか、……私も東北の人間ですが私の國では今頃になつて漸く根雪がとけて、もう少し經つと櫻の花が咲くんです……五月の節句が眞盛りですよ。

女　…………。

男　奥さん、あなたはお國のことを思ひ出すことがありませんか。

女　時々思ひ出すことがありますよ。

男　さうですか、私は今頃になると故郷が戀しくつて仕方がないんです。今頃私の國は草履路と云つて、雪で浮められた土が春風を受けて生々とふくらんでゐるんです。そして夜になると子供ばかりでなく大人も子供も一緒になつて綱引をやるんですよ。
女　やはり。
男　毎晩のやうに……かうしてゐるとそのたのしい掛聲が聞えて來るやうな氣がします。
（間。）
女　あなたのお國は山ですか、それとも海に近い方ですか。
男　港です。
女　港？
男　だから男でも女でも氣が荒いんです。
女　河があるんですか。
男　あります、大きな河が。
女　大きな河。……それぢや河の氷が流れると、北海道から鯡船がやつてくるでせう。
男　さうです／＼。故郷の生活は食物に始まつて食物に終るんです、鯡で春が生れて來て雷魚で冬の暗い生活に入るんです。
女　雷魚？
男　奥さん、雷魚を知つてゐますか、鱈より品がよくて味の深い魚ですよ。
女　知つてゐますよ。
男　雷魚を食べなくなつてからもう十年になるな。……私の港では子供が波止場に上つた鯡や雷魚を盗んでも叱らないんです。女の子も交つて大ぜい出かけて行つたものです……そりや面白いものですよ、盗む道具は（手眞似して）五寸釘をつぶしてやすをつくつてそれを竹の先にくツつけて魚の頭をトンとつくんです。私などは盗み方のうまいのでほめられたものです。……ところが私よりうまい奴が一人ゐたんです、それがどうです女の子なんですよ。
女　………。
男　きれいなお轉婆娘でした。家は裏合せであつたが私とは大の仲よしであつたんです。しかし盗みをする時だけは、二人ははげしい競爭をしたものです。それでとうとう或るとき、喧嘩して私はやすで女の顔に疵つけたんですよ。大變な騒ぎでした。
女　（びつくりして頬のあたりへ手をやる）
男　（その樣をチラと見て歩き出す）子供の頃は全く面白かつた……（口笛を吹く）
女　（男の姿を凝つと眺め乍らつぶやく）あの人かしら……まあなんて變り方だらう……いや、ちがふ／＼、あの

人はこんなに年をとるわけがない。

(間。)

女　お國は大きな河が流れてゐると言ひましたね。

男　(女の方へふり向いて) え、さうです。

女　あなたの生れた處は川端なんですか。

男　さうです。

女　波止場には白壁の米倉が並んでゐるでせう。

男　え、え。

女　その米倉から火の出たことを御存じですか。

男　火が……火事のことですか。

女　さうです、保險金を取るために。

男　知りませんね、そりや私のとこぢやないでせう。

女　そんなら鍛冶屋を知つてるでせう、角の鍛冶屋を。

男　えゝ知つてゐます。

女　その裏合せに駄菓子屋があつたでせう。

男　奥さん……。

女　(立上る) あゝやはりさうだつた。

男　奥さん。

女　いゝえ信さん私です私です、私はあなたが頬に傷つけた鍛冶屋の娘ですよ。

男　………。

女　あなた(傍による) 信さん、あなたは隨分變りましたね。

男　(寂しく笑ふ)

女　信さん……。

(かう云つて女は感動して男の手をとる。)

(それからふり向いて眼へ手をやる。)

(やがて椅子に伏してすゝり泣く……。)

(間。太つた人あわたゞしく登場。)

太つた人　(怒つた聲で) こらッ。

(間。)

男　あなたはこゝの御主人ですか。

太つた人　貴樣は誰の許しを得てこゝにはいつて來たんだ。

男　これは何です。(卓上の電球を指す)

太つた人　(はッとする)

男　あなたは又盜電してゐますね。

(ト淋しく笑ふ……。)

―幕―

牝　鶏（一幕）

人　物

東　助
と　き
お　銀
よ　し
謙　吉

春の黄昏近く
東北にある湖畔の百姓家

舞　臺

春の黄昏近く、開けつぱなしした廣い土間から美しい八郎湖の景色がみられる。
謙吉が土間に蹲つてゐる木臼に腰かけて、湖の方に眼をやりながらぼんやり考へこんでゐる。近くにお銀が立つてゐる。
間――。
遠く湖面を帆かけた小舟が、のんびり通りすぎる。

蛙の聲。

謙吉　なあ、銀。
お銀　（顔をあげる）
謙吉　一そう二人で逃げるか。
お銀　逃げる……何處さけ。
謙吉　北海道へでも。
お銀　そたつて……さうすりやお前とこのおつ母一人のこされて困るすべ。
謙吉　そだもおつ母が悪いんだから仕方ねえべせ。
お銀　そだつてお前は一人つきりで後繼だものな。
謙吉　そんなこと言へや、お前だつて後繼の一人娘ぢやねえか。

（一寸の間。）

お銀　おらとこはおつ母も折れかけてゐるんだから、お前のおつ母さへうんと言へや圓くをさまるけどもな。
謙吉　いくら口を酢つぱく言つても耳の傍へ寄せつけねえ、一人息子と一人娘に祝儀ならねえ、赤坊の十人も生お腹の強え女でなけやもらひたくねえ……これだものな。
お銀　おらを不生女と思つてゐるのだべか。
謙吉　お前のおつ母一人しか生まねえのでそんなこと言ふのだや。

お銀　お前とこだつて一人だすべ。

謙吉　それだから何のこといけねえとつつぱるのだや、馬鹿馬鹿しくつて話にならねえ……赤坊の十人も生んでみろ、佐助とこのやうに口干えあがつてしまふべえ。

（一寸の間。）

お銀　それ言ふだや、逃げることは止められえさ……それにおら身體の具合も悪るいし。

謙吉　そんなこと言つてたら二人の仲いつ割かれるか知れねえや、おつ母はな、もう方々へ口をかけておめの嫁さがしてゐるのだや。

お銀　ほんとけ。

謙吉　だなお銀、おつ母をおとすだけでいゝから逃げるべ、北海道はやめにして土崎港の親類へ逃げて行くべ、そしたらおつ母膽をつぶしてさがしにくるにちがひねえよ。

お銀　そんなら狂言に逃げるのけ。

謙吉　だつてお前ほんたうに逃げるのいやだつて言ふもの。

お銀　それもいゝけどお歸つてから村の人に恥しいすな。

謙吉　お前のやうなこと言つてたら、いつまでたつても一緒になれねえぞ。

お銀　なあ謙ちや、おつ父にそのこと相談してみるべか。

謙吉　おつ父に。

お銀　おつ父は初めから二人の味方だし……それに昨夕何もかもうちあけたからねは。

謙吉　そんなこと、いくら人のいゝおつ父だつてうんと言ふもんだて。

お銀　うゝん。きつと相談にのつてくれると思ふすて。

謙吉　だだつておらなんとなく心配だな。（立上つて彼女の肩に手をやる）なあお銀ちや、それより黙つて逃げて行つてくれねえか……な、な。

（一寸の間。）

（突然けたゝましく三四羽の鷄の悲鳴聞えてくる。二人はおどろいて身をひく、悲鳴つゞく――。）

お銀　犬だべ、な……おらみとこらしいから見てくるすて。

（彼女は狼狽てゝ駈け出して行く。）

（悲鳴つゞく――やがてそれがコ、コ、コと啼く聲に變つて行く。謙吉の母親登場。）

よし　鷄お金切聲出してゐたがどうしたのだべ。

謙吉　おらのとこでねえ、隣の鷄だす。

よし　さうけ。

（外へ出て行く、トウ、トウ、トウと鷄を呼ぶ聲が聞えてくる。）

（間もなく再び登場。）

よし　謙、白のミノルカ一羽見えねえや。

謙吉　あいつまた隣へ行つてるかも知れねえな。
(出て行かうとしたところへ、お銀の母親登場。手に白色の牝鷄をぶらさげてゐる。牝鷄の足は繩でぐるぐるしばられ、恐怖のためもう聲も出ない。)
とき　お晩になつたす……おや、謙ちや、おつ母ゐねえすか。
謙吉　(無言)
よし　お銀とこのおつ母、お前手にぶらさげてゐる牝鷄おらとこのものでねえすか。
とき　おや、おつ母ゐたのけ……お晩になつたす。
よし　お前そのミノルカ何としたのけ……それぢやなんだな、今鷄さわいだなあ、犬でなくてお前のしたことだすな、人のとこの大事な牝鷄何の罪でそんなことするとこけ。
とき　おつ母、おらお前にきゝてえことあつて來たなだえ。
よし　おらにきゝてえことある……それよりなんしておらとこの牝鷄ひでい眼に合はしたか、それから先にきかしてもらふべ。
(この時お銀おそる／＼顏を出す。)
とき　おつ母、お前いつもこの牝鷄いゝ卵生むつて自慢してたねは。
よし　さうだとも、その牝鷄はおらとこの寶ですて、潟で一疋魚とれねえ日だつて、そいつの卵生まね日ない位だす……それがどうしたてけ。
とき　それ聞いておら安心した、謙ちや……(ふりかへつて)うんお銀もゐるな、今おつ母言つたことお前たちもよく覺えてゐれしや。
よし　なんしたとけ。お前おらとこへ來て裁判官のやうな眞似するねす。そんなえらさうな顏する前に、なしておらとこの牝鷄ひでい眼に合したか早く言へしや。
とき　おつ母、お前とこには牝鷄ばかしで牡鷄一羽もゐねえかつたねす。
よし　あえさ、そだばなんとしたてけ。
とき　鷄つてものは牡鷄ゐなくても卵生むのだすか。
よし　おやはあ、お前もずゐぶん阿呆なこと言ふものだねすか、髮に三叉さくいゝ年してそんなことまだ知らねえかつたのけ、論より證據、おらとこの牝鷄なぞ牡鷄ゐなくても卵生むすて。
とき　そりや牡鷄ゐなくても卵生むことは生まえさ、そだがそりや長くて一月か二月だすべ、いくら動物だつて半年も一人でおいて卵生むもだてけ。
よし　…………。
とき　おつ母、お前とこのおつ父死んでからもう一年以上にならえ、それからお前、男と名のつくものは犬の子も

見たくねえて、犬はくれてやつたし、牡鷄まで賣り拂つてしまつたすべ、それでゐてお前とこの牡鷄毎日卵生むなあなんとした理窟だどこけ。

よし　おら、そんな鷄の腹のことまで知るまだてが。

とき　嘘つけしや、お前はちやんと知つてるくせにとぼけるなだべせ、お前とこの牡鷄はな毎日おらとこの牡鷄とくついてるなだえ。

よし　そんなことおらの知つたことだてけ、眼をつけてる娘だつて若けえものとくつつく樣だもの、動物同志なにせうとおらのかゝはつたことでねえ。

とき　さうはいかねえおつ母、おらとこの牡鷄のおかげで毎日卵生んでるくせに、かゝはつたことでねえも、ねえもんだ、おらとこでも道樂で鷄飼つてるなでねえすて、お前とこの牡鷄わい〱ひつぱりにくるために、牡鷄の畜生、自分とこの牡鷄ほつぽりなげて毎日いたづらしてけつかる、おかげでおらとこの牡鷄一つも卵生まねえなだえ、おつ母よく耳ほつて聞けしや、お前とこで生む卵の半分はおらとこのものだえ。

よし　なんしたど、自分とこの牡鷄卵生まねえとて、おらの牡鷄になんくせつけに來やがつた、卵半分おらものだたんて、何處押してそんな音出てくるこの圖太い矢郎。

謙吉　おつ母。

（お銀も母親の傍へ行つて低聲でとめようとする。）

とき　（斥けて）默つてれしや……何どけ、おら圖太い矢郎だと、圖太い矢郎はお前の方だべせ、牡鷄も飼へがらねえで、おらとこの牡鷄で卵生ませるなんて大かたりだ。

お銀　おつ母、おつ母てば、みつともねえからやめてたんえ。

よし　何だと大かたりだ、お前こそ大かたりだべ……。

謙吉　おつ母。

よし　默つてれしや……やい、よく聞けしや、お前はおらとこの牡鷄ばかりに罪きせて惡口言ふが、お前とこの牡鷄たつておらの屋敷へ忍びこんで來てくつついてるぞ、それおや罪は五分五分だべせ、そんなに鷄同志樂しむなあ惡かつたら、監獄みてえに煉瓦塀でも築きやがれ。

とき　うんよく言つたな、これからお前とこの牡鷄おらとこへくるとすぐひねり殺してやるからさう思つてれしや。

（と、叫んで手に持つてゐた牡鷄を力一ぱい土間にたたきつける。謙吉はあきれかへつて臼に腰かけて頭を抑へる。）

よし　（狼狽てゝ牡鷄を拾ふ、ふつてみたり、耳をもつていつたりする）畜生ッ、よくも〱人んとこの大事な鷄ぶち殺したな……やい、おらお前がなんでこんなことした

かちやんと知つてるぞ、おらがお銀を嫁にもらつてやらねえ腹いせだべせ……誰がお前みていな情知らずの娘を大事な息子の嫁にもらふもだて、おらとこの嫁はな、この牝鷄のやうに赤坊どつさり生む娘でなけやもらはねでえ。

とき　なんしたど、人の娘になんくせつけやがつてもらつてみねえでそんなことわかるもだてが。

よし　もらつてみなくたつておらにちやんとわかてゐで、第一一人しか子供生まねえお前の娘ぢやねえか。

とき　さういふお前だつて一人しか生まねえべせ。

よし　そだから尚のことおらお前の娘なぞもらひたくねえ、おら今に孫の十人ももつてお前に鼻あかしてやるから眼をむいて見てゐやがれ。

とき　ふん、少し位田圃あるの鼻にかけやがつて口開けや赤坊のこつた、赤坊、赤坊つて十人も二十人も生んでみろ、佐吉とこみてえにすぐ口干あがつてしまふべせ。港ぢや赤坊を生まねえ藥大つぴらに賣つてゐる時勢たに、お前なんか天保錢に黴生えたも同じだ。

よし　なにおらとこ天保錢たと、罰あたり奴、赤坊生まねえ藥つかふ奴なぞ、お前みてえた淫賣婦だべせ。

とき　なに、おらを淫賣婦だと、さういふ手前こそ淫賣婦だべせ、亭主死んだあとたにしたかおら皆知つてるぞ。

お銀　おつ母てば、おつ母てば。（母をひつぱり出す）

よし　畜生ッ、畜生ッ、手前のやうなごろつき出て行きやがれ、一刻も早く出て行きやがれ、この猿鍋！

とき　（娘にひつぱられながら）出て行くとも、出て行くともこの糶相、よく耳をほつて聞いておけ、おらとこの牝鷄たます奴一羽のこらずぶち殺してやるから覺えてろ。

（娘にひつぱられて退場。）

よし　（戸口まで追ひかけて行つて）畜生ッ、お前とこの牝鷄もな、おらの屋敷へはいつてくるとぶち殺してやるから覺えてろ、（ひつかへして來ながら）なんて業つさらしの畜生た、嫁にもらはれえ腹いせに亂暴こきに來やがつた。（死んでゐる鷄をひろひあげてふつてみる）とうとう息絶えてしまつた、畜生ッ、覺えてゐやがれ。

（謙吉は無言で考へこんでゐる、潮は次第に夕陽に染つて行く。）

よし　謙、お前今の有樣見てゐながら、なんして默つてゐたとこげ。

謙吉　（無言）

よし　（鷄をほうつてやる）これ見れしや、大事なミノルカもう死んでしまつたえ。

謙吉　（無言）

よし　おら、今こそお前にはつきり言つておく、あんなごろつきの娘、お前がいくら惚れてゐたつて、嫁にもらはねえからさう思つてゐれしや。
（と、言ひきつてよしは室へあがつて爐へ粗朶をくべる、晩の仕度にかゝつたのである。）
（短かい間。）
（この時隣家の方で鶏が鳥小屋で呼ぶおだやかな東助の聲が聞える。）
謙吉　おつ母。
よし　なんだえ。
謙吉　おら、お前の言ふとほりお俱を嫁にもらふたあ止めるす。
よし（奇異に感じて顔を向ける）
謙吉　そのかはり、おら明日この家を出て行くからそのつもりでゐてたんえ。
よし（ぎよつとする）　家を出て行く。
（間。）
よし　女に違つて親を捨てゝ氣か……勝手にしれしや。
（沈默。）
（彼女はしきりに粗朶をくべる、涙がながれおちる。）
つゞて嗚咽となる。）
（そこへ東助がお俱をつれて登場。手に褐色の牝鶏を抱いてゐる。）
東助　お晩になつたす。
よし（チラと眼をやつたが無言でゐる）
東助（近づいて、謙吉とこのおつ母、お晩になつたす。
よし（仕方なしに）　東助さんけ、何用だす。
東助　おら今お俱から話聞いてお前さんとこへ謝りに來たのだす。
よし（無言）
東助　おらとこの奴、短氣でどういふわからねえもんたから、とんだことしでかしやがつて。（ふと土間に蹲つてゐる鶏の死骸をみつける）おつ母、面目ねえす、大事な牝鶏殺して面目ねえす。
よし（無言）
東助　こんなこと言ふと、お前氣を悪くするか知らねえが、おらとこの牝鶏、こいつかはりにとつてくれねえすか。
よし（やゝ強く）　そんなものいらねえす。
東助　さう言はないで……まあ顔を立たうお勘辨して、とうかかはりにとつてやつてたんえ、さうでねえとおらの心すまねえのだす。
よし　おつ父。（泣聲に變る）お前とこのおつ母あんまりだすて……。
東助（無言）

よし　文句言ふことにことかいて鷄のこと持出すなんてあんまりだす、おらとこの牝鷄生む卵半分自分とこのものだなんて、あんまりひでえ言草だすべ。
東助　すまねえす、ほんたうにすまねえす。
よし　そりやおらとこには牝鷄がゐねえから、あゝいふ理窟こねられたつて一言もないけれど、おらとこの牝鷄だつていつもお前とこへ行くわけでねえすて、隣の喜作とこへだつて遊びに行くからねす。
東助　さうだす、さうだず。
よし　してみりやおらとこの牝鷄生む卵半分お前とこのものだとは限らねえすべ。
東助　さうだす、さうだす。
よし　それをお前とこのおつ母、屁理窟ならべておらとこの牝鷄ぶち殺すなんて、あんまり無茶なやり方だすべ。
東助　ほんたうだす、おつ母の言ふとほりだす、全く面目次第もねえす、なあおつ母、おらこのとほり手をついて謝るからあいつのしたことなんか勘辨してたんえ。
よし　（泣きながら）それにな……お父おらお前のおつ母からひでいこと言はれたすて、謙の前で、自分の子の前で……。
東助　（無言）
よし　おつ父よく聞いてたんえ、おら亭主に別れて一年しかならねえが、いつ男狂ひしたことあるす、何處の男とおらくつついたことあるす。
東助　そんな馬鹿なことあるもだてけ。
よし　だのにお前のおつ母、おらとこを淫賣婦だと言つたすて、謙のゐる前で男狂ひの淫賣婦だと言つたすて。
東助　なんて馬鹿だべ……なあおつ母、氣を惡くしねでたんえ、おら隣りに住んでゐてお前がどんなことしてゐるか、何でもちやんと知つてるからねす、あいつ腹立ちまぎれにそんな出鱈目言つたのだすべ……まあ今度のことは何もかも、おらにめんじてゆるしてやつてたんえ。
よし　さうおつ父のやうに言つてくれりや、おら何も文句言ひたくねえけれど……おらお前とこのおつ母、なんであんな亂暴こきに來たかみんなわかつてゐるのだす。
東助　（無言）
よし　そだけれどおつ父、後繼同志緣組できなけや致方かねえがすべ、それにな、いつかも言つたやうに嫁もらふなら赤坊の五人も十人も生む腹の强え娘ほしいのだす、さうでなけやおら死んで行つておつ父に顏向けできねえす、お前も知つてるとほりならそのことでおつ父からどんなにいぢめられた知れねえからねす……。
東助　（無言）
よし　それだのに、おらこんなに心配してるのに（急にヒ

ステリックに泣き出す）おつ父、おら死んでしまひていす。

東助　おつ母、何うしたす、急にお前どうしたのだす。

よし　聞いてたんえおつ父、謙の矢鱈おらをふんなげて出て行くつて言ふのだすて……。

（間。）

東助　おつ母、おらもな、今お銀からさう言ひ出されて困つてゐるのだす。

よし　（おどろく）

東助　おつ母なんとだすべ、お前もう一度考へなほして二人を一緒にしてやつてくれねえすか。

よし　（無言）

東助　この頃おやおらとこの奴も折れてるし、それにな役場の方だつて何とでもなるからねす、おらの方おやも三番目か四番目の孫を後繼にもらへれば外に文句ねえのだす。

よし　そだつておつ父……。

東助　いやおつ母、おらお前の心配よくわかつてゐるす、そだか一人娘は赤坊生まれえときまつてゐるもんでねえすて……かうなつたらおらみんなぶちあけて言つてしまふが、おつ母、お銀はな、もうたゞの身體おやねえのだすて。

よし　え、そりやほんとうけおつ父。

謙吉　（おどろいて顔をあげる）

東助　おらも昨夕お銀から聞かされておどろいたのだす。

よし　お銀ちや、お前そりや本當け。

お銀　（うつむいてうなづく）

よし　（晴々）そりやまあ目出度いすな……いつ頃からだす。

東助　正月からだと言ふこつたす。

よし　正月から（指を折る）まあ、さうと知つたらなんして今まで默つてゐたどこけ……謙、お前今までなんしてそのことおらに言はねえかつたどこけ。

謙吉　（答へやうもなし）

よし　馬鹿だな……おつ父、さうと知つたら、おらお銀ちやを謙の嫁にまらふすて。

東助　おつ母、そりやほんたうけ。

よし　ほんたうだとも、早くさうとわかつてゐたらおら何もつべこべ言ふのでなかつたす……あ、よかつた／＼、おらこれで背負つた荷をおろしたやうないゝ氣持だす。

東助　ありがてい／＼、おらも生命助つた思ひだ……それでおつ母。お前おらとこの奴したことゆるしてくれるすか。

よし　なんの牝鷄の一羽二羽、おら何も言はすきれいに仲

直りしるす。
東助　さうけ……お銀走つておつ母を呼んで來い。
お銀（嬉しさうに飛んで行かうとする）
よし　待てしやお銀ちや、（立上つて）おらの方から出かけて行くす。
東助　いや、そりや、いけねえ。
よし　その方がいゝし、二人を留守してもらつておつ父とおら出かけて行かえさ。
東助（さとつて）あ、それぢやさうしてもらふべか、おつ母、この牝鷄……。
よし　水くせいすておつ父、はなしてやれしや。
（と、言つて土間に下りて行く、ふと死んでゐる牝鷄をみつけて暗い氣持になる、がすぐかへつて。）
よし　なあおつ父、丁度幸だからそいつつぶして内祝言さするべか。
東助　そりやいゝ考へだすな。
よし　さうすべ、謙それをこしらへておけしや……お銀ちや、おらおつ母と直してくるから謙と留守してゐてたんえ。
お銀（うなづく）
東助　謙ちや、一寸行つてくるす。
（東助。よし退場。お銀は二人を外までおくる。）

（間。）
（お銀は歸つて來ない、謙吉は狼狽てゝ戸口まで行つてみる。）
（ふと、かくれてゐる女をみつけて名を呼ぶ。）
謙吉　お銀ちや。
（お銀恥しげにそつと登場。）
（間。）

——靜かに幕下りる——

天上の罠（五場）

人物

作者
女優
紳士
女給甲　ある女
女給乙
支配人　子供のやうに小さい
巡査甲　子供のやうに小さい
巡査乙　子供のやうに小さい

第一場

女優、作者。
書斎、今様風。
ぶら下つてゐる白い絹、[illegible]
女優椅子に腰かけてゐる。
作者登場。

作者　今日は……。
女優　あら先生……私こんな風をして。
作者　（一寸狼狽して）こ、これは、失禮……今電話下すつたのはあなたぢやなかつたんですか。
女優　私ですわ……私先生がこんなに早くゐらつしやるとは思はなかつたものですから……。
作者　電話では今すぐと言ふことでしたから。
女優　目黒まで三十分、それからバスで廿五分、下りて歩いてゐらして五分、たつぷり一時間かかると思つてゐたんですわ。
作者　僕は自動車(タクシー)で飛んで来たんですよ。
女優　あら自動車(タクシー)で、まあ大へんでしたわね、あんな遠くでは……。
作者　いや、なんでもありません……あなたの電話があまり嬉しかつたんで夢中で自動車を飛ばして来たんですよ。
女優　あら……私御迷惑ぢやないかしらと、心配したんですわ、でもぜひ先生にお眼にかゝつて教へていたゞきたかつたものですから。
作者　迷惑なものですか……ただ僕は脚本は書いてゐるが、演出の方は少しも經驗ないんで……。
女優　そんなことありませんわ、私の考へではその作品を一番解る方は、やはり作者だと思ひますわ。

作者　そりや、まあさうです。
女優　一場面のある女の扮装(つくり)はこんな風でいゝでせうか。
作者　……結構です……なるほどこりや僕が想像してゐた女とそつくりです……寝臺がある、靴下がある、舞臺もこれで充分です。
女優　では先生、すぐ教へていたゞきますわ。
作者　え。
女優　先生、男の白をつけておやりだい……おぼえてゐらつしやるでせう。
作者　（どぎまぎして）え、まあたいていは……。
女優　では始めますわ。（本を見ながら）前の方は樂ですからぬきませう（寝臺へ腰かける）足をぶらん／＼させる……これはどういふ氣持でせう。
作者　……そこは男を輕く嘲笑する氣持です。
女優　では始めませう……まあ、私があなたを愛してゐると思つてゐるの。
作者　（甚だまづく）君が僕を愛してゐる、そんな馬鹿なことを考へてゐるものか。
女優　あら、その時男は女とならんでゐるでせう。
作者　え、え。
女優　先生にそこへつゝたつて仰られたんぢや實感が出ませんわ。
作者　そ、そりや……。
女優　ならんで腰かけて頂戴。
作者　でも、僕はとても……。
女優　なんでもないぢやありませんか。
作者　そりやさうですが。
女優　でなければ、ほんたうに教へて頂けないんですもの。
作者　どうも二人つきりの室では……。
女優　あら、かへつて邪魔がなくつていゝでせう。
作者　ところが僕すぐ昂奮するたちですから、ひよつとすると……。
女優　まあ、先生は私を誤解してゐらつしやるんですね。
作者　と、とんでもない。
女優　ずゐ分だわ、私は何も先生に愛して頂きたいためにこんなことをしてゐるんぢやありませんわ、先生のお作をよく演出したいためにお願ひしてゐるんですわ。それに……。
作者　そ、そんな馬鹿なことがあるものですか。……やりますよ、やりますよ。（女とならんで腰をかける）
女優　ではさつきのところから始めますわ……あら、どうしましたの。
作者　（少しふるへながら）昨日から少し風邪氣味なんです……いやかまひませんや、やつて下さい。

女優　では痛みますわ……まあ私があなたを愛してゐると思つてゐるの。

作者　君が僕を愛してゐる……そんな馬鹿なことを考へてゐるものか。

女優　でもあなたの眼がさう言つてゐるぢやありませんか。

作者　僕の眼が……。

女優　その二つの眼が……それとも嘘ですか。

作者　……。君は僕のこの眼が何を考へてゐるのか知りたいのか。

女優　知りたいなんて思はないわ。わかりきつたことを。

作者　わかつてゐるものか、（手をとる）おい、僕が毎日毎日何をやつてゐたか今君に知らしてやらう。

（不意に女優に接吻する――恍惚の状態。）

（次の女優の白は現實と芝居の雙方にかゝる。）

女優　（不自然に）まあ、なにをするんです。

作者　（不自然に）君と僕は初めの約束通り生死をともにするんだ。

女優　畜生ッ、なにをするんだ。

（女抵抗する途端に脚下で頸をしめられて倒れる、金屏風の陰から紳士出る。）

紳士　まあ、お疲れさま〱、立派なお作です、立派な出來榮です。（手を握つてふる）

作者　（呆然としてゐる）

紳士　どうしました、そんなにお疲れでしたか、いや、何しろ結構なお作でありましたから……開演したら連日大入をとるでせう……お目出度う、あなたのためにも私のためにも。

作者　あ、あなたはとなたですか。

紳士　さう、さう… 私はこれ劇場の仁科欣十郎ですよ。

作者　社長の……。

紳士　さう、それから彼女の保護者（パトロン）といふわけです。どうも、私のやうに人生に倦怠を感じてゐるものにとつてはアブノーマルな刺戟に酔はないと、興行といふ荒い仕事はつづけていくことはできません、ところで、あなたのお作は、そしてあなたに稽古をつけていたゞくことは、私の二つの心を賑はしてくれるんです、私の變態性と、利潤を好む心と……から、何もかもぶちあけてもあなたは決して私を輕蔑したり、或はまた憤りを催すやうなセンチメンタルな作者でないことを私は充分洞察してゐます、さういふ方でなかつたら、決してかういふすばらしい特異な作品をお書きなさる筈はない……とまあ考へたので、ふと今日の餘興を思ひついたのです。非常に結構な出來榮です、私の永年の經驗でお作の大成功は最早疑

ひありませんよ……さて、（時計を見る）もう正午ですね……かうしませう、あなたのすぐれたお作のため、彼女の成功のため、更に私の滿足のために乾杯しませう。（倒れてゐる女の傍に行つて）仙子さん、三人連れで何處かへ御飯を食べに行かうぢやないか……（ゆり動かす）どうしたんだ、幕はとうに下りたんだよ、舞臺の上でのんきに眠られちや困りますね。……おやこれは變だ……君、君、君はほんたうに仙子さんを殺したんぢやないかね……あッ、呼吸(いき)がとまつてゐる、水、水を早くもつてきてくれ。

（作者。おどろいてうろ／＼する。）

（紳士は眞劍らしく人工呼吸を始める。）

――（舞臺まはる）――

第二場

斷崖――夜。

紳士と作者に互にピストルを手にして立つてゐる。作者は苛々して歩き廻る。

紳士　……あなたは大變昂奮してゐますね、おちついて下さい、おちついて下さい……そして今一度私の問に答へてくれませんか、私は決してかうした殺伐な流行を好んでゐるものではない、人生に對する私の理想はあらゆる感傷に眼を閉ぢること、そしてたしかな理智の眼で秩序を守ることです……。

作者　今となつて君は何をくど／＼弁じ立てるんだ、こんな場合人生に對する君の理想など坊主の寢言にも價しない、今僕たちは短銃を握つて對峙してゐる、そこで必要なことは、手早く生死をきめることだ。

紳士　いや決してあなたと爭ふことをおそれてゐるんでない、がそれは不得止ない時の手段です、ところで二人の場合は決して避けられない途ではない、あなたの答へに依つて禍をとりのぞいて二人は兄弟以上の親しい間となれるかも知れない、そこであなたがおちついて今一度私の問に答へてくれるやう私は望んでゐるのです……あなたはあの女を愛してゐたんですか、それとも愛してゐなかつたんですか。

作者　君がもう二度ときかなくてもいゝやうにはつきり答へておかう、僕は、あの女を愛してゐたんだ。

紳士　困りますね……なぜ、そんな答へをなさるんです。

作者　君が秩序を守らなければならないやうに僕は眞實を愛するのだ。

紳士　眞實……馬鹿々々しい、それが輕蔑すべきセンチメントですよ。あなたが眞に眞實を愛するなら私の問に對して答へたつていゝ筈でせう、すると二人はこんな馬鹿

馬鹿しい眞似をしなくたつてすむんです。

作者　君がこんな馬鹿々々しいことの發案者なんだ。君だらう。

紳士　私であつて、あなたです、ただ物事は冷靜に考へたければいけない、あなたがしめ殺したあの女は私の愛人であり共同者ですよ、何故眞剣の結果無意識にしめ殺したといふなら、私にも半ば責任のあることだから我慢できます、だが、嫉しさのあまり手に力がはいつて絞殺したとなると、私として默つてゐることはできますまい、しかもあなたは脚本にないのに女に接吻までしてゐる……と知つた紳士の矜持としてあなたに決闘を申込むのは當然でせう。だが、人間には過失といふ美徳がある、この美徳で醜い現實も充分許すことができる、だから君が若し前言を飜してくれるなら、二人はその美徳によつて和解でき、女の始末について充分御相談することができると言ふものです。

作者　そんなに和解したかつたら、君の方で紳士の矜持とやらをすてるといゝんだ。

紳士　ただ、事實をどうすることもできます、あなたは言葉をかへりやいゝが、事實はかへることはできませんよ。

作者　事實をかへたつて言葉の裏の眞實はかへられないんだ。

紳士　どうもかうもあるものですか、現代では言葉の裏の眞實など詮索してはいられません、ことに金と女の問題は一そうさうです。たとへばある女があなたに愛をつげたと假定します。だが、果して女があなたを愛してゐるかゐないかどうして知れます。言葉の裏の眞實なんてものは言つてゐる人間にさへ解らないものです、だから私には表面の言葉を信じるより仕方がない、と、言ふと如何にも矛盾に聞えるやうだが、矛盾の中に生きてる人間にとつてはこれもまた不得止ないでせう。くりかへして言ひますが、我々は感傷の涙を流さなければいけない、そして冷靜な頭で社會の秩序を保つことです、これが私の人生觀ですよ。

作者　人生觀……僕はこれ程と頭にくつつかない人生觀をきかされたのは生れて初めてだ。

紳士　或はさうかも知れません。

作者　馬鹿々々しい、君の言つてゐることは人生觀でも何でもない、何かの欲望をかくした勿體ぶりに過ぎない。しかも一番悪いことは今我々が大騒ぎをしてゐる女を君が少しも愛してゐないことだ……わかつたわかつた、要するに君は自分のアブノーマルな性情をよろこばすために僕に決鬪を申込んだのだ、ところが、さていよいよ決鬪となつたら急に臆病風に吹かれて、見えすいた言辭を弄して和解を申込んでゐるのだ。君は卑怯にとつて……前形の

一角でない、對立せる平行線だ、僕は今まで生きるためにおそれてゐた階級の意識をはつきり自覺することができたんだ。

紳士　するとあなたは感覺派の作家から急にプロレタリア派にかはつたと言ふのですか……なるほど面白いでせう、またさういふ飛躍もあり得るでせう、がさうなるともはや和解せうとする努力を私は棄てなければいけない。（時計を見る）丁度約束の十時です、もう何も言はず手取早く生死をきめませう。……言ひのこすことはありませんか。

作者　外にない……あの女に會つたら僕が死を賭してまで愛してゐたと告げてほしい。

紳士　なるほど……それぢや私もあなたに頼んでおかう、女に會つたら僕は愛してゐなかつたが、愛してゐたと言つてほしい。

作者　愛してゐなかつたか、愛してゐた？

紳士　さあ、行かう。

作者
紳士｝（短銃の手をあげる）一……二……三……。

（銃聲。紳士は倒れ、作者は氣を失つて斷崖からすべり落ちる。）

舞臺まはる

第三場

靜かな街路。

作者が木の枝にぶらさがつてゐる。

遠くから音樂がきこえる。

作者　……あ、苦しい。手がちぎれさうだ。……仕方がないもう一ぺんどなつてみようか。

おうい、助けてくれ！　誰か、早く助けてくれ！

………………………。

………………………。

何の答へもない……おや、何處かで音樂をやつてゐるな。畜生ッ、人が今生死の瞬間に置かれてゐるのに、あの奴等はのんきに音樂など樂しんでゐやがる……人生なんてこんなものだ、君は君、僕は僕だ、白々しいんだ、對立してるんだ、陽と陰、善と惡、苦と樂、あ、ます〳〵苦しい、そして生と死だ、その對立が僅かにこの二本の腕に支へられてゐるのだ。手をはなしてみろ、おれはまつさかさに無に落ちこんでしまふのだ。これが最後だ。人間の死だ……なんだ、それだけか、それで一切が終るのか。（笑ふ）ばか〳〵しい、愚にもつかない、我々が悩み苦しみ考へてきた人生の哲學は、この二本の手をつゝぱなすとそれで解決するのか。（再び笑ふ）……。

ほう今度はアニトラダンスだ、樂しさうだな、いゝな、闇の情熱、女の香ひ、おれはあの曲をきく度に野趣な戀を思つたものだ……さうだ、おれは内心あこがれてきた、ほんたうの戀愛、ほんたうの生活は、快活で、明るい、浮氣で善良で、そして美しい田舍娘と戀に落ちて家をもつて、子供を生んで、そして平凡に、一生をすごすことだつたんだ、ところが、おれはまちがつて文學を知つた、都會に醉ふた、汚らしい感覺、愚かな作品、女優にだまされ、首をしめて、決闘をして、今木の枝にぶらさがつてゐる、これがおれの情ない自叙傳だ、自らの本心に、生きなかつた、環境にひきずりまはされてきた、みじめな一生だ……。

あ、今一度若らしく生きてみたい、おれは都會の一切をなげすてゝ郷里に歸る。漁村へ歸る、おれはそこで踊るんだ、その娘と戀に落ちる、結婚する、子供をもつ、そして平凡に一生をおくりたい……畜生ッ、おれをこんなところへ落しこんだのはどいつだ、よし、おれは決して死なないぞ、あいつらを殺したのはおれではない、あいつら自身だ、おれには罪はない。おれは清淨潔白な身體だ……さうだ、もう一度やつてみよう、いや十度でも百度でも、力のつゞく限り、聲のつゞく限りどなつてやる、死力をつくして、死力をつくして、あの音樂を吹つけすほどどなつてやる。

助けてくれ！

おうい助けてくれ！

助けてくれ！

助けてくれ！

助けてくれ

助けてくれ

助けてくれ

助けてくれ

………………。

………………。

（次第に疲れて聲が小さくなる。）

なんて、あさましい聲だ。人間とは思へない、恥辱だ、恥辱だ……最も醜い人間の姿だ……畜生ッ、いま〳〵しい音樂だ、あいつが感傷を刺さなかつたら、おれはさつきの笑ひと一緒にこのくだらない人生をきれいさつぱりと見限れたんだ……苦しい、やりきれない、この分では全力をつくしても、三分と耐へきれない。よし、おれは最早生の執着をたつた、おれは悠々微笑して、地獄に轉落する。ところで、おれは遺言するんだ、天空に向つて遺言するんだ。

無線の聲を傳へる空氣の感覺！　おれが眞實に語る言葉

を誰かに傳へてくれ………………。

さて、諸君、僕は新らしい感覺派の作家だ。

新しい感覺とはなんだ。ノンセンスである、青空を樂しく、また、悲しくながれる雲である。

新感覺派は人生から遊離しそしてまた遊離しない。我々は地上に生き、地上に生れた、我々はこの人生を嫌惡し、しかも享樂する。

我々は青空を流れる雲である、我々は超然として、今日の醜き資本社會を侮蔑する、我々は決して資本主義社會が生み出すもろ〳〵の罪惡の共犯者ではない。しかも我々はその罪惡を嫌惡し、同時に享樂するのだ。

時に我々は爆發するか、その爆發は自慰に過ぎない、我々の弱さは常に青空をながれ、飛行機とたはむれ、電波と語るをたのしむのだ。

だが、諸君、僕等は、少くとも僕は、今日まで諸君をいつはり同時に自分をいつはつて來たことを告白する。それはかうだ、新感覺派の藝術は沒落する資本主義社會を反映する最後のブルジュア藝術であるといふことだ、だから我々の藝術は今日の社會と同樣早く亡ふことによつてその使命が果されるのだ……あ、苦しい……もう駄目だ……。

諸君、もうぢきに左樣ならだ……。

急げ、突進するんだ……。

諸君、僕は百圓を借財したんだ、なぜか、急行列車の進行中に美しい女に面會を求められたからだ。

人間は空氣に生きる、現代の空氣は貨幣で換算される。

我々は愛し合つたのではない。現代の空氣を感覺したのだ。やがて、女は僕に言つた（私があなたを愛してゐると思つてゐらつしやるの。）僕は答へた（君が僕を愛してゐる？　そんな馬鹿なことを考へるものか。）そこで二人の關係が、二人のために費された借財に支拂はれたのは當然である。僕は脚本を書いた、その結果として女優を締殺し、紳士と決鬪し最後にこの木にぶらさがつた……。

諸君、あらためて僕の姿を見てくれ、この姿こそ最もすぐれた新感覺派の藝術であり、今日の資本主義社會を反映する藝術なのだ。

資本主義社會は沒落する。

そして僕は死へ轉落する。

人生よ、左樣なら。

（と言つて兩手をはなしてベンチに滑り落ちて氣絶する。）

（間——音樂。）

（ふと眼をさます。）

ですよ。
作者　あなたは笑つてゐらつしやるんですか。
紳士　え、え、こゝであなたと會へて嬉しいんですよ。
女優　私も先生と會へてほんたうに嬉しいわ。
作者　それぢやあなた達は僕のしたことを憎んでゐらつしやらないのですね。
女優　あら、憎むなんて……私たちはいやな社會から早くこゝへ來たのをよろこんでゐるんですわ。
作者　よろこんでゐるつて……一體此處は天國ですかそれとも地獄ですか。
紳士　（笑ふ）とんでもない、宇津田さん、私たちには宗教は無權威でしたよ。
作者　私にはさつぱりわかりませんね。
紳士　なぜでせう。
作者　では、こゝは何處です。
紳士　新らしい神秘の社會ですよ、我々が生んだ靜かな逸樂の社會ですよ、こゝでは強い感情が禁物です。ほのかな感情と冷い理智の生活、そして最上の美德は秩序を守ることです。たとへばあなたが仙子さんを愛し、仙子さんと話したいと望んでゐると假定します、すると、その間、私は少しはなれた處で煙草を吸つて音樂をきいてゐりやいゝんです。（と言つて二人からはなれて行く）

女優　先生、私あの人からあなたの言づてをきゝましたわ、あなたは私を戀しさのあまり殺したんですつてね……さうきいて私どんなにうれしかつたでせう。私も一眼先生を見た時から愛してゐたんですわ。
作者　（ぼんやりふるへてゐる）
女優　まあ、どうして默つてゐらつしやるの、先生、私はこんなに先生を愛してゐるのに平氣でゐらつしやるのね。（作者の頸に手を卷いて接吻する）
（間。）
（紳士。近よつてくる。）
紳士　もうお話はすみましたか。
女優　え。
紳士　それぢや宇津田さん、これから料理店へ行つて三人で祝杯をあげませう……さう、さう、あなたに上演料を差上げることを忘れてゐました（ポケツトから財布を出して）どうぞおうけとり下さい、二幕上演料九百圓、これは協會規定の最高な筈でしたね。
作者　（ぼんやり受取つて）この社會にも金が必要なのですか。
紳士　勿論です、こゝは資本主義社會が生んだ新しい樂園です……さあ、行きませう。

舞臺まはる

第四場

あるカフェ。遠くから音樂がきこえる。
號外賣の聲次第に遠ざかる。
二人の美しい女給、號外を見てゐる。
作者、紳士、女優に卓子について葡萄酒を飲んでゐる。

作者　（やゝおどろいて立上る）　號外のやうですね、何か事件がおこつたのでせうか。
紳士　しッ……よくないことですよ、號外位でおどろくなんて……。
作者　（腰をおろす）　こゝでもやはり號外なんぞあるんですか。
紳士　我々の生活に必要なものはなんでもあります。
女給甲　（乙の肩からのぞいて）　やはり私の言ふとほりだつた、自殺にちがひないでせう。
女給乙　（讀みながら）　いゝえ自殺でないわ……ほら、斷崖からすべり落ちたとあるでせう。
作者　（おどろいて見る）
女優　（酒をつがうとして）　先生……他人の生活に眼をつけちや笑はれますわ。
作者　（杯をとつて）　やあ、ありがたう。
女給甲　（讀みながら）……それぢや喜劇の上手な作者ね。
女給乙　それがあの人たちには悲劇なのよ。
女給甲　そして私たちにはこの上もない喜劇なんだわ。
女給乙　明日の晩から始まるのね……前から場所をたのんでおかないととれないかも知れないわ。
女給甲　（讀みあげる）　第一場、エロテイクシーン……この場面でせう、作者が訪ねて來て女優の首をしめるのは……。
作者　あれはたれのことを言つてゐるんです……僕たちのことぢやないんですか。
紳士　困りますね、こゝでは他人の生活をみだすことは禁じられてゐるんですよ。
作者　でも、あの號外には僕たちのことを書いてあるにちがひありませんよ。
紳士　そこなことどうだつていゝぢやありませんか、私たちは今こゝで葡萄酒をのんでゐる、あの女たちは號外を讀んでゐる、別々の生活ですよ、こゝでは他人の生活を亂すことは許されてゐないのですよ。
作者　でも……。
紳士　あなたはこゝへ來てもまだ荒い感情をすてることが出來ないんですね……　仙子さん、もう歸りませう、（女給を呼んで勘定を拂つて立上る）　あなたはどうします。

作者　僕は少しこゝへ殘つてゐます。

紳士　くどいやうですが、こゝでは高い感情が一番の罪惡ですから氣をつけて下さい、左樣なら。

作者　…………。

女優　早く歸つてゐらつしやい、今晩は私一人ですから。

作者　……　……。

（女給乙、紳士、女優、退場。）

（作者、女給甲の傍に行く。）

作者　一寸の間、あなたとお話し願へませんでせうか。

女給甲　え、どうぞ。

作者　あなたは、今こゝで號外を讀んでゐられましたね。

女給甲　え。

作者　そのことをあなたにおたづねしてもいゝでせうか。

女給甲　え、どうぞ。

作者　今の號外はなんですか……何か大きな事件がおこつたのですか。

女給甲　いゝえ、こゝでは皆にとつて面白い事件を號外で知らせることになつてゐるんです。

作者　今の號外はどんな面白い事件です。作者が斷崖から何うしたとか……。

女給甲　まあ、あなたは惡い耳をもつてゐるんですね。

作者　さういふことをきいてはいけないんですか。

女給甲　きいて惡いのではなくて、言ふのが惡いのですよ。

作者　私にはこの生活がよくのみこめないのです。

女給甲　ぢきに慣れるでせう。

作者　であの號外には……。

女給甲　えゝ、ある劇作家が斷崖からすべり落ちてこの世界に來たんです。

作者　そんなことがこの社會の人には面白いでせうか。

女給甲　いゝえ……そしてその作家が筆と體驗で書かれた芝居が明晩から始まるんですよ。

作者　筆と體驗で書いた芝居が……それぢや作者が女優の首をしめるのですか。

女給甲　えゝ、そして第二場面は女優の保護者と決鬪するのでせう。

作者　一體、誰がそんな芝居をやることを許したんです。誰がそんな馬鹿げた……。

女給甲　あら、誰が許しなんかするものですか、たゞ皆がその芝居を見たがつてゐるだけですよ。

作者　皆が見たがつてゐる……するとこゝでは作者のゆるしがなくて勝手に改作したり上演したりするんですか。

女給甲　でも作者が芝居を書くといふことは皆が自由に上演してもいゝことでせう。それにこゝでは物事が交錯して神祕にうつるといふことが一番よろこばれてゐるんで

す、だから作者の筆になつたものと輿論と交錯して舞臺にのぼるといふことは、一番見物の喜ぶことなんですよ。

作者　僕にはわからない……しかし、その芝居を誰がやるんです。

女給甲　それはそれ自身自身で、女優は女優、紳士は紳士、作者は作者自身……

作者　おどろいた（急に立上る）なんですつて……。

女給甲　何うしたんです。

作者　（腰をおろして）そんな馬鹿なこと……でも、本人（女給甲）がいやだつたら何うするんです。

女給甲　そんなことはありませんよ。これまでもさうであつたし、今度だつてさうにきまつてゐますわ。

作者　でも本人がいやだと言つたら、それまででせう、本人の自由を奪つてまでさうするといふ事はできないでせう。

女給甲　あなたは何も知らないのね。

作者　…………。

女給甲　こゝには自由なんてものはないのですよ、それでいゝぢやありませんか、自由なんて人間の世界にかつてあつたことはないし今後だつてないでせう。

作者　新しい社會に自由がないなんて、僕にはまるで理解できない……そしてあなたたちは平氣で生きてゐられるのですか。

女給甲　えゝ、うるさい現世に生きるよりはずつと樂ですよ。こゝでは決して他人の生活に眼や耳を向けないのです、それに荒い感情をとめられてゐるんだから、何をしたつて平氣です、そして空氣がほの暖かく、自分の意志なんぞすつかり忘れて、適度の冷さをもつた秩序のまゝにうごいてゐると樂しい生活ができるんです、たとへば、あなたが私を愛して私にキスなさらうとしても、赤くなつたりふるへたりしなくなつてすむんです、かう私の手をとつて（あなたの眼は黄昏の月見草のやうですね。）と一言おつしやればよろしいんです……すると昔のなつかしい夢を思ひ出されるでせう。

（間――。）

（音樂。）

（光が變化する。）

作者　（おどろいて）あの女かしら。

女給甲　わかつたのね、あの女よ、急行列車であなたにお眼にかゝつた……。

作者　……君もこゝに來てゐるんですか。

女給甲　あなたと別れてからすぐ……あなたは私がかうなることを知つてた筈でせう。

作者　そんなことをどうして知るものですか……君は僕に

から言つたでせう。（まあ、私があなたを愛してゐると思つてゐるのね。）

女給甲　そしてあなたはかう言つたのね（君が僕を愛してゐる……そんな馬鹿なことを考へてゐるものか。）って

そして二人は別れたんでせう。

作者　それだのに僕は君の死ぬことを知る筈はないだらう。

女給甲　いゝえ、二人はあの時まだ別れたくなかつたんです、たゞ金に卑しいあなたの心がさうさせたんです。あなたは僅か百圓の金をつかつただけで、もう後悔してゐたぢやありませんか。

作者　そんな馬鹿なことがあるものか。

女給甲　おや、それぢやなぜあなたは脚本で私をしめ殺さなくちやならなかつたの。後悔してゐる半面私をはなしたくなかつたからでせう、そして私だつてあなたの傍をはなれたくなかつたんです、でも、あなたはしめ殺すかはりに私を追ひ出したぢやありませんか。

作者　いや、君は間違つてゐる、僕が脚本で君をしめ殺したのは、たゞ單純に君を愛してゐたからだ。金のことなんぞ考へるものか。

女給甲　…………。

作者　僕は君が去つたあとでどんなに苦しんだか知れないのだ。

女給甲　いゝえ、もうそんなことどうだつていゝんです。私はこゝへ來てから大へん樂になつたのですから。

作者　そして僕だけが苦しんでゐるんだ、僕は百圓のために脚本をかいた、そして女優を殺し、決鬪し、今また此處で重い刑罰に會はうとしてゐる……僕には此處の社會は少しも理解が出來ない、樂な死どころか、恐ろしい陷穽としか思はれない。

女給甲　それはあなたが荒い感情を棄てることができないからですわ。

作者　しかしこの燃ゆる心をどうすればいゝんだ、そしてなぜまた、その燃ゆる心に水をかけなければならないんだ。（女の手をとる）

玲子さん、僕が君のこの美しい大きな眼に會ひたから、どうして、ほの暖かい空氣と、意志のない冷かな秩序に從つてゐられたんだ、どうして（あなたの眼は黄昏の月見草のやうですね。）などと空々しい言葉で接吻を求められるんだ……僕は何も言ふことを知らない、たゞこの燃ゆる心と、荒い呼吸で君を抱きしめたい……僕は間違つてこの新しい陷穽に落ちて來たんだ。（と言つて女に接吻する）

（間。）

女給甲　あなたは澤山上演料をおとりになつたのね。

作者　上演料……え、え……僕にはそれさへ、理解出來ないんだ。

女給甲　私にその半分を下さいな。

作者　……。

女給甲　私、こゝでは、さうして、生きてゐるんです。

作者　……ほんたうか。

女給甲　え。

作者　ヴンプ！　お前はそんなに見下げた女なのか。（と言つて上演料の全部を叩きつける）

女給甲　（しづかにその金をとつて）あなたはどうしてもその荒い感情を抑へることができないんですね……そんな風ぢや明日の芝居はきつとしくじりますよ。

作者　…………。

暗轉まはる

第　五　場

女優の室。

絨毯、金屏風、壁にぶらさがつてゐる白い絹の靴下、

女優寢臺で眠つてゐる。

遠くから音樂聞える。

作者登場、彼の科及び面に憂鬱で機械的である。

作者　今日は……。

女優　あら先生……私こんな風をして。

作者　（狼狽して）こ、これは、失禮……今電話下すつたのはあなたぢやなかつたんですか。

女優　私ですわ……私先生がこんなに早くいらつしやるとは思はなかつたものですから。

作者　電話ではすぐと言ふことでしたから。

女優　目黑まで二十分、それからバスで廿五分、下りて歩いていらして五分、たつぷり一時間かゝると思つてゐたんですわ。

作者　僕は自動車（タクシー）で飛んで來たんですよ。

女優　あら自動車（タクシー）で……まあ大へんでしたわね、あんな遠くでは……。

作者　いや、なんでもありません、あなたの電話があまり嬉しかつたんで自動車を飛ばして來たんですよ。

女優　あら……私御迷惑ぢやないかしらと心配したんですが、でも、ぜひ先生にお眼にかゝつて敎へていたゞきたかつたものですから。

作者　迷惑なものですか……たゞ、僕は芝居に書いてゐるが演出の方は少しも經驗ないんで。

女優　そんなことはありませんわ、私の考へではその作品を一番解る方はやはり作者だと思ひますわ。

作者　そりやまあさうです。

女優　第一場面のある女の扮裝はこんな風でいゝでせうか。

作者　……結構です……なるほどこりや僕が想像していゝた女とそつくりです……寢臺がある、靴下がある、鏡臺もこれで充分です。

女優　では先生、すぐ敎へていたゞきますわ。

作者　え。

女優　先生、男の白をつけてちやうだい……おぼえていらつしやるでせう。

作者　（どぎまぎして）え、まあそれは……。

女優　では始めますわ。（本を讀みながら）前の方はらくですからぬきませう……（寢臺に腰かける）足をぶらんぶらんさせる……これはどういふ氣持でせう。

作者　……そこは男を輕く嘲笑する氣持です。

女優　では始めますわ……まあ、私があなたを愛してゐると思つてゐるの。

作者　（甚だまづく）君が僕を愛してゐる……そんな馬鹿なことを考へてゐるものか。

女優　あら、その時、男は女とならんでゐるんでせう。

作者　え、え。

女優　先生に、そこにつゝたつておつしやられたんぢや實感が出ませんわ。

作者　そ、そりや……。

女優　ならんで腰かけてちやうだい。

作者　でも、僕はとても……。

女優　なんでもないぢやありませんか。

作者　そりやさうですか。

女優　でなければほんたうに敎へていたゞけないんですもの。

作者　どうも二人つきりの室では……。

女優　あら、かへつて邪魔がなくていゝでせう。

作者　ところが僕はすぐ興奮するたちですから……ひよつとすると。

女優　まあ、先生は私を誤解してゐらつしやるんですね。

作者　とんでもない。

女優　ずゐ分だわ、私なにも先生に愛していたゞきたいためにこんなことをしてゐるんぢやありませんわ。先生のお作をよく演出したいために、お願ひしてゐるんですわ、それに……。

作者　そ、そんな馬鹿なことがあるものですか……やりますよ、やりますよ。（女とならんで腰をかける）

女優　では、さつきのとこから始めますわ……。

作者　（少しふるへる）

女優　あら、どうしましたの。

作者　少し風邪氣味なんです……いや、かまひませんやつて下さい。

女優　では始めませう。……まあ、私がこんなにあなたを愛してゐると思つてゐるのね。

作者　君が僕を思つてゐる……そんな馬鹿なことを考へてゐるものか。

女優　でも、あなたの眼がさう言つてゐるぢやありませんか。

作者　僕の眼が……。

女優　その二つの眼が……それとも嘘ですか。

作者　君は僕のこの眼が何を考へてゐるか知りたいのか。

女優　知りたいなんて思はないわ、わかりきつたことを。

作者　わかつてゐるものか。（下をとる）おい、僕が三日間何を考へてゐたか今知らしてやらう。

（急に女優に接吻する――恍惚の狀態。）

（その女優の目に嫌惡と逆上の雙方にかゝる。）

女優　（不自然に）まあ、何をするんです。

作者　（はじめて自分にかへる）君と僕は初めの約束どほり生理どほりにするんだ。

女優　畜生ッ。

（女優抵抗する、作者は昂奮して非常に荒々しい様で、地下で女優の首をしめつける、不意に金屛風の蔭から紳士顔色をかへて登場、そして女優の首をしめつけてゐる作者をおしのける。）

紳士　君は、君はなんて亂暴なことをするんだ、演技だ、演技だ、ほんたうにしめ殺すんぢやないんだ。

作者　ほんたうにしめ殺すんぢやない？

紳士　さうとも。君はまたこの社會の約束を忘れたのか。

作者　いや、僕はこの社會の約束を守つたに過ぎない、僕は冷かな秩序にひきずられてこんな愚かなことをしてゐるのだ。

紳士　底の知れない馬鹿者だ……（狼狽てゝ女優の身體をゆすぶる）仙子さん、仙子さん、駄目だ、ほんたうに死んぢやつた……おい、君はとう〳〵仙子さんをほんたうに殺してしまつたんだ。

作者　ほんたうに殺した？

紳士　仙子さん、仙子さん、もう絶望だ……惡黨ッ、無賴漢、お前はこの社會での最惡の罪を犯したんだ、お前の罰に死刑に價する、おい、誰かゐないか、おい、支配人、支配人……。

（天上の支配人登場。）

紳士　巡査を呼ぶんだ、早く巡査を呼ぶんだ、そしてこの惡黨を刑務所にたゝきこむんだ。

支配人　はい。

（支配人退場。）

作者　巡査、刑務所……この社會にもさういふいまはしいものがあるのか。

紳士　お前を死刑に處罰するのだ。

作者　死刑……僕を死刑にする……僕は理解できない、何が何やら少しも理解できない、僕は自分の意志を殺してこの社會の秩序の命じるまゝに、芝居をしたに過ぎないんだ……。

紳士　お前はこの社會の秩序を破つたのだ、最悪の荒い感情で神聖なものをけがしたのだ、お前の犯した罪は明らかに死刑だ。

作者　新らしい罠だ、新らしい罠だ、たしかにさうだ、そしておれはそこに落ちこんでもがいてゐるのだ。

諸君、僕は知つた、今、世界の資本主義は、我々民衆に向つて、新らしい神祕主義の罠を用意してゐるのだ、そして我々の眼を眩まし、我々の意志を奪つて彼等のあくなき慾望を充さうとしてゐるのだ、さうだ、過失は僕自身にもある、僕は強い意志をもたなかつた、鬪ひを廻避して天上にのがれた、そして今、天上の罠にかゝつたのだ。

諸君、この可哀さうな劇作家は今こそ人間の本然に歸つて諸君に訴へたい！

人間よ、強い意志をもて！

民衆よ、鬪につけ！

今日、

鬪志のない人間は、僕のやうに一個の商品に過ぎないのだ！

（天上の巡査二人登場。）

（作者を拉し去る。）

（その後から紳士退場する。）

（女着ざめて登場。）

ある女　私は、私はあの人を愛してゐたんです。（泣く）

――幕――

前田河廣一郎篇

ムツソリーニ（十場）

はしがき　本篇に於ける登場人物にして、ダヌンツイオ、ムツソリーニ等の著名なる主要人物には、原名のまゝを採用して居るが、その他本篇の構成上比較的小さな役割をはたす Minor characters は假名を用ゐることにした。事件と雖も、劇的に配分する必要から、一部分の集中や歪曲や誇大——文學的修正を試みたことを告げなければならない。本篇を組織する諸事件に關する資料は、主としてルイジ・スツルツオ、ウイリアム・ボリソオ、スペンサア・ジヨンス、ルイジ・ヴイラリ、ギユリオ・アキラ等の著作、ベデイカーの一九〇九年版、ジイノヴイエフの報告、太宰施門、大類伸、下位春吉氏等の著作、ネスタ・ヘルテス地圖、其他、内外の諸雜誌、殊に「自由評論」の「ファッシズム號」「ネーシヨン」誌に負ふ處が多いのである。

登場人物

議長サラリノ
書記ギヨラノ
代議士モドグリ
同　トラチノ
同　ノフリ
社會黨員ナバロ
同　ゴーリ
同　ギイド
同　カセーラ
ベニト・ムツソリーニ
ロツソニ
ジヨワニ
印刷業者ペデファアニ
ビアンチ
共産黨員ボンバルキ
ファリナ
ザンボニ
ガブリエル・ダヌンツイオ
衞兵一、二
兵卒一、二、三、四及び外に七八名
バスコ中佐
ネボロ中尉
ロカテリ少尉

トニノオ中佐
勞働者一より十二まで
デ・ニーリ
ファッシスト團員二十名
兵士大勢
市民及び婦人二十名[illegible]
學生一、二
婆さん
ファクタ
從者一、二
士官
群集
城門内の武官
ファッシスト團員大勢
一皇族及び侍從武官等
幻覺的な人物十二三人
文部大臣[illegible]
海軍中將[illegible]
大藏大臣[illegible]博士
遞信大臣[illegible]ーレ
隨官及び下役人數名
[illegible]者三人

ファッシスト黨兵數名
造船工多數
市民、勞働者、廢兵、浮浪人、女等多數
暗殺者
ムッソリーニ夫人
活動寫眞技師及び監督、新聞記者、寫眞班
農夫六人及び驢馬

時　代

現　代

（本篇は、構成派或ひは表現派的誇張の惡るい部分を避け、努めてリアリズムの演出法に遵據すべきことを希望される。）

第一場

一九一四年、イタリーが戰爭に參加する前の冬。首都ローマ市に於ける社會黨大會の會場。灰色、無裝飾な壁によつて舞臺右と正面とが包まれてゐる。壁は、斜めに左端まで走り、そこにはまだ議席があつて、多數黨員の列席せる。壁には三つの大きい窓があり、どす黑い亂雲に壓迫された黃昏の西空が見られる。さほど高からぬ丘陵の斷續と、シイルエットになつた圓柱のゴシック風の建築の間に、遠くのサン・ピエトロ

の伽藍が、甲の鉢金のやうに金色に燦めいてゐる。都市線と雲との間には、燗銅色に燃える餘映が、一と巾亂れ墜ちる暗黑を支へながら光つてゐる。

右の壁は、正面のそれと直角に、從つて看客の方へは稍横向きに突出てゐて、その上に掛けられたマルクスの肖像を見せながら、舞臺前方で、鋭どく曲がると、一つのドアを見せる。その壁の前は五角形な演壇、それに二つのテーブル、椅子等。演壇正面の階段を三きだほど降りると後方に書記席がある。ゆるい馬蹄形に列べられた粗末な椅子が、舞臺左まで不規則に續いて、演壇を取卷いてゐる。演壇の右横手にも小さな階段があつて上へ昇れるやうになつてゐる。天井に電燈三つほど、壁の隨所に支部旗、戰爭反對のビラ、ポスターなど、いゝあかりのまだともされぬ室内には、煙草の煙がもうもうと立罩めてゐる。妙にくすむだ夕陽の反映の下に、すべての物がどす赤く入り亂れて、奇怪な影を曳いて動く。

寺院の鐘の交響。遙かに湧き上がる群集の動搖めき。

室内も騷然としてゐる。

議長サラリノしきりに槌を鳴らして議場整理の任に當つて居る。牛の如く肥つた老人、稍饒舌癖あり、眠さうに垂下した瞼の下に、小さな鋭どい眼を働かす。四五の空席を殘した黨員達、亂雜に手や肩を動かして勝手にしやべり立てゝゐる。社會黨代議士で領袖株のトラチノ、モドグリ、ノフリ等の顏も見える。書記ギヨラノ何かを議長に囁き居る。

黨員一　戰爭になるのか？

黨員四　この頃の天氣は變だぞ。赤い空が急に黑くなつちまふ。早く電燈をつけろ。

黨員二　戰爭になつて堪るかい。俺達は政府と共同戰線を張つてるんだ。

黨員一　吐ッ、そんなこと大聲で云ふ奴があるものか！

黨員五　ムッソリーニを呼んで來い！　いつまで待たせるのか！　フロレンスから此方は氣が短かいぞ！

黨員八　あの男はミラノから來るのだからね。

黨員十　もう來てる筈だ。同志ナバロとブーリとがテルミニへ迎ひに行つてる。

サラリノ　諸君、靜肅に！（書記降壇）

黨員三　（窓を覗いて）やつてる、やつてる！　コルソの通りは大變だぞ。國旗を見ろ！（黨員四五人窓より外部を覗き見る）

黨員四五人　赤シャツだ。――インテルヹンチスタの馬鹿ども！　戰爭狂め！

黨員三　花火をあげてやがるぞ。（爆竹の音）今日は學徒

何様の御家かい？（笑聲）おい、何とかして此奴等を食ひ留めんと大變だぜ！

サラリノ　諸君、只今、同志トラチノから黨の積極的方針についての質問がありました。……どうぞ、靜肅に。……尤も、今日の臨時大會は、ベニト・ムッソリーニ君の査問會といふことになつて居りまするが、未だ當人が見えませんので……。

黨員五（窓から振りかへり）來た、來た！

黨員六　ナバロは右の腕を、ゴーリの奴だについてゐる。逃げたら殺さうといふ覺悟だな。そら、ドアを這入つた。

（黨員の大半は『ムッソリーニ！　ムッソリーニ！』と連呼しながら、異常な昂奮を示す。）

サラリノ（立つ）では、議事の進行上、同志トラチノの質問は一時保留いたしまして……直にベニト・ムッソリーニの査問會を開きます。（着席）諸君、御着席を願ひます。どうぞ、靜肅に！

（ベニト・ムッソリーニ及び社會黨員ナバロ、ゴーリの三人、右端のドアから入り來る。ムッソリーニは、黑ずむだ黑服に、色褪せた帽子、外套を腕にす。憔悴した顏色、眼だけが挑戰的に輝る。筋骨の逞ましい大男のゴーリは、その腕を取つて、議長席の下の空席へ、右背へは斜めに向かせて掛けさす。）

（間。）

（電燈ぱつと點る。）

サラリノ（起立）では、これから、ベニト・ムッソリーニ君の査問會に移ります。猶、私から一言御注意申上げたいことは、現在私達は優柔不斷なサランドラ内閣の對外政策下にありまして、イタリー全國を擧げて、トリプリテ・アルレアンツアとトリプリテ・インテーザとの間に迷ひ抜き、今日は戰爭か、明日は國境に兵を送るかと、實に國家の運命が危機一髮に懸つて居る際、我が社會黨は敢然と戰爭反對、イタリー中立のスローガンを掲げ、、、頃にヨーロッパ全國の平和を招來する所以であると主張して居るものでありまする。で、かういふモメンタスな時機に於ての、我々社會黨の一提案一決議事項と雖も、直ちにそれがヨーロッパ大陸の勞働者及び社會黨のソリダリテーに影響する所が大きいので御座いますから、假令どういふ問題を議しまするについても、同志諸君に於かれましては、世界の運動を眼の前に置かれるやうな決心をもつて、冷靜に――この冷靜といふことは遺憾ながら我々イタリア人の間にはカモラ黨員の計畫的暗殺の場合にしか適用してゐないやうですが――そして、十分に調査して、しかも黨員としての統制に

背いた行爲は斷乎として糺彈する勇氣を持たれんことを希望致します。今宵ピアッツア・コロンナに聚まつて、軍國主義の血の臭ひに醉つてゐる群集にとつて、我々がこの場で議決したことが直ちにそれ自らのデモンストレーションになり、それによつて盲目的なショービニズムを牽制し、そしてイタリー社會黨のもう一段の戰時的飛躍となること、これが實に、この臨時大會の重大な意義であらうと存じます。

（拍手――窓が閉される。）

黨員十　（擧手）議長。

サラリノ　はい、同志ギイド。

ギイド　本員は議事の進行について一言申上げたい。本査問會は、既に三日前に黨の機關紙『アヴァンテ』に於て、變節者ムッソリーニの罪科を列記してありますところから、ほかに特別に重大な詰問事項のない限りは、該記事をもつて直ちに質問の形式に移し、トリポリ戰爭反對以後のムッソリーニ氏の行動より先月『イル・ポポロ・デイタリア』といふ名目は社會主義新聞といふことになつてはゐるが、その實非社會主義な反動新聞を創刊するに至つたまでの顚末について、當ムッソリーニ氏自身の一應の辯明を聽取したいと存じます。

サラリノ　只今同志ギイドの『アヴァンテ』紙の詰問記事に附加するものなしとして、直ちに、それに對するムッソリーニ氏の答辯を要求すべし、といふ案が出て居りまするが、この動議に對して御異議がありますか。

黨員の多數　異議なし！

サラリノ　別に附加すべき詰問事項とか、外かに詰問の方法に關しての御意見は？

黨員の十三　議長！

サラリノ　はい、同志カセーラ。

カセーラ　私は同志ギイドの動議に贊成するものであります。が、一昨日『アヴァンテ』紙に於てわづかにその暗示に止まつて居りました『イル・ポポロ・デイタリア』紙と今回約千五百萬リラの株式資本をもつて設立されようとしてゐるブローネ兄弟の重工業會社及びその金融機關との間の祕密提携に關する具體的調査事項を本員は深く、り得たものでありまして、主義思想上の問題よりもこの方が一層と重大であると認めますから、ムッソリーニ氏に本員の質問に對する回答を先づ要求致したい。（着席）

黨員一　そんな惡辣なことがあるのか、殺しちまへ、あの野郎！

サラリノ　私語を禁じます。同志カセーラの動議によりまして、然らば目下問題のバンカ・デスコント系の興業者と『イル・ポポロ・デイタリア』社とに隱關係ありとの摘

議に對して、ムッソリーニ氏に對決問答を要求することになりまするが、それに御異議はありませんか？

黨員の多數　異議なし！

（小間。）

サラリノ　然らば異議なしと認めます。議長は、ベニト・ムッソリーニ氏の登壇を促がします。

黨員四　愚図々々せんでそんなものは早くつまみ出してしまへ！

（ムッソリーニ登壇。遠くに群集歡呼の聲。）

黨員二十（窓から）おい、氣をつけろ！　河は近いぞ！

サラリノ　壇上に願ひます。では、同志カセーラ！

カセーラ（起立）然らばムッソリーニ氏に質問いたします。當市の有力なる某新聞の編輯長某氏（後に差支へなき限りに於ては本名を明かします）の巧妙なる檢査と的確なる觀察とによると『イル・ポポロ・デイタリア』紙創刊の二ケ月前、即ち、ムッソリーニ氏がまだ黨の機關紙『アヴァンティ』の編輯に從事してゐる間に、グランド・オテルに於てフローネ某市新聞の代表者ウムブリノ氏と會見した形跡があります。それは戰爭の宣傳費として――。

ムッソリーニ（起立つまゝ、初めて發言す）やかましいッ！　わかつてる！　俺は、今日、君達の前にわざわざ案内人（ギイド）のやうに辯解に來たんぢやないんだ！（彼はあらゆる名譽心の強い人間のやうに、話してゐて自己の雄辯に陶醉する癖がある）俺は、ミラノからローマへ、宣言をもたらして來たのだ！　俺の宣言には、イタリー五千萬の民衆の支持がある！　聽け、先づ、俺の宣言は、君達のやうに意氣地のない社會主義者に挑戰することだ。――

カセーラ　議長！

黨員四、五、六、七　議長、議長！（連呼）

ゴリー　この野郎、次にはエマヌエレ三世の支持があるとぬかすんだらう！

モドクリ　議長、緊急動議！

ナバロ（演壇を指して）緊急動議なら此奴の體へ見舞へ！

ゴーリ　やつつけろ！

（黨員七八人演壇へ驅け上がる。後席の者一度に算を亂して押寄せる。代議士トラチノ、モドクリ、ノノら等しきりに手をあげて制せんとす。議長槌を亂打す。）

ゴリー（ムッソリーニの喉を締める）畜生！　さあ、ぬかせ！　吐け、泥を吐け！

ナバロ（背後からしたゝかに毆ぐる）貴樣の主戰論を今役立てゝ見ろ！

ギイド　云はせろ、云はせろ！

黨員一（矢庭に面部を毆ぐる）このブルドッグめ！（ム

ツソリーニの顔から血が流れる）

サラリノ　諸君、諸君！

（亂鬪は續く。ゴーリのために、ムツソリーニ演壇から突き墜され、一時昏倒する。ナバロ抱へ起こす。カラーも服もめちやになつてゐる。黨員四五人、唾を吐きかける。何か云はうとしてムツソリーニ空しく口を開閉する。と、突然、室外に群集の歡聲擧がる　爆竹の音、黨員二三人窓から覗く。間なく沒す）

黨員二　何でもない、愛國狂の行列だ！

ムツソリーニ（ドアの前によろめきながら辛うじて身を支へて、肉迫して來る黨員達を眺め）あれだ、あの聲を聽いたか——あれがイタリー國民の聲だ！　諸君の如き、徒らに第二インターナショナルに追從し、勞働組合からさへ侮蔑されてゐる日和見主義者に、イタリーの變革が出來ると思ふか！

黨員多數　何だと、この野郎！

ムツソリーニ　俺は鬪ふ！　俺は、今日この場限り、軟弱たる諸君と終世末代までの決鬪を宣明する。いいか、窓を開いて、あの頑剛な市民をここへ呼べ！　彼等は俺にイタリーを思ふインテルヹンチスタの前でこそ諸君と俺とは始めて對決しよう！　それまで、諸君のうちの一人でも、俺に指一本觸れることは斷じて出來んぞ！　その理由は、俺はイタリーを率ゐようとしてゐるからだ。俺はイタリーそのものだからだ！（胸を叩く）さあ、ゴーリ、それから、ほかの蛆虫ども、やつて來い！　本當の、、に抵抗して見たければ來い！

（黨員達すこしたじろぐ。表には群集歡呼の聲、跫音。）

群集　戰爭だ、戰爭だ！（稍近く）

ムツソリーニ　然り、戰爭だ！——トレントとトリエステ！　祖國のためにこの際進まぬ奴は、皆臆病者だ！　すべては敵を斃してからだ！

代議士トラチノ（壇の上から）もう、澤山だ！　似而非、命の線香花火と、ガリバルヂーの猿眞似と、工業國の御手先か！　そんなことは街へ出てやつて貰はう。——諸君、本員は、これだけで、この惡辣なる變節漢ベニト・ムツソリーニの立派な除名處分に該當すると信じます！（ドアを指差す）去れ！

——幕——

第二場

一九一九年の早春。

北伊ミラノ市に於ける『イル・ポポロ・デイタリア』紙の編輯室。

近代建築術によつてざらに起工される種類の、安手な、

洞穴のやうな二た間續きの借事務所。中央に壁と仲仕切のドアがあつて、二室を右と左に區分してゐる。但し、二室ともに、色褪せた薔薇模様の壁紙と黄ばんだカーテンや古雜誌新聞の山、永い間の貧乏に對する根氣力によつて辛うじて救はれた、手擦れのした僅少の家具類を共通してゐる。電燈には青い笠が掛けてある。八時を指した八角時計。壁に四五點の額。右室の壁に、二口の長劍が交叉してあるが、裝飾用として用ひられた以外には意味をなさない。階下からの入口は、左室の端のガラス戸、裏口は右室から。

夜。前幕との時間の距離を暗示する爲めに、壁のどこかへ「一九一九年」十月何日かのカレンダーを掛くるも妨げず。

ムツソリーニ、右の部屋で社説を書いてゐる。もとサンヂカリストの同僚であつたロツソニ、左室で糊と鋏を使ひながら、記事を製作してゐる。ジョワニ、ロツソニと同じ室で、牛のやうな頭で壁を小突きながら、無聊のあまり無暗に煙草ばかり喫つてゐる。どこかにギターの響がする。中央の戸口に鍵が卸してある。ムツソリーニ、時折筆を休め戸の方を苛立たしげに眼を上げて見る。

ジョワニ　（ロツソニへ）かうストライキばかり起つては、これからどうなることつたらうな？

ロツソニ　、、の天下になるのさ。

ジョワニ　貴樣の『、、の天下』は聞飽きたよ。

ロツソニ　馬鹿に飽きつぽい奴だ、もう少し辛棒しろ。だんだん世の中が面白くなつて來てるぢやないか。

ジョワニ　ふん、根つから面白くもねえな。親方もさうだが、俺たつて同じことさ。戰爭へ出て彈丸の二つも喰つて、生命を半分グラッパの砲臺へ捨てて歸つて來ると、どうだい、國の中あまるで茹で過ぎたスパギエテイ同樣で出征、、、、、も糞もあるもんか、政治屋は政治屋でてんでの泥仕合に夢中になつてやがるし、役人は袖の下を使はねえと何も取上げてくれん、戰爭に出るまでは歸へつたらきつと場所をとつてゝやると云つた工場は片つ端からぺしやんこに潰れてやがる、おまけに、その邊の人足どもまでがレニン主義をやつてけつかる。一體全體、組合からや俺達から何のために組合費を取つてゐたんだ、と云ひたくなるね。一體全體、俺達は何のために戰爭へ行つたんだ。と訊きたくなるね。俺達から見ると、その邊の女どもを揶揄つて歩るきあがるイギリス人だとか、ヤンキーだとかの兵隊は殿樣みたいなもんさ。いけ面白くもねえ。

ロツソニ　それが、お前、國に金がないからさ。

ジョワニ　あゝ嫌だ、嫌だ、俺アあのお山の騎兵守護の聖

母へ御願ひして、アメリカへ移民にでも遣つて貰ふより
ほかはないせ。——何かさせてくれ！　何でもいゝや、
かうなつたら罷業破りだつて何だつてするぞ！

ムツソリーニ　やかましい奴だ、おい靜かにしろ！（ペン
を措いて書きかけの原稿を口の中で讀む）

（ドアをノツクする音。ムツソリーニ誰かを期待して
ゐるらしく、耳を峙たつ。）

ジヨワニ　誰？

（印刷業者ステフアニおづおづ長い頭を差入れる。ム
ツソリーニと顏を合はせる。）

ステフアニ　今晩は、今晩こそ旦那は御留守だなんて云は
せませんぞ。

ジヨワニ　又來たか？　うるさい男だな。

ステフアニ　わしだつて、別にあがりたくて參るわけでも
ないでな。へ、へ、へ——。どうせこんな物騒な區域で
すもの。

ムツソリーニ　（わざと聲高に朗讀す）……えゝと、かく
して內治に外交に政機を逸したる現內閣は、徒らに、我
が神聖なる半島祖國をして、地中海とアドリアチツクと
の間に、焦燥的な長靴の如き足掻きを演ぜしめるだけで
ある。五十萬人の死靈を拂ひ、五十餘萬の廢兵を出せし
世界大戰に、祖國イタリーの得る處、絕大なる負債と…
……。

（ジヨワニ拇指をもつて、ムツソリーニの部屋をステ
フアニへ示す。ステフアニ恐る恐るムツソリーニへ近
づく。）

ステフアニ　今晩は、ムツソリーニの旦那。

ムツソリーニ　（讀み續けつゝ）……急激なる社會主義者
の跳梁のみ——誰だ？　（向きなほる）

ステフアニ　どうもお邪魔さま。毎度——のことですが、
旦那、どうでせう、例の方は？

ムツソリーニ　あ印刷屋さんか？　まあ這入り給へ。お掛
け。——と云つて、俺んとこには椅子が一脚しきやない、
その一脚へ、ロツソニが掛けてるから、俺が立たう。——
で、何かね、用件といふのは？　どうも、火がなくて、
外は寒からう——。

ステフアニ　へえ、結構で。いや、實はな旦那、職工が云
ふことを聽かんのでしてな。何しろ三週間も前から給金
を拂つてないんで。いやはや、どうも職工といふやつは、
誠にうるさいものでしてな。第一、その組合といふ厄介
が後に控へてゐますので、始末に終へませんよ、で、今日
では何です、その、機械の方は一臺しか廻つてないんで
すよ、缺勤でな。これで今晩中いくらかでも金の顏を見
せないと、旦那、貴方んとこの新聞も當分出しかねます

ゐでな。
ムッソリーニ　ははア、ストライキでも起こしさうな形勢かね?
ステファニ　ええ、もう、奴等はとつくから話合つてるのですが、外ならぬ貴方の新聞ですからね。それに以前はそんなこともなかつたんだとわしが云ひなだめて、漸くまあ今日までかうやつて持つて來てゐたわけでしてな、——
ムッソリーニ　よし、よし、わかつた。
ステファニ　あ、さうですか。さうでせうとも。——では、これが先月分の請求、それから先々月の殘りがこれで。
ムッソリーニ　いや、金はないぞ!
ステファニ　でも、おわかりになつたと仰曰つて、——
ムッソリーニ　わかつた、確かに承知した、だから歸れ!
（帽子を掛ける）
ステファニ　旦那、ねえ、どうぞ助けると思つてひとつ今夜のところ幾何でもよろしいんですから——それが二十フランでも結構なんで、へえ。金の顏さへ見せてやりあ、あんた、職工なんて正直なもんで御座いましてね。——
ムッソリーニ　（無言でペンを取り上げて原稿を訂正しにかかる。ステファニ、歎を曳く。）

ステファニ　ねえ、旦那、世の中がかう不景氣になつちまひますし、職工達にあ泣きつかれますすし、紙屋の方も御立替してゐるし、旦那、そりあ、貴方わしの身になつて考へてみて戴きますよ、ほんとに。ねえ、旦那!
ムッソリーニ　えッ、うるさいな!　おい。（立ちあがる）こらッ、君は、このムッソリーニは俺達に愛國主義を奉じ、道樂に日刊新聞を出してゐると思ふのか!　君だつて、ロンバルヂヤの赤い血を享け繼いだイタリー人だらう、國家多事の際に國を愛する忠節がないのか?（胸倉を取る）おい、愛國心を持て!　印刷屋、たしか君の住んでる町はビヤ・デ・ミルレだつたの?　ビヤ・デ・ミルレに住んでゐて、その町の名の意味がわからんでどうする?　いいか、今を去る六十年前、ガリバルヂー將軍が國を思ひ自由を愛する赤シャツ組・千人の遠征隊を率ゐて、イタリーを獨立させた、その千人といふ意味だぞ!　更らに、その千人のうちには君のやうな印刷屋も這入つてゐたんだ。——その名を取つた町に住む市民が、何だ、その醜態は?　まるで猶太人の古着屋みたやうに、六百や七百の端た金を、國家の一大事でもあるかに我鳴り立ててゐるとは!（いきなり次室へステファニを突飛ばす）金は出來次第拂ふ。ムッソリーニは内に烈々の火を燃やしてゐるからこそこの赤貧にも甘んじてゐるのだ。俺の

やつてることは、イタリー國民全體の仕事なんだぞ！ジョワニ、お前、先刻から仕事がなくて退屈しとるやうだから、セニョレ・ステフアニを戸口まで御送りして上げい。決して手荒なことをしちやいかんぞ。（大きく笑ふ。）

ジョワニ　（ステフアニの襟首を摑んで押し出す）さあ、どうぞあちらへ。御歸りはこのドアで。

ステフアニ　（爭ひながら）でも、愛國心なんて今のイタリーぢや、、、、、、もない――そりあ話がちがひます。

ムツソリーニ　君の工場でストライキが初まつたら、その首謀者を一應こゝへ連れて來い。俺がよつく話して聽かしてやる。

ステフアニ　ちがふ、ちがふ、先月の約束は――そりや話がちがひますよ。（叫びながら去る。ジョワニ戶を締め切る）

ジョワニ　親方、親方の愛國主義、、、、、、、、がありやすね。（笑ふ）

ロツソニ　（壁の時計と自分の腕時計をくらべて見る）先生、そろ〳〵ビアンチが歸つて來る時分ですぜ。

ムツソリーニ　（ペンを捨て）お、そんなになるか？ぢや、わかつたな、お前とジョワニと別々に行くんだ。集まつたらあまり騷いで來ちやいかんぞ。すべて洩れるやうな計畫ぢやあ計畫でなくなる。這入るのも裏口から。結構だよ、きつと、旨く行くと思ふ。さうしたら、明日から機關車のやうに活動するんだ。ともかく、今夜で最後の決定だ。

ロツソニ　はい、わかりました。（ジョワニと連れ立つて右室のドアから退場）

（ムツソリーニ右室へ錠をおろして、テーブルから何かの文書を取り出しちよつとあらためて、ポツケツトへ入れる。書きさしの原稿やペンなどを取片づけ、椅子を二つ揃へる。落ちつかぬ風。不圖、歩きながら、壁のナポレオンの像を見る。）

ムツソリーニ　ボナパールト、この男のために、パリの市民は二吋も背が低くなつたのだな。（ナポレオンを眞似て、胸を張り、左手を胴着へ挾んで濶歩す）ふむ、人間、わからんもんだな！――俺は近代的ボナパールトだ。――あの、トラチノや鈍感なモドグリの奴等あ、今に徹底的に、この掌の中で粉みぢんにしてやるぞ。――さうだ、ボナパールトの手もこんな手だつた。昔から英雄の手は小さい、圓い、膨れてゐる……。

（ノツク。）

ムツソリーニ　誰？

聲　ビアンチです。

（ドア開かる。ムツソリーニの編輯助手ビアンチ、伊國共產黨員ボンバルキを誘ひ來る。ボンバルキは一見ロシア人のやうに濃い髭を蓄へてゐる。黒い鳥打、質素な身裝。ビアンチは、容貌がよくムツソリーニに似てゐる。）

ビアンチ　どうぞ、此方へ。これがベニト・ムツソリーニ氏です。（ドア閉さる）

ムツソリーニ　ロシアからの同志、ボンバルキ氏ですか？（手を差し出す）

ボンバルキ　（冷やかに目禮）御手紙は拜見しました。それから、今日はわざわざ御使ひを有難う。ボルデイガ氏からも御話はありました。

ムツソリーニ　（右室へ入りドアを閉ぢ、椅子を差出し）どうぞ。（二人着席。ビアンチ左室に留まりソーファに掛く）實は、前後二回、委細の事情を申上げましたやうに、同志の結束は、成つて居るのですから、事を舉げるとなると、直ちに決行出來るわけです。どうです、早速ですが、私を入黨させてくれますか？

ボンバルキ　御待ち下さい。——先づ、その前に、私は黨の一員として、直接貴下にお訊ねしたい二三の點があります。第一に、貴下の提出された諸條件は別として、どうしてこのイタリーがさういふ狀勢に轉じて居るか、それについての御意見が承りたいのです。

ムツソリーニ　オリーヴの果のやうに機は熟してゐます。ボロニア、フエララの諸工場の狀勢は手に取るやうに私の處へ來てゐます。ボロニアは私が曾て鐵道罷業をやつて成功した土地です。エミリアの農村爭議の徵候は、大地主との對立によつてたしかに、、、、、、、、、、、です。このミラノに於ては、私の指紋よりもはつきりと、コントロールすべき重要地點がわかつてゐます、ともかく、イタリーは變革に飢ゑてゐる。それだけは事實です。

ボンバルキ　どうして貴方は「機が熟してゐる」と觀察されますか？　昨年十二月ボロニアの社會黨大會の分裂で、トラチノとモドグリ、ノフリ等の右翼とセラッチ、カセーラ、ゴーリのやうなマキシマリストは對立しました。そのカセーラ一派の掲げる處の、、、、、、綱領は、或る程、或る點まで第三インターナショナルの面影を傳へてはゐます。しかし、彼等には、、、、、、、、、から要求された二つの事さへ斷行出來ないやうな弱味があるぢやありませんか？——それは、現在のマキシマリストのうちの有名なフラクションを排除することです。セラッチ一派を、ロシアでは『ブルジョアの代理人』と呼んでるんですよ。この一派を除くことなしに、その內部的

矛盾を克服することなしに、假令、ボロニアがどんな攪亂狀態にあらうと、ロンバルジヤに、、、、、、、が出現しようと、我々はマキシマリストと提携してコムミニスト運動の第一歩を踏み出すわけには行かんのです。失禮ですが、ムッソリーニ氏、そのマキシマリストと無條件で提携し、その經濟鬪爭主義と、社會黨の議會主義との中間に、、、、、、なさらうとする、貴下は一介の變革的オポチユニストに過ぎない。いや、それよりも明白にすべきことは、現在の貴下の立場ですよ。どうして、どうして、ついこの頃まで政府や重工業系の宣傳部を受持つて居られて、今日が日まで愛國主義を說かれる貴下が、さうも急激に思想的剃髮をなさるのですか？——實際、私は今日といふ今日は驚きましたよ。御伺ひする筈ではなかつたのですが、あれほどまでに貴下が仰臼るので、本部とは關係なしに單獨で御意見の在る處だけ聽きに上がつたわけです。——いや、失禮いたしました。では——（立ち上がる）

ムッソリーニ　まあ、一寸待ち給へ。おや、どうしても僕と提携して運動は出來んと仰臼るのですね？（稍激昂して）

ボンバルキ　ジヨールジ・ソレルのプロテイヂの貴下とは、ね。

ムッソリーニ　僕は云ふことが下手です。僕にマルクキヤンのデイアレクチツクスで物を云へと云ふなら、僕は駄目です。しかし、これだけははつきり言明します。——諸君が僕と提携されなくとも、僕は立派にやつて見せる。その時後悔しないやうにして欲しい。腕でやる！この腕でやりますよ。君のレニンやトロツキーやジイノヴイエフへよろしく云つてくれ給へ。幸ひにして、僕には二つのプログラムがあつた。今、その一つをボンバルキさん、君の前で引裂いて御目に掛けますよ。（ポツケツトから文書を取出して引裂く）これが、君達との決裂です。ビアンチ、御客樣の御歸へりだ！（ビアンチ室へ入る）

ボンバルキ　ムッソリーニ氏よ、貴下の有名な博奕打なことは篤と知つてゐます。今貴下の手の中にどんなカードが隱されてゐるか、それは私の知る範圍ではありませんが、社會の變革には決して冒險ではないのですよ。これだけは、私からの忠告です。さよなら！

ムッソリーニ　君はイタリーを知らぬ馬鹿者だよ。（ボンバルキ去る）ビアンチ、ロッソニ等を呼んで來い！

ビアンチ　先生、大丈夫ですか？

ムッソリーニ　俺には伏せ札が二枚あるんだ！（ビアンチ、裏口より去る。ムッソリーニ壁より劍を外づして、劍擊

の構を試みる。ロッソニ、ジョリニ、ファリナ、ザンボニ、ビアンチ等二十數名の青年、右端のドアから靜かに入り來る。ムッソリーニ高く長劍を振り翳す）

ムッソリーニ　諸君、同志の者よ、集まれ！　愈々時は來た！――俺はここに、、、綱領を起草して持つてゐる。諸君のうち俺と共に第一線に立つことを忌避するものがあつたなら、もう一本の劍を外づして、先づ俺を殺せ！

（沈黙。）

ムッソリーニ　ないか？――なければ云はう、時代は力を求めてゐる！　正當な目的のための、力が必要だ！　俺達はこれから戰鬪隊を組織する。綱領はかうだ。讀まう。衛れ！（ムッソリーニもう一葉の文書を取り出して擴ろげる。青年達衛集する）

――幕――

第　三　場

一九一九年の晩秋。

フイウメ。詩人ダヌンツイオの率ゐる義勇軍によつて占領されたるフイウメ市のピヤザ・ダンテの一角。

左稍中央にルネッサンス式な風色の石で築かれた大邸宅の玄關口が斜めに開いてゐる。玄關の柱に貼り出してある通り占領軍の參謀本部である。そのほか壁の處々に貼札がしてある。玄關の眞上に胸壁然としたバルコニイ。そこから大きい、色褪せてしをれかかつたイタリー國旗が、前の廣場に垂れてゐる。國旗の傍に、赤黄ろくなつた立木が二三本、時折、その葉がほろほろと散り落ちる。舞臺正面中央に一基の大理石の圓柱。正面から右端まで、がらんとした廣場、空にはむやみにイタリー國旗が釣るしてある。正面奥に市街の遠景。小春日和。天空一碧、斜めな日光が、強く照らしてゐるが、どことなくすべての音響に空洞な虚無的な反響がともなふ。上空に飛行機の音しきりにす。附近にマンドリンの響、酒場に於ける兵士等の騷音など。武裝した衛兵二人、玄關の兩傍に立つてゐる。軍規はさほど嚴格でない。

衛兵の一　かうやつてばかりゐると腹が減るな。

衛兵の二　立つてゐなくたつて腹が減るんだ。何しろ大將が御手元不如意と來てゐるからな。

衛兵の一　全くあの炊事ぢややりきれない。

衛兵の二　ピアベの塹壕にゐたときの方が食べ物はよかつたぜ。

衛兵の一　考へりや今から二週間前に、ここへ進軍して來たときの威勢つたらなかつたね。

衛兵の二　さうさう、町の奴等ア有りつたけの牛でも豚で

も出してくれたからな。今となつちや、些か振られ氣味だね。見ろ、この國旗だつて、安物だから色が禿げつちまつた。

衞兵の一　ここは海からまともに雨や風が吹きつけるから、內地で拵へた國旗なんざあすぐ色が落ちてしまふんだ。

衞兵の二　そりやさうと、俺はここ二三日考へ込んでるんだがな、――どうも、この分ぢや、フイウメ占領も何の意味もないな。いいか、俺達はこれでざつと九千人からゐるだらう。それが、お前、毎日一人頭について五リラづつはどうしてもかかるんだ。それで、四萬五千リラさ。今の世の中では、戰爭は金だからな。指揮官(コンマンダンテ)が持つて來た金といふのは百萬リラしかないんだ。それも集められるだけは押借りしても搔つて來たんだからね。十日駐屯してると四十五萬リラさ。二十日であらかたそれがなくなると云ふもんだ。

衞兵の一　お前も仲々數字のやかましい男だ。して見ると、今日で十五日、籠城もあと五六日しきやあ持たぬといふわけだな。

衞兵の二　當り前さ、俺は市の稅務局の書記をしたことがあるんだ。

衞兵の一　どうも、俺等の大將もすこし無謀過ぎるね。

衞兵の二　いや、あの人は大體あんなもんさ。あんまり大きい聲ぢや云はれないが、指揮官(コンマンダンテ)は、例の薔薇色小說を書いてゐる頃からの借金が大變なもんださうだ。パリでもウインでも、あの人の借金は、買ひ取つたお城よりも大きいもんださうだ。それで、あの通り、戰爭となると、やけ糞でカルソの爆彈隊へ加はつたらう、それから次にはウインの飛行さ。最後にフイウメの占領と來てゐる。俺は何も俺達の大將の揚足を取るわけぢやないが、その一つ一つ華やかな冒險はつまり借金を踏倒す算段だね。

衞兵の一　叱ッ、誰か來たぞ！

（兵卒の一、右から登場。衞兵の前で敬禮。）

兵卒の一　只今飛行場へ着陸された指揮官よりバスコ中佐への傳令。

衞兵の一　認可證は？

兵卒の一　（ポケットから紙片を出す）　はい。

衞兵の二　通れ。（兵卒の一玄關へ入る）

（醉つた兵卒の二と三がやがや云ひ合ひながら登場。衞兵の前へ來て、仰山に敬禮。）

衞兵の一　おい、そろそろ勤務交代ぢやないか、しつかりしろ！

兵卒の二　何もすることがないから、そこへ立つて彫刻の獅子みたいに威張つてるんだらう？　よせやい、それよ

り、俺みたいにちつとは甘い酒の一杯も飲む算段をしろ！

衛兵の二　どこで飲んだ？　どうして？

兵卒の三　天機洩らすべからすだ。大將からはじめモルラツコの血ていい奴は我々遠征軍にはつき物だからな。

衛兵の一　貴様人民を掠奪したな！

（バスコ中佐、及び士官二人、兵卒五人、本部から急いで出て來る。衛兵及び兵卒等敬禮。醉つた兵卒等去る。）

バスコ中佐　（士官の一人に向ひ）では、ネポロ中尉は、直ちに海岸から陸揚に從事されたい。（ネポロ中尉、兵卒五人と共に左へ去る）それからロカテリ少尉は、輜重兵監部へこの旨を通達されたい。（ロカテリ少尉右奥へ去る）（傳令に向ひ）自動車は？

兵卒の一　はい、その角に置いてあります。

バスコ中佐　何故本部へ直接につけんのか？　そのために、この間そこの營造物を取毀はしたのではないか！（横頰を撲ぐる）

兵卒の一　はい。（二人右端へ退場）

（ムツソリーニの使者ロツソニ、兵卒一人に護られて左から登場。）

兵卒の四　ミラノのベニト・ムツソリーニ氏の使者ロツソニ、指揮官（コンマンダンテ）に至急面會のため來られました。

衛兵の一　ムツソリーニ？　何た、それは？

兵卒の四　海岸警備のニコロ大佐よりの認可證を持つて居ります。

衛兵の二　どれ見せろ。（兵卒の四示す）

衛兵の一　一般會議室へ案內して置け。（ロツソニと兵卒玄關へ入る）

（左奥からうわーツといふ掛聲。右端に自動車留まる。自動車の中からダヌンツイオ、韋皮の飛行將校服を着け、短かい劍を佩びて出て來る。禿頭、隻眼、よぼよぼの小柄な爺さんである。バスコ中佐、飛行士官、その他數人の兵卒彼に從ふ。右中央から輜重兵監登場。ばつたりダヌンツイオと出遇はす。敬禮。）

ダヌンツイオ　（手を擧げ）アララ！　トニノオ中佐、愉快、愉快！（細い女性的な聲）海賊をやつたよ！　僕が空中から探がしたんだ。どうも今朝機へ乘るときから、今日の太陽は處女のやうな眸だつたよ。――誰か、酒を持て！　（兵卒の一人敬禮して去る）久しく鬪はんからな。僕も鬪はうとするが、對手がないのには閉口してるた。敵の荷物船た！　殆ど何の抵抗もなく、掌の甲蟲のやうに押へてしまつたよ。（兵卒酒盃を運び來る）注げ！（士官達へコツプが廻はる）我等の籠城のために祝はう！

イタリー萬歳！

一同　イタリー萬歳！

ダヌンツイオ　我々の戰線內に流れついた、ネプチユーンからの水色の贈物、麥と重油と鑵詰と牛肉と金庫のために！

一同　萬歳！

（ネポロ中尉、左奧から大勢の兵卒に車を曳かせて來る。種々な荷物が、それからそれへと廣場の隅へ置かれる。最後の車は大きい金庫を運んで來る。）

ダヌンツイオ　これ、これだ、この美人を見ろ！　メデユウサの瞳のやうな光り！（金庫を指差す）

衞兵の一　只今ミラノのベニト・ムツソリーニなる者からの使者として、ロツソニといふ男が會議室で御待ちして居ります。

ダヌンツイオ　何、ムツソリーニ？　ふむ、あの散文的なフオルリ人か？　ここへ呼べ！

衞兵の一　はい！（去る）

ネポロ中尉（輜重兵監へ）この金庫はどうしませう？

トニノオ中佐　太繩でふんじばつて本部の二階へ釣り上げるんだ！（ネポロ中尉、部下に命ず）

（ロツソニ衞兵の一と共に登場。）

ロツソニ（敬禮）ファツシストの盟主ベニト・ムツソリーニから、フイウメの指揮官閣下への使者で御座います。

ダヌンツイオ　さう、さう、ファツショを作つたのは、君達の指導者であつたな。歡迎！（握手）

ロツソニ　これが書面で御座います。（封書を差し出す）

（ダヌンツイオ無言で受取り、封を切つて讀む。その間、兵卒達金庫へ繩を卷く。二階のバルコニーにも六人ほどの兵卒あらはれて、下から投げた繩を受取る。）

ダヌンツイオ　よし、返事は今書く。アララ、勇敢なる市民軍よ！　今日は何といふいい日だらう！　吉報！　吉報！　諸君金はいくらでも來るぞ！

（兵卒達大勢で金庫を釣り上げる。一同はしばらくそのために忙しく立働く。金庫が中空まで昇つたと思ふと、突然、繩が切斷されて、兵卒の一人とネポロ中尉がその下敷になる。一同驚きあわてゝ金庫の周圍を取卷く。）

ダヌンツイオ（目を双手で掩うてよろめく）おお！（俄かに兵卒達を掻き分けて、金庫の前へ行き、その胴腹を兵靴で蹴りながら）怪物！　怪物！　怪物！　こいつの存在は、いつも俺のローマンスを破壞する！　天下の貨幣をアドリアチツクの底へ、最後の一ブロンゾまで沈めてしまへ！（ロツソニを顧みて）――、君、新しき市民軍を組織しつつあるドラマテイスト、ムツソリーニ君へ

傳へて呉れ給へ。僕のフイウメ占領に對して、ヴエルサイユの、、と、葉卷のレッテルのやうなローマの政治家達が屈服したなら、次に、世界の貨幣制度に對する一大義勇軍を起す、と！（兵卒等に）一人の負傷者を劬はれ。注意深くその醜くい怪物の臓腑を剔くり取つたあとで、海の上に咲く大理石の花、ヴエネーチアの都へ向けて、その屍骸を捨て置け。明日、呪ひを籠めたわが飛行機からの爆弾は、軍事、怪物の錆び最後の一片までも粉碎するだらう。

――暗轉――

第四場

一九二〇年の夏。

ミラノ市に於けるロマノ製鐵會社の一部分。

右端に煉瓦造りの工場の入口がある。戸は破壊されたままになつて、外部の壁へ横に立てかけられてある。舞臺正面奥から左端へかけて、低い漆喰の灰色な壁。左端、壁の曲がつた處に門。この壁の圍んだ場所は廣場になつてゐて、種々の資材が積んである。

日光の加減で、工場の大煙筒が舞臺へ斜めに、ピザの斜塔みたやうに陰影を投げ、その煙筒のそれと共に、その傍らに掲げられた、旗の影もひらめく。

衝動的に機械が廻轉して、急に油切れのしたやうに礑と音響が終熄する。これが、時折この場の演出中に繰返へされる。

油蟬の聲。

勞働者五人、、、、を壁の曲がり角へ据ゑつけてゐる。續いて、資材の門をぴしんと閉める。

勞働者一　やはり壁へ孔をあけた方がいいと思ふがな。

勞働者二　大丈夫だ。おい、誰か臺を持つて來て呉れ。

勞働者三、四　よし來た。石油箱でいいな？

（工場の裏手へ廻はり去る。）

勞働者五　今に、、、も据ゑつけんといかんやうになるだらう。

勞働者一　馬鹿云ふな。ファシストにそんな力があるもんか？　そのうちにはカマンベーのフォルマジョみたよに一と潰れよ。

（勞働者三、四、各自に『スタンダード石油會社』の石油箱を二個づゝ持つて來る。續いて勞働者六、シャベルを持ち汗を拭きながら登場。）

勞働者六　おい、石炭がない！　作業中止だ！

勞働者五　スタンダード石油會社、、地中海を越して工場へ這入つてるんだからな。、、、、、、といふものは

恐ろしいもんだね。

勞働者三　それが俺達の工場委員會の戰鬪準備に役立つんだから皮肉なものさ。

勞働者六　石炭を送らねえのはイギリスの奴等だ。おい、こりや、呑氣に構へてゐちや迚も駄目だぞ。もし俺達がこの工場を運轉して行かなかつたら、折角、、して監視してゐる意義がないぢやないか！

勞働者四　ロシアが經濟的封鎖をされ、ベラ・クーンのハンガリアが兵糧攻めにされたのは、他人事ぢやないな！

勞働者一　ここへ旗を立てよう。

勞働者三　旗はデ・ニコラが本部へ取りに行つてる。

（勞働者七、八、九、十工場内から、巨きい鐵材を擔いで來る。）

勞働者六　おい、それをどうするんだ、まだほとぼりもさめないほどの鐵を？

勞働者七、八　賣りに行くんだ。軍資金が必要なんだ。

勞働者九　管理は俺達に任しておけ。君達は防備の方をやつてくれ。

勞働者一　したが途中でファシストの奴等に行當つたら大變だぞ！

勞働者十　何、來るもんか？　あいつら、どうせ團結なんかしてはしないんだ。あんな嚇しを云つて來ただけのものさ。おい、行かう。

勞働者七　門を開けろ！

（四人鐵材を擔ぎ去る。勞働者一、二、三、四土を掘り足場を拵へる。勞働者十一と十二、巨大な、、をころがして來る。一疋の犬それに戲れながら趁り出づ。）

勞働者十一　畜生ッ、ふざけるなよ！

勞働者六　又來たぜ！　おい、それも食つちまふのか？

勞働者十二　いやこいつは誰も引取りてがあるまい。門の傍へ威嚇のために立ててやるんだ。（門の傍へ行く。犬を叱る。犬、廣場の旗の影の動くのに飛びついて吼える。と、それをやめて、急に尻尾の尖端に痒みを覺えたかして、自分の尾に咬みつかうとする。幾度も尻尾を追ひかけても容易に目的を達することが出來ない。しまひに、犬は躍起となつて一つ處をくるくると獨樂のやうに廻はる。）

勞働者五　やい、畜生ッ、自分の尻尾を追ひかけてやがる。

勞働者六　何だか、俺達のやつてることによく似てるぜ。

勞働者一、二、三、四、五、十一、十二　何故？　（つめ寄る）

勞働者六　まゝ待て！　それはかうだ。この間も、、、、、、、、、、からの指令があつたらう。我々には、、、、は早いツて。しかし、マルテスタ一派が、、、にとつつかまつて、三月の會合以來かういふ戰術に出たんだが—

――そこだよ、イタリーは諸君も知つての通り天然の物資に乏しい國だ、それを俺達だけが無理矢理に、、をして見ても、折角の原動力たる石炭や石油を封せられるし、、、、、の提携で今に食物さへ缺乏して來るにちがひないんだ。見ろ、俺達イタリー勞働者は、、、、、、の壁（壁を指差す）に取圍まれて、自分で自分の尻尾（犬を指差す）であるところの貧弱な産業を追ひ廻はしてゐるんぢやないか！

勞働者一　君はいやに、、、、、、物の云ひやうをするね――はは、アわかつた、、、、、の感化だな。

勞働者二　俺達の統制を紊すやうな言葉はやめて果れ。

勞働者三　そんな御說敎はサン・ロレンツオの廣庭ででもやつて果れ。

勞働者五　ともかくこの犬を追拂はう。（無理に首輪を掴んで門外に追ひ遣る。）

（デ・ニコラ先頭に立つて、二十人ほどの勞働者が、大きい、、の下に隱れながら門外から聲を掛ける。、、の下の勞働者達の顏は見えない。）

デ・ニコラ　旗だ！　門を開けろ！

勞働者十二　よし、來た！

デ・ニコラ　旗をかざつて、町中を示威運動をしたからやつて來たよ。

（旗の下の勞働者達急遽に場内へ入る。）

デ・ニコラ　旗を捨てろ！

（勞働者達旗をかなぐり捨てる。勞働者と思つたのは、實は黑いシヤツを着、無帽で、太い棍棒を下げたファシスト團であつた、工場委員達愕然として退かる。）

デ・ニコラ　イタリーの、、は誰か？（團員に向つて）

團員一同　我々！

デ・ニコラ　ローマを、、、者は誰か？

團員一同　（もつと大きい聲で）我々？

デ・ニコラ　國家のために何時でも死を辭せない者は誰か？

團員一同　（棍棒を振り翳し）我々！

デ・ニコラ　然らば、諸君、突撃せよ！　最後の一人のボルシエヴイキまで殴くり飛ばせ！

（それまでに、工場の入口に逃げ込んでゐた勞働者の方から、、する者がある。ファシスト團員達、身を低く地に匍はせながら一吋二吋と進む。内部から器物や石片や煉瓦が飛んで來る。それを拾つてガラス戸を毀はす。）

勞働者の一人　（蔭から）デ・ニコラ、貴様、よくも俺達を裏切つたな！　（一發の銃聲と共にデ・ニコラ斃る）

ファシストの一人　貴様等、この工場をそつくりそのまま

引渡さばよし、さうでないとこの、、、、、、向けるぞ！　降れ！　、、を捨てて出て來い！　（砲聲）

ファシストの他の一人　裏口へ廻れ！（團員の半分、右奥へ壁傳ひに去る。あとの半分は矢庭に戸口から闖入する。格鬪の響。悲鳴。器物の破壞する音。物凄い爆發物の音響と共に、廣場に映つてゐた大煙筒の陰影が、ぎくりと曲がつて、根元から仆れる。舞臺一面に霧のやうな土煙りの粉末。煉瓦の破片。ファシストの一團。裏手から數人の勞働者が縛つて來る。それと呼應して、戸口からも數名の勞働者が、廣場をめがけて、、ばされる。ファシストの一人斃れてゐるデ・ニコラの死體から、一枚の大きい紙を取り出して、工場の入口に貼る）

ファシスト一　（讀む）我々ファシストは比例代表選擧權の實施を要求する。

ファシスト二　婦人の投票權並に選擧權。

ファシスト三　選擧人被選擧人に對する制限年齡の低下。

ファシスト四　、、、、、、。

ファシスト五　政治議會と並んで經濟議會の設立。

ファシスト六　、、、、、、。

ファシスト一同　萬歲！

（勞働者數人隊を見て門外に脫走する。ファシストの一隊喚聲を擧げて逐ひ出づ。他の一隊に、殘つた勞働者を、、、、仆す。）

勞働者六　俺達はあまりにムツソリーニを見縊つてゐた！

（方々に銃聲、突貫の聲。）

―― 幕 ――

第五場

一九二二年十月三十日。

戒嚴令下のローマ市。クリイナル宮殿附近の都門の城壁。正面に白灰色の大きい壁。中央にアーチ壁の大きい入口が割り拔いてある。入口からむかうには建物。大理石の石疊みに、壯麗な彫刻が施してある。木立稍黃ばんで、梢を城壁から露はす。

壁上は廣ろく、步けるやうになつてゐて、、、、、、、、。、、、、、、。

都門外は大廣場。午後。

イタリー王室の衞戍軍の本據が、壁内に置かれてある。通行人は、すべて入口の向ふへは這入れない。衞兵二人、門の左右に立つてゐる。門内には、、を擬した一隊の兵士達が見える。壁の上方の步道には、、、、、、、兵二人ほど左右から步み出で、中央にて出遇はすと再び取つて返へす。電話の音しきりなり。號外賣の

壁諸邊にかまびすしい。市民（若干の婦人をも加へて）二十名ほど珍らしさうに円を遠巻きにしてがや〳〵云ひ合つて居る。

市民一　（大きく『ムッソリーニ、ローマへ進來ろ！』と書いた號外を攅ろげて、市民二へ示してゐる）どうです、たうとうやつて來ましたな！

市民二　こりや、この分では世の中はどうなるこつてせう！

市民三　カムパニアの野は黒シャツで葡萄畑のやうにまつ黒ですよ。

女一　戰爭が起るんですか？（市民四へ向つて）

市民四　何だかわたしも面喰つてるところですよ。今朝、いつもの通りにトムボラの番號を買はうと思つて、起き拔けに出て見るとこの騷ぎなのですからね。

市民五　これは、貴下、一昨日から始まつてる騷ぎですよ。

市民四　いや、それ、實は私は一昨日からずつと呑み通しだつたのでね。

市民五　はゝはゝ、飛んだところで浦島太郎といふ奴ですね。

女一　（ほかの一團の男達に向ひ）戰爭でも始まるんですか？

市民七　、、の前がこの通りおやあ、、、、、、、ですよ。

市民八　いつたいこの黒シャツてのはなんですか？

市民九　茲二三年の間、方々の工場や新聞社が叩き潰はされに途方もない損害を蒙つたでせう、――あの連中ですよ。、、、だね。それが、貴下、、、、、でやらかすといふんだから凄いもんですよ。

女二　ムッソリーニていふ男はオルヴイエットのお寺にある鬼のやうな恐ろしい男ですつてね？

市民十一　そりやあお前、、、の親玉だもの。今に見な、、、、、、、しなさるぜ。

市民十二　いつたい總理大臣のファクタは何をしてるんだらう？

市民十三　何しろデイアズ將軍なら、どんな黒シャツでもひとたまりもなくやられますよ。

市民十四　（市民十五に向ひ）この連中は、腕の方が先で理窟はあとからこぢつけるんださうだね。

市民十五　あの新聞へ出てるの綱領なんぞを見ると、なかなか、、、、、なところもありますな。

學生一　（學生二に向ひ）青年よ、青年よ、美の泉よ！なんていやに文學的なマーチでやつてるんだが、やることはかなり惡辣だつてね。

學生二　黒シャツだけでなく、青シャツつて奴もいつしよになるんだつてね。

學生一　さつきの號外には、ボルダーダマンツィーナと會見

したさうだよ。もう來るだらう、テルミニからコルソの通りまで、ヴイア・ナツチヨラレは出迎ひの人間で一杯だよ。

婆さん（駈け出しながら）こりやあかうして居られぬわい。『嘆きの聖母樣』にお願ひして家財を疊んで、又貸家へでも歸へりませうわい。

市民達（異口同音に）來たぜ！ 來たぜ！（市民達一樣に視線を右に轉ず。左より入り來たる群集と一團になつて、右端を凝視す。彼等の叫び聲、驚嘆の聲、唸り聲など太い複線になつて舞臺一圓に渦を卷く。その音圏の上に、遠くの方で多數の人員が聲高に合唱する歌聲が聞える。城壁の上下及び內部に當つて、僅かに緊張せる號令の聲、軍人の發音など。、、、の內部には、、、、、、、を護りながら、一隊の兵士がぴたりと地上に匍匐す。一人の將校、双眼鏡を持ちてその後を徘徊す。彼れの背後にも一隊の兵士達隊伍を整へ居る。電話のベル、時折、群集からの雜音の途絶えた合間に、緊張せる音線を曳く、うわーツと物凄い喊聲――それは市民の歡呼の聲である。自動車の警笛左端に聞え、正裝せる總理大臣ファクタ、慌てて群集を從者二人に押退けさせながら登場す。ファクタは、酒肥りのした、蚤取眼の、カイゼル髭を生やした、態度の落ちつかぬ男である）

從者一（、、、の前へづかづかと進み）開けろ 開けろ。

從者二　總理大臣の御入(おい)でだ。

士官（づかづかと進み出で）總理大臣が何であらうと上官の命令には誰一人この門を通すことが出來ないことになつてゐます！

ファクタ　こら。御前は予の顏を見覺えぬか。

士官　一と月に二人も變る總理大臣のお顏はちよつと覺えにくう御座います。

ファクタ　新聞や雜誌の寫眞版に發表され過ぎるほど發表して置く予の顏を知らぬとは不埒な奴だ！ 予は、直ちにこれから、、、、、、、、、、、、、、、。強つて、、、を開かんとならば、予の自動車で押通つて見するぞ！

士官　總理大臣閣下、、、、といふものは、カルソの塹壕以來、、、、、、、を通はす習慣になつて居るので御座います。いか樣に閣下が仰せられるとも、上官の命令のなき以上はお通し申すことは出來ませぬ。強ひて御這入りなりたければ、陸軍大臣閣下へ御交涉になつて然るべき命令のあり次第取計ひませう。但しは、商人達の通用門になつて居りまする、街角の小門からお這りになるか？

ファクタ　うむ、うむ――怪しからん、不屆きな、予の浮

況にも拘る一刹那を、遮ぎり止めるとは！（脱いでゐた白き手袋を取つて烈しく、、、た打ちながら、足踏みする）よし、ダンテ、無念だが商人用の門へ廻はれ！　こんな陸軍大臣なら、今日から早速免職だ！（從者彼と共に去る）

士官　色男め、陸軍大臣を免職する前に自分の首、、、、、、することさ！（冷笑す）、、も、この頃は、、、、、、、で壓されてゐるんだ。ムツソリーニが來て、、、、、、、、はりでもしたら、どうなると思ふか！

群集　（右端より雪崩れを打つて、左端へ退き來たる。女子供の金切聲。男達の『ファッショ萬歲！　萬歲！』の聲。次第次第に群集水の如く左へ引き退くと、城門を鮮やかに見せる空間が出現する。間。――突然、多數の跫音と共に、ベニト・ムツソリーニ、無帽黑シャツの姿で先頭に現はれ、胸を張りて城門へ向つて進む。あとから四列縱隊にて、夥しい黑シャツ黨員が舞臺へ流れ込む。舞臺は忽ち幾重にも疊まれ四列縱隊のファッシスト黨員によつて充たされる。所どころに槍のついた國旗。ムツソリーニ左手を高くさし擧げて大呼す）

ムツソリーニ　我等は、茲にファッシスト黨員一百萬人の、、、、、、、を行つて、ローマへ進軍して來た。我等の主張は簡單である、――我等は、、、、、、、、、、、、、、、！（その時博士アントニオ何かをムツソリーニの耳へ囁く。ムツソリーニ領く）諸君、諸君は茲數時間のうちに腐敗せる、、、、に代つて、眞の、、、、、を持たんとしつつあるのだ！　門を開け！　門を開いて、この黑シャツのままで、、、、、、、、、、を乞ふこのベニト・ムツソリーニを入れよ！　我等はイタリーを滅亡の淵から救ふ爲、津々浦々から徹宵ローマへ進軍し來たつたイタリー國民である。我等の目的の爲めには、今や身命を拋つても、、、、、の下に働かうとしてゐるのだ！　再び云ふ、門を開け！　開いてイタリーの運命を泰山の泰きに置け！（博士アントニオ再びムツソリーニに囁く）見よ！　諸君は、、、、、、を護りつつある。我等は、國を思ふ赤忠のほかこの胸を掩ふ楯はない、我等の劍は正義である、我等の砲彈は忠節である、――、、、、、、、、、、、、、諸君は我等の肉體を滅ぼし得るとも、見えざる我等の楯、見えざる我等の劍、見えざる我等の巨彈を防ぐことは出來ない！　三度、我等は叫ぶ、門を開け！――（城門內に威かめしい軍服を着た將軍の姿が見える。二三語の命令ののち、、、、、、、、が速かに撤去される。城壁の上に一人の軍服を纏ふた、、の姿が、多數の、、、、を從へて現はれる）

ムツソリーニ　（叫ぶ）、、、、、、、、、、、、、！　イ

タリー萬歳！　フアッショ萬歳！

フアッショ團一同　萬歳！

（フアクタきよときよととして現はれる。シルクハットを取りて恭々しく城壁に向つて敬禮す。）

城門内の武官　ベニト・ムッソリーニ、、、には直ちに、、、、はられる！　そのままで苦しからぬ、歩み入れ！

（ムッソリーニ高く左手を擧ぐ、低く片膝を折る。フアクタ愕然たり）

フアシスト一同　萬歳！

（左端から驟雨の如き花と花環が一同の上へ降りかかる。ムッソリーニ大きく第一歩を踏み出した途端に軍人達捧げ銃にて。）

・

――幕――

第　六　場

或る架空的な、長い廊下。

六つほどのドアのある廊下である。壁には無數の太い大きい棍棒が立て掛けてある。うす暗らい怪魔的な廊下の長さに、整列された棍棒だけが、ぎらぎらと光る。一人の男、ドアの一から靜かに、音を偸んであらはれ、前後左右を見廻はしたのち、左端へ遁げて行かうとする。ドアの六からあらはれた一人の男、無言で第一の男の前へ立塞がる。二人は頬に接吻して、互に笑ひ合ふ。しかし隙を見て、第二の男、いきなり棍棒を取つて、第一の男を毆り仆ほす。第一の男甦る。ドアの二から第三の男あらはる。第二の男、再び第一の男に對すると同樣に、叮嚀に接吻して毆ぐる。二人の體は行儀よく左端にならぶ。第三のドアから第四の男出で、同じやうに撲殺される。第四のドアの第五の男、第五のドアの第六の男も同じ。五人の死體を眺め居る間に、第一のドアから第七の男あらはれ出で、接吻したる上に、第二の男を毆ぐる。第八の男、第二のドアより出で、やはり第二の男に毆ぐられる。かうして、第九、十、十一の三人も同じやうに撲殺される。廊下にならべられた十人程の死體の列を見て、第八の男、微笑む。すると、第三のドアから第十二の男出て來て、接吻の後、第八の男を撲殺す。同じことの無數の反復のうちに、舞臺全く暗らくなつて、幻影は忽焉として消え失す。……これらの行動の合間々々に狂的な大聲の哄笑が聞える。

――幕――

第　七　場

一九二四年の春。

ベラッツオ・キヂに於けるムッソリーニの官邸の一室。正面に重々しい絨毯を垂れた入口がある。室の壁は淡い澁色に塗られてある。中央に大きい楕圓形のテーブル。高價なる椅子十五脚ほどテーブルを圍み居る。その他、室内のシャンデリア、窓などよろしく。『勝利』の女神の像が隅に在る。

肅然とした空氣の中に、ムッソリーニ、テーブルの首席に立ち上がりながら、並び居る人達十三人ほどを熱心に指さし罵り居る。舞臺面一樣にもうろうとしてゐる。唯テーブルの周圍だけ死色のやうな神祕な光が漂つてゐる。

（注意、これより會議の場に至る迄は、大臣達太い腕を振り廻はしたり、亂暴に卓を叩いたりする必要がある。）

ムッソリーニ　（稍幻覺的な動作で）　おい、マリアノ、主筆マリアノ、お前、何の恨みがあつて會ひに來たのか？――ムリッツオ、いくらそんな顏をしたつて、俺は怖くはないんだ！（並び居る人達を一々指摘する。指先に烈しい顫ひあり）代議士のコリント、お前は見出されたときは首がなかつたつけな、犯人はあがつてゐる、――俺ぢやないんだ、俺ではない！　ドミノといふ奴は、お前のために丸一年の刑期を言ひ渡されてゐるんだ、ゴーリ、貴樣はそんな恐はい顏をしたつて、俺には、地獄へ墜ちたダンテよりもおそろしくはないぞ！

十三人の人間　（蒼白い顏を擡げて、一齊にムッソリーニの方へ詰め寄る）　、、の政治を止めろ！　、、――、、、、を止めろ！（その聲、不思議な餘韻を曳いて地の底までも沁み徹るやう）

ムッソリーニ　（大聲にて）　、、は、、のやうなものだ！　或る期間は、絕對に必要な、、だ！　、、を否定する奴は、皆、、のために仆れるぞ！　、、がなくてイタリーが救へると思ふか！　、、！――、、だッ！（ムッソリーニ憤然として十三人の人間の包圍するうちに、拳を振るひ足を上げて亂鬪する。人達次第にムッソリーニを襲うて、彼れの體を隅の大椅子の上へ運び込む）

（突然、頭上に燦然としてシャンデリアの光が點もる。まんどうに明るくなつた會議室の中に、十三人の閣員及び祕書官などに介抱されながら、ムッソリーニ暫く眼の前の何物かを拂ひ退けるやうな手付きで、茫然とした恐れを表情す。）

ジヨワニ　（現在はイタリーフアッシスト總本部の幹事である）　親方！　親方！――どうなすつた？　眩暈ひでも起されたのか。

ムッソリーニ　（はツと氣がつき）　おい、ジヨワニ、『親方』

だけは止めてくれよ！　どうも貧乏くさくていけない！統率とか、閣下とか何とかほかに威風堂々とした呼び方がありさうなものぢやないか？　（苦笑）

祕書官長ロツソニ　どうもこの田舍者には全く困るな。お前、そんな立派な身裝をしてゐる癖に國訛りをむき出しだなんて、ムツソリーニ內閣の恥だぜ。まるで昔の鐵道驛夫をやつてゐた氣持がまだ拔け切らないんだな！

陸軍大將バスコ　ジヨワニもさうだが、首相閣下もあまりむき出しぢやありませんか？

ムツソリーニ　——と云ふと？

文部大臣ゼンチロ　（胡麻鬍の老人）　こなひだ、アメリカの特命全權大使チヤイルド氏に御會見の折などは、些か脫線のやうでしたな。

勞働大臣ビアンチ　僕は考へるがね、先生はもつと民衆に恐はがられるやうに、——つまり睨みを利かせるために、微妙な群衆心理を、、、、必要があると思ふね。

海軍中將フエデリオ　わしも同感ぢや。つまりもちつと、、、かして戴きたいな。譬へば朝の散歩の折には、ちよいちよい動物園へでも馬を乘り入れられて、幸ひ彼處には、今年生れたばかりの獅子の仔がゐるから、あれでもひとつ手馴づけられて、イタリーの首相ムツソリーニ氏は、、、に、、、、當られて居るから、常々、、、、、、、、、、として、ローマの古武士のやうに、アンナに猛り狂ふ猛獸をも恐れぬちうな、、を、早い話が、あんたの弟さんにでも、、、、、書いて貰ふんですな。

文部大臣ゼンチロ　わしの方でも新しい小學校の讀本を拵へさせますについては、種々とナポレオンとの比較や、ガリバルヂー將軍との類似點などを、手際よく書かして見るつもりですよ。

陸軍大將バスコ　幸ひビアンチ君が首相によく似て居られるから、一つ決死的な勇氣をもつて、譬へばナポリからローマへの飛行とか、新しい軍艦の進水式とかいふ場合には、ムツソリーニさんそつくりな身裝をして、民衆の前で輕業師のやうな冒險をやられたら、どうでごわせう？

勞働大臣ビアンチ　それは引受けますが、いつそ首相の株までわしに讓つて下すつたらどうでせう？

ムツソリーニ　（笑ふ）　おい、君達、馬鹿もいい加減に休み休み云ふがいい。——それよりも、俺は擊劍の方をちと勉強しようと思つてゐる。鐵のやうなこの腕も、戰爭で負傷して歸へつてからといふものは、何となく冴えがなくなつたやうだよ。それに十二指腸もわづらつてゐる。誰か、この場で一つ俺の相手をして見るか？

文部大臣ゼンチロ　ははあ、それだけは御免蒙ります。——

何故と云へば、私達一同は首相にはきつと負けることに相談し合つて居りますからな。

大藏大臣アントニオ博士　冗談はさて措き、今日の閣議の方からきめて行かうぢやないか？

遞信大臣チザーレ　今日は、特別にわしと警視總監のザンボニ君との問題ですがな。――

ムッソリーニ　諸君着席して下さい。ザンボニ、何か又あのスツルツオの奴が蠢動でもし居つたか？　それとも外國へ逃げた筈のサルバニ博士でも歸つて來たのか？

警視總監ザンボニ　いや、そんなのなら何でもないんですよ、實は秘密出版の增えたことですよ！

ムッソリーニ　あれほど猿轡を嵌まして置いても、まだ亡者共がぐづぐづ吐かしてるのか？　それから思ふと、昔のローマの何とかいふ司法官、おいファリナ、あれは何と云つたつけな、――殘忍な、すべての違警罪者は死刑に處すと云つた奴よ？

司法大臣ファリナ。――ドラコマでせう？

ムッソリーニ　さうさう、その男だ。どうだい、ザンボニ、もう少し手嚴しくそのドラコマ式をやらうぢやないか。――凡ゆる出版物はファッシスト宣傳部の直轄下に在るべし、なんていふのはどうだ。

司法大臣ファリナ　秘密出版は發覺と同時に、裁判なしに無期徒刑、なぞは如何です？

警視總監ザンボニ　首相、實はその秘密出版書類を押收して、先刻次ぎの部屋へ持たして參つてあるんですが。驚いちやいけませんよ、二噸積みのトラックに十臺もあつたんです。それが、貴下、この一昨日の檢擧たけの分ですよ。ローマだけでね。ちよつと取寄せて御目に懸けませう、――そのサンプルをね。（ベルを鳴らす）

（次室から屬官一人現はる。警視總監彼に命ず。屬官退場。）

文部大臣ゼンチロ　ボルシエヴイキですか？

遞信大臣チザーレ　赤、黑、ピンク、薄桃色、灰色――實に各種類の思想が交つてゐるのですよ。

文部大臣ゼンチロ　まるでダヌンツイオ氏の初期の小說のやうですね。

（屬官下役五人に命じて、山のやうな秘密出版書類を運ばせる。書類うづ高くテーブルの上に山をなす。）

ムッソリーニ　（その一册を手に取り）や、マキシマリストのカセーラの奴めが、今度は愈々ボル臭い眞似をし始めたな！

司法大臣ファリナ　最も困るのは、閣下のファッシスト團組織以前の內情をあばくための秘密通信ですよ。これがさうです。（一束の書類を手渡す）

ムッソリーニ　誰だ誰だ、こんな馬鹿な事をしやがる奴は？

祕書官長ロッソニ　（覗きこみながら）　これは非道い！　よほど先生の內情を知つとる者がやり居るんですな。

ムッソリーニ　ザンボニ、目星はついてないか？　チエカは何の爲めに月給をむさぼつて居るのか、手が足りなけりや、憲兵を派遣してもいいぢやないか！

ザンボニ　どうも、もと活版屋をやつてゐたステファニといふ老爺らしくも思はれるのですが、家宅搜索をしても、活字一ケース出て來はしないんです。尾行は附けて居りますが、奴、近頃自動車の仲買をやつとるもので、軍用自動車のやうに素ばしこくて、往々にしてどこかへもぐり込んでしまふんです。

司法大臣ファリナ　そんなのは證據の有無に拘らず、わしの方から逮捕令を出してやるよ。

大藏大臣アントニオ博士　どうもそれは少し非道過ぎはしないか？　――民間の評判も、近頃は君達があまり苛辣な政策をするもんで芳んばしくないよ。わしはいつも諸君の行動の註釋者となつて居るので、仲々苦しい立場にあるんだ。諸君、もし諸君が政治的に事を運ばれようとするなら、もうちつと頭の方を働かして貰ひたいね。それに、モルガンの方の國債だつて、惡るく民衆の意見が反映すると、重大な破綻を來たさぬとも限らないからね。あのサルワニ教授なんぞの海外同志との文通などは、よく取締らんといけませんぞ。

ムッソリーニ　博士、富籤の方はだいぶ上がりますかな。

大藏大臣アントニオ博士　あれは、まあ、さう問題ぢやありませんよ。それよりも、一つ人氣を煽るために、ムッソリーニ閣下が御自分で出馬されて、鳴り物入りの活動寫眞でも撮られたら如何ですか？　それを、ファッシスト系の組織を持ちたがつてゐる、アメリカとか、イギリス、それから、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、相當に勞働運動なども發達しかかつて居るやうです、――ですから全然國情は異つてゐましても、滿更無いことでもない類似點、つまり人間の野獸性ですな、それも、、によつて型をきめられた、、、、、――それを煽れば自然とロンドンの銀相場だつて有利になりますし、モルガンとは犬猿の間にあるロックフエラア系の金融機關でさへも動かせますよ。

司法大臣ファリナ　何でも赤色、、、をやつつけるに越したことはないよ。それはナポリの向ふにヴエスヴイアスがいつも噴火してるよりもたしかなことだ。第一、奴等をやつつけて俺達に損のある試しはないよ。

ジョワニ　反革命、、なら、コルチヤツク、デニキン、ユ

ーデニッチ、ウランゲル、セメヨノフ、ペトルガ、ホルセー、ピルヅスキー、マナアヘイム――ああ、息が塞る――そいつ等の貧乏軍隊よりも、俺等のファッショ青年團の方が遙かにでつかい、、振りを見せてやるよ！――なあ、親方？

秘書官長ロッソー二　おい、いつお前はそんな學者になつたんだい？　、、、、、に失敗した最も奇妙奇天烈な標本をお前、田舎の婆が念珠の玉を數へるより良く呑み込んでゐるぢやないか？　偉らい、偉らい。

ジョワニ　いや、白状するが、實はこのパンフレットを讀み上げただけの話さ。（一同失笑）

ムッソリーニ　これから僕は、會見を望んで來た外國人四五名を引見することになつてゐるので、この閣議はまあこれぐらゐにして、萬事は司法大臣と、遞信大臣と、それから總監と、なるべくならアントニオ博士にも意見を徴して置いて、緊急に取締法案をでつちあげては呉れまいか。そして見つけ次第、びしびし、、、でやつつけることだ。（起ち上がる）では――今日はこれで散會としよう。ついでに、その先刻の、俺の昔の事を暴露してる奴だ、ザンボニ、そいつを至急捕へてくれ。（一同敬禮して起ち上がる。彼等靜かに二三人づつ連れだつて正面奥へ退場。シヤンデリアの光突然薄くなり、秘密出版文書の前に、腕組みをしながら坐つてゐるムッソリーニの姿を夢のやうに浮き立たせる光が何處かから發散するだけである。ムッソリーニ急に起ち上がつて、秘密出版文書の束を掴み取ると、いきなりその一つびとつを天井目がけて、驚くべき速さをもつて投げ上ぐ。動物的な呻吟。暫くして部屋中に散らばつた秘密出版文書のため、ムッソリーニの體の全部が掩はれ、首だけその間から出てゐる……その首は、大きく鰐のやうな口を開いたと思ふと、粗雜な聲で欠伸をする）

ムッソリーニ　（跳ね起きる。と、同時に、シヤンデリア再びまぶしく點る。ジョワニ奥より登場）あ――ア！

ジョワニ　親方、何を貴下はしてますか？　アオスタ公妃が、社會政策的慈善事業を廢止して、ファシスト直屬の赤十字社を建設する件でお目に懸られようつて、只今これへお見えになりますが――あの方はいつも美人だね、親方！

ムッソリーニ　（烈しく肩をゆすり）あ、いまのは夢か！　ジョワニ、貴樣、その『親方、親方』だけは止めねえか？　夢にまで、貴樣の親方がついて來やがる！　止めなかつたら、最近覺えたメリケンで、一つピザの塔の蜃氣樓の映つてゐる方を拜ましてやるぞ！

（ムッソリーニ拳鬪の眞似をしながら、逃げまはるジ

ヨワニを追ひかけ、稍威嚴を缺きたるポーズにて。）

——幕——

第八場

一九二四年の冬。

北伊ゼノヷに近いセストリ・ポネンテの造船ドック。その右端に太い木材を組み合はせた櫓が聳えてゐる。その木材の格子を透して、先下がりに海へ半ば浸つてゐる巨船の龍骨の一部が見える、櫓の或る部分に『禁煙』の札その邊一帶に、木屑やロープ、鐵線などが散らばつてゐる。重油の斑點。正面奥は廣いゼノヷ灣、雪もよひの空の下に、流動する鉛のやうな冬の海。アルプス下ろしの朔風が烈しい。正面中央は海岸になつてゐて、太い杭が亂雜に打ち込んであり、それらにケーブルが絡らましてある。町から吹き飛ばされるあらゆる塵埃新聞鉋屑など吹き寄せられて居る。左端は木造の見張小屋、そこにも『禁煙』の札が貼られてあり、機械の破損したパーツや、古い道具類などがその横手の壁へ立てかけてある。舞臺の前方は廣場。いろいろな機械の運轉する音、汽笛、鋲を打ちこむハンマアの音、勞働者の掛聲などで幕が開く。波の音。

舞臺しばらく空虚。

浮浪人一、マドロスパイプを燻らしながら左から登場。暫く海を見廻はしたりドックの方へ歩いて行つたりする。浮浪人二寒さうに肩をすぼめながら右より出て來たり、途中にて浮浪人一と出遇はす。

浮浪人二　やり切れねえな、かう寒くちやあ。お前、すまねえが、一寸一服喫はして呉れねえか？　他人の喫つてるのを見ると、生命を三年縮めても喫ひたくなるでな。

浮浪人一　（パイプを渡さうとして）おお、お前はドミノぢあねえか？

浮浪人二　（驚き）さういふお前はフオルニだつたか？

浮浪人一　どうしてそんな乞食のやうな身裝をして、處もあらうにこんな造船所へ流れ込んだんだい。

浮浪人二　（旨さうに煙草を吸ひながら、四邊を見廻はして）俺も飛んだ事にかかりあつてな——二た月前にやつと牢屋を出たばかりさ。お前知つてるだらう、あのマキシマリストのゴーリを殺つつけた罪でさ。——それがお前、大聲ぢあ云はれないが、親方の命令でなんたせ。當り前ならば、骨折としてたんまり金でも貰つて、地方の役員にでもさされるといふ寸法なんだが、俺がそれ、お前も知つてる通り少し口喧ましい方だらう、だもんで、牢屋を出るといきなり、誰の差し金かは知らねえが、五六

人のファッショの奴等が尾けねらつて來て、すんでのことに頭を鉢割られるところさ。——仕方がねえから、俺あいろいろに姿を變へて、こいつは何でもファッショに恨みを持つてる土地へ逃げこむに限ると思つて、貨物列車へ乘つてからに、ゼノヴまでは落ちのびたが、彼處はボルシエヴイキが旺んなもんだで、運惡くムッソリーニが、わざわざローマから乘り込んでお祭り騷ぎをおつぱじめるところへ、出遇はしたわけさ。

浮浪人一　それでお前がここへ來たわけか？

浮浪人二　それが一週間前さ。仕事もなし、かうなつたら搔つ浚ひでも盜人でも、何でもするつもりではゐるんだが、ムッソリーニの野郎の遣り口で、イタリー中は空家同然になつてやがるし、ちつと目星しい邸といひやどれもこれも憲兵や巡査が見てやがるし……。

浮浪人一　それに、このドックぢあ、今にもストライキが始まらうとしてやがるんだしな。

浮浪人二　でも、ここに働いてゐる奴等はみんなファッショの勞働組合の連中ぢあないのか？

浮浪人一　ファッショの勞働組合だつて、賃銀は下げられるし、八時間勞働は止めてしまひ、ほんとのところは十時間も十二時間も働かされて、、、、、、だとか、、、の高度の利益たとか、妙なことを云つちあ、その賃船會社の親玉の懷ろを肥やしてるんだからな。——いくら造船工だつて、生れるとからファッシストになつて、臍へ勳章をぶら下げたり、黑シヤツを着たりして來るものであるめえ。

浮浪人二　さうか、道理でこの町は變挺にさびれてゐると思つたよ。路傍に小便の臭ひこそすれ、マカロニ一片れ落つこちては居やがらねえ。酒場もはしやくぢやなし、料理屋に乾酪(フォルマショ)の匂ひもしねえ。

浮浪人一　今に見ろ、どえれえ事がこの邊でおつぱじまるにちげねえから。

（武裝したファシスト軍人團十人ばかり急いで左から右端へ通り過ぎる。浮浪人慌てて海の方へ向く。）

浮浪人一　大丈夫だよ。この邊の軍人團は、皆ムッソリーニに反對なんださうだ。——お前、一つ何か持ちあがつたら先刻の身上話を皆へしてやれよ！

浮浪人二　してもいいが、ほんとに大丈夫かい？　俺の人相書はとつくに廻はつてゐるんだがな。

浮浪人一　大丈夫とも。このボルデイガの乾分のフォルニでさへも、かうやつて隙があつたら造船工へ近づかうとして、大手を振つてドックをふらぶらしてるんだもの。

（突如右端の新造中の船腹中に何やら大きい聲をする者があつて、一群の勞働者が櫓の蔭から現はれて來る。）

口口に聲高く罵り騒ぐ。）

勞働者一　ギアコモに話させろ！

勞働者二　それぢあ云はう。

勞働者三　あの櫓へ昇れ。

勞働者四　さうだ、ローマの方を睨めてやれ！（勞働者二櫓へ昇る）

勞働者二　諸君、俺は千九百十九年三月以來、ファッショ・ファリノデ・コンバッテメントに席を置いた者だ。その時俺達の同志ベニト・ムッソリーニは『、、、、、の、、、、、の爲めの鬪爭』といふモットオを旗へ書いたものだつた。そしてその綱領には、八時間勞働の確立、勞働者の、、、、最低賃銀の設定、子供や老人の保護――それから資本家税、坊主の財産を差押へる、常備軍は撤廢する、武器や砲兵工廠は國營にする――つまり、、、、、、、、、、を建設する、その爲めの變革だと云つた。ところが、ムッソリーニが、ローマへ這入つて、あのシルクハットを被りやがつてから、たつた七ヶ月、諸君、いゝか、たつた七ヶ月で奴は今云つた綱領の一つびとつを、パラッツオ・キギの紙屑籠の中へ投り込んでしまつたんだ。見ろ、今日、俺達は『能率的な八時間』だなんて變な名目の下に、物を食ふ時間も晝の休みも拔きにした、ほんとうのことを云へば、ざつと十時間以上の勞働を要求されてゐるのだ。それから、資本家税どころか、それは止めてしまつて、勞働者に税金を出させて、あの變挺な勳章やら制服やら、妙な帽子などを被らせるお祭り騒ぎの費用にしてやがるぢやないか！　俺はファッシストだ。しかも最初からのコムバッテメントなのだ。しかし、諸君、ナポリのファッシスト鐵道從業員は、ストライキを起さなかつたか？　ナポリで首を切られた四百人の廢兵團は、ムッソリーニの目の前で示威運動をしようと思つて、ローマへ進軍した時、憲兵の爲めに捕縛されなかつたか？　ムッソリーニの野郎が勝手にきめやがつた『階級協和』に、、するために、モンファルコーネの勞働者はストライキを起さなかつたか？　ノバラの百姓達は、、、、、、、、して地主に渡さなかつたのだが、諸君、あれはやはりファッシストだつたのだぞ！　又ナポリのボスコリーレの百姓は、ムッソリーニへの面當てに、、、、、、、、し、、、へ、、、かけなかつたか？　俺はかういふファッショ内部の内訌を數へあげると、百も二百も述べることが出來る。俺達はファッシストであるからと云つて、約束を蹂躙つた、、俺達を賣つてまで己れが獨り樂な事をしてやがる變節漢、プロレタリアの、、の名によつて小ブルジョアの支持を得ると、いきなりブルジョアの、、に旗色を變へた卑劣漢を排斥する

ことに躊躇しちやいかん！

勞働者多數　ブラボー！

勞働者二　話が少し大まかになつたが、もつとムツソリーニのことをあばき出すとなると、俺はムツソリーニの片腕とたのまれた創業以來の親友ロツソニを知つてゐる。この男は、諸君は知るまいが、今『追憶記』を書いたために、危く殺されるところを、やつとロシアまで逃げのびたんだ。かういふ風に、フアッショの名を藉りて、俺達の、、、、、、、、、、とプロパガンダだけで、イタリー國民が無事平穩に治まつて居るやうな獨裁をつくつてゐるんだ！　見ろ、今日フアッシストの機關紙でない新聞が、イタリーの何處にあるか？　あつたとしても、暴徒の襲撃に遇つて、蟲の息でゐるだけの話だ。毎年フアツシスト團の結成記念日に、どの都會で催される觀兵式でも、威勢のいい附景氣の掛け聲以外に、そこには何があるか？　あんな、、、、、の貧弱な偽似事の裏に積は、俺達勞働者の搾取、、、、、、、、、、、、、、、、、地方農民の零落、——それらは、諸君は見まいとしても見ぬわけにはいかない。今、俺達は、戰爭以來のストライキ又ストライキ、クーデーターにクーデーターを重ねられ、幾十度かサンヂカリストの唆かしに遇つて、サボタージユやメリー・ゴー・ラウンドのやうな、、、、をやり過ぎるほどやつて來た。慘敗に慘敗を重ね、幾度か死にかかつて土壇場の戰線まで追ひ詰められた俺達は、苦が苦がしい多年の經驗から何を得たか？　それは、カセーラや、ギイド一派のマキシマリストの說く經濟鬪爭の戰術ではない！　何となれば、あの經濟鬪爭こそ俺達を今日の悲慘な境遇に導いたのだから。——諸君よ、ここだ、俺達は政治的に鬪はねばならないんだ！

勞働者多數　政治的だ！

（フアッシスト軍人團右から現はれ、勞働者と一團になる。）

勞働者二　今俺達の仲間へ、軍人も加はつた。軍人諸君よ、俺の話を聽く前に、諸君は諸君の兄弟である俺達勞働者と、一旦非常な場合になつたら、いつしよに手を繋いで鬪ふ勇氣があるか、それを聽かせろ？

軍人團　ある、ある！

勞働者二　よし。それならもつと話さう——。

浮浪人二　待て、俺にも話さしてくれ。

勞働者三　お前は誰だ？

浮浪人二　俺はマキシマリストのゴーリを、ムツソリーニに頼まれて殺ろして、そして今ムツソリーニに殺つされようとしてゐるドミノと云ふ者だ。

勞働者四　やれ、やれ！

労働者二　よからう、俺達がこれからストライキをやる前に、もう少し唐辛子を振りかけるのもいいかも知れない。上がれ、代らう！（浮浪人二と入れ代る）

浮浪人二（手を振りて正に發言せんとする刹那、何處からかピストルの音がして櫓から轉ろげ落ちる）

（ファシスト憲兵士官左の見張小屋から現はれる。續いて憲兵數名。その一人手にした旗を高く振ると、左端からファシスト軍人團及び多數の憲兵、、、して一團へ襲ひかかる。勞働者達と反逆組の軍人團は、どやどやと右奥へ逃げ込む。憲兵士官は烈しく下知しながら、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、勞働者二銑を揮つて、船のケーブルを截る。士官の放てるピストルによつて射落さる。勞働者の三彼に代る。勞働者の三同じく仆る。勞働者の四再び銑を取る。偉大なる音響と共に巨船ずるずると滑べり行き、烈しい水音と共に、櫓の一部を覆仆しながら海へ墜ちる。船内より勞働者達の歡呼の聲陸上の兵士憲兵達の狼狽するがままに。）

——幕——

第九場

一九二六年の春。

ナポリの街上。

左に廣場へ向ふ數段の石段。舞臺正面奥にはホテルの壁。二階一階の窓八つほど、皆鎖されて、カーテンが下りてゐる。右端から正面の前方へかけて凸字形の大理石の欄干。その上にギリシャ式の花鉢があつて、適宜な彫刻が施されてゐる。ホテルの壁と欄干との間は廣い通路。ホテルの入口は、町角を廻る心にて、前方からは見えない。イタリー國旗及びファッシスト團旗がけばけばしく舞臺の上方に交叉されてある。電車の音、自動車の警笛、都會の漠然とした雜音など。

市民六七人賑かに話しながら右より左へ通過し行く。勞働者四五人欄干に凭れながら、ひそひそ囁き居る。浮浪人に變裝した憲兵一人市民の後を追ひ、半ばにして、勞働者の方へ耳を傾け立ち停まる。

市民一　あなたは運がいいんぢや。わしなんざあ幾度買つても政府を儲けさすだけのものさ。

市民二　なんの、それが行き當りばつたり主義でね。政府の政策ぢやないが、がむしやらに當つて見るだけですよ。

市民三　いや、がむしやらは、イタリー人の特質でせうって。高い聲ぢあ云はれないが、富籤(トムボラ)の番號とムッソリーニの政治は、どつちもイタリー人らしい、、、、、、

、、、、ですよ。

市民四　『統率』は、愈よ陸海軍の大臣も、外務大臣も、獨りで兼任することにしたんだつてね。

市民五　（階段を昇りながら）しかし、わしは、あの精力には感心しますね。朝は六時から起きて馬に乘るし、動物園へ行つちや獅子の仔を撫でるし、八時からは外務省で國事を見るし、それがあんた夜の十二時頃までも續くんださうだからね。

市民一　そりあさうですよ。何せ元は新聞記者だつたんだから、毎朝山のやうな新聞に眼を通さぬと氣持が惡いんださうだからね。

勞働者一　叱つ！（背後の浮浪人をさす）

勞働者二　行かう。また（わざと大聲にて）統率閣下にはお見えにならんやうだから。

勞働者三　おつつけ兵隊が出始めると混み合つてとても歩けぬやうになるかも知れない。

勞働者一　さうさう。歸つて今日はゆつくり骨休めをしよう。（勞働者右へ去る）

市民三　あれ、やつて來ましたぜ。急いで通らないと、今にふさがれてしまひますよ。（左へ去る。浮浪人に變裝した憲兵、勞働者の後を追うて右へ去る）

（黑きヴエールを垂れた黑裝束の暗殺者、急ぎ左より登場、右奧へ素早く歩み去る。遠くに合唱の聲。憲兵二人右より左へ横切り去る、ファシスト團員二十人ほど國旗を持ちて左より右へ四列縱隊にて通り行く。爆竹の音。萬歳の聲四方より響く。團員達片手を差し上げて『萬歳』と叫ぶ。ホテルの八つの窓が急に開かれて、カーテンを分けながら市民や女達の顏が現はれる。その中に、二階の一つの窓から、先刻の黑裝束の女顏を現はして、頻りに左方を狙ひ居る。その窓には、外に人影はない。）

（ムッソリーニ、ファリナやザンボニやバスコ大將及びアントニオ博士その他の幕僚に圍まれながら、左端より階段を下り來たる。シルクハットに美々しきモーニング、胸に白薔薇をつけ、手に白手套を握り、頻りに服の皺を氣にしながら歩む。一としきり萬歳の聲。ムッソリーニ片手を擧げてこれに答へる。窓の人達熱狂して手を振る。先刻の勞働者達再び右端より現はれ、何やら新聞紙に包みたる物を手から手へ渡し頷き合ふ。浮浪人に變裝した憲兵、他の憲兵五人と共に彼等を追跡し來たり、勞働者一が片手を擧げて『ファッショ萬歳』と叫んだのを合圖に、勞働者二が突進せんとした刹那背後から捕へる。この時、轟然とピストルの音が、ホテルの窓から響き、黑裝束の女姿を消す。勞

働者達と憲兵との格闘とに氣を取られてゐたムツソリーニは、顏をそ向けたために、危く狙撃を免がる。この瞬間、舞臺のあらゆる方面から軍人、憲兵、警官、ファッシスト團員、市民達など無數に集まり來たり、中央のムツソリーニ等を取り圍む。）

ファリナ　統率、やられましたか？

ザンボニ　おい、愚圖々々してゐちやあいけん、早く犯人を捕縛せい！（憲兵達右へ急ぎ去る）

ムツソリーニ（手を面部へ當て暫くビアンチに抱へられたまゝ苦悶してゐる。ビアンチ彼れのポケットから手巾を取出して渡す。手巾みるみる赤くなる）

市民一　顏をやられた！

市民二　撃つたのは誰ですか？

市民三　彼處の窓からですよ。私は確かに見ました――女です、黒い帽子を被つた女です。

市民四　ありあホテルぢやありませんか？

市民五　逃げたかな？　女とは――不敵な奴もあるものですな。

ザンボニ（憲兵達と爭ひ居る勞働者達を見て）何だそれは？――そい奴が撃つたのか？

憲兵一（勞働者二の持てる紙包みを取り上げ）これは違ふんです、この野郎は、、で統率を暗殺しようとしたんです。

憲兵二　共謀者にちがひありません。

浮浪人に變装した憲兵　僕は前からこ奴らを社會主義新聞社から尾けて來たんですが、確かにやらうとしてゐたにちがひありません。

ムツソリーニ（鼻に手を當てたまま）何人と雖も俺を殺してはならない！

（ムツソリーニの聲に應じて、幕僚達を先立てて團員憲兵等猛然と勞働者達に肉迫し、或る者は短刀を閃めかして刺さうとする。その時、ザンボニ大聲にて叫ぶ。）

ザンボニ（新聞包みの中の林檎を取り出し、高く振りながら）待て、待て！　こりや違つた！　待ていつ！

（一人の團員勞働者の一を刺す。勞働者一欄干の上に仰けぞつて、絶叫しながら前へ落ちる。ムツソリーニ人々の差し出す手巾（ハンケチ）を受取つて、續けざまに取り換へる。）

市民八　その血の附いた手巾（ハンケチ）を下さい！

市民五　偉い統率の血だ！

ファッシスト團員　キリスト様の聖血よりも有り難い記念だ！

バスコ大將　ですから今日はビアンチが旨くやつてくれ、

ばいゝと思つたのに！

ムツソリーニ　鼻だ！　鼻だ！　鼻を撃たれただけだ！

ジヨソニ　取り敢へず醫者の家までお出で下さい。

（一同右へ流れ込む途端に、右奥から數名の警官、暗殺者を拉して來たる。一同『殺ろせ！　私刑に處せ！』と叫ぶ。暗殺者ずたずたに裂かれたヴエールの間から、緊張した蒼白い顏を向けて、始めてムツソリーニと對面する。）

ムツソリーニ　何だこれは？

警官一　英國の婦人です。――貴族ださうです。ギブソンと云ふ者で、閣下にひどく敵意を持つとるらしいのです！

ムツソリーニ　こら、お前は外國人の身を以つてこのイタリーの復興者に何の恨みがあるのか？　云へ！　予はお前の國語は解るんだ。さては共産黨一味に示唆されたにちがひあるまい！

暗殺者　（極度の昂奮にヒステリツクになつて唯口を開閉して荒い呼吸を吐くだけである）

ザンボニ　閣下、どうもこの女は、多少精神に異狀がある樣に見受けられます。

（新聞記者數人人を分けて近づく。ムツソリーニに敬意を表しながら、幕僚の誰彼に事件の顚末を訊ねる。）

ムツソリーニ　俺は醫者へ行くほどのことはない。神聖なローマのためには、いつも生命は捨てゝゐるつもりだ！　鼻が何だ！　これからナポリの市民に對して、この出を告げよう。その婦人は直ちに拘引しろ！

新聞記者達　（欄干より落された勞働者を發見しまだ憲兵等によつて捕はれ居る他の勞働者達をも見て）これらは同犯者でせうな？（記者の一人はキヤメラを向けて勞働者一の死骸を寫す）

ザンボニ　（慌てて新聞記者のキヤメラを奪ひ取り）こらツ、この方は何でもないんぢや！　これを書き立ててはならんぞ！　醉つぱらひだ、仲間同志で喧嘩してそこへ落つこちたのだ。今日のパレードに治安を紊す奴なので、な、一寸抑へたまでさ。――解つたか？　それよりも、その女のことを書き立てい！（新聞記者一同顏を見合はせながら去る）

ムツソリーニ　然らば予は直ちにナポリ市民へ身自ら立つて告げよう！（右端へ歩み寄る。幕僚達慌ててピアンチの山高帽子とムツソリーニのシルクハツトを取り換へる。ムツソリーニ退場。右端に鯨波のやうな萬歲の聲。憲兵達勞働者達を押しこくりながら同じく退場。フアツシスト團、幕僚達、市民の群、兵士等どやどやと退場）

暗殺者　（手錠を下ろされ警官達に押しやられながら、振り

かへつて大聲にて）私はジュピターの像で鼻の缺けたのを見た！『勝利』の女神の巨像には首がない。

警官達　えいッ、歩め！

——幕——

第十場

程遠からぬ過去。

曠野に立てる古ローマの廢墟。秋。右奥から正面奥へかけて峨々とした古壁。不規則な角度に缺け落ちた岩に、紅葉した蔦かづらが絡んでゐる。壁の中央は、ぎざぎざになつた、古の凱旋門の跡。奥に曝れた圓柱。それに遮られながらも、廣々とした秋の野が遙かに地平線まで擴がつてゐる。所々に燒けこげたやうな土の斷層が見え、ひよろ長い絲杉と笠松とが濃綠の點綴を見せてゐる。

舞臺の左右に、同じ絲杉の木立が聳えてゐる。ほどよき場所に取り崩された礎の根が殘つてゐる。

烈しい秋の日ざしが晶々と照らしてゐる。蟲の聲。風の音。

映畫監督と撮影技師二人二脚の活動寫眞機をかつぎながら正面から出て來る。

監督　（中央にて立ち停まり、メガフォンを望遠鏡代りにしてそちこちと検分する）統率閣下の厳命だから、一寸でも變な事があつたらハンドルを止めて貰ひたい。いゝか、こりあ與太な探偵物なんぞとちがつて、外國へ宣傳のために送る寫眞なんだから、お互ひにしつかりしなきあいかん。

（技師達頷きながら連れ立つて右端へ退場。農夫五人左より歩み來たる。）

農夫一　どうも觀兵式だの、分列式だのと云つて、あの妙な身裝をしやあがつた若造どもにかう畑を荒らされちやあやり切れねえな。

農夫二　さうよ、おらあとこの麥畑や麥よりも兵隊の靴跡の方が多かつただよ。

農夫三　外國から小麥やよこされえちう話ぢやあねえか？小麥を送らんちうもんださうだね。

農夫四　アメリカぢや、えらくムッソリーニに腹立てゝるやうなものだ。

農夫五　このぶんぢあ、戰さがなくとも、毎日戰さしてゐるやうなものだ。

（がやがや云ひ合ひながら農夫等去る。中空に飛行機の音しきりにす、勞働者三人蒼白き顏にて右端より入り來り、何かを待ち居るものゝ如く、その邊を見廻す。）

勞働者一　まだ來ないな？

労働者二　川を越したのを見たから、もう追つつけ來るこつたらうよ。

労働者三　何だかお前いやに胴震ひしてやがるぢやあねえか？

労働者二　ほんとの事を云ひあ胴震ひもするよ。

労働者一　（労働者三に向ひて）　さういふお前だつて、、、、てるぜ。

労働者三　俺等恐ろしい、恐ろしいが、この恐ろしさはブルジョア階級一般に對する恐れだよ。

労働者一　その、、と、、、とへな——

労働者二　しかし、どうしても、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

労働者三　、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、やるつもりだ！

労働者一　、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、機嫌さへよけりや聽いてくれるかも知れない。

労働者二　俺も角この邊の木蔭へ隱れてゐることにしよう。（労働者達左端へ退場）

（ムッソリーニ、ムッソリーニ夫人と何か云ひあひながら正面凱旋門の中から現はる　幕僚達數歩さがつて續いて登場。）

ムッソリーニ　解らない人だね。——今日のは外國へやる映畫なんだから、そんなに無理な事を云はないでくれ。

ムッソリーニ夫人　だつて、貴下、今まで一度も私は貴下と御一緒で寫して戴いたことはないぢやありませんの？ねえ、後生だから一度撮らせて頂戴な。

ムッソリーニ　君は、あのアメリカの大統領ウイルソンのことでも考へてゐるんだらう？　あのにやけた人道主義者なら一度目の妻君を何處までも引つ張つて出たんだが。

ムッソリーニ夫人　あの方は特別なんですよ。奧さんがおつきにならなければならないやうな理由がおありになつたんでせう。この場合はちがひます。

ムッソリーニ　（少しいらいらしながら不機嫌に）　おい、昔からローマの婦人は男性のための美しい奴隷に過ぎなかつたんだぞ！——そして、今でも！　女は、美しくて、男を內助さへすりあいいんだ。俺の人口政策を見るがいい。生めよ殖えよ、永遠の都ローマをして世界の冠都たらしめんがために、女性は先づ良き子を生み、偉大なる男兒を育て、偉大なるファッシストたらしめるだけの任務を持つてゐるのだ！

ムッソリーニ夫人　（足踏みしながら）　よござんす、又貴下の御演說ですのね。

ムツソリーニ　それよりは、ね、アスオタ妃殿下の赤十字の方でももつとお援けして上げてくれないか？

ムツソリーニ夫人　よござんすわ。歸へります。――ああつまらない、せつかくここまでお供して來たのに。ぢあ、あの自動車は後ほど又差し上げますから、私あれへ乘つて歸へります。

ムツソリーニ　べつにそんなに腹を立てて歸らんでもいいのだよ。唯フイルムの中へさへ這入らなけりあ立つて見てゐたつて構ひやしないよ。

ムツソリーニ夫人　（歸へりかかつて）どうせ私なんぞはものの數ぢやないんですもの ね。『婦人の居場所はホーム』でせうよ！　ぢあ、お大事に――勳章をよく出してお置きにならないと、又ボロニアで狙はれたやうに大變なことにおなりですよ！　（正面より去る）

ムツソリーニ　し樣がない奴だ。（舞臺右方へ向つて手を擧ぐ。四方より萬歲の聲起る。、、、、、、、、、、、、、、、）

勞働者三人　、、、、、、、、、、、、、、、、、、！
（、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、）

ムツソリーニ　、、？――、、、、、、、、、、、？

勞働者一　、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

勞働者二　、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、！

勞働者三　、、、、、、、、、、、、、、、、、、、？――、、、、、、、、、、、、、、、。

勞働者一　、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

勞働者二　、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

勞働者二　閣下も以前は勞働者でいらつしやいました。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、！

勞働者一　あの者達、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

ムツソリーニ　（暫く三人の者達が小腰を踞めて、、、、、、、、りながら）お前達は、お前達のその貧弱な演話のために、今この、、、の時間を差し止め、そのために莫大な費用を浪費してゐるのを知らんのか？　しかも、今日の、、、は、いつものやうにフアツシヨの訓練といふだけではない――外國へ向けてのイタリー復興の實寫としての大映畫を製作するために、かくいふ予が自ら先頭に立つて、、、、、、、、、、敢行する勇氣のない、一大宣傳フイルムを映出する場合ためだ。國家にと

つての一大事、此上もないイタリー國民の光榮の場合に、見れば、ファッショの服裝をせず、わざわざ勞働に從事すべき貴重なる時間を浪費して、遙るばるとこんな場所へやつて來るとは何事だ？　下が勞働者であつた、サンヂカリストであつた、それに一々拘泥して國務を處理して行つたなら、この光榮あるイタリーの國家は、二日にして爆彈の製造所に變化して居るだらう。――それに、、、、、、、、、、、、、、は、親しく『アバンテ』社に出入してゐた、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、。――ザンボニ、この、、、共を引き摺れ！

（ザンボニ數名の憲兵及び警官に三人を捕縛せしむ。）

勞働者一　、、ムッソリ！　ニ！

勞働者二　ネロよりも非道い奴だ！

勞働者三　ボルヂア一黨だつて、貴樣の前では善人だ！

勞働者一　ベニト一人きりで大きな顔をするな、かうなつたから云つて聽かせるが、俺達は一人ぢやあないんだぞ！

勞働者二　仲間が川向ふに待つてゐるんだ。俺達の歸へりが遲ければお手筈がちやあんときめてあつて、電報一つでイタリー中の、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、をやることになつてゐるんだ！

勞働者三　俺達は、、、だ！　たつた三人の貧弱な勞働者だが、この三人の後ろには、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、機會を待つてゐるんだ！

勞働者一　それでも貴樣は、、するつもりか？

勞働者二　やるか？

勞働者三　俺達を、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

勞働者三人（異口同音に）　やるならやつて見ろ！

ザンボニ　（憤然）　この、、、め、憎んでもあまりある奴等だ！　ファッショの一大組織に、、、、、しよつたな！　引けい！　統率は生ぬるい、俺の獨斷で、、、、、、、、！　それも、、、、、、、、！

（憲兵警官達三人を引き行かんとす。この時撮影監督と二人の技師右端から現はる。監督は寂びた聲をメガホンで强調しながら一同へ訊ねる。）

監督　これも映畫の中へ這入るんですか？

ムッソリーニ　（振りかへり）　冗談であない、こんな事を映されてたまるものか！

アントニオ博士　（監督へ向ひ）　お前、すると先刻からつゝ、ムッソリーニ令夫人とのお話の方も映して居るのか？

監督　ええ。門をお出になると、もうあれでいいのだと心

得たものですから、ずつと遠景撮影に取りかかつて居りますでな。

ゼンチロ　そりあ大變た、皆カットせにあならんぞ！　いいかお前が映していいのは、飛行機だとか、軍艦だとか、觀兵式だとか、ファッショが何十萬となく集まつて、統率閣下の熱烈な愛國的御演說に氣も狂はんばかりに燃え上がつた瞬間とか、なるたけさういふ國家的大事件――平たく云へば、景氣のいい場面、それを映すのぢや。その方も懇々と係りの者から云はれて居る筈ぢやないか！

監督　實はさう仰曰られると私の方も困る事があるんです。――他でもありませんが、その方（ビアンチを指さし）と統率閣下と、どちらがほんとの統率閣下であるやら、大映しにでもしなければ一寸失禮なお話でございますが、見分けがつかないのでございます。これも昨日も係りのお役人へよく申上げまして、なるたけ統率閣下だけはお獨りで、ほかの方々から多少お離れになつてお映しなさるやうに申したのでございます。ところが今のやうな場合でございますと、皆樣がごたごたお集まりになるもので、キヤメラ・ウアークが殊の外困難なのでございます。

ジヨワニ　いけすかない野郎だな。親方がビアンチに似てゐる、ビアンチが親方のやうな風をしてゐる――、、、、、、、、、、、、、、。手前らの知つたこつちあない、下らぬことを云ふとファッショ、、、へ引渡すぞ！

監督（蒼くなつて縮み上がり）そ、そ、それは、それだけはどうぞ御勘辨！　生きながらヴエスヴイアスの噴火口へ飛び込むも同然でございます！

撮影技師一　だから、貴下は口が多いといふんですよ。いくら監督だつて、まるでメガフオンのやうな口をしてゐなさるんだもの。

ムツソリーニ　ああ、かうごたごたしてはやり切れん！　皆退け！　寫眞屋、新しくやり直せ！　それから、ザンボニその三人は、お前の判斷に委せるとしよう――憎むべき奴等だ！

（一同それぞれの場所へ引き返へす。――活動寫眞技師と監督は右へ、ムツソリーニと警官達は正面奥へ。）

ザンボニ（憲兵伍長へ向ひ、三人の捕虜を引渡しながら）ではしかとこの火喰鳥を渡したぞ！　醜いものがキヤメラの中へ這入るといけないから、そこの森の中で、、、、、、、！　、、、、、、、、、、、俺は、南京蟲が三匹潰されたものと思つて、安心するよ。（憲兵伍長、警官を殘し、手下の憲兵三人を引連れて、勞働者三人に繩を打つたまま引つ張り行く。左へ退場。ザンボニ、見返りながらせせら笑つて警官達と退場。）

（間。）

（ムッソリーニ正面の凱旋門より氣取つた態度で歩み出で、左手を高く差しのべ。）

ムッソリーニ　アララ！　ファッショ萬歲！　イタリー王國萬歲！（右端達方へ向つて）おーい、始め！（牡鶏の如く歩み出す。）

（幕僚達四列縦隊になつて、勇ましくあとから歩み出す。無數の跫音。續いて出征軍人團、ファッショ青年團など團旗銃劍を閃めかして、武裝狀態にて進み出る。ムッソリーニ幕僚達と共に、舞臺中央に後向きになつて片手を高く擧げながら閱兵する。百雷のやうな萬歲の聲。）

ザンボニ（左端へ歩み寄り、耳へ手を當てて何かに傾聽してゐる。はて、變だな——もうそろそろ、つてもいい頃だがな。（警官の一人に向ひ）おい、お前一寸そこの森へ行つて、あの火喰鳥共を、、、、、、、、、、、、、、、！　もし愚圖々々してゐたなら、お前が、、、、、、、、、、苦るしくないぞ。

警官の一人　はい、かしこまりました。（去る）

（分裂式倘續く。農夫六、一臺の貧弱な馬車を、よぼよぼな驢馬に曳かせながら右端より登場。驢馬群集の物音に愕いて、しきりに耳を振りながら後方へ退り、後足にて馬車の車體を蹴る。）

農夫六　何だつてお前そんなに氣が弱くなつたんだ。——ありあ、やつぱり俺達と同じやうな人間だよ。文句を云はずに進め、進め。

ジョワニ　これ、どん百姓、貴樣ここは何處だと心得てゐる？

農夫六　こゝかえ？　茲はおい等の麥畑の近くの原つぱだよ。

ジョワニ　貴樣ムッソリーニ統率閣下のそこに居らるゝのを氣がつかんか？　ファッシストの親玉樣だぞ！

農夫六　あれが、ムッソリーニどんかの？　わしは始めて拜むだが、えらい金持らしい面付きしてなさるだな。

ジョワニ　下らん事をぬかさんで、行列の濟むまで其處に待つて居れ！

警官（慌てゝ左より登場ザンボニへ向ひ）閣下、逃亡いたしました。憲兵隊と共謀の上このどさくさに紛れて逃げたのでございます！（一同愕然とする）

ピアンチ　そりあ大變だ！　追跡しろ！　自動車は、電話は、飛行機は、電報は……？

ザンボニ　生憎と皆手許にない。今日のは徒步調練だからな！（ピアンチ農夫の馬車を見付けて乘る。烈しく驢馬を亂打すれば、驢馬反對の方へ退き行く）

農夫六　あれ、あの男もムツソリーニどんかの？　よくまあ似てゐるもんぢや！

ザンボニ　えゝ面倒た、俺が跣足で行つて見る。

ムツソリーニ　ビアンチ、それは全く反對の方へ行くんぢやないか！

ビアンチ　（腹立ち紛れに）　ええツ、先生、すべての道はローマに通じますわい！

――幕――

拵へられた男（八場）

——Tom Mooney 事件の再錄——

人物

丈輔
友三郎
ダイク　勞働運動者
ストロング　同
キーフア　刑事部長
ヴイリアム　刑事
酒場の主人
柘榴鼻の爺
ドイツ女の女中
係長
ペンキ屋二人
裁判長
その他、警官、辯護士、給仕、酒場の群集、通行人、傍聽者等大勢

時　現代
處　アメリカの都會

第一場

酒場。晝。電氣がともつてゐる。

舞臺斜めにバアが設けられてある。大勢の群集がその前でビールやウヰスキーを飲みながら、騷々しく談笑してゐる。バアのうしろに、酒場の主人が忙しさうに立ち働く姿。その頭上に午後一時五十分を指さした大時計が動いてゐる。酒場の奥から獸的なジヤッヅ・バンドの騷音が群集を打ちのめすやうに響いて來る。日本人、丈輔、ひとり外國人の間に立つてうろうろしてゐる。

丈輔　（ポケットの金を探しだし）ええいッ——ゴッデム！　八仙しかありあしない。ま、飲むか！（バアへ向ひ）ビーアを呉れ給へ。

酒場の主人　ビーアと云つたね？

丈輔　イヤップ！（ビールのコップ受取る）

キーフア　（ウイリアムと共に突然丈輔を押退けるやうにして入り來たり、何かの重い手鞄は足元へ置きながら）おい、ウイスキーをくれないか？　それから、葉卷もね。

ウイリアム　（稍低聲に）――その別嬪は、かつきり二時十分になつてるのかい？

キーフア　あ、二時十分が一秒たりとも狂つちやいけねえのさ。手筈はちあんときまつてるんだから、お互ひに飲み過ぎないやうにしないと險呑だぜ。（丈輔隅の方からサンドウイッチを持ち來り、頬張りながらバアへ手をのばして自分のコップを取る。何氣なく二人の會話に耳を傾くる樣子）

ウイリアム　仕掛仕事（フレーム・アップ）ぢあ俺もちよいちよい君の厄介になるね。（ウヰスキーのコップをかち合せ）ぢや、グッド・ラック！

キーフア　グッド・ラック！（乾す）おい、ウイスキーをもう二つ！

ウイリアム　聽けあ、トラストの親玉から五十萬弗のテップが出るんださうぢやないか？

キーフア　マツカッシイの親方あ、こんだぎゆうぎゆう云はされて苦しんでるんで、さすがの握り屋も出すことになつたよ。（五本の指をひろげて見せる）

ウイリアム　二時十分だつけな？　俺あ、何だかこの足元の赤ん坊が、今にも大聲で泣き出しさうな氣がしてたらないよ。（片足にて鞄を指し示す）

キーフア　（慌てゝ仰山に對手の足を掴む）　よせよ！――君は、相變らず向う見ずな男だな？　まあ、飲まう。（時計を見上げながら飲む）

柘榴鼻の爺　（客から客へと粘ばりつこく纏がり歩きながら、礑と丈輔に行き會ふ）よう、こりや珍らしい。――ジ、ジヤップ先生で御座るな。（醉つてゐる）滿堂の酒呑み及び紳士諸君よ、諸君が、茲に發見せられるのは、名にし負ふ東洋一の柔道の名人ジャップと御座い。彼等黄色怜悧なる猿と人間との混血兒は、頗る侵略的にして、日露戰爭に於て巨大なる熊ロシアを倒して以來、この酒場のビーア樽をこぼしたやうにアメリカ内地に御入來になり、ジユウジユツと稱する妙な輕業を以て我々ヤンキーを倒し、いつも國事探――いや、その、まあ、こんな事を云つたところが。（丈輔の胸を叩く）この先生には一向珍糞漢糞にはちげえねえんですがな――。

丈輔　（ビールをぐつと乾して）　やれ、やれ、もつとやつて見ろ！　俺だつてお前らの饒舌るぐらゐのヤンキー英語がわからないでどうする？（老人驚く）かう見えても、このアメリカにあ十年近くもあまり旨くねえ珈琲を啜つてゐるんだ。いいか、君らのその偏狹な人種差別…迫害の氣持さ、それが、つい此頃まで働いてゐたペンキ屋から俺を追ひ出させたんだぞ！　俺あ癪に觸る！　俺だつてブラッシユとペンキ壺を持てあ生優しい勞働組

合のペンキ職なんぞにあ負けちあゐないんだ。ペンキ塗職工の組合に這入つてゐないと云つて俺は働き口を追ひ出されてしまつた、そんなら俺を組合へ入れるかと云ふに、組合ぢア俺が日本人だから駄目だと拔かしあがる！　みんなお前のやうな人種差別待遇をするからだ！　もつと饒舌るなら、饒舌つて見ろ！　舌でなら敗けねえぞ！

柘榴鼻の爺　（恭々しく禿げつちよろの山高を脱ぐ）　ほほう、これは、これは。――いや、拙者、ジョウ爺、些か醉副の加減で、こりあ一生の失敗を演じましたかな。いや、どうもミスター・ジャパニースがかうも賢明であらうとは……。

群集一　ジャップ、しつかりやれ！

群集二　爺、むやみにへこたれるな！

群集三　日本人オーライだね！

群集四　まあ、喧嘩せずに一杯飲め！

キーファ　（丈輔をバアへ引き寄せ）　偉い、偉い、で、君は殊のほか勞働組合が嫌ひらしいね。まあ、ウイスキーの一杯もやらんか？　（酒を命ず）

ウイリアム　日本人でこんなうまい英語を饒舌る奴は始めてだな、――え、君、大學へでも行つたのかね？

丈輔　（ウヰスキーを飲みながら）　何、勞働者ですよ。大學なんぞへ行きたくとも行けあしませんよ。それでも、普通世間樣の御話なら、まあ大抵のところは濟ぎつけるつもりですがね。――貴方がたの最前からのお話たつて、ようく聽いてますよ。それ「二時十分の仕掛仕事（フレーム・アップ）」ね、それから「マッカッシイ・トラストの親玉が五十萬弗のテップ」でね、どうです、この「赤ん坊が大きな聲で泣き出す」ぢあありませんか？　（稍醉ふ）　うははは――はア！

キーファ　（急に眞劍な顏になり）　お前、何か知つてるのか？

ウイリアム　貴樣、何だ？

丈輔　いいえ、私は――私は、ほんの、何も、いや、ただ貴方がたのお話もこの通り聽いて知つてると申し上げたまでなんですよ。その――その、つまり、內容ですな、お話の內容は何も知らないんです。

キーファ　（ウイリアムに眴せしながら）　まあ、いい、さあ、葉卷でも吸ひ給へ。

丈輔　そりあさうと、旦那方、先刻のお話の時間もそろそろ迫つて來るぢあございませんか？

ウイリアム　ああ、うるさい奴だな！　お前の知つたこつちあないから、默つて飮むんだ！

キーファ　（手鞄を取り上げ）　ビル、ぢあ、急がう。（酒場の主人に向ひ）　おい、いくら？　（銀貨を五六枚無雜作に

投り、そゝくさと出て行かうとする。丈輔つかつかとあとを追ひ）

丈輔　ぢア、グッド・バイですな。どうも御馳走さまでした。（手を差し出す）

キーフア　（腹立たしげに、握手を拒みながら）ジヤプ奴！

――幕――

第　二　場

ロドニー・ホテル前の街角。同日、數分後。

右端にホテルの入口、建物は舞臺中央で一定の角度を持ちながら奥へ切れ込む。稍幅廣い街を隔て左端中程から奥へかけて、街の向側。そこには、店の前に古本が擴げてある。古本の前に「25」及び「50」の札が立て掛けてある。街路樹。サイド・ウオークなど。

丈輔　（ホテルの前を逡巡勝ちに歩み來たり）ゐるかな、ゐないかな？（ポケットの中から銅貨を一つ取り出だし）奴が居れば名前だ。ゐなけりあ型さ。（銅貨を指に彈きあげ、兩手を合して受け止む）名前だ！　ゐてもちよつと都合が惡いな。よし、今度は、貸すか貸さぬか。貸すなら名前、オーライ、シユート！（再び銅貨を飛ばし見る）何んだ、型た！　畜生ッ、貸されえのか？　この前から、もう七八十弗借りてるからな。――でも、俺がこんなに困つて、酒場を出ると、銅貨が三つしかない、なんて聽いたらやつぱりあいつも社會主義者だのなんのつてむづかしい本を讀んでるだけあつて、幾何か同情はしてくれるだらう。五弗でいいんだ……三弗でもいいや、今夜の宿賃が十仙、あと二弗九十仙ありア、まあ明日明後日ぐらゐまでは支へられる。そのうちに桂庵へ通つてゐりア、どうにかなるだらう。友三郎！　おい、居てくれ。貸してくれ。マイ・デア・トモ！　ああ少し醉つたかな。今のあの二人の奴等、一體何んだらう？　拳闘士みたいな凄い顏をしてやがるのと、もう一人は狐と狼の混血兒みたいな野郎だ。あんなのがゐるから、アメリカも物騒なわけだ。（古本屋の方へ歩み寄り、本の列をぼんやり眺め居る）

ダイク　（ホテル内からつかつかと歩み出づ。手に郵便物及び電報を持つ）おお――。

ストロング　（左端より旅行鞄を持ちて急ぎ來たる）同志ダイク！

ダイク　同志ストロング、戰線はどう？

ストロング　（烈しく握手しながら）ケーブルのやうに緊張してるよ！　久しぶりだね、本部の連中は皆な達者か。

ダイク　鋼鐵のやうに頑丈だよ！　久しく會はなかつたが、ますます健康ぢやないか？　こちらは、いよいよマッカッ

シイ・トラストの爺め、悲鳴を上げて、新聞を買收してストライキについちやあ一言半句も書かせやしないんだ。輿論を恐れ出したんだ。それに、聞くところによると、暴力團を列車買切りで送るさうだよ!

ストロング　ふむ、その話だがね。――まあ、立話も出来まい。俺も君の部屋でちよつと休まして貰ひたいんだが、何か用事で外出するところか?

ダイク　いや、電報を二三通、こいつだけはホテルのボーイになんぞ頼んだら早速スパイの手に渡るから、ちよつとそこまで行けあいいんだ。

（この對話の間、キーフアとウイリアムの兩人、右端より旅客を裝うて來かゝり、ホテルの入口に立ち止まつて、二人の對話に耳を傾け居る。）

ストロング　まア、歩きながら話さうぢやないか?

ダイク　（後方をふりかへる。キーフアとウイリアムぎよつとして、つかつかとホテル内へ入る）近頃は、どうも怪しい奴が始終このホテルに張り込んでゐるんで、うるさくて仕樣がない。――行かう。（二人ホテルの壁に添うて奥へ退場）

丈輔　また、あの二人の野郎共が、――一體、今日の俺は何時になつたら彼奴らに會はずに濟むだらう?（左奥へ歩みながら）どれ、友三郎、五弗か、三弗か、――それとも機嫌がよくて、十弗貸してくれるか、もう一度銅貨を飛ばして見るか! フリップ・ゼーア・イット・ゴース!

（歩み行く）

――幕――

第三場

富豪の邸宅、地下室。同日、三四分後のこと。灰色の、天井の低い小部屋、右隅にベッド、右横に明り取りの小窓、それ等の前に一脚のテーブル、椅子二脚。左奥隅に洋服その他の掛けたクロセット、その横手に形ばかりの切り爐。マントル・ピースの上に目覺時計。その傍に十二三册の部厚な洋書。爐の前方に小型のテーブル、その上に化粧用道具など。中央奥に、壁と同じ色のドア。ドアを開けると階上よりのセメントの段々が見える。天井に一つの電燈。

ドイツ女　（ドアを開けて）居りませんよ、ね、この通り。

（電燈を點ける）

丈輔　二時十分。今頃何處へ行つたんだらう?　居ない筈はないんですがね。

ドイツ女　トモは買物に行くと云つて、お晝が濟むとすぐ出て行きましたよ。貴方は、ジョウ――ね。ミスター・ジョウでしたね。わたし知つてる。トモはすぐ歸るでせう

よ。

丈輔　あんたに固く約束して置きながら失敬な奴だ。どうしても今日は會つて行かんとならんのでね。急用です——友人が死にかかつてゐる、嘘ぢやありません。僕、歸へるまで待つてゐよう。構はない？——いいでせう？

友三郎君のたつた一人の親友の僕だもの。

ドイツ女　今日は、御主人も御留守なのでね。いつも休日は木曜日ときまつてゐるんだけど——わかつた、わかつた、ね、ジョウ、貴方、トモに近頃いい女（ひと）でも出來たんぢやないかしら？　知らない？

丈輔　さあ、何んしろ友三郎は、あの通りな堅人で、道樂は社會主義の本を讀むことばつかり。それでなけれあ、新聞の切抜きさ。いつ來て見たつてあの男が新聞の切抜きをしてゐないことはないんだからね。——まさか、情婦でもあるまいぜ。第一、貴女も知つてるとほり、あの男つぷりではね——あははは！

ドイツ女　それア、トモより、貴方の方が佳い男だわよ。

丈輔　そんなに煽てたつてアイスクリームなんぞは奢りませんよ。兎も角、待つてゐるとしよう。まア、こつちへ這入り給へ。一寸接吻して上げようか？

ドイツ女　嫌だよ、この人は！　わたし、貴方、紳士だと思つてゐたのに。（ドアより笑ひながら逃げ去る）

（丈輔その邊を忍び足にて見廻す。と、この刹那、突然全都會を震憾せしむるやうな大音響が起り、ベッドの上の窓硝子、粉々に裂けて落ち來る。丈輔立ち竦む）

ドイツ女　（いきなりドアを開いて、蒼い顔を出す）何でせう？

丈輔　地震かね。それとも、あ、わかつた、貴女がキッスさせないから神樣が怒つたんだよ。

ドイツ女　冗談云ふもんぢやないわ。地下鐵の工事ですよ。きつと土を掘るのにダイナマイトを使ひ過ぎたんだわ。

丈輔　ふむ——ダイナマイト。

ドイツ女　あれ、あんなに窓が毀はれて。こりや大變ね、わたし二階へ行つて見なくつちやア。（去る）

丈輔　……ダイナマイト——爆彈のことか。ああ、煙草が吸ひたくなつた。何處かに煙草がないかなあ？　あの煩悶屋の友三郎だから、煙草なんざあ間違つたつて置いときあしないにちがひないんだが。（テーブルやらマントル・ピース上、化粧臺のすべてを探す。明り取りの窓のそとに群集の駈けて行く跫音。丈輔クロセットの友三郎の洋服を取り出し、陰險な眼付にてポケットの一つ一つを指にて探る）切抜きだ！　何んだ、これあ？「レーキ炭坑のストライキいよいよ實彈戰に入る」か！　社會主義新聞の附景氣かな！　逆さにふつても袂糞さへ出て來や

しない。一體全體、山口友三郎が煙草を飲んでいかんといふ理窟は何處の社會主義が發明したんだ？　その友三郎の友人の小山丈輔さんが、友三郎の洋服を逆さにして見ても五十仙銀貨一つ轉がり出ないといふ理窟は、何處の共産主義が發明したんだ？　俺は斷言する。――この山口友三郎たるものは、畢竟、社會主義の蟲だね！　彼は、世の中に社會主義といふ字が書いてある本と新聞なら、煙草の代りに、酒の代りに、いや、食物の代りに、眠つてゐてさへも常用するんだからな。――（洋服を元へ戻し終つて椅子へ掛く）あのドイツ女もゐなくなつた。淋しいな。……遲いな。畜生！　二時十五分！　ええと、かうやつて、煙草に餓ゑ、食物に窮し、宿賃に差支へ、ポツケツトにあるのはわづかに三つのペニー、失業すること茲に一ケ月――完全なる悲劇の主人公である小山丈輔が、羊の肉に食ひ飽きた、富豪の屋敷のコック番、社會主義者の山口友三郎をべんべんとして待つてゐたところが、丈輔の社會的窮乏は救はれず、さりとて友三郎の社會主義改革意慾は充實されるわけでもなし。はてな――何か、かう目星しい金目な物はこの邊に散在して居らんかな？　ふむと、かう――洋服は持つて行くに目立つし、まさか二着の服は着て出られぬ。あつた！　その部厚い洋書！　何だ、ええと「カール・マルクス――資本論」か！

旨い、三册物だ。――あの古本屋！　それから友三郎に會はぬやうに一直線に下町へ取つて返へす。あとは支那街のスウちやんか！　占め、占め！　（マントル・ピースより赤い三册の洋書を拔き取る）待てよ、いくら親友の間でも、一筆啓上とやつて置かうかい。（テーブルの上にペンとインキにて走り書きす）わが親愛なる友三郎よ、失業一ケ月にしてアイ・ム・オール・ダンかね。このハード・ラックを如何せんやだ。昔日の誼しみに應じて、最後のヘルプを君に乞ふべく來たりしが、矢も楯もたまらずに公然と茲に三册のマルクスを暫時拜借す。もともと、社會主義の原理たるや貧しき者を助くるに在りと君より聞くこと久し、マルクスも以て瞑すべしだね。友よ、恨むな、景氣が出たら金は返へす。資本論は俺の生活の資本になるのだ。安心して可なりさ。――親愛なるジョウより。……ヘン、どんなもんだい。必要は發明の母なりつてな、俺もこんな名文が書けるとは思はなかつた。おあ、グッド・バイ！　（片手に部屋一杯に向つて接吻を投げかく）待てよ、四邊の形勢はどうぢや？　（ドアを開けて外部を覗ふ）占め、占め！　（去るに臨みドアから首だけを出し）でも、社會主義者からマルクスを盗むなんて、世の中はよつぽど皮肉に出來てゐやがらア。ひヒヒヒ――。

――幕――

第四場

料理屋のカウンター。翌る朝。

安料理屋の汚らしげなカウンターが、舞臺中央奥から右端へ走つてゐる。客七八人目白押にスツールに掛けながら、食物を貪ぼり居る。待ち遠しがつて皿を叩く者、薄汚いジヤケツを着た給仕が注文品を奥へ通す聲。斜めに射込む日光に、食物の湯氣と煙草の煙が絡む。スツールの一つに、丈輔他の客を押しのけながら夢中で新聞を讀み居る。給仕その前に注文の品を置く。

丈輔　や、こいつは、何處かで見た男たよ。こいつは、確かに、極く最近——はてな、昨夜の支那街の女郎と一緒に飲んだ酒が祟つてるか、どうも今朝の頭は曇つてゐる。（客を押し退け、舞臺前方へ歩み出る。頻りに宿醉の頭を振る）ヨーク街爆彈事件の顚末。レーキ炭坑ストライキの指導者、巨魁ダイク、ストロングの兩名、現場に於て捕縛さる——マツカツシイ・トラスト直屬の銀行ユニオン銀行强力なる爆彈によつて危く全部崩壞を免かる——ストロングはレーキ炭坑よりひそかに銀行破壞を目論見て昨日當市に到着——ダイクの部屋に時計仕掛の爆彈數個及び手擲彈その他の兇器發見さる——連類者續續檢擧、全米の右傾勞働組合もその爲めの影響頗る大ならん——わかつた！　この二人は、あのホテルの前で出遇はした二人だ！——待て、待て！「最近急激に左傾したる爭議團本部は、ストロングが到着するや否や、直ちにユニオン銀行へ向ひ、午後二時十分（正刻）に、二個の强烈なる爆彈を投じた」——午後二時十分……待てよ、午後二時十分、これあ、確か、あの酒場の二人が云ひ合はした時間だぞ！　午後二時十分——鞄の中の赤ん坊が大きな聲を立てる——マツカツシイ・トラストから五十萬弗——親方もいよいよ運の詰りだとか何とか云つたな！ふむ、これあかうして居られない！　兎も角銀行へ行つて見て、どんな事だか確めて見よう！（丈輔新聞を疊んであたふたと駈け出す）

給仕　おいおい、御客さん注文の品を食はないのかね？——待つた、待つた、金を拂つてくれよう！

丈輔　（振りかへり）金か？　金なら、マルクスを賣つた十五弗の殘りがちつたあるよ。ほら——五十仙！（銀貨を給仕へ投げつく。去る）

給仕　（兩手を蜂谷の邊へ當てがひ、鳥の羽搏きするやうな恰好に動かし）あれもキ印か——

——幕——

第五場

街角。第四場より間もなく。

硝子扉の悉く毀はれた煙草屋、それを鍵の手に圍繞して多數の見物人通行人の徘徊する廣い街路。破壞された銀行及び隣家は見えない。左端に一本の太い綱が張つてあるその前に群集。

見物人一　ひどい事になつたもんだね。それでも、銀行だけは助かつたらしいね。

見物人二　隣家の邸か、あれ御覧なさいあの通りめちやめちやになつて、人死にがかなりあつたさうですよ。

見物人三　かうなると警官も邪魔なもんだね。僕達の好奇心を一向に滿足させてくれんからね。

見物人四　せめてかう綱を張らないで、邸内へだけ入れないやうにするといいですがな。

見物人五　ところが、また死體は壁の底に埋まつて發掘中ださうですからね。

見物人六　ほんとに社會主義者がやつたんでせうか?

見物人七　新聞に出てるところによると、かつきり午後二時十分となつてますが、わしの家の時計は二時十三分で止まつてゐましたよ。

見物人一　わしもその點はちよつと疑問を持つてるんですがね、しかし惡漢のホテルの部屋から爆彈が出たといふんぢや、やはりほんとなんでせうよ。

見物人三　すこしこの事件は臭いね。

見物人五　叱ツ。そんな事云つたら、貴方も連類者にされますよ。

見物人十　（演說口調にて）我我アメリカの市民は、言論の自由を持つて居る——

警官　（左からあらはれて）こらツ、こんな處で演說をやる奴があるもんか。貴樣、怪しい奴だ。こちらへ來い。

（舞臺奧へ引きずり去る）

丈輔　（群集の中よりぼつくり顏を出す。手に澤山の新聞紙を圓めて持ち居る）ひどい事になつたもんだな。きのふここに立つてゐて、あの大時計を眺めた時にちやうど二時と十分過ぎだつた。——あの時計はすつかり失くなつちまつたが、俺の記憶は確かなんだ、それからぶらぶら友三郎の働いてゐる家まで五丁、古本屋の前で道草を食つて着いたのが、二時十分だ、あのドイツ女のおたんちんをからかつてゐて、彼女が顏を引込めると鳴り出したのがあの大爆裂だ! 二時十三——四分、とまあ見ていいんだ。それを、新聞ぢあ、どの新聞も二時十分と書いてゐる。それから、あの酒場の二人が打合せした時間が二時十分。これが、どうも俺には解けない謎だ。（右端へ歩

み出て、立話してゐるキーフアとウイリアムを發見する）

おお、お早う！

キーフア　（愕然として）　ああ、お前は——昨日の酒場の——？

丈輔　昨日は非常に御馳走さま。それで、貴方がた二人は（低聲に）此處にゐても大丈夫なんですかい？

ウイリアム　何が、どうしたと云ふんだ？

丈輔　（新聞紙を開き）　私はね、この（低聲に）貴方がたの親方を、きのふ見ましたよ。ロドニー・ホテルの前で立話してるのをちあんと見たんでさあ。しかし、私は、默つてますよ。大丈夫！　その代り、早くお逃げなさい。あんなに警官がゐるんぢやありませんか。日本にも袖（スーヴ）をタツチするのも何かの關係がある、といふ諺がありますよ。

キーフア　おい、おい。——お前、必要以上にこの事件に就いては知つとるやうだな？　どうして昨日から僕達を尾け狙つてゐるんだ？

ウイリアム　どうもこのジヤツプは怪しいね。一つ吐かして見ようぜ。

丈輔　何を云ふんです、貴方がたは。さういふ君達こそお尋ね者ぢやありませんか？　このダイクとストロングの乾分でせう？　私が親切にお逃げなさいと云つてるのを聞きちがへちあいけませんよ。

キーフア　（上衣の裏をめくり、合衆國政府警察官の銀章を示す）本官は、この大事件に就いて凡ゆる證據物件と目擊者とを探がして居るんだ。お前の昨日からの擧動にはかなり不審の點がある、直ちに本署まで同行して貰はう。ビル、こいつを引立てろ！

丈輔　（泣き出しさうになりながら）　旦那、御冗談でせう——私は、別に、この事件なぞは何も知らないんで。そんな、警察へ引かれるなんて惡い事たアこれつぱしもしてはゐないんです。旦那！　どうぞ、旦那！　（キーフア、ウイリアムへ頷き右端へ歩み出す。丈輔大聲に泣き出す）

丈輔　旦那、……旦那！——旦那ア！

——幕——

第六場

或る役所の一室。同じ日。

場内は無暗に高い。いろいろな鐵材によつて組み建てられたいくつもの梯子段が縱橫に交錯してゐるやうな構造になつて居る場所。靑い笠を被つた、電燈の灯つた、高いデスクの上に係長、鉛筆を嘗めながら、何かを帳簿に記入して居る。その傍に卓上電話。數段低く、暗闇の最下部に於て、二三の人間が格鬪してゐるやう

な物音がする。

丈輔の聲　云ひます。――申します。

係長　よし、それでは此處へ上がれ！（デスクの下を指さす）

丈輔　（ウイリアムに下から引き立てられながら、係長のデスクの一段下へ姿を現はす。全身水を浴びたやうに戰慄してゐる）はい、申し上げます。

係長　で、お前は、確かに二時十分に、お前の友人の働いて居るフランクリン氏の地下室に於て、何かしら恐しい物音を聽いたのだな？――確かに、昨日午後二時十分であらうな？

丈輔　へい、その、此處にお出でになるお二人の役人樣が、角の酒場でマツカツシイ氏の親方から五十萬弗の金を貰ふ……

キーフア　（忽然として暗中より躍り出で）　こらッ！（びしりと頰を殴ぐる）係長閣下のお訊ねになる事に答へさへすりやいいんだ。餘計な事は饒舌るんぢやない！

丈輔　は、はい。――その、確かに午後二時十――分でございました。へい、それに間違ひはないんで。フランクリン氏の地下室の友人の時計は、確かに午後二時十分で止まりましたのを、私があとで氣がつきましてまた捲き直しまして置きましてございましてございます。

係長　ふむ、仲仲悧巧な日本人だ。本官の暗示せぬ事まできつぱりと云つてのける。で、なにか、お前は、同じ言葉を最近開かれる公判廷の大陪審官達の前でも繰り返し得るか？　證人の一言は、本事件にとつては實に重大な結果を及ぼすのであるぞ！　もし、お前が今申し述べたやうな證言を、公判廷に於ても繰り返したなら、本廳ではお前の僞らざる精神にめでて特別な手當をするだけではなく、次第によつては、被損害者側からの尠からざる報酬も來ようと云ふもんだ。もう一度練習のため繰り返して見ろ！

丈輔　よろしうございます。さうして戴けますものなら、この憎むべき社會主義者や勞働運動者達を徹底的にやつつけるやうな證言を申し上げませう。――酒場を出まして、このお二人と……

キーフア　このお二人の事なんどは一と言も云ふ必要はない。お前の事だけを云へ！

丈輔　へい、一人で酒場を出まして、角の大時計を見ました時に、恰度二時一分――いや一時五十八分で御座いました。かつきりと一時五十八分で御座いました。それから御存じの通り、大通りを北へ切れまして、古本屋のある通りを三丁、ロドニー・ホテルの前へさしかかりますと、二人の悪漢ダイクとストロング奴が、何やらひそひ

そ話をして、打合せをしてゐたやうな風でございました。一方のストロングといふ男は、重さうな旅行鞄を携帶しまして、何か這入つて居るか存じませんが、頗るそれを大切にして、土へもおろしませんでな――。

係長　仲仲味をやり居るな。その調子、その調子！

丈輔　すると、再び酒場でお會ひした二人が、あとからやはりホテルへお見えになりまして、何かこそこそお話……。

ウイリアム　馬鹿ッ！

丈輔　いや、――何お二人のことは申しませんとすれば、この社會主義者二人に電報を打つとか云ひまして、横丁を右へ郵便局の方へ曲つてまゐつたので御座います。

キーフア　右ぢやいかん。左にせい――！

丈輔　その、左へ即ちユニオン銀行の方で御座います。左へ曲つて行つたのを、私はこの二つの眼でちあんと睨んだので御座います。それから、二丁、フランクリン氏邸の地下室へ行くまで、約二三分の時間を費したと思ひます。何となれば、私は金策の都合がありまして、少し早足になりましたからで御座います。地下室へまゐりまして、友人の留守の間、ほんの一分間も待つて居りますと。計らずも視線に觸れた目覺時計が二時十分、その時天地も割れるばかりの大爆音が生じました。私は、さては社會主義者の奴等がやつたな、レーキ炭坑の……

係長　もうよいよい。それ以上お前が知つてる筈はないではないか。あまり饒舌に過ぎてもいかん。――それで時計を捲き直したかな？　それでよし。

丈輔　へい、へい。そのとほりで。

係長　で、お前の現住所は何處だ？　證人に呼び出す必要上これは訊いて置かんならん。

丈輔　旦那、それがどうも、お耻しいお話ですが、職業を失ひましたから一ケ月住所不定で、今日はこちらの十仙宿、明晩は河向ふの淫賣宿と申しますやうに、一向に定まつて居りませんので。最近――つまり、今朝まで居りましたのが、下町のオールスのホテルと申します二十五仙宿で御座います。

係長　ははあ、仲仲難澁しとる樣子だな。では、お前小遣も不自由であらう？

丈輔　まつたくもちまして、もう一仙も餘裕は持ち合はせないので。

係長　では、キーフア君、君、ちよつと會計へ傳票を書いてやるから、よろしく證人の手當をして置いてくれ！

（キーフア頷く）

丈輔　旦那、そりやほんとですか！

ウイリアム　お前さへしつかりしてりあ、一生この事件で

樂に暮して行けるんだ！　だが、よく注意して置く――いゝかお前は、法律によつて、正當なる理由から、謂はば、捕へられた男なのだ！　決して今練習した言葉を忘れてはならんぞ。お前の役割はそれだけなのだ。それ以外の事を饒舌つても、又それを饒舌らないでも、お前の一生の幸福は來ないんだぞ！

係長　（立ち上がり）　捕へられた男、よくこの言葉を覺えておけ！

丈輔　（夢中で大聲）　捕へられた男――捕へられた男！　へ、え、捕へられた男で……

――暗轉――

第七場

丈輔の宿泊してゐる安ホテルの三階の一間。同じ日の數刻後。

中央右寄りに恐ろしく長い鐵の階段が上まで立つてゐる。階段の竭きた所にドア。其處から左奧へかけて、高く設けられた灰色の一室へ這入る。階段の上に一つの電燈が灯つてゐる。舞臺右、部屋の下全部は暗黑である。

室内は、何處となく小じんまりしてゐて、舞臺奧と、左側とに開いた窓からの外光によつて不思議な光線の絡れを見せてゐるやうに明るい。左隅にベッド。ベッドの下に鞄。その傍に椅子二脚、中央に丸テーブル。室の右隅に化粧臺、洗面器、タオルなど。もう一脚の椅子がテーブルの傍に置かれてある。安手のカーペット。天井に電燈。

山口友三郎、頻りに丈輔の歸りを待ち侘びて、部屋の中を歩きまはつたり、正面奧の窓から街向ふの建物を、二人のペンキ屋が塗り變へやうとして足場を拵へてゐる光景を眺めたりしてゐる。

丈輔　（階段を千鳥足で昇つて來る。口には金ぴかのレッテルを貼つた葉卷）　たしかに、ホテルを左へ、ユニオン銀行の方へ曲つて行つたのを、私がこの二つの眼で睨んだので御座います――私は、法律の正當な理由によつて、謂はば、その捕へられた男、へい、その男で御座いまして、いや、こいつは必要以外のことであつたかな！　二時十分ですよ！　それに間違ひつこはないんです。（ドアの前で立ち止まる）　おや、誰か御在宅かな？　鍵は、この俺樣が一つ持つてゐらつしやる。（友三郎丸テーブルの前に掛けて友人を待つてゐる）　ほかのもう一つの鍵は、階下の帳場で持つてゐる。この錠がひとりでに開く、といふのは……（顏を室内へ入れる）ヤツ！　君か？――

友三郎　待つてゐた。

丈輔　（室内へ入る）やあ――君か？　催促、無理もない、惡るかつた。――ほんとに濟まん。實に、實に、惡るい事をしたよ！

友三郎　（つかつかと丈輔のそばへ歩み寄り、手から鍵を奪ひ取り、かちりと錠を卸ろして、その鍵を自分のポッケットへ入れる）いゝか、この鍵は、お前か俺か――どつちでも生き殘つてこの部屋を出て行く人間が使ふんだぞ！　醉つてゐやがる、間拔け奴！　椅子を取つて、掛けろ！

丈輔　（隅の椅子へ手をかけ）な、な、何を――解つたよ、それあ、君の留守の間部屋へ這入つたことも惡るかつたし、それから、あのマルクスだつてな……

友三郎　（丸テーブルの前の椅子を示し）茲へ來い！　掛けい！　今日は、今日こそは、貴樣と俺と生命の取りやりをしても話をつけるんだ！（丈輔云はれる通りに椅子へ掛ける。友三郎ベッドの前へ椅子を運び來たり、腕組みしながら掛けて、對手を熟視す）

丈輔　（ポッケットから夥しい紙幣束を取り出し）資本論の三册や三十册の金は、これ、この通り。な、山口、お前にもこの二三年はほんとに厄介ばかりかけて俺あ濟まなかつた。（泣き出す）君の友情がなかつたら、どうして、この淋しい、淋しい外國で俺は暮して來られたらう？（狂的に）だが、喜んでくれ！　これから俺は一生樂に暮して行けるんだ！　喜んでくれ！　ほんとに、この通りだ！　俺は、たうとう「捧へられた男」――と呼ばれるまで出世したんだよ！　金は一生樂に食つて行けるほど、何處からでも降つて來る。君の社會主義の研究も、俺はこれからどしどし後援して立派にやり遂げさして見せるよ！……な、おい、友三郎、何か云へ。どうして、そんなに俺を睨めてゐるんだ？　二十弗で澤山か、それとも、この前の分も入れて、二十五弗――三十弗ぐらゐでいゝか？

友三郎　馬鹿ッ！

丈輔　まあ、さう怒るなつてことよ、取り敢へずこれからそこへ一杯お祝ひに交き合つてくれないか？

友三郎　犬ッ！――この、日本人の皮を着やがつた獸奴！　べらべら饒舌らずに、默つて掛けとれ！

丈輔　何んだか知らないが、いやに今日はお天氣が惡いね――べらべら饒舌るなと云つたつてお前、このジョウ小山さんが、人並以上にアメリカのスラングやカッスや通俗語が達者なもんで、それあ、正當な學問こそしないが、英語を饒舌る段になつたら下手な外交官なんどより遙かに達者だからこそ、今度のやうな一生に一度の幸運に出遇はしたんだ。いゝか、今ちよつと公判廷へ起つた時の

證言の練習をして見せようか？

友三郎　（いきなり立ち上がつて丈輔の頭を續けざまに十回ほど毆る）これでもか？――これでもか？――まだ、これでもか？（泣く）――口惜しい！　俺は、口惜しい！――この、犬ッ！

丈輔　（倒れて下から）ど、ど、如何したと云ふんだ？……おい、理由を云へ、理由を聞かせてくれ！

友三郎　（丸テーブルの上の新聞を取つて烈しくテーブルな叩く）畜生、理由が聞きたけれあこの夕刊を見ろ！

丈輔　（新聞へ顔を突つ込みながら）なあんだ――これだよ、これでこそ、俺が儲けることになつたんだよ。

友三郎　（烈しく友人を掴み立て、ドアへ押しこくりながら）この野郎、まだ、貴樣にはものが解らないんだな？――貴樣こんな事を正氣でやつてるのか？　それとも、貴樣は、アルコールのために、この醜い腸の底まで腐りきつてしまつたのか？　さあ、理由を話せ！　話せ！　どうして貴樣は犬になつたのか？　一體、貴樣には、この無産階級の身命を賭して鬪つてゐる大鬪爭がわからんのか？――云へ！　なぜ貴樣が僞りの證人に立たなけれあならないやうになつたのか、その次第をこの俺の前で逐一白狀しろ！　貴樣、この銀行破壞事件がブルジョア新聞の「タイムス」や「ジャーナル」の書き立てるやうな、勞働運動者が窮餘の一策としてやつた、小泥棒式な事件だと思つてゐるのか。

丈輔　（したゝかに友人によつてベッドの上へ叩きつけられ）俺、俺には、そんな事はちつとも解りあしないんだ。――俺は、そんなむづかしい事とは思つてやしないんだ。俺がどうして證人になつたかつて？――

友三郎　さうさ、僞りの證人さ！

丈輔　僞りだか何だか俺には解らない。――まあ聽け、それはかうだ。一昨日の晝過ぎよ、お前のところへ、困つたから金を借りに行かうと思つて、何氣なく酒場の前へ來かゝると――あの大通りのキュウテーといふキアバレのある酒場さ――あすこでビーアを一杯飲まうと思つて立ち寄ると、ごたごたしてゐるうちに、二人の毛唐にウイスキーを奢られたのさ。その毛唐がひそひそ話をしてゐるのを聞くと、何でも午後二時十分には手筈がきまつてゐる、仕掛仕事（フレーム・アップ）だ、マッカッシイ・トラストの親方から五十萬弗出るさうだ、彼奴等の持つてゐた手鞄の中の別嬪とか、赤ん坊とかが、今にも大聲で泣き出す――そんな話を聞いてゐたんだらう、それから、お前のとこの二丁手前のロドニー・ホテルの前で、俺は、昨日の新聞に出てゐた、それ、大工さんたとか、何だとか云ふ二人の男の會ふのを見たんだよ。すると、不思議なことにあ、

その二人のうしろへ、先刻酒場でウイスキーを奢つた二人の奴等がやつて來たぢやないか？――少し變だとは思つたが、俺の方はお前に會ふ用事を控へてゐたんで、そのまゝお前の部屋へ行つちまつたのさ。それあ、無斷でお前の部屋へ這入つたり、又資本論を持ち出したりしたのは俺が惡るかつた。しかし、滿更あのリーザの奴だつて知らんわけでもない。それに、お前、あの爆彈だらう――？

友三郎　お前は、あの爆彈の音のした時、何時だか覺えてゐるか？　時計でも見たか？

丈輔　さうだ。――その、始めからしまひまで、俺の頭にこんぐらかつて解らないのは、爆彈の破裂した時間だよ。新聞ぢあ二時十分と云ふし、役所でも二時十分と云へといふし、何のために二時十分が大切なのか、一向に腑に落ちないんだ。そして、俺の見當ぢあ、どうあつたつて、二時十分にあ破裂してゐないんだ。午後二時と――十三四分の間だね！　そいつだけいやに力を入れやがるんで、俺も、いくらアメリカの裁判だつて變挺なものだとは思ひだして來たんだよ。

友三郎　それが、お前、尤も重大なところなんだ。――いいか、仕事は仕掛仕事（フレーム・アップ）さ。前から、役人と新聞社とトラストとが、三つ巴になつて、ちあんと諜し合はしてやつた仕事なんだ！　あの、ロドニー・ホテルのダイクの部屋へ兇器を持ち込んだ奴等が、ちよつとした酒場での飲み過ぎから、二分か三分遲れたんだ。手下を使へばよかつたのだらうが、それには祕密の洩れる恐れもある。奴さん達が、二分か三分の遲刻で、新聞社の方ではちあんと刷り上がつてゐるものをどうとも出來ない、そこで二分か三分の遲れを胡魔化すためにそんなことを云つてゐんだ。その證據一昨日の夕刊を見るがいゝ。俺達の社會主義新聞を讀むがいゝ。はつきりと示してこそはゐないが、どいつもこいつも皆「午後二時十二三分過ぎ」となつてゐるぢやないか！　それを、トラスト系の新聞が朝刊にさう書いたからと云つて、無理に十分に引き戻すといふのは怪しいぢやないか？　しかも、トラスト系でない夕刊の方では、誰がどうして銀行の附近へ爆彈を仕掛けたかをちつとも示してないぢやないか？　トラスト系の新聞だけが、警察と符諜を合せて「犯人」の一擧一動まで明細に洗ひ立てゝゐるのも不思議だ。どうして、二三時間の相違で、夕刊と朝刊とがかうも記事を違へることが出來るのか？――朝刊は大概トラストに買收されたからだ。朝刊は、この事件が起る前から、犯人を知つてゐたからだ。朝刊は、トラストのために、ストライキに惱まされて、工場へ石炭の送れないマッカッシイ・トラストのた

めに、役人と一緒になつて、前から犯人を捕へてゐたからだ！誰か、あの爆弾を投じたか？――判刑だ！ トラスドだ！ マツカツシイだ！ 貴様、それを知らねえのか？

丈輔　（呆然としてゐる）　うむ、俺は知らなかつた……

友三郎　貴様、何も知らずに、己が腹を肥やしたいために、小金に釣られて、おめおめと、百十三人の嫌疑者、わけても世界の無産階級運動史に力強い腕を揮つてゐる二人の闘士を――まかり間違へば死刑に處してしまはうとするのか！ レーキ炭坑の爭議に、百五十日も惡戰苦闘してゐる、二萬五千の炭坑夫を、貴様の三寸の舌でむざむざと見殺ろしにしてしまふつもりか？

丈輔　……さうか？

友三郎　（躍りかゝつて）　さうかぢやない！ 起て！――貴様の魂に、まだ人間の血が流れてゐるなら、よしや、日本人としての一片の封建的な虚榮心でもいゝ。男として貴様がほんとに生き返へらうとしたら、この時だ！ いゝか、お前のあの日見た通り、聞いた通り、役所でいひつかつた通り、時間の點を一秒、一分もおろそかにせずにそつくり、そのまゝを今度の公判廷でぶちまけるんだ！――出來るか！　（烈しく丈輔をゆすぶる）

丈輔　（泣きくずれる）……悪るかつた！ 濟まない！――俺は、こんな事とは思はなかつた。許してくれ！ ほんとにお前さへ許してくれるなら、俺は死んでもその事をやつて見せる！

友三郎　うむ、よく云つた！――死ぬ、よし、死んだらお前の骨は拾つてやる。立派にそれをやり遂げろ、いゝか、お前が一と言いふ爲めには、全世界の無産階級が力拳を入れてあとから助けて居るんだぞ！ あとから押してゐるんだぞ！

丈輔　（舞臺奧の窓から彼方を指さし）　山口、俺は、ペンキ屋だつた。同じ職人が今二人、向側の建物を塗り直してゐる。あの黒いのがだんだん隅から赤くなつて行く――さうだ、俺も塗り直す！ 人間だつて塗り直せんことはない！ やつて見せるぞ！　（二人固く手を握る）

――幕――

第八場

法廷。數日後。

舞臺左前方から奧へかけて、高いデスクの列が聳えてゐる。その一段下の欄干。舞臺中央から右端かけて全部暗黒。幕切れの刹那、左端の光消えると同時に、中央から奧へかけての群集の顔の見える程度の光が射す。

幕開くと、法官二三人、デスクの背後に控へ居る。欄干の前に、光を浴びた丈輔が、狂氣の如く手足を振り

ながら絶叫してゐる。

丈輔　……二時十分ぢあない！　二時十三分！　二時十三分です！——私は拵へられた男ぢあないんだ！　私は世界の無産階級運動のために、二時十三分であつたことを主張します！——二時十三分！——午後二時十三分！——午後二時十三分！——午後二時十と三分ですよ！

法官の一人　警官、これは證人ではあるまい、この狂人を彼れの屬する場所へ投り込んで置け！　神聖な法廷はこんな僞りの證人によつて汚がさるべきものではない！

（突然暗黑中より警官二人躍り出で、丈輔を拉し去る。）

丈輔　（なほ叫び狂ひながら、半ば闇の中にて）　二時十三分です！……世界の無産階級運動……十三分！　（去る）

（突如法官の側の電燈消えて、舞臺暗黑になると、左端の傍聽席に群集の一齊に叫ぶ聲。一瞬にして、電燈傍聽席の上に閃めく。其處には、手を振り總立ちになつた傍聽者の姿が躍り出る。前方に友三郎の顏。）

——幕——

陸のつきる處（一幕）

——佐々木孝丸へ——

人

ジョージ竹田
おきみ　前名お政
カナカの酋長
船から上がつた男
警官　アメリカ人
探偵　おなじく
船員　四人

時

うすら寒い春の夜、九時前後

處

ある米國の港町の場末。邦人海員や賭博犯の寄り場になつてゐる、朦朧うどんや「入船」の地下室、料理場

舞臺

舞臺　亀裂のはいつた天井から、植物の蔓のやうに伸びた瓦斯管の燈りに、蒼白く照らされた低い地下室である。
正面の壁には、もと道具類を置いた場所や貼紙を剝がした痕跡が青く殘つてゐる。壁の中央稍右へ寄つたところに、料理ストーヴが燃えてゐる。その太い煙突が、壁の肌を殘忍に刺貫いてゐる。ストーブの右には、料理臺、その眞上の壁に四段の棚が釣つてあつて、丼とか小物とか九谷擬ひの大皿などが、白い德利や酒の瓶詰などとごつちやに立てかけてある。ストーブの左には、石炭バケツがあるだけで、壁は大部分帽子掛のために占領されてゐる。
左の隅に、廊下へ出る扉が開かれてあり、その表面に「開け放し無用」と書いて貼つてあるのが見える。廊下は、料理場の床より一層高く、そのむかふに、壁に遮られた一つの小部屋が、これも開けつ放しのまゝで、半分だけ眼に入る。廊下を左すれば表へ、右すれば二階への階段へ通ずる。左の壁際に、圓るい汚い食卓が二つ置かれて醬油の細長い瓶と箸筒とが立つてゐる。
左前景には、メリケン粉の重い袋が二つかさねてある。右隅には、皿洗ひの流元があつて、上に小窓、流元の手前にはけばけばしい安物の冷藏庫が据ゑ置かれる。その隣りに、裏露地へ通ずるガラス扉。その前の壁には、「正宗」の美人廣告の女の顏に髭の生えたのが釣るされ

てある。その前に毀はれた乾饂飩の箱が三つ四つ。
中央稍ストーブと擦れちがひに、大きい長方形の卓があつて、こゝにも割箸の筒やソート・ペッパー・クルエットや、醤油の罎などが、算を亂して載せてある。ストーヴの上には、浴槽然とした大鍋が湯氣を立てゝ、小鍋や藥罐類を壓倒してゐる。椅子六七脚それぞれの場所に。
幕あくと、廊下のむかうの小部屋に四五人花札を引いてゐるのが、壁に映る陰影でわかる。左隅の食卓には、船から上がつた男が、何かつきだしで、瓶詰の酒を飲んでゐる。傍らに、もう三本ほど瓶があいてゐる。おきみは、流元で丼を洗つてゐる。不器用な手つきで、うどんを丼へあけながら、ジョージ竹田が、看客へは後ろ向きに、大きい卓に尻を載せてゐる警官と、覺束ないヒッヂヤン・イングリシュで立話をしてゐる。

警官（時計を出して見ながら）——You let me know whenever an' thing funny starts 'round there, will you, ee George!（腰を上げて）Well, I guess, I must be going.

ジョージ（頷きながら丼を料理臺へ置く）Sure, sure—! here, mr, ——（急いでポッケトから紙幣を一枚出して、そつと相手へ手渡す）Cigar!

警官（にやりとして）Good Cigar. Thanks! So long, George!（廊下の扉へ去る）

ジョージ（見向きもせずに隻手をあげ、右手では小鍋の汁を丼へあけながら）So long! ——（聲高に）上がりッ！

おきみ（汚ない前垂で手を拭ひながら運ぶ）いけすかない巡査ね、いつも裏口から來ちや表へ拔けつぱなしなんだよ、あの男は！（うどんを船から上つた男の前へ置く）どうも、御待遠うさま。

船から上つた男（瓶を振つて見て）おお姐さん、もう一本。なんだつてんだい、ポリ的の奴？

おきみ　御銚子の御代り！

ジョージ　あいよ。（客へ）なにね、向ひのチヤーレイ德永んとこで、このごろちよいちよい引張りを入れるつていふんですよ。誰があんた密告なんかするもんですか。こつちとらだつて、ね、さうぢやありませんか、旦那のやうな方でさ、今日支拂になつて、金かポケツトに張り切れる程あるなんて方ですと、一と晩位うちの御多福でもなんでも間に合はして上げまさアね。は、はは、はア。——早い話がね。（棚の瓶を大鍋の中へ突込む）そりや冗談ですが、——同じ日本人ぢやありませんか、そんなこと出來るもんですか。あれも、手なんですよ。あんなことでも云つて來ないと、ちよつと強請れないでせう。

すからね、こつちとらお弱いところでさあ。—ストーヴの下を覗く）おう、石炭がねえよ。

おきみ（流元から離れる）てらを取りに來るんですよ。みんなあんなんですからね、この邊の巡査は。（バケツを提げて右扉へ去る）

ジョージ（酒を運んで行く）御ぬるかつたらなほしますせ、

船から上つた男　ま、どうだ、君、一杯、さア掛け給へ。

ジョージ　へえ、へえ、——もうなんです、戴いたも同然でして。（掛ける）旦那はどの船でした？

船から上つた男（對手の盃へ注ぐ）海軍だ。この年齢で、他愛もないもんでな。

ジョージ（飲みながら）ははあ、道理でめつたに御目にかかつた方ぢやないと思ひましたよ。メリケンでせう？

船から上つた男　しかしもう御拂ひ箱さ。このごろ急にアメリカの海軍もやかましくなつてね。（注がれたのを飲む）

隣室の一人（半身を乗り出して）おう、ジョージ、ちよつと。—ジョージ會釋しながら立つて、小部屋へ姿を消す、

おきみ石炭バケツを提げて這入つて來る。ストーヴの蓋を開けてちやらちやら石炭を注ぐ。船から上つた男、じいつと女を見る。）

（カナカの萬造ひよくり表から這入つて來て、左前方の卓へ掛ける。鳥打を鍔際までのめらして、コートの襟を立ててゐる。）

ジョージ（隣室から出て來る）あ、よし、呼んでやる。（新しい客を見て近づく。と、小首を傾けて、横顔を打戍る）

船から上つた男　濟まないが、ちよつとなほしてくんな、姐さん。から寒くちややりきれない。

ジョージ　へえ、へえ。（瓶を受取つて、鍋の方へ引返へす。流元へ引返さうとするおきみに）お客さまだよ。（顎で指す）

おきみ（氣がつかなかつたのに驚いた風で）なに差上げませう？（しきりに前掛で手を拭きながら近づく。これは一種の習慣性でもある）

カナカの万造（俯向いたまゝ）姐さん、間夫の佃煮に「入船御政」つてい正宗をごく熱に願むぜ！

（ジョージぎくりとする。）

（おきみ醉漢と心得て男の肩へ手を掛けようとする。カナカの万造はその手を掴んで向きなほり、ジョージの方を振り仰ぎながら、椅子にふんぞり返つて鋭どい

聲で笑ふ。）

カナカの万造　竹田、達者でゐたな！　君、お政も、もうすつかりうどんやの主婦さんになりきつて、手も顔もつるつるしてやがるぢやねえか！――や、ごきげんよう！なんにしろ、御芽出度い！　二年越しだな！

（間。）

（おきみ手を振り椀がうと焦心る。）

ジヨージ　カナ万か――！

カナカの万造　（女の手を捨てるやうに抛り出し）さうよ、カナカの万造さ！　む、久し振りだつたなア……（又奇聲で笑ふ。）

おきみ　（てれ隠くしに）　ほんとに、まあ、どうしてこんな遠くまで……あれからどうして？　隨分久し振りだつたわねえ。

ジヨージ　全く、これは珍らしい。

カナカの万造　へん、二人ともお世辭はうまくなつたもんだ。

船から上がつた男　おい御亭主。酒がつき過ぎは せんかの？

ジヨージ　いや、これはどうも。左様、すこし――かも知れませんて。（注ぐ）

おきみ　（中央の卓の椅子を揃へ、卓の上の品物をそこくさと片づけながら）まあ、こちらへ御出よ。そんな隅つこぢや、話が陰氣でいけないから。ほんとに久し振りだつたね――。

カナカの万造　（手を振り）や、いけねえ、いけねえ、御馳走は途中でしこたまつめて來てるんだ。おれも、はるばるハワイからこの土地まで椎茸のだしでうどんを食べに來たんぢやねえ。ま、ここで結構、結構だよ。――だが、大層繁昌してるぢやねえか。「入船」たあ、縁起だしな。こいつあ、おいらも、砂糖畑で骰子なんか弄くつてるより、内地の涯へ來て、うどんやをおつぱじめる方がいいかも知れねえぞ。どうだい、竹田、のう？（葉卷をポケットから抜いて口を噛み切る）それで、なんかの、君は、新開破浪漢の方は、もう廢業かい？

ジヨージ　（客の前を氣兼ねして）　そんなもの、お前、この土地ぢや金になるもんか。（無意識にストーヴの前へ返へつてゐる）

カナカの万造　む、君、もとから眼はしの利くスマートな男だつたからのう……（マッチを靴の裏で擦る）うどんやとはよく考へたよ、うどんや！（笑ふ）いや、それでな、おれも君を探しあてるには、隨分苦勞したよ。方方とね――先づ領事館よ、それから警察、いや、この二つはまだ行かねえ場所さ。そこまで行つて尋ねちやあ、も

う話もおしまひだからな。（笑ふ）でも、まあ、方方ぶらついたお蔭げで、大部明るくなつたよ。人間は何處で學問するもんかわからねえな。駄目だよ、ワイキキやオワーフなんかだげをごろごろしてゐたつて、やつぱし、内地へ來ねえと、賭場も美人もほんものはねえのう……。

ジョージ（先刻から苛々しながら）久し振りだ、一杯飲まうか？（おきみに眼で知らす）

（おきみ立つて頷く、裏扉より去る。）

ジョージ　カナデアン・クラブだよ！

船から上つた男　御亭主、すまないが、もう一本。それから、何かかう熱いものが出來んかな？――肉うどんでも？

ジョージ（半ば夢中で）左樣、こんにちのところは、どうも、そのなんです、――いや、肉うどんなら御座います。

船から上つた男　そいつを一つ熱くして貰はうか。やつと、すこし細はり別嬪になつて來た。しかし、このストーヴといふ奴はいいもんだね、かうやつて、地下室全部が溫まるからな。

ジョージ（忙しさうに手を動かしながら）全く……全く……。

船から上つた男　しかし君んとこの妻君はなかなか別嬪だね、どうも、かうなんて云はうかな――その、惜しいよ、こんな、こんなこと云つちや失禮だが、こんな商賣にひびを切らさして置くにあ、え、御亭主。

ジョージ（苦が笑ひ）旦那、御冗談を。

カナカの万造（葉卷で對手を指しながら）ところが旦那、この竹田君は、今こそこんな稼業をしてゐますが、なかなかの艷福家でしてな、いまの御主婦さんなんか、貴方、ハワイ切つての美人でしてな、それが竹田君に首つたけといふローマンスがあつたのですよ。わつしはね、これでずうつとあちらに居りましたもんですから、ちやんとその一部始終を知つてゐますがね、ひとつきりハワイは、もう竹田君の噂で持ちきりだつたんですよ。なにしろ、まあ、土地も狹うござんすしな、それに、この二人のローマンスがローマンスだもんですから。（この間、ジョージ苦が苦がしい顏をして、肉を切つたり、冷藏庫を締めたり、酒のかんを見たりしてゐる）

船から上つた男　ほう、それはそれは。どうも只のうどんやさんぢやなからうとは睨んでゐましたがな。道理で。こりや、御亭主、この分は君の奢りになりますぞ。ははは――だがわしには女子のことはわからん、海から歸へつて來たばつかしぢやから、どんな女子でも綺麗に見えますからな。したが。ここの御主婦――（このときおき

みウイスキーの罎を携へて這入つて來る）いや、わしの酒はまだつきませんかな？

ジヨージ　へえ、只今。（酒を運ぶ。船から上がつた男、少し上機嫌になつて、ジヨージの肩を敲く）恰度いいところです。（注ぐ）

カナカの万造　（わざとジヨージの腋の下から對手の方を窺ひて）それから、まだまだいろいろ面白い話もありますんですがね。えい——と、その、他人(ひと)の娘を博奕で横取りしたり……（笑ふ）

おきみ　（どしんとウイスキーの罎を卓へ置いて）さあ、万造さん、こちらへいらつしやい！（船から上がつた男へ）ねえ、旦那、あんまりこの人をおだてないで頂戴。おしやべりで、しつこくて、浮氣で、見榮つ張りで、大の法螺吹なんですから、なに云ひ出すかわかりあしないんだから。（ジヨージに）ね、貴方、こちらへいらつしやいよ。御注文、なに？　肉丼、わたし見るわ。

ジヨージ　（急に力の籠もつた聲で）さあ、カナ万、飲まう！（万造の手首を掴んで、まん中の卓へ引捺る。万造よろけながら椅子へ掛ける。おきみ、コツプとコルク拔きを持つて來て、ジヨージの傍へ置く。肱でちよつと小突く。万造の視線と礑と行き合ふ）

（間。）

隣室の一人　からすだ！

他の一人　こつちはくつつき三本！

他の一人　や、よしてよかつた。

（遠くの方で汽船が、牛のやうに吼える。）

（ジヨージ齒を食ひしばりながら、ウヰスキーの盞をあける。コルクの爆發する音。）

ジヨージ　注がう！（先づ自分のコツプへ小量、次にカナカの万造の前のコツプへ注ぐ。注ぎ終ると、自分のコツプへも同じ程の量を充たす）

船から上がつた男　姐さん、いや、御主婦さん、貴方は仲仲の別嬪だな——。

おきみ　（料理臺からじつとまん中の二人を見遣りながら）さうですか？

ジヨージ　さあ、グードラツク！

カナカの万造　今夜の勝負を祝さう！

（ジヨージ唇へ持つて行つたコツプを宙に留める。おきみ、忽然として二歩卓の方へ歩み出る万造飲む。ジヨージ、相手を瞶めながら、同じく飲む。）

船から上がつた男　さうですか、は、情けないな。御主婦さん、ま、ちよつと一杯だけ酌をしておくれんかい。その肉丼はどうしたかね？

おきみ　（わざと聲高に笑ひながら）もう出來て居ります

よ。（船から上がつた男の前に掛ける）旦那、わたしにも一杯飲まして下さいな！（對手びつくりする）

ジョージ（再び注ぎながら）よし、今夜の勝負のために！

カナカの万造（せゝら笑つて）今夜の勝負を君と己だけでこの場でやるために！

（二人乾す。）

（おきみ、手酌で飲む。）

ジョージ（もう一度注ぎながら）今夜の勝負をこのままなにも云はずにここで決するために？

ジョージ　よし、乾せ！

カナカの万造　お前から乾せ！

ジョージ　ぢや同時に！

（二人乾す。少間。）

（船から上がつた男なにやらおきみの耳元へ囁く。かなり酔つてゐる。）

おきみ（手を振つて）駄目だよ、なにを云つてるのさ、いけすかない！

ジョージ（ふと氣がついたやうに）おう、お前なんだせ、その御客さま、御二階の表へ御案内していいんだせ。（船から上がつた男。だんだんに卓の上へ俯伏せになつて眠りかける。おきみ揺すぶる）

おきみ　駄目だよ、この通りだもの！　ねえ、旦那。旦那！――さあ、風邪を引きますよ、お起きなさいよう！

船から上がつた男（俄かに眼を瞠き、ポケットへ手をあてながら）いや、酔つた、久し振りで酔つた。いや、姐さん、わしは――わしは、これで勘定だ！　いや待て、かう――と、隨分飲んだな。姐さん、ちよつとだから、これで勘辨してくれ、な、ほんのちよつと、もう立つのは大儀なんだ！　船から上がつたばかり……。

おきみ　しようがないね、また、寝つちまつたよ！

隣室の一人　もうやめた、今夜は。

他の一人　手前一人勝ちだな？

他の一人　なに、昨夜の負けの半分も取り返へしちやゐねえんだ。

他の一人　お、そりあさうと、車はどうした？（船員らしい一人廊下へ出る。欠伸をしながら料理場を覗いて）おい、ジョージ、タキシはまだか？

ジョージ（無茶に飲んでゐた手をやめて）あツ、こりやいかん！（立ちあがる）待つてくれ。すぐだ、ちよつと電話を借りてくるから。すつかり忘れつちまつて……（その儘おきみの方を流瞥に見据ゑながら、表へ出て行く）

おきみ（廊下の男へ）誰が浚つたの、今夜の場は？

その男　永島さ。（振り向き）おい、今夜は奢るんだぞ！

（姿、内へ消える）

カナカの万造　お政ちよつと——ちよつとお酌してくんなよ！

おきみ　（眉を動かす）長くは駄目だよ。（卓へ近づく）

カナカの万造　（おきみの體を抱き寄せる）おい、すこし良い話を持つて來たんだ。おれは（背後を振り返り、低聲にて）この通り、二萬ばかり稼いで來たんだ。逃げてくんな！　え、おい、おらあ、どうしてもお前を思ひ切れねえんだ。……な、おい、お政！（おきみの手を取り頰にあてがふ。おきみ、にいつと笑ふ）イギリスへ行かう、新規蒔直しだ！——どう？

おきみ　（手で背後を指し對手を警めながら、低聲）ほんと？

カナカの万造　觸つて見な、これこのとほり。

おきみ　（手を引く）お金のこつちやない、お前の氣持。

カナカの万造　（手を合はして拜む眞似をする）おれは、すつぱりとあのときお前を呉れてやつたにはやつたが、あとから考へると、たかが知れたカードの吟味爭ひぢやねえか、とても思ひ切れるもんぢやねえさ。（思はず高聲になる。おきみ、背後を指す）——ほんとだ、ほんととも、このとほり！（手に接吻する）

おきみ　ぢや、あの人はどうするの？

カナカの万造　意地にもお前を連れに來たんだ。金で話がわかるとすりあよし、わからなけりあわからねえで、また別に話のつけやうもあらあ。（おきみ曇つた顏をして、じつと前方を瞶める）

おきみ　（徐ろに）わたしもね、こんなことは嫌で嫌で堪らないんだよ。もう一年もやつてるからね。（急に立ち退いて）ともかくわたしは賣物じやないからね！（再び聲が曇る）それを、竹田は賣らせるんだ！（急に烈しい憎みで）お前が悪いんだ！　お前さんが！　博奕に女房を賭ける樣な腑甲斐のないお前が！……わたし、わたし……わたしはひとりで出るよ！　世の中つてこんなもんぢやない！

カナカの万造　さ、さ、そこだ！　だから、云つてるぢやねえか……逃げようつてさ！

ジョージ　（突然入り來り、廊下の前で）すぐ來るよ！　どうも、すつかり忘れつちまつて。

（おきみウイスキーを二人の前へ注ぐ、カナカの万造、ジョージの顏を顧みて笑ふ。ジョージ病的に苦笑して、扉を後ろ手で閉める。卓へ歩み寄る。）

（間。）

（表の方に自動車の警笛、廊下の外に跫音がする。話聲。消える。）

ジョージ　（船から上がつた男を顎で示して　おきみへ命ず

ろ）おう、おきみ、二階へ上げつちめえ！

（おきみは裏口のガラス扉へ急に顔を外向ける。返答なしない。）

ジョージ　おきみ！

（間。）

（斷念。）――

ジョージ　（づかづかと歩み寄り、手を取り、手荒らく女を向きなほさせる）おれの云ふとほりにしないか？

カナカの万造　（くすくす笑ふ）おきみさんとやら、すねねえで御亭主のために浮氣でもなんでもやつたらどうだい？

ジョージ　（振り向き）やかましいッ！　うぬが知つたことかい！

カナカの万造　や、これは、ハワイ一の博奕打さま、いやさ人殺しの旦那。氣に觸つたらごめんなさい！　ま、いいぢやないか、酔つぱらひの一人や二人がごろごろしてゐたつて。それよりは、どうだね、ここに新しいカードを買つて來てるんだ、ひつそり二人で一度の勝負を見ようぢやねえか？（カードを内のポケットから引出す。新聞紙に包んだ大型の紙幣の束らしいものがどさりと落ちる。あわててそれを收めて、尻のポケットから、ピストルを一挺拔き出して、カードの側へ置く。その動作を、すべてガラス扉に映して見てゐたジョージも、ピストルを拔き出して、突然カナカの万造の傍へ駈け寄る。途端に、船から上がつた男、うーむと欠伸をして起き上がる）

船から上がつた男　（獨り語）何時かな？

（ジョージ椅子へどつかと腰をおろして、カナカの万造の顔をじつと睨める。）

ジョージ　ヘッ、執念深い、蛇のやうな野郎だな、貴樣も！

カナカの万造　（カードを押し遣り）ま、封をあらためてくんな、ブランド・ニユウ・メード・イン・ユー・エス・エーか？

ジョージ　勝手にしろ、それでどうするつていふのだ？

カナカの万造　白つばくれるねえ、カードで失くした代物をカードで取り戻しに來たまでだ！　覺悟をして、立派な博奕打らしく、シフトしろい！　封だけア手前に切らしてやらあ！　たしかやり殘しのポーカアがあつた筈だ――二年越しの、な？

ジョージ　面白い、勝つたらどうする？（封を切る）

カナカの万造　素人臭い、負けたらどうすると訊くもんだ。

ジョージ　勝つたらその新聞包は貰はうせ。

カナカの万造　諧謔（ジョーク）も休み休みにしねえな。あのときの勝負で、女のほかにも何か大部こつちから足した分があつたぜ。よし、話は早いがいい。君、敗けたら、居拔でこ

のまゝここを出ると、己がもし敗けたら――もし敗けたら……。

ジョージ　敗けたら――？

おきみ　（まつ蒼になつて、叫び出す）　わたしを賭けたらきかないよ！

カナカの万造　もしか敗けたとすれば、手前の生命は貰つて行くさ！

ジョージ　（手にしたカードを　いきなり對手の眉間へ投げつける）この野郎！

（骨牌は四邊に散亂する。）

（椅子を蹴つて立つた二人は、咄嗟にピストルを構へてゐる。）

（船から上がつた男、素速く二人の中へ割り込み、双方の手を天井へ向ける。握り締められた二人の手から二挺のピストルが床へ墮ちる。）

船から上がつた男　おい、姐さん、この危い物をわしの上衣のポッケットへ入れてくれ。どうだ、二人とも、温和しく坐つて、このわしと話をするか？　それとも、ノーか？（二人とも握られた手の痛みに足摺りしてゐる、おきみ、ピストルを拾つて、命ぜられたまゝにする）どうだ、氣が短かい、返事をしろ！（二人を卓めがけて投げつける。二人とも、くれりと卓へへたばる）さあ、掛けろ！　話は先刻からよう聽いてゐる。――君達は、両方とも悪人だぞ！　悪るい人間だ！　ものの賭けをするにもよりけりだ、婦人の一生を賭けて弄ぶなんぞとは、言語同斷、けだものの仕事だ！　今の社會を何だと心得てゐる、馬鹿者め！　さあ文句があるなら、頭を擧げて云つて見ろ！　いゝか、如何にハワイは日本に近いとは云へ、苟しくも白哲人種の屬國だぞ、そこで、貴様らのやうな遊び人が、畜生にも劣る賭け事にうき身をやつして、その上、ぬけぬけとこのアメリカ内地でまで、醜い遣り取りのはたし合ひをしに來をる、――それをアメリカ人が知つたら、何と云ふ？　おれは世界の浪人だ、日本の恥だとか、國のためだなんぞ小ぽけなこと云はん。ただ、貴様らのやつてることは、人間の恥辱だぞ！　それだけ云つて置く。――わしは、この婦人の心を試して見て知つてる、善良な婦人だ！　善良でない所もあるが、それは行く行くなほるだらう。この婦人はわしが暫時あづかつとく！　と云つて、貴様らのやうにけだものの慾情からそんなことをするんぢやない。わしにも些か心當りがあるからだ。わしがこの婦人を世の中へ送り出す時には、立派な女性として社會へ返納する。――さあ、それに文句があるか？　あるなら述べて見い！　無し！――ぢや、これでわしは歸へるぞ、婦人、貴女はわしといつ

しように來たざるか?

おきみ　(敢然と) 參ります、行かして下さい!

船から上がつた男　よし、それで決定した。その言葉が、婦人の自由意志から出たるのをたしかに記憶して置けよ! (ポケットから一枚の紙幣を投り出す) これは、亭主、今夜の酒代だ!　剩金はいらん!　(立つ)

(ジョージとカナカの万造も立ちあがる。)

船から上がつた男　こりやこりや、靜かにせんと危いぞ!　わしの手には貴樣らのぼんくらピストルとちがつて偉い速度のオートマットが潜んでゐるんだ。さあ、婦人、その扉を開いて。——行きませう!　(二人去る)

(間。)

ジョージ　(がつくりと卓へ兩肱を突き、矢庭に注ぎ殘りのウヰスキーを口へ運んで行き、空らにすると眼の前の瓶からコップへ注がうとするが、一滴もないので瓶を床の上へ擲きつける) 畜生ツ、畜生ツ、畜生——ツ!　(彼は泣いてゐる)

(その刹那、裏口の扉を徐ろに開いて、警官が這入つて來る。カナカの万造、顏をあげて警官を見る。見たと同時に、彼は脫兎のやうに表の扉口へ駈つける。)

(扉開く。)

(そこには探偵が立つてゐる。)

警官　Is(イズ) this(ジス) the(ゼ) guy(ガイ) you(ユー) were(ワア) looking(ルツキング) for(フォーア), Jimmie(ジムミー)——

探偵　Yep(エツプ), that's(ザツツ) him(ヒム), all(オー) right(ライ)!

ジョージ　カナ万、どうした?

カナカの万造　こいつだ、ホノルルからおれを尾(つ)けて來やがつたのは!　取つたたア組合の共托金さ!

——幕——

富豪と眞珠（一幕）

人

アーチヤー氏　一と工事毎に三十人の支那人苦力を生埋めにするといふ風評のあつた建築請負師から、戰爭の銅鐵株をあてゝ、一躍富豪の班に列した人、ウヰスキーの香と葉卷と冒瀆辭とを身邊から離さない、亂暴な會話術を以て社交界に君臨する人物

アーチヤー夫人　奢れる男性の奴隸

マリアンナ　娘、アーチヤー夫人の雛型

フランク　實はマリアンナの巨額な持參金を目途にしながら、熱烈にローマンテイツクに彼女に戀ひ克つた近代的英雄

大學教授　自ら富豪の御用學者たるを辭せずと雖も、粗雜な富に對して心中フエビアン協會式な不平を抱くことは古ぼけたシルクハツトが證據立てゝゐる

執事　アーチヤー家の大小九十九個の鍵の番號をアルフアベツトのやうに諳んじてる男

牧師

探偵

巡査、新聞記者、寫眞班等

寶玉店の店員

寶玉店の店員と自稱する人物　一種の藝術的手腕を有する、最も利己的な反逆思想の直接行動者である

小間使　二人

マリアンナの附添人　少女二人

フランクの附添人　社交クラブに居睡りしてゐる青年紳士のうちの非特定的な一人

來客　多數、雜多なしかし單純な社交服の着手である。アーチヤー氏を輕蔑しながら招待には必らず應ずることを忘れない種類のセツト

時

現代、六月のある日、午前十一時半頃

處

アメリカの都會、富豪の邸宅

舞臺　すべての近代的富豪の場合に於けると同樣に、成金アーチヤー氏の客間も、概ね「買はせられた」美術品に充ちてゐる。例へば、中央奥の壁に掛け

られた、金枠のチシアンの畫布の如き、磨きあげた大理石の床に敷きのべられたペルシヤ古代織の大絨毯の如き、――いづれも、その眞僞は定め難いが、値段としては素張らしいものでなければならない。もしそれ、右手壁に刳り抜かれた煖爐のマントルピースの上に設けられた瀟洒たる書架のセークスピア全集の第一版に至つては、すこし古書蒐集癖のある人間なら、當時の原版物が、どうしてアメリカの製鋼トラスト株主の手に這入るわけがあらうか、と懸念せざるを得ないのであるが、アーチヤー氏にとつて、それは何の痛痒を感ずべき材料ともならないのだ。ともかく、この宏大な客間には、アーチヤー氏一家が、ひろく世界を漫遊して、金にあかして買ひ需めた裝飾品が、些か度外れな必要性をもつてのさばつてゐることだけが目につくのである。これは、アメリカの成金趣味であつて、いかんともしがたいことだ。

が、ただ一つの自然な物がこの室内にあつた。それは、左手舞臺側前方と、右側マントルピースのむかうにある、巨大な鉢植の棕櫚の木である。この二本の尊い植物の存在によつて、左手隅のスタインウエイのグランドピヤノも、けばけばしい天井のシヤンデリアも、贋物のドレスデン陶器も、いな、全アーチヤー家の虚飾が過大な不自然さから救はれてゐる。

いづれにしても、この家の主人とその家族とは、すべての器物家具裝飾品の價値を、それに對して支拂つた金額によつて評價してゐることは事實である。そんなわけから、アーチヤー氏夫人の胸のダイヤモンドのペンダントなども、一般に崇拜されてゐる。彼等に屬する社交界で、誰が、アーチヤー氏のネクタイピンの頭に光るアレキサンドライト石の幸福な光澤を疑ふほど勇敢な人間があらう。その微妙な光澤こそは、時價三萬弗ではなかつたか。かういふ家の雰圍氣にあつては、右手奧に、棕櫚の木と隣つて設けられてある扉から、稍斜めに見受けられる圖書室の、きらびやかな調度に照り映ゆる電燈の光と雖も、普通の都會の地下埋設線を傳はつて來るあさましい動力を利用した電氣――などのやうには見えないのである。

幕開くと、金ぴかのルキ何世(持主は不幸にしてその年代考證を詳かにしない)椅子に掛けたアーチヤー夫人と、マントルピースの前に太い葉卷を燻らしてゐる富豪と、左手前方の扉の前に金ぴかの制服を着た執事との三人が、舞臺に發見される。もう五六脚のルキ何世的椅子が、中央前方の大きい卓の周圍に、密議を凝

らしてゐるやうに聚まつてゐる。夫人の寶石づくめの右手の三本の指は、卓を苛立たしげに彈いてゐる。執事は銀の盆に載つた名刺を捧げながら、來客の名を呼びあげやうとしてゐる。別室、圖書室の方から、富んだ紳士淑女貴婦人達のみの立て得る談話の聲が、ラクマーニノフの「死の島」の管絃樂のやうな、悲しい遠音になつて響き傳はる。彼等二三の笑ふ聲すらも、現世では既にもの悲しく響くのである。しかし、それらは、執事の過去二十年間客の名を呼び上げ來つた習慣的語調の偉大さを邪げるものではない。

執事　第一洗禮教會牧師ピー・デー・ハンショウ氏。ウイリアム・アーサア・ラグテム教授。

夫人　おお、お待ちしてゐました。ゼームス、お通し申して。

（執事恭しく一禮して去る。）

アーチヤー氏　まちがひあるまいな、――その、フランクの娘へ贈つてくれる眞珠のネツクレースつてやつの着く時間は？　十二時が一分でも遲れたら、俺のうちの恥だぜ。

夫人　え、あたしも先刻から、それを待つてゐるんですの。でも、フランクのことですから、まちがひはありますまい。

（執事、牧師と大學教授とを招じて、再び左手扉から退入る。）

牧師　（謹嚴な老人、嚴めしい正裝）今日はアーチヤー夫人。――今日は、アーチヤーさん。皆樣はお揃ひですかの？　（握手）

夫人　ようこそ。ええ、お客さまは、もう。

アーチヤー氏　揃はんのは、花婿と花嫁だけですよ。しかし、この二人だけは大丈夫だよ。あまり熱心に婚禮をせがみよつたところから、今日となると恥かしくて、一分でも遲らさうとするのかも知れねえぞ。（笑）

教授　お機嫌よう、アーチヤー夫人。お機嫌ようアーチヤーさん。（握手）

アーチヤー氏　ラグテム先生は、たしか寶石のめききだつたと思つてますが――。

教授　趣味からですよ、アーチヤー氏。道樂から、別にめききと申すほどのものではないので、人類の不思議な傳說を罩めたもので、寶玉よりローマンテイツクなものはないのです。我我のかうして踏みつけてゐる地球の奧の奧には、すべての重壓に抵抗して、祕められた神の意志のやうな貴金屬が、永劫の忍耐力をもつて潜んでゐるのです。美しい宇宙の祕密ぢやありませんか　それを、人類は、互に殺し合つてまでも、地上を[illegible]して、

力あるものの夢を飾る材料とするのです。海の底深く深く、聰明な乙女が婚宴の席へ出る前の涙のやうにひかる眞珠を考へてごらんなさい。ネプチューンの神と雖も…。

アーチャー氏　大變結構な御話だが、時間がありませんので、どうぞ別室で話して下さい。いや、お出を願つて、どんなに妻も滿足して居るか知れませんに。

執事　（二人の來客を別室の方へ案内する）どうぞこちらへ。

（左手扉に輕るいノック、富豪時計を出して見る。夫人、立ち上りかけて、又腰をおろす。執事、別室から現はれて、左手扉を開く。小間使、フランス風に、ちよつと小腰をかがめて、何か執事へ囁く、執事、主人夫婦の方へ向き直る。）

執事　只今、寶石商テサニーからの使ひの者が見えましてございます。

夫人　さう、すぐこれへ通すように。

執事　はい。（一禮して去る）

アーチャー氏　間に合つたか、畜生ッ、いやに待たせやがつた！

（娘マリアンナ、結婚式の衣裳をして、左手奥、ピアノの傍の階上へ通ずる扉から現はれる。二人の少女、彼女の長いドレスの端を持ちながら續く。小間使、扉を支へて三人を通す。三人が客間へはいると、小間使はその扉を締めて階上へ去る。）

夫人　あア――マリアンナ！　あたしのやんちやな、可愛い、氣高い、冒險好きな、美しい、甘い、おお、おつ母さんの形容詞が破産するほど愛らしいマリアンナ。お前とも、もうちよつとでお別れだね？　なんて美しいんだらう！　なんて純潔なんだらう！　この次お會ひするときは、メロン夫人としてだね。あたしは悲しい、嬉しい。それに淋しい――。

マリアンナ　まあ、お母さん、さう一どきに何も彼もお云ひなすつては、隣に聞つてよ。それよりは、お晩餐のお支度は出來てて？　フランクの眞珠はまだ？――

（執事、寶玉店の店員と自稱する男が同伴して入る。）

寶玉店の店員と自稱する男　（青い「テサニー」と標章のある制服を着てゐる）こちらですかね――マリアンナ・ネリー・アーチャー令孃さんと仰有るのは？（チユウインガムを嚙む）この品はね、店の支配人から二人護衛をつけて貰つて配達して來たんだから、大切な物らしいんですが、受取つたら、これへ署名して下さいつて。

アーチャー氏　うむ、うむ、お前は善い子だよ。そら、駄賃だ。（十弗紙幣を手渡す）

（夫人受取書へ署名して、包を受取る。）

マリアンナ（包みを母の手から引たくつて、わくわくしながら開く。包の表に一封の手紙がある。それは後廻し）まあ、なんて綺麗でせう！

寶玉店の店員と自稱する男　おや、わツしはもう歸へつていいですかね？

アーチヤー氏　待て、待て！

（寶玉店の店員と自稱する男、ぎくりとする。）

アーチヤー氏　おれがしらべて見てからでねえと、お前を歸へすわけにア行かねえ、大體、この眞珠は、フランクが一萬弗奮發したと云ふからにア、どんな惡黨が遇纏はねえとも限らんのだからな。（眞珠の首飾をざくざくと手に揉み合はせたり、匂を嗅いだりする）どうだのウ、ベツキー（夫人の名）こりや、本物だろのウ？

夫人　まあ、貴方が先月のお誕生祝ひに下すつたあたしのブローチの眞珠とそつくりですわ――

アーチヤー氏　一度ラグテム先生に見て貰ふか？

夫人　大丈夫よ。

アーチヤー氏　よし、テサニーの小僧さん、ぢや歸へんな！

寶玉店の店員と自稱する男　はい、ぢや、たしかに御渡ししたと支配人様に云ひますぜ。（去る。執事つゞく）

（マリアンナ手紙に熱烈に接吻してゐる。）

マリアンナ　お母さん！（夫人に抱きつく）あたし何と云つていいやら！（泣く）嬉れしい！　嬉れしい！（接吻する）こんなに嬉れしい！

夫人　まあ、折角のドレスが皺苦茶よ。さ、ネツクレースをお掛け。（娘眞珠を掛ける。母親背後よりそのフツクを締めてやる）どれ、どれ――。

アーチヤー氏　立派なもんだ。フランクの奴、眞は人間がしつかりもんたよ。マリイ、お前は幸福（しあはせ）たな、お前のお母さんは、十仙店のガラス玉の眞珠で結婚したつけなア。ベツキー、おいらも今のフランクの奴ほどの腕前がありや、お前なぞとガラス玉で結婚をするもんぢやなかつたに。

夫人　およしなさい、外聞の悪るい！

マリアンナ　まあ、二人とも、そんなだつたの、以前は？――十仙店のガラス玉ですつて？――でも、ローマンテイツクね。

執事　（三四人に背後から押されて這入る）只今、ソサイテーニユース社、ヘラルド社、ハイライフ社の記者が參りましてございます。

夫人　新聞記者？（輕蔑の表情）ま、お通し。今日だけは娘の晴れの日に免じて、面會を許しませう。お話はいけませんて、ね。

新聞記者團　（異口同音に）お嬢さん、お芽出たう！（どやどやと六人の男入り來る）

夫人　そりや何かい、お前達、あの夕刊に出るの？
記者の一　私のはあと二時間でアメリカ中へお孃さんのお寫眞を配布することになります。
記者の二　私の方は一時間四十五分で。もう飛行機がもぢもぢしてますんで。
記者の三　私の社では最高速度輪轉機が一時間で刷り上げつちまひます。
アーチヤー氏　やかましいツ！（葉卷の箱を記者團へ廻はす）早く寫眞を撮んな。撮つたら、ぬかりもあるめえが、——あとはよろしく頼むぜ。ついでに、この一萬弗眞珠をはつきり撮つてくんなよ。こりや婿殿の贈物だ。
記者の一　一萬弗眞珠！
記者の三　おい撮らう！　記事は皆出來てゐますから。
記者の二　お孃さん、どうぞそのまま！
（マグネシユームのフラツシユ。カメラを疊む。六人我勝ちに出ようとして扉口で爭ふ。去る。執事も去る。）
夫人　まあ、何て俗惡なんでせう、新聞記者つて！
マリアンナ　フランクはどうしたんでせう、遲いのね——。
（間。）
夫人　（想ひ出したやうに）でも、あの記者達のことだから、皆で來てるだらうね。マリアンナ、お前、明日までには世界的に有名よ。お前と、フランクの眞珠と——それを知らずに、樂しいお前達二人はホネームーンでシカゴ、コロラド、サンフランシスコと旅してるんだね。
アーチヤー氏　（臀部のポケツトからウヰスキー罎を取り出して飲む）娘がゐなくなると、ベツキー、當分は淋しいな。
夫人　さうよ。
マリアンナ　フランク、フランク、愛するフランクはどうしたんでせう？　まだ自動車の音がしないのね。ゼームスに訊かうかしら？
（執事、無表情にて入り來る。）
執事　フランク・ピレボント・メロン樣！
夫人　そら！（マリアンナを押し遣る）
（フランク登場。執事退く。）
フランク　（マリアンナに接吻しながら）マリアンナ、愛するマリアンナ！　今朝はまた何といふ美しさ！　その眞珠！　おお、私は、天女と同じカーペツトの上に立つてゐる我が身を信じていいのか！
アーチヤー氏と夫人　フランク　たうとう今日の日が來たね。
フランク　有難う、有難う！　今日の日です、永遠の時のうちの今日です！　悦んで下さい、祝つて下さい。私ほ

どの幸福な人間は世界に二人とあるでせうか！

（三人交々接吻する。）

アーチヤー氏　もうそろそろ時刻だ。行かうぜ、連中が別室で待つてる。

（四人圖書室へ歩み入る。フランクとマリアンナ、老夫婦互に腕を組んで、小間使が四人へ目禮して、その扉が閉ぢる姿を片影的に見せる。）

（舞臺しばらく空虚。）

（執事あわただしく左手扉より入り來る。寶玉店の店員、破れた汚い服裝で、ころぶやうに這入つて來る。）

執事　もう式がはじまつたやうだ。駄目だ、ま、ちよつと待つといで。（輕ろく別室の扉をノックする。小間使しづかに扉を開く。低聲にて執事何か囁く。扉再び閉ぢる。執事嚴かに店員を顧みる）

執事　怪我をしたのか？

寶玉店の店員　怪我のなんのつて、先方はピストルを持つてあがるんで、危なかつたですよ。腕をかすられました。

（扉あわただしく開く。夫人取亂して入り來る。）

夫人　（執事へ）ゼームス、非常なこととは何事です？

執事　奧樣、このものの申すには、あの眞珠のネツクレースは贋物だと云ひますので。

（アーチヤー氏登場。）

アーチヤー氏　なに、贋だツ？

（夫人氣絕しさうによろよろとなる。執事支へる。アーチヤー氏店員の胸倉を取る。）

アーチヤー氏　やい、小僧ツ。――ああ手前は、先刻のとは面がちがふな。一體全體何だといふんだ？

寶玉店の店員　旦那。聞いて下さい。さうひどくしないで下さい。腕にピストルの彈丸が食込んでるんです。――かうなんですよ。あツしが店を出ますとね、主人が自動車へ乘つてけと仰言るもんですから、店の前にあつたタキシーへ乘つたんです。信用の置けさうな運轉士でした。車も上物でね。これこれの番地と、お宅の番地を申しますと、車は最初此方の方へ來たのです。ちようと、このブルヴアードへ差し掛かります公園角の三叉路がございませう。あすこへ來ますと、車はずうつと公園の中へ這入つたぢやございませんか。あツしは、こりや變だな、でも近路でも切るつもりだらう。と、安心といふ奴は妙なもんで、ついうつかりしてそのまま乘つてゐたもんです。すると、途中でベンチの上に寢てゐた男が、むくむくつと起きあがつて、あツしの車を停めるんですね。それが二人とも共謀だつたんですよ。車を停められた運轉士が何か二た言ばかりその男と問答したあげく、あツし

に降りてくれろと云ふんです。扉が開いたと思ふと、もうその乞食みたやうな奴が車へ這入つてきましてね、ピストルで胸を突きやがつたんです。しづかにしろ、巡査へ信號でもしたら最後ぶつぱなすぞツ。と、かうなんです。それから、どこをどう通つたか知れませんが、一時人事不省になつてゐたのが、眼をさますと、得態の知れねえ空アパートメントに、運轉士に縛られてあツしは臥てるたんです。運轉士の手にはピストルがありました。あツしの服をとられ大切なネツクレースの箱がないのです。その代りあつしはこんなお乞食みたやうな服を着せられてました。お客の大事、店の大事、あツしの首も飛ぶことですから、もう我慢しちやゐられません。あつしはいきなり運轉士の野郎へ飛び掛つて殴り合ひです。――でも、奴の方が強くて揉みましたが、其の隙へ飛び出すと、よそのアパートメントをかためてる巡査に逢つて、わけのわからない所で、最初に出逢ひましたタキシーを取つたんです。ああ、痛い!(椅子へ仆れ伏す)

夫人　大變、大變、ゼームス、早くマリアンナをお呼び!

(執事別室へ去る。)

アーチヤー氏　おい小僧さん、しつかりしろ。(ウイスキーの瓶をふくませる。夫人うろ/\と双手を振りながら室内をぐる/\廻る)

夫人　眞の眞珠!――そんな筈はない!　そんなことはない!　何といふ恥だらう!

(マリアンナ執事と共に入り來る。フランク心配顔であとからついて來る。)

マリアンナ　御母さん、どうしたの。

アーチヤー氏　(娘の首飾を引張る)　これ、これだよ。小僧さん、これかえ、お前の持つて來た眞珠は?

寶玉店の店員　ち、ちがひます。

フランク　ちがふ?

夫人　はつきり云つておくれ、娘の一大事だからね。(半ば自分へ)こんなことが世間へ洩れたら大變です。ゼームスその扉を締めて!(執事別室への扉を締め切る)

フランク　でも寸分ちがひはないやうだがな、私には。

寶玉店の店員　(痛みを怺へて)　ちがふ、ちがふです。うちのは、粒が揃つてました。光、ひかりがこんなに青ざめてません!

(一同呆然として顔を見合はす。)

(夫人ひそかに執事へ耳打ちする。)

夫人　いいかい、いつも來る。ダンカン探偵を――とね。

執事　かしこまりました。(左扉より去る)

マリアンナ　困つたわね、フランク、貴方、一體貴方がぼんつくだからよ。御自分で持つて來て下さればいいのに。

フランク　でも、そりやマリアンナ、我我社會の風習として、そんな十仙店のガラス玉ぢやあるまいし……。
アーチヤー氏　ああ、お前達、今頃そんな下らねえことで爭つてる暇がありや、この小僧の世話でもしてやつてくれ。死にさうだぜ。――フランク、お前濟まねえが手を貸してくんな。下男部屋へちよつと寢かして置かう。大切な證人だ。
（アーチヤー氏とフランク店員をかついで左手扉より去る。）
夫人　（しげしげと娘の首飾を眺める）さう云はれると、どうやら變だね。あたしが結婚したガラス玉もこれによく似てゐたよ。何でも當今は日本などで、巧みな模造品を輸出するといふことだからね。
マリアンナ　で、どうするの、お母さん？　式は延ばすの？
夫人　さあ、ね、お父さんとよくお相談してからでないと。
（アーチヤー氏、フランク、執事の三人再び現はる。）
夫人　どうしませうね、このまま式を擧げますか？
アーチヤー氏　そりや、お前、斷じていかんよ。俺らは、贋物は嫌ひだ。贋物の首飾で、ウイル・アーチヤーが娘を婿にくれてやつたなんて云はれると、株式にがらがが來るよ。ともかく犯人をしよいびいてしまふまでは、結婚式は延期だ。
マリアンナ　でも、もう一時間で、あたしの寫眞が市（まち）へ出るのよ。へんぢやない？
夫人　それに外聞！
フランク　猶事を荒立てるといふものぢやないですか、アーチヤー樣。
夫人　パパ、かうしませう、みんなお客はあのとほり眞物だと云つたんだもの、そつとしときませうよ。ねどう――――？
アーチヤー氏　そんな馬鹿な話はない。斷じてない、俺の眼の曇らねえうちは、この十仙玉を眞珠だなんて、ご免蒙りますわい。（ウヰスキーを飲む）
夫人　そりや、さう云はれると、あたしが最初に鑑定したんだもの、あたしの粗忽かも知れないけど、さ。
マリアンナ　お父さん、ね、お願ひですから、眞珠と何とにかかはらずに、結婚式たけは濟まして頂戴ね。
フランク　今度は二萬弗の金を奮發しますよ。
夫人　ぢや、かうしたらどうでせう？――あのラグテム教授に御出を願つて、一應皆さんの前で、それとなく御鑑定を御頼みするんですよ。あの人なら、大丈夫眞物とおめききしますわ。だつて、あたしのフヒラデルフイヤ製の佛様でさへ、セイロン島の古物だつて云ふほどですもの。さうして今日のところはさうツとして皆樣に歸へつ

て歎くわ。御父さん、貴方何を云はうとしてなさるか、ちやんとわかります。あたしにもちつと先を云はして下さい。世間の噂でせう、この事情が發覺したときの？それや、貴方、それこそ、アーチャー家の千萬弗が物を云ふときですわ。世間の口を噤むのは、一方に喧ぎ手があればそれでいいのです。ラグテム教授を利用しませう。どこまでも、ね。さうすりや、知れなくて濟むから、株の御心配もなく濟むといふものですわ。

アーチャー氏　いや女といふものは嘘をつき出したらアパートメント式に上へ、上へ、と積を足すことは、俺にもよくわかんよ。

フランク　アーチャー様、私にもそれが一番良い方法だと思はれますよ。

マリアンナ　そんなことでもいいわ。どうせ、お父さんは、あたしのことなんか、ちつとも考へて下さらないんですもの。（泣く）

夫人　そんなら、涙は禁物よ。不吉ぢやありませんか、結婚日に泣くなんて。

アーチャー氏　娘、泣くな。お父さんは決して御前をそんなには思つてないのだ。（娘を抱く）まあいいや、お前達で勝手に片づけるがいい。俺は知らねえ。眼を瞑る。（ウヰスキーを飲む）

（夫人、執事に何か命ずる。執事、別室へ入る。マリアンナ急に元氣を恢復して、フランクに寄り添うて立つ。）

（執事、扉を開く。牧師を先にして、教授その他の客及び附添の紳士及び少女など一同這入つて來る。執事教授の耳へ囁く。）

夫人　甚だお暇を取らせまして相濟みません。實は、別室でお紹介いたしませうと思ひましたのですが、式場のことでもございますから、あらたまらずに、此處で御目にかけます。（執事と眼を見交はす）この首飾でございますが、これは、婿のフランク・ピレポント・メロンが結婚記念として娘に與へた品なのでございます。（稍得意に）今夜の夕刊にもそのことが出るやうに承りましたので、あらためて州立大學教授のウイリアム・アーサア・ラグテム氏に、非公式な御鑑定が御願ひしたいのでございます。それは、寶玉類に殆ど無智でありまするあたしどもの非常に參考になることとも思はれますので――。（娘首飾を外して教授へ渡す）

教授　ふむ、――ははア、光澤は、申し分ありませんな。皆様ご承知でもありませうが、眞珠の最も發達しました種類は、その密度が非常に濃厚なものでして、ダイヤモンドよりも硬い物なのです。これは、不肖の見ましたと

こうによりますと純粹の南洋産と思はれます。粒に稍不調和なのが二つ見えますが、もし、これが全體のユニアンスを缺くとしても、此細なる瑕瑾にしか過ぎませぬ。皆樣、眞珠といふ物は、恐らく世界に最高價と呼ぶ天然の装飾品です。これほど高く、これほど採集に苦心を要するものはございません。失禮かも知れませんが、メロン樣、これはいかほど御拂ひなりましたらうか？

フランク　ほんの、その一萬弗で。

來客一同　一萬弗！

鑑技　安いです。――これは控くとも、不肖の眼からは、五萬――六萬弗までの價格はあるものと鑑定いたします。どうです、この硬さは。その邊の日本製の培養眞珠などは、かういたしますと、もう形はないもので。

來客の一　なアるほどね。

執事（牧師の側へ寄つて何か囁く）おゝ、皆樣、これから式にとりかかります。

夫人　おや、あたしとしたことが、うつかり婿自慢をいたしまして、飛んだ時刻べらしをいたしました。新聞にも出ますやうに、式は十二時定刻ですのに、もう三分も遲れました。どうも母親は甘いもので。（笑ふ）

執事（別室の扉前にて）さア、どうぞこちらへ。

夫人　式場のむかうへ、ウエデング・ブレクファアストのテーブルを揃へてございますから、皆樣、どうぞごゆるりと。

（一同去る。アーチャー氏、獨り殘らうとする。夫人、ウヰスキーの罎を取り上げて、強く彼の胸を抓める。）

（小間使、左手扉をノックする。執事、一同を別室へ送り入れてから扉を開く。）

（探偵、巡査と共に入り來る。）

執事　お待兼ねです。只今奥樣を御呼びいたします。

探偵　テサニーの方へ通じてあるかね？

執事　いやまだです。何しろ取り混んでますのでな。

探偵　電話は？

執事　私の部屋に一つあります。あちらで。

探偵　何だね、取り混みといふのは？

執事　お孃さんの御婚禮で。

探偵　ははア、――こりや飛んでもない。（三人苦笑）

執事　式はもうはじまつてるかも知れませんがね。

探偵　おやかましよう、君、一つ別室へ來てくれんかね？そこで一部始終を聽かしてくれ。

執事　なるだけなら、さうして下さい。

探偵　だが、オコンナー君、君だけはこの部屋にゐて貰はう。

（巡査擧手の禮をする。二人退場。）

（稍間。）

（別室の扉颯と開く。來客の群、巡査びつくりして椅子へ掛ける。）

（「新郎新婦の健康を祝ひます！」誰やらの發音が響く、コップのかち合ふ音。）

（巡査卓上のウヰスキーの罎を目の前に翳して、架空的に「プロジット」をして、喉を鳴らしながら喇叭飲みに飲む。執事登場。呆れる。）

執事　えへノ！　えゝと、ダンカン刑事部長は、ちよつと外出されましたが、それまでごゆるりと御待ちになるやうにとのことでした。

（巡査あわてゝ罎を隠くす。起立。）

巡査　よろしい。

（執事別室の方へ去る。巡査また飲む。）

（別室の方がだんだん賑やかになる。）

（突然、ばらばらと米と靴とが、巡査の方へ降りかゝる。）

〔作者誌、結婚當日ホネームーンへ出かける新婚夫婦に米と古靴とを投げつけるのはアメリカの風習である〕

（巡査びつくりして罎を隠くす。）

（マリアンナとフランク頭を抱へながら別室から逃げて來る。）

フランク　さア、急いで、急いで。着物は途中で脱げる！

マリアンナ　待つてよ、待つてよ！

來客の四五人　（稍酔つて出る）お芽出度う！　お芽出度う！（手にした古靴を投げつける。その一つが巡査の肩にあたる）

（來客だんだん殖える。マリアンナとフランク左手扉を開けて逃げる。來客一同米つぶてを浴びせながら、つゞく。自動車の警笛が表の方にする。）

（アーチヤー氏と夫人も急いで出て來る。一同、表門へ見送りに出る。）

（喧騷一としきり。）

（教授静かに別室から姿をあらはす。中央の「チジアン」の額をぢつと見詰める。次に、絨毯の裏を検らべる。それから部屋中の骨董品を一つ一つ手に取つて眺める。）

（巡査、怪しみながら、彼の行動を眼で追ふ。）

（來客三三伍伍に歸へつて來る。）

來客の二　たうとう出ましたね？

來客の六　あのネックレースは素敵でしたよ。

來客の三　いい似合の夫婦ですわい。

來客の一　メロン君も弗箱といつしよになりましたね。餘

り大きい聲ぢや云はれませんが。（笑ふ）
來客の七（女）　なんていふドレスでせう！
來客の四（女）　まあ、あのレースはヴェニスから取り寄せたのですつて。
來客の二　さあ、みんなもつと祝ひませう。
夫人　皆さん、これからが、ほんとのお祝ひなのでございますから、さあ、どうぞこちらへ。
アーチャー氏　やれやれ、これで俺も一と息か！
（來客二人づつ組になつて別室へ這入る。敎授も連れ込まれる。執事扉を鎖さず。）
巡査　なんのこつた。こつちとらア、捨て殘りのウヰスキーで我慢するのか！（飲む）
探偵　（突然左手扉より入り來る）おい、オコンナー、ゐたか？　あの執事は？
巡査　はいつちめえましたよ。
探偵　（別室の扉をノックする。執事頭をあらはす）これだ。みつけた！　奥さんを呼んでくれ！
（執事姿を消す。夫人いそいそと現はれて來る。）
夫人　あつたのですか？
探偵　これでせう？
（本物の眞珠を出して見せる。）
夫人　まあ――。
探偵　すこし血がついてますがね、野郎の體の下になつてたもんで。
夫人　血ですつて？
探偵　ビリイ・トムソンの死骸の下敷になつたんですよ。そのトムソンの野郎の上にはバスが載つかつたんです。野郎あわを食つて逋げようとするところを、運惡るく走つて來たバスに乘つかられたらしいのです。私は、前からこの話をあなたのところの執事さんから聽いたとき、もうてつきりビリイの仕事にちがひないと星をつけたんです。あいつはかういふ社交界荒らしで、私共が年來追ひ廻はしてゐた奴なんです。この三ケ月ほど、外國から仲間の奴へ通信をよこしたんで、さてはづらかつたかと思つてたら、今日の仕事でせう。しかしもうづらかるにもづらかれませんや、警察の病院自動車で運ばれて行きました。社交泥棒の末路としては可哀さうです。――でもこりあ奥さん、いい眞珠ですぜ。男の體の上に大自動車が一臺乘つかつても、こんなです。ほんとの眞珠には、これでなけりやいけませんよ。
夫人　まあ、ほんとに御骨折でした。
探偵　いいえ、それほどではないので、何氣なく、大通りを、彼奴の行くけいづ買の店の方へ行かうとすると衛の人だかりなんです。人を別けて見るてえと、ビリイでした。

ぢや、ネツクレースは上げて置きます。

夫人　追つてこの禮は。——ちよつと、警察の御方、でも、この事件はないしよにして戴けるでせう。

探偵　そりや、まあ、奥さんの御思召次第によりましてはね——。

（アーチャー氏突然別室より現はれる。）

アーチャー氏　その金は俺が出す。（ポケツトから一束の金を出す。）

探偵　いや、これは、アーチャー氏、何、その、よろしうございます。おい、オコンナー。行かう。歸らうぜ。

アーチャー氏（夫人に會釋して別室へ引返へす）これで濟んだといふものだ。（去る）

（間。）

（教授よろよろと醉つた姿で現はれる。執事介抱してゐる。）

教授（大聲で）こ、ここの家の品物は、みんな贋物ばつかりだ！　べらぼうめ、この俺の眼を瞞ませると思ふかい！　見ろ、この壁、このカーペット、この壺、この時計——みんな高價な贋物だ、虚僞だ、嘘だ！　この家から出て行つた娘が、十仙店のガラス玉をぶら下げたつて、何の不思議がある！　おい、ゼームス、ジム公、狸、手前、ちやんと知つてるんだらう？

執事　ま、さう大きいお聲を御出しならんように。え、私は、何も彼も存じて居ります！　金さへ拂へばね、ほんものが買へると思つてゐらつしやる御主人も奥樣も！

教授（大聲にて笑ふ）可笑しいや！　一萬弗の眞珠が——ガラスの玉だよ！　笑へ、笑へ、ゼームス笑つたり、かういふのが富豪ぢあ！（哄笑）

——幕——

默禱（一幕）

人

主任醫師
看護婦　とみ子
同　あさの
同　まき
怪我人　A
同　B
人事係長
小使の爺さん
怪我人　C
同　D
同　E
黑ん坊　製炭職工
怪我人　F
同　G
同　H
職工　1、2、3、4、5、6
大火傷者
職工及雜役夫、女工、その他の勞働者多勢

時
現代

處
或る大鋼鐵工場を中心とした都市の製鐵場に於ける繃帶所

舞臺　左右兩端から中央奥へ向つて、鈍角的な三角を描いた舞臺面。——この扇の様に開いた、無雜作な、木造りの一室は、東亞製鐵所の假繃帶所である。狭苦しい室内の凡ての調度や道具類は、暗雲の様に工場の内外を密閉する煤煙によつてどす黒く穢され僅かに洗面器の上の鏡と、藥品棚の上の八角時計と、壁に貼られた簡易貯金勸誘のポスターだけが生色を呈してゐる。

左端前方に明け放たれたる木製の扉。その傍に大きい窓、續いて簡單な外科用の藥品を載せた藥棚、その少し奥に洗面器、バケツ、箒など。窓の下に長い木製のベンチ、時計と鏡とは前述の如く壁に附着して居る。左側の壁が、急に折れ曲つた側所にもう一つの木製の扉、その中央に、紙へ「無斷開閉を禁ず」と古ぼけた揭示が貼つてある。扉の奥は治療室の心。扉に向つて、

書類を入れた稍々大きな鐵製の函、その上には帽子掛、廠服の上衣と古びたパナマ帽が別々に掛けてある。それに隣つてもう二つの窓。窓の中間に小型なテーブル一脚、その下に繃帶函、テーブルを圍んで椅子一つづつ。

舞臺中央やゝ右前方寄り大型な木製のテーブル。その上にインキ壺、藥品調合用のグラス、帳簿、紙類などが持ちよせられた様にごつちやに載つてゐる。その下に大きい紙屑籠、左の扉へ向いて主任の肱突椅子が一脚、その椅子へ向つて、紙類をひら／＼させながら一つの煽風器が風を送つてゐる。天井から電線。煽風器と同じやうに、細長いベンチが二脚、肱突椅子の方へ向つて据ゑられてある。

床板は普通の木材で、他のすべての部分よりもうす汚ない。

左側の窓からは、海鼠色をした廣場を隔てゝ、耐火煉瓦造りの鐵線工場の一部分が見える。コークスの地面の上に、剃刀の刃の様なレールが二三條閃めく。

右側二つの窓からは、やはり同じ色の廣場を隔てゝ、やゝ遠く鐵鋼場の一角と、煙突の林立した銑鐵工場その他のより遠き輪廓がぼやけて見える。最右端の窓の前に一本の裸木が、葉のない枝を老人の腕の様に擡げてゐる。鈍い銅鐵色のレールがその邊にも閃いてゐる。

眞夏の正午近く、壁上の時計は正に十二時廿五分前を指さしつゝあり。煤煙の網を濾過された日光は、場内の火氣と相呼應して、すべての反射力を持てる物に眩暈的な顫動を與へてゐる。鮮やかな空は單色的な何等の色彩もないために、場内の氣層は益々憂鬱な熱度を密集してゐるかに思はれる。加ふるに、各工場から發せられるハンマーの音、車輪の軋き、スチームの呼吸、汽笛の悲鳴、鐵板の反響、懶い人間の呻吟などが、一層と四邊の重苦しさを誇張してゐる。時々、あらゆる機械が最高速度で廻轉した、その直後のもの狂ほしい立直しの悲鳴のやうな不快な物音が、すべての雜音のコーラスの熄んだ刹那に不思議なリズムを與へる。機械類の空ら廻りする焦燥。

幕開くと、とみ子とまきの二人が右窓の下のテーブルに、さらしの布地から繃帶を作りつゝあるのが發見される。二人とも、時々煽風器の前へ歩み出て涼をとるこなし。奥の扉の背後には、怪我人Aが業々しく悲鳴をあげつゝある。小使の爺さん、左端の扉より、バスケットへ入れた山の様な古繃帶を運び込む。

まき　お爺さん、もうお辨當かと思つたら――また、繃帶？

小使の爺さん　はア、いくら繃帶があつたつて、この工場

ぜやあ足りねえでがすよ。
とみ子　弱つちまふね、すみちやんはこの暑さで倒れつちまふし、あたし達二人ぢやア迚も卷き切れあしないわ。
小使の爺さん　心配しなさんなよ、あとからこの倍ものやつが、今日中に三つも屆くだア。——おらあがにあ、今日中にそれがペロリとなくなつちまふと思はれるだよ。
まき　まあいやなお爺さんだね、そんな不吉なこと言はないで、早くお辨當を持つて來て頂戴！　今日のおかずは何？——
小使の爺さん　さあ、亞鉛のやうな蒲鉾に、鐵線のやうな鹿尾菜と、ブリキのやうな菜つ葉と、石ころのやうな馬鈴薯と、めしはそれ、このへんのコークスを掬ひあげたやうな麥飯さ。……むはツ、は、は、はア——。
とみ子　いやだよこの男は、どうせろくなことは言やしないんだから。まきちやん、もう揶揄れるのはおよしよ。あ、十一時卅六分、もうすぐボーよ。まあ、なんて蒸し暑いんでしよ。（繃帶にて顏や手を拭く）
小使の爺さん　奧で泣いてる小僧は誰かね。
まき　原料工場の若い男の方。ちつとばかり手を怪我したんだつて、世の中がひつくり返る樣に大騷ぎしてゐるの。
小使の爺さん　やれやれ、どうせこの界隈ぢやあ怪我をしねえ人間の方は不具なんで、怪我をした方は眞人間なんだから、そいつもやつと仲間入が出來たといふもんだね、おうまた例の丸「S」に睨まれねえ前に、この爺も若い女子といちやつくのは切り上げることにしますべえ。……
（扉より退場）
怪我人A　（別室にて）おお痛てえ、痛てえ！（扉開かる）先生、こりや、確かに千圓は取れますかな！　これだけの大負傷ぢあ、わしだつて一生ほかの仕事は手につかぬかも知れないですよ。ね、おい、先生！
主任　（まだ姿を現はさず）馬鹿言つちやいかん！　そこの控所で一寸待つて貰らはう。おい、君、これを忘れた！
（怪我人Aの後を追ひ出て來る。續いて看護婦あさの、古繃帶のバスケツトを持ち扉を締切つて出づ）
怪我人A　忘れ物とは？
主任　これさ。（或る小さな物品を示す）
怪我人A　なあんだ、わしの小指か。——おやおや、先生、これあ違ひますよ。あつしの小指は、こんなに蝦の脚の樣にかぢかんぢアゐませんでしたよ。これあ誰か手癖の惡い他の野郎のに違ひない。こんな物！
主任　なあに、いつも君は、レコのことばかり心配してるから、その通り曲つてゐるんだろ。（好人物らしい笑ひ）
怪我人A　（二人とも前方のテーブルに向き合ふ）それにつけても、この指一本は千圓——安くても五百圓といふ

ところでせうな！

一同　（狂燥的に笑ふ）　千圓！　小指か――千圓！

主任　どんな工場法でも、そんな相場があるもんか！（苦笑）

怪我人Ｂ　（左扉から跛を引きつゝ入り來る）　先生、た、大變た！　やられた！　早く！

主任　またか？――五月蠅いな、そこへ掛けて待つてて吳れよ。――（怪我人Ａに向ひ）それで、君は、ええと、原料工場たつて？　（書類に書込む）

怪我人Ｂ　あ、た、た、た――ア、早くしてくんねえ。俺の眼にア、あの怪物のやうな鐵の角材がそつちからもこつちからも唸つて迫つて來る。先生、おらあもう助かるまい。先生！……

主任　喧しいねえ。――それで、名前は？

怪我人Ａ　山崎誠……誠ですよ。ああ、痛え、また、痛み出した。ああ、千圓の小指は痛む！　先生、あんな黄色な粉を一寸ふりかけたばかりで、あれでほんとに癒るんですかね？

主任　（看護婦あさの へ向ひ）　おい、當番、そつちの喧しいのを向ふへ入れて置け。（あさの、怪我人Ｂを治療室へつれて行く）

怪我人Ｂ　あの野郎の小指が千圓なら、俺の脚は、確かに二千圓がものはある！　痛くともちツたア我慢するか。

（二人去る）

主任　名前は誠……とそれで番號は？

人事係長　（瀟洒たる白麻の詰襟服。胸に銀の丸い徽章に「Ｓ」の字を打ちたるを附ける。左扉より陰險に音もなく入り來る）なかなか蒸すね。（怪我人Ａに向ひ）おい、治療が濟んだんだらう？　油を賣らずに、さつさと歸れ！（看護婦達を一瞥し）若いもんがゐると、どうも能率が上らんでいかん！　あとはいくらでもつかへてゐるんだから、早く出て行け！（怪我人、俄かに萎縮してぺこ〳〵頭を下る。しかし、係長が背後を向いた時には大きい舌をペロリと吐く）でな、神山さん、君の受持だがね、どうも、最近偉くこの新工場法の査定價格だけを標準にしなさると見えて、會計の方の豫算と大分開きがつき居るといふ噂だが……一體、あんたは、この治療室で社會局の役人見たいに貧民救濟などと洒落こんで居るんぢやあるまいね？　例へばさ、この職工にしたところが、何やらこんな小指一本位ゐの怪我で、最前から大騷ぎをしとるやうだが、こんなのは君、それ、例の……

主任　（立上り）　いや、お言葉ですが、いやしくも事醫學に關した範圍に於ては、不肖この大工場の囑託として、甚だ失

禮ですが、三木さん、それアちつと貴方の專門外のことと思はれますがな。そもそも、外傷の根本的治療に就きましては、單にその患部の應急的手當だけを施したにしろ……

人事係長　（主任の口吻を眞似て）　いや、御說はもう三年この方わしが見廻りをする每に、每度拜聽して居りまするので、な、わしの方で繰返してもいい程良く存じて居りますよ。（がらりと調子が變はる）　問題は、經費の點だよ、君！　あんたなどは知るまいが、株主たな、この會社の株主總會で、いつもやかましく言はれるのはその點なんでな。つまり會社は、職工に甘過ぎる――從つて彼等が附上る、とどのつまりは、色色生意氣なことを言ひ出して、やれオープン・ショップをクローズド・ショップにせんならんとか、金屬工組合に團結加盟するのと、そりやさまざまな、謂はば職工の分際としては及びもつかぬ譫言を言ふやうになる――といふ文句が出るんだよ。それがどこから出るかとなると、色色庶務課で研究した結果、どうも（一渡り室内を見廻し）　このへんを措いては外に孔がない樣に思はれるんでね。まあ、今日のところは、ほんの注意だけにしとくが――

怪我人Ｂ　（別室にて）　ああ、た、た、たツ――これあ、どうしても二千圓もんだ！

人事係長　どうだい、あの通りだからな！　男が、大の男が、神州男兒が、何だらうあの馬鹿げた聲は！　わしも立國神州團の支部長をやつとるが、高の知れた一寸した外傷位ゐで、日本男兒があんな婦女子にも等しい悲鳴をあげるとは、それあ、君、恥辱だよ、國辱ぢやないか！　大和魂――近代の產業にも、それに屈せず懾せぬ大和魂を持つて向はなければ……

怪我人Ａ　（獨白）……資本家は儲からねえか？（舌を出す）

人事係長　……產業立國の實は上らんのぢや！　平和の戰爭！　さうだ、この大工場は平時の戰爭に從事してゐるつもりでやつて行かれんと困る！（去りかゝる）

怪我人Ａ　それで、次の戰爭のための準備だと吐さぬばつかりだ！　うへツ！

（この時、怪我人Ｃ、Ｄ、Ｅ、の三人入り來る。人事係長と擦れ違ひ、三人思ひ思ひの輕蔑の表情をあらはす。）

怪我人Ｃ　先生！　腕だ！

怪我人Ｄ　わしのは足の爪だ！

怪我人Ｅ　おらあ、胸へ火の玉が落つこちて、臍の穴で逆立ちするまで、文字に燒けたよ、この通りだ！（腹部を示す）

小使の爺さん　（辨當を四本運んで來る）　ほら、御馳走た

よ！（繃帶臺の上へ置き、看護婦に向ひ）いいかい、一番上のが先生様のだよ！　間違はない様にしなせえ。お前達は、あら喰つちやつたわ……だなんて、ここの先生が人が好いものだから、いい蒲鉾の方を、今月になつてから四遍も横取りしやがつて！　蓋あ開けると分るよ、臭ひのぷうんとするのはお前様方の、しないのは先生のだぞ！（去る）

まき　あんた、憎くたらしい！　あの爺、今度來たら、何をしてやりませう！

とみ子　繃帶を卷かせるといいわ！

まき　それがいいわ、それがいいわ。こんないやな仕事つたらないんですもの！

主任　ああ、堪らん！　五月蠅いな！　おい、お前達、その臭ひのしない蒲鉾を喰つてもいいから、一寸默つてくれ！（稍や冥想的に）月見草とコスモスの咲いてゐる綺麗な溝の傍に、完全な下水と、清涼な飲料水と、鬱蒼とした樹木と、簡素にして衞生的な食物と、輕快な住宅、短縮された勞働時間、資本に偏せざる適當の勞働賃銀、それから新らしい文明に向つてのクルツール、ああ、さう言ふ設備を完全にした新時代の美はしい工場都市！　自然、私は、一度どこかでさういふ素晴らしいエルサレムを見たことがあつた筈だ！　さういふ新世紀のメッカ！　何處だつたらう？　白金のレールが、黄金の列車を運んでゐた――それは何處だつたらう？　確かに、この工場ではない！　この煤の泥沼、煙の大洪水、人間の手足をした穢苦しい獸物の蠢いてゐる、腹立たしいこの町ではないぞ！　火傷と打身と挫骨と肺病やみとの、クレオソート臭いこの工場町ではない！　どこだつたらう？

とみ子　（クスクス笑ひながら）また、神經病が始まつたよ。

まき　ああやつて、暫らく發作が濟むまで待つてゐりあ、あとはすうツとするらしいのね。その暇にいい蒲鉾を食べちやいませう。

怪我人D　（指さし）この先生だつて、こんな鉛の溶けさうな日にあ、頭もふやける筈だよ。

怪我人C　何だ、あれア！　學者つて、あんな風に怒るもんか？　まるで活辯の寢言だね？――あツ痛てえツ！　畜生ツ！

怪我人E　おい、先生、病氣なのはお前さんぢやあねえぜ、わつしだよ！　俺の腹ア火箸を刺した樣に一文字に燒けてやあがるんだ。これこの通りだ。早く癒してくれよ！

主任　やはり、見たことはなかつたのか！　見たと思つただけの話か。しかしどうも僕にはさう言ふ幻影が手に取る樣に見えてならない。心理上から言つても、これア單

的に寫象が積集して大腦皮質に一定の溝渠を作つただけの事があない長年この頭の中に、さういふ都會が、建築が、景色が、夢が、レールがそつくりそのまま作りつけられてあるんだ。たしかに、曾て一度は經驗した觀念だ。この世でか？ 否、先の世でか？ 否、曾ての、生れ變はらざりし時の僕の前生かも知れない、したが、――ああこの穢苦しい哀れむべき職工の群！

（黑ん坊片目を抑へながら飛込んで來る。）

怪我人Ｄ やあ、骸炭だ！

とみ子、まき あら汚ない、まあ黑ん坊まで！

怪我人Ｂ （別室より） 先生ッ！ 早くしてくれろ！

黑ん坊 眼だ！ わしの眼へ石炭が――こんな大きな塊が、何にも言はずに飛込んだんだよ！

怪我人Ｃ おい、骸炭！ もつとそつちへ行つてくれ。貴樣の樣な眞黑な野郎が傍へ來ると、餘計に油汗が出てならねえぜ。

黑ん坊 何だと、この蟇蠅野郎！ この御兄さんは、貴樣等のやうに金魚の糞見たいな鐵線はかり捻つてゐる兄さんと兄さんが違ふんだ！ 煙草があるか？ 一本くれ！

怪我人Ｅ やらう。俺あこの大火傷をしてからもう火のついたものは何でも身につけないことにしたよ。それ！

黑ん坊 何だ、大きなことを吐かしやあがつて、今朝のみかけて、工場の門を潜る時、守衛の前でそつとポケットへもみ潰しておいたバットの切れッ端か！

怪我人Ｅ 俺の前でマッチだけあ擦らないでくれ。火を見ると、俺あ、かう、噤ッとなつて、ボイラーが百も二百も見えて來るんだ！

（怪我人Ｂの頻りに喚く間、怪我人Ｃ、Ｄと黑ん坊の三人、寸足らずの煙草を、てんでに强奪るやうにして吸ひ合ふ。最後に火の消えた短軸を、黑ん坊そのまゝにちやにちやと噛んで吞み込む。主任呆然として、夢から醒めた人の樣に、職工達を見戍つてゐる。）

主任 悲しい姿だな！ あさましい人生！ これが資本主義に養はれる家畜の群か？

怪我人Ｃ 資本主義に養はれる？――ふざけるない、資本主義を俺達が養つてゐんだ！ あッつつつ！ （片腕をあげやうとして、他の手でそれを制禦する）

怪我人Ｄ それより、早く療治をしろい！

怪我人Ｅ 資本主義……なんて話は禁物、禁物。丸「Ｓ」の耳へでも入つて見ろ、この場で馘首されつちまふ。あ、つつつ……腹たよ。先生！

主任 僕も、今日といふ今日は、このたよりない環境に對してすつかり幻滅を感じた。――ふむ、この家畜の群を驅り立てて、何の産業立國だ！ 平和の戰爭――これは、

戰爭の戰爭だ！　人は、隣人愛にこそ生くべきぢや！　愛のないところに何の勞働、何の賃銀、何の治療、何の看護婦、何の繃帶ぞ！

きみ子　あの三木の奴、ほんとに嫌な奴ね。温厚しい先生が、あんなにカンカンになつて怒つてるんですもの！

まき　ほんとだわ。――でも優しい方ね、先生は。尤もだわ。あたしすつかり共鳴するわよ。――ね、愛のない所に繃帶はないんですよ。

とみ子　それあ、繃帶だけに限らないわ――お辨當だつて、そをよ！

黒ん坊　やいやい、女の尻をした、馬の尻尾を空の方へ巻上げたおたんちん共、そんなむだごと言つてる間に、俺の右の眼から餓鬼の頭程の石炭を掘つてくれよ。スコップからおつこちたんだ。石が大きいからお前達の手で採ぐつたつて、すぐと飛び出して來るよ！

とみ子　（一種のプライドをもつて）まあ、へんな臭ひ！

まき　もつと香水でも振り撒きませうよ。だから、貴女、ヘリオトロープにしなさいとこないだ中から言つてるんぢやない！

とみ子　さうね、ここへ來てる間は、香水でも嗅いでゐるより外に、人間らしい包ひなんてありやあしないわ。あたしもヘリオトロープにしようか知ら。

まき　ヴアイオレツトは、熱てると動物性の臭ひがして、嫌味たわ！

主任　（突然立上り）　辭職しよう！　やめた！……月見草とコスモスの……

怪我人B　（堪らず別室より跛を引きながら駈來り、主任を）掴み立て治療室へ促がす）何を下らねえことを喋言つてやあがるんだ！　早く來て診てくれよ！

主任　（怪我人に向ひ）……それで、番號は何だつけな？

怪我人A　（ベンチの上へ快く居眠りしてゐる。主任、頭を揺動かす）えツ、在庫品でケーブルの太卷の方ですと、一號か倉庫に三つあるだけ。――なあんだ、またこの先生は俺の前にゐるぜ。やツ、わかつた！　どうでせう、工場法第二章第七條の第四項によつて、真面目な話、賃銀四十日分以上は頂けますかな？――

主任　番號だ！　番號だ！――僕を誰だと思ふ？　甘く見るな！　判斷はこの主治醫が行ふんだ！　餘計なことを言はんで、お前の番號だけ述べるんだ！　そして、此處は夢見る場所ぢやない！

怪我人A　は、はい、三百四十番です。

主任　よし、歸れ！　貴様のために、俺はすつかり無駄なことを考へさせられちまつた。愚圖愚圖してゐると、人事係長へ言つてすぐさま解雇させてやるぞ！　（怪我人A

すつかり主任の神經的な興奮に恐れをなして、すご〱と扉より去らんとす）これ、これ、この質屋の鍵の樣に曲つた小指を忘れるな！

怪我人A　へ、へえ。有難うございやす。不人情なもんだ、俺の體を離れると、この指の野郎は、もうすつかり俺のことを忘れてやあがる。（去る）

主任　ああ、これでせいせいした。あいつ一人のために、世の中がすつかり暗くなつてしまつたところだ。あんな惡い小指はない。どれ、その次は、誰だつけな？——（おのが片手を握れる怪我人Bを忘れて窓下のベンチの怪我人達を見廻す）順番は？

怪我人B　俺だよ！（思はず足踏みする）あつ、てててて、おう痛てえ！　う——む。二千圓は痛むぞ！

主任　あ、お前か？　早く別室へ驅けつけろ！

怪我人B　か、驅けつけろもあるもんか……こんなに痛いもんなら、おらあ足を持つて生れて來るんぢあなかつた！

（主任怪我人Bを押やりながら治療室へ歩み入る。扉閉る。）

（間。）

（正午少し前の各工場の激しい亂打、輪轉、轢音など。）

（黑ん坊素早く煽風器の向きを換へて、自分達の方へ風を送る看護婦達さうさせまじとして爭ふ。とど六人一塊りになりて煽風器の前に立つ。小使の爺さん麥湯を運び來る。）

小使の爺さん　ほほう、男四人に女子が二人か！　いくら煽風器で冷やし立てたつて、こりあ熱かんべ。こんなのア、年寄の眼の毒だ。おう、麥湯置いたぞ！　（去る）

（怪我人FとGの二人はよぼ〱入り來る。頻りに咳拂ひする。看護婦二人向き直つて。）

とみ子とまき　おや、この二人は又來たよ！　一昨日先生にお前さん達は肺病だつて言はれたんぢあないの？　忘れたかい！

怪我人G　どうもわし等は今時分になると、何かしら、かう繃帶所へ來て見んと氣が濟まんのでな。（咳入る）

怪我人F　お主もさうか？

怪我人G　人間に變りはあるもんか。したが今日のは違ふよ、わしは右の小指が少しへんなんでな。

とみ子　指なら駄目だよ！　今日は先生は小指を見たらカンカンになつて怒るんだから。

まき　さうよ、小指でも曲げて見せてごらん、すぐと、月見草とコスモスが出るわよ。さうなつたらあの溫厚しい先生が一人でこの工場を潰してしまふほど怒るんだから！

怪我人G　やあ、小指は駄目かな？　でもまあいいや、折角来たんだから、ボーまでサボつたつて。

怪我人F　小指はどうしたのだ？

怪我人G　なあに、一寸生爪を剝がしたのさ。

怪我人E　馬鹿野郎、生爪を剝がしたと言つてここへ来る奴があるもんか！　俺様のを見ろ、立派に腕を切つた様にこれこの通りさ。隣の所で火の玉が逆立ちしやがつた！

黒ん坊　この頃御政府の統計ぢあ、おいらの仕事で、三人に就て一人は乾度怪我をしたり死んだりするさうだと出てゐるよ！

怪我人の多数　へえ、三人に一人！

黒ん坊　全国中の工場や鉱山では、毎日五百人から六百人位ゐの怪我人や死人があるさうだよ！

怪我人C　ふむ、よくも調べたもんだな。感心だ。流石は御政府だ！

怪我人D　何を吐しやがるんだ、間抜奴。——その次にや、御政府も偉い、有難いと来るんだらう？　罷工破り見たいなへんなことを言ふなよ。

黒ん坊　そりあ御政府の統計で、御政府の統計なんてもなあ、何時、出しても差支へない様に、ちやあんと内輪に見積つてあるもんさ。だから、ほんたうのところはもつと、もつと多いかも知れないよ。

（怪我人H、倒れる様に扉より入り来り、麦湯の薬罐をしたゝかにこぼす。看護婦二人慌てゝ立ち騒ぐ。）

とみ子、まき　大変、大変！　どうかしておくれよう！（怪我人Hへ縋る）

怪我人H　うわ——ッ！（悲鳴をあげながら床の上に倒れる。倒れると同時に痛みに堪へかねたらしく鞠の如く轉りながら泣叫ぶ）

黒ん坊　よせよ、どつちが薬罐だか判りあしない！（看護婦二人更に慌てゝHを抱起す。最も近い場所の主任の椅子へ掛けさす）

とみ子　あんなに焼け爛れて！

怪我人G　惨憺たな。

怪我人E　おう、お前もか？　とんだことに仲間が増へたもんだ！

主任（姿は見えない）　こら、余計なことをしやべらずに、出て行け！（怪我人B足にしたゝか繃帯を巻きながら出で来る）おい、坂本、その原簿と萬年筆をこつちへ持つて来い！　それから次の番の男を呼べ！（怪我人I頭を振りながらすごすごとして去る）

とみ子（テーブルの上の帳面と萬年筆を持ち、頭を怪我した怪我人Cを促して治療室へ入る。怪我人Cの呻き聲。彼女直ちに出で来る）ねえ、まあちやん、こんなに男の

人達が怪我しちまつて、この町の内儀さん達やおふくろさん達はどんな氣持でせうね？
まき　あら、とみちやん、一度も町へ出たことないの？そりあ大變よ。そつちにもこつちにも、跛だの隻眼だの、摺木の樣な手をした人だの――滿足な男つたら、人事係長と社長さん位ゐのものよ！
黒ん坊　そりあ、この工場で白いものは熔鑛爐の鐵と、それ、お前達の卷いてゐる繃帶位ゐなもんだと――同じことさ！
まき　それに、肺病ね！　迚も非道いの。
怪我人F　とは（咳込みながら）いやにあてつけやがる。
（輕い咳）
とみ子　それから、先生がやけに石炭酸を使ふもんだから、石炭酸壞疽で爛れるんでしよ。
（隣室にて怪我人Gの叫喚一しきり。次に主任、活潑な聲にて順番を呼ぶ。）
怪我人D　そら、俺の番だ。
黒ん坊　お前、有りもしねえ怪我を申立てて、しこたま繃帶を卷きつけアがつて、質屋へでもやつたら、承知しねえぞ！
怪我人C　きつと褌に接ぎ合せるんだよ、この男は。
（怪我人D、怪我人Cと入れ交る。C扉より退場。）

怪我人E　ああ、早くやつてくんねえな。さつきからこの煽風器にあたつてたら腸の方まで火傷がめり込んで來やがつた、おツと、今度は脊骨だ。……
とみ子　そろそろ賭けませうか。
まき　ボーを？
黒ん坊　何だい？――
とみ子　もうすぐボーでせう？――それにね、あたしとまあちやんとで、一二三……と數へるのよ。奇數の時にボーが鳴つたら、まあちやんが勝、偶數の時はあたいよ。それで、勝つた方が先生のお辨當を食べるの。
黒ん坊　チエッ、ふざけてやあがる。のんきなもんだなあ、ここいらは！――こんな女達にあ、あの數千人の奴隷を縛りつけてゐる鎖の音は聞えねえんだ。印度人を燒き殺す樣なコールタアの匂ひが屆かねえんだ。首吊臺の樣なクレーンが見えねえんだ。資本主義の動脈の樣な送風機が分らねえんだ。線香が一本火に落ちた――もう白くなつてあがる――それが燒けた誰か樣のお姿だ。鍋を燒く程の煙もじわッとしやがらねえ。眞赤な飛行機が雲を焼いて飛んで行く――大きなペンチに摑めえられた角材だ。閻魔の呪ひの鬼の樣な熱風で六尺がらみの男が綿屑程に縮こまつて死んでしまふ。そんなのが、このへんぢあ分つてゐねえんだ。なあおい、兄弟、何時になつたら

かういふ女子達あ、俺達職工と同じ氣持になつて、俺達の何千年來曲り切つてゐる脊骨を眞直にして、腸へ溜つた蘇の樣なこの憎み、この言ふに言はれぬ腹立たしさを嚥み込んでさ、家のことは御心配でないよ、男らしく出て行つて鬪つて下さいと言へる樣になるだらうか？　おらあ、世の中の女子を見ると色の戀のつて言ふへんなことにかも混濁とされが限りなく思ふた！

とみ子　その御面相ではね。

怪我人G　「おひたん！　おひたん！」

怪我人E　黑ん坊、尤もた、俺あ涙がこぼれさうになつたよ。

怪我人G　何だ、まだこぼれねえのか？

黑ん坊　默れ！　貴様等も、この工場と一緒に魂の底まで眞黑に燃えてやあがるんだらう！　あのコークス、あれた。もつとでも火の氣のある中は燃やし立てられ、己が身から出た火がどんなことをしてゐるかも知らずに、搾りに搾り取られて、しまひに工場の廢場を埋める捨り滓になつて投り出されるんだ。その時のあることを忘れるな！　お前の眼は何た、この連中の火傷や怪我は何た、もうコークスになりかかつて、最後の煙をあげてる態ぢやあねえのか！　それを考へると、この俺は、眼から涙が出て、涙が出て……ヰヤツ、さつきの石炭ももう飛出してやあがる。冗談ぢあない。こんなことならもつと先に泣いて見るんだつけ。

とみ子とまき　……六、七、八、九――

（この刹那の煤煙の濃霧に閉鎖した、不思議に靜かな濁流の樣な大氣を劈いて、始めは、硝子吹工場の吹きかけたガラスが何かの機みで割けるやうに、清い音調の皮膜を破つて、次に急激な太さをもつて四邊に響き渡る苦しい海洋の底までも共鳴する樣なサイレンの音が、だれ切つた工場全體を抑へつける樣に何度か中空高く鳴出すのである。約十秒にて第一の響きが止むと、直ちに間え切つた波濤の如く第二の音響がそれを襲ひ、第二の響きが收まると、續いて第三の響きがそれを襲ふ。逞ましい近代製鐵工場の、無限大な灰色の肺臟の最後の息まで吐き出したかと思はれる途端に、晝のボーはをさまるのである。）

とみ子　嫌んなつちやうわね、いつもこの手でまあちやんは先生のお辨當を食べるんだから。二度目よ。でも、今日のは「八」から鳴り出したんぢあなかつて？

まき　九だわよ！

とみ子　どうも八のやうよ！

まき　九！

とみ子　八！

まき　九！
とみ子　八、八、八、八イ……！
（看護婦達拜當を奪ひ合はんとする刹那、サイレンよりも幾門的なより力強い爆音が、工場内の何處からか併發する。）
（多數の人間の遠くざわめく物音。恐音。叫び聲。がラスの碎ける響。）
黑ん坊　何だ、何だ？（扉へ走り出づ）
怪我人Ｅ　どえらい音がし居つたぞ？
とみ子　（急ぎ右側の窓より首を出す）何でしよ。
まき　（同じく右側の窓の一つより顔を出す）何か起つたのう？
主任　（治療室にて、廣場に向ひ）おうい、何事だ？
怪我人Ｆ及びＧ　（左側の窓より）熔鑛爐か？
怪我人Ｈ　（初めて正氣を回復せるもの丶如く驚ろき跳上り）確かにボイラーだ！　うむ、やつたな！（立ちながら指を折つて何か數へる）非番——當番——非番——
怪我人Ｄ　（繃帶を引ずりながら別室から飛び出て來る）ストライキだ、大變だ！
あさの　（怪我人Ｄの繃帶の端を持ちながら追ひついて來る）駄目よ、駄目よ。そんなに繃帶を引摺つちあ、繃帶が汚れるぢあないの！
怪我人Ｄ　（女の手から繃帶を振りちぎり）何をッ、繃帶が何だ！　俺あ自體大した傷ぢアなかつたんだ！　ストライキだ！　（去る）
（急に干潟へ大幅の波濤の列が襲ひかゝつたやうに、廣場の四邊には夥しい群集のざわめき、呼聲、高らかに叫ぶ聲、御輿を擔ぐ掛聲のやうな聲などが響き渡る。）
黑ん坊　（姿は見えない）傳令だ！　おう、鍛鋼場から、熔鋼爐——亞鉛工場——鐵線工場——原料工場——銑鐵工場——レール工場——煉瓦工場——骸炭部——化學工場——鑄物工場——走るわ、走るわ！　これあ、かうしちあ居られない！　（去る）
主任　（姿は見えない）おう、月見草とコスモスの咲いてゐる湖、白金のレールと黄金の汽鑵車！
怪我人Ｈ　（獨白）早すぎる！　少うし、早すぎあしないか！
怪我人Ｄ　（矢庭に扉から戻り來り、怪我人ＥとＦとＧの腕を取つてそのへんをぐるぐる踊り狂ふ）大變だ！　大變だ！　電信柱に花が咲いた！　たうとうストライキが始まつた！
（看護婦達三人、慌てゝ本能的に窓を閉めると、更に本能的に煽風器の吹く方へ塊り合ひ、辨當を食ふことをも忘れて慄へながら半ば目をふさぎ、齒を食ひ縛つ

て、床の上へ膝を下す。）

職工1、2、3、4、5、6及び黒ん坊。（凄い掛聲て、負傷に上半身の染められた一人の男を擔ぎ上げ來る）醫者だッ——先生！ 先生はゐるか？

主任（あたふたと別室より飛び出て來る）どうした、どうした？

職工1 機械に卷込まれた！

職工2 臺の鼻！

職工3 足の爪まで捌れてゐる、——

職工4 もう死んでるかも知れない、——

職工5 早く診てくれ、——

職工6 俺達の親方！

黒ん坊 圓頭の田中です！ 大ハムマーで、一丈八尺の巨人の様なボイラーをぶつつけたんだ！

怪我人H 田中か！ やりあがつたな！ 何故、俺の方がやられなかつたらう！

職工1 ここへ置いてもしようがない。治療室へ運んで行かう！

主任（看護婦達へ）おい、お前達、そこで何をしてゐるんだ！ 早く、繃帯！ 大巾のさらしをそのまま五反でも六反でもどんどん運んで入れろ！（看護婦達慌てながら命に従ふ）

職工1 （黒ん坊を殘した他の連中が主任と共に怪我人を治療室へ運び入れたのを見送り）おう、そこにゐるのは柴倉ぢやアないか？

怪我人H 三好、とうとう始まつたな？ 俺は一足先にこんなことになつちやつて何にも知らずにゐたのだ。面目ねえ。

職工1 それがさ、お前がこの大怪我で、誰にも力を借りずに出て行つたらう、あれからのすんだもんだで——事件といふのは全く突發的なんだ。田中の野郎、何時もの様に短氣を起しあがつて、監督と二言と言ひ爭はねえうちにそんなら俺あサボると、白い齒をむいたかと思ふと、あの腕つ節でハムマーを、ボイラーのどてつ腹へ三度喰らはせあがつたんだ！ 目も當てられねえ態さ。（急に低聲になり）と言ふなあ、仲間廿五人は前から連絡してゐたんだ。つまりきつかけさ。な、他の方へも柿崎や津村が傳令に行つたから、もう動いてゐる筈た。何せ傳令へ廻はつた廿人の奴等ア、足の健者な、口鋒の利ける連中だから、工場から工場へと驅け廻つて、もうおつつけやつて來るよ。俺等の睨んだ眼が間違つたら俺ア熔鑛爐へ飛込んでお詫びすらあ。ストライキの下地は十分にあるんだ！ この怪我人！ あの賃銀。

黒ん坊 おい、仲間、この窓を皆しめようか？

怪我人H　さうだな、ここをちよつとの間、人數が集まるまでの假本部として、それから堂々と門を開けるか！

職工1　――堂堂と門を開けさせるか！

黒ん坊　でなけりや、打ち破つて本部へ引上げるさ！　よし、合點だ！（窓々を閉める。他の怪我人E、F、Gなど同じく手傳ふ。この時繃帶所の前後には右往左往に騷せ違ふ職工、勞働者、女工、朝鮮人、雜役夫達の姿入り亂れて見られる。扉を締めやうとした黒ん坊の鼻先へ、目の充血した人事係長、怒り肩にてぬつと押分け入る。）

人事係長　退け！　阿呆！　醫者だッ――神山はどこにゐる？

黒ん坊　別室で、三人の看護婦を抱きながら、月見草とコスモスの歌を唄つてゐるよ。見たけりや、勝手にゴム管見たいなお前さんの首を伸ばして見たらいいぢあねえか。

人事係長　何ッ、骸炭工の癖に、生意氣な！（歩み入る）おい、神山！――神山！（扉を開く）馬鹿！　この非常時に、君は事もあらうに、何だ、その態は！　そんな職工の腐れかかつた奴の一人や二人の手當なんざあどうでもいい、早く出て來い！　話があるんだ！　おい、神山！

主任　（看護婦達に繃帶の手當を任せて出て來る。扉は開かれたまゝになつてゐる）神山、神山ッて、そう猫か犬のように呼び散らさんでも、僕は平然として僕の職務に就いてゐるんだから、用があつたら靜かに言やあいいんぢあないか。

職工1　（怪我人Hへ）面白いぜ、あの人道主義者までが怒り出すんだからね。

人事係長　さ、貴樣は、大體生意氣だ！　何だその生ッ白い顏で、雜誌の表紙にある娘つ子の拔かすやうなことばかり喋言つてあがる。――分らんか、この突發事が、お前の眼と耳にはこの騷動が分らんか、間拔野郎！　貴樣は即刻この俺が解雇してやる！　何だ、直ちに事務所へ驅けつけて高級事務員の方へ職務を盡すべき内規になつてゐるのをべんべんとその鯖のやうな半燒になつた職工をいぢくり廻してあがる！　馬鹿！　馬鹿！　腰拔野郎ッ！

黒ん坊　半燒の鯖たア何だ！　おい、丸「S」言はしておけば圖圖しい野郎だ！（突然人事係長を蹴り飛ばす。別室より跳り出た職工3、4、5等と力を合はせて係長を扉の外へ蹴轉ばす）

職工達　あの野郎、かうなつたら係長も糞もねえせ！

職工1　（いきなり大テーブルの上へ跳り上る）兄弟達！　もういい。そんな蚯みたいな奴はうつちやつて置け。俺達には、今ストライキを始めたこの瞬間、大切なことが

山のやうにあるんだ！　その一つは――。

主任（慌てゝ職工を遮る）そのストライキの相談なら、他の場所へ行つてやつて貰はう。ここはいやしくも神聖な科學の實驗所、この私の尊い夢を貴い人間の肉の上へ實現する場所だ。諸君の唯物的な階級的爭議がどうであらうと、衛生と消毒と敎育と健康とを信條とした私の「科學」といふ信仰は、一寸も冒し亂されてはならない！　私は、鏡の如く正直に、鋼鐵の如く冷やかに、自分の眞理を發行する者だ！　私の理想は決して諸君だけの現實によつて風靡されないだらう。又されてはならぬ。私には諸君よりも、より、高い夢と、より神々しい光に滿ちた現實がある。それは、月見草とコスモスのりようらんと咲き亂れた、處女の瞳の様に澄んだ湖のほとりの……

怪我人H　喧しいッ！　燃えかかつた鉋屑の様な聲を出すな。ここは、俺達が今、俺達數千人の無産階級者の運命を決定するために、暫時借りることにした場所だ！　そんな西洋の乳が冷えたやうな拔作者が言ひたけりあ看護婦でも相手にして何處かの敎會でやれ！（職工達及び怪我人等は、職工1の周圍を取卷いて傾聽してゐる）

職工1　……いいか、問題は斯うだ。レールの方から、内輪に見積つて百五十人、重輕工場は結束が堅い、百人が丸百人だ、製鋼場は動かぬところ三十人、銑鐵、熔鑛爐、原料、煉瓦、鐵線、骸炭、化學、鑄物、セメント、製圖科、それから女工だ、船と貨車廻しと、荷揚人とクレーン係――總じて俺達は千五百人の仲間は得られる。いいか、千五百が五千四百を足音高く鬪爭の大道へ引出すんだ！　勝利はまだだよ。しかし、勝つ！

（この時までに、繃帶所の窓々、及び扉から無數の、半裸體になつた男、女達が熱心に職工達の言葉に耳を傾け居る。滿場の寂寞に、慌しい遠くの電話のベルだけが不安な悲鳴をあげてゐる。）

職工1　そこで、俺達前衛の二十五人が、今臍の下へしつかり收めて置かにアならん事は、死んでもこのストライキは貫徹させる――といふ鬪志だ！

群集（窓外及び扉より一齊に拳を中央めがけて突出す）鬪志だ！

主任（治療室へ向ひ）とみ子、あさの、まき、――みんな出て來い！　ここは、やはり私達の居る工場ではなかつた。完全な下水の設備が無い！　新らしいメッカを探さう！　ああ、このあさましい鬪爭の……

黑ん坊　五月蠅い奴だな。お前も摘み出すぞ！

主任　はい、はい、――それには及びません、私の方から歩いて出て參ります。（去る）

職工6（治療室より悄然として出て來る）おい仲間達、

田中は——息を引取つた、今、みんなで「闘志」だと叫んだ時、繃帯の陰でニッコリ笑つてそれつ切りだ！（泣く）

職工1　ふむ、よし、兄弟、——では、ほんの一分間だけ、この白熱戦の始まりかかつた今、すべての口火を切つてくれた先驅者、兄弟田中のために、俺達あ帽子を脫がう！それからが、弔合戦だ！　脫帽！

（滿場の勞働者達、或ひは脫帽し、或は泣き、或は默禱して、そのまゝ化石せる如く立ち盡す。女の啜り泣く聲。）

——音もなく　幕——

戯曲

手（一幕）

時

十九世紀の初め、或る秋の夕刻

處

アメリカ奴隷賣買船の船艙（航海中）

人

奴隷賣買人
　米人。肥滿した、陰險な男。鍔廣の黒の中折、赤い胴着、長靴、葉卷。革帶から頭を擡げてゐる二挺のピストルを、赤毛の生えた手で愛撫する習慣がある。

船　長
　瘠せた皮肉な讀書家。潔癖と懶惰といふ二つの矛盾性に富んでゐる男。諾威人。海のやうに氣まぐれな獨裁性をもつてゐる。黒みがかつた頭髮。

水夫頭
　單純な船乘。米人。逞ましい筋骨。

大　工
　駝脊の老人。飲酒癖がある諾威人。

若い番人
　黒白混血兒。憂鬱な、懷疑的な、虚榮心に富んだ弱い青年。他に比して顏色が蒼白である。

水夫（多數）　ボーイ（少數）
　雜色白人

黒い手の持主（多數）
　アフリカから買はれた黒奴の群、鐵鎖につながれてゐる。半裸體のまゝ、一組四人づつ、幾重な錠の卸りた檻の中に幽閉されてゐる。

舞　臺

大型帆船の下甲板を縱斷した斷面圖の一部である。

正面、３４５６７と五つに區分された檻が竝んでゐる。その鐵柵の白ペンキは汚れてゐる。檻の前に古風な船ランプが二つ釣るされてある。大きい眞鍮の錠が各房に掛つてある。

左手、檻「3」を斜に切つて、上甲板へ、より昇降口があり、眞鍮の欄干と階段の一部が急角度を見せてゐる。階段の上にも、釣ランプがともつてゐる。その前方は壁、規則書のやうなビラが貼つてある。壁に隣つて、上甲板の事務長室へ通ずる舷階があるが、階段は二つ

位しか見えない。そこからも灯がぼんやり射す。右手、檻『7』を斜に切つて、中二階めいた厨房へあがる階段がジグザグな線を描いてゐる。別に欄干はない。その階段と檻との間は、通路(パッセージ)になつてゐて、水夫部屋、大工部屋、倉庫などへ通ずる心。階段の前方は船の二重底へ降りる扉になつてゐて扉と階段との間の隅に小さな粗末な寝臺が一つ据ゑてあり、その上の壁には、種々な鐵鎖や綱などが、折れ釘に掛けてある。厨房と思はれる場所からも、明るい光が流れ注ぐ。——これらはすべて、暴風雨が激しくなるにつれて、全體に動搖する。

船體に切られる波濤の音、鐵鎖の響、人間の理解力を絶した奇怪な叫喚と低聲の斷續で幕があがると、舞臺中央に、若い番人と、彼を革の鞭で毆ぐらうとしてゐる殘忍な奴隸賣買人とが、發見される。若い番人は恐れを含んで、鞭の屆く限りから遁れ出ようとして、鬱れたまゝ焦心つてゐる。

無數の黑い手が、正面五つの檻から、外へむかつて突出されてゐる。或る手は、柵の錠を捻ぢ切らうとする風にガチヤガチヤ云はしてゐる。

奴隸賣買人　(鞭を威嚇的に扱いて)　やい、牛黑(ニグロ)！　手前、よくも俺の大事な品物を、この鞭で毆ぐりやがつたな。鞭は威嚇のためだけに備へて置くんだと、あれだけ口を酸つぱくして云つて聽せたのを、手前わざと知らん振をしてるんだな。さア今日こそは許して置けねえ。

(船長手に青い鸚鵡の籠を下げながら、昇降口の階段を降りて來て、少時、二人の光景を眺めてゐる。)

若い番人　旦那、もう致しません、許して下さい。もう決して致しませんから。

(鞭正に彼の脊に加へられんとする刹那、船長大きい咳拂ひをする。)

船長　エルサレムの王一疋の蚤を探がすかね、え——と、ゼンキンさん、若いダビデが又何ぞ失策りをしでかしましたかい？

若い番人　(船長にすがりついて)　船長さま、御助け下さい。私は、もう氣が狂ひさうでならないのです。私の手は黑くありませんか？　どうぞ御覽下さい、黑くはなつてはゐないでせうか？……手です、私の手が？

奴隸賣買人　(船長へむかつて、多少體裁を繕ひ)　この通りです。この白黑の痩犬奴が、どんな港の梅毒に犯されたものか、自分の手が黑くなつたと云つちやわしの大事な黑ん坊の手を毆ぐりよるのですよ。御覽んなさい、『4』の檻の一人の奴は血塗れな手をしてゐますよ。あの一本

一本が二十弗からするのですからな。

若い番人　旦那、船長さま、御願ひです、たつた一日でいいから、私をここから上甲板へ出して載けませんか。私はとても恐ろしくつて、夜も眠ることが出來ません。あれです。（正面無數の黑い手を指す）あれが、私の頭にいつぱい塡まつて、船の中が手だらけに見えるのです。――この鍵は御返しします、どうぞ、御情けですから一寸でも海を見さして下さい。お天道様を拜まして下さい。（泣く。帶から一束の鍵を取出す）

奴隷賣買人　この牛黒（ムラト）は全くの恩知らずでな、船長。こいつは、わしがアラバマの沼澤の中から拾ひあげてやつたことをもう忘れてゐるんです。（鍵を持つた番人の手を足蹴にする）やい、特に今、手前は吼えるときに吼えさへすりあ、それでいいんだ。默つて、あすこの隅で番をしとれ。（[illegible]き出す。胴着のポケットから薬卷を取出して船長へ薦める。）いかが？　まだ、午後のドッグ・ウオッチは濟みませんか？　昨晩は凄ごく敗かされましたね。

船長　私は骨牌どころぢやないのですよ。どうやらもう一荒れやつて來さうなんです。（若い番人にむかひ）あ、お前、これをどこぞ暗い處へ釣るして置いてくれ。どうもこの貴婦人がヒステリーを起こすと、船がとかく陣風（スコール）線（ライン）へ乘り入れたがるやうだ。不思議なもんですね、こんな敏感な鳥はありませんよ。

（若い番人再び鍵束を帶へ納めて鸚鵡の籠を隅の寢臺の上へ置いて自分も掛ける。）

奴隷賣買人　鳥が天氣を云ひあてる、又ですか、貴方の御伽噺が？（ペッと唾を吐く）

船長　（忌々しげに對手の唾を吐く態を見遣つて）御伽噺――にはちがひありませんな。一切が御伽噺でなくて何でせう？　貴方がかうやつて黑ん坊をメデュウサの眼球のやうな金貨で遠くから買つて來て、アメリカ内地へ賣り込む、その忌々しい船を私達一同傭はれて港から港へ引張り廻はす、ときには巨萬の富をもつた貴方もどうともすることの出來ないやうなサイクローンがやつて來る――良い御伽噺ですな。だが、ゼンキンさん、この鳥を馬鹿になすつちや不良ませんぜ、神様が世の中の眞央に人間よりも一日早く拵へたのが鳥ですからな。私達、左様、（皮肉に）貴方なぞといふアメリカ人は神様が何日目に拵へたものか。もし、ほんとに神様といふものが生きてゐたなら、或ひは私達なんぞのやうなやくざ者を未來永遠に拵らへずに濟んだのかも知れませんてな。

奴隷賣買人　（苦笑）いや、船長、貴方もそのバイブルの御話さへしないと、立派な博奕打になれるんだがね。

（勁風の音と共に船體徐ろに動搖しはじむ。水夫等の騒ぐ聲が上甲板に響く。）

船長　（耳を峙てつゝ）やつ、こりや、とうとうほんものらしいわい。（昇降口へ退りながら）ゼンキンさん、今夜はすこし御用心なさい、ジヨナを呑んだ鯨ぐらゐには荒れるかも知れませんよ。（去る）

（雨の音、波濤の響。恐怖に怯えたやうな黒い手はげしく檻を搖がす）

奴隷賣買人　（背後を振り向き）やかましい、ゴリラ奴！前脚を引込めろツ！（小脇に抱へた鞭を揮つて、床板を發矢と打つ。黒い手、消える）（鐵鎖の音）おい、牛黒（ムラト）、晩飯を忘れるな、彼奴等を騒がせたら貴様の罪だぞ。そろそろ寒くなるから、毛布の用意もしてやるんだ。さア、鞭だ。（鞭を投り出して、事務長室への階段へ去る）

水夫頭　（上甲板から叫ぶ。姿は見えない）總員上へ！

（右手奥から水夫達の應ずる聲がする）

若い番人　（立ちあがる）又暴風雨だ。――ああ、嫌だ、嫌だ、何とかしてこの船底を脱け出す工風はないかな！（柵の方を屹と睨める。黒い手は出てゐない、しかし、彼は鞭を取りあげる）おい、手を出すな、お前達の手は俺の魂を地獄へ引摺り込むのだ。（檻の中はしーんとしてゐる）何だ、氣のせいか。俺はほんとにどうかしてゐる。

（水夫多數、防水着に身を固めながら、右手からどやどやと昇降口の階段へ去る。布を引裂くやうな勁風の音。船體一としきりはげしく動搖する。若い番人、呆然として寢臺に掛ける。舞臺だんだん暗くなる。薄明のうちに、正面五つの檻がひとりでに開いて、三十人ほどの黒人一樣に巨きい手を差し伸べて、寢臺の方へ肉迫して來る。若い番人不圖顔をあげた途端に、自分を包圍した黒い手の列を見て鞭を振りあげて彼等を亂打しようとする。無數の黒い手は、犇々と彼を押包んで、見る間に彼の喉を締めてしまふ。彼の斃倒したさまを見遣つて、黒人達快げに白い歯を剝いてげらげら嗤ふ。舞臺徐々に明るくなる。光もとの明るさに復すると、籠の鸚鵡の聲に氣がついて、番人はつと起きあがる。檻にはやはり錠が下りてゐる。）

若い番人　何を見たのだ。俺はまだ生きてゐたか、ああ、恐ろしいことだ。――俺はいつか、きつとあんな目に會ふにちがひない。俺は、俺は――

（水夫等濡れ鼠になつて、索具ロープ帆布などを抱へ、どやどやと昇降口から下りて來る。）

水夫の一　十年ぶりだな、こんな暴風雨（しけ）は。

水夫の二　俺は帽子を奪られた。

水夫の三　俺はトップスルの羽搏きで海へ落つこちるとこ

ろだつた。

水夫の四　風が廻つたら事だぜ。

水夫の五　ああ空腹くなつた。

若い番人　――俺は裏切つてくるのだ。（獨白）

（水夫等去る。）

若い番人　俺はあいつらと同じ人種でありながら、自分では白人のやうな顔をして、あいつ等の番をしてゐるのだ。恨まれるのも無理はない。一體、俺は黒人なのか、それとも白人なのか？　俺の父親もきつとあんな風に、奴隷買ひにアフリカから買はれて來たに違ひない。何故黒く生れなかつた？　その方がどんなに幸福だつたか。知れあしない。默つて世の中を知らずに、鎖につながれたまま、買はれた主人のところで綿の花でも摘むでゐる方がよつぽど樂だつたらうに、俺は憖ひ白人の社會へ生み落されてしまつたのだ。その癖、俺は白人ぢやない。白人の皮を着た黒ん坊――さうだ、それが俺なのだ。そして俺は、黒人からも、白人からも恨まれて居る。

（雷鳴がはげしくなる。檻の中の呻吟と奇聲が一としきり騒がしくなつて、無數の手再び柵の外へ露はれる。）

若い番人　（思はず、よろ〳〵と檻の方へ近づいて行つて）おゝ、兄弟、俺を恨まずにおいてくれ！　俺は君達よりもずつと慘めな人間なんだ。意氣地のない半端物だ。口惜しい、口惜しい、俺はこんなに口惜しいのだが、誰に仕返しをしていいかわからないほどの意氣地なしだ。

（水夫等再び右手奥から昇降口へ駈けあがる。上甲板に船員の騒ぐ聲が暴風雨に交つて聞える。黒い手焦燥的に騒ぐ。）

若い番人　あれは皆俺の仇敵なんだ。――だが、俺は、この俺もやはり仇敵の血を受けてゐる。俺はもう君達を鞭打つ事は出來ない。（檻の中の黒人總立ちになつてワイワイ口々に何にやら罵り出す）ま、待つてくれ、待つてくれ！　俺はどうすりやいいんだ。俺には何にも出來ないんだぞ。よくわかる――君達は鎖を解きたいんだらう、この錠を捻り切りたいんだらう。君達の眼は血走つて居る。甲板へ出て、人間らしく波と鬪ひたいんだらう。自由な空氣が吸ひたいんだらう。よく俺にはわかつて居る。しかし、白人は強いぞ。あのピストルを忘れたか。君達にこの船が運轉出來るか？　白人は君達の知らない色々なことを知つてるぞ。あの御天道様を、小さな金の器械で三つにも四つにも分けることさへ出來るんだよ。君達は白人の乘切らうとしてゐる海を知つてるか。君達には白人の眞似さへ出來ないんだ。待つてくれ、騒がないでくれ！　兄弟、靜かに！

奴隷賣買人　（姿は見えない）　若僧、又、騒々しいぞ。晩
　飯を食はしてやれ！
若い番人　はい、はい。（手で檻の方を制しながら、右手厨
　房への階段をあがる）
大工　（右手奥より出て來る。醉つてゐる）　漏りはねえか
な？　この分ぢや二重底の栓を拔いて少し重りをつけん
と危ねえぞ。（その邊をじつと檢査する。若い番人去る）
や廻るぞ、廻るぞ、まるで獨樂のやうだ。はてな、こん
な龍巻のやうな旋囘ははじめてだが、木目が繩のやうに
よれよれに見えるは。――（立停まる）　いや、待てよ。こ
いつは奇怪しい。は、はて――やつぱり利いて來たのか
も知れねえぞ。晩飯前の一杯は、さすがに利きが好いわ
い。（蹌々とよろけながら檻の方へ近寄る。船の傾動を
支へやうとして差し出した手を『5』の檻の手が犇と摑み
寄せる。大工爭ふ）誰だ、誰だい？　お、例のか？　離
せ、冗談はよしてくれ！（黑い手、左右から彼を抱き寄
せ、ぴつたり柵へ吸ひ寄せる）く、く、黑ん坊だ！　助
けてくれ！
　（若い番人急いで大きいバケツを抱へながら厨房から
　駈け降りる。大工の近くに落ちてある鞭を取りあげる
　と、いきなり黑い手を目がけて亂打する。大工ほうほ
　うの體で檻を離れる。）

若い番人　（大工を抱へながら）　きつとこんな事になると
　は思つてゐたんだ。怪我はありませんか？　（大工頷く）
　ああ、困つたもんだ。ちつとも眼を離せあしない。
大工　（番人から身を捥ぎ去り、昇降口の方へ駈けながら）
　た、大變だ――い、助けて――い！　（去る）
若い番人　（檻に向ひ）　兄弟、どうぞ騒がないでくれ、賴
　む、あの鬼のやうな旦那が來ると、大變だからなあ。腹
　が空つたんだらう。よし、わかつた。今やるから、騒が
　ないでくれ。（次第に激昂する）　ああ、わかつたよ、わ
　かつたよ。騒ぐなといつたら、騒がずに居てくれ。おい、
　兄弟、騒ぐなッ！　默れ、默れ、默れッ！（鞭を取あげ
　て、檻から檻へとぴしぴし亂打して廻る）　ええ、畜生ッ、
　黑ん坊！（正面の檻を目がけて、狂人のやうに鞭を打ち
　卸す）　この手だ！　この手だ！
　（奴隷賣買人、事務長の階段より姿を露はし、じつと
　その場の光景を眺めて立つてゐる。）
奴隷賣買人　（徐ろに）　その手は金だ！
若い番人　（夢中で）　金が何だ。この黑い手だ！　この黑
　い手！
奴隷賣買人　（づかづかと進み、若い番人から鞭を奪ひとる
　といきなり厨房の階段の方へ突倒す）　畜生ッ！　馬鹿！
　牝犬の子！　うぬは、一體、何してやがるんだ！（若い

番人慄然として縮みあがる）よくも、よくも手前は、俺の商品を疵物にしやがつたなあ！　さあ、牛黒、うぬの手を出せ、手を出せ！（鞭を構へる）

若い番人（逃げながら）旦那、私は何も悪くはないんです。あいつ等大工さんを絞め殺ろそうとしたんです。……私は、私は何にも悪い事をしてゐないんです。……

（奴隷賣買人追ひ廻す。上甲板には『ブルワークだ！　ブルワークだ！』といふ聲がする。黒い手、二人の爭ひを見て、血に湯したやうに柵の内から露れる。船體の動揺益々はげしくなる。若い番人水夫部屋の方へ逃げ込む。奴隷賣買人追ひ駈ける。）

船長と水夫頭（昇降口から縺れて降りて來る。二重底の栓をあけなくつちや。

水夫頭（右手前方倉庫への扉へ近づく）船長、鸚鵡が死んでゐますよ。（去る）

船長　何？——鸚鵡が……（駈け寄る）おお、死んだんか、死んでしまつたか！　どうして死んだらう？　可哀そうな奴だ。……この船で、俺を慰めてくれるのはこのボーレイだけだつたのだがなあ。（寝臺へ腰を卸す）お前の方が先に參つたか。ボーレイ俺を殘して行つて、お前はどうするつもりだ？　人間を愛することの出來なかつた俺は、お前だけを愛してゐたのだつた。あゝ暴風雨だ、この憎い暴風雨めが、お前を殺しちまつたのだ！

（大工挫れるやうに階段から駈け降りる。怖わ怖わ檻の前を迂廻して船長の前へ出る。）

大工　船長、暴風雨帆も、もう駄目ですよ。

船長（立ちあがる）何？　あれも駄目か？……氣壓はどうだ？

大工　パロメーターは七百二粍です。

船長　よし、最後の努力だ。すべての艙口を嚴重に閉鎖して、流れるまでだ！

（奴隷賣買人に追はれた若い番人悲鳴をあげながら逃げ戻る。息を喘ませながら、奴隷賣買人よろめきよろめき鞭を振つて來る。若い番人、船長の方へ走つて來る。すがりついた番人を庇ひながら、船長沈痛な面持で追跡者に面接す。）

奴隷賣買人　船長、その痩犬を渡してくれ！

船長（決然と）ゼンキンさん、乗組員の成敗は、私に任して戴きたい。

奴隷賣買人（苛立ち）な、何ッ？　そいつは俺の——俺が拾つた奴なんだ。何をしやうと俺の勝手だ。それでも貴方はこの俺に楯をつくといふのか！

船長　船中に於いては、私が主權者です！　貴方は單にお客としてこの船に乗込んでゐるに過ぎない管だ。

奴隷賣買人　こ、この船を持つてゐるのが誰か、貴方は知つてゐるだらうな？

船長　航海中の法治權と所有權とは、全く別な問題です。

（水夫頭倉庫から露れる。船體の動搖稍緩和する。奴隷賣買人、一歩退いて、ピストルを擬す。）

奴隷賣買人　俺は一生に一度も他人に命令を受けた事のない男だ。あア、君達はこれから俺の絶對命令に服するか、どうだ、このピストルの筒先と篤と相談して返事をするんだ。（一同手をあげる）

（水夫等濡れたまま一團となつて昇降口から降りて來る。奴隷賣買人、彼等の方へもピストルを向けやうとして一歩退く途端に、檻『5』から差し伸べられた手によつて羽掻い締めにされる。二つのピストルはぽろりと捥ぎ去られて、床へ落ちる。）

奴隷賣買人　（藻掻きながら）　こ、こらツ、離せ！　船長、船長助けてツ！

（黒い無數の手、犇々と彼の身邊に絡みつき、蜘蛛の巣に封ぜられた蜂のやうに身動き一つさせない。一同呆然として見まもる。）

奴隷賣買人　（絶叫）　船長助けてツ！

水夫頭　（船長へ）　どうします？

船長　（靜かに）　私は神の存在を信じない。だが、人間というものはこれだけは信ずるよ。この御伽噺の世界では、人間が人間を賣買することは禁じてある筈だ。それは約束を外れた取引きだ。賣られた人間が、賣つた人間を、何かの方法で復讐するといふことも時にはあり得ることだ。

（一同急き込んで、檻の方へ駈け寄らうとする。船長、兩手を擴げて彼等を制す。）

船長　（大聲）　待てツ！　私が、この船の船長であることを知らないか？　さあ、みんな、こつち向けツ！（看客の方を向く）それで私達の任務は、先づ第一にこの非常な颶風帶を遁れることだ。次には、私の最愛の鸚鵡を手厚く葬ることだ。――

（奴隷賣買者、姿は一同に遮ぎられて見えないが、薄氣味の惡い檻の中の笑ひ聲と共に、彼の鍔廣の帽子が、一同の頭上へ飛んで來る。次に、赤い胴着の半分……若い番人感極まつて泣く。）

船長　（冷靜に）　――それから、一人の男を、お伽噺の海へ深く深く沈めることだ。

――急劇に　幕――

小傳及解說

藤森成吉篇

小傳

藤森成吉氏は明治二十五年八月二十八日、長野縣上諏訪町に生れた。生家は藥種商であつて氏はその一人息子として育てられた。

日本の脊梁山脈の中央部に位する信州、その嚴寒な氣候に鍛はれて、其處の住民は古來堅忍、勤勉たといはれる。さういふ郷土に生れ、その郷土に中等敎育を終るまでの生涯を過した氏には、先天的にも後天的にも、その郷土の影響が甚大であつたといはなければならぬだらう。然かも氏の生家は十何代も續いたといはれる「大阪屋」といふ老舖であつたのだから、氏の家庭そのものに郷土的特質が深く滲透して居たに相違ない。

次に留意しなければならないのは、氏の郷土が養蠶と製絲業の最も盛な土地柄で、殆と日本全國の製絲業の中心地たる岡谷が、上諏訪から僅か二里しか隔つて居なかつたといふ事實である。氏はその少年時代にこの製絲事業に酷使される男女の勞働者の悲慘な境遇を絕えずその耳に聞き、その眼に見たに相違ない。氏が今日の如き思想に生くるに至つたには、勿論他に多くの原因があつたことであらうが、此少年時代の見聞もまた重大な原因の一つとなつて居ることはいふまでもないであらうと思ふ。

氏の父君は明治維新直後の機運に刺戟されて、政治家たらんとして上京したが、竟にその意を果さなかつたので、早くからその息たる成吉氏をして己が志を繼がしめんとの希望を有して居た。このために、氏は縣立上諏訪中學校を卒業すると同時に東都に笈を負うて第一高等學校の獨逸法科へ入學することになつた。中學時代の成績優良たつた氏は、入學試驗の煩を蒙らされずに無試驗で入學することが出來た。其處に二年程在學するうちに、氏は當時旺に飜譯紹介されたロシア文學の影響を深く受けて、その氣持は漸く文學的に傾いて行つた。

由來文學に志す人には家庭的に不幸な育ちかたをした人が比較的多いやうに思はれる。蓋しさういふ人たちは早くから人生の暗い面に接せしめられ、從つて人生上の種々な問題に頭を惱ます場合が多いからであらうと思はれる。藤森成吉氏も亦此例に洩れない人のひとりであつたやうに思はれる。それは氏の實母が、氏の三歲の時に自殺して居るといふ事實があるからである。その原因に就て氏は次のや

うに書いて居る。

「その原因は、全く日本に殘存した(今も殘存して居る)封建的家族制度にある。彼女は、父の放蕩や祖母の專制に堪へられずに、嫁入りの時實家から持たせられて來た短刀で、まるで日本の古武士のやうにハラキリをしたのだ。あとへは繼母が來て居る。」

氏が法律の研究から文學へ轉向したことは、素より氏自身の內部に文學的素質があつたのを偶々ロシア文學の耽讀によつて牽き出されたものではあらうが、同時にその素質は母の自殺といふ暗い事實に培はれたところがなかつたとはいへないのである。

氏は東京帝國大學へ移ると共に獨逸文學科へ科を轉じた。そして同時に最初の長篇小說「波」を作り、一年後に出版して早くも若き新進作家として文壇に認められたのであつた。

在學中大いに無政府主義者大杉榮の著書を讀んで影響せられる處深く、そのために屢々學業を半途に擲たうとしたが果さず、卒業と同時に現在の夫人と結婚して第六高等學校講師に任じ岡山に赴いた。

けれども血の氣の多い氏に高等學校講師のやうな仕事が長續きするわけがなかつた。氏は一年にも足らぬ小期間の後に岡山を去つて信州の故山に歸つた。然し此處も藤森氏のためには安住の地ではなかつた。亡き母のこと、店員に對する冷酷なる待遇の事、その他思想上に根ざした種々な問題のために父君達と烈しい爭鬪を引起して、氏はひとり山陰道の旅に出た。そして胃腸病のために間もなく止むを得ず再び故鄕に歸つたが、家族との爭鬪はいよ〱深刻を加へ、病痾またます〱重きを加へ來たつたので、生後間もなき愛兒と共に夫妻相携へて、房州の海岸へ遁れた。

翌年上京、東京郊外に居を構へて、氏は再び文學的勞作の生活を始めた。此時最初に發表したのが短篇小說「山」であつた。此作品は大いに文壇の好評を贏ち得たが、未だ氏の文壇的地位は確立されたといふわけには行かなかつた。

大正八年最初の創作集「新しい地」を新潮社から出版、翌年創立された「社會主義同盟」に加はり、その後ハッキリ文筆方面の社會主義運動に參加することゝなつたのである。

大正十二年、氏が暫くその文學的勞作の筆を投じて、實際の勞働生活を體驗するために工場の中へ飛び込んだことは、當時大いに文壇のセンセーションを捲き起した。氏は事を祕密にしたい希望から、變名して夫人と共に此勞働巡禮の旅に出たのであつたが、偶々東京朝日新聞記者の發見するところとなつて、大袈裟に報道されたので、種々の批

評が氏の身邊に蝟集した。東京の石鹸工場、北海道の農場、濱松地方の織物工場、故郷信州岡谷の製絲工場、その他六ヶ所を經めぐるに約一年あまりを費して、この勞働巡禮は終を告げて居る。此間に得たところを記錄したものに「狼へ！」の著がある。

藤森氏は大正八年上京以來その勞働巡禮の時代まで作品としては小說のみを執筆發表し續けて來て居た。そして「狼へ！」の著の後、大正十五年五月に至つて始めて處女戲曲「磔茂左衛門」を「新潮」誌上に發表した。そして一躍戲曲家としての名聲を獲得し、引き續いて矢次早に多くの戲曲を發表し、その發表ごとに文壇を動かして、今日では小說家としてよりも、寧ろ戲曲家として鬱然たる大家をなして居る。

氏は昭和三年二月、長野縣第三區より勞働農民黨候補として立つて、國會議員選擧を爭つたが敗れた。現今は前衛藝術家同盟に加盟し、雜誌「戰旗」の同人であり、プロレタリア文壇中の最左翼に位地し、無産派文學のために虹の如き氣を吐いて居る。

解　說

「犠牲」（五幕）

大正十五年六月及七月の「改造」誌上に發表された。そして第三幕以下を掲載した七月號の同誌は發賣禁止の厄に會つたのである。本集にも第三幕及第四幕が抹殺されてあるのはこのためである。

此作品は藤森氏の戲曲の第二作であつて、有島武郎氏と波多野秋子との情死事件に材を取つたものであることいふまでもない。其處に色濃く書かれて居るものは、澎湃たる左傾思想といふ時代の波のまへに無慘にも悶くブルジョア・インテリゲンチヤの悩みである。そして何人も越ゆべからざる愛慾の苦しみである。此二つの問題が作者の見事な戲曲的手腕に依つて渾然たる有機的統合をなして居る。

なほ此戲曲は發表後直ちに小劇場の手によつて上演されようとしたが、官憲の上演禁止命令のために實現されなかつた。

「磔茂左衛門」（五幕、六場）

作者の處女戲曲。時代の革命的情熱を封建時代の百姓一揆の先覺者に假托して表現するは屢々用ひられる手法である。此作品もその手法による一つ。大正十五年五月「新潮」誌上に發表され、これまた直ちに築地小劇場が上演を希望したが、官憲の禁止するところとなつた。

「相戀記」（五幕、八場）

「牡丹燈籠」の名によつて日本によく知られた支那の物語「牡丹燈記」の戲曲化である。此物語を戲曲化することは既に多くの作家によつて試みられて居るが、藤森氏の場合にあつてはこれを氏のプロレタリア思想と結びつけたところに異色がある。卽ち喬生が階級觀念を無視してブルジョア娘と戀をしたゝめに罰せられるといふ場面が氏の味噌である。だが、此脚色には少し無理がある、何となく不自然な感じがするといふ難は免れないであらう。

「夫　婦」（二幕、三場）

無產運動に對する官憲の壓迫を描いたもの、蓋し氏自身がその作品に對して蒙つた壓迫からの實感が迸つたものであらう。そして同時に、艱苦の人生に二つの魂を確りと結び合せて進んで行く氣持のよい一對の夫婦を描いて居る。人物と場所とを外國にとつたのは恐らく、再び此作そのものに加へられるかも知れない壓迫を避ける用意であつたらう。此作品は作者の實感が熾烈に燃え、迫眞力强く、非常に人を擊つ作品である。

「何が彼女をそうさせたか？」（六幕、九場）

昭和二年一月發表され、同四月築地小劇場の手で上演された。非常に喧傳された作品で、氏の戲曲中最も有名なものであるかも知れない。作意は、表題の示す通り、資本主義社會の缺陷が、無垢の一少女を次第に逐ひつめて行く經路を描かうとしたもので、頗る平明な解りいゝ作品で敢て解說を要さない。たゞ隨分氣になる誇張が至るところで用ひられて居るが、元來作者は此作品に啓蒙的使命を負はせようとして居るらしいから、誇張は恐らくその目的のためになされたのであらうと思ふ。

長谷川是如閑篇

小傳

長谷川如是閑氏、本名は萬次郎、明治八年十一月、東京深川に於て生れた。明治三十一年、中央大學の前身東京法學院を卒業、爾來日本新聞、日本及日本人、大阪朝日新聞等の記者生活をした。此の間「額の男」「倫敦」その他多くの小說の著作があり、早く文壇人としてその名を知られて居る。然し氏の主要なる仕事は寧ろ評論の方面であつて、「現代國家批判」「現代社會批判」「眞實は斯く佯る」等の著作がある、此點から言へば、氏は立派な文明批評家である。

如是閑氏が戲曲を發表し始めたのは大正十年以後の、比較的後期のことに屬し、從つてその作品には極めて成人の

書いたものといふ風格がある點を特色とする。
氏は現在雜誌「我等」の主幹をして居る。

解　說

「大臣候補」（一幕）

棚濱は資本主義の青時代を、女ペンキ屋お花は新時代の女性を、それ〲に代表して居る。そして此二人の間に挾まつて苦しむ邦夫は、資本主義崩壞の過渡期たる現代に苦悶する若きインテリゲンチアを象徵して居るものといふことが出來るだらう。現代の醜い政界の裏面を暴露しつゝ、來らんとする新時代の勝利を暗示した愉快な喜劇である。氏には所謂文學者らしい神經的の暗さがない。此作もその淡々たる明るさを特色の一つとして居る。文明批評家たる氏の本色が作品いつぱいに表はれて居る事實も見遁せないと思ふ。

「喰ひ違ひ」

デイレツタントの社會主義者伊丹のひとり合點が飛んだ間違ひを惹き起こす。世の中は單純な理窟だけでは片づきませんよと笑つて居る作者の顏が此戲曲の背後にある。
此戲曲は大正十三年、震災直後の興行に水谷八重子の藝術座が上演したやうに覺えて居る。

「根管充塡」（一幕）

前科者に對する社會の誤つた態度を取り扱つて居る。「根管充塡」といふ題名は、主人公が齒科醫であるところからその方面の術語を用ひて、同時に社會の缺點に對して根管充塡を行はなければならないといふ意味を諷したものであらう。

村山知義篇

小　傳

村山知義氏は明治三十四年一月十八日、東京市神田區末廣町に生れた。從つてまだ二十九歲の靑年である。開成中學を經て第一高等學校文科を卒業し、繪畫硏究のために獨逸に留學すること一年、歸朝後直ちに急進派の造形美術家團體「マヴオ」を起し、續いて大正十四年「三科」を起した。畫家である氏はこのやうに美術界に活躍すると共に小說、戲曲に筆を執つて、大いにその才能を認められた。それのみならず「心座」に據つて劇の實際方面にも大いに働いて居る。

村山氏の思想の方向はコンミユニズムであつて、一切の

仕事は常にその方向を眼ざして居る。氏は一定の方向ある熱情の風に潑剌たる才氣の輕舸を飛ばして居る時代の寵兒である。現在は雜誌「戰旗」の同人である。

解　說

「ロビンフッド」

古いイギリスの傳説に時代的解釋を與へたものである。お伽噺の主人公だつたロビンフッドは、此處ではプロレタリア解放運動の鬪士になつて居る。氏の作品はどれもさうだが、此作品も所謂プロレタリアの作品がやゝともすると持つて居るあの悲慘な暗さがないので大いにいゝと思ふ。

「進水式」（二幕）

所謂曝露戰術に據る作品である。支配階級の内側へ入つてその愚劣さを抉剔し、然かもその政治的支配者さへ、結局資本家の頤使のまゝになつて居るのだといふ事實を語つて居るものである。材を獨逸に借りるのは、獨逸に遊學した此作者の癖である。尤も外國に取材する方が、かういふ思想上の問題は比較的自由に書けるといふ事が考慮されて居ることいふまでもない。

「やつぱり奴隷だ」

人種的偏見、宿命的奴隷、刻苦して奴隷の境遇から抜け出したと思つた黒人ネポクは、結局フランス人の資本主義的國家のために利用されたに過ぎなかつた。歐洲大戰後のフランスの對獨黒人政策を戲曲化したもの。

「沙漠で」（一幕、二場）

水兵と士官との關係は搾取階級と被搾取階級との關係に還元されて居る。全員が死に瀕し、資本主義の支配を受けて居る社會と隔離された塹壕の中で階級の破壞が行はれようとする。援軍が來て彼等の生命が助かることになると一緒に、また資本主義が彼等を支配し始める。獨逸歸還の列車の中で、塹壕での階級破滅の事實を語る危險のある「水兵八」は二人の士官のために殺されて了ふ。最も端的な搾取の描寫の一つである。

「仕事行進曲」（一幕）

社會を左へ進めようとする若者の元氣な歌だ。彼は一切の中間的存在を許さない。そのために彼は愛する唯一人の妹をも失はなければならなかつた。然し一瞬の後にはその苦がい經驗をも無理に忘れて、宣傳のポスターを歌ひながら描くのだ。元氣な仕事行進曲。

「スカートをはいたネロ」(十場)

：作者の二つ目の人形芝居。ネロはいふまでもなく基督教徒虐殺で有名な羅馬の暴君、此處ではその名が暴君といふ言葉の代名詞に用ひられて居る。「スカートをはいたネロ」は「女の暴君」といふ意味にほかならない。「進水式」と同じく曝露戰術による作品で、支配階級の果しなき我儘と利己心とが徹底的にあばかれて居る。カザリン二世の人間はちよつと凄く描かれて居る。

金子洋文篇

小傳

金子洋文氏、本名は吉太郎、秋田縣土崎港古川町、御物川の川端で生れた。戸籍には明治二十七年四月八日生れとあるが、實は舊暦の明治二十六年十一月三日生れだとのことである。

氏の父君の家は廻船問屋をして居たのであつたが、氏の父君はその生家から亂暴な性質のために疎んぜられて、船夫にされて居たとのことである。氏は此父君が艇艫乘をして居る頃生れたのであつた。氏の母方の祖父は町でも相當知られた俳人であつたので、氏の藝術的才分、好學心、向上心といふやうなものは母方からの遺傳であるらしい。同時に氏は荒々しい強い氣質をその父の方から承け繼いで居る。

金子氏が七、八歲になつた時には生家の家運もやゝ好轉して、廻船附船問屋を營んで居たが、十三四歲になつた頃には父君の失敗から家は貧しくなり、小學校に通ふさへ非常な困難であつたといふことである。高等小學の課程を終るためには、新聞配達をして自ら働きさへしなければならなかつたといふことである。夜中、吹風の中を驅けて行く自分の姿は、今もなほ眼に殘つて居ると氏は語つて居る。

小學校を卒業すると翌日上京、電氣屋の小僧に住み込んだが、一年あまりで歸郷、家兄の援助を得て縣立工業學校に入り此處を卒業した。然し機械を弄ることがどうしても氣にそまず、大いに考へた末、辯護士になり、代議士になり、やがて大臣になるといふ出世の筋道を定めて、まづその第一步として郷里の小學校に代用教員の職を奉じた。その間に辯護士試驗の準備をするつもりだつたことはいふまでもない。ところが此代用教員生活三ヶ年の間に哲學を讀み文學書を漁つて、此處に始めて文學で身を立てる決心をするに至つたのである。

大正五年秋、二十三歲の金子氏は再び上京し、當時最も敬慕して居た武者小路實篤氏の門を敲き、此處で創作に專

念することになつた。一年近くの後に武者小路氏の家を離れ、雜誌記者、新聞記者等をして居るうちに、武者小路氏に影響された人道主義的な考へ方が次第に社會主義的に變り、丁度フランスから歸つて來た小牧近江氏と再會したりして、大正十年十一月多くの同志と社會主義文藝雜誌「種蒔く人」を創刊するに至つた。これより以後、氏のプロレタリア作家としての文學的コースが決定されたわけである。

翌十一年中頃になつて、氏は出世作小說「地獄」を發表して漸くその存在を文壇の表面に現はすことが出來た。年齡二十九歲、再度の上京後七年の後であつた。

氏の出世作は小說であつたが、その後の作には寧ろ戲曲が多く、プロレタリア作家中の錚々たる戲曲家として確實なる文壇的存在を把持して居る。

現在は「種蒔く人」の延長たる「文藝戰線」の同人である。

「これまでの私の作品をふりかへつて見ると、プロレタリアの純情、苦惱、爭鬪をうたつた敍情詩的なものが多い、その境地を脫するには私は七八年かゝつて居る。

今、私はじつくり腰おちつけて、プロレタリア解放に役立つ作品を書ける氣がしてゐる、新らしい「地獄」を、新らしい「洗濯屋と詩人」を、更らに充分調べた新らしい長篇を書く決心である。」

金子氏は昨年七月執筆した短い自傳の中でさういつて筆を結んで居る。

解說

「洗濯屋と詩人」(一幕)

芝品川に淺野總一郎氏の邸宅がある。その隣家の小さな洗濯屋は淺野家から何と交渉されても退去しなかつたので大いに社會のセンセーションを起したことがある。此作品はおそらく此事件に暗示を受けて書かれたものであらうと思ふ。平明な、面白いプロレタリアの喜劇である。大正十年十月の作、氏の戲曲中でも最も有名なものゝ一つである。

「狐」(三幕)

山間に起つた愛慾の悲劇である。此作者のものとしては珍らしく傾向的色彩の淡いもの、故鄉にその村を取つてその地方のローカル・カラーを色濃く出して居る。大正十一年九月の作。

「理髮師」(一幕)

表現派風の一幕物。鋏は正義の表象に使はれて居る。此場合の正義は勿論プロレタリア・イデオロギーの上に立つ

た正義である。此鎖を使つて探偵の群を刈りとる巨人は正義の使徒。夢幻的な作品であるから、一つ〳〵の來出事に具體的な說明をつけることは出來ない。大正十二年三月の作。

「出帆」（一幕）

愛慾と友情との葛藤である。例に依つて作者の故鄕の秋田地方が舞臺に使はれて居る。作には傾向的な意企はまるで現はれて居ない。しんみりした愛すべき小篇である。

「息子」

軍國主義のために唯一人の息子を奪はれて、世の中から翻て上げられたから結局悲慘な運命に陷ちた父親を描いて居る。娘ときが自分たちの家族の無理に置かれた境遇を自覺することから、竟に父親も自分たちのかゝつた罠に氣がつくといふ筋だ。これはプロレタリア意識のかなり強く現はれた作品、大正十三年の作である。

「盜電」（一幕）

此作は昭和二年あたり新劇協會の手で上演された。演出は岸田國士氏であつた。微笑ましい小喜劇である。

「牝鷄」（一幕）

喜劇風の小篇。不言のうちに手を以つて働くほかに生產の道のない農民生活の眞實を語つて居るのが面白い。

「天上の罠」（五幕）

昭和二年十一月の「文藝春秋」誌上に發表された。本集中で氏の最近の作品である。理想的な天上に生れかはつたと思つた主人公の劇作者は、意志と熱情とを禁じられた生溫るい神祕主義の資本主義社會へ來て居るに過ぎなかつたといふのである。理髮師とやゝ同型の夢幻劇である。

前田河廣一郎篇

小傳

前田河廣一郎氏は明治二十一年十一月十三日、仙臺市川內大工町に生れた。父君は今川常治氏であつたが氏の幼少の頃に歿したので、伯父前田要之助氏の養育を受けたのであつた。栗原郡若柳小學校を經て、宮城縣立第一中學校に入つたが十八歲の時退學上京して勞働に從つた。十九歲にして渡米、商後書生、玄關番、牛乳配達、スクール・ボーイ、料理番、商店の小僧、馭者、仲買業、船のボーイ、畫

工、司厨長等の雜業に服して十三年半のアメリカ生活を閲し、大正九年三月三十三歳にして歸朝した。

歸朝の年雜誌「中外」の編輯部に入り、同時に社會主義同盟に加入した。これによつて見ると氏の社會主義的思想は其在米中に早くも抱懷されたものといふことが出來る。

間もなく小說「三等船客」を處女作として「中外」誌上に發表し、多少文壇の問題となつたが、廣く一般的に認められたといふわけには行かない。寧ろその頃「讀賣新聞」紙上に「普通席から見た文壇」と題して六日間に亙つて連載した一文の方が氏をして有名ならしめたかの觀がある。

大正十一年十月「三等船客」を出版し、越えて十三年「改造」に「最後の變裝」を發表した頃から氏の文壇的位地は確立したものといふことが出來るであらう。

著書には、「三等船客」「赤い馬車」「脅威」「最後に笑ふ者」「快樂師の群」「新選前田河廣一郎集」「大暴風雨時代」等がある。現在は勞農藝術家聯盟に加盟し、「文藝戰線」の同人である。

なほ本篇に採錄された作品のうち、「手」「陸のつきる處」「拵へられた男」等は何れも脚光を浴びたものである。

解說

「ムツソリーニ」(十場)

いふまでもなく伊太利の黑シャツ宰相に取材したもの、たゞその取扱ひ方に至つては漫然たる英雄崇拜的なものでないことといふまでもない。ファシズムの組織を、コンミユニズムの立場からして、内部から曝露しようとした意企が窺はれる。本全集第四十三卷に收められた坪内士行氏の「ムツソリーニ」と比較して味讀されたなら、此作品の作意も一層はつきりする筈である。此作品は昭和三年五月邦樂座に上演されようとしたが官憲の禁止するところとなつた。

「拵へられた男」(八場)

資本主義の手が政治的支配階級を操り、司法權をまで左右して居ることを曝露した作品。一種の探偵小說的興味もあり、大いに面白い芝居である。第八場の丈轄が官憲との約束を破つて、「二時十三分だ！」と叫ぶ場面は屹度觀客をも興奮の頂上にさらつて行くに違ひない。此作品は築地小劇場の手で上演された。

「陸のつきる處」(一幕)

作者がアメリカ放浪中に得たものから胚胎した作品らしい。喰ひつめたどん底の生活者の愛慾、其處まで陷ちてもなほ自分の魂を捨てかねる人間らしさ。體驗のない人の追隨を許さぬ作品である。

「富豪と眞珠」

ブルジョア生活の空虚と虛僞を冷笑した喜劇的な一幕。財力に壓せられて居た教授が最後に至つて爆發するのが面白い。

「默　禱」（一幕）

元氣よきプロレタリア運動の行進曲である。主作醫師は積極的意力なき中間階級のカリケチュアである。本篇の作品中最もプロレタリア意識の露骨に現はれたる戲曲といふことが出來る。

「手」（一幕）

人種問題を取扱つたもの、黑人を被搾取階級、半黑の若い番人を中間階級、奴隷賣買人を資本家階級といふ風に見ても面白いであらう。それにしては、自由主義者のやうな番長が少し黑人のために都合よく動き過ぎて居ることになるかも知れない。

（昭和四・一・二九、編輯部篇）

編輯校訂責任
吉田甲子太郎
清水義政
佐藤十三郎

日本戯曲全集・第四十九卷
現代篇第十七輯・第十一回配本

著作權者檢印

禁無斷上演

昭和四年二月十日印刷
昭和四年二月十三日發行
（非賣品）

著作者　藤森成吉
　　　　長谷川如是閑
　　　　村山知義
　　　　金子洋文
　　　　前田河廣一郎
發行者　和田利彦
印刷者　島源四郎
製本者　高崎鐵五郎

東京市日本橋區通三丁目
發行所　春陽堂
電話日本橋　六三七・四五八・一一
振替東京　一六一七

東京市本郷區眞砂町・日東印刷株式會社印刷